

PL  
764  
N54  
1931  
v.8

Nihon gikyoku zenshū

East  
Asiatic  
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---









日本戲曲全集  
第八卷

寬政期京坂仇討狂言集

東京 春陽堂版

PL

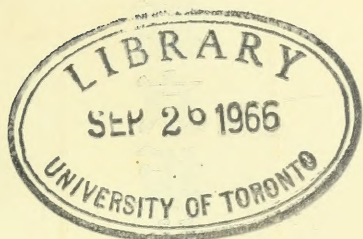
764

N54

1931

v. 8

日本  
山久  
家藏



1126426





記内田譽の門衛右歌村中世三 門衛右政本唐の郎五津三東坂世三  
 (羽合掛 乘越賀伊)



Digitized by the Internet Archive  
in 2009 with funding from  
University of Toronto



日本戯曲全集 第八卷 目次

寛政期京坂仇討狂言篇

伊賀越乘掛合羽 (七幕) ..... 一

—— 伊賀越の仇討。不死身の武助 ——

敵討安榮録 (八幕) ..... 一六一

—— 小栗栖十兵衛、花園三十郎の仇討 ——

姉あね妹いもと達だての大おほ礎きと (七幕) .....

三六九

—— 宮城野信夫みやぎのしのぶの仇討あだうち。天草一揆あまくさ後日きごじつ——

解

説

渥美清太郎……… 三五



伊<sup>い</sup>  
賀<sup>が</sup>  
越<sup>こえ</sup>  
乗<sup>のり</sup>  
掛<sup>かけ</sup>  
合<sup>がつ</sup>  
羽<sup>ば</sup>

角の芝居座末市川紅菊

玉光新演



再演繪番附表紙

# 伊賀越乘掛合羽

## 大序

星合寺花見の場  
渡邊靱負郎の場  
城外松原道の場

役名 渡邊靱負。同一子、諱馬。同云ひ號け、お袖。又五郎云ひ號け、おその。上杉春太郎。傾城、大橋太夫。くつわ屋爲五郎。揚屋丹七。醫者、了伯。佐々木丹右衛門。同女房、笹尾。荒卷伴作。清水仙右衛門。古川義平次。長谷部五郎藏。神田茂左衛門。上杉右内秋定。澤井又郎五。澤井城五郎。

造り物、上の方に少し幕打ち、櫻の木あり、向う黒幕、上より櫻の枝出てあり、下に土手あり、在郷唄にて幕明く。  
ト向うより上杉春太郎、廣袖、着流し羽織にて出る。

茶瓶、綺麗にして、鐵の柄に掛けてかたげ出る。後に大橋、傾城の形にて附き出て、禿筆彌、伊賀野、文字野、皆々鐵鐵を持ち出る。

春太 罷り出でたる者は、此あたりの者でござる。某、屋敷へ歸るやうにとお云やれども、小むづかしい事は嫌ひぢやゆる、百姓の業を習ひ、農業を致さうと存ずる。

大橋 春さん、そりや、なんの事でござんすぞいなア。

春太 ハテ、又しても家中の者が来て、館へ歸れ〜と拜む。館へ歸れば窮屈で面白くないゆゑに、百姓にならうと思つて、今のやうに地狂言をやつたのぢやわい。

大橋 そんならわたしも、兎も角も、お心任せがよからうと存じます。

ト地狂言のやうに云ふ。

筆彌 このマア、持つて来いと云はしやんした物は、なんでござんすえ。

春太 ハテ、それは鋤といふ物ぢやわい。

伊賀 そんなら、これはえ。

春太 それは鐵というて、地を掘る物ぢやわい。

文字 地を掘ると、どうするのでござんすえ。

春太 それで掘つて地を和らげ、物を作るは、農作と云ふ



わいやい。イヤ、矢張り釣狐の格で、この酒といふ品を、どこへ掛けて置かうぞ。さらば、爰らに掛けて置かうぞ。

ト樽茶瓶を、程よき所に置く。ところへ、橋が、りよ  
り荒巻伴作、上下にて、家來大勢連れ出る。

伴作 これは春太郎さま、お迎ひに参りました。早く御歸館遊ばされませう。われたちは何事ぢや。見苦しい。歸れ。

春太 イヤ、く、慮外な奴め。何ゆゑ、おれが前で遊興の妨げをするぞ。今一言云へば手討ちにするが、どうぢや。但しは、聞きたりもない諫言か。

伴作 サア、それは。

春太 手討ちにせうか。

伴作 ア、イヤ、く、全く御諫言は仕りませぬ。今日は御趣向に依つて、お手が痛みますれば、悪しうござりませうと存じ、お手傳ひを致させませうとて、家來ども召連れしました。コリヤ、く、ソレ、てんでに、この地を、掘り返せ。

家來 畏まりました。

ト皆々大勢、鍬にて舞臺を掘る體してゐる。向うより

波邊靜馬、上下大小。澤井又五郎、着流し羽織、大小にて附き出る。

靜馬 最前も申す通り、御主人上杉家には、京都武將の御首尾ます、よろしく、この慶御妹君彌生姫さまを、御弟御春太郎さまへ御仲入遊ばされ、近くお興入れを急ぎ申せとの儀。それに春太郎さまは、願へお出で遊ばされてより、一向御歸館なく、一家中親どもは申すに及ばず、胸を痛め申します事でございます。

又五 御尤もでございます。拙者も左やう存じてから、御機嫌を見合せ、御歸館あるやうにと、お勧め申す事でございます。

ト靜馬、向うを見て

靜馬 イヤ申し、即ち春太郎さま、あれにお渡りなされまする。好い折柄でございます。イヤ、お出でなされませい。

ト兩人、本舞臺へ直り、靜馬、威儀を改め

これは、若殿様でございますか。先づ持ちまして御寶體の御尊顔を拜し奉り、有り難う存じます。つきましては、武將足利家より御祝言の儀、頻りに致すやうと、管領の御催促でございますれば、何卒お館へ、御歸館な

し下されませうならば。

ト春太郎、氣色して

春太 コリヤ、静馬、身が前で控へいと申し付け置くに、それは何事ぢや。

静馬 イヤ、左やうござりませいで、お家のお爲。

春太 詞を返す處外な奴め。

ト春太郎、立ちかゝり、反り打ちかゝる。又五郎、申へ入り

又五 イヤ、先づお鎮まり下されませう。コレサ、静馬どの、黙らつしやれ。

春太 イヤ、放せ。

又五 イヤ、先づお待ち下されませう。

ト静馬、ヂツと居る。氣さし延べ控へる。

御執言なされるは、どう致した事ぢや。お詫びなされ。

静馬 又五郎どの、お執成し、忝なう存じますれど、お爲を申し上げ、それがお心に障り、お手討ちになります。儂、少しもいとひます所存ござりませぬ。元より覺悟仕り居ります。

又五 ヘエ、天晴れ、流石、渡邊軋負どの、御子息、命を捨て、の御誠言、イヤハヤ、驚ろき入りましてござ

る。殿様には、何事も私しがよろしう、取計らひませう。先づお鎮まり下されませう。さて、驚ろき入つた事、その御心底を見ましてござる上は、何を隠し申しませう。斯やうに、あの太夫を揚語めなされる、事、全く御放埒でない理があるて。

静馬 なんと仰しやる。

又五 イヤ、斯やうに、拙者お側に付き添ひ詰めあつて、御意見を申さぬは、拙者ともに不埒のやうに思し召すでござらうが、左やうでない。

静馬 と申す譯はな。

又五 サ、そこぢや。これと申すも、拙者が浪人いたした一徳。思ひも依らぬ事を承はり、あれなる大橋どの事は、先大殿の、お湯殿に出生なされた、お子でござるわいの。

静馬 すりや、あの太夫どののは。

又五 必らず、他言なされませぬ。春太郎さまの、お妹君でござるわいの。

静馬 エ、。

ト静馬、顔を見合す。

大橋 此やうに、片時離れずお側に居ても、春太郎さんと。

微塵も色がましき事はござんせぬわいの。  
 静馬 ハテ、存じも依らぬ事を承はりましてござりまする。

又五 ぢやに依つて、斯やうな譚を聞きながら、その分に捨て置かるゝ時は、天知る地知る、遂に人の口の端にかかり、忽ちお家の御名の出る事。そこを思し召して揚請めになされて、外へ出すまいと思し召してござるわいの。

静馬 然らば、早速お身請けなさるがようござりませう。

又五 サアそこぢや。何を申しても金銀づく。それゆゑに心を痛めて居りまするて。

静馬 それこそは、掛屋方へ申し付けて。

又五 ア、それ／＼、益體もない。左やう致す時は、一人が二人の耳に入り、忽ち一家中の耳に入つて、御耻辱になる。何事も内々にて、どうぞ致し方が、と申して拙者は浪人の身の上、其許には、どうぞ御才覺の仕様はござるまいかな。

静馬 わたしぢやと申して部屋住の分。ハテ、なんと致したものでござりませうな。

ト橋が、りより、遊女屋爲五郎、揚屋丹七兩人出る。

爲五 又五郎さま、それにござりまするか。わたしは大橋太夫が親方でござりまする。太夫が事は、今日外に身請けのお客がござりますれば、遣はしたうござりまする。お戻しなされて

又五 コリヤ／＼、それは何を云ふのぢや。先達ても云ふ通り、大橋どのは外へ出す事はならぬ。それゆゑの揚請め。ならぬ事ぢやぞ。

丹七 イヤ、たんぼさう仰しやりましたも、揚げ代難用、身の代まで、大金の事でござりますれば、お拂ひ口が鈍うては、受け込み憎うござりまする。

又五 ハテ、高の知れた金子。春太郎さまはお大名ぢやわい。なんの氣遣ひな事あつて。

爲五 なんぼお大名でも、廊の事は金銀次第でござります。埒の明かぬ事云うて居る隙はない。太夫、おぢや。

ト爲五郎、ツツ／＼と上の方へ行く。春太郎、反り打つ。春太 おのれら、太夫に指でもさすと、討ち捨てろぞ。

爲五 でも、それは御無體な。

ト又五郎、中へ入り

又五 マア待て。控へて居よ、控へて居よ。身共が埒を明ける、控へて居よサ。



ト爲五郎、下へ控へる。

静馬どの、お聞きの通り、殿にはお大名の事ゆゑ、あの譯も御存じなく、困り入りましてござる。ちと、其許へ御無心がござるが、お聞きなされるかな。

静馬 とは、なんの御用でござりまするな。

又五 イヤサ、お借り申したう存じまする。

静馬 右申しました通り、拙者、部屋住の儀ゆゑ。

又五 イヤ、金子ではござらぬ。

静馬 然らば、なんとござりますた。

又五 御印形がお借り申したい。

静馬 拙者が印形が。

又五 大橋どの、身請け金が千三百兩ばかり、雑用が七百

兩、都合二千兩と申す金子がなければ、春太郎どの、御

一分が立ちませぬ。ちやと申しても、只今金子の才覚と

申しては叶ひませぬ。そこで彼れらが手前へ、二千兩の

金子借用證文、其許の御印形さへなされ下されうなれ

ば、さうりとこの場が相済む事。大橋どの、身請けをし

て、首尾よく館へ御歸館がござれば、京都より姫君の御

化粧料として二萬兩參る筈。すりや、その中でこの二千

兩はな。

ト呑み込んで居ると云ふ仕方して

なんでもない事でござりまする。

静馬 イカサマ、ハヤ、左やうで相済みまする事なら、如

何にも

又五 なされて下されうか。先づ以て忝ない、コリヤコリ

ヤ、廊の者ども、申し付けた證文、持參したか。

爲五 でも、お前様の御印形では。

又五 されば、それぢやに依つて、静馬どのへ御印形をお

頼み申したわサ。

爲五 成る程、左やうなれば、儘かでござりますれば、即

ちこれが證文でござります。

ト又五郎、取つて抜き見る。

静馬 文書をちよつと。

又五 イカサマ、念の爲、お聞きなされい……一つ、據ろ

なき入用に付き、金子二千兩借用申し候ふ、もし返済相

滞り候はば、先祖より相傳はる武具馬具、殘らず相渡

し申すべく候ふ、後日の爲、併つて件の如し。春日屋爲

五郎どの……斯くの通りでござりまする。イヤモウ、こ

の證文の出るやうな事はござりませぬ事なれども、ほん

の念の爲と申すもの。

ト矢あてがひ

御姓名をなされて。

ト静馬、名を書き、印形据ゐる。

静馬 然らば、これにてよろしうござりまするか。

又五 ようござりますす〜…コリヤ〜、證文渡したぞ。

爲五 イヤ、モウ、これさへござりますれば、懽かでござりまする。即ち、これが太夫の身請け證文でござりまする。

ト又五郎、抜き見て

又五 よし〜、如何にも身請け證文、受取つた。歸れ歸れ。

兩人 左やうなれば、お暇申しませう。

ト兩人、入る。

又五 サア、さらりと相済みました。先づお二人ともに幕の内へ、お入りなされませ。

春太 サア、太夫、おぢや。

ト唄になり、春太郎、大橋、又五郎、思ひ入れて入る。跡に静馬、残り居る。

静馬 人の身の上と、水の流れば知れぬものぢや。あの太

橋が、大尉様のお胤であらうとは、てもさても、思ひがけない事ぢやなア。

ト向うの方より、お袖、振り袖を着流し、おその、同様、兩人とも襦袢にて、後より肩、下人附き出て

そで おそのさん、なんとマア、櫻は見事に咲いた事ぢやござりませぬかいなア。

その さればでござりまする。この星合寺の櫻の盛りに、御利生あらたな観音さまへ歩みを運び、花より勝つた静馬さまといふ、美しい花を眺めたいと思つての御参詣でござんせうがな。

そで さればでござんす。云ひ號けばかりで、御祝言の遅いを、どうぞ早う女夫になりたいといふ大願、お前も、又五郎さまと、早う夫婦になりたいといふ、願でござんせうがな。

その 取分けてわたしが殿御、又五郎さまは、お心慈道なゆゑ、親御様の御勘當。何卒お心も直り、御勘當もゆり、早う祝言を致しますやうと、そればかりが願ひでござりますす。

トお袖、静馬を見て思ひ入れし、本舞臺の方へ行く。大橋、幕の蔭より出かける。

静馬 思ひも依らぬ。

ト大橋を見て、後の方へ隠し

出まいぞ〜。出まい〜。

その 出まい〜と、なんでござりますぞいな。

静馬 エ、イヤサ、出まい〜は、彼の、爰は鎌倉、サ

ア、鎌倉山の星月夜と想うて、阿房島が出やうかと、そ

こで出まい〜でござりまするて。

その ヘエ、そんなら鳥の事であつたかいな……あんな鳥

が、可愛い〜と云はうかと思ふはな。

静馬 エ、

その イヤ、モウ、お袖さんとした事が、逢ひたい〜と

ばつかり思うてゐて、何をウヂ〜して……エ、こり

やわたしが悪かつた。ドリヤ、わたしや、観音さまへ。

コレ、二人の衆、お袖さんの名代に、連れ立つて参る程

に、その跡で、何もかも打明けて、合戦でござんすか。

静馬 ハテ、これは〜、お氣の毒な。左やうならお供いた

しませう。

ト静馬、行かうとする。お袖、引き留め、おその、局

局 局に思ひ入れする。

局 サア、お出でなされませ。

ト三人、橋が、りへ入る。

そこで 申し、静馬さま、さりとは聞えませぬ。御様子と

いひ、お心といひ、引く手数多のお身ぢやに依つて、一

入わたしが遣る瀬なさ。もしや外にいとしはがるお人が

出家やうか、早う嫁入りがしたい事ぢやと、忘れた聞と

てはござりませぬわいな。可愛い事ぢやと思し召して、

どうぞ早う、祝言なされて下されませいな。

静馬 成る程〜、云ひ難けある其方の事、思ひいではな

けれども、御主人の御婚儀の済まぬうちには、家來の身と

して、どうも先へは婚儀はならぬ。さう心得て辛抱しや。

そしてマア、門中で人が見まして、猥らなと云はれては

武士が立たぬ。サア〜、去んでたも〜。

そで ソレ見さしやんせの。たま〜逢へば、そんなむご

い事ばつかり。わたしや、なんぼでも、放しやせぬ〜。

ト取りつく。

静馬 コレ、人が見るわいの。さりとは聞分けつない。

ト大橋、中へ入り

大橋 嫌らしい。そんな事しておくれなえ。

ト引ッ張リ、上の方へ行かうとする。

静馬 そりやマア、なんでござりまする。お前は御主人ぢ

やで。サア、今日より春太郎さまの御兄弟なれば、わたしが爲にはお主。そのお主が、そんな事するものでござりまするかいな。コレお袖、これは大事の事なれど、其方に話して聞かす。あの大橋どの、イヤさまは、先大殿様の御胤、春太郎さまの爲には、御妹君様ちやといの。ト此うち、伴作、ちよつと出て、文を拾ふ事あり。

そで エ、そんならあなたは、姫君様でござりまするかえ。

静馬 しかも、たつた今承はつた、ぬく／＼の御姫君様ぢやわいの。そのお主様が、そんな猥らな事、するものでござりまするかいの。

大橋 成る程、そんならわしは主。其方は家來ぢやの。ト上の方へ座る。

静馬々々。

静馬 ヤア……ハイ。

大橋 爰へ來い。

静馬 エ、。

大橋 爰へおぢや。

静馬 ハイ。

ト手をつく。

大橋 爰へ來て、わしに取りつきや。

静馬 エ、。

大橋 主の云ひつけぢや、早う取りつきやいの。

静馬 でも、それは。

そで コレ／＼滅相な。そんな事。なんぼお主の。如何にしてもそればかりは、よしにして下さんせえ。

大橋 わしが云ふ事を聞かぬと、大勢の者に云ひつけて、繩かけさせて抱いて寐るぞ。

そで コレイナア、ちやつと此方へ來て下さんせいなア。

大橋 コレ／＼、主の眼の前で、そんな事はならぬぞ。

そで アイ、例へお主でも、わたしや天下晴れて女夫の仲。ちつとも大事ござりませぬ。

大橋 なんぼ女夫でも、さうはならぬ。

ト静馬を兩方へ引ツ張る。又五郎、出て見て、思ひ入れして引ツ込む。二人の女形、あちこちと引ツ張り、

とまりに静馬、眞中へ轉げて眼の眩うた體、お袖、大橋、兩人、後の茶瓶見つけ、茶碗につき、一口含む。

二人とも同じやうに兩方より、口うつしを争ふ事いろいろあつて、一度に呑み込み、静馬、起き上がり

静馬 その伸直りの水杯をささうばかり。



大橋 そんなら、わたしも。  
 所で わたしも。

ト大橋、抱きつかうとする。又五郎、後から引き退ける。皆々惘り。静馬、お袖、幕の内へ入る。大橋、ひよんと思ひ入れする。又五郎、腕む。顔を蒼へて  
 又五 ても、美しいものではあるぞ。どうも堪らぬ。  
 ト取りつく。

大橋 又五郎さま、わたしや、なんぢやえ。

又五 なんぢやとは。

大橋 お前の爲には、主ぢやないかいな。

又五 マアサ、その事は、ちつと様子があつて。

ト無理に引きこかさうとする。大橋、振り放し、奥へ逃げて入る。奥よりお袖出る。又五郎、惘りしながら、  
 又お袖に濡れかゝる。

そこで コレ渡相な。わたしや静馬さまといふ云ひ號けの夫  
 ある身、渡相な。

又五 なんの渡相。

ト文を出し、無理に懐へ入れ

おれが思ひの數々、この文に書いてある。見たも見たも。

ト此うち、嫌がるを、いろ／＼無體に濡れるこなしあり。

そこで 此やうな渡相な。主のあるものに鬘書を付けるといふ事があるものでござりまするかいな。阿房らしい。

ト文を投げつける。

又五 なぜに其やうに、びんしゃんする事ぞい。

ト此うち、おその、局と下人連れ、戻りかゝり、見てゐる。

そこで 悪い事も、好い加減な事にしたがよい。阿房らしい。

又五 さうつれなら云はぬものぢや。

トまた寄るを

そこで アレ、聲を立てるぞえ。アレ、又五郎さまが。

又五 ア、コレ／＼、じんたいな。聲を立てるといふやうな事があるものか。

トお袖、歸らうとする。やるまいと引きとめる。中へおその入る。顔を見て惘りする。又五郎、おかしき思ひ入れ。

そこで これはマア、おそのさん、好い所へ戻つて下さんした。とつとわたしや、嫌がつてゐるものを、あのお方が

無理な事ばかり。

その よいわいな。必らず／＼堪忍して下さんせ。爰に構はずと、早うお歸りなされ。

そで そんなら、おそのさん。

その わたしが居るゆゑ、氣遣ひな事はござんせぬわいな。

そで 皆の衆、おぢや。

トお袖、橋が、りへ入る。

又五 おその、其方は爰へ、どうして來たのぢや。

その どうしてどころか、お前はなぜに其やうな、惡道な氣を持つて下さんすぞいな。女子よへ見ると無體の戀慕、

後家や人の妻ともいはず、殊にお袖さんは誰れぞ。お前のお心ゆゑとは云ひながら、親御様の御勘氣を受け、艱難のお身を引請けて、先祖の義理ある澤井家、引興させたいと一心に、お世話なされる渡邊親負さまの御子、

静馬さまと云ひ號けある、そのお方に無體の戀慕。道も

法も思はぬお心は、なんとした因果な事でござんすぞいなア。勘當の赦りぬうち、必らず詞も交すなと、母様の云ひつけ。云ひ號けばかりで、枕は交はさぬ女房ゆゑ、

さう胸慾に思し召すか。コレ、此やうにいつまでも、振

り袖着せて置お心でござんすかいな。エ、聞えぬわいな／＼。

又五 道理ぢや、道理ぢや、おれぢやというて、其やうにしたい事もなけれど、此やうに勘當請けて、内證の甲斐が廻らぬに依つて、ほんのひだるいに依つてぢやわいの。

その エ、お前は曲もない。どうぞお心を入れ替へて、本心になつて下さんす、心はござんせぬかいな。お果てなされた父御様や、跡にござる母御様のお心にもなつて見て、惡道な魂ひを入れ替へて、御歸參の願ひを叶へて、親御様へ孝行を盡し、どうぞ早う女夫になつて下さんせ。わたしや、斯うして死ぬれば、現在の賽の河原の苦しみをするが、可憐うはござんすまいがな。ちつとは、わたしが心を思ひやつて下さんせい。手を合せて拜みまするわいな。

ト泣く。

又五 ハ、ア、誤まつた。成る程、さうぢや。眞實親身な女房の意見、骨身にこたへて、忽ち心が入れ替つて、モウ、／＼／＼、フツツリと心を入れ替へ、眞人間になつたわいの。

その エ、そりやマア、ほんまでござんすかいな。

又五 書文々々。今までの事を思へば、勿體なうてならぬわいの。

その エ、忝たうござりまする。母様に申したら、さぞお喜びでござんせうわいな。

又五 サア、これからは、ほんの女夫ぢやに依つて、枕取つておぢや。

その 涙相な。門中で。その上、物堅い母様の云ひつけは、どうも背かれませぬわいな。

又五 ハテサテ、其やうな愚癡な事云はずと。  
ト取りつく。

その エ、これは、わつけもない。そんな事があるものでござりますすかいな。

ト向うより姉笹尾、襦袢に上帯して、下人一人連れ出る。

又五 おやというて、これが又、堪るものかいの。  
ト向うを見て、南無三姉貴がと、振りすて奥へ逃げて入る。笹尾、扇をかざしながら、本舞臺へ来る。

その これは笹尾さま、御参詣でござりますすかいな。

笹尾 おそのさん、お前も観音様へ御参詣でござりますすか

な。マア、惡道めが。

ト云ひ、文を拾ひ、書付けもあり、取上げ袂の下にて讀みながら、相手になり居る。桐りして

さてこそ、これぢやもの。  
その 母を隠しませう。最前から段々様子を承はりました。最早身の上は倦じはて、さつぱりとお心が入れ替り、

マア、此やうな嬉しい事はござりませぬ。どうぞ、この上はお前のお執成しで、御勘當の扱りますやうに、お頼

み申しますわいな。  
ト此うち、笹尾、おそのに隠して、片手にて見る。又

五郎、上手より覗き見て、頭を掻くこなしあり。

笹尾 てもさても、見下げ果てた。して、明日は御歸館いたすとの風聞。なんぞお聞きなされたかえ。

その イエ、その事は、なんにも承はりませぬ。

笹尾 すりや、これも母を騙した企み事と見えた。必らず必らず逢はしやんしよと、かんまへて獨り歩きなど御無用。此やうな事を。

ト云ひ、袂へ入れる。  
その それは、母様のお指圖ゆる、キツと心得て居ります

わいな。

笹尾 同道いたしませう。サア、ござんせ。

その そんならわたしも、お供申しませう。

ト唄になり、兩人橋が、りへ入る。又五郎、出て伸び上がり

又五 エ、ひよんな文を、姉貴に拾はれて、マア情ない。

母に見せるであらうわい。しまい〜。

トこの時、伴作出て

伴作 又五郎、これは、あの大橋めから、靜馬への付け文と見える。なんでも、これを種に不義者にして、靜馬めをしまはせる思案は。

ト又五郎、取上げる。

又五 つれなき靜馬さまへまゐらせ候ふ、焦るゝ大橋より、よし〜。

ト思ひ入れて、懐へ入れる。内より御歸館と云ふ。

伴作 御歸館と觸れたは、正しく春太郎どの、靜馬も供を致し、間道より

又五 歸館いたすに違ひない。ソレ

ト兩人思ひ入れて、向うへ入る。

造り物、三間の大屋、二重舞臺欄間あり、臆病口、

横障子あり、橋が、り廊下の反り橋、とまりに柴垣、

この後、高塀、舞臺の前に仕掛けの松の木矢張りあり。

二重舞臺の上に、上の方に渡邊鞆負、惣髪、着流し、羽織。露者、了伯、鞆負の脈を見てゐる。次

に三人、劍術の弟子ども、古川義平次、長谷部五郎

藏、清水仙右衛門、並び居る。この見得にて、一面

に前へ突き出す。道具納まる。

了伯 餘程鬱症なされた様子に見えまするわいの。

仙右 左様でござりませう。萬事、心遣ひが多くござりま

するゆゑでござりませうサ。

了伯 どうでも左様さうな。御養生なされたが、ようござ

りまする。

鞆負 イヤハヤ、左様に存ずるやうでもござらねども、自

然と積薄して、斯やうござりませう。よろしく御配聲を

お頼み申しまする。

ト又五郎、右の形にて戻りたる體にて出る。

又五 これは御門弟中様、ようこそお勤めなされまする。

併し、先生の御病氣で、お氣の毒に存じまする。

義平 先生、御病氣とござれば是非もない儀。併し、稽古

の儀は、其許、御名代に御指南にあづかりますれば



五郎 我れ〜に於きましても、大悦至極に存じまする。  
又五 これれ〜、御埃抄、痛み入ります。さて、了伯老には、毎日々々御苦勞に存じまする。先生、御病體は如何でござりまするな。

了伯 イヤハヤ、さして變りました儀もござらぬが、どうでも心遣ひが多い様子。只今申す事、さりながら、次第に御全快でござりませうサ。

又五 それはよろしうござりまする。

了伯 お薬は道ツつけ、進上いたしませう。

又五 何分よろしう、お加減をなされ下されませう。

了伯 委細心得ました。さらば参りませう。

又五 お出でなされませるか。御苦勞でござりまする。

了伯、出て行く。静馬、右の形にて戻り来て

静馬 これは又五郎どの、御苦勞でござりました。

又五 静馬どの、只今お下がりかた。

静馬 静馬、歸りしか。して、春太郎さまには、如何遊ばされたぞ。

静馬 御機嫌ようお供仕り、歸りましてござりまする。

静馬 出かした〜。

了伯、出て

侍ひ 佐々木丹右衛門さま、お出で〜ござりまする。お通し申しませうか。如何仕りませうな。  
静馬 コレ〜、御案内には及ばぬ事を。イザお通り下されませうと申せ。

侍ひ ハア。

ト橋が、りへ入る。丹右衛門、上下、大小にて出る。又五郎を見て、睨みつける。又五郎、氣味悪きこなしにて、下へ下がる。丹右衛門、二重舞臺の上の方に居る。

丹右 この度、帝都足利家の上意として、忝なくも主君上杉の御二男へ御婚姻の儀に付き、管領職には御上使として、御下向の由。家の面目世に聞え、斯程の大慶なる儀はござらぬ。然るに賀君春太郎さまには、御身持ち御放埒にして、一向に取り所もなき御行跡。それを諫むる心は無く、却つて踊り狂ふ輩ばかり。お家の滅亡遠からじと、氣の毒千萬な儀でござりまする。

静馬 そりや、なんと云はつしやる儀でござるぞ。お諫め申すに、人の指圖は受け申さぬ。その儀に於ては、貴殿のお構ひはいらざる儀。只銘々の役儀を大切にやるがよい事サ。

丹右 ハア、こりや異な事が、お耳に障りました。拙者が申すは、付き忝ひ居つて、主人を廻り上げる馬鹿者の事を申すのサ。

靱負 付き添ひ居る馬鹿者とは。

ト少し靱負こなしする。又五郎出て

又五 イヤ、この儀はさう思し召すは御尤もでござり

ますれど、さう致した事ではない。兎につけ、角につけ、お身の上を御大切に存ぜらるゝから。

丹右 黙れ。

又五 イヤ、そこが彼の人の口には。

丹右 黙れと云ふに。何を口をきく。博奕勝負にはこり、姪酒に耽り、人間道を辨まへぬ人非人の畜生同然の奴が云ふ事、この身に聞く耳は持たぬぞ。あのやうな畜生めを取込み置き、お世話なさるゝから起る事。親一門に見放され、人非人と云はうか、餘り慈悲が過ぎる。追ひまくつてしまはつしやるがよいてサ。

靱負 心悪道にて、勘當請けしを合點して、世話いたすこの靱負。人盛んなる時は制し、衰へたる時は制せらるゝの習ひ。何卒、心を改め、再び澤井の家を引興さん駕と存するから。貴殿のやうに申しては、仁心はないと申す

ものサ。

丹右 サア、その仁心は人の上に致す事。彼奴がやうな人でもない畜生に致すは無益の至り。面を見るも胸が悪い。立つてうせう。

又五 ドリヤ、お薬でも煎じませうか。

ト又五郎、氣味悪く奥へ入る。内より御上使と呼ぶ。

靱負 ナニ、御上使とや。

丹右 表向き御用であらう。暫く差控へ、まだ外に申し談じたい儀もござれば。

静馬 暫く私しが部屋へお出で下され、御休息なされませう。

丹右

イカサマ、左やう致さう。イヤ、御案内。

静馬 斯うお出でなされませう。

ト唄になり、静馬、丹右衛門、奥へ入る。

靱負 誰そ、衣服上下を持ちやれ。

侍ハア。

ト衣裳、上下持ち出る。靱負、舞臺にて衣裳、上下を着る。

靱負 門弟中、御案内頼みます。

三人 御上使には、イヤお通り下されませう。

茂左 上下使神田茂左衛門、荒卷伴作、上下にて来る。  
役目でござれば、罷り通ります。  
靱負 イザ、お通りあられませう。

ト兩人 上へ進る。

茂左 この度、武將の御謀介を以て、姫君御婚嫁の儀、い  
よゝき婚嫁取結ぶべき事。それにつき、貴殿所持の  
正宗の刀、象れて上聞に達し、この度乞ひ請け、御引出  
として差上げらるゝやうにとの御所望。貴殿所持の事な  
れば、大慶様の御満足、これに依つて新地千石御加増あ  
らんとの儀、上使の口上、斯くの通りでござる。

伴作 辭退なき上は管領へ差上ぐべしとの儀なれば、即ち  
内見いたせとの儀でござるサ。

靱負 伴 靜馬、正宗の刀これへ。

靜馬 畏まりました。

ト内より刀箱持ち出る。上使の前へ直す。茂左衛門、  
蓋を取りて見て、鞠りするこなし。

茂左 こりや、箱の内に刀はない。なんと。

書々 エ、

ト鞠りする。

靱負 伴、刀はなんと。

書々 サア〜。どうぢや〜。

ト伴作、箱の内より一通取出し

伴作 何か一通がござる。

ト開き見る。讀み上げる。

據ろなき入用につき、金子二千兩借用申し候ふ、もし返  
濟相滞り候はゞ、祖先より相傳はる武具馬具残らず相  
渡し申すべく候ふ、後日の爲、仍つて件の如し。宛名は  
春日屋爲五郎どの、渡邊靜馬、判。

ト靜馬、驚ろく。

靱負 伴、こりやどうした譯ぢや。それへ出て様子を申せ。

サ、どうぢや〜。

伴作 傾城に打込み、さては家の寶をぶち込んだものと見

ゑる。ハテ、笑止千萬な。

靱負 サア、どうぢや〜。

靜馬 サアそれは、一向私しが存せぬ事。

靱負 知らぬと云うて事が濟むか。サア、眞直に申せ。ど  
うぢや〜。

靜馬 この儀は、澤井又五郎が存じ居ります。

靱負 なんぢや、又五郎が知つてゐるとな。又五郎々々々。

又五 ハア〜。

# 南 波 之



天保五年正月





森田座所演番附

ト出しなに、伴作が前へ覽書を落し、向うへ出る。

靜馬 コレ、又五郎どの、彼の櫻の馬場での事、サア、云うて下され〜。

又五 櫻の馬場、なんぢや、姿は居なんだが。

靜馬 エ、ソレ、こなたの頼ましやつた事を。

又五 なんぢや、頼んだ事は。エ、成る程、こりや頼まにやならぬ。あの道を掘り返しあつたゆゑ、其許の御家來に頼み直させました。なぜに上使のお通りなされる〜に、

あの通り掘り返して、捨てゝは置かれぬに依つて、其許の家來衆を頼みましたわサ。

靜馬 イヤ、さうではない。

ト靜馬、身を探む。

伴作 兼ねて意見を致したは、爰の事サ。

靜馬 全く私しが身に覺えない事、この金子の儀は……エ

エ、云ふまいと申したれば、どうも……コレ又五郎どの、大橋どのの事を、もう、どうも斯うなつては云はずには置かれぬ。サ、爰で云うて下され。コレ〜、云うて下されいの。

又五 大橋とは、兩國橋の事かな。

靜馬 ハテナウ、さうではないわいの。

又五 さうでなくば、なんぢやな。

靜馬 エ、モウ、云ふまいと誓言は立てたれど、云はねばこの場が濟まぬ。申し、あの太橋と申すはな、お湯殿に御出生なされた大橋どの、大助のお胤、春太郎さまの御妹君でござりまするわいの。

靜馬 合點のゆかぬ。親も知らぬ事を、其方がどうして。

靜馬 イヤ、この儀は又五郎どのが申されましてござりまする。

又五 イヤ、これは迷惑な。云うた覺えもない事を。

靜馬 ハテ、お名の出る事ゆゑ、廊には置かれませぬとあ

つて。

又五 コレ〜、それはなんの事。口も腐れ、云うた覺えはないぞ。

ト此うち、丹右衛門、後の方へ出てゐる。

伴作 まだ爰に變つたものがござる。靜馬さま參らせ候ふ、

大橋より。

ト披き見て

一思ひに堪えかね、ちよつとしめし參らせ候ふ、そもじさま事、折々廊へお出でなされる、折から、お顔を見る度に、いと可愛いと心に思ふばかり、人目の隔に隔て

られ、仇に過ぎ行く我が思ひ、露程なりと知らせたく、及ばぬ筆に云はせ参らせ候ふ、めでたくかしこ、大橋より、静馬さま参る。「さてこそ、主人の思ひ者と密通の體かな證據。覚えのないとは云はれまい。」

静馬 サア忤、どうぢや。サ、なんとぢや。

伴作 サア、それは。

静馬 その證據は後の事。正宗の在所はどうぢや。

ト静馬、身を跳き、いろ／＼思ひ入れ。静馬、前へ直り、又五郎の胸倉取り

静馬 チエ、こなたはなう。

又五 なんぢやぞい。

静馬 口惜しいわい／＼。

ト又五郎を突きやり、腹切らうとする。丹右衛門、其まゝ止め

丹右 静馬、うろたへたか。生害には及ばぬ。マア待つた。

静馬 でも、この申し譯がどうも。

丹右 ハテ、現在云ひ譯がある。併し、犬死するか。マア、待たう。

伴作 なんぼも願めされても、主人の相方に不義の科は。

丹右 イヤ、不義ではない。  
伴作 これ程、體かな證據あれば、云ひ譯は立つまいがな。

丹右 不義でない證據は、即ちこの艶書。もう一度読んで見さしつしやれ。

ト伴作、また狀を抜き

伴作 思ひに堪えかね、ちよつとしめし参らせ候ふ、そもじさま事、折々廊へお出でなされ候ふ折柄、お顔見る度度にいとゞ可愛いと心に思ふばかり、人目の關に隔てられ、仇に過ぎ行く我が思ひ露ほどなりと知らせたく。

丹右 それ／＼、その文言は、大橋より静馬どのへの附け文。こりや、コレ大橋より焦るゝばかり、人目の關に隔てられ、仇に過ぎ行く我が思ひ、露ほどなりとも知らせたくとあるからは、男の方には一向に知らぬ事。さうして密通といふは、男女合體をされば不義とは云はれず。爰を以てその家の控を糾すが大法、武士に似合はぬ疎忽の一言、ちと馬鹿々々しう存するぞ。傾城大橋め、廊の者ども、この一卷き、これへ出ませい。  
ト氣を替へ呼び出す。内より大勢

皆々 ハア。

ト橋が、りより、大橋、傾城の形。禿大勢付き、上方へ居る。後より爲五郎丹七出る。又五郎見て恠りする。出るなと云うて仕方する。廓の者、迷惑するこなしあり。

丹右 皆ズツと出よ。

ト此うち、廓の者、這うて出る。

爲五 コレ太夫、それはどうした居住ひぢやぞいの。足を投げ出してどうぢやぞいの。

大橋 斯うするが、廓の習ひぢやわいな。

爲五 アノ、足を投げ出しましたが、足でないといふ證據でござりまする。

丹右 コリヤ、廓の者ども、これまで静馬どの、廓へ毎度通はれたか。有體に眞直に申せ。

丹七 ハイ、静馬さまは、春さまのお遣ひに、折々お出でなされましたばつかりでござりまする。

茂左 それに又、夥しい金子の入用ぢやな。

丹七 イヤ、左やうではござりませぬ。

丹右 左やうでなくば、金子の行き場、眞直に申せ。

丹七 ハイ。

ト又五郎、云ふなと思ひ入れする。丹七、うぢくし

てゐる。

丹右 云はねば拷問にかくるが、サア、早く云へ。

丹七 ハイ、アノ、イヤ。

ト此うち、又五郎、いろく止める思ひ入れして

丹右 家來ども、其奴に水喰はせ。

家來 立ち居らう。

丹七 ハイ、申しまする。何を隠しませう。その金子

高ののうち、二分通りは即ちこれにござりまする、又五郎

さまのお引きなされまして、残り千三百兩は春太郎さま

より太夫が身請け金、残りは諸雜用でござりまする。

丹右 して、又この静馬どの、印形の證文はどうぢや。

丹七 即ち千六百兩、又五郎どのより受取りましたゆゑ、

その證文は又五郎さまへ、お戻し申しましたでござりま

する。

丹右 ムウ。然らば高二分通りは、又五郎へとな。

ト又五郎、うろくとして、また氣を替へ

又五 イヤ、斯うでござりまするわい。春太郎さまお遣ひ金、

餘り大金ゆゑ、少しなりとも儉約を致さんと、總じて二

分引を申し付けました。こりや軍陣で致す事、武士の心

掛けでござりまする。イヤハヤ、辨處と申すものは、思ひ



の外、術ないもの、なるものではないぞ。  
丹右 ムウ、殿の御身持ち、餘り奢りの沙汰と存じ、儉約の爲とな。ソレ、申しつけた物、これへ持て。

ト大福帳、刀箱、丹右衛門が側へ出す。  
ソレ藏の者、それへ參つてこれを見よ。

ト丹七、立つて伸び上がり  
丹七 ハイ、これは、私し方の諸色を附けまする、當座帳でござりまする。

丹右 其方どもを呼び寄せ、後へ役儀の者を遣はし、此方へ召し取り置いたわやい。いづれも方は、御意見の爲、折々麻へござる家中なれば、立寄つて見物なされい。

ト清水仙右衛門、帳面開き見て、恠りし、又五郎と顔見合せ、思ひ入れ。

作右 これは  
丹右 どうかな。

仙右 四貫六百目、三月三日、太夫三十人、丸裸にして足で貝踏む潮干の趣向、後を六人にて、念佛が、りになされ、少々疵指れが出来、赤膏薬、赤松さまあら薬代とも

トうちく讀む。  
丹右 して、その宛名はな。

仙右 清水仙右衛門さま。

丹右 磁か、其許のお名ではないか。

仙右 左やうでござります。

丹右 足で貝踏む潮干の趣向とは、ハテ、結構な。管領のお耳に入つたらば、さぞ一塵の御褒美でござらうサ。ナ

ニ、次を代つて讀んで御覽じ。

ト長谷部五郎藏出て、帳面を開く。

五郎 三貫七百目、すつぽん三十六鍋、並びに總揚げ入用とも。

丹右 その宛名は。

五郎 長谷部五郎藏。

丹右 長谷部五郎藏とは、どれかな。

五郎 さればでござりまする。

丹右 其許ではなかつたか。

五郎 如何にも拙者。

丹右 イヤハヤ、夥しい大食な。次を讀んで御覽じ。  
ト古川義平次出て、帳面を見る。

義平 二貫八百目、人形その外、家内の者へ付け届けの入用、古川義平次さま。めめ百二貫目、金にして二千兩の

うち、四百兩は又五郎さまへ書き上げ、残り金千六百兩、

受取り申し候ふ。

筆頭 わたし人も人形やら

伊賀 香箱やら貰うたわいな。

丹右 即ち其許の宛名。いづれもこの分、お上へ聞え、首

が鬮に附いてあらうと思はつしやるか。

大橋 さても、氣の毒な事を聞きましてござんす。どうぞ

お名の出ぬやうに、済ましてあげまして下されませ。

丹右 麻の者ども、重ねて呼び出す事もあらう。今日は、

皆を連れ歸れ。

爲五 ハア、有り難うござりまする。サア太夫、おぢや。

大橋 ほんに諍馬さま、つれなかつたと思つたが、結局、

今日は嬉しいわいな。

ト諍馬を見て思ひ入れし、皆々、橋がより入る。

伴作 なんば丹右衛門どの、鼻頭はなづかに召されても、諍馬しょうま放埒はなづか

の云ひ譯は立つまい。

丹右 ハテサテ、其許は上使の役、拙者は吟味いたすが後

目、いらざるお構ひなく、控へてござれサ。

茂左 して、正宗の事が、肝心の御用、ないと云うては、

伴作 云ひ譯は立つまい。

丹右 正宗の刀、お目にかけてませう。

ト刀箱、袋入りの筆鞘出す。皆々制りする。丹右衛門、  
茂左衛門へ渡す。茂左衛門、抜き改め見る。

茂左 如何にも、相違ござりませぬ。

ト鞆負へ渡す。鞆負、受取り、伴作との間に置く。伴

作、取らうとする。鞆負、右の膝へ取り直す。

上使の役目、相濟んだれば、拙者どもはお暇申さう。い

と、相違なく獻上いたされてよからう。

鞆負 委細畏まり奉りましてござります。

丹右 御上使、御苦勞。

ト伴作、茂左衛門、橋がより入る。ト唄になり、丹

右衛門、後へ直る。

鞆負 又五郎、それへ〜。

又五 へ〜。

ト又五郎、思ひ入れして、鞆負の前へ座る。

鞆負 又五郎、明日に歸参との事、これまでは先直の恩を

思ひ、世話に致したれども、最早只今が限り、何方へな

りとも、行きやれ〜。

又五 へい。すりや、今歸れとな。

ト又五郎、いろ〜思ひ入れして  
へ、世話にする〜と何が世話、人の世話をする

といふものは、ちと腸に餘裕がなければならぬものぢや。なんぢややら、別してでもない事を越度に追ひ出すのかい。其やうな小さい蛋の聖丸を筒切りにしたやうな根性で、人の世話がなるものかい。明日は御歸參なさるさうだ。これまでは永々御逗留なされ辱ないと、衣服大小など取揃へ、これは餞別でござる。千鶴萬龜おめでたう存じますると云ふべき筈。餞別するが悲しさに、なんでもない事に物云ひつけて、只今限りぢや。なんぢやい。明日から歸參すれば七百石取りの、オ、澤井又五郎さまぢや、忌々しい。こんな汚ない屋敷は嫌ひぢや。大べら坊めが。去ぬるわい。うぬ、覺えてけつかりやアがれ、こな鼻車らしめが。

ト行かうとする。此うち丹右衛門、文箱を持つて

丹右 又五郎、待て。

又五 たんぞ用かい。

丹右 餞別いたさう。

ト丹右衛門、文箱を又五郎に渡す。

又五 ホウ、すりや、しをらしいわい。志しは木の葉も包

めぢや。備けてやらう。

ト持ち、行かうとする。

丹右 又五郎待て。志しの餞別を内も開かず、持ち歸るは無禮であらうぞ。

又五 ドリヤ、なんぢや。見ようか。

ト又五郎、開き見て、一通を出して

金千六百兩、正宗刀一腰、置き主、澤井又五郎。

ト桐りする。

丹右 コリヤコレ、正宗の刀を盗み出し、質物に入れた返り證文。とてもの事に、まだ好い餞別が爰にある。

ト懐中より覽書を出し

夢現ともども、憧れく、て染めまゐらせ候ふ、小夜衣とは片意地な思ひつき、そもじゆゑなら我が心、割つて見せたやふたまた五郎、竹に誓ひし事も徒らに、渡邊家へ云ひ號けとは、片腕切られし心地、ぐんにやりとなへ

る又五郎が、思ひを叶へてくれの鐘く、認め置き参らせ候ふかしこ、焦るゝ又五郎、おそさま参らせ候ふ。こ

りヤコレ、靜馬どの、云ひ號けお袖どの、事。女房笹尾、

この二通を拾ひ歸りしを見るより、南無三方と質屋々々へ配符を巡らし、早速此方へ請け返した正宗。これを慰

ある頼負どの、子息、靜馬が過失になし、その上、斯や

うにお袖どのへ不義の覽書。こな人非人めが。

ト又五郎、術なき思ひ入れ。

又五 イヤ、そのおそさまは

丹右 おそさまは。

又五 そのおそさまは、お袖ぢやない。

丹右 なんと。

又五 オ、おそさまと云へば、お袖が事かい。そのおそ

さまは、おそのが事、おれが云ひ號けのオ、おそのの事ぢやない。

丹右 たわけ者めが。おそのは其方が云ひ號けの女房。その女房へ付け文する者があるかいやい。

又五 ハテ、おそのは云ひ號けばかりで、母が嚴しうて、

ついに寐た夜もない。面麩だらけになつて居るに依つて不便さに、そこで心地ゆかしに遣つたのサ。

丹右 云はして置けば方途のない。この大盗人、イヤ、大騙りめが。

又五 大盗人とは、なんで云ふ。

丹右 おのれ、正宗の刀を盗み出し、静馬どのを科に落し、腹切らせんと恩を仇で報ずる思案。なんと盗人騙りであるまいか。恩を知らぬは畜生。畜生に似合つたやうに頭

を剃り、門々へ立ち廻り、物貰はせたが畜生に相應。こ

な人非人、四つ足め。こなどう畜生めが。

又五 そりや何を吐かすのぢや。その正宗の刀は、おれがのぢや。元來、澤井の家の重寶ぢやに依つて、澤井正宗

と云はぬか。おれが物をおれが盗み、天地に點の打ち手はない。これから正宗はおれが差上げ、千石の加増は、

おれがしてやるのぢや。さう思うてけつかれ。

ト行かうとする。ト丹右衛門、又五郎、少々立廻りあつて、ト々、首筋を捉へ、扇にて散々に打擲する。

丹右 チエ、おのれ大罪人めが。靱負どのには、先祖の儀を思し召し、うぬがやうな人非人を、何卒本心に矯め直し、澤井の家を繼がせんと、劍術に心を碎き、痲食を忘れ、介抱あるその大恩は、幾許の事と思ふぞ。剩せへ、その大恩ある靱負どの、子息に、腹切らせんと企む大悪人。寸々にしても飽きたらぬ奴ぢやない。

ト扇にて、散々に叩き

人中で面縛させ、胸骨を改めんと思ひしが、上使の手前を憚り、差控へたが口惜しいわい。差控に置くは人の仇。いつそ討ち放して。

ト切りうとする。靱負、引き退け

靱負 先づく御料館。何事も腹立ちの程、拙者に免じ、



今日は先づ御料理にあづかりませう。イカサマ、ハヤ、  
 飼ふ犬に手を喰はるゝとはこの事。コリヤ又五郎、今忽ち  
 丹右衛門どの、刀下に落つるこの首、附け置くは先祖  
 への恩返し。又も冥加に叶ふ師の御恩と思ひ、心を入れ  
 かへ、誠の武士になる所存はないか。エ、淺ましい性  
 根ぢやな。家の相續覺東ない。土性骨に覺えて居らう  
 ぞ。

ト此うち扇にて叩き、意見する。又五郎、立ち上がり  
 又五 なんと云ふのぢや。家の相續覺東ない。何が覺東な  
 い。コリヤ、えらい事を云うたぞよ。口の端に御番所が  
 ないと思つて、大きな事を申し上げるわい。澤井の家は  
 劍術を以て立つる家。立つか立たぬか、見せうわい。  
 靱負 淺澤澤井は神道神影の兩家、心に心術なくては、覺  
 東ない。

ト又五郎、立つて松の木の前へ行き、刀を抜き、振り  
 上げ、また左の手に持ち直し、一打ちに斜に松の枝を  
 三本伐り、刀を納め、松の枝を靱負等が鼻の先へ突き  
 つける。

又五 左の手でこの通りに、斜に伐つて落した手の内。な  
 んと齧が潰れうが。

靱負 見事々々、天晴れ手の内。

ト靱負、また松の許へ行き、刀を抜き、峯打ちにて松  
 の枝を切り落す。又五郎が前へ持ち行き  
 刃を用ゆるは杓人、木造り等の致す事。木を伐るに刃は  
 峯を以て打つに、一心を籠むれば、刃金に勝る刀の背打  
 ち。其方が手の内に、一心の狂ひあるゆる、この如く切  
 り口に殘す刀の目。此やうな事で、人の首は切るゝもの  
 ぢやないわい。

ト又五郎、無念のこなし。

又五 切れるか切れぬか、人の首ぶつて見せう。

靱負 そりや誰れを。

又五 おのを。

ト靱負に切りつけんと抜き。靱負、刀の鏑にて腕を押  
 へ

靱負 それでは切られぬ。

ト又五郎、振り解き抜き。靱負、抜き合せ、立廻りあ  
 り、又五郎が頸へ背を當てる。

その間には、首が落ちるが。

トまた立廻り、又五郎、振り上げる。脇へ胸へかけて  
 見得よく止め

斯うなる時は、胸板かけて向う袈裟。イヤ、なかなかそ  
んな事では、滅多に人が切らるゝものぢやないわい。

ト又五郎、口惜しきこなしの立廻りになり、靱負當て

る。又五郎、倒れる。靱負、刀を納め、硯箱を持ち、

又五郎が額に犬といふ字を書き

誠まことに畜生ちくせいに劣くわりし魂たましひひ。犬といふ字あざなが、意見いけんの餞別せんべつ。

丹右 靱負きんおどには、いよく明朝あした、御教書ごきょうしょを差上げられ

まするか。

靱負 左やうでござります。

丹右 すりや、正宗まさむねの刀やいばと諸もろともに。

靱負 委細わいさい畏かしこまりましてござる。

丹右 それ、國くにを治おさめんと欲ほつする者は、先まづ家いえを治おさむ。

靱負 家いえを治おさめんと欲ほつする者は、身みを治おさむ。

丹右 御教書ごきょうしょは、國くにを治おさむる一つの機はかり。國くにに盜賊たうさく、家いえに兵へい。

御油斷ごあぶらぎりをなされぬが肝要かんよう。

静馬 丹右衛門たんねんもんどの、御差配ごさばいに依よつて、拜者まがらひが身みの明ありが

立ち、千萬ちまんにん辱ぢなう存ぞんじます。

ト五郎藏ごろうざう、右みぎの形かたちにて走り出でて

五郎 丹右衛門たんねんもんどの、それにござりますか。御上使ごじょうし御入國ごにっくわ

ゆゑ、いづれもお出迎いでむかひひの爲ため、お出いででなされてござりま

する。早はやお出いででなされませう。

丹右 ナニ、御上使ごじょうし御入國ごにっくわとや。然しからばお暇申いとままてさう。静馬しんま

どの、御同道ごどうだう申ましませう。

静馬 私わたくししも、直ただぐにお供とも仕つかりませう。

丹右 ア、誠まことに、心こころこそ心迷こころまはす心なれ。

ト又五郎またごろうを見て

心の駒こまに手綱てづなゆるすな。必かならずらず御油斷ごあぶらぎり。

靱負 承知しょうちいたした。丹右衛門たんねんもんどの。

丹右 靱負きんおどの。

静馬 これより直ただぐに

丹右 イザ、御同道ごどうだう

靱負 おさらば。

ト唄うたになり、丹右衛門たんねんもん、静馬しんま、向むかうへ入はいる。

ハテ、なんと油斷あぶらぎりのならぬ事こと。最早もともと、何時いつであらう。鶏とり

啼なまでは一期いちきの浮沈うきしん。ハテナア。

ト唄うたになり、靱負きんお、入はいる。合あひ方かたになり、又五郎またごろう、び

くく、氣きのつくこなし。息吹いきふき返かへし、思おもひ入れ。橋はしの

下の手水鉢てすいひつの水みづ掬くひ飲み、恸なげりし、手水鉢てすいひつを持ち、水みづ

鏡かがみを見て慄おそへ、口惜くちやくしき思おもひしてゐる所ところへ、伴作ばんさく、仙せん

右衛門えもん兩人にん出でて

伴作 又五郎、さぞ口惜しからう。道理々々。併し、折角に奪ひ取つた正宗を差上げさせては。

ト又五郎、立ち上がり、思ひ入れして

又五 大事な。コレ、こなたは奥へ行て。

ト伴作に囁く。伴作、呑み込み、また仙右衛門に囁

合點か。

伴作 然らば奥へ。

ト兩人、行けと仕方する。伴作、奥へ行く。仙右衛門、

又五郎が紋付きの羽織をかづき、橋の後へ隠れる。又

五郎、あたりを見て尻からげする。ト道具半分、左の方へ引込み、橋がりの方へ、一間ほど障子屋體出る。

橋は中程になり、又五郎、いろ／＼思ひ入れして、橋

の板を切り抜く。板を踏み落し、また歩いて見たり、

いろ／＼思ひ入れあり、奥の方、バタ／＼すると、伴

作、正宗の刀を抜身にて盗み出る。後より鞭負、追ひ

かけ出る。暗がりの體。又五郎、透かし見て、伴作と

代り、鞭負を橋の方へ誘きよせる。鞭負、橋を渡り、

片足踏み込む。又五郎、切りつける。橋の下より仙右

衛門、羽織をかづきながら、鞭負が足を捉へ居る。股

五郎、いろ／＼思ひ入れ。

股五 正宗といふものは、よう切れるものぢやわやい。

トじしゃ／＼突く。又五郎、これより刀の光りにて探

り、視箱を奪れて、鞭負の額へ犬といふ字を書く。

最前の返報、覺え居らう。

ト止めを刺す。刀を抜き、體に納める。ト本の鐵砲の

音、響く。

あの筒音は。

トこれより下へ居る。

もうよい／＼。

ト仙右衛門、出る。トばた／＼聞える。兩人、橋の後

へ隠れる。ト靜馬、提灯持ちの下人を先に出て来る。

血潮にて迂る體。

靜馬 ハテ、これは怪しからぬ血。申し／＼、親人様、上

使のお乗り物へ、何者か、鐵砲を打ちかけました。親人、

どれにござります。

ト橋の方へ来て

ヤア、これは親人を、何者か。

ト下人、提灯、差出す。又五郎、芝垣の側より出て、

提灯を切り落す。靜馬、下へ飛び下りて、仙右衛門を

掴む。羽織を残し、兩人、向うへ走り入る。静馬、見  
得して、羽織を見て  
これが手が、り。ソレ。  
ト向うへ追ひかけ入る。チョンくにて幕。右道具、  
残らず西の方へ引込む。

造り物、向う正面に大手の門前に雁木あり、左右と  
もに、前の方筋違ひに土手、すべて平舞臺になり、  
乗り物下るしある。高提灯、箱提灯、大分あり、茂  
左衛門、上下。善平、上下にて前後を圍み、侍ひ大  
勢、乗り物を舞臺の先へ持ち出る。物見より上杉右  
内、顔出し

右内 ザワく〜と騒がしい。静まれ〜。  
善平 只今の鐵砲は

右内 どうと響きし二つ玉、乗り物の戸を打ち抜きしばか  
り。

茂左 さては、御乗り物に中りしばかり。御尊體に

右内 少しも過ちはなかつたわいやい。

善平 正しく打ち抜きし筒音なれど。

右内 イヤ、別狀はない。

茂善 ヘエ、有り難う存じます。

ト向うより、澤井城五郎、提灯先に、麻上下にてツカ  
ツカと出て来る。

茂左 城五郎どの、早速の御出で。主人秋定、無事でござ  
ります。お喜びなされて下されい。

ト合點のゆかね體にて

城五 管領にてはござらぬな。

右内 正しく管領の乗り物と、過まつて打ちかけしは、ハ  
テ、兎相な奴の。

ト城五郎、戸を開き見て

城五 管領のこの乗り物へ、秋定公の召されしは、ハテナ  
ア。

右内 兼ねて斯やうの儀もあらんかと、我が君と密かに代  
り奉つた。

城五 代つて御入りなさるゝは、先格に承らぬ儀。ハテ、  
怪しい事かな。

右内 もし管領のお乗り物へ、斯やうな儀あつては、第一、  
貴殿は御不念になりませうがな。

城五 ハテ、口惜しい。

右内 ヤア。



城五 とももの事に狼藉者を、召捕らるゝが手柄であらうもの。

右内 ども。

城五 先づ以て御忠臣。さて、取逃がしたが無念な。

右内 城五郎どの、乗打ち御免。

城五 いづれも、御供々々。

右内 乗り物やれ。

ト 皆々乗り物泉き、向うへ入る。バタバタになる。ト

又五郎、走り出る。城五郎、家來、提灯差上げる。又

五郎、切つて落す。立廻りにて、皆々入る。城五郎、

提灯片手にさしつける。又五郎、切りつける。城五郎、

受けとめ、家來寄るを蹴倒し、片手に提灯にて押へる。

又五郎、寄る。城五郎、扇にて又五郎が顔を隠す。

ひやうし幕

二 幕 目

上杉館の場

葉深寺の場

役名 上杉右内秋定。上杉春太郎定政。細川奥方、瀟町。息女、彌生姫。佐々木丹右衛門。同女

房、笹尾。荒卷伴作。近藤野守之助。竹内贅宅。星合段九郎。安達與兵衛。渡邊靜馬。又五郎母、鳴海。澤井城五郎。柴野一角。

造り物、三間の所、二重舞臺、欄間、黒塗りの竹の節、半御簾つき總金襴。西手、窓、塗り骨の障子屋

體。東の方、妻戸のやうなる垣、櫻の大木。真中に、

上杉右内、兩脇に荒卷伴作、神田茂左衛門、侍ひ三

人、皆々、鉢巻廻。靜馬一人、上下にて並び、陣立

ての見得にて幕明く。法螺太鼓の遠攻め。

右内 方々。我れ、思ふ仔細あるに依つて、鎌倉葉深寺に

澤井城五郎を初め、肥近の諸士ばら、又五郎を匿まひ、

剩さへ、身が家來、丹右衛門を騙かり、又五郎が母を奪

ひ取つたる振舞ひ、言語道斷。憎くき奴原。さるに依つ

て、丹右衛門は閉門申しつけ、葉深寺を取巻き、肥近の

奴原、首を並ぶる。方々も用意してよからう。

伴作 これは、肥の御立腹尤も。未代肥近の者どもの、よ

き見せしめでござる。

茂左 ナニサマ、御尤もの儀でござりまする。

右内 イヤ靜馬、先達て中より一家中へ申し渡し、皆々斯

くの通り、物の具着せしに、汝一人禮服にて参りし段、所存あつての事か。仔細はなんと。

静馬 これは、殿様の御意に背くにはあらねども、この度城五郎、榮深寺に取籠りし事の起りは、同名勝負を、私しの意趣を以て、又五郎が討つて立退きしゆゑ、斯くの騒動。申さば、又五郎は父の仇、それしきの儀に、殿様御出馬あつては事の破れ、この儀は幾重にも私しへ仰せつけられ下さらば、又五郎、例へ鐵の内へ籠るとも、速かに討取つて御覽に入れ奉りたり存じまする。

伴作 コレ、如何に若いとて、出放題の減らず口。先達で、殿の仰せにて、丹右衛門参られてさへ、手に合はぬ附近の諸士。それゆゑに、ソレ、丹右衛門は閉門。それになんぞや、蚊蜻蛉見るやうな貴殿、ゆかぬ事。ア、こりや何か、軍が怖さに敵討ち呼はりの逃げ口上か。ア、指かれい。家中一同に陣立のその中に、のうくと上下。しつかい奉加場の世話焼を見るやうな、ハ、ハ、ハ。

静馬 ヤア伴作、詞が過ぎる。卑怯でないか。また貴殿には、お家の觀を願はるゝか。  
伴作 何がなんと。

静馬 靜謐の御代に、我れ、如きの遺恨に、御出馬あつて管領への申し譯はな。

伴作 ヤア猪口才な。すッ込んでお居やれ。

右内 兩人、待て。

静馬 ぢやと申して

右内 黙れと云は、控へて居よ。汝が詞、理ありと雖も、さほどの事存せぬ右内之助でもない。又五郎が事は格別、外に思ふ仔細あれば、是非出陣は我が方寸にある。ナニ伴作、時刻うつる。馬牽かせよ。

伴作 ハア、御家來衆、お馬の用意。

家來 ハア、。

ト云ふ。花道戸屋の内より丹右衛門。

丹右 待つた。暫く。

ト花道より丹右衛門、上下にて出る。前後半切れの捕り手四人、十手にて取巻き、花道に少々タテあへて仔細あつて御前へ行く丹右衛門。止め立てひるくと、蹴つて、蹴殺すぞ。

トつかくと右内之助が前に座す。

伴作 ヤア丹右衛門、閉門の身を以て、御前へ推参、無禮千萬。そこ立ち召され。ソレ家來衆、丹右衛門を引立て

召され。

家來 立たう。

トかゝるを、少々タテあつて投げ退け

丹右 閉門も遠慮も存じて居る丹右衛門。立たう歸れなど

とはしやらくさい。百年が二百年でも、殿に仔細申し上ぐるまで、一寸も動くものぢやござらぬ。

伴作 推參な、ソリヤ。

ト立ち上がる。

右内 丹右衛門、さほどの汝、先達て又五郎を召掛りに遣

はせし時、たせ計られて母は奪ひ取られた。

丹右 その儀は、拙者判備あつて、其まゝに罷り歸りしは、却つて事を計る方便。

右内 ヤア、ぬけ／＼と、そこ立去らぬか。アレ家來ども、

丹右衛門を引き立てよ。

家來 御意ぢや。立たう。

ト引き立てにかゝる。丹右衛門座り、立ちながらにて

見得、伴作、立ちかゝり

伴作 軍の血祭り

ト切りかける。立廻りにて丹右衛門當てる。ワンとこ

ける。

右内 其が詞を背くは、手向ひか。

丹右 ハ、ハ、ハ、神以てお手向ひは仕りませぬ。何卒、この度の御出馬は、思し召し止まりの段、只管願ひ奉

ります。

右内 遮つて、我が出馬を止める仔細は如何に。

丹右 甲冑の御姿にて御出馬あらば、足利への聞え。この所をとくと御勘辨遊ばされ下さりませうならば、有り難

う存じ奉ります。

ト花道戸屋の内より

呼び 管領の御入り。

ト右内之助、驚ろき

右内 ハテ心得ぬ管領の御入り。對面は事むづかしい。因

道より出馬せん。方々參れ。

ト内へ入らんとする。丹右衛門、静馬、引き止め

丹右 管領の御入り。有無の對面なく、御出馬あらば

静馬 足利家へ敵對給ふと申すも知れず。

丹右 是非御對面を遊ばされ、然るべう存じます。

ト兩人、止める。右内之助、思案して

右内 丹右衛門、静馬、兩人の詞尤も。此まゝにて對面

せうわい。

静馬 お聞き届け遊ばされ、有り難う存じ奉りまする。

丹右 併し、管領へ物の具にて御對面

静馬 取りも直さず君の瑕瑾。

丹右 何卒、御禮服に召し替へられて

静馬 御對面、然るべう

丹右 存じ奉りまする。

右内 尤も。管領へ對面のの上

丹右 御心に叶ひしその時には

静馬 何卒、御出馬

右内 思ひ止まる。もし又、管領の詞、心に合はずば

丹右 その時こそ御出馬

静馬 我れ／＼も御供。

右内 その詞に相違ないか。

丹右 僞はり申さば弓矢神の

右内 御罰を蒙り奉りまする。

ヤア女子ども。衣服上下。

ト女中方皆々、臺に衣服上下を乗せ、持ち出る。右内、

着替へる。その外、茂左衛門、中通りの衆、皆々着替

へる。と静馬、丹右衛門立ち寄り、遠攻めの聞き耳し

て

丹右 あの螺貝太鼓は

静馬 御家中を集むる合圖。

丹右 ハテサテ、管領の御入り、騒がしい。無用と申し渡

されよ。

静馬 畏まつてござりまする。

ト走り入る。螺貝太鼓止む。丹右衛門、あたりを見て、

伴作に活を入れる。伴作、起き上がり

伴作 なんぢや、なんの事ぢや。時間延引いたす。丹右衛

門にお構ひなくとも、早くお立ち。

ト見返し、傷りして

こりや何事でござりまする。

丹右 コレ、お身の體に魂ひがないか。管領の御入り、貴

殿も衣服を改め召され。それとも否なら勝手次第に召さ

れ。

伴作 ア、イヤ／＼、この中に我れ等ばかり、此やうな

形でゐたら、葬禮中へ練り物の入つたやうにあらう。

ト伴作、衣裳上下に着替へる。皆々出迎ふ。

丹右 管領職には、これへお通り下されませう。

ト序の舞の鳴り物にて、花道より彌生姫、白紬の着附

け、襦袢、白練りかづき。細川奥方濱町、襦袢下げ髪。お



袖、着付け、襦袢にて、三方に紙雛を載せ持ち、腰元  
も同じ形にて、三方に紙雛を載せ持ち、その外、  
腰元六人ばかり、銘々雛の道具持ち出で、花道にとま  
り、

右内 これに政元どのと思ひの外、女連れのもの有様は。

濱町 管領御川政元が名代。

右内 して、お名はな。

濱町 政元が妻、濱町と申す者でござる。

丹右 御上使様には、御苦勞千萬に存じ奉ります。

右内 イザ先づ、御座へお通り下されませう。

濱町、彌生姫、お袖、襦、その外腰元皆々並よく並ぶ。

思ひ依らざる今日の御上使、委細承はりたり存じまする。

濱町 先達て、春太郎どの、この館へ参られしと聞きしゆえ、春太郎への御上使。

右内 誰れかある。春太郎を召し連れよ。

静馬 ハア、。

ト静馬、走り行き、春太郎を連れ出る。

春太 イヤ、矢張りおりや鎌倉に居て、酒呑んで遊ぶ

のがよいわい。

右内 コリヤ、御上使なるぞ。

春太 ナニ、御上使様とな。

右内 控へよ。

春太 ハア、。

彌生 春太郎さまとは、あなたかや。

濱町 左やうでござりまする。

春太 恐れながら、さう仰しやるは、どなた様な。

濱町 東山どのの武將の姫君、彌生姫さまでござる。

右内 ナニ、彌生姫とな。

濱町 先達てお云ひ嘘けありながら、御婚禮も延引に及ぶ

ゆゑ、姫君様、くよ、とお物案じの體、見るに忍びず、

我が夫、申しつけし今日の計らひ。

彌生 不束な自ら、どうてお氣に入るまいけれど、見ぬ戀

に憧がれ、今日の今、お顔を見たら、恥しうて、嬉しい

わいなう。

そで 御道理でござりまする。私しとてもお顔を見たら、お

嬉しうござりまする。

静馬 其方は、爰へはどうして。

濱町 そちや渡邊静馬ぢやな。

静馬 左様でござりまする。

濱町 苦しうない、近うく。様子おつて、お袖が願ひに依つて、評定あつて、この度の御祝言の承はつて、譯ある様子。殊に云ひ號けとやら。これとても管領の御指圖。

ト云ふ。お袖、嬉しがる仕打ち。

そこで そんなら私しも、静馬さまと、祝言を致しますのでござりますかえ。

濱町 オ、改つた喜びやう。アノ嬉しさうな事わいなう。

そこで 申し静馬さま、早うお請け申して下さりませいな。

静馬 親人お果てなされて、未だ喪の内。どうもこの儀はお請け申されませぬ。

そこで エ、なに仰しやるぞいなア。

静馬 ぢやと云うて、早速お請けは

春太 オ、それく、この祝言すれば、跡目相續せねばならず、ア、否々。矢ッ張り鎌倉に居りまするが、私しが勝手でござりまする。

右内 コリヤく弟、控へ居やうぞ。

春太 ハア、。

濱町 お袖、欄、云ひつけた通り計らうてよからう。

兩人 ハア、。

ト兩人、三方を持ち出て、男雛を載せて春太郎、静馬の前に直し置く。

濱町 改めて管領細川政元より、心を籠めたるこの男雛、取りも直さず武將よりのこの賜物、有り難うお請け申してよからう。

右内 御上使、一通り承はりたい。委細承知は仕れども、拙者儀は別腹の弟。春太郎は本妻腹、殊に他領、それゆゑ、おへ跡目相續のお願ひ申し上げしところ、彌生姫を下し置かれんとの御意、即ちお望みに任せ正宗の刀、結納のしるしに差上げよとあるゆゑ、我が家来、渡邊頼負と申す者、所持いたすに依り、千石の加増申し付け、差上げよと云ひつけしところ、彼の又五郎、右の正宗を盗み取り、剩へ頼負を殺し立ち退きし曲者を、同苗城五郎と申す者、眠近の武士を語らひ、榮深寺に立て籠り妨げをなす。さるに依つて先達で眠近の諸士を某に下し置かれよと願ひしところに、有無の御返答もなく、推して祝言といひ、女の童に道具を持たせ、侍ひたるもの一人も見えず、餘り上杉を踏みつけたなされ方、この婚禮改めて變替へ

仕つかまつるぞ。

濱町 得心いんじんはござらぬよな。

右内 お尋たずねに及およばぬ事ことサ。

彌生 濱町はまや、さらば。

ト彌生はまや、自害じがいすると云いふ。濱町はまや押おへ

濱町 先まづ〜お待まちち遊あそばされませ。

ト留とどめる。

伴作 この祝言しゅげん、變替へんがへとは、御尤ごよともに存ぞんじまする。最前さいぜん

より爰こゝに差控さしこへ居ゐりまするは、女め雛ひな男をとこ雛ひな、祝言しゅげんなど、

上杉かみすぎの者ものどもを、うつけ者ものになさるゝ上使じやうし。

右内 お用もちひある晧近はろぢの諸士しよし、首くびを並ならべてその上うへで、御祝ごしゅ

言いいたさせませう。

濱町 さう仰おほしやると、この姫君ひめぎみは、御生害ごしやがいをなさるゝが

や。

彌生 南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

トまた自害じがいせうとする。

濱町 マア〜お待まちちなされませ。

彌生 放はなして殺ころして下くだされいなう。

濱町 御生害ごしやがいには及およびませぬ。御生害遊ごしやがいあそばす姫君ひめぎみは、外ほかに

ござりますわいなア。

彌生 外ほかにあるとわや。

濱町 即すなはち、コレ、この姫君ひめぎみの御生害ごしやがいでござりますわいな。

ナ。

ト女雛めひなを取り、懐劍くわいけんにて突つかうとする。

伴作 その雛ひなの生害しやがいとは、ハ、ハ、ハ、。

濱町 朝あける其方そのちは、雛祭ひなまつりの事こと、知しつてゐるか。

伴作 知しれた事こと、内裡うちぢの形かたちを祭まつりるゆゑサ。

濱町 大内おおいちに雛祭ひなまつりはないか。

伴作 サア、それは。

濱町 ホ、愚人おろちんに論ろんは無益むえきなれども、雛祭ひなまつりの譯わけ、云い

うて聞きかさう。光源氏ひかりのみこと、若菜わかなの卷まきに、紫むらさの上うへ、天兒あまのこを作つく

り給たまふとある。その天兒あまのこといふは、いま世よに云いふ奉公雛ほうこうひな

の事こと。萬よろずの悪わるしき事ことを、これに負おはせて禍わざはひを避よくる。

また光源氏ひかりのみこと、流離りゅうりの御時ごとき、船ふねに事々ことごとしき人形にんがたを乗のせて流なが

す。コレ、須磨すまの御被ごひといふ雛遊ひなあそびあるものゝ事こと。紙かみの

人ひとを雛ひなと名なづけ、その身に當あたる悪わるしき事ことを、これに負おは

せて避よくるところの雛祭ひなまつり、この故實こじつを以もつて、姫君ひめぎみの御ご

身替みかりに立たつる雛ひなの生害しやがい、なんと、これでも自みづから誤あやま

りか。

伴作 サアそれは。



の 演 再





繪 番 附

濱町 なんと。

伴作 ても、むづかしい事でござりまする。

彌生 そんならその雛を。自らが身に替へて

濱町 今こそ、この姫君の御生害

ト女雛を懐劍にて突く。

この死骸は春太郎、其方へ下し置かるゝ。

伴作 イヤ、モウ、そんな死骸は、栗島總代参りに、遣は

さるゝがようござらう。

春太 この女雛の中の書き物は。

ト雛の中の書き物を出す。

濱町 姫君の御書置、とくと披見されい。

右内 仔細ぞあらん。これへ持て。

春太 ハア、。

ト右内が前に置く。右内、披き見て

右内 「一つ、先達て足利の武將より仰せ下さるゝ條、春太

郎定政、上杉の跡目相續の御教書、下し置かれしところ、

紛失の由、上聞に達し候ふ上は、右の御教書、詮議すべ

く、萬一出でぬに於ては、上杉の家の瑕瑾たるべし、月

日……」すりや、先達て、御教書下し置かれしとな。コ

リヤ〜弟、仔細はなんと〜。

春太 この申し譯は我が身の放埒。申し譯はこの通り。

ト切腹せんとする。丹右衛門、止めて

丹右 御前には、暫らくお待ち下されませう。恐れながら、

この御身持ち放埒は、跡目御相續下されまい爲でござり

ませうがや。

春太 何がなんと。

丹右 この丹右衛門、見付けた黒星、なんと違ひはござり

ますまいがな。

春太 それゆゑのこの切腹。

トまた切腹せんとする。

静馬 暫らくお待ち下されませう。數ならねども、この静

馬。

ト静馬、切腹せんとする。丹右衛門、止めて

丹右 其方達の身の上の事ゆゑ、殿の御無念は、眼にさへ

ざらぬか。

静馬 サア、それゆゑの切腹。

丹右 御教書の詮議第一に、心を碎く丹右衛門、俱に天の

戴かぬ、大切なる親の敵を持ちながら、うつら〜とす

る場所でない。御前様にも、先づ〜お鎮まりあられま

せう。急ぐ所でない。マア〜、待つたがえいわいや

い。

春太 すりや、詮議の目當といふは、

右内 正しくこれも又五郎が所爲に極まつた。

濱町 サア、その又五郎を匿まひ置く城五郎、足利肥近の

武士、罪道とは知りながら、身に迫り、必死に及ばゞ、

御教書を引續き捨てんも計られず。

春太 さある時には、當家の聖璣。

濱町 御教書出でざるその時は、例へ御家門なればとて、

蟲虱があつては天の下が政道は暗闇。それゆゑ、この如

く、誰に准へて咎めの御書。

春太 表向きよりこの如くの、お咎めの御書下らば、

右内 上杉の滅亡。

春太 我が身の上。

濱町 サア、そこを思うて何事も。

欄 外の聞えを思し召して、誰察りの御祝儀は、管領

戦のお情かなでござりませうがな。

濱町 武將の御身も、その事ばかりか、もしもの事あるなら

ば、この女誰の戦れ廻ける事もあらうかとの御悲しみ。

思ひあまつて今日のこの祝言、  
右内 その儀を存せぬ右内之助にもあらねども、餘りと申

せば。

濱町 その爲に肥近の者どもへ、又五郎を渡せとある足利

家よりの御書。これとても、春太郎どのへ引出物。

春太 すりや、この御書を引出とな。

丹右 又五郎を召捕り、榮深寺に籠りる肥近の奴輩、片

ツ端から、降参させてお目にかけてませう。

伴作 イヤ、この使ひは、貴殿はやられぬ。

丹右 そりや、なぜな。

伴作 ハテ、一旦又五郎と縁を組んだ其方、なか／＼この

使ひ、合點が参らぬ。

丹右 その爲、縁切つて他人になつた。

伴作 縁を切らうが切るまいが、この使ひは。

濱町 イ、ヤ、この使ひは丹右衛門へ申し付ける。

丹右 ハア、。

ト濱町が前へ出る。

濱町 澤井股五郎を謀らふは、其方が胸にある。

ト丹右衛門へ、濱町、御書を渡す。

丹右 委細畏まつてござりまする。

伴作 貴殿、見事、御書の詮議するかや。  
丹右 事を糺して立歸る。

伴作 又五郎を召捕るか。

丹右 引ッ縛つて、連れ歸るか。

静馬 召捕らるゝ、又五郎は、天下の科人、親の敵と名乗つて討たれぬ仕儀。何事も身に引請けた。さうぢや。

ト静馬、腹切らうとする。丹右衛門、脇差を取り

丹右 切腹は相叶はぬ。

静馬 切腹も叶ひませぬか。

丹右 正宗の刀差上げねば、草葉の蔭の父親負、末代までの不忠の悪名は免がれぬがや。

静馬 サア、それは。

濱町 もし死ぬると一決せば、景前渡し置いたる男雛

ト云ふ。静馬、以前の雛を取り

静馬 丙ぞゆかしきこの男雛。

濱町 その切腹もまだ早い。

静馬 すりや、正宗を差上ぐるまでは。

丹右 生は難し、死は易し。例へ天下の科人なりとも、又五郎を親の敵と名乗つて討たす時節は、この丹右衛門が胸にある。急ぐ所でない。死急ぎする人ではあるわい。

トちん／＼と六ツ時計を打つ。

伴作 ありや六ツの時計。

右内 九ツの刻限延引に及ば、軍勢を以て押寄せさするぞ。

濱町 その時は、上杉の滅亡。

彌生 自らも、生きては居ぬぞや。

丹右 オ、恐れながら、御祝言いたさせまする。

右内 一刻も早く。

丹右 ハア。家來ども、續け。

ト丹右衛門、股立ち取り、向うへ走り入る。静かなる

めりやすくなる。

右内 皆の者、次へ參れ。

皆々 ハア。委細畏まり奉りましてござります。

ト濱町、彌生姫、下へ下りる。皆々よろしく並ぶ。

濱町 姫居様には、春太郎どのと諸共にナ。

彌生 兎角、よいやりに頼むぞや。

ト恥かしき仕打ち。

濱町 吉左右待つ間の今日からは、戀しきゆかしい奥の一

間、兩人よろしく計らうてよからう。

柵 畏まりましたござります。

そこで サア、お立ちあられませう。

ト唄になり、春太郎、彌生姫を伴ひ、お袖、柵、静



馬、少し色事の仕打ち。  
濱町 吉左右衛門も今暫し。申し姫君様、奥でナ、よい夢

を御覽にませ。

ト彌平姫、春太郎を見て、恥かしき仕打ち、

右内 石内之助は生死の境。

濱町 御定どの。

右内 先づくお入りあらませう。

ト唄になり、皆々奥へ入る。右内、随分静かに、疵の

痛みにて立ちかされる仕打ち、刀を杖に突き、空を詠め、

キツとなり、指にて星を繰る仕打ち。

今宵の知死期は

トこなしにて、チヨン／＼にて返し。ト唐樂のやうな

鳴り響になる。ト舞臺先より一面に旗をセリ上げる。

この内に道具廻る。

造り物、榮深寺の懸。二重舞臺、見付け障子屋敷、

臺中は大瓦燵口、前に松の幹など取合せよろしく、

真中に鳴海、形にて長刀を杖に突き、片手に珠

華を爪繰り居る。近藤野守の助、白無垢の大廣袖、

丸衿けの帯、鉢巻してゐる。下の段に星合段九郎、

竹内贅宅、安達與兵衛、衣裳上下に小手腰當、見事に並みある。但し右の鳴り物にて道具とまる。

野守 ナニ、オ、上杉館の奴原、又五郎を匿まひ返さぬ

ゆゑ、その儀を根葉に持ち、この寺へ押し寄せする由、何

條上杉づれのべろ／＼武士、今にても寄せ來らば、逸散

に追ひ下し、白海吹かせ日頃の廣言、一時に靈氣吐かせ

てくれん。いづれも、左様ではござらぬか。

段九 御意の通り、兼ね／＼仲の悪い上杉方、まさかの時

にも一方を防ぎ、命ありだけ切り死でござる。

與兵 一旦師匠と頼んだる又五郎どの、一生の御難儀、主

従が一命は塵埃と存じ居ります。

贅宅 各々の仰せの通り、この處の騒動、我れ／＼も同心

いたせし事なれば、上杉の討手を、今や／＼と相得つて

居りますするてや。

野守 方々、味方の諸武士は、如何程でござるなり。

贅宅 凡そ三百人の餘はござります。

段九 この機に乗つて、寄せ手を引受け、蚊蟻蜂めらを皆

殺しにしてお目にかけう。

與兵 すはと云はゞ合圍の手配り、狼火を上ぐれば十重二

十重に取巻き、手筈ちつともお氣遣ひなされぬがよろこ

ざる。

野守 神妙々々。各々は云ふに及ばず、一味の銘々、一生の曠れ勝負なれば、猶この上ながら油断なく致されてよからう。

段九 その儀は、ちつともお氣遣ひなされますな。

奥兵 此方とても同じ事、違背はござらぬてや。

贅宅 左様でござる。これしきの端下仕事。イヤハヤ、拙者などは、空腹に茶漬喰ふより、心安い事でござる。

段九 日頃大名顔するべら坊め、馬上に乗つて駆け向は、引摺り下ろして、青鼻汁たらさせてお目にかけり。

贅宅 その儀はちつとも、お氣遣ひなされた。

鳴海 各々方様の御懇切、作又五郎が儀を、それ程までに思し召して下されんのお志し、忝なうござります。

野守 トニ老母、例へ如何やうの事あればとて、股五郎どのを渡しては、肥近の武士が一分立たず。さるに依つてこの出立ち。老母、左やうではござらぬか。

鳴海 何がさて、方々様さへ其やうに、忝又五郎が事思し召し下さるゝに、親の身ぢやもの、それに如才がござら

るか。骨のやうになつたこの婆なれど、心は鑽石、なかなか上杉方へ渡す事ぢやござりませぬ。まだく減多に、

よほけるやうな事ぢやござりませぬ。

野守 ホウ、流石は又左衛門どの、後家、又五郎どのの阿母ほどある。出かさつしやれた。

呼び 管領よりの御上使。

野守 ナニ、管領の上使とは、方々、お聞きなされたか。

察するところに、又五郎を相濟せとの上使ならん。面白

い。イデ、生死の勝負仕らん。方々、用意召されい。

贅宅 管領とて、なんの事がある。

奥兵 踏みつけて首を刎ねてお目にかけり。

段九 上使ぐるめに再びは歸しませぬ。

贅宅 御尤も。然らば上使、出迎ひに及ばず。

段九 押しつけて、首刎ねませう。

三人 ござれ。

ト三人行かうとする。内より澤井城五郎。

城五 待つた暫らく、澤井城五郎が申し入れたい仔細あり、暫らく。

三人 ナニ、城五郎どのとな。

ト城五郎、奥より出る。

野守 城五郎どの、なぜお止めなさるゝ。

城五 拙者がお止め申すは、即ち、各々のお爲でござる。

野守 足利の管領細川よりの上使、どうした事と云はいでも知れた又五郎どのの事。先達で佐々木丹右衛門、上杉よりの上使として来れども、老母を捕られ、空しく歸る。すりや、上杉の威光では叶はぬと思ひ、管領細川の威を借つて、取返しに來たは必定、それを追ひ拂はうといふを、お止めなされ、貴公の御所存はな。

城五 僱へ、貴公の僱せの遣り、管領より、右又五郎を渡せとある上使なりとも、一旦上使を引請け、委細具さに聞き届けし上、萬一、外やうの事ならば、早まつて武名を汚さるゝか、是非また又五郎を引渡せとあらば、恨みもたき、管領足利どののへ巧を引き、主に敵野ふ怨敵なぞと、謀略人の名を取り、道徳義にかゝつても大事ござらぬか。そこを存じてお止め申すこの城五郎。マア、お鎮まりなされい。

鳴海 左様ならば、上使を引請けて野守 もし又五郎どのを渡せとあらば、その時、貴殿は、のめ、と上使の手に渡さるゝか。

皆々 御所存は、なんとでござるな。

城五 その時は、この城五郎、思案一決いたす。近日今にも上杉にかたまり、管領の上使の威を頭に持つて取圍ま

ば、一戦に馳せ向ひ、上使一味の奴原は云ふに及ばず、管領ぐるめ、たゞ一討ち。

鳴海 して又、仲又五郎は。

城五 この地を早く落す所存。

野守 すりや、又五郎どのを。

城五 彼れが身は安穩サ。

野守 拙者もそれで落ちついたてや。

城五 ナニ後室、かね、申すは爰の事。先達で又五郎を返せとあつて、槍にせし後室を助け返し、又五郎と代へ差上げよと、参りし使ひは丹右衛門。諺り事に乗り、人質の後室まで、奪ひしゆゑにこそ、今日の管領の上使。

サア、そこが彼の一つの思案、血を以て蕩らし、舌頭を以て云ひほぐし、兎角騙すに手なし。例へ管領の上使なりとも、また美味を取拉ぐ勢ひありとも、鬼神をも和らぐるは和歌の徳……サア、命たに心に叶ふものならば、などか別れの悲しかるらん……サア、などか別れの悲しかるらん。老母、合點がゆきましましたか。サア、いづれも奥へ参り、上使設けの用意なされ。後室、後程お目にかかりませう。

ト唄になり、野守之助、奥兵衛、段九郎、贅宅みなみ

な奥へ入る。ト鳴海残り、こなしあつて

鳴海 いま城五郎の云はれし古歌は、どうした心で……あらうなア。命だに心に叶ふものならば、などか別れの悲しかるらん……この歌は朗詠のしろめの餞別。すりや、この暮が……命を餞別にせいといふ事か。ハテナア……管領よりの御上使といふは、體かに筆丹右衛門どの……娘々。

ト奥より笹尾、衣裳、襦袢にて出る。

笹尾 アイ、御用でござりまするか。

鳴海 コレ、こなたに喜ばす事があるわいなう。

笹尾 この間には、承はりませぬお詞、喜ぶ事とは、なんでござります。

鳴海 サイナウ、其方が逢ひたる思やる筈の丹右衛門どのが、いま爰へ上使に見えるわいなう。

笹尾 なんと仰しやる。丹右衛門どのが見えまするかえ。鳴海 見えるとも、そこで其方を呼び出した心は、上

使取持ちの役を、わが身に勤めさせ、久し振りの女夫合ひ、……アイヤ、離別しられて戻つた其方なれば、夫婦合ひでなければ、そこを其方が、どうぞおかしう云うて、合點か。それを又、今までのやうに、構へて心安立

てを出すまいぞ。いよく使者設けの役、勤めてたまや。

笹尾 アノ、母さんの仰しやる事わいなア。この奏者、勤めいで、なんと致しませうぞいなア。

鳴海 オ、あの嬉しさうな顔わいなう。その嬉しさうな顔を、上使様へ見せたり、又見られたり……ホ、ホ、嬉しからう。

笹尾 これが嬉しうなうて、なんと致しませう。

鳴海 そんなら必らず今云うた通り、随分面白うおかしう云うて、取持つが大事ぢや。おれは奥へ行く程に、合點か。ヤレ嬉しや、嬉しや。

ト奥へ入る。

笹尾 コレナア母さん、わたし一人かいなア。どうやら恥かしいわいなア。サア、嬉し事になつた……なんぢややら、この間は泣いてばかり居たに依つて、鬢さ

へよう鬢はなんだ。  
ト鬢を直したり、いろ／＼する。

このマア、筈の埃わいの。

ト又いろ／＼櫛、筈を拭く。

サア、爰へござんしたら、なんと云はうぞ……マア、



なんにも外の事は云ずに、顔見たら、ようこなさんは、科もないわたしを離別して、外に面白い事を拵らへて居やしやんすであらうと云ふ。定めしいつものやうに怖い顔して、睨みつける所を……そこで其やうな怖い顔をして、笑はさきに拵かぬ……イヤ、こんな事云うてゐるうちに、出遣ひが運うなつては。

ト花道の中へとんと座り、いろ／＼こなしあるべし。

ア、とんと、どうやら恥かしい事ぢや。

ト笹尾、いろ／＼こなしあり。ト丹右衛門、衣裳上下にて出る。

丹右 管領よりの上使。

ト笹尾、湧りして、いろ／＼うろたへる。ト丹右衛門、なんとも云はず、二重舞臺へ上る。

管領よりの上使。

ト丹右衛門、笹尾と顔見合せ

取次ぎの役人は、われか。

ト笹尾、うづくする。

イヤサ、取次ぎの役人は、われか。

笹尾 ハイ、左様ぢやさうにござります。

ト丹右衛門、下に居る。ト笹尾、煙草盆をソツと、丹右衛門が前に置く。丹右衛門、澁面顔して煙草盆を突きやる。

あなたさんは、いつも煙草お上がりなさるゝに。

ト丹右衛門、ケツと睨める。

今日は、お嫌ひなさるゝさうな。

ト茶碗を茶臺に載せ、おづ／＼出る。丹右衛門が側へ行き、ソツと差出す。また睨む。笹尾、飛び退き慄ひ泣く。茶碗、茶臺ともに落す。

丹右 コリヤ、者ども居らぬか。奏者の役人は居らぬか。

ト次ぐ者はないか。

ト笹尾、ちやつと泣きやみ

笹尾 ハイ／＼、これは管領職よりの御上使、御苦勞千萬に存じます。委細の儀は恐れながら、私しへ仰せ聞ければ下さりませうならば、有り難う存じませう。

丹右 黙れ。大切な儀を女童に云はるか。この内に男體したもの居らぬか。イヤ、取次ぎの役人に女を使ふは、

エ、／＼、聞えた／＼。こりや風を喰うて、裏道から逃げたか。侍ひたるべき者は居らぬか。管領足利の上使は、

將軍も同然。それに何ぞや、馬鹿々々しい。わいら如き

に云ひ聞かす事でない。馬鹿な事を。よし、奥へ踏  
み込み、又五郎めを。

ト丹右衛門、奥へ駆け入らうとする。笹尾、丹右衛門  
が刀の鑓を見得よく捕へ

笹尾 そりや開えぬ丹右衛門どの。こなさん奥へ行て、ど  
うさしやんす。

丹右 イヤ、一つ穴の狐女郎め。邪魔ひろくと蹴殺すぞ。  
うぬ、又五郎めに繩打つて。

笹尾 例へ切られうが、殺されうが、兄弟一つでない身の  
云ひ譯を。

丹右 イヤ面倒な。そこ退け。

ト少々立廻りあつてとめる。障子の中より  
鳴海 澤井又五郎、尋常にそれへ參つて繩か、らう。

丹右 ナニ、股五郎とな。われを。

ト丹右衛門、行かうとする。

鳴尾 コレ、待つて下さんせ。

丹右 なぞ止める。

笹尾 もしや、お前の身の上に、凶事があつたその時は。

丹右 小癪な。そこ退け。

トまた立廻りあつて、見得よくとめる。ト奥より母鳴

海の聲にて

鳴海 又五郎に繩かけて渡さうとは。

ト内より鳴海、三方、長柄を携へ  
相に相生の松こそめでたかりけれ。

丹右 イヤ、役にも立たぬ祝儀の小論。そこ退け。  
鳴海 御尤も千萬。さりながら、この母が祝儀申し入れま

したは、餘の儀でござらぬ。又五郎には繩打つてお渡し  
申しませうが、其許様に、ちつとお願ひがござりまする  
が。

丹右 この場に及んで、某へ願ひとは。

鳴海 お聞き届け下されうかな。

丹右 そりや、様子聞かいても知れてある。又五郎が命  
助けてくれと云ふ事であらうが、そりや罷りならぬ。早

く繩ぶつて渡しやれ、サア。

鳴海 委細長まりましてござります。併し、只今お願ひ申  
し上げまするは、股五郎が命のお願ひでもなし、元より

暫らくの延引のお願ひの筋でもござりませぬが、お聞き  
届け下されませうか。

笹尾 母さんのお願ひ、何かは知らねど、お聞きなされて  
下さりませ。

丹右 サア、云ふ事あらば、キリ／＼云つてしまはつしやれ。

鳴海 外の事でもござりませぬ。娘笹尾が儀。この度、こなた様と離別の別れ、元はと云へば、矢張り憎又五郎ゆゑ、悪人を捕へて見れば我が子とやら、その悪道な又五郎めは、只今縛り上げてお手渡し申しませうが、爰が一つのお願ひ。あの娘笹尾、改めて祝言の杯なされて下さらば、お嬉しう存じまする。

丹右 何事かと思へば馬鹿々々しい。女房に暇くれしも、又五郎に縁あるから。又五郎を此方へ手渡しませぬその先に、祝言などは嫌はらしい。くどう云やるな、聞く耳がないぞ。ハテ、たわけた老人ぢやいやい。

鳴海 そんなら、どのやうに申しても。

丹右 ならぬ／＼。

鳴海 すりや、此やうに申しても、お聞入れはござりませぬか。ほんに聞き届けは……この母がお願ひ……お聞きなされて、どのやうに申しても、祝言なりませぬか、ハア……思ひ出すも一昔、ほんに憎への通り、恥を云はねば理が聞えぬと、元佐しは、あの子の處には乳母でござりまする。あの子の母御様は、大病の枕元へ私しをお召

しなされ、コリヤ乳母よ、おれはどうで今度の病氣が出立ちであらう。もし、おれが死んだらば、必らずこの子を頼むぞよと、くれ／＼とのお頼み。ア、お氣遣ひなされますな、私しが目が黒いうちは、あのお子様に怪我はさせませぬ、随分大切に致しまして、御成人の後は、よい習様を取つて、王のやうな和子様をお目にかかせませうと云うたればなア、奥様の仰しやるには、世上の諺に、草葉の蔭から見ると云ふけれど、娘が産んだ初孫を、どうぞこの世で見たいわいやいと仰しやる。おいとしばや、その夜の明け方に、こつくりと御臨終。それからわたしがあのお子を、猶いやましにいとしばさ、寐ても起きても大切に育て上げ、段々と成人なさるゝにつけ、茶の湯、縫ひ針琴三味線、手習ひ香のきゝやうまで、及ばぬながらこの母が、お世話申すも皆奥様への忠義。眞實が届いたやら、親旦那又左衛門さまのお手がかゝつて引き上げられ、それより儲けしがあの又五郎。氏素性は争はれぬもの、胤は正しき胤なれど、賤しき母より生れしゆゑ、心悪道。その又五郎ゆゑ飽かぬ離別、未來にござる奥様へ、なんと云ひ譯なるものぞ。それぢやに依つてこのお頼み。コレ申し、丹右衛門さま、武士は物の哀れを知

るぞかし。爰の所を聞き分けて、どうぞ笹尾と祝言して下され。コレ、母が手を合して拜みまする。又五郎をお渡し申さば、直ぐに死ぬるこの婆さある時にはこの娘、親もなし兄弟もなし。三千世界に便りにする者は、こなた譲り外にはない。どうぞ聞き分けて下さりませいなう。

ト泣く。

笹尾 段々のお物語り。聞く程辛い我が身の上。義理ある弟、殺すまいと思へば、夫の武士が立たず、義理と情に絡まれたわたしが身の上。母さん、お前に別れてなんとせう。わたしも生きては居りませぬ。死出の山も三途の川も、一緒に連れて行て下さんせ。お前ばかり死なりとは聞えぬ。そりや屬然ぢや、屬怨でござんすわいなア。

鳴海 そんなら、こなたも、この願ひが叶はぬならば、死んでたもるか。

笹尾 夫に見捨てられたこの身、なに楽しみに長らへて居りませう……母さん。

鳴海

娘。

ト兩人、手を取り

兩人 味氣ない世の成行きぢやなア。

ト大泣き。ト鳴海、キツとなつて

鳴海 所詮、願ひの叶はぬ上からは、べんくと生きてるやうか。娘。

笹尾 母さん。

兩人 南無阿彌陀佛。

ト兩人、丹右衛門が脇差を抜かうとする。丹右衛門、

とめて

丹右 誡や、唐土珠崖の母子、玉を携へ關を越えしが、この科は我れなるか、イヤ、我れなりと互ひに争ひしかば、關番その志しを感じ、その科を棄すとある。その如く互ひに義理の眞實心、聞きつけて、只今觀望いたしてくれう、と云ひたいものなれど、また又五郎を召捕らざれば、眞の杯は叶はぬ。眞似ばかりはいたしてくれう。

鳴海 そんなら、祝言の眞似をなされて下されうか。コレ、娘、丹右衛門どのが祝言をしてやらうと云はつしやるが嬉しいか。

笹尾 これが嬉しいなうて、なんと致しませう。これといふも母さんのお庇。エ、忝なうござります。

鳴海 又もや御意の變らぬうちに、祝言の儀式取行はん、



ハテナア。

トこなしあつて

それよ。不束なこの婆が手前なれど、夫婦の中も井戸茶碗、互ひの心も服加減、母が膝にあやからせ、友白髪まで儀を讀ひ、一服立て、濃茶の杯。

ト鳴海立ち、圍ひの方へ行く。静かなる合ひ方。鳴海、圍ひの障子開け、臺子にかゝり、茶を立てる。

笹尾 母さんの、あの手前のお茶が濟んだら、直ぐに義理ある又五郎を。

トこなしあるべし。

鳴海 何もくどく云ふ事はない。道ツつけ祝言の杯を

させませうぞや。

ト鳴海、茶を立て、圍ひより出て、静々と丹右衛門が前へ座り、こなしある。ト笹尾へ渡す。

笹尾 母さん、御苦勞に存じまする。

鳴海 サア、早う飲んで、聲どのへさしやいなう。

ト笹尾、丹右衛門が心をかれ、飲みかぬるこなし、いろく。鳴海、笹尾が氣を汲み

こりや、母が氣が付きませなんだ。かゝる騒動の初り、申さば敵中なれば、もし毒藥もあらんかとの疑ひ、尤も

尤も、茶の湯に毒味はなけれども、亭主の馳走振り。ちよつと口を添へませう。

ト鳴海、茶碗取り、一口呑む。笹尾へ廻す。笹尾、こなしあつて、茶碗を取り、二口呑み、丹右衛門へ廻す。

サア、聲どの、祝言の學びの杯、疾く受けて下さりませ。

ト丹右衛門、茶を飲む。

ホ、ゝ、めでたいく、母がこの罇枯れ聲で、祝言を祝ひませう。千秋萬歳の千箱の玉を奉る。

ト此うち、丹右衛門、笹尾、毒藥の廻りしこなしにて、いろく苦しき思ひ入れ

丹右 今この茶を飲むより早く、五臓六腑は憤亂して、しんほうらくを貫きしは、さては。

笹尾 ア、術ない。苦しいわいなう。

ト此うち、鳴海、ニコく笑うてゐる。ト丹右衛門、笹尾を捕へ

丹右 エ、畜生めが、よくも親子云ひ合せ、身に毒を與へたなア。

ト笹尾が首筋取つて、キツと見る。此うち笹尾、始終

苦しき思ひ入れ。

總身はんしよくして、しこんのはみだし、うなみを貫き、てんかんして苦しむは、さては其方も毒薬を喰うたな。

ト此うち、鳴海も毒に中り、苦しむ思ひ入れ。

鳴海 ハ、ハ、ハ、ハ、ハテ、心よやなア。おのれら二人を斯うせう爲、最前からいろ／＼と、憂ひに洗み見たればこそ、よくも一杯喰うたなア。そのみならず慾張つて、澤山に喰うたな。其やうに躁いても、さう喰ひ込んだらもう叶はぬ。おのれらに喰はさうばつかりに、この婆が毒味して、おれが命を餌にかひ、うぬらを殺す我が計らひ。生さぬ仲のおのれ、なんの可愛かる。それに連れ添ふ聲丹右衛門、又五郎が爲には命の仇、我が子を助けんばつかりに、命を捨て、邪魔になる、おのれら二人をしまふのぢや。さう心得て、くたばつてしまへ。

ト長刀、杖に突き、思ひ入れ。

笹尾 エ、こなさんはなう。ようも／＼其やうな酷い事が云はるゝなう。茲な鬼婆、義理も法も辨まへぬ畜生、四つ足人非人。エ、こなさんはなう。

鳴海 何を世迷言を吐かす。今時に義理立てするやうな、時代の合はぬ婆ぢやないわい。

丹右 エ、口惜しや、女童にやす／＼と、騙かれしか。

ト釣リ鐘ゴンと突く。ト丹右衛門、キツとなり

あの鐘は九ツ。最早主人も、この寺へ御出馬あらば、上杉のお家は斷絶。エ、／＼／＼、よくも武運に盡き果てしか。エ、／＼／＼、無念なア。

ト奥より與兵衛、段九郎走り出て

兩人 丹右衛門、うぬを。

ト丹右衛門に切つてかゝる。三人大々テ。此うち笹尾、

ウンとこける。鳴海、よろぼひ／＼右の鐵砲を持ち、

丹右衛門を打たんと窺ふ。ト、丹右衛門、兩人を切り

殺す。ト件の鐵砲をボンと打つ。丹右衛門、ウンとこ

ける。鳴海控と後に居る。右鐵砲の玉、松に中り、松

より狼火上がる。奥より城五郎、靜々出て、鳴海に向

ひ、思ひ入れあつて

城五 ホ、ハ、出かされし鳴海どの。いしくも謀られし。

手柄々々。

鳴海 約束の通り、丹右衛門が持參せし、管領よりの御教

書、まんまと此方へ奪ひ取りました。して又五郎は。

城五 裏道より女乗り物に乗せて、落しました。

鳴海 して、落ちつく所は。

城五 參州と心ざし、落しました。

鳴海 エ、嬉しや。併し、道の程が覺東ない。

城五 それは氣遣ひ致されな。竹内宮宅、近藤野守の助、

その外手勢二十三人ばかり付けやつたれば、氣遣ひない。

鳴海 へ、忝ない。

城五 某、大望成就せば、又五郎は大名に取り立てる。

これを未來へ土着にして、潔よく臨終せられよ。

鳴海 して又、大望と仰しやるが、その大望の様子は。

ト城五郎、懐中より連判狀出し

城五 一味徒黨の連判狀。

ト出して見せる。鳴海取つて

鳴海 こりや、誰か一味の連判狀。

城五 いっぞや、鎌倉に於て、上杉春太郎に下し置かるゝ安

堵の御教書。荒卷伴作に云ひつけ、奪ひ取らせし上杉の

障目の御教書。

ト鳴海へ見せる。鳴海取つて

鳴海 斯程まで仕込まれし、其許の本名は。

城五 身共こそは、山名が障目、柴野一角と申す者サ。

鳴海 さてこそな。その又柴野一角どのが、なぜ又、澤井

の家には養子に來たぞ。

城五 それこそは我が計略。又左衛門が縁を求め、近寄ら

ん爲サ。

トこの臺詞のうち、鳴海、右の三種、連判狀の紐にて、しつかりと括り

鳴海 さてこそなア。これ取らうばかりぢや。舞どの、ソ

レ。

ト三種ながら、抛りやる。丹右衛門、笹尾起きる。丹

右衛門、城五郎に詰めかけ

丹右 柴野一角、覺悟せい。

ト黒装束の侍ひ、鐵砲を持ち出て

侍ひ 動くな。

ト鐵砲構へる。

城五 小癩な奴の。

丹右 其方を見出さう爲はつかりに、いろくど心を碎き

鳴海 親子三人が命を餌にかひ

笹尾 まんまと見出した夫の忠義。

丹右 最早遁がれぬ柴野一角。尋常に

三人 切腹々々。

城五 エ、口惜しやなア。燒鳥婆めが計略に陥つたるか。

エ、くくく。無念やな。

丹右 斯く八方を取巻いたれば、汝が體はこちらの物。細言云はずと、くたばつてしまへ。

城五 例へ汝等如きが取巻くとも、一方を切り抜け、汝等一々眼に物見せる。覺悟せい。

丹右 ソリヤ侍ひ 動くな。

城五 なにを。ト皆々、見得になる。チヨンくにて、道具まはる。

造り物、元の道具へ戻る。ト右内、壘折にて疵の痛みの仕打ち。曲象にもたれ、春太郎、静馬、介抱してゐる。彌生姫、濱町、お袖、桐、附き添ひ居並びゐる。

静馬 殿様、お心を慥かにお持ち下されませう。

右内 丹右衛門は、まだ歸らぬか。

静馬 まだ歸られませぬ。

右内 ハテナア。延引遅參は心得ぬ。ソレ、遠見申しつけい。

春太 ハア、ソレ、家來ども、遠見々々。

家四 ハア、。

ト四人、花道へ走り行く。

右内 丹右衛門、歸り遅參は、十が九つ上杉の家の斷絶、

ハテ、無念やなア。

ト遠見、走り戻り

四人 ハア、申し上げます。丹右衛門どの、早打ちにて、只今これへ。

早打 エイ／＼エ、エイ／＼エ。

ト數多の人員、乗り物に細引を付け、引き来る。本舞臺へ乗り物据ゑる。丹右衛門、鉾巻にて出て俯向けになる。

丹右衛門どの、殿様の御前、氣を慥かにお持ちなされませ。

ト云ふ。丹右衛門、キツとなり、キヨロキヨロとする。

右内 丹右衛門か。

丹右 殿様でござりまするか。

右内 又五郎を召捕つたか。どうぢや／＼。

ト苦しき仕打ち。

丹右 又五郎儀は、老母が忠義に依つて、據なく見遁がし、



即ち、御教書並びに謀叛徒黨の連判。

ト差出す。右内、手に取り

右内 して謀叛とは、ナ、何者。

丹右 澤井城五郎と申すは假の名、誠は柴野一角。

濱町 その一角は、足利上杉兩家へ仇ある者。

右内 すりや、いつぞや鎌倉の松原にて、管領と思ひ、某

が乗り物へ鐵砲を打ちかけし曲者。

丹右 即ち一角を、老母が忠死に依つて見出し、詰め腹切

らせしが、拙者とてもその計畧の爲に、毒藥の苦しみ。

右内 して、首討つたか。

丹右 御實檢下されませう、

ト城五郎が首を風呂敷包みより出し、右内が前に置く。

右内之助、首をキツと見て喜び、がつくりとする仕打ち。

ち。

右内 ホ、出かした。手柄々々。

濱町 して、連判の姓名は誰れ。

丹右 斯くの通り。

ト連判を披く。

伴作 それ見られたりや、破れかぶれぢや。

ト伴作出て、丹右衛門に切つてかゝる。立廻りにて、

丹右衛門、伴作を當てる。伴作こける。

丹右 連判の初筆は澤井又五郎。

ト連判狀を大火鉢へ打ち込む。炎々と燃える。

静馬 詮議の手が、りとなる連判、なぜ火申なされたな。

丹右 尤も。この連判を此ま、置けば、又五郎は謀叛

となつて天下の科人。そこを思つて焼き捨てしは、其方

に敵が討たせたさ。まつた見廻がせしもその心。殿様へ

は不忠の段々、御慈悲の上、幾重にも御免下さりませ

う。

春太 丹右衛門が忠義に依つて、御教書再び手に入るから

は、上杉の家は萬々歳。

濱町 オ、それ、姫君様と春太郎さま、御婚禮相濟む

上は、舟岡の所領を申し下し、足利の御家門と仰せ出だ

され、今日よりは足利春太郎定政さま。

春太 この上もなき御恵み。

右内 すりや、上杉の跡目の儀は。

濱町 三光丸へ別條なく、跡目仰せ付けらるゝ。

右内 重ね、有り難う存じ奉ります。

春太 どこもかも納まつて、此やうな嬉しい事はなないわいなう。

濱町 ソレ静馬、今こそ最前渡した雛の切腹。

静馬 ハア、誠に。

ト脇差にて雛を切る。

ヤア、この一通は。

ト披く。

ナニ〜「渡邊静馬へ申し下す一書、實父靱負が敵、澤井又五郎、見付け次第に、場所を構はず、討ち取るべきものなり。」

濱町 それも夫が志し。

静馬 残る方なき御懇情、

春太 静馬、其方には暇を遣はしたぞ。

右内 首尾よく討つて、三光丸へ仕へよ。丹右衛門。

丹右 ハア。

右内 さらば。

丹右 冥途へ御供。

ト腹切らうとする。伴作、むく〜と起き

伴作 おのれを。

ト丹右衛門を切りにかゝる。立廻りあつて、伴作を切り殺し、その死骸の上へ乗り

丹右 おめでたう存じ奉りまする。

ト丹右衛門、腹へ突ツ込む。

ひやうし幕

### 三幕目 木辻揚屋の場

役名――譽田内記。櫻田林左衛門。山岡慶藏。草見五右衛門。湊江善平。春日屋甚九郎。飛脚、鶯平。柘榴武助。傾城、小紫。政右衛門女房、おたね。同一子。巳之助。渡邊静馬。池添孫八。唐不政右衛門。

造り物、三間の所、一面の長暖簾。上の方、障子屋體、橋かゝりの方、小柴垣、門口いつもの所であり、掛け行燈に春日屋と書きつけ、平舞臺の墨五疊敷きあり、これは後に下を滑る事あり、寶永祭の囃し物にて、枕に手拍子とり、唐木政右衛門、傾城小紫、櫻田林左衛門、藝子、禿、亭主甚九郎、山岡慶藏、草見五右衛門、湊江善平、仲居おはる出て、大杯鉢肴、鉢子いろ〜あり、この並びにて幕明く。暫らく寶永祭の枕拍子あつて止む。

藝子 サア、政さんが負けぢやわいな。

政右 おれは、負けはせぬわいの。

藝子 無理ばつかり。

甚九 斯う致しませう。今のはとんと勝負が知れませぬ、我れら亭主役に、さつぱりと一つ下さりませうかい。

林左 出かす。汝飲んで、太夫すへさし枕とせい。

ト亭主飲む。後、小紫へやる。

小紫 これは又、迷惑なお指圖な。

禿 小紫さん、よいわいな。林左さんが助きたいといふ事ぢやわいな。

林左 さりととは、すつばどもが、さすものぢやないわい。

政右 所を我れら、お相と出かけうかい。

小紫 政さん、其やうにあがる事はないわいな。

林左 なせ。

小紫 その箸ぢや。春早々から大坂に二つあつたげな。

滝江 その心中男の政右衛門どのは、なか／＼減多にいきつくものぢやないぞ。

小紫 何を云はしやんす。なんのかのと云ふと、お前方は上手ばつかり云ふので、政さんばかりを潰すのかいなア。

慶藏 イヤ、潰すのなんのと、政どのへの御馳走したは、これをほんの卯酒と云ふわいの。

小紫 そりや又、なぜにえ。

慶藏 オツと待つたり、卯酒の因縁會得いたした。

皆々 どうぢやえ。

林左 ハテ、潰さねば君の味が知れまいと、云ふであらうが、なんと、どうぢや。

五右 どうでも先生は、えらものぢや。

小紫 わつけない事ばつかり。政さん、もうよしにして下さんせ。わたしや、お前に云はねばならぬ事が、たとあるわいな。

政右 云はねばならぬ事とは、如何やうの事かな。

林左 イヤ、茲な畜生め、さうしげつては、地黄と薬煎を飯の代りにせずばなるまい。瘦せるぞや。

政右 さう云はれては、猶飲まねばならぬといふものかい。

甚九 さらば、我れらお酌止めましょと致しませう。

政右 助八といふ心かな。

ト云ひ、政右衛門、杯受ける。

林左 イヤ、ナニ政右、貴様に尋ねたい事があるが、云う

て聞かす氣か。

政右 何なりともお尋ねなされい。

林左 イヤ、外の儀でもない。神影流の鑑の秘傳を、貴殿、殿様へ傳授する氣か。

政右 氣もない事〜。

林左 すりや、どのやうに殿が御意なされても。

政右 よう物を合點して見てくれたがよい。一子相傳の秘傳、密口傳、ソレ、殿にも三代相恩の御主人といふやうな事

なれば、教へまい事でもないが、傳かやう〜今日この頃のお館。その和郎に、大事を傳授して堪るものかい。

林左 そんなら、いよ〜傳授はしやせぬか。

政右 弓は袋、太刀は鞘に納まるこの世界。それに又、鑑の傳授せいととは、きつい〜。不祥々々。この政右衛門、御案内の通り馬鹿者なれど、今も申す通り、重々の恩も

ない主人に、此方の大切な家の秘傳を教へてやつたら、そりやモウ、ほんの青海苔を貰うた禮に、太々神樂を打

つやうなものぢや。なんとさうぢやないか。

林左 すりや、如何やうに御意なされても。

政右 教へはせぬ〜。

林左 そんなら助太刀は。

政右 助太刀とはな。

林左 ハア、イヤ、この杯で身共は一つ飲むが、助けてくれる氣はないかと云ふ事。

政右 嫌ひ〜。酒の事でも助けるといふ字は、きつい嫌ひぢや。

林左 鬪馬が頼む。

政右 サア、その助太刀が否さに、此やうに匿まはれて居る。

林左 イヤ、そりや偽り。

政右 なぞ〜。

林左 貴公の爲にも舅の敵。

政右 それも、女房去つてしまひ、あの君を根柢にすれば、さりと女房の縁は無いワ。なんと、きつい孔明か孔明か。

林左 成る程、それが當世。な〜貴様位の立合ひでは、助太刀は危ないもの。先達ての御前の立合ひ、腹は立た

つしやるな。その時、貴様をぶちのめす事は、なんでもない事ぢやけれども、可哀さうに浪人から駈け上がった

もの、叩きのめさば奉公はなるまいと心付き、こりや武士の情ぢやと負けてやつたればこそ、今日は五百石取れ



るといふもの。なんと政右衛門、さうぢやないか。  
政右 それに、とんと違ひなし。そこで今日の藝應ぢやてや。

林左 アレ門弟中、聞かつしやつたか。先日の負けは、おらがわざと負けてやつたのだ。

鷹藏 そりや、先生に敵はぬ筈の事サ。

善平 泥鰌とお月様ほど違ひませうかい。

林左 イヤ、左やうにもござらぬ。

鷹藏 同じ師匠を取るなら、林左どの、やうな師匠を取れば、きつい仕合せでござる。

林左 イヤ、さう思はつしやるが、銘々の身の冥加でござる。

政右 なんぢややら、堅うなつて来た。なんと、この話し取捨いて、酒にせうく。

林左 よかろく。

政右 サア、亭主、なんなりとも、飲める事を始めい始ぬい。

善九 オツと合點。そんなら、この並んだ道具で、見立てづくしは、なんとあろ。

トこの合ひ方になり、皆々靡ころへ

皆々 こりや又えらい、えらしこぢや。  
秃 この杯を斯う持つてく、藝應なんとはどうであろ。

皆々 こりや又えらい、えらあてぢや。  
善平 この鉢臺を斯う持つて、この鉢臺を斯う持つて、鷹藏

なんどはなんとあろ。

皆々 さつてもきついえらあてぢや。

林左 この鉢臺を斯う持つて、この鉢臺を斯う持つて、ま一つ持つて斯う寄せて、仁王の下駄とはなんとばし。

皆々 これもけうとい、えらひどい。

政右 そんなら、おれもやつて見よ。この燗鍋を斯う持つて、この土蓋をば、斯う持つて

皆々 智慧貸そかく。

政右 智慧借らぬく。イヤサ、斯う寄せて、斯う持つて。

皆々 智慧貸そかく。

政右 イヤ借らぬく……斯う持つてく。

皆々 智慧が貸したい、智慧貸そかく。

政右 これはどうもならぬわい。

林左 イヤ、負けく。サア、これで一つ飲まれい飲

まれい。

政右 こいつは、えらいものぢやなア。

林左 ドレ、身共がお酌いたさう。

トつぐ。

政右 こりや、大杯でゆけぬわいの。

林左 卑怯云はずと、さつぱりと飲まつしやれ。

政右 もう絶體絶命。死ぬると思つてやつてのけうかい。

甚九 これはお見事ぢや。サア、おあがりなされませい

なされませい。

政右 たべようく。

小紫 政さん、お前、この酒飲むかえ。

政右 飲まねば、武士の一分が立たぬ。

小紫 それでもお前さん、この酒あがつたら、また御座な

ろぞいな。

政右 寐たらなんぢや。酒飲んで寐る事ならぬ、お觸れで

もあつたかの。

小紫 そんな事は知らぬわいな。

政右 知らぬ知らさぬ仲なれば、浮かれまいもの、さりと

てはく。可愛やおれに酒を過させまいと思つて……可愛

愛い奴の、コレ、林左、近頃不埒とや云はん、不躰と

や云はん。なれどもこの有様、どうも堪えられぬに依つ

て、開きでちよんの間と致したい。粹を通してこの場を

見通がしやつてくれい。コリヤ、手を合せてな、林左大

明神。粹つかせてたび給へ。南無林左大明神。

林左 粹と云はれて退かれもせまい。

小紫 わたしもお前に、話して問ひたい事もあり、お寢間

へ。

政右 マア、なんぢや。

小紫 サア、お寢間でなければ、エ、オ、笑止。

政右 そんなら林左。この場の不附合ひは堪忍してくれる

か。

林左 どうなとしをれ。

政右 さても粹な骨頂め。

林左 追従云はずと早う行きやれ。

政右 然らば粹の親玉様、後刻御意得ませう。

甚九 ちやつと、サア、お出でなされませい。

ト政右衛門、小紫、禿、仲居、甚九郎、皆々奥へ入る。

林左衛門、慶藏、五右衛門、善平、御見合せ、思ひ入

れあるべし。

林左 いづれも、大方見えました。

三人 左様でござりまする。

林左 この後ほ奥で。

三人 先づ、ござりませう。

ト唄になり、皆々奥へ入る。向うより政右衛門女房お

たれ、着流し、抱へ帯、屋敷風にて出る。後より池添

孫八、木綿やつしに大小、若黨の形にて、子役巳之助、

振り袖、着流しに大小、これを春に負ひ、花道にて

たれ 孫八、旦那どの、お出でなさる、茶屋はどこぢや。

孫八 ハイ、向うに見えまするあの茶屋が、左様でござりまする。

たれ そんなら、もう爰ぢや……コレぼんち、父様にお目

にかゝりやつたら、いつものやうに手を支へて、行儀正

しう御挨拶申しやや。

巳之 畏まりました。

孫八 なんと坊さん、茶屋町と申すものは、太坊や又は三

徳を彈き立て、賑やかな事でござりまする。坊さまは、

面白うござりまするか。

巳之 イヤ、おれは大鼓や三味線は嫌ひぢや。矢ッ張り、

毎日屋敷で稽古する、劍術が面白いわやい。

孫八 エ、御發明な。奥様、坊さまの仰しやつた事、お

聞きなされましたか。

たれ オ、賢い事、よう云やつたなう。それに引替へ、

政右衛門どの、放埒懦弱。廓通ひに、夜を臺とも分かち

なく流連の……こりや爰では云ふ事ぢやない。夫に逢う

てから云ふ事。わしとした事が、はしたない。ホ、

サアおぢや。

孫八 なんでも、旦那にお逢ひなされましたら、取ッ捕ま

へて、御意見なされませ。

ト本舞臺へかゝり、おたれ、案内せいと云ふ仕方す

る。

ナイ。頼みませうか。

甚九 アレ、どなたかお出でなされたさうな。

仲居 アイ。なんの用でござんすえ。

ト出る。

孫八 イヤ、別の事でもないが、この内へ、唐木政右衛門

さまと云ふお方様が、お出でなされてとあらうが、其お

方様は、どれにござらしやる。

仲居 これは、むづかしい。政右衛門さまと云ふは、エ、

政さまの事であらう。成る程、お出でなされてとござり

まする。

孫八 サア奥様、お入りなされませう。

トおたれ、孫八、巳之助を負ひながら、入る。甚九郎、出て

甚九 マア、これはく、お大盡様の御來臨ぢや。皆來い。皆來い。

孫八 エ、やかましう吐かすな。気が逆上せるわい。

ト内より五右衛門、慶藏、出る。

五右 なんと、各々、御覽じたか。

慶藏 イヤハヤ、呆れた事サ。

善平 あの體たらくでは、なかく。

ト云ひく出て

五右 これはく、政右衛門どの、御内證、おたねどので  
はござりませぬか。

たれ これはしたり、五右衛門さま。どなたも、ようお出  
でなされませぬ。

善平 今日、政右衛門さまのお饗應にて、我れくも、

よい願ひませぬ。

慶藏 さては御内證にも、お氣晴らしに、御來駕と見えま

す。

たれ 左やうでござりまする。

五右 然らば、これへお出でなされ。藝子どもに弾かせて、

お慰みなされいサ。

仲居 お前様も、ちつと此方へ、お寄りなされい。

ト孫八を捕まへにかゝる。

孫八 エ、油臭い。寄るなく。

仲居 これは、けいぐしいお方ぢやぞ。

孫八 なんと奥様、一時も早う、旦那にお逢ひなされませぬか。

たれ コレくく、そこな女中。その政右衛門さまのご

ざる、お座敷の次の間へ、やつて下され。

仲居 畏まつてござりまする。

甚九 そんなら、政さまは大座敷。あなた様は、次の小座敷へお供申しや。

たれ よいやうに頼みます。然らば、どなた様にも、これで緩りと、お遊びなされませい。

孫八 後程お目にかゝりませう。

たれ 孫八、其方も奥へ。サア坊、おぢや。

ト唄になり、孫八は巳之助を抱き、入る。藝子、仲居、

甚九郎、皆々入る。

善平 いづれも御覽じ。女房士まで呼び寄せての大馬鹿、



所詮、助太刀を致す所存とは見ませぬ。この通り、又五郎どのへ知らせ、用心の門を開かせませうかい。

五右 左やうでござる。併し、最前先生の云ひつけには、コレ。

ト善平に囁く。また慶藏に囁き

御合點な

善平 ござりませ。

ト三人、奥へ入る。唄になり、柘榴武助、編笠に、木綿やつしにて、一本差し、向うより出て来る。奥より小紫、出るうち、合ひ方。

小紫 もう／＼、飲めぬ、堪忍して下さんせちつとの間、爰に、風に吹かれて居る程に、そこで、よいやうに頼み入つたぞえ。

ト氣を替へ、あたりを見

政右衛門さまの、あのお身持ちは、嗚か飯か。……こちの人武助どのに、請負うた財當の詫び。政右衛門さまから、御馬さまへ、願うてもらうてくれとの頼み。とは云へ、あの體たらく。酒に酔つてござれば、お願ひ申す首尾もなし。どうしたものであらうな。

トまた唄になり、こなしある。ト武助、伸び上がり、

あたりを見て

武助 エ、面白さうに騒ぎ居るなア……どうでも、人の噂に違はぬ、政右衛門さまのあの放埒……いつそ踏ん込んで……イヤ／＼、御勘當の身の上なれば、行かれもせず……エ、口惜しい。

ト小紫、武助を見て

小紫 ヤア、お前は武助さん。逢ひたかつたわいな。よい所へ、よう来て下さんしたなア。

ト武助、編笠を取り、内へ入り

武助 ヤイ、あんだらぬ。

小紫 コレ、お前は、たま／＼逢うて、そりやマア、なんの事ぢやぞいな。

ト武助、小紫が胸倉を取り

武助 エ、おのれはなア／＼。

小紫 コレナア、こりや、なんとするのぢやいな。

武助 なんとせうかい……一體、おのれを、此やうな態にして置くも……そんな事云うて居る隙はない……ソレ、見せれ。

ト去り狀、投げ出し、打ちつける。

小紫 エ、こちの人、なんで、こりや、なんでござん

す。

武助 去つた女房に、用はない。

小紫 武助さん、わたしには、なんの科あつて、去つたと云はしやんす。こんな物は穢らはしい。否ぢやわいな。知らぬ〜。サア、何が氣に入らぬ。ちやつと云うて下さんせい。

武助 おのれが土根性に、問へいやい。

小紫 イ、エ、わたしや何にも身に覚えはない。お前は、何を其やうに、腹立て、下さんすぞいな。

武助 なにを…助平づらめ。

小紫 わたしが、マア、どうしてぞいなア。必ずそんな事、仇けにも云うて下さんすなえ。

武助 なぞ掛當の、詫びしてくれ居らぬ。

小紫 サイナア、折を見合はせ、お願ひ申さうと思ふうち、花に嵐と、いろ〜の妨げ。その上、酒の酔ひが覺めねば、云ひ出す折がないゆゑに、辛氣で〜で、なるこつちやないわいなア。

武助 今日で、幾日になると思ひ居るぞ。

小紫 そればかりに、恥かしいこの姿。うか〜暮して居さうな、女子ぢやと思つて居て下さんすのかいな。

武助 二十日の上にもなるのに、なぜ便りしをらぬ。

小紫 尤もでござんす。併し、大事のお前の、願ひぢやもの、如才があつて、よいものかいなア。

武助 なんの、ない事があらう。十日も二十日も、なんにも云はずに…何して居つた。

小紫 サア、そこぢやわいなア。政さんの側には、彼の林左衛門と云ふ意地悪、まだその外、辨慶が附いてゐるに依つて、話しする、隙がないわいな。

武助 おのりや、辨慶が怖いか…おりや、辨慶でも金平

でも、なんとも思やせぬけれど…サア、勘當と云ふ強者には、どうも敵はぬわいな…どうぞ、親旦那の御息災

のうちに、詫び言してと思つて居る間に、つっこり…ハア、南無三しまうたと、ほんに、精も力も落ち果て

たれば…ア、イヤ〜、これからが忠義ぢや。おのれ、ヤレ、若旦那様のお供してと思つても、どうもなら

ぬ…マア、勘當赦してもらはにやならぬに依つて…おのれを頼んだぢやないか…怪體な。男が女郎に頼む

のは…卑下たらしいこつちやけれど、忠義には替へられぬと、思ひ思つて、おのれを頼んだ甲斐もない…なぜ今まで云うてくれくらぬ…コリヤ、おのれ、土性

骨が腐つたのぢやの……毎晩々々新しい男と寐くさるがよさに……ほんの男を飽き居つたのぢやと、氣が付いたに依つてナ、離縁狀おこし居らぬうちに、おれが方から先を思つて去つたのぢやわい……エ、怪體な。勸當請けたも、ほんは、おのれゆゑぢやわい。よい。もう語び言もしてもらせん。死んでこます……すつぱりと腹切つて、流石は武助ぢやと稱められうとは思へど……切られぬ。腹も切られぬ。おりや不死身ぢやに依つて、腹の代りに腹切つてこますうと思へども、猶切られぬ。罫でいつそ川へ身を投げてと思へども、ひよつと土左衛門になつたを、知つた奴が見居つたら……コレ、武助めが食ひ物がなさに、身を投げて死に居つたのぢやと、笑はれるは構せんけれど、旦那様の名の出るのが怪體な。思々しいよつて、もう死にもせんのが、無念なところか、口惜しいわい。く。

小紫 コレイナア、かんまへて、そんな悲しい事など思つて下さんすないな。

武助 思はいでおや。おのればかり好い着るもの着くさつて……旨いものばかり、上の口へもコ、この下の口へも、飽くほど喰ひ居つて、おれが事は根から構ひ居らぬ

もの。

小紫 コレイナア、滅相な事云うて下さんすな。この里へ来て今日までは、ちつとも身を穢した覚えはござんせぬわいな。

武助 ないものが、なぜ勸當の訛言はしてくれ居らんぞ。小紫 オ、道理ぢや、道理ぢやわいな。お前、その突き詰めた心で、勸當さへ赦してもらうたら、敵討のお供を。

ト武助、小紫を仕方にて叱り

武助 シイ……おのれマア、そんな事、どこで聞きはづつてうせた。

小紫 それは最前、政右衛門さまの奥様、また若黨の孫八どのとやらが、政右衛門さまに助太刀の願ひをなさるゝを立聞きしたわいな。

武助 ヤア、そんなら、奥様や孫八も来て居るか。

小紫 さうでござんすわいな。

武助 大事を聞かしたれば……もう助けて置かれぬわい。

小紫 なんの、大事を聞いたとて、女房の事ぢやもの。

武助 壁に耳。七人のに將門は滅ぼすとも、女に油斷すなと昔からの譬へ。

小紫 わしが心を、知らぬ人かなんそのやうに。

武助 人に云ひ居つては、旦那様の爲にならぬわい。

ト小紫、居直り

小紫 こちの人、サア、殺して下さんせ。

武助 ヤ。

小紫 大事を聞いたわたし、お前の心の濟むやうに、さつ

ぱりと、わたしを殺して下さんせいな。

武助 此奴、人を困らすやうな事を吐かすか……おのれ、

そない吐かすと……ほんまに切るぞよ。

小紫 未練な心はござんせぬ。サア、切つて下さんせ。

武助 オ、切つて見せう。おのれ……不死身ぢやに依つ

て、切るまいと思はうが、例へ、不死身でも、人は切る

わい……なんまみだ……なんまみだ。

ト小紫、手を合せ

小紫 南無阿彌陀佛。

ト武助、思ひ入れ、いろ／＼あり

武助 疑ひは晴れたわい。

小紫 わたしが聞いたとて、人に漏らす氣は、ちつともな

けれど、疑ひ晴れいでは心が濟まぬ。矢ッ張りわたしを

殺して、疑ひを晴らして下さんせ。

武助 あやまつた……疑うたはおれが蟻蠚がしりぢや。堪

忍してくれ。

小紫 ハテ、お前の心の濟む事なら、なんの命が惜しからうぞいなア。

武助 それがほんまの事なら……どうぞ、早う詫び言してたもいなる。

小紫 氣遣ひして下さんすな。追ッつけ、首尾よう便りを聞かするわいな。

武助 必らずその約束通りに

小紫 めでたい吉左右。

武助 そんなら、好い便りを待つてゐるぞや。

ト唄になる。内より政右衛門の聲にて、小紫々々と呼

ぶ。小紫、驚ろき、武助に目で知らせ、武助、柴垣の

蔭へ隠れる。

政右 小紫々々、小紫はどこへ行た。小紫。

ト政右衛門、小紫を見て

氣が悪いぞよ／＼。おればかりを待たして置いて、爰に

居つたか。獨りで何して居るのぢや。

小紫 サア、それはなア。

政右 風に吹かれて居たと云ふのか。

小紫 アイナア。



政右 ても、古いやつ。

小紫 オ、憎てらし。

政右 コレ太夫、おりや其方に、分けて願ひがある。聞いてたもるか。

小紫 何をいな

政右 何をとは、聞えぬぞよく。わが身、突出しから、一夜さも抱かれて寐た事はないは、こりや、おれが粹を

使うての仕打ち。眞實は寐たうて、どこもかも體も

どこも、紫色になつて居れど、爰が粹の傳授ぢやと、デ

ツと辛抱して居るも、其方に可愛がられろ爲。なんと、

ほんまに可愛がつてくれる氣はないか。コリヤ、どうぢ

やぞいやい。

トこの臺詞のうち、おたね、孫八出かけ、後より聞い

てゐる。

小紫 サア、なんぼう其やうに云はしやんしても、男

の心は飛鳥川、淵が瀬となる世の情へ。わしや騙されろ

かと思つて。

政右 騙さぬワ。眞實から出た誠の眞中を見せうか。

小紫 その眞實は、お前、どうして見せるのぢやえ。

政右 サア、その眞は、湯多にや云はれぬ。

小紫 それく、さう云はんすが、嘘といふ證據。

政右 嘘でない證據を見せたその上で、否とは云はさぬぞ。

小紫 わたしも追つて頼む事、後へは引かさぬぞえ。

政右 眞實の理由を云うて聞かさうか。おれが偽り云はぬ

といふ證據は、奥を去りこくつてしまふワ。さつぱりと

邪魔のないやうにして置いて、さうしてから、そもじを

身請けするわい。なんと眞實ではあるまいか。

小紫 そんなら、わたしを身請けして。

政右 お氣に參らずと、奥さんになつておくれ。

小紫 エ、添ない、と禮を云はして置いて、後で笑はうで

の。

政右 後とは云はぬ。さつぱりと今、身請けせう。

ト政右衛門、手を叩く。

仲居 ハイ。

ト仲居、出る。

政右 われでは婿が明かぬ。亭主を呼べ。

仲居 申し、旦那様、お呼びなさるゝぞえ。

ト甚九郎、奥より出る。

甚九 ハイ、なんの御用でござりまする。

政右 太夫が身請けがしたいが、身の代は如何程ぢや。

甚九 梅ヶ枝この方、お定まりの三百兩。

政右 そつこで請け出せ三百兩。

甚九 これは有り難山のほうちん丹と、お金を戴き一散に、

飛ぶが如くに。

ト三重にて入る。此うち、孫八見て、腹を立て、巳之

助を抱いて真中へ出し

孫八 奥さま、モウ、モウ、モウ、モウ。

トこの所へおたれ出る。

矢竹でござりまする。仰しやりませ……大事ござりませ

ぬ。

ト孫八、力みある、おたれ見て腹を立てる。身構へせ

うとして氣を嘗へ、會釋して

たれ 旦那どの、先刻から様子は聞きましてござんす

る。なんとやら、わたしに暇をやつて、あの女中をお内

儀さまに……イヤモウ、さうしたお心ではござりますま

いけれど、女子と云ふものは、心の捌けぬものぢやゆゑ

に腹が立つ。サア、腹の立つまゝに、つけつけと物を云

うて、愛想盡かされてはどうもならぬ。サア、ほんに譬

へに云ふ通り、布は縦から、男は女からと、元は女房が

悪いから。日頃、不調法なわたしぢやに依つて、定めて

お氣に入らぬ事ばかりでござりませう。殊に又、あのや

りに美しい、里馴れた女中の、粹とやらいふお人の手

に入つて、いとしがつて下さんすりや、猶、家の女房の

事も、子の事も、思召さぬ筈でござんすけれど、これ

までの馴染み甲斐に、わたしが心の中を、推量して下さ

んせいなア。

小紫 これはマア、奥様でござりまするか。思ひも依

らぬ事になりまして、氣の毒なものは、わたし一人でご

ざりまするわいな。

たれ ナンノイナ。主のお氣に入つたこなさん、なんにも

云ひ譯に及ばぬ事いな。

政右 コレ太夫。

ト小紫、氣の毒の心遣ひあり。

小紫 エ、。

政右 此方へ寄りや。

ト小紫、迷惑の體。

小紫 イエ、モウ、それでも。

政右 ハテ、何を遠慮する事があるぞいの。

ト政右衛門、引寄せる。孫八、ムツとする。

孫八 コレ、そこなお山どの、御家中で石部金吉やと云はれる程の堅いおらが旦那を、ようてんつにしやつたり。申し奥様、お前様のやうに、主の躰を探るやうに、ぐづく仰しやつてござつては濟ませぬ。大事の坊さん、繼母の手にかける事はなりませぬわいなう。どうでござりまするぞいの。

ト小紫、迷惑な心遣ひ。

たれ 孫八、譯けもない事云やるわいの。なんぼうわしがお氣に入らなくても、大事のくほんそり子の巳之助を、可愛がらしやらいでなるものかいの。

ト小紫、立つて退かうとする。政右衛門、引きのけ  
政右 これはしたり、氣の弱い女ではあるぞ。

ト孫八、尻まくり、腕まくり、血相して政右衛門の側へ行き、顔見合せ、又ウザくしてかしこまり

孫八 旦那どの、イヤ、様、お前はく、なんとした事で、此やうなお心におなりなされました。ほんにヤレく、滅多に白い齒も見せぬお方が、どうした因果で此やうに、夜も晝も遊所へばかりお入りなされてござりまする。彼奴等はみな狐どもでござりまする。化かしまするぞえ化かしまするぞえ。旦那様は、大事のく、大抵大事のお

身ぢやござりませぬかえ。それにマア、酒ばかりお上がりなされ、もしも病氣でも發つたら、いつその事に暗闇でござりまするわいの。エ、お前様はなア。

ト目を指り、膝をかく。

たれ 燃え出づるも、枯る、も同じ野邊の草。ひよんな時にひよんな所へ……わしが云ひつけでもするやうに。此やうに申したら、猶お氣に障らうか知らねども、此やうな面白い處へ參じましたは、先達て、お前にお頼み申した、どうぞ助太刀がしてもらひたさ。弟、静馬が力に思ふは、お前一人。どうぞ、その事がお頼み申したさに。

政右 それが否さに、歸らぬぢやて。

たれ エ、アノ、力になつて下さんす事が

政右 ずんと、ならぬぢやて。

たれ そんなら、静馬が

政右 助太刀する事、罷りならぬ。

たれ アノ、どうでも助太刀は。

政右 ハテ、ならぬと云ふに、しちくどい。助太刀するとは、胸が悪いワ。

たれ ハイ。

ト力浴す。



の 演 再





繪 番 附

孫八 そんならお前様、いよ／＼助太刀は否。エ、情ない。見下げ果てた、お心でござりまするなア。

ト孫八、拳を握り

申し／＼、さてはお前さんは、相手が怖いに依つてござりまするか。イヤサ、又五郎めが恐ろしうござりまするか。コ、この奴めは下郎ながら、おのれやれ又五郎めを尋ね出し、その首を取ツつらまへて、お旦那、立ち所に、ざつく／＼と、鯨叩いたやうに、さ、うと思つてゐますわいの。それになんぢや、助太刀と聞くと胸が悪い、聞きとむない。そりや嘘だ。誠は、又五郎めが怖いのだ。恐ろしいのだ。又、怖くなくば、助太刀してやらうと云うて下され。奥様の爲には父御様、又お前の爲には舅御様、坊様の爲には祖父様、すりや、奴めが爲にもお主様。並々ならぬ大事の敵。サア、申し／＼、助太刀してやらうと、つい云うて下さるませ。コレ、物を云はつしやれ。啞か、驥か、物云はしやれ。コレ、物云うて下されいなう。

政右 成る程、これはおのれが云ふ通り、過まつた／＼。向後、心を改めて、靜馬が助太刀してやらう、と云ひたいが、ア、ならぬ……なぜと云へ。この政右衛門には、

畷田内記さまと云ふ、お主があるわい。先の相手の又五郎が、どのやうな手練ぢややら知れぬ。首尾よう、敵討ち負ふすればよけれど、もしや返り討に遭ふ時には、どの命を以て、御主人へは忠義を盡す。その所へ心付かず、助太刀々々と。又、斯う云はゞ、我が口利巧な事云はつしやると思はうが、イヤ、さう思ひさうなものぢや。なんと、おれが云ふが無理か。よもや無理ではあるまいが。忠義には、親を棄てるは侍ひの常。この助太刀も、女房の縁にかゝつての事。それぢやに依つて、去つてしまへば、知れた他人。すりや、他人の助太刀する事も無し、足踏み伸ばして、寝られると云ふもの。そこで去るのぢや。不承知ながら、さう思つてもらはう。

たれ そりやモウ、あのやうな華やかな奥様が出来ましたゆゑ、お氣に入らずば去られませう。

小紫 イヤ、申し奥様、お前を去らしては。

たれ 云うて下さんすな。聞きともないわいなう。

小紫 サア、これには段々の、譯のある事でござりまする。

たれ 譯がなうて旦那どのが、身請けなさるゝものかいなう。

小紫 その云ひ譯は。

政右 ア、コレ太夫、なんにも云ひ譯する事はない。暇の印の一腰。去り狀ぢや。持つて行け。

たれ そんなら、どうでも。

政右 捲らへは着相なれども、なまくらでもないものぢや。賣りなりとも拂ひなりとも勝手にして、小遣ひになされ。

小紫 それでは、わたしが

政右 ハアテ、なんにも構ふ事はない。サア、奥へ行て、抱かれて座よう。

たれ エ、。

ト兩人 向きしみる。

政右 燃えるか。角が生えたか。

たれ エ、こなさんはなう。

政右 聞えぬ憤みは、後で存分腹立てい。去つた女房に構ひはない、イヤ、やつさもつさは其方でせい。

ト踊り三味線にて、政右衛門、小紫を連れて奥へ入る。

孫八、おたれ後に残り、思案して居る。ト奥より林左衛門、善平、出る。

林左 御内證、折角助太刀を頼まうと思し召された政右衛

門、却つて去られさつしやれて、さぞ工面が違つたでござらうの。

善平 なんの、あの手の内で助太刀なぞとは。

林左 ハテサテ、何を云はつしやるのぢや。

ト向うより驚平、飛脚の形にて出で

驚平 林左衛門さま、これにござりまするか。鎌倉よりの

御狀。

ト林左衛門、悪いといふこなし。

林左 ハテ、サテ、コリヤ、なんにも云ふ事はない。なに

か、ソレ、物よ。御内證方、少しばかりの色事。さる太

夫よりの狀。コリヤ、奴、そこらは粹を利かせい。暫ら

くのうち、何方へか御出でなされい。コレ、粹よ。

頼むワ、ハ、ハ、ハ、。

ト扇子を顔にあて、驚平に向うへ行けと仕方する。驚

平、呑み込み、花道の真中へ行く。

たれ 去られた所に長居もならず、左様ならば林左衛門さ

ま、其うちお目にかゝりませう。

林左 ようお出でなされた。又お出でなされ。

ト云ひ、入る。

ハア、御内儀は、もう去なれたさうな……父よ、母よ

と泣く聲聞けば。

トこの臺詞云ひく、花道へ行く。

何事ぢや。

鷺平 鎌倉よりの密事の御状。

林左 ハテサテ、大きな聲な奴ではあるぞ。

ト状箱取り、状を懐へ入れ、また懐より状を出し、文箱へ入れ

状は體かに受取る、返状は、即ちこの内にある程に、急

いで持つて歸れ。

鷺平 ハア。

ト行かうとする。

林左 コリヤくくく、待てくくく。

ト此うち、武助、委細見てゐる。

鷺平 ハア。

林左 向うで頭打つた。

ト鷺平、外らし入る。ト林左衛門、いろくこなしあつて、内へ入る。善平、あたりに氣を付ける。林左衛門、伴の状を讀む。此うち、武助、尻からげ、鷺平が

跡を追うて入る。

林左 これを見られよ。又五郎どのより文通。如何にして

も政右衛門は合點ゆかぬ奴。コレ、其許はこの疊の下に

忍び、スワと云はゞ、政右衛門めを手刺し。合點か。

善平 すりや、政右衛門めを。

林左 ぬかるまいぞ。

ト善平、疊の下へ隠れる。林左衛門、後の數目を直し

てゐる。奥より政右衛門出る。

政右 林左衛門々々々々。林左衛門はどれへ行かれた。

林左 爰に居るく。

政右 爰に居るとは、横着者が。おればつかりを盛り潰

して抜けるとは、林左衛門、卑怯なく。

林左 さう云はれては、この林左衛門返す詞はないてや、

ないてや。

政右 ちつとさうともござるまい。サアく、そんなら奥

へ行て敵討ちか。一杯飲む程に、サアく、お出でお出

で。

ト政右衛門、林左衛門が手を引き、奥へ行かうとする。眞中へおたれ、巳之助を抱き、二人が中へ割つて

入り、

たれ 去られたわたし、この子を抱へて居やう筈がない。

ましてや、男の子は、男に付く習ひ。これ戻しましたぞ



ト巴之則を政右衛門に突きつける。  
巴之 父様いなり。

政右 これ又、しゆんだ者を連れて来たぞ。

ト政右衛門、この奉詞云ひ、コロリとこける。

林左 いづれも、御覽じましたか。

ト三間の間、暖簾切つて落す。慶造、亭主、甚九郎、外に門弟中、見事に並み居る。障子屋敷の内に鑿田内記、大殿の形にて居る。

政右衛門が身持ち放埒、とくと御覽進ばされましたか。

内記 政右衛門が身持ち放埒、いろ／＼と取汰いたせど

も、よもやと存じ、打捨て置きしに、晝夜も分かぬ亂酒

の有様。遂一に承知いたしました。斯様の輩と知らずして、

知行をくれし内記こそ、兩眼明らかにありながら、盲目

同然。かゝる不忠不義の政右衛門、一時も我が目通りは

叶はぬ間、百杖打つて阿房掃ひ。林左衛門、この役儀、

其方に云ひつける間、政右衛門を百杖打て。

林左 妻細長こまりましてござりまする。改めて殿様へお

願ひござりまする。先達て政右衛門、お目見得いたせ

し折から、彼奴が面體骨柄、只者ならずと存じ、まさか

の時は、御用に立つべき者と、わざと立合ひに負けしは、君への忠義。いまお暇の出た政右衛門なれば、御前に於て眞劍の勝負、お許し下さらば、有り難う存じませう。

ト林左衛門、下げ緒を外し、禪にかけ、身拵らへして

政右衛門が寝てゐる側へ行く。

たれ 前後も知らぬ夫政右衛門、それを相手になされうとは、そりやお前、卑怯でござんす。

林左 なにも女の知つた事ぢやない。すツ込んで居やれ。

ト政右衛門が側へ行く。

政右衛門、先達て立合ひに負けしは、身共が計略。今眞

劍の勝負する、サア、立ち上がつて勝負せい。

ト林左衛門、切らうとする。

内記 林左衛門待て。斯く熟醉せし政右衛門、眞劍の儀は

よしにせい。

林左 イヤ、憚りながら、お詞を返すにはござらねども、

武士は轡の音で目を覺ますといふ事あれば、御免蒙むり、

鯉口の音を。

内記 鯉口の轡の音に目を覺ますは眞の武士。そりや思ひ

も依らぬ事。

林左 然らば、いつそ詞ち放して。

内記 手討にすれば、この内記がする。

林左 ぢやと申して。

内記 某が詞を、そちや背くか。

林左 全く以て左様では。

内記 左様でなくば、控へて居らう。

林左 エ、命冥加な。

内記 元來、足利どのより、この内記に、神影流の三つの

口傳を傳授せよとある。氣合ひ未だ辨へねば、その儀傳

授せよと再三申し遣はせども、一子相傳の事なれば、教

ふる事叶はずと、その日よりの廊通ひ。察するところ、

傳授を惜しみしものならん。憎き奴、手討ちにせんと

思へども、そのみに助け置くに、なんぞや自儘に手討

ちにせんとは、某を蔑ろにする不調法ものめが。

林左 だん／＼あやまり入りましてござりまする。

内記 手討ち代りの阿房拂ひ、百杖打つて檢非を糺せ。

林左 ハア、誰れかある。竹刀を持たつしやれ。

内記 竹刀に及ばぬ。この扇子にて打て。

林左 すりや、其お扇子で。

内記 それも極めて百杖打つに及ばぬ。コレ、この扇子の骨は十本、すりや、十度打てば百度、キツと申し渡した

ぞ。

ト扇子を林左衛門に渡す。

林左 例へ、扇子は僅かなりとも、腕を固めて打つ時は鐵

石。

ト扇子を持ち、政右衛門が側へ行き、引起す。ト小紫、

孫八、奥より出かける。

殿様のお慈悲の扇子。土性骨に耐へたか。

ト叩く。政右衛門、氣が附く。

御前ぢやが。御前ぢやがくく。アノ大たわけめが。

ト此うち、おたれ、孫八、小紫、皆々無念のこなし

内記 政右衛門の一埒濟んだれば、この場にあつて益なし。

イザ歸らう。

林左 お乗り物。

ト乗り物、家來大勢、鼻き出る。内記、しづ／＼乗り

物へ乗る。家來みな並ぶ。林左衛門、政右衛門が首筋

とつて

ナニ門弟中、これへござれ。よい物をお目にかけう……

コレ、此奴が面を見られい。コレサ、怖い事はないわ

の。高かこの扇子でぶつても、手前の手が鐵よりも強い

に依つて、この通りの面に疵。なんと、よく固まつて

あらうがの。なにか桐栢の明いたまゝ、神影流の、イヤ  
神道ぢやのと、出るまゝの雑言、その先生様がこの態。  
なんと拙者が手の内、見て置かつしやれ。

門弟 イカサマ、よい氣味でござりまする。

林左 なんど政右衛門、わりや此やうにしられても、無念  
な事はないか。イヤ、口惜しい事はないか。エ、馬鹿  
な奴の。べら坊だわい……お乗り物立ちませい。

ト唄になり、みな／＼臆病口へ入る。

たれ 政右衛門さま、さぞ御無念にござんせう。

巳之 父様、口惜しいわいなう。

孫八 お旦那様、下郎めが腸は、煮えかへりましてござり  
まする。

政右 いま林左衛門を打ち殺すは易けれど、彼奴は又五郎  
の爲には、眞實の伯父ぢやわい。其方達が願ひの通り、  
今こそ助太刀してくれう。この御不興受けう爲、幾世の  
思ひをしたわいやい。

ト内記、障子を開き、鑓を二つ提げ出て

内記 政右衛門の知行盗入。通がさぬ。

トこれより鐘の立合ひ。政右衛門、扇子にて始終あし  
らひ

政右 これが神道の固め。

ト内記、思ひ入れあつて、又タテになる。政右衛門、  
畳の下を潜る。ト最前忍びし善平を引き出し、内記に  
突きつけ、其まゝ鑓玉にかける。

神影三つの口傳、霧がくれ。

ト内記、こなしあつて、鑓引きうけ、政右衛門に突き  
にかゝる。タテあつて内記、突き込む穂先を、政右衛  
門、兩手にて拜み

神影流の奥儀の口傳、とくと御會得下されませう。

ト政右衛門、後へすさる。

内記 立合ひに事よせ傳授せしは、天晴れの計らひ。過分  
過分。

政右 これに殿様の御懇のお詞、冥加に叶ひ、有り難う存  
じ奉りまする。

内記 この度將軍よりこの内記に仰せつけられし三つの傳  
授、いま其方に受けたれば、參勤の時、將軍へ御傳授申  
し奉れば、譽田の家の繁榮は其方が庇、仇には思はぬ  
ぞよ。譽田内記、手を下げて禮を申す。

政右 冥加もなき仕合せ。未熟の拙者、なか／＼藝を惜し  
み、殿様に御傳授仕らぬ心は、さら／＼なし。家來に

傳授受け續ひては、殿様の御名の疵。さるに依つて無禮をも顧ず、立合ひに心寄せ、御傳授いたせしも、君を重んずる寸志の御禮。最前よりの無禮の段々、眞平御免下さりませう。

内記 誰れかある。申しつけし一品、これへ持て。

ト内より家來

家來 ハッ。

ト銀櫃を持ち出づる。

内記 政右衛門に與へい。

家來 ハ、ア。

ト銀櫃の蓋を取る。内より靜馬出る。

たれ ヤア、其方は靜馬。

靜馬 内記さまのお情にて、政右衛門どのの、心成を承はり、如何ばかり喜ばしう存じまする。

孫八 靜馬さま、さぞお喜びでござりませう。

政右 我が臆にも男の敵討つて本意を達するは、我が掌

にあり。氣遣ひしやるな。さりながら、わざと殿に疎ま

れ、御勘氣を受けんと存じ、暫らくも御主人を騙かり、

不忠不義の名を取るも、縁にかゝはる孝の道。國を出づ

る時に妻子を忘れ

靜馬 境を出づるに家を忘れ

政右 寒風素雪のいとひなく

靜馬 雨露霜雪に身を凝らし、敵又五郎、やはか討たい

で。

政右 さは云へ、これが、御馬前の忠義なら。ナウ靜馬。

靜馬 政右衛門どの

兩人 ま、ならぬ浮世ぢやなア。

孫八 憚りながら、且那樣へ申し上げまする。一時も早う

お立ちなされて、然るべう存じまする。

政右 尤も。靜馬、來やれ。

小紫 マア、お待ちなされて下されませう。

兩人 待てとは。

小紫 お二方への御祝儀、お祝ひ申しませう。

兩人 祝儀とは。

小紫 女ながらも大事を聞いたわたし。敵討ちの血祭り。

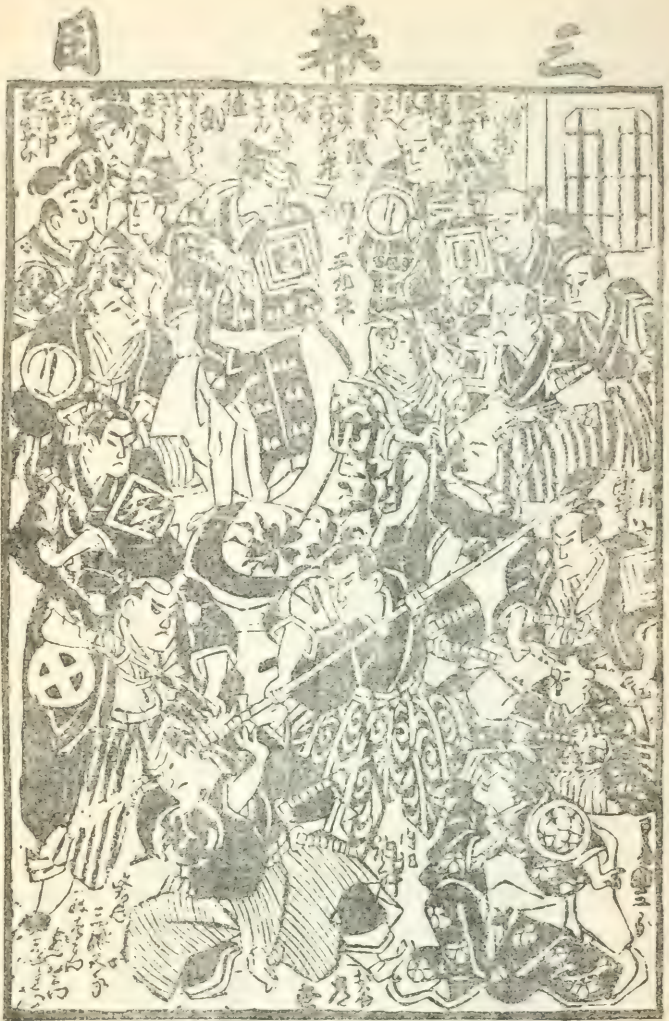
ト靜馬が刀にて、小紫自害せうとする。政右衛門とめて、其ま、小紫が髪をその刀にて切り

政右 髪は即ち血の刺り、その血の緒を切つて、忤巳之助に

付け置く。尼が乳母の居直り……憚りながら概様へ申し

上げまする。随分御健勝に、お渡りなされ下されませ





天保五年正月森田座演番附

5。

ト政右衛門、孫八、静馬、花道へ行く。

待て。

内記

ハア。

ト花道へ座る。

内記

申しつけに物。兩人に與へい。

ト臺に小判の包を載せ、兩人の前に直す。

些少ながら路用にしやれ。

政右

有り難うは

静馬

ござれども

政右

金少しは貯へござりまする。

ト内記、小判の臺を引けといふこなしする。侍ひ立寄り直す。ト内記、刀を持ち添へ、差出して

敵討ちの餞別。

内記

ハア。

政右

ト政右衛門、思ひ入れあつて、内記が持つてゐる刀を

戴き納める。

内記

随分、龜相なる物ぢやぞよ。

政右

ハア、重ねて厚き御懇情。

内記

適當の政右衛門には、杯もなるまい。親子は一體な

れば、梓巳之助に杯くれう。

ト侍ひ、三方長柄を内記が前に置く。内記飲んで巳之助にさす。おたれ、その土器を受取り、巳之助に戴かす。

めでたう敵討ち負ふせ、再び歸る心の返杯。

トおたれ、右の土器を内記が前に直す。内記飲みしま

うて

肴くれう……一張の弓の勢ひたり、東西南北の敵を易く

滅せり。ハ、ハ、ハ、敵討ちの門出。

ト兩人俯向く。幕。ト幕の外へ、政右衛門、静馬、孫

八、のしく花道へ入る。

ひやうし幕

四幕目 般若坂の場

役名——澤井又五郎。同女房、おその。俗醫者、

左内。湊江善平。百姓、太郎兵衛。娘、おそのめ。

松野金助。柘榴武助。

造り物、見附け黒幕、海道、板松二三枚、よき所に

賣薬店に、書附けある石を載せ、よろしく書き物な  
らべ、薬袋つりあり、在郷明にて慕明く。

旅人三四人出て、捨ぜりふ云うて通る。又五郎、着  
流し、おその、振り袖抱へ帯、手を引かれ出て

又五 サア、やかましい、なにも女の知つた事ぢやない。  
おれ次第にして置け。

その なんぼ其やりに云はしやんしても、こればつかりは  
聞入れて下さんせ。

又五 ハテ、どひつこい。聞入れるも、聞入れぬも、おれ  
が胸にある。早う歩け。

トしかくあつて、舞臺へ来る。

その マア、待たしやんせ、歩け歩けと云はしやんす  
が、どこへ連れて行くのぢやぞいなア。

又五 どこの彼處のと云ふ事はない。高が大阪の長町へ行  
くのぢや。

その その長町と云はしやんすは、お前のなんぞかえ。

又五 イ、ヤ。

その そんなら、なんぢやえ。

又五 知れた事、矢ッ端り宿屋ぢや。

トおその、氣を替へ

その コレ、又五郎さん、諒い事ぢやけれどもなア、よう

聞かしやんせ。お前のお心ゆゑとは云ひながら、行く先  
もく、當途もなしの旅籠泊り。果はなんとせうと思は

しやんす。そのお前の悪性ゆゑ、コレ見やしやんせ、此

やりに袖も結ばず、ほんの女房とは云ひ舞けばかり、ど  
うぞ心を入れ替へて、親御の御勘當も赦してもらひ、世

間廣う女夫になりたい。コレ又五郎さん、ちつとは、わ  
たしが身にも、なつて下さんせいなア。

又五 エ、やかましい。それ程おれが大切で、付き歩く  
われが、なぜおれに抱かれて寐ぬ。

その そりや母御さんが、御勘當お赦しなされたその時

は、云ひ舞けぢやもの、抱かれて寐いぢやなア。

又五 その勘當赦してくれる母者人は、疾に死んでしまは  
れたりや、勘當赦してもらふ人がないわい。

その そんならお姉様は。

又五 それもおれゆゑ、自害しられたのぢや。

その エ、。

ト悔り

又五 なにも驚ろく事はない。こりや世界の願道ぢや。

トおその、氣を替へ

その遠い東から連れて来たも、どうぞお前の心を入れ替へ、母様に對當赦してもらはうと、それを頼り樂しみに生きて居ましてござんする。その相様がお果てなされたら、何樂しみに生きて居りませう。又五郎さん、随分健でみやしやんせ。さらばでござんす。南無阿彌陀佛。

トおその、又五郎が脇差を持つ。又五郎留めて  
又五 エ、どう狂人め。何にをしをる。

そのイヤ、放して殺して下さんせ。  
又五 滅多に殺して堪るものかい。

ト橋が、りにて、人音やかましようする。又五郎、思ひ入れして

面倒な。

ト薬店の後へ無理に、おそのを引摺り入る。股引、打裂き羽織の侍ひ、家來四五人連れて出て

代官 家來ども、この程より當所に於て、心得ぬ薬を賣り、騙り同然の賣藥商賣、引立て參れとの事、この店に相違はない。

家來 左様でござりまする。

ト見て

代官 コリヤ、藥屋は居らぬか、必定風を喰つて逐電し

た。ソレ、近邊を詮議いたせ。

皆々 ハア、。

代官 斯う參れ。

ト臆病口へ入る。ト橋が、りより、俗醫者左内、藥屋の形。太郎兵衛、おそめ出て

左内 サア、よい。癒してやるわいの。

太郎 償うて返しや。

ト女形、顔に腫れ物あり。

左内 サア、道理ぢや。それは腫毒の内攻した所へ、風を引いて、そこへ薬で發散して、吹き出たのぢや。金さへ出せば、半時に元のやうにしてやるわいなう。

太郎 金どころぢやないわいなう。大事の、か、り娘。この間より風邪の心地。ア、自分の娘ぢや、もしや懸

病みではあるまいか、見て下されと連れて來れば、この薬を服ませいと云ふて下さつた粉藥。服ますと直ぐにサア、道土すほどに、見てゐるうちにこの通りに、赤

癩に、ようしやつた。

左内 サア、よいてや。

そめ なんぢや、よいてや。イヤ、よいてや。コレイナア。ほんに云ふではなけれども、色白からず、黒か



らず、瓜實顔で、しほめ眼で、つぼく口で、鼻筋は、  
 鑢のとわたりまで通つてあつて、その上にちみで、小  
 野の小町か楊貴妃かと、袖袂を引かれた姿ぢやぞや。

左内 有りや誰れが、

そめ アイ、わたしいた。

左内 おかしがる。

しや、ほんに、何がおかしい。贖御を持つて嬰兒生ん  
 で、木はどうして斯うしてと、昨夜も風呂の上がり場で、  
 穢ない顔ぢやと人さんが、指さして笑はんすに、大  
 身代の殿様へ、どう様入りがるぞいの。償うて返しや  
 返しや。

左内 サア、償うしてやるが、金があるか。

太郎 金と云うたら、なんぼ程でござる。

左内 ハテ、大切な薬ぢやけれど、慾にはいらん。なるた  
 け工面しやれ。平時のうちには癒してやる。

ト太郎兵衛、鼻紙袋より金を出し

太郎 持ち合せが二兩ごんす。どうぞこれで負けて下さ  
 れ。

左内 ア、悪いものぢやけれど、癒してやる。

ト懐より薬入れを出し、粉薬を分けて茶碗に入れ、よ

ろしくあつて

この薬は一子相傳、これ服むと、その顔が半時の間に、  
 元の通りになる。サアく、戴いて服んだり。

そめ アイく。忝なうござんす。

トおそめ服む。少し苦しき思ひ入れ

太郎 なんとしたく。

左内 ちつとの間、あの店へ氣を休めてござれ。直ぐに元  
 のやうに癒る。

太郎 ハイく。忝なうござります。

トおそめを店へ直し、太郎兵衛、春中を撫りある。左  
 内も店へ、しかく薬調合してゐるト馬士一人馬を引  
 き出て

馬士 この中は忝なうごんす。

左内 どうぢや。効験が見えましたかの。

馬士 きいた段ぢやござらん。この間の薬を持つて去ん  
 で、家主の娘に、たつた一度振りかけたれば、人中も構  
 はず、濡れかけるやら、抱きつくやら、お庇で本望とげ  
 ました。友達もが一服貰うてくれと云うて、それで來  
 ました。マア、一服下され。

左内 これも一子相傳でござる。不思議な薬であらうが

の。

ト袋を出し、散薬を合せる。

馬士 サア、薬代二分渡しました。その間に一服いたそ。

トおそめ、起きて

そめ 父さん、もうよいさうなわいの。

太郎 ヤア、其方の顔は。

トおそめが顔を撫で、見て

そめ ほんに、さつぱりと癒つたわいな。

ト兩人 喜ぶ。

左内 軽いのは半時まではかゝらぬ。その位なは忽ちぢ

や。

そめ エ、忝なうござります。

ト辭儀する拍子、左内が持つてゐる薬、おそめ打ち返す。

左内 エ、これはしたり、大事の薬を打明けて、エ、

鈍な事しられた。サア、癒つたら、もう去なしやれ去

なしやれ。

太郎 ハイ、お暇申しませう。

ト手を引いて花道の方へ行く。おそめ、その手を取り、ヤツと締めて、ぐにやぐにして

そめ オ、平氣。

ト太郎兵衛に抱きつき、嬉らしきこなし。付けつ廻しつする。

太郎 うろたへめ。親を捉へて、こりや何をするのぢや。

そめ コレ父さん。

ト取りつく。太郎兵衛、恟りして

太郎 コリヤヤイ、何ぬかす。六十に餘つて、そんな機嫌

ぢやない。親ぢやわい。

トそれでも追ひ廻す。太郎兵衛、向うへ逃げて入る。

そめ イヤ親ぢや。待つた。

ト悪身にて、追ひかけ入る。左内見て

左内 ハ、ハ、ハ、惚れ薬もひどいものぢや……時に、秘傳の妙薬、さても利けば利くもの、一服用いて忽ち相好の變る難病。又この癒し薬を用ふると、半時かゝらず元の形になるとは、イヤハヤ、我れながら膽が潰れる。イヤ、取違へてなるまい。

ト出して見て

この赤薬が難病、白薬が癒し。よし、懐中は離され

ぬ。金ぢや。

ト代官、臆病口より家來大勢、連れ出て

皆々 ソレ、廻がすな。

左内 こりや、なんとなされます。

代官 ヤア、吐かすな。おのれ、標々の妙薬とて、悪しき薬を賣る由、漆に竹の筒を以て毒き薬など、申す事を致す由、毒害などの薬を賣るも計られず。依つて代官所の仰せ、急ぎ御前へうせ居らう。

左内 これは迷惑な。その竹の筒は女愧と申しまして。

代官 ヤア、云ひ譯は御前で致せ。家來ども、引立てい。

ト皆々、左内を引ッ張り入る。馬士、また戻り

馬士 内にござりますか。申し〜。

トおその出る。

その そんなら待つて居やしやんせ。わたしがツイさう云うて來るわえ。

ト云ひ〜出て、馬士に行き當り

ハア、これは許して下さんせ。

ト行かうとする。

馬士 申し〜、この家の亭主は、どこへ行かれましたな。

その一あたしも、餘所の者ぢやに依つて存じませぬが、今どこへやら行かしやんしたさうなわい。

馬士 ハア、そんなら待たざるまい。

その 申し〜、爰らに酒屋はござりませぬかな。

馬士 ナンノ、町ぢやもの、酒屋だらけでござんすわい。

その とつとわたしや、旅の者ぢやに依つて。

馬士 ようござんす。ごんせ。待つてゐるも同じ事ぢや。わしが教へてやりませう。

その それは奈たうござりませする。

ト兩人連れ立ち、橋が、りへ入る。又五郎出て

又五 人目を忍ぶ屈竟妙薬。

ト薬店を探し

彼奴が懐申。ソレ。

ト橋が、りへ走り入る。おその出て

その 又五郎さま〜。

ト同じく追ひかけ入る。返し。

黒幕、眞中、大稻村、雨車、この見得にて道具とま

る。

ト左内、尻からげ、羽織をかぶり、キリ〜舞ひ〜出る。

左内 エ、いま〜しい。いろ〜の目に遭ふ事ぢや。

さらして、又この雨のえらさわい。イヤ、丁度よい雨宿り。暫らくこの木の下にて休まうぞ。

ト左内、右の稻村の側へ寄る。ト稻村の内より又五郎、左内の首筋を掴み、内へ引ッ込み、半刺しに殺す。ト左内の吹替へ出す。ト早替り、又五郎の形にて物凄き思ひ入れあつて、ト、左内を殺し、懐にある件の薬二包みともに取り、戴き、向うへ行かうとして思ひ入れ

又五 毒喰は、皿までと、役に立て、こまさう。

ト又五郎、左内の死骸の上へ馬乗りになり、面の皮を剥き、我が着物を脱ぎ、死骸に着せ、死骸の着物を着替へ、矢立を出して狀を書き、死骸の懐へ入れる。橋が、りより、湊江善平、股引き脚絆、打裂き羽織、侍ひの形にて、家來四五人連れて出て、又五郎を見附

善平 それにござるは、又五郎さまではござりませぬか。

好い所でお目にかゝりました。主人野守之助よりの御

ト文箱を又五郎に渡す。

又五 野守どのの使ひ。大儀。

ト狀を讀み、其ま、返事を書き、右の文箱へ納め歸られてもあらうならば、委細の儀はこの返事に認めあると云うておくりやれ。

善平 委細長まつてござりまする。

又五 大儀々々。

ト此うち、花道、戸屋の内にて、ト、トと人音する。ト又五郎、向うをキツと見て、善平に顔にて知らせ、又五郎は臆病口へ入る。善平は家來打連れ、橋がかりへ入る。ト向うより松野金助、野袴、打裂き羽織、侍ひの形にて、高下駄、傘をさし出る。ト件の左内が死骸に躓き、思ひ入れあつて

金助 面皮をあばき、只一刀に殺めし有様。必定盗賊の仕業と見ゆる。

ト思ひ入れあつて

扶りし疵には似もやらず、衣服に疵の附かざるは、ハテナア。

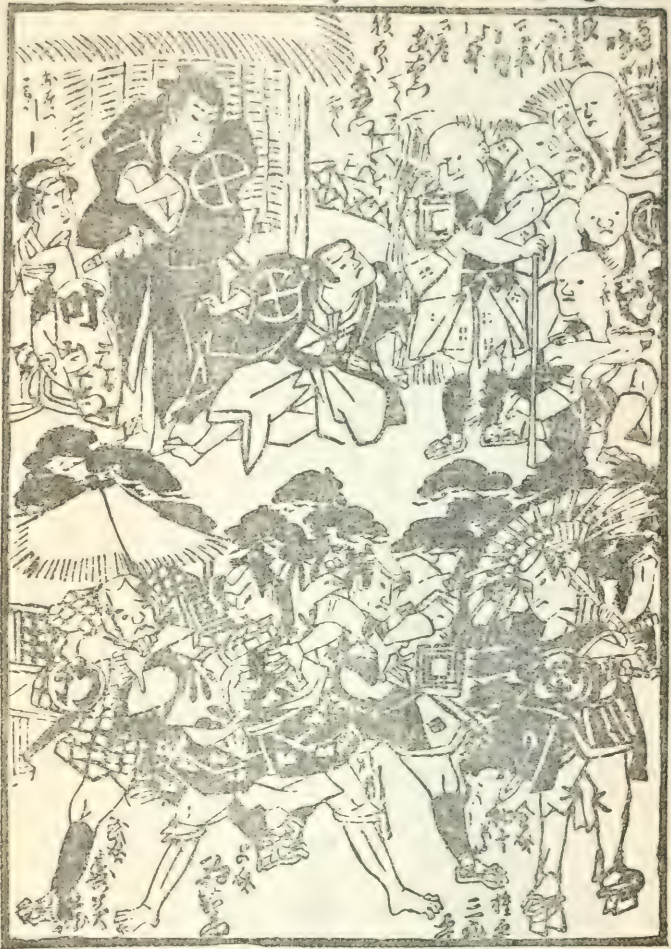
ト懐へ手を入れ、右の狀を取出し、ちよつと讀みハテ、好い物が手に入つたナア。

ト臆病口へおその出て

そのどつちへ行かしやんした事ぢやしらぬ。



# 大森目



天保五年正月森田座所演番附

ト花道へ行かうとする。ト金助、思ひ入れあつて

金助 コレ／＼女中。

その わたしが事でござりますか。

金助 如何にも、こなたの事ぢや。

その お召しなされますは、なんの御用でござります。

金助 イヤ、外の儀でもないが、斯う見受けましたところが、女の旅、連れなぞにはぐれ、その人を尋ねらるゝと云ふやうな事ではないか。

その ハイ、夫を見失ひましたに依つて、その行くへを尋ねるのでござります。

金助 左様存じてお留め申した。爰へ来て、これを見やれサ。

トおその、ツカ／＼と走りより、死骸を見て惻り。

その ヤア、これは夫又五郎どの。

ト金助と顔見合せ、兩人思ひ入れあつて

金助 すりや、この死骸が其方の夫とな。

その 何者の仕業で此やうな浅ましい形にはならしやんし  
たぞいなア。

金助 女、そちや夫の敵、討つ氣はないか。

その 女でこそあれ、夫の敵、討たいで置からうか。

金助 ハテ、健氣な一言。袖の振り合ふも他生の縁、敵討たせてやらう。

その して、その敵は。

金助 外でもない。身共ぢや。

トおその、身構へする。

意趣も遺恨もなければ、ちんじちうよう行き合ひの口論。武士の儀に依つて斯くの通り手にかけて。さぞ口惜しからう。無念にあらう。イヤ、愁傷の段、思ひやらるる。

トおその、なんとも云はず、始終、口惜しき思ひ入れ

あつて

その 夫の敵、侍ひ、やらぬ。

ト少し立廻りあつて、金助、見得よくとめて

金助 急くな女、此方より名乗つて出る程の身共、討たれてやらうが、今はならぬ。ちと此方に入用の命、それさへしまはゞ尋常に、その時こそは討たれてくれる、不承ながらそれまでは、われも待たずばなるまい。

その イヤ／＼、さらは云はさぬ。夫の敵、免さぬ、覺悟しや。

トまた切りかける。立廻りあつて

金助 ハテサテ、聞分けのない女。さう云や、いつそ返り討に

ト思ひ入れあつて  
女 来い

ト金助、おそのを引立て、聴病口の方へ走り入る。ト向うより飛脚出る。ト後より武助、そろ／＼見え隠れに出る。ト善平、橋が／＼より、右の家来連れ、飛脚と行き合ひ

善平 これは／＼、鎌倉より林左衛門さまへのお使ひ。好い所でお目にかゝつた。拙者も先程、股五郎さまにお目にかゝり、返事を取り、これに所持仕る。

善平 御意の通り、林左衛門さまの御返事を受取り、夜を日について歸る所でござります。

トこの衆詞のうち、武助、委細を聞き、兩人が眞中へズツと分け入り

武助 してやつた。二人ともにこの状、此方へ渡せ。

善平 委細を聞いた下郎め。ソレ。

善平 合點ぢや。  
トこれより武助、皆々を對手に大々テいろ／＼あつて、武助、其身を手で掴み、折り曲げる事あり、様々

あつて、ト武助、疲れ、池の水を手で掴ひ飲み居ると、皆々、顔にて知らせ合ひ、武助を善平、拜み打ちにする。根ツから切れぬ、善平、抱りする。武助、これに構はず、嘲笑ひてゐる。この廻り二三度あつて又々テになり、皆々追ひ込む。善平、武助を支へるはずみに武助、密書を呑んでしまふ。善平とりつくを、武助、善平を見事にボンと切る。

武助 敵の在所、勘當の託の綱。  
ト善平、起き上がり

善平 うぬを。

武助 よいやサ。  
ト大袈裟に切る。

忝ない。  
ト向うへ走り入る。

### 五幕目

長町傳法屋の場

幕

役名——澤井又五郎。川角源内。醫者、石森鶏庵。祇園町一徳。宿屋女房、妙貞。下女、お千

代。政右衛門女房、おたね。同一子、巳之助。渡邊靜馬。同云ひ號け、お袖。若黨、栢糴武助。唐木政右衛門。

造り物、長町宿屋の道具、向う三間の間、破風のところ、大二階。見附け階の下、大段梯子、正面あり、梯子の脇、赤簾暖簾口、臆病口の方、中二階、下に柴垣、手水鉢前、竹五本、内一本仕掛けあり、二階いづれも高欄腰障子、いつもの所に門口、傳法屋といふ掛け行燈、門口より舞臺端まで本ばかりの扉、並びに門口の脇に松一本、但し足が、りあり、橋が、りの方、鼠色壁踏次口あり、前に井戸あり。下男二人、下女一人、立騒ぎある見得にて慕明く。

下一 さてても、忙しやなく、片端から物を云ふ人ではあるぞ。  
 下二 貴様もさう思ふか。ありや人ではないわいなう。どうでも三間ぢやないかしらぬ。  
 下女 コレ、何を云ふのぢや。また聞えたら大抵の事ではないぞや。

下 一 ハテ、爰ばかりには、日は照るまい。

下二 さうぢや。長町中を歩いてても一代は暮らさる。ヤ、もう日の暮れぢやさうな。長屋の衆が戻らうぞや。ドレ、我れらは風呂へ水汲み雀どのと参らうか。

トいろ、よろしく臺詞のうち、花道より芝居出る。次に天蒲の神子、また獨り角力、みな少々づゝ臺詞あつて、内へ入る。

下女 コレ、皆の衆、早い仕舞ひであつたなう。

角力 さて、寒い事。

神子 寒い筈。この寒中に眞禪體で、慄ふ事ぢやもの。

芝居 それ、死病と身すぎぢやわいの。

角力 なんと、大芝居、くれぬぞや、身體痲だらけの上を砂まぶれ、悉皆飽こかしのやうになつて、これだけぢやわいの。

芝居 かさに降る雪も、七ツ時分には口から血を吐くやうなてや。

角力 握り拳を出すばかりで、とんと今年は収入がない。

その代り、足が元手ぢやわいなう。

芝居 サア、皆々、船辨慶めが戻らぬうち、サア、斯うござりませう。



トみなく表の路次へ入る。ト表へ石森鴉庵、馬者の形、薬箱一人連れ出る。

下男

石森鴉庵、お見舞ひ。

ト鴉庵、内へ入り

鴉庵 コレ、おちよ女房、病人家へ知らせて下され。

下女 心得ましてござりまする。

ト奥へ入る。ト又五郎出て

又五 これは、御苦勞に存じます。

鴉庵 ハア。して、變りました事もござらぬかの。

又五 さして變りました儀もござりませぬ。

鴉庵 ドレ、お脈を見ませう。

ト鴉庵、又五郎の脈を見る。

これは、いかう上がりまするの。

又五 イヤ、モウ、耳がしやらく致しまする。

鴉庵 さうでござりませう。加減いたしませう。

ト薬を調合する。

又五 イヤ、モウ、薬がけの儀なれば、難儀仕りまするで。

鴉庵 御尤もく。シタガ、薬が過れば早いものでござる

てや。加減いたしませう。

ト薬を合すうち、歩き、一人出て  
歩き 婆様、内にかく、婆様。  
トやかましよう云ふ。ト奥より傳法屋女房、妙貞出る。

妙貞 オ、かしましたい事ぢやぞいなう。

歩き なんぢやや知らぬが、お上からお尋ねなされる、事があつて、この長町を一軒々々、武士たる者の御詮議ぢや。

さう云うて置かつしやれと云ふ天下觸れぢやぞや。

ト云うて入る。

妙貞 サアく、いろくの事が出来たぞや。やかましいぞやく。

ト云うて奥へ入る

又五 イヤ、申し鴉庵さま、ありや何事でござりませうな。

鴉庵 イヤ、別に氣遣ひな事ではござらぬ。最前河内屋で

ちよつと聞きましたが、大切な正宗とやらの刀を盗んで

逃げた者があるというて、代官所から長町宿屋をお尋ね

なされる、と申す事でござるて。

又五 ハテナア。

鴉庵 イヤ、モウ、其やうな大膽な事をする奴ならば、滅

多に知れるものではござらぬて。

又五 イカサマ、早速には知れますまいかい。

鶏庵 この薬は、生妻なしに参りませい。

ト又五郎取つて、下女に渡す。

又五 大儀ながら、煎じてたも。

鶏庵 ドレ、これから奥の病人衆を見舞ひませう。

又五 御苦勞に存じまする。

ト唄になり、鶏庵、下女連れ立ち入る。ト又五郎一人残り、我が腰の刀を隠したいとする仕打ち、いろ／＼

あつて、手水鉢の前の竹の中にて、太き竹を斜に切り、刀の目釘を抜き、身ばかりを竹の中へ隠し、また柴垣の竹を取り、鞘に合せ切り、身の代りに指し、鋤を嵌め、腰に差し入る。ト下女、静馬が手を引き、二階より出る。

静馬 思ひがけない眼病で、いかい世話になりますの。

下女 ナンノイナア。世話いたしまするは、わたしらが役、

お客様のお事ぢやもの、疎かには存じませぬ。お前様もお心措きなく、御用云ひつくなされて下さりませ。

静馬 近頃過分にござる。本腹いたしたら、キツと禮を云

はうぞや。

下女 ナンノイナア。お目が癒りさへすりや、わたしやお

禮受けるより嬉しうござりまするわいなア。

静馬 深切な人ぢやなう。

下女 氣が盡きませう。なんぞ。

ト煙草持つて来て

申し、和らい水のやうな薫りの好い煙草、買うて置き

ました。一服あがりませい。

静馬 逆上せて悪からうもの。

下女 そんな氣遣ひのある煙草ぢやござんせぬ。

ト吸ひつけてやる。静馬のむ。いろ／＼あるべし。

静馬 どうぢや。この鶏庵さまはまだ見えぬかいの。

下女 先刻にから、奥の御病人の療治をしてござりまする。お前のお目の事も、問うてござんしたわいなア。

静馬 見てもらひたいものぢや。

下女 さう申して参りませう。

静馬 大儀ながら、云うて下され。

下女 アイ／＼。

ト下女、入る。静馬、一人呟きゐる。

鶏庵 ドレ／＼、逢ひませう／＼。

ト内より出る。下女付き出る。

静馬 鶏庵さまでござりまするか。待ち兼ねて居りまし

た。

鶴鹿 御尤もく。ドレ、容態を見ませう。

ト見て

さして變る事もござるまい。

靜馬 矢張り兩眼ともに、痛みまして難儀仕ります。

鶴鹿 道理々々、目と云ふものは大事のものぢや。加減仕

りませう。

トまた藥を合せる。ト向うより唐木政右衛門、さんす

いなる藪醫者の形にて出る。先へ、祇園町一徳、羽織

着て、手に證文箱持ち出る。花道にて

政右 きつうお隙がいりましたの。

一徳 まだ今日は早いのでござります。なにか北の新地か

ら堀江島の内を歩く事、此やうな短かい日は困ります

る。

政右 でも、御苦勞な事、さうして、好い奉公人衆でもご

ざりましたか。

一徳 サア、結構な奉公人、しかも實心、なんでもめめた

と思うて、下つて様子を聞けば、ちつとやらさらへが足

りませんゆゑ、みすく大金を捨て、上らねばなりませぬ。

政右 ハテナア、むづかしいものでござりまするなア。お話をしたて来たゆゑ、道を近う覺えました。サアく、お入りなされませ。

一徳 ドレ、上り拵らへ致さうか。

ト入る。二階へ上がる。政右衛門、跡に残り思案して

ゐる。鶴鹿、藥合せしまひ

鶴鹿 コレ、加減の藥ぢや。さわくと煎じて一番ばかり

參りませ。

ト靜馬が手に渡す。戴きて下女に渡し

靜馬 大儀ながら煎じて下され。

下女 アイく。

ト藥取る。ト奥より妙貞出る。

妙貞 ホウ、お盲目、爰にか、コレこなたは、うかくと

呼んで来たやうにして居やしやるが、宿錢がもう二十日

の上も來ぬぞや。知つてか。

靜馬 ハイ、成る程、御尤もでござりまする。そりやモウ

合點して居りまする。

妙貞 こなたばかり合點して居やしやつても、取るもの取

らねば、此方が濟まぬわいなう。

下女 ハテナア、ようござりまするわいなう。

妙貞 なにがよい。おのれもおのれぢや、朝から晩までお盲目の側にへばりついて、アタ嫌らしい。内の事はどうするのぢや。帯の腹打ち食らはすぞよ。サア、お盲目、宿錢はどうするのぢやいなう。

静馬 御尤もでござります。追ッつけ國元から銀子參る管ゆる、來次第にキツと御勘定申しませう。

妙貞 云ひ出すと國元々々と、措いて下され。聞き飽いて居る。もう待たぬぞや。今日濟ましや。

鶏庵 コレ、阿母、尤もながら、其やうには云はぬものぢや。人は料簡といふものがなけりや。

妙貞 左平治、措いてもらひませう。すッ込んで居さつしやれ。

鶏庵 如何やうとも、如何やうとも。妙貞 サアお盲目、今算用ぢや、無いか。無か其やうにしては居られそもないものぢや。面の皮の厚い。サア、無

か出て行きや。

ト静馬、うち／＼する。

出やらぬか。引き出すぞや。エ、面倒くさい。ト胸倉を持ち、後より引立てる。下女、取りつき立廻り。政右衛門、入る。妙貞を後より胸め足で下へ突

き据ゑる。妙貞、政右衛門が顔を見て

ヤア、こなたは齋醫者どのか。

政右 いま、歸りました。

妙貞 いま戻つたりや、なんでおれを投げたのぢや。

政右 なんの、お前を投げませう。いま戻りかゝりました

れば、何やらバタ／＼致しましたに依つて、スツと入つ

た挿子に、お前の襦を踏んださうにござります。それ

でお前が仰向けに轉けさつしやつたのぢや。

妙貞 ハテナウ、さうぢやあるまい。投げたのぢやあらう

が。

政右 なんの爲に、お前を投げませうぞいの。

妙貞 そんならマア、それに置いて置いて、サチ、二人ながら出て去んでもらうかい。

政右 なせにござりまする。

妙貞 もう二十日の上になるのに、錢一文も拂ひせず、

こりやどうするのぢや。二人三人、飯代取らずに置く宿

屋はござるまいぞや。サア、錢が無か、二人ともに、出

て行きやいなう。

政右 飯代拂ひさへすりや、よいぢやござりませんか。

妙貞 サア、受取りませう。



政右 氣遣ひなされますな。いま出て行けと云うても、算用せにや去にはしませぬわいなう。

妙貞 エ、口は調法なものぢやなう。

鶏庵 イヤ、モウ、先刻から騒がしいので、おれも気が上がりました。イヤ總監、不斷の四十越して、經行止まれば、得てあのやうに涼々しうなるものでござるて。

妙貞 黙らしやれ。

鶏庵 オツと黙りませう。

ト表へ代官、家來連れ出て、内へ入る。

歩き お代官様のお出でおやぞや。婆様、武家方の客衆、

これへ呼ばつしやれ。

ト妙貞、靜馬、鶏庵、又五郎、下女、皆々出て、手を支へる。

代官 外の儀でもない。この度、東山どのより御吟味なさるる正宗の刀誦誦、いづれも違背なく、これへ出し召されてよからう。

鶏庵 先づ拙者からお改め下されませう。

ト鶏庵、合口出す。

代官 イヤ、貴殿のは改むるには及ばぬ寸尺。サア、女にござるお武士、腰の物お出しなされい。

ト又五郎、うづくとする。

又五 拙者が刀は。

代官 お辭退なさるゝは、上意を背かつしやる。

又五 さうではござりませねど。

ト代官が側へ行き、

御内閣で御覽下されませう。

ト差出す。代官、思ひ入れあり、抜きかける。竹光ゆゑ、ちやつと納め、又五郎に渡し

代官 改めました。申し分ござらぬ。

又五 面目次第もござりませぬ。

ト又五郎、會釋して戻る。政右衛門、靜馬が刀を取り、我が刀と兩手に持ち差出す。代官、目禮して兩腰を抜き、とくと改め、元の通りに納め

代官 さて、天晴れなお腰物、これまで改め参つたらうち、

これ程の腰の物、未だ拜見いたしません。不作法ながら驚ろき入りましてござります。

ト政右衛門、腰に差し、一腰は靜馬に渡す。

イヤ、天晴れなるお道具、奥床しう存じまする……

イヤ、ナニ主人、泊りの武家方は、この衆中ばかりか。

妙貞 ハイ、このお三人ばかりでござります。

代官 然らば、次に参らう。おさらば。家來、供せい。

家來 ハッ。

ト歩き、代官、家來連れ歸る。又五郎も二階へ上がる。

政右 さてもく、別してもない事、悔り致した。

ト云ふ所へ、男一人、文箱持ち出る。

男衆 頼みませう。傳法屋といふ宿屋は、これでござりまするかな。

政右 アイ、これでござりまする。なんの御用でござります。

男衆 然らば、長崎からお出でなさるお醫者様は、これにござりまするか。

政右 その醫者、これに居ります。お尋ねにあづかるは誰方ぢやな。

ト男と顔見合せ

誰れぢやと思つたれば、薩摩屋の男衆か。何用ぢや。病人の變でもあるかの。

男衆 イエ、左様の儀ではござりませぬ。旦那申しまするには、この間は段々御苦勞かけまして、有り難う存

じまする。お庇で病人も本腹仕りまして喜びまする。

つきましては、病人も殊なう氣を使ひましたか、夜前より藥服むまいと申します。皆々寄り合ひまして意見仕りますれども、病上がりゆゑ、氣短かに申しまするゆゑ、あなた様へお尋ね申し、苦しい事ならば、暫らくお藥を休みませうか、どう仕りませうぞ。この儀をあなた様へお尋ねの爲に、私しを差越しましてござりまする。

政右 イヤ、少しも苦しい事ぢや。先づ拙者が療治で本腹させたりやは補ひぢや。とつくりと補ふが第一と存すれども、併し、病人の心次第。却つて氣に障れば變の元となる。そんならマア、當分休まして見るもよからかい。

男衆 然らば、左様申し聞かせませう。

政右 成る程、さうさつしやれ。

ト男、箱を出し

男衆 此少ながら、當分の御禮の爲、お留の置かれ下さりませう。

政右 ハテサテ、義理々々しい。いつにても大事な事を。

男衆 イヤ又、お禮はゆる／＼と申し越しますでござりませう。

政右 これは／＼お志しぢや、慥かに受取りましてござりませう。

男衆 私にはお暇申しませう。

政右 御苦勞な／＼。よろしう申して下され。

男衆 おさらばでござりまする。

政右 ようござりました。

ト男、入る。後へ政右衛門、金拵り見る。鶯庵と合せ

鶯庵 取れますの／＼。

ト二人、ハ、ハ、ハ、と笑ふ。

政右 イヤ、モウ、これは端下でござりまする。この間、

こちらに好い病人を受取りました。

鶯庵 どのやうな病人ぢやの。

政右 高麗橋邊のお歴々でござりまするが、その家の大切

な一人娘、病性ほとんど知れませぬゆゑ、歴々のお醫者

衆が手を盡したその後を、少々手筋がござりまして、達

て私に頼られましたゆゑ、私しも、いろ／＼と辭退いたしましたが、なんのまゝよ、てんぼの皮。ハテ、診た

上で力に及ばぬ事なりや、變替へは有り打ち。なんでも行て見ようと存じまして、右の世話人と同道で参りました。なにが毛氈を引きまするか、金屏風でキラ／＼として、とんと朝鮮人の通り筋を見るやうでと思し召しませ。一家内と見えて、ツンよ／＼と容態を申しまする。さて脈を見ましたところが、病氣は慥かな所が見えまするゆゑ、少し私しの量見もござつて、先づ一服置きまして、今日また見舞ひましたれば、その一服が適中いたしましたと云うて家内の喜び、何の事はない、この戴醫者を生如來のやに、馳走たつばい致しましたでござりまする。

鶯庵 ハテナウ、得である事でござる。

政右 コレ邊様、あの病人を本腹さしたらば、五十兩はぶ

ら／＼。その時こそ、これまでお世話になつたお禮に、

二匁の旅辨を五匁づ、進ぜまするぞ。マア、喜んで下さ

りませい。

鶯庵 ハチサテ、それは好い金に取りつかしやつたなう。

コレ、我れらもあやかりたいや。

政右 さて邊様、爰に最前の勘前が二百文ある。この二百文とこの金一分、其許へ進上仕るぢや。





無類飛び切りと申すが手に入りましたゆゑ、貴公にお目  
 かけりと存じ、持参いたしました。御覽なされ。

政右 左様なれば、この眞珠に、あなた様の御秘法の一薬  
 を入れまして用ひます時は、立ち所に兩眼清しく相成  
 りまするかた。

鶏庵 サア、そこぢやて。眞珠と一薬ばかりで、大方二十  
 日あまりには、随かに請け合ひまする。

政右 それでは、日限が延び過ぎまするが、もそつと早い  
 工風はござりませうまいかな。

鶏庵 それもあれど、殊の外得難いものが要りまするで。

政右 ヘエ、得難いと仰しやる一薬は。マア、どのやうな  
 薬でござりまするな。

鶏庵 必ず他言は御無用。その得難いと申すは、十年以内  
 の巳の年の男の子の生血、その上、人に殺されたは能な  
 し。得心、或ひは切腹など、申すやうな血でなければ、  
 効かぬとやら申し傳へました。

政右 ハテナア。それは得難い一薬でござりまするな。

鶏庵 サア、それは氣の毒な一薬でござるてや。

政右 イヤ、それもあるまいものでもござりません。併

し、マア、その眞珠を、今宵私しにお貸しなされて下さ  
 りませんか。

ト云ふ。鶏庵、頭を掻き、氣の毒なこなし。

鶏庵 成る程、貴公の心腹も、とくと承知いたして居りま  
 すれども、これも未だ買ひ切らぬ預かり物、どうも氣の  
 毒ながら。

政右 イカサマ、大枚の金になる大切な物なれば、貸し難  
 いと仰しやるも御尤も。

ト思案して、懐中より打がへを出し  
 ハイ、これに金子六兩ござりまする。これをお前へお預  
 け申しまする程に、どうぞその眞珠をお貸しなされて下  
 されませう。

鶏庵 六兩。イヤ、なか／＼其やうな事では届きませぬわ  
 い。

政右 ム、この金では。

鶏庵 なんととして、まだ餘程届きませぬ。

政右 ヘエ。

ト思案して、布子羽織を脱ぎ、鶏庵が前へ置き

これがとんと私しが身代限りでござりまする。高で五百  
 か三百の物なれども、私しが如才のない所をお目につ

るのぢや。どうなりとして、眼が早う癒したうござりま  
する。どうぞその薬、私にお預けなされ下されますま  
いかな。

鶏庵 ハテ、天晴れ武士氣質ぢや。申さうやうもないなさ  
れ方。イヤモウ、申すには及ばねども、大枚の金高。ど  
うも、ハテ、氣の毒な儀でござるわいの。

政右 これ程に致しまして、お預けなされ難いと仰しやる  
は、マア、如何程の事でござりまする。

鶏庵 サア、これ程で百兩ぢやと申す事でござる。

政右 ナニ、アノ、金で百兩でござりまするか。

鶏庵 高い物でござるて。

政右 ホイ。

鶏庵 サア、入用と申すと、足元を見て高張りますてや。

政右 一向及ばぬワ。

鶏鶏 イヤ、申し、なんとも不躰な事でござるが、其許の  
心を察して云うて見ます。必ず腹を立てさつしやるな  
や。なんと、こなたの腰の物を、暫らくお預けなされぬ  
か。最前、代官どのが天晴れと譽めました。すりや、金  
子は調ひさうなものぢやが、暫らくお預けなざる、事は  
どうでござらうの。

政右 これは、御深切のお心遣ひ、忝なる存じまする。

併し、この一腰は、大切なる方より拜領いたしましたれ  
ば、例へ如何やうな儀があつても、一時も離します事  
は、致し難うござりまする。

鶏庵 ハテナア。

ト政右衛門、兩手を組んで思案して居る。ト奥より妙  
貞出て

妙貞 コレ、ヤイ、敷醫者め、ようもく、おれに喜ばし  
て置いて、此やうな銅脈を掴まし居つたア。

政右 なんと仰しやる。最前の一分が悪うござるか。

妙貞 悪い段か、眞赤な銅脈ぢや。こりや、おれに此やう  
な悪びんを掴まして置いて、榮耀らしい薬どころか、こ  
の楯は宿錢の代りにおれが預かり、この金もおれが取  
る。惜しくば明日中に算用せい。出入りが済まにや、二  
人とも追ひ出すぞよ。

政右 申し、それはあんまりでござりまする。それ皆やつ  
たら、算用より多うござりまするぞや。

妙貞 イ、ヤ、まだ足らぬ。薬屋どの、ござりませい。

薬屋 オイ。

ト薬屋、内より出る。

妙貞 なんと見やしやりましたか。

薬屋 見ました、聞きました。婆様、いかにお世話で忝ない。コレ、茲なお醫者様、醫者どの、敷醫者どの、貴様は、コレ、おれも、塚筋で、薬種屋の次郎兵衛と云うて古い薬屋ぢや。いつぞや、貴様はおれが所へ初めて来て、私しは長崎から来て、この傳法屋に宿取つて、療治に歩きまする敷醫者でござる。他國者ぢやに依つて近づきはなく、爰へ騙け込みました。少しづつ、の薬を續けてくれい、頼むと云うて金二分、前金におこしやつた。イカサマ、遠國から難ぎに来るお人ぢや。よもや、眞相はあるまい。商賣は相身互ひぢやと思つて、今までの薬は、皆、おれが續けたぞや。

政右 お前のいかにお世話になりましたでござりまする。それゆゑ、今日まで渡世仕りました。

薬屋 サア、仕りましたはよいわいの。その後に来て云はつしやるには、好い所の療治を受取りました。手が合へば私しも、人になりますと云うて、段々貴様の頼み。それも聞き届け、敷醫者には抜群過ぎた代物を呑み込んでやつたぞや。それから、とんと來ぬ程に、門も通らぬ。あんまり合點が行かぬに依つて、婆様を頼んで様

子を聞きに来て、おりや、あそこに隠れて聞いて居たわいの。コレ、お醫者どの、これで濟むかい。世界の達引が濟むかいなう。あの、まち／＼した顔わいの。

政右 イヤ、モウ、どう仰しやつても、お前様には一言もござりませぬ。

薬屋 ないか。ありさうなものぢやがの。

妙貞 返事はあらうが金はない。逆さまに振うても、銀錢の缺けもないわいなう。もうクド／＼云はすと腹減せに、踏みめしてやらつしやりませ。

薬屋 踏みめして金の代りにするは、向うは勝手。此方は大損。婆様、どうしませうぞいの。

妙貞 ハテ、どうと云うたら、この日腐り金と、この着物を引當てにして、お前と二人が分取りにしようより外の事は、ござりませぬわいなう。

薬屋 さうなりとして、腹減さなるまい。コレ、お醫者どの、こなたのやうな悪い企みをすると、どこぞでは捕まへられて、この日本橋の辻で曝され者ぢやぞや。思ひなしか、どうやら曝し者見るやうな顔ぢやぞや。

妙貞 今までのよしみに、今宵一夜は置いてやる。夜が明けたら二人ともに出て行かうぞ。茲な大泥坊め。

ト踏む。政右衛門、少し横に轉ける。

鶏庵 ハテ、よいわいの。其やうにせいでも大事な事ぢやわいの。

ト踏む。政右衛門、また元へこける。腕まくりしてぎしむ。

薬屋 なんぢや、云ふ事があるか。

ト政右衛門、口惜しき身振りにて泣く。

妙貞 薬屋様、奥へござれ。酒一つ進ませせう。

薬屋 忝ない。そんなら婆様。

妙貞 サア、ござりませ。

ト着物と金持ち、二人奥へ入る。

鶏庵 コレ、婆様、いつまで生きやうと思つて、無

得心な鬼婆め。せめてその着物なりと返し居れいやい。

返せ。

ト奥を見て行かうとする。

政右 イヤ、もうお心遣ひなされて下されまするな。

大事ござりませぬ。

鶏庵 エ、氣の毒千萬な。

トいろ／＼して

ホ、大事の病人を受取つて置きながら、それ／＼。

ト行かうとする。政右衛門、袖を控へ

政右 今宵のうちに金子百兩調へまして、あなたのお宅へ

参りませう程に、その代物、どつちへもお遣りなされて下さりまするな。頼みまするぞ。

鶏庵 そりや、氣遣ひさつしやるな。どつちへもお遣りはし

ませぬ。そんなら夜半の鐘の鳴るまでに。

政右 合點でござります。あなたのお所は。

鶏庵 鳥の内、中橋筋、三つ寺東へ入る。門の際で針屋の

隣。

政右 御支關の襖の繪は、蓋に鶴。

鶏庵 その鶴の首のやうに、長う待たして下さるなや。

政右 心得ました。

ト叫になり、鶏庵、入る。政右衛門、襦袢一つにて残

る。

先づ薬を逃がすまい爲に、請合ひは請合うたが、どうして才覚がならうぞ……併し、百兩といふ金は、高の知れ

た事、工面出来まいものでもないが、例へ金が出来ても、

十歳より内の巳の年の血潮、これがなければ間に合はず、

敵に出會つても、おりや、又五郎が顔は見知らぬ。

見知つたあの静馬が兩眼明かならねば、これも間に合は



ぬ。ハテ、血潮も欲し、金もなし、兩眼見えねば心も暗闇。目當ては一人、難儀は三つ。いつの無念を暗らすべき時節や來らん。ハテ、口惜しやなア……と云うて誰れを當途に談合する者もなし……これとてもよしない事。妻子は地獄の家裏とは、佛の戒め、思ふまいとは斷念しても、斯ういふ難儀に責められては、思ひ出さねばならぬ。男のおれでさへ思ひ出すもの、國許の女房や忤か、思ひ出して居るであらう。今日は首尾よく助太刀討つて歸らつしやるか、明日は無事な顔を見る事かと、待つ程に經て一年餘り。此やうに便りのないは、確な事ぢやあるまい。敵にもえ、逢はず、もしや病死でもさつしやれたかなぞと、案じ暮らし、泣き暮らし、ぐづぐづ云うて居たであらう。可哀やく。

ト伏して泣く。

坊主めも同じやうに、頭是なしに尋ねてゐるか。ハヤハヤ、眞是のない時分でもあるまい。坊主めも、もう七ツ、八の年、そんなら見事、親の事を思ひ出す心も出る時分ぢや。七ツ七思揃まれて居らう。

トふと氣を附け、指を繰り

待てよ、忤めは一廻り下の巳の年、七ツ巳の年。

トまた指を折り  
最前、鶴庵どの云はれた一味の妙薬、調合の血潮は七歳の男の子、巳の年、巳之助。即ち、我が忤であつたか。エ、忤ない……例へ金が出來ても、その血潮なければ用に立たぬ。持ち合せは忤巳之助、一時も早う。

ト行かうとして

イヤ、國許までは往き戻り二十里の餘もあり、すりや、今宵の間に合はぬ。金はあつても忤が居ねば間に合はず。

トいろ／＼して

ホ、これもハヤ、望みの叶ふは足許へなつて來たれども、一つとして今、手に入らぬは、よつく武運にも盡き果てたか。

トべつたりと座り大泣き。ト花道よりわたれ、笈指、菅笠、杖、順禮の姿。己之助を脊に負ひ出る。後よりお袖、同じく順禮の姿、杖、風呂敷包みを少し負ひ、順禮順にて出る。

たれ 四番に和泉の権尾寺、深山路や檜原松原分け行けば、権の尾寺に歸ぞ勇むる。

そで 申しおたねさま、爰はどこでござりますえ。

たれ さればいなう。大方爰が長町といふ、宿屋のある所であらうわいなう。

そで お前様も、いかうお草臥れさうな。お足元が悪い、早うお泊りなされませいなア。

たれ さればいなう。巳之助が寝やつたので、きつうしんどうなりましたわいの。

ト政右衛門の側へ行く。

申し、ちと物が尋ねたるござりまする。長町といふ宿屋のある所は爰で、

政右 アイ、爰でござんすが。

ト政右衛門と顔見合せ

たれ ヤア、お前は政右衛門さまではないかいなア。

政右 女房どもか。

そで ほんに政右衛門さまぢやわいなア。

政右 お袖どのか。

三人 これはしたり。

ト惻りする。

政右 マア、二人ともに来たか。

ト政右衛門、二人を連れて内へ入る。あたりを見て

たれ 好い所でお目にかゝりました。これといふも三十三

ヶ所の観音さまのお引合せか。エ、有り難いなア。

政右 わが身達の嬉しいより、おれが喜びを思ひやつても。さうして巳之助めは、達者なか。

たれ 達者な段かいなア。ほんに風一つ引かした事はござりません。ソレ、父様に逢や。

巳之 父様かいなう。

政右 巳之助か。

ト抱いて上へ直し

何よりかより、われに逢ひたかつた。嬉しや、よう

マア健で、よう来てくれたなア。

ト大きな聲で云ふ。

たれ オ、けうとい物の云ひやう、さしやんすわいなア。

政右 イヤサ、坊主めを見て、あんまり嬉しさに、それで

ナア巳之助、よう来てくれたなア。われが来たので、お

れが願ひが叶ふわいな。

たれ 巳之助が、なんの願ひでござんすえ。

政右 ハテ、逢ひたいと思つてゐる、おれが願ひが叶

うたといふ事ぢやわいの。

たれ ても仰山な、物の云ひやうさしやんす程にの。

政右 それはさうと、わが身達は、なんとしてこの順禮姿は、とんと合點がゆかぬ。どうぢやぞいの。

たれ さればいなア。あなた方がお國を出なされて、今日か明日かと待てども、何の便りもなく、待つ日数は早いもの、月も替り日も替り、數へて見ればもう一年の餘り。已之助はせがむ。この袖さんは、逢ひたいくと、朝から晩までせがましやんす、わし一人の難儀、それでわたしが身もあられず、詮方盡きてこの西國、同行三人。宿所々々で云ひ明かし、泣き明かし、祿に一夜も寝た事もござんせなんだ。その念願で今宵といふ今宵、巡り逢うた、嬉しいは嬉しいけれど、唐木政右衛門といふお姿が、あらう事か、なんの罰ぢやぞいなア。

ト泣く。

政右 お道連れ、わたしとでも、厩馬さまに尋ね逢ひたいが、心の誓で爰まで参りましたわいなア。それはさうと政右衛門さま、お前様はこのお宴いに、なんとしていから薄着で、このお姿でござりまする。

政右 おれがこの形か。

二人 なんとした事ぢや。仰しやつて下さりませいなア。政右 この形は……オ、それ、それ、行をするのぢやわい

の。

たれ なんと仰しやりまする。行と仰しやるは、なんの行でござりまする。

政右 おれが行といふのは……ソレ、二十三夜の行をするのぢや。南無徳大勢至菩薩々々々々々々。

政右 二十三日、もう月魄もお上がりなされます。マアマア、お小袖を召しませいなア。マア、わたしが小袖なりとお召しなされて下さりませい。

ト風呂敷包みより、又五郎が羽織を出す。政右衛門、紋所を見ても。

政右 變つた物を持つておぢやつたの。

たれ さればいなア。この羽織は、いつぞや鎌倉にて、父様がお討たれた場所で、落ちてあつた又五郎が羽織。敵の印を持つておぢやつたのでござんすわいなア。

政右 その敵又五郎が羽織を、爰まで持つて来たその仔細は。

たれ さればいなア。三十三ヶ所の觀音さままで、お二方便息災であるやうに宿願かけ、二つにはこの羽織を佛前へ直し、敵又五郎、命に別狀ないやうにと、敵の健固を祈るのも、どうぞ首尾ようお二人に、敵を討たせましたい

ばかりぢやわいなア。

政右 そんなら、これが又五郎めが羽織ぢやなア。

ト羽織を打ちつけて

暫らくも穢はしいなア。

ト踏む。

政右 申し政右衛門さま、恐ろしい山坂を越えて来たも、

どうぞして静馬さまに逢はうと思ふが、わたしが楽しみ。

どうぞ静馬さまに逢はせて下さりませいなア。

ト泣く。

政右 成る程、道理々々。静馬に逢はしたいけれども、爰

には居ぬわいの。

政右 なんと仰しやる。爰にはござらぬかえ。

ト二階の障子を明け、静馬、出ようとする。政右衛門、

これを見附け

政右 コレ、出まい〜。まだぢや、出まい〜。

政右 出まい〜とはえ。

政右 サア、静馬は爰に居ぬに依つて、居ぬ所へ滅多に向

うへ出ると悪い。そこで出まい〜と云ふ事ぢやぞい

の。

政右 サア、そんなら出や致しませぬわいなア。

政右 イヤ、コレおそで。それ程、静馬に心底を盡す氣な

ら、其方に聞きたい事がある。

政右 静馬さまのお身にか、つた事なら、なんなりとも聞

きませうわいなア。

政右 もし今にも静馬が身分に、金の要らねばならぬ事が

あつたら、わが身、傾城流れの勤めをしてなりとも、静

馬が用に立てうと思ふ心があるか。

政右 アイ、勤めは愚か、命を捨て、なりとも、お役に立

つが、女房の習ひぢやわいなア。

政右 オ、出かしゃつた〜。必らず詞を番うたぞや。

政右 なんとのはり申しませうぞいなア。

ト政右衛門、喜び、最前の羽織を着て

政右 申し〜、二階にごさる京のお客さん、ちよつとお

目にか、りたうござりまする。

ト呼ぶ。オ、イ〜と返事して、一徳下りて来る。

一徳 お呼びなされたは、其許さまでござるか。

政右 成る程、拙者でござりまする。さて最前、途中で仰

しやれた奉公人衆の事、どれぞ好い代りがござりました

か。

一徳 最前申す通り、あつたら代物を取らずに、歸りまし



# 六 森 目



天保五年正月森田座所演番附

たわいなう。

政右 サア、それでお呼び申したは、幸ひ好い奉公人があ  
るが、御相談なされませぬか。

ト云ふと、お袖、恥かしきこなしあり

一徳 それは耳寄り。して、その奉公人は、どこにゐられ  
まするぞ。

政右 息ぢ彼奴。どうでござります。

一徳 其許のお娘御か。見事、育ちよくお仕立て、申し分  
なし、相談いたしませう。

政右 マア、どの位なものぢやなア。

一徳 何がなしに下商ひ。とつと百兩出させう。

政右 マア有り難い。どうぞ只今、證文なりますまいか  
な。

一徳 幸ひ、證文も認めてある。サア、親判なされい。

ト矢立を出し、政右衛門、名前を認め

政右 サア、印形いたしまする。

ト判押す。

一徳 こなたが母御ぢやの。これもよし。さて、大法ぢや  
が、請け判は誰れぢや。

政右 わたしが致しませう。

一徳 それも身内ばかりでは、表向きが濟まぬわいの。

政右 そんなら他人の請け判を。

一徳 心當りがあるか。

政右 ござりますすく。

ト掛け硯を出し、狀を書く。

コレ女房ども、これを鶏庵さまの所へ持つて行きや。

一徳 ムウ、そんならお前、鶏庵さまの請け判か。そんな  
ら慥かぢや。

たれ わしや、その鶏庵さまの所は、知らぬもの。

一徳 あれが知つてゐる。連れ立つて行きませう。あつち  
で印形取つて金渡し、直ぐに八軒屋へ出ませうわいな  
ア。

ア。

政右 そんならお前、鶏庵さまお近附きかえ。

一徳 上り下りに、あの向ひの駕籠の甚兵衛が所へ行くに  
依つて、知つて居ります。鶏庵さま、近づきぢやて。

政右 それは幸ひでござりまする。そんなら左様になされ  
て下されませ。コレ女房ども、その手紙を見せれば、何

もかもあつちで合點ぢや。金受取りやつたら、鶏庵さま  
から来るものがある程に、それも取つて戻りや。大事の  
物ぢやぞ。

一徳 そんなら行きませうか。みな行かつしやれ。

政右 そんなら、もう行くのかえ。どうぞちよつとなりと  
静馬さまに。

ト泣く。

たね ならう事なら、たつた一夜。

政右 ハテ、それに如才があるものか、長い事でもない、

ちつとの間ぢや、辛抱しや。

一徳 いつでも證文の段になると、この涙には困つたもの

ぢや。サア、行かつしやれ。

たね お供いたしましたせう。

ト一徳、おたね、お袖、三人入る。ト二階より静馬、

探り出て

静馬 政右衛門さま、お袖は、もう参りましたかな。

政右 せめて一日なりと思つたれど、どうで別れねばなら

ぬ事ぢやに依つて、心強う。

ト泣く。

静馬 不便な事いたしました。私しゆゑに流れの勤め。

ト泣く。此うち、政右衛門、我が着てゐる振り袖を兩

方ともに握り

政右 これはお袖が小袖、替へくにて互ひに餘所ながら

祝言した袖詰めの中袖、せめてこの袖なりと可愛がつて  
やりや。

ト静馬に渡す。静馬、受取り抱きしめて泣き轉げる。

子役に行き當り、探り

静馬 こりや誰れぢや。巳之助さうにござります。よう

寐て居ますぞえ。

政右 可哀いや、なんにも知らずにか。

ト少し泣き

世話ながら、添乳してやつて下され。

ト唄になり、静馬、巳之助を抱き、探りく二階へ上

がる。表に人音する。政右衛門、ちやつと羽織を着る。

川角源内、半合羽、三度笠、旅の形にて

源内 體かに、この邊と聞きました。

ト書付けを見て、

傳法屋、爰だく。ちと物が尋ねたい、どなたぞ頼みま

せう。

政右 なんの御用でござるな。

源内 イヤ、御免なませう。

ト内へ入り

外の儀でもござりかせんが、この宿に鎌倉の御浪人様は、

御存じござりませぬかな。

政右 エ、鎌倉の御浪人と申すは、どなたでござるやら。して、先づ御用の筋は何事でござるな。

源内 されば、拙者儀は、川角源内と申す者。さる御方よりの御状を持参仕りましたゆゑ、お渡し申したく、伺候いたしてござる。

政右 鎌倉の浪人と申すは、承はりませぬが。

ト云ふうち、政右衛門の着てゐる羽織に、又五郎の紋付きあるゆゑ、源内見て

源内 ヤア、お前は又五郎さまでござりますか。

政右 ア、コレ、手前は左様な者ではござらぬが。

源内 成る程、お隠しなさるは御尤も。世をお忍びはなさる、お身の上、お包みなさる、は御尤もに存じまする。

政右 なぜ又、其やうに云はつしやるぞ。

源内 イヤモウ、お隠しなさる、には及びませぬ、お前の召してござるその羽織の御定紋で、又五郎さまとよく見請けましてござる。

ト政右衛門心附き、思案して

政右 又五郎なれば、なんと致した。

源内 イヤモウ、主人が殊なるお前様のお身の上を案じ居ります。拙者に申しつけ、密かにお行くへを詮議いたし、お目にかゝりて萬事の儀お話し申し、その上定めて御不自由ならんとあつて、少々金子も差越しましてござる。先づ申し上げませうは。

ト此うち、二階より又五郎出かけ、留めるこなし。政右衛門、二階の方を見る。源内も見。三人顔見合せ、又五郎、障子。びつしやり閉める。源内、身持ちへして

源内 御覽じましたか。大事を立ち聞きした奴。其まゝには置かれぬ。おのれ、眞ツ二つに。

ト二階へ行く。又五郎、上より下りて

又五 待つた、聊爾せまい。即ち又五郎といふは。

ト政右衛門と顔見合せ

サア、その又五郎といふは、慥かにソレ。

ト外へ出ようとする。政右衛門とめて

政右 こりや、こなた、どれへござる。

又五 イヤサ、その又五郎は爰に居ぬに依つて、詮議いたして進ぜうと存じて、それで。

トまた行かうとする。政右衛門、ちよつと留めて



政右 ハテ、いかにお世話でござるの、其許に苦勞はかけぬ。矢張り其まゝ、これにござりませ。

ト突き放す。ト又五郎、行かうとする。

源内 大事を聞いた武士、其まゝには逃がさぬ。是非に逃げうとお云やると、生けては置かねぞ。

ト懐中より種が島を出し、さしつける。

又五 コリヤ、魚相すな、早まるな。此やうな迷惑な事はない程にの。

ト頭を掻く。

源内 何が迷惑、動くまいぞ。さて申し上げます。主人より申し越しましたは。

ト云はうとする。又五郎、頭を掻き

又五 コリヤ、減多に大事を云ふまいぞ。そりや違うた。その又五郎どのはたつた今。

ト行かうとする。

源内 どつこい、動くと胸腹打ち貫くぞ。

又五 これは氣の毒。さうではないわいの。とんと間違うて、その又五郎は外を詮議するに及ばぬ。只今連れて来る。

ト行かうとする。

源内 どつこい、その手は喰はぬぞ。動くも命がないぞ。ト鐵砲を構へる。

又五 これは難儀な事ではあるわいの。せう事が無い、身も武士ぢや、他言いたさぬといふ金打。

ト刀を抜かうとして竹ゆゑに抜かれぬおかしみ。脇差を抜きかけ、扇にて打ち

武士の金打、斯くの通り。

源内 武士の金打あるは、よもや他言もあるまい。

又五 ても、しんどい事かな。

政右 して、様子は。

源内 然らば申し上げます。拙者事は、近藤野守之助が家來、川角源内と申す者。主人申しつけますは、拙者

その又五郎どの存じませぬゆゑ、この繪姿を差越しましてござる。この繪圖に引合せ、相違なくば、委細申し上げよとの儀。先づ、この繪姿を御覽下さりませい。

ト源内、政右衛門を繪圖に引合せ見て

この繪圖とこなた様とは抜群の相違。ハテ、心得ぬ。尤も御紋所は又五郎さまなれども、この繪圖に合はぬこなたは。

政右 又五郎ではござらぬ。

源内 それにこの紋所の羽織は。

政右 こりや又五郎が着替へ。身共は身内の者。拙者とても尋ねて居ります。折々、又五郎これへ参ると承はり、この間よりこれへ入込んで、待ち受けて居りますてや。

源内 すりや、其許は、又五郎どの、身内のお方。それで様子が見れましてござる。然らば、とてもこの儀に、又五郎へ直々に様子申し上げたう存じます。この繪圖は御兩人へお預け申します。又五郎どの、これへお出でなれば、お止め置かれ下さりませう。拙者は少々心當りの方ござれば、其方を詮議いたし、また後程これへ参りませう。萬事、お二人様をお頼みまするぞ。

政右 左様ならば後程、これへお出でなされ。待ち受けて居りまする。

源内 お暇申しませう。

政右 ようお出でなされました。

ト唄になる。源内、入る。又五郎、二階へ入る。政右 衛門、繪圖を懐中へ入れ、思案して、表の門を閉める。

繪圖に合せて又五郎を詮議する一方の武士は、こりや譯

が知れてあるが、その武士に物を云はさぬ奥の武士。な  
んであらうぞ、もしや彼奴が。

ト繪圖を出し、奥を見て引合せ

とんと違うてある。それでもなし。ハテナア。先づ何にもせよ、面を見知らぬ身共に、この繪圖を渡したは、此方の手が、り。最早本望達する時節。とてもこの事に静馬が眼病、今宵中に本服させねばならぬわいの。

ト唄になり、柵櫓武助、向うより走り出て、門を叩き  
武助 頼まう。爰明けい。

ト七しく叩く。

政右 何者ぢや。

武助 さう仰しやるは、旦那政右衛門さまか。

政右 武助ぢやないか。

武助 アイ、申し旦那様、度々お詫び申し上げますけれど、お聞き届けない私が身の誤まり。何卒御料簡なされ、御勘當御赦免下さりませうならば、有り難う存じまする。

政右 ヤイ、もろく、込み入る宿屋、單に耳。いらざる勘當の詫び。叶はぬ事ぢや。キリ、立つて行け。

武助 その段を、幾重にも、



政右 云ひつけた一つの功が立つたか。

武助 成る程、敵又五郎が在所を知らず密書、拙者が手に入りましてござる。

政右 ナニ、敵の密書が手に入つたか。出かした。

ト表を明け、武助、内へ入り

それでおのれが功は立つ。サア、密書は。

武助 サア、その密書は。

政右 早く出せ。

ト武助、密書を呑んだといふ思ひ入れ。胸を掻き口惜

しきこなし、いろ／＼ある。

此奴、何をひろぐ。早く密書を出さぬか。

武助 サア、その密書は。

政右 その密書は。

武助 サアそれは。

政右 どうした。

武助 呑んでしまひました。

政右 呑んだとは、

武助 般若坂の邊にて、又五郎が家來に出ツくわし、難な

く一通奪ひ取り歸らんとせし所に、彼の家來ども大勢、折り重なり、密書を返せと取りにかゝる。渡さじと組み

合ひしに、拙者は一人、相手は大勢。渡すまいと口に啣

へ、取り合ひ働く難儀の場所、致し方なくその密書、呑み込みましてござりまする。

ト口惜しきこなし、政右衛門、驚ろき

政右 たわけ者め、例へ如何程功になる密書にもせよ、呑

み込んでしまへば、手に入らぬも同じ事。それが一つの功に立つなど、は、ごくにも立たぬたわけた事。早く歸

れ。

武助 それはあんまりお情ない。口惜しい。無念にござる

わいの。

政右 まだ／＼、くどく／＼と世迷言、聞く耳持たぬ。はや

歸れ。

武助 ぢやと申して。

政右 ハテ、うせうてや。

ト武助、表へ連れ出て、門口を閉める。武助、表に

て、いろ／＼無念のこなし、

武助 申し旦那、政右衛門さま、そりや、あんまりお心強

い。申し／＼。

ト立つたり居たり疎く。政右衛門、内にて様子窺ひ居る。二階にて泊り人の聲にて



二階 サア／＼、稽古衆々々々。夜が更けた。明日の間に合はぬ。もの月魄が上がらつしやつた。稽古せい／＼。

ト内にて云ふ。ト二階の障子明ける。ト巳之助一人居る。政右衛門、いろ／＼工風の仕打ちあり、掛け行燈に羽織をかけ、獨り言のこなし。表より門の戸を叩

武助 申し、旦那どの、旦那様、そこにかえ。口惜しうござりまする。無念な。どうぞ勘當、お救され、敵討ちのお供をさせて下さりませ。申し／＼。

政右 ハテ、喧ましい。例へどのやうに願うても、叶はぬ元より又五郎に今逢うても、いま敵討つ事は叶はぬ。

武助 なんと云はつしやる。又五郎に逢うても討つ事はならぬとは、こりや腰が抜けたか。なんで敵が討たれぬ。なぜ討たれませぬぞ。

政右 又五郎は、討たれぬ義理がある。

武助 敵の又五郎に、なんの義理がござる。

政右 昔巳之助は、おれが子供ぢやない。敵又五郎が子ぢやわい。

ト中二階の巳之助、恟りする。おたれ、柴垣より出て様子を聞いてゐる。表にて武助も驚き、ハッと云うて

下に居る。二階には、和田合戦の淨瑠璃語る。

おのれも聞いて恟りし居るか。おのれがうるたへた性根と、昔巳之助が立派な心と比べて見れば、おのれはきつい馬鹿者。女房が生んだあれが子は、七夜のうちに死んだるゆゑ、もしや女房が聞いて煩ひにもならうかと、いろ／＼心を病める折に、幸ひ又五郎が女房、同じ日に男子出生、内々にて貰ひ入れ、替へ置いたるあの巳之助。誠は又五郎が眞實の子ぢやわい。嬉しや親には生れ勝つた天晴れな性根、子ながらも恥しい、また今まで敵をえ、討たぬも、あの昔ゆゑ。巳之助を實の親、又五郎へ返し、恩を請けたる一禮を云うて、その上にこの敵討ち。又この事を昔に云うて聞かせぬは、彼奴は怜悧者ぢや。義理も理屈もよう知つてゐる巳之助ぢや。この様子を聞くと、生きては居ぬ。死ぬる。イヤ、死なにやならぬ。殺すまいと思つて云はぬは、彼奴が不便さ。女房はこの様子を知つて、殺してしまへと云へど、おりや彼奴が可愛い。殺すまいと思ふゆゑ、如何にもえ、云はぬわい。

ト二階へ聞かずやうに、聞き耳してゐる。表には武助入りたいたい思ひ入れ。この合ひ方。

武助 エ、この月はなぜ出て下されぬ。内へ忍び入りた  
うても、勝手は知らず。どこがどこやら見えぬ。早う月  
が出て欲しいなア。

ト此うち、淨瑠璃。ト武助、あせる。二階に巳之助、  
政右衛門が云ふを聞いて泣いて居る。三方仕打ち、二  
階にて

巳之 いま父様の云はつしやるのを聞けば、わしは、父様  
や母様の子ではなうて、敵の又五郎が子ぢやに依つて、  
その縁で敵が討たれぬと云はつしやる。それでわしゆる  
父様は腰抜けと人が笑ふである。わしは、此やうに足は  
立たず、友達の子供が腰抜けと云ふさへ口惜しかつた。  
それに又父様を腰抜けと云はすが、おりや口惜しいわい  
なる。もう父様にも、母様にも逢はぬが、悲しいわいな  
う。エ、因果な者ぢやなア。

ト足指りして泣く。政右衛門、始終を聞いて袖を口に  
銜へ忍び泣き、辛抱の仕打ち。ト廿三夜の月、引幕の  
上へ出す。表の武助、忝ないと捨ぜりふあつて、門口  
の松へ登るうち、また二階にて淨瑠璃とまる。また腹  
切らぬといふこなし。政右衛門、一人足音し  
板額そろく……外に興市が身拵らへ、いづれも様子

を。

政右 コリヤ、待てく女房、わりやどこへ行く。

ト足音して

なんぢや、敵の胤ぢやに依つて、あの悴を殺しに行く  
か。コレヤイ、われが殺さいでも、あの巳之助は伶俐者  
ぢやに依つて、敵の又五郎が子ぢやと知つたら、腹切  
る。侍ひらしう死ぬるわいやい。

トまた足音して

ハテサテ、よいてやく。兎角云はぬが花。聞いたら死  
ぬる。ハテ、外から云うで死んだら是非に及ばぬ。暫し  
のうちなりと助けて置きたい。時節を待ちや。よいか。  
合點がいたか。サア、マア、おぢやいなう。

ト三人の足音に替へる。

トこれ聞いて。

武助 人の心も知らいで、面白さうに淨瑠璃どころかい。  
この奴めに腹切れといふ天道様の教へか。ぢやと云うて  
も不死身なれば、腹は切られず。

トいろくあり、二階にて巳之助、政右衛門が獨り言  
を聞き、うなづき、脇差を取り

巳之 父様のお詞は、せめて腹切つて武士らしう死ねば、

父様の武士も立つ。伯父様も敵討たつしやる。例へ又五郎が子でも、死んでしまへば矢張り父様、母様の子になる。さうぢや。

ト腹切る。

アイタ、、、、アツ痛い。術ないわいなう。

政右 出かした。

ト苦しむ。政右衛門、堪へられぬ憂ひ、中二階を拜み、泣き倒れる。ト薄ドロ、にて、柴垣より大蛇、仕掛けにて手水鉢前の竹へ登る仕掛け。政右衛門、キリとなり窺ひ、目を放さず見る。蛇、以前又五郎が刀を入れし竹へ登り、竹の真中にて頭切れ、胴より下は落つる。頭は手水鉢へ飛び入ると、ドロくにて吹き水にがる。政右衛門、キツと見て

ハテ、不思議なる事を見るものぢやなア。寛永の頃、鎌倉にて、渡邊金右衛門と云ひし人あり。同じ朋友に澤井又左衛門と云ひし者、正宗の一腰、重代とあつて秘藏する。この金右衛門、この正宗を深く望めども、又左衛門重代なりと譲らず、渡邊氏は只管に譲りくれと望む。又左衛門も是非に／＼と云ふに、然らば重代なるに依つて譲る事ならず、只盗み取られよ。さすれば、先祖への云

ひ譚なりと、互ひに武士の身を守り、明後晩と刻限を極めしに、折筋暮れ方なれば、澤井氏は壺の内に花壇の草を取らんと鉄持つ草を穿つに、過まつて蛇の頭を切り、その後、蚊帳に入つて金右衛門が来るを待つに、しきりに咽喉湯くゆえ、傍へなる鎌子にかゝる。金右衛門は忍び居て、始終を見るゆえ、ヤレその湯を飲み給ふな、毒氣ありと止むる。不思議なりと又左衛門、鎌子の内を見るに彼の蛇の頭、麗々とあり、これに依つて金右衛門は我が命の親なりとあつて、ゆゑなく正宗の刀を譲る。誠その如く、いま、目前に蛇の竹に登り、おのれと頭切れ手水鉢へ飛び入りしに、忽ち水氣立ち上るは、察するどころ、竹の中に、名作あるに極まつた。ハ、、、稀代の業を見る事ぢやなア。

ト云ふ。武助、堀より飛び下り

武助 何にもせよ。この中。

ト竹を抜き見る。内より刀出る。武助、取り、透して見て

こりや、疑ひもなき正宗の刀。

ト我が腹へ突き込む。不死身、切れたるゆゑ、憚りする仕打ち。

ヤア、この刀の、我が體へ立つたるは。

ト云ひながら苦しむ。

政右 ホ、驚く事はない。正宗の刀の徳にて、星に映して切る時は、如何なる不死身たりとも速やかに切れる。すりや、この刀が正宗に極まつた。ハ、ハ、ハ、忝なやなア。

ト天を拜し喜ぶ。中二階より靜馬、巳之助の死骸を抱きて下り

靜馬 政右衛門さま、巳之助がこの死骸、いちらしい事を致しました。

ト泣く。政右衛門、恐ひの仕打ち。此うち、武助、腹切りながら、手水桶を引寄せ、腸を洗ふ事ある仕打ち。柴垣よりワツと泣く。政右衛門、聲かけて

政右 女房ともでないか。

たれ アイ、最前、お薬を貰うて戻つたけれど、どうやらお前の素振り、合點ゆかぬゆゑ、裏道から忍んで、柴垣の藪で聞いて居ましたが、可哀さうに、年端もゆかぬ巳之助が、眞實の事と思ひ、腹を切つて死んだ心の、いちらしうて、身も世もあらぬわいな。まだその上に、死んだ後では、矢張りお前やわしが子にしてくれ

と云やつたからは、冥土の道も迷ふぢやあらうと、そればつかりが悲しうて、我が子の死ぬるその下に、顔さへ見ずに、お念佛ばかりで泣いて居りましたわいなア。

ト大泣き、此うちに政右衛門、鉢へおたれが持つて歸りし薬を入れ、巳之助が血を絞り込み、靜馬が前に置く。

政右 サア靜馬、この妙薬を服みやれ。

靜馬 如何に、わしが病氣を癒したいと云うて、お袖が身の代で調へたこの薬、巳之助が血潮、これがなんと服ま

れませうぞ。

ト泣く。政右衛門、キツとなり

政右 政右衛門が心を碎いたこの薬、服まぬと云ふのか。

靜馬 それでも、現在。

政右 眼病が本服せいで大事ないか。

靜馬 サア、それは。

政右 敵を討たいでも大事ないか。

靜馬 サア、それは。

政右 サア。

靜馬 さうぢや。





四世中村歌右衛門の唐木政右衛門

ト服む。武助、腸の内より、件の状を出し、差出す。  
 政右衛門取つて血潮の状を角行燈へ張りつけ、透かし  
 見て

政右 すりや、又五郎は、この所に居るとな。出かした武  
 助、樹當赦したぞ。

武助 御勘當お赦し下さるゝとな。へ、有り難し奈な  
 い。ウン。

ト後へ倒れ死ぬる。ト奥より入込みの武士、一人出て  
 侍ひ その正宗、渡せ。

ト取りにかゝる。政右衛門、取つて押へ  
 政右 正宗を欲しがらるおのれは。

侍ひ 知れた事、又五郎どの、門弟。  
 政右 おのれが忍び居るからは、推量に違はず、最前の侍

ひは、又五郎であつたよな。  
 ト侍ひを押へる。ト侍ひ苦しむ體。

静馬 そんなりや又五郎は、疾からこの家に。

政右 居るを知らずに取逃がしたは、残念なわいやい。  
 ト押へた侍ひを突き放す。

侍ひ いづれもこれへ。  
 ト奥より、門弟三人出て

三人 静馬、政右衛門、返り討ぢや。観念をせい。

ト切りかける。四五人相手にして、静馬、立廻り、皆  
 皆を追ひ込む。

たれ 静馬、其方は眼が見えるかや。

ト静馬、正宗の刀を、いろ／＼と振り廻して見て

静馬 兩眼ともに、明らかに見えまする。

政右 誠に妙薬の驗。

己之助が孝行。

たれ 女房が深切。

政右 天の恵みに叶うたか。

三人 エ、忝ない。

ト奥より二人出て、政右衛門、静馬に切りつける。兩  
 人、一人づゝ胴切りにする。

たれ 天晴れ正宗の切れ味。

政右 拜領の鐵味。

静馬 政右衛門どのお先へ。

政右 合點ぢや。

ト尻からげる。この氣味合ひよろしく。

六幕目 道行の場

役名 渡邊静馬、祇園町一徳、鍮持ち權助。池添孫八、云ひ號け、お袖。

造り物、淺黄幕にて、橋が、りは並木。板松所々にあり、小鳥雀數多あつまり。コイヤイ打ち切る。幕明く。

ト百姓二三人連れ立ち出て、いろいろ捨ぜりふあつて

百一 昨夜は村はづれの定が所での遊び事。おいらは今日、仕合せが悪かつたわいやい。

百二 ソレイヤイ、隣在所の敷醫者め、彼奴、好い仕事をさらしくさつた。シタガ此やうな事と思ふなら、寄から内に居て、嬢を抱いて寐やうなら、結句面白い目をするであらうに、眠い目を夜通しに、さて／＼苦しい事であつたわい。

百三 サア／＼、早う内へ去んで、おりや直ぐに朝茶腹で、田畑へ出かけ船ちや／＼。

ト此やうな事云ひ／＼、臆病口へ入る。ト向うより一

徳、親方の形、半合羽に一本差し、下男二三人、一徳といふ提灯ともし、うろ／＼とお袖を採す思ひ入れにて、出て来て、本舞臺へ来て

一徳 ても、太い奴ぢや。残る所なく採せ／＼。  
男三 心得ました。

ト方々稻村の間、また並木のあたりを採す。こなしあつて、また兩方へ別れて入る。一徳一人残りゐる。また引返し、臆病口、橋が、りより出て

男一 田道、畦道いろ／＼と  
男二 探しましたも

男一 そのらあたりには見えませぬ。

一徳 然らば、あの山傳ひに、一探しいたさう。身に付いて斯う參れ。

三人 ハア、。

ト狂言師のやうな捨ぜりふあつて、一徳に付き添ひ、男三人、橋が、りへ入る。とチヨンチヨンにて、淺黄幕、切つて落す。

へ戀しさに、はるばる國から尋ね来て、思ふ殿御に引別れ、君の顔さへえ、見ずに、祇園町へと賣り渡され、夫の爲に流れの身、思ふ男に逢ひたいと、夜道ひそ／＼迎

りくる。

トお袖、頬かむり、抱へ帯、傾城の形、花邊よりひそひそと出て

そこで 嬉しや、今のは親方さんではなかつたさうな。

トこなしあつて

はるばる鎌倉から尋ねて来た甲斐もなう、静馬さまのお爲とは云ひながら、祇園町への勤め奉公、親方さんや朋輩衆の氣兼ねはおろか、どうぞ静馬さまのお顔がたつた一度拜みたいと、駈落して出ては来たれども、今頃はどこにどうして居さんすやら。

ついで云ふ事も瀟灑れて、男を思ふ獨り語、憂ひ催ふす旅の空。

ト向うより静馬、旅虚無僧の形にて、尺八を持ち、そろ／＼出て来て、本舞臺にて顔見合せ

静馬 ヤア、其方は。

そこで お前は。

静馬 何にゆゑに、かゝる所にたつた一人……これには定

めて様子があらう。サア／＼、どうぢやいなう。

そこで 何をとは腑慾な、たつた一目、お前の顔が見たさ

静馬 それゆゑの駈落ちか、ても未練な……とは云ふもの、この静馬が眼病ゆるに、しほらしい其方の勤め。可愛

いは甥の巳之助、わしゆゑの切腹、政右衛門どの、謀り事とは云ひながら、朝夕思ひ出す事ばかり。さりながら、おのれ澤井又五郎、追ツつけ首尾よう敵討ち負ふせ、めでたう歸國いたした上、又改めて二度の祝言。

そこで でも、それがいつの事やら。

静馬 敵討ち負ふせるまで、マア、それまでは辛抱しや。

そこで アイ。

ついで云ふとは云へど女氣の、心細くも抱きつくを、振り放して。

静馬 未練な事を。

ト此うち、向うの方にて、大勢の男、アリヤ／＼と云ふ音するゆゑ

そこで 随かに、あの追手は親方さん。

静馬 見付けられては互ひの大事、一先づ爰を退いてたも。

そこで とは云ひながら。

静馬 早く行け。

トきつと云ふ。



そこで アイ。

ト向うへ走り入る。橋かゝりより一徳、男、みなくお袖を尋ね出て、静馬を見てこなしある。静馬、睨みけるゆゑ、怖々恐れ臆病口の方へ入る。とバタ／＼にて花道より池添孫八、六十六部の形、捕り手大勢とタテし、後より鎧持ち権助、附き出る。ト此うち、静馬、稻村の脇へ小隠れする。

権助 うぬは正しく政右衛門、静馬が家來と見た。ソリヤ。

大勢 合點ぢや。

孫八 うぬらは何奴ぢや。

権助 櫻田林左衛門さまの家來たる我れく。静馬政右衛

門が由縁の者と見るならば、人違ひでも苦しうない、討つて取れとの仰せゆゑ、下知を受けたる鎧持ち権助。サ

ア、尋常に勝負々々。

ハ勝負々々と押取巻く。

ト大勢の組子、みなく孫八にかゝる。この時、静馬出て、權助みなくを相手に烈しくタテあつて、皆々を追ひ込む。

孫八 静馬さまか。

静馬 孫八か。

孫八 して、お旦那政右衛門さまには。

静馬 この山道を左手へ、追分にてお目にかゝる筈。其方は、先へ廻つて、右の様子を、

孫八 そんなら、私しめは先へ廻つて早く行け。

静馬 孫八、向うへ走り入る。

ハ別れてこそは

ト三重にて、静馬、向うを見送る。

ひやうし幕

## 大詰

伏見宿屋の場

伊賀上野仇討の場

役名 渡邊静馬。澤井又五郎。同云ひ號け、お

その。奴、作藏。鎧持ち、傳内。池添孫八。櫻田

林左衛門。川角源内。山室榮藏、宅間傳平。安達

仙兵衛。八多喜平。草見五右衛門。星合段九郎。

女按摩、おかな。呉服屋十兵衛。竹中養宅。松野

金助 實ハ荒尾主膳。馬子、どうく大八 實ハ柏木

## 善右衛門。唐木政右衛門。

十段目の道行終つて、幕の外へ臆病口の方より、孫八、六部の形にて、花道へ出る。戸屋の裏より奴作藏、合羽、駕籠かたげ、草鞋三十足ばかり持ち出る。花道の中程にて招れ違ひに行き當り

作藏 ヤイ、何さらすぞい。

孫八 御免なされ。暗闇紛れ、心が急ぎます。

作藏 心が急げば、行き當つても大事ないか。

孫八 サ、そこが此方の廂相、御免々々。

作藏 御免で済むかい。笠を着ながら慮外者めが。

孫八 御尤もく。

ト笠を脱ぎ

行き當つたは、此方の不調法。御免なされ。

ト云ひく顔を眺め、見たやうなといふこなし。

作藏 此奴、なんだが氣味の悪い。もう料簡してやるべ

い。とつとよらせる。  
ト云ひく入る。孫八、合點のゆかねこなし。この間に奴傳内、幕の内より出る。

傳内 オ、作藏、今かく。

作藏 オ、傳内、わりや、どれへ行く。

傳内 オ、餛飩屋へのお使ひだわい。

作藏 蕎麥をやつて行こか。

傳内 オ、三十日蕎麥を十人分云うて来るサ。

作藏 そんなら旦那ばかりで、おれが口へは入らぬかな。

傳内 知れた事、おらは蕎麥切りより、引ッかけるがよいわい。

作藏 おらもさうだ。こりや次手に、だし殻を貰うて来

よ。

傳内 オ、サ、だし殻で飲むべい。早く歸れよ。

作藏 オ、早く戻ろよ。

ト云ひく、作藏は幕の内へ入る。

傳内 蕎麥がつい打つてあればよいが。

ト云ひく、戸屋の内へ入る。孫八、思ひ入れあつて、

附いて入る。ト傳内、戸屋の内より引返し出て

作藏めが待つて居らう。シタガ、だし殻は切れたと吐か

す。いまくしい餛飩屋めだ。  
ト云ひく、元の所へ入る。久兵衛、餛飩屋の箱を下げ出る。後より孫八、附き出て

孫八 船籠屋も忙しい商賣でござりますな。

船籠 イヤモウ、常は此やりになけれど、今夜は晦日蕎麥で、此やりに忙しいのぢや。ヤレ、しんどや。

ト荷を下ろし、休む。

孫八 今持つてござりますは、彼の話の武家方の旅宿ぢやの。

船籠 アイ、さうでござんす。

孫八 その兵洗使ひの寄合ひを、どうぞ見たいものでござりまする。

船籠 ハア、お前もエイヤツトウがゆきまするか。

孫八 イヤ、ゆくといふ程の事はないが、根が好きぢやで船籠 いま行く所は、この間から毎日兵法がござります。

こゝらも船籠や蕎麥を持つて行つては、見て来やんす。

孫八 さうして、マア、そりやどこの家中で、名はなんと云ひまする。

船籠 されば、ア、なんとやら。中でもいつち上手分の人、随かに林左とやら聞きました。

孫八 アノ、林左。ハア、。

船籠 ドリヤ、待つてゝあらう。

ト荷をかたげる。

孫八 モシ、その中に頼病はなかつたかなう。

船籠 滅相な。頼病に椿打ちするやうな兵法があるものか。

ト云ひ、連れ立つて幕の中へ入る。とハアと云ふ聲にて幕開く。

造り物、世話襖、西、折廻り障子、門口に蓆包みの荷物大分包みあり、真中に長持直しあり、その側に

林左衛門、脇息にかゝりゐる。按摩おかな、肩揉んでゐる。山室榮藏、宅間傳平、竹刀打ちの體。川角源

内、馬士大八、見物してゐる。勝負あると、馬士、皆々笑ふ。

榮藏 ヤイ、何を笑ひ居る。勝つ事があれば、負ける事も有打ちぢやわい。

大八 ても、きつい負け惜しみの。

源内 榮藏どの、今の太刀捌きは、餘程しどろに見えまするぞや。

林左 今一度、立合つて見さつしやれ。

傳平 サア、參りませう。

トまた竹刀打ちになる。榮藏、傳平を打ち据ゑる。

榮藏 なんと、どんなものぢや。

源内 雙方互角の勝負、さて〜見事でござる。

傳平 これは御褒美のお詞。

榮藏 忝なう存じます。

大八 なんと皆の者、兵法といふものは、なんぢやむづかしい事を云ふもんぢやないか。とんと喧嘩の後で、法談聴くやうなわい。

皆々 ハ、、、。

ト笑ふ。

大八 ほんに兵法で思ひ出した。この間、馬貸しでの話し、

大和の國の、ア、なんとやらいふ所に、えらい兵法使ひがあるげなて。

源内 ナニ、大和の國で名高い兵法師とは、こりや滅多な

事云ふな。このお人の事ぢやわい。

大八 ハ、ア、あの旦那どの、事かな。これはしたり、知らぬ事とて。今は大和の國を立退いて、方々歩いて居らるゝとの事であつたが。

林左 されば、様子あつて大和を立退き、今は所々方々と徘徊いたして居るが、はや世間の人が知つて、劍術名人の評判するは、ハテ、悪事千里かと思へば、善事千里ぢ

やな。

榮藏 イヤモウ、貴公の劍術、日本に誰れ知らぬ者もござりませぬ。

大八 人は知らぬものぢや。旦那どの、大坂堀江といふ所で、芝居の座本さつしやりましたの。

林左 此奴、何を吐す。身共を役者ぢやと思つて居るか。

大八 隠さつしやりますな。旦那どの、大和にござる時、荒木と云ひませうがの。荒木なら堀江の座本ぢやわいの。

源内 わりや、大和の劍術者といふのは、荒木の事か。

大八 體か荒木とやら、唐木とやら聞きましたて。

源内 ハハア、こりや林左どの、儀ではないか。

大八 なんと、その唐木といふ和郎と、旦那どのとは、どんなものぢやな。

林左 どんなものゝ、こんなものゝと、論ずるに足らぬ。

尤も唐木は神影、身が流儀は違つてあれども、まさかの時、流儀といふは只一心ぢやわい。

大八 なんの事やら、そんな珍紛漢は、どちらが強いのやら、譯が知れませぬわいの。



林左 譬へて云はゞ、唐木は鼠、身共は虎サ。  
大八 まだ合點がゆかぬ。鼠と虎と噛み合つた事はないも  
せんもの。

源内 此奴、呑み込みの悪い。高で猫にさへ取らるゝ鼠、  
虎の勢ひに勝つものはないわい。

大八 それでも和藤内には、叶やしまいがの。

皆々 ハ、ハ、ハ。

かな なんと申し、堪へまするかえ、もそつと強う致しま  
せうかえ。

林左 なか／＼よく堪へるぞや。

ト腕を差出す。

かな アイ／＼。

ト探む。

榮藏 申し先生、なか／＼綺麗な按摩。好い娘でござりま  
す。

林左 されば、好い器量なれども、皆目聞えぬ金鬘、何を  
云つても片使りぢやて。

傳平 あつたら娘を鬘とは、惜しいものでござります。

源内 ハテ、榮藏らしい。鬘が、そこらあたりの構ひにな  
る者ではないわいの。

大八 ハア、兵法が柔道になつな。可愛や、誰れぞが餌食  
になり居るであらう。

皆々 ハ、ハ、ハ、ハ。

ト笑ふ所へ、竹内養宅、呉服屋十兵衛出る。

十兵 随か、爰でござります。

養宅 案内しやれ。

十兵 ハイ／＼、御免なされませ。卒爾ながら、この旅館  
に……ホウ源内さま。

源内 呉服屋十兵衛でないか。よく來やつた。して、お身  
一人か。

十兵 イヤ、竹内養宅さまと、御同行申しましてござりま  
す。

養宅 いづれも御免下りませう。

ト入る。

榮藏 これは先生、よくお越しなされました。

林左 養宅老には、遠方御苦勞に存じます。

養宅 これは／＼林左どの、イヤ、早速ながら。

トあたりを見るこなし。

林左 コリヤ／＼大八、事に依つたらば、急に出立の程も  
知れぬ。何かは申しつけた通り、よいか。

大八 ハイ、馬もしやんとしつらへてござります。何時な  
りとも。

林左 オ、よし。わいらは、ソレ、勝手へ行て、酒  
でも飲んで、餅でも食うて、熱い茶粥でも喰つて待つて  
ゐよ。早く。

大八 ヘイ、皆来い。なんぢや、無性に飲み食ひ  
せいと云はる、わい。

馬皆 サア、勝手へ行かうわい。

大八 五郎よ、わりや馬に裾したか。みな秣はやつたか。

薬など提げて来いよ。

トわやく云ひ、入る。

十兵 ハテ、騒がましい馬士どもぢや。

贅宅 林左どの、まだ女が一人。

林左 イヤ、この女は一向の鬮。この伏見の宿屋宿  
屋、或ひは旅宿の貸座敷などを廻る按摩取り。この程よ  
りちよこく参つて、よく心も存じた奴。お心遣ひ御無  
用々々々。

源内 その外は、皆同心の我れ。して野守之助どのに  
は御到着ござるかな。

贅宅 されば、野守之助どのには、鎌倉表の用事萬端

仕つて、明朝は大方御到着でござりませう。

十兵 野守之助さまは、この度九州巡見のお役目、お出入  
り致しまする私しは、九州相良の生れ、右私しに、この  
地の御案内せいとこの事でござりまする。

贅宅 鎌倉に於て晚近の方々、いろ／＼と評定ありしところ、又五郎どのを匿まひ、九州の相良は馬も叶はぬ難所、他所より入り来る船もなく屈竟の場所。即ち巡見のお役目なれば、野守之助どのが御内通なされんとの儀なれど、途中の程心元ないとおつて、拙者に相良まで同道仕れとの事ゆゑ、罷り登りましてござりまする。

林左 御深切忝なりござりまする。

贅宅 第一お尋ね申したいは、此まにても同勢四十人ばかり。この上野守之助どのお越しあらば、五六十人の同勢、相良へ参る道すがら、どうで金づくめ、無作法ながら、路用のお心當はよくござりまするかな。

林左 その儀は、貳萬兩餘り所持いたしてござる。

贅宅 ナニ貳萬兩餘りは、ハテ、夥しい御用意でござるな

ト傳内走り出て

傳内 お旦那。

林左 傳内か。幸ひの來客、齋麥はどうか。先づ落ちつ

きに晦日蕎麥を差し上げませう。

傳内 ア、蕎麥どころぢやござりませぬ。一大事を聞いて参りました。

皆々 ナニ、一大事とは。

林左 靜馬、政右衛門がこの邊にか。

傳内 そんな事ぢやござりませぬ。足利から、何やら御用金の詮議があると云うて、侍ひが参りました。

林左 ヤア、アノ足利家より、用金の吟味とは。

内宅 覚えがござるか。

林左 只今まだ貳萬兩、舌も引かぬうちに。

皆々 ヤア。

林左 拙者が逢うては事むづかしい。どうぞいづれも。

源内 イヤ、逢ふ分は構ひませぬが、足利家の侍ひとあれ

ば、我れくを見知り居るは必定。

榮藏 斯う並んだ者どもは、みな足利附近の若侍ひなれば。

傳平 逢うては結句むづかしい。

贅宅 拙者とてもその通り、こりやどうぞして。

ト此うち、久兵衛、蕎麥を荷ひ、孫八、門口に附いてゐる。

龜鈍 ハイ、お誂への晦日蕎麥。だしはこの徳利にござります。

源内 徳利どころか、胸の蟲がのぼつてある。細言吐かす

と手は見せぬ。

龜鈍 ハイ、蕎麥切り持つて來て、側杖に遣はうとした。ヤレ、氣味の悪い。

ト云ひく逃げて入る。

林左 なんでも身共は逢はれぬが。

源内 ぢやというて、我れくは猶逢はれず。

皆々 ハテ、どうしたものであらうな。

ト長持より又五郎、出る。

又五 騒ぐまい、仕様がある。

贅宅 ヤア、化性の者か、迷ひの者か、正體を現はせ。

又五 ハ、贅宅老、身共を知らぬかな。

贅宅 イヤ、化物に近附きは持たぬわい。

又五 コレサ、澤井又五郎でござる。

贅宅 ヤア、どうして御身が又五郎ぢや。

又五 癩病となる毒藥を服して、世を忍ぶこの姿

贅宅 ハテナア。

林左 又五郎、話しは後で。急の手詰め、仕様があるか。

又五 伯父者人、氣遣ひせまい。鎌倉で生れて外見ず懐

子のこの又五郎、逢うてやりませう。

ト孫八、思ひ入れあつて走り入る。

林左 ア、その姿で足利の役人には。

又五 イ、ヤ、この姿を元の姿に直す妙薬も爰にある。

林左 アノ、その姿を早速直す妙薬があるか。

又五 癩病村の秘法、半時にして形變り、又薬を服めば半

時のうちに元の姿。長持の内より聞けば、野守之助どの

が見え次第、明日は相良へ下るこの身、晝の間は長持住

居、なりや世を忍ぶは今宵一夜、時の用には癩病も、元

の姿に戻らうわい。

林左 成る程く、お身が逢うてくれ、れば心が落ちつ

く。然らば暫時も早く、その薬を服んで。

又五 半時の間に元の通りぢやが、今にも吟味の役人來ら

ば。

源内 ハテ、都武士の性根へ附け込み、賄賂で面張つたら

ば、半時や一時は。

贅宅 それく、兎角、攫ますが當世でじやある。

林左 出迎ひ取次ぎは、幸ひ呉服屋十兵衛、給仕には壘の

娘、身共は爰へ隠れて逢はぬが上分別。

ト長持へ入る。

源内 サア、又五郎どの、いづれも奥へ。

又五 ドリヤ、人間にならうわい。

ト唄になり、皆々奥へ入る。松野金助、おその、侍ひ

連れて出て

その申しこちの人、一體爰は、なんといふところのござ

ります。

金助 爰は伏見といふ。これより都へは三里、また日本の

大湊、彼の大坂へは十里の道程。京大坂の用事の整へる

所ゆる、爰も甚だ繁華の地ぢやてや。

その そんなら、これから都へは、たつた三里でござんす

かえ。

金助 如何にも。

その 定めて都は、結構な所であらうがな。

金助 コレサ、うかくと、そりや何を云ふ。都足利家に

勤める身を以て、都は定めて結構な所であらうなどと

は。イヤハヤ、なんぞ片山蔭からも來たやうに。ハ、

ハ。

その ホ、ハ、ほんにわたしとした事が、如何に鎌倉者

ぢやというて。



金助 ハテ、まだいの。總體、女房のあまり物を云ひ過ぎるは、よくない事ぢや。慎みやれ。ナニ、家來ども、この宿屋へ案内せい。

侍ひ ハッ。頼みませう。

十兵 ドウレ。

ト出づる。

金助 罷り通る。許さつしやれ。

十兵 これは、どなた様でござります。

金助 拙者は足利家譜代、山手海手を吟味する役人、松野

金助と申す者。

十兵 ハア、そのお侍ひ様が、なんの御用でお出でなされた。委細の様子を。

金助 イヤ、その儀は櫻山左衛門どのに、御意得ねば解らぬ儀、何は格別、其方は身内衆か。

十兵 イヤ、私はお出入りの者でござります。

金助 然らば頼みたい儀がある。

十兵 イヤ、何事でござりますな。

金助 イヤ、別の儀でもないが、仔細あつて身共が妻子を召し連れたが、大切な役目について参つた某、女を膝元に置くも如何。どこぞ勝手の部屋があらば、暫時休息いた

させてくりやれ。

十兵 ヘエ、お連れと仰しやるは、あなた様でござりまするか。

その ハイ、ちつと叶ひませぬ事で、主と連れ立ち参りましてござります。どこぞ邪魔にならぬ所に置いて下されませ。

十兵 ハイ、シタガ、爰は貸座敷の事でござります。

殊に私も先程参りまして、内の勝手は存じませんが、慥かあの間が茶の間でござります。マア、あれへもお出でなされて、御休息なされませ。御家來衆、あれへお供なされませ。

金助 然らばお詞に隨ひ、あれへ参つて休息しやれ。家來、爰に用事はない。女どもを連れ立ち、其方達も暫らく休息いたせ。

侍ひ ハア、。

その そんなら左様いたしませう。御用おしまひなされたら。

金助 ハテ、物敷云はずと休息しやれ。

トおその、侍ひ連れ立ち、奥へ入る。

サア、林左どのに、急に御意得ねばならぬ事。大儀なが

ら、案内しやれ。

十兵 イヤ／＼、林左衛門さまは、この間から殊の外の大  
病で、お逢ひなされてから、一向正氣はござりませ  
ん。

金助 ナニ、林左どののは御大病とな。アノ大病……成る  
程、はや大病でありさうな事ぢやが、例へ大病であらう  
が正氣であるまいとまゝよ、是非御意得ねばならぬ譯。  
拙者が武士の立たぬ儀なれば。

十兵 どのやりに仰しやりましたも、一向。

金助 ハテサテ、マア、さう云うて案内しやれ。

十兵 ハイ、左様ならば、その通り

ト迷惑さうに奥へ入る。金助、あたりを見廻し、思ひ  
入れのうち、おかな、茶を持ち出て

かな お茶あがりませう。

金助 イヤ、構やるなく。

ト思ひ入れあり、懐より金を出し、おかな、行かうと  
するを

コリヤ／＼。

ト手招きする。

かな ハイ。

ト茶碗を下に置き、寄る。

金助 そちや召使ひか。林左どのには病氣とあるが、誠  
か。但し又、身共に逢ふまい爲か。

ト云ひ／＼手を取り、小判を握らせ  
どういふ品ぢや。こりや好い物ぢや、有やりに云へ。ど  
つちぢや。

トおかなは小判を取つて、不思議なこなし。

何も不思議な顔する事はない。それでなんなりと望みな  
物を買へよ。エ、正直さうな顔ぢや。なんでも有やう  
に云うて聞かす風俗ぢや。好い物ぢや。サア／＼。

トおかな、これで按摩とれといふ事と合點して

かな エ、なんの、これで。

金助 云うて聞かすか。どうぢや／＼。

かな イエ／＼、此やうには要りません。

金助 ハテ、譬でも買うたがよい。病氣か／＼。

かな 上下で二十四文でござります。

金助 なんぢや。女の身で上下を買ふか。何を云ふやら。

サア、どういふ譯ぢや。

かな ハイ／＼、

ト云ひ／＼後へ廻りて肩衣を脱がさうとする。

金助 ヤア、こりや何する。

ト肩衣を直す。

かな そんなら、矢ッ張りこの形でかえ。とつと上下ぐちは揉み憎いものぢや。

金助 なんぢや。肩を揉んでくれるか。ハテ、妙な女。これも林左どのが肩でも揉んで、随分氣に入れなど、身共みどもに穢けがれを取るのか。

かな 今夜は、きつう冷えますするな。

金助 ハテ、臉道へ二べらすな。林左どの、病氣の譯云うたとて、何にも爲なに悪い事ではない。林左どのに逢はねば、身共が武士が立たぬ事があるから、此やうに云ふのぢやわい。

かな きつう肩が凝つてあるさうにござります。

金助 サア、その心遣ひで肩も凝る筈。様子を云うて聞かしさへすりや、肩のつかへもさりと下がる。もうくしんどいのに、措かいてくれ。大儀であつた。もうよいと云ふのに。

かな もうようござりまするかえ。

金助 よいともく、よい次手に云うて聞かせやい。

トまた小判を遣る。

何も遠慮する事はない。これ取つて置け。

ト金を持たせる。

かな イエ、上ばかりに此やうにお金は要りません。

金助 サア、上の事ゆゑ、云ひ難い道理ながら、有やうに云うて悪い事ではない。こりや好い物ぢや。早く様子云うて聞かせい。

ト手を取り云ふを、惚れたかと云ふ思ひ入れあり。

かな お志し、忝かたじけなくなうござりますれど、お武家様には似合はぬ。

金助 何が似合はぬ。

かな 金づくで、そんな事しさうな女と思つてかいな。

金助 ハテ、立てるなく。然らば金は遣るまいが、云うて聞かすか。

かな あぢやらにも、そんな事しては、去んで母さんに叱られますわいな。

金助 ナニ、母さんに叱られるとは。

トまた手を取らうとするを振り切り

かな みだらな事は、え、致しません。

トびんとして入る。

金助 なんの事ぢや。みだらな事は、え、致しませんと

云つて、ハテ、譯の知れぬものぢや。

ト傳内出て

傳内 ナイ、身共は鑓持ちの傳内と申す者でござります。

金助 ナニ、傳内。ハテ、好い名ぢや。

傳内 ナイ。

金助 身共は、林左どのにちよつと御意得ねばならぬ。足利のお疑ひ受け、甚だ難儀いたし居るゆゑ參つたが、大病とあるが、よもや一言も物の云はれぬ病氣でもあるまいがな。

傳内 イヤモウ、旦那は一向夢中で、今の間も知れませぬ。

金助 ナニ、今の間も知れぬとな。ムウ、今も知れぬに醫者衆も見えぬは。

傳内 エ、。

金助 ハ、ハ、ハ、ハ、其方は忠義な者ぢやな。林左どのが、身共に逢うてはむづかしい事もあらうかと思つての病氣か。ハテ、なんでもない事ぢや程に。

ト此うち、傳内、早く行きたい心。コリヤ、有やうに云うて聞かせい。

ト云ひ、小判を握らす。

傳内 ネイ、これは有り難うござります。

金助 サア、どうぞ御身が執成して、林左どのに逢はれるやうに、コリヤ、頼むワ。

傳内 頼まれたうは存じますれど、旦那の病氣は。

金助 作病であらうがな。

傳内 命乞ひの代參に、勢州から多賀へかけて、參らねばなりませぬわい。

ト振り切り走り入る。

金助 ヤイ、取り逃げ、駈落ちと出で居つたな。

ト此うち、十兵衛、薬子の折を持ち出て

十兵衛 ハテ、御退屈にござりませう。これは重相なお菓子でござりますれど、お慰みに召上がられて下さりませう。

金助 ムウ。して、林左どのは逢はうとの事か。

十兵衛 サア、氣の毒にござりませれど、一向正氣ござりませぬ。

ト此うち、金助、金を手に持ち

金助 だん、と取次ぎ、大儀であつた。これは些少なれども、身共がこれへ參つた手土産ぢや。受けてくりやれ。



十兵 エ、

金助 貴様は林左どの、氣に入りと見える。例へ正氣がつかいでも、是非逢はねばならぬ儀ぢやゆゑ、事を分けて頼むのぢや。

十兵 これは、どうやら壺算用で。

ト思ひ入れ。

金助 十澤があまり些少なれば。コレ、

トまた小判を遣る。

十兵 イエ、これは鈍な。先をかけられたやうな臺詞ぢや。

金助 先をかけたとは、どういふ仔細ぢや。

十兵 ナニ、只今のお茶、お上がり下さりましたかな。

金助 イヤモウ、御意得ねば、この身の云ひ譯が立たぬと思へば、茶も咽喉へ通らぬわい。

十兵 イエ、咽喉を通るやうなお茶ぢやござりません。このお菓子も、御一緒に召上がられて下さりませ。

金助 ナニサマ、様子ある茶菓子とな。

ト蓋を取り

この金子は。

ト蓋を取り

十兵 サア、病氣で氣の付かぬ林左衛門、何卒一旦はお歸り下さりませと申す

金助 黙り居らう。金銀に眼がくれ、大切な役目を鹿略にするやうな武士ぢやないぞ。是非どうあつても逢はねばならぬ。まこと正氣附かぬと云へば、例へ五年十年でも、本腹するまでは、この座は動かぬぞ。

十兵 でも。

金助 この通り、取次ぎ致せ。

十兵 ハイ。

トうち／＼する。

金助 早く取次ぎ致せと云ふに。

トきつと云ふ。唄になり、十兵衛、入る。金助思案のうち、おその窺ひ出て

その 申し、こちの人。

金助 オ、女房ども、意屈であらうの。

その もうお役目は済んだのかえ。

金助 イヤ、済んだでもなし、済まぬでもなし、マア、暫時のうち、休息して居や。

その イエ／＼、あれから様子は、荒まし聞きましてござんする。もう／＼休息して居られません。

金助 なんと。

その 夫の敵。

ト切りかけるを立廻りあり

金助 ハテ性急な。役目首尾よく済んだ上、討たれてくれ  
うと云ふではないか。

その 詞に吊られて、今まで待つた夫の敵。

金助 火急に討たると云ふ譯は。

その エ、こなさんはなう。わしが夫は世を忍ぶ身。い  
つぞや南都にて、こなたが討つたその場へ、わしが戻り  
合はせ、例へ返り討に討たれても、夫への真心見せるも  
のと、勝負して下さんせと云うたれば、女のみで夫の敵  
の勝負せうとは天晴れ貞女、返り討に討つも不便な事、  
成る程、夫の敵、潔よう討たれてやらうが、併し主人の  
御意を承りながら、大切な役目がある。それさへしま  
うたら直ぐに討たれてやらう程に、開分けて待つてくれ  
と、情を籠めた武士の詞。深切な志しに愛で、成る程  
討たれてさへ下さんすなら、役目の済むまで待ちませう  
とは云へ、敵を手放してはと云うたれば、それも道理、  
表向きは女房と見せて、おれが側を離れなと云はしやん  
したゆゑ、その詞に従うて、あそこや爰に詮議の先々、  
現在夫の敵のこなさんを、こちの人くと云うて、所々  
方々に附いて歩くのも、枕こそ交はさね、云ひ號けの夫

の敵ぢや。首尾よく討つて、冥途にござる父さんや、母  
さんに、より敵を討つた、出かしたと、譽められたいば  
かりぢやわいの。

金助 ハテ、返すくも不便な志し、其方が夫を討つた事、  
全く意趣遣根にはあらねども、途中の口論、武士の意氣  
地、南都般若坂のあたりにてたつた一討ち。元より我れは  
大切な詮議の役目を蒙る身、後難を思ひ、面の皮を剥ぎ  
取り、その場を立退かんとせし所へ、折よく其方が歸つ  
たは、誠に夫婦の縁といふもの。女ながらも義を守り、  
枕を交さぬ夫の敵を討たんといふ志し、返り討にするは  
本意ならず。役目だに相済まば、討たれてくれんと約束  
せしは、武士の情。

その ぢやに依つて、いま爰で夫の敵。

ト又かゝるな

金助 待て。今聞く通り、やうやう詮議の綱に。

トあたりを見て

サア、役目しまりた上、討たれてくれうと、武士の詞に  
二言はない。今しばらく辛抱せい。

その イ、ヤ、そりや偽りぢや。

金助 なんと。

そのハテ、いま彼處から聞けば、詮議するその人は大病。例へば五年十年でも、本腹するまでは逗留すると云はしやつたは、この詮議を云ひ立てに、敵討ちを引き延ばし、それなりけりに済まさうといふ心であらうがの。さう聞いては一寸も待たれぬ。夫の敵。

トまた切りにかゝる。立廻りあり  
金助 コリヤ、急ぐ事はない。是非今勝負と云へば、不便ながら返り討。

そのエ、  
金助 サア、今しばらくの容赦して、身共を討たずば、これまで付き添ひ来た甲斐もなく、義理もなく、未來の夫には何を手向けるぞ。

そのおやというて、五年十年後日済むまで待たれりか。例へ返り討に遣ふとも。

金助 イ、ヤ、そりや無分別。例へ病氣は長くとも、某が配流も、年を月に替へ、月を日に替へ、日を時に替ゆる。藤生が夢の五十年。

そのすりや、程の知れぬ逗留も  
金助 たゞ一時の間と思へ。  
その 見ると聞くとは違ふと云ふのか。

金助 ハテ、唐土の一里は道六丁。

その 十年経てば

金助 仙人の一年

その 一年経てば

金助 某が一時。

その すりや、今宵中に

そ助 討たれてやらう。

その 夜明けの鳥

金助 かはい／＼の夫の敵。

その 必らず討つぞや。

金助 マアそれまでは、矢張り女房ども。

その こちの人、もう何時であらうぞいな。

金助 されば。

その お茶があるかえ。

金助 ハテ、鬼になつたり佛になつたり、イヤ、モウ、からくり的を見るやうな、女房どもおや。

又五 イヤ、足利のいびだれ使者には、身共が逢うて譯立

てうわい。

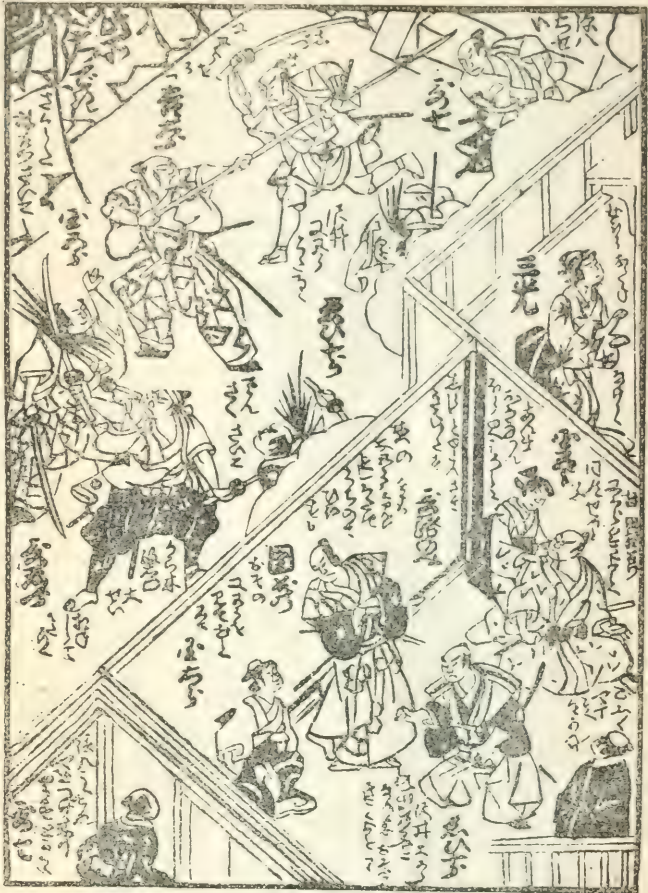
金助 ソレ女房ども、無禮のないやうにしや。

その 心得てござんす。



の 演 再





附 番 繪

ト又五郎、衣裳上下にて出る。

又五 足利家のお役人、松野金助どのとやら、まだこれにござるか。

金助 イヤ、モウ、吟味落着いたすまでは、いつまでも居やうも知れませぬ。

又五 して、吟味とは、なんの吟味。

金助 さういふ貴殿は。

又五 櫻田林左衛門が弟、甚五兵衛と申す者。林左衛門、大病ゆるの名代、用事あらば拙者に仰せ聞けられいサ。

金助 すりや、林左衛門どの、舎弟とな。左様ならば、林左衛門どのも同然。今般この所へ拙者が参つた仔細と申すは先達て御存じの、能登川飯合川の新田の儀につき

又五 ナニ、新田の儀についてとな。

トおそのに氣をつけ  
それに見馴れぬ女が居る。何者でござるな。

金助 こりや拙者が女房でござる。

その アイ、わたしは。

ト互ひに顔見合せ

又五 ヤア、其方は。

その お前は。

又五 コリヤ。

ト三人、思ひ入れ。

金助 女房ども、なんとした。

その サア、マア、不思議な。お前は。

又五 コレ、女中、ついに近附きではないぞ。

その イ、エイナ、お前は殺されてござつたではないか。

又五 これは、女中、何をお云ひやる。ついに見た

事もないぞ。一圓知らぬ存せぬぞ。知らぬと云ふからは、

マア、知らぬにナア。ハテ、近附きではないぞ。

トおその、いろ、思ひ入れあつて

その それでも般若坂で、不思議など云はるか、矢ッ張り

さうぢや。

金助 ハア、もう何時であらう。蘆生が夢が縮まりとさうな。

又五 金助どの、あの女はこなたの女房か。

金助 如何にも拙者が妻。イヤモウ、恥しながら、御前勤

めのその外は、一向夫婦側を離れた事もござらぬ。吟味

に参る今日も。是非付いて行かると申すゆゑ、せう事な

しに夫婦連れで参つたてや。

その イ、エイナ、これには段々。

金助 女房ぢや、ハテ、女房ぢや。但し爰で勝負せう

か。

その サア、勝負したいけれども、これでは又、勝負もならぬやうで。

金助 勝負せぬ間は女房サ。

その サア、それは。

金助 たつた今まで、勝負したいと云うたでないか。

その サア、云うたは云うたけれど。

金助 勝負せぬうちは、いつまでも身共が女房サ。

その エ、つツとモウ、わしが手にわしが體が、合點かゆかぬわいなア。

又五 貞女兩夫に見えずと、例へ五歳三歳にて縁を組み、嫁ぐ前にも朽ち果てゝも、女は一生道を守るが武家の作法。二挺の弓を引く畜生同然。見下げ果てた女もあるものぢやなア。

金助 イヤ、さうも云はれませぬ。その畜類も思は知る。

犬も三日飼へば尾を振る譬へ。恩義を忘れ、非道を構へ、逃げ歩く輩もあり。これらは、又、畜生にも生れ劣つた人非人。トア女房ども、そんなものでないか。

その 常磐御前さまは、我が子の爲に貞女を破り、貞女の名を残し給ふとやら。夫の敵を討ちたいと、表向きは女

房になつても、さら／＼肌は穢さぬと、名を穢してゐる女房が、あるものでもござんせんぞえ。

又五 賢を賢として色に替へよ。女に亂れず政道を糺すが武士。足利の役目を受けながら、鼻毛よまる、お役人。何が吟味。詮議とやらも定めて他愛もない詮議でがな。

ハテ、色は諸道の妨げぢやな。

金助 誠に大切の儀を、はたと失念。先達で譽田の家中、唐木政右衛門といふ武士、算學に達し、能登川飯合川に新田を開くべき工風。足利家の御上意に依つて、陪臣ながら政右衛門に仰せつけられしところ、未だ事至らざるうち、同家中貴殿の舎兄、櫻田林左衛門どの、工風を以て早速成就せしは、イヤハヤ、天暗れの智謀、未代の譽れ。

又五 ハテ、追従にや及ばぬ。要る事ばかり云はつしやれ。して、吟味とはなんの吟味。

金助 サア、新田成就いたし、未代の爲になる儀とは申しながら、入夫のつもり總高勘定、當時足利家より出でたる金子貳萬兩の不足、帳面の相違。

又五 すりや、貳萬兩の不足とな。

金助 諸事吟味の役を承はりたる、拙者が誤りとなれば、

是非林左衛門どのお目にかかりたく存ずるところ、お暇を申し受け出國ゆゑ、所々方々尋ね廻るこの吟味。

又五 ハテサテ、何を云はつしやる。林左衛門兄弟は武士でござる。足利家の武士と思ひ、詞を控ゆれば、なんと云ふのだ。その貳萬兩の不足の金子は、林左衛門が虚妄と云ふのか。

金助 イヤ、左様とは申さぬが、そこが吟味。

又五 ヤア、吟味とは誰れを吟味。用金不足は役目を蒙る貴殿の誤まり。女に涎を流し、自身の口から武士道を辨まへぬと云うた、こなたの胸を吟味しやれ。但し自身に吟味いたせぬと云ふなら、係り合はした不肖。此方から吟味してやりませうか。

ト又五郎、一通を出し

譯立たぬといびたれ使者、眼の上の瘤で見苦しい。これ持つて歸らしやれ。

ト一通を渡す。金助取つて

金助 この一通は。

又五 貳萬兩不足の吟味、病氣本腹次第、キツと詮議糺さんといふ、日延を願ふ林左衛門が名判。

金助 イヤ、これ持てば、猶歸らぬ。

又五 なぜ歸られぬ。

金助 貳萬兩紛失は、役目を預かる身共が過失。事も糺さず立歸つては、拙者の武士が立たぬ。林左どのに御意を得、事を糺して罷り歸らう。

又五 なんぼ逢はうと云はしやつても、林左衛門は陰性の傷寒、人事を辨まへぬ者に逢うてから、なんの役に

金助 立つても立たいでも、病氣なら病床へ參つて見届ける拙者が醜瀾。

又五 金を攔まして、是非とも逢はうと、召使ひの者に賭の沙汰。イヤその手ちや參らぬ。大病の違ひはないぞ。

金助 さほど潔白の病氣に、又コレ、この通りの山吹菓子は、無事にこの場を歸つてくれと頼むの賄賂。

又五 是非ともに逢はしてくれよとの賄賂。

金助 ハテ、思ひ合うた

兩人 事どもちやな。

その所詮、今宵に分らぬ吟味、マア、この場は一旦。

金助 イ、ヤ、この詮議、糺さにや置かん。

又五 詮議を糺す目當があるか。

金助 目當といふはこの家の内。

又五 黙れ金助、能登川飯合川の新田は、末代諸人を助く



る爲、私慾の爲に斯程の工風を編み出さうかい。

金助 すりや、貳萬兩の行くへは知らぬとな。

又五 知れた事サ。

金助 しかと、さうぢやな。

又五 二言と云はゞ、手は見せぬぞ。

金助 その潔白なこの家の中、茶菓子に出したこの金子は。

又五 ヤ、なんと。

金助 壹兩々々に足利家の極印。この家にはどうして。

又五 サア、それは。

兩人 サアくく。

金助 なんと。

又五 さう六や、カウ。

ト手裏劍打つを、煙草盆にて受け

金助 古いやつ。ちと夜食には喰べ憎い。此やうな御馳

走、箸選み致す。盛り直さつしやれ。

又五 へ、へ、打ちかけた割筭の片しは、こなたの鬻に

掃めてある。けれう筭なればこそ、減多に箸選みも出来

まい。

金助 ハテ、左右の手練、驚き入つたが、吟味はこの家に。

又五 見事、詮議を

金助 致して見せう。

ト双方、刀押取り膝立て直す。おその、思ひ入れ。

その コレこちらの人、イヤサ、こちらの人、お前は大事の吟

味、林左衛門に逢はぬうちには、譯立たぬこの場の仕儀。

互ひに急いては仕損ずる。大事の所でありさうなもの。

金助 成る程、負うた子に教へられて淺瀬とはこの事。と

んと吟味も遂げぬうち、理に高じたは非の百倍。既に食

傷いたさうとしたわい。

又五 嫌がるものに、無理に強ひるもいらざる事。

金助 イヤ、その強ひるは此方から。

又五 何を強ひる。

金助 般若坂の死骸の懷中に、残し置いたる一通、今の筆

勢と正しく同筆。

又五 すりや、それと。

ト立たうとして

これは。

ト立たれぬこなし

金助 イヤ、驚ろかつしやるな。もしもの事もあらうかと、

袴の裾は疊へ縫うて置きましました。

又五 ムウ。

ト無念のこなし。

金助 そりや、即ち其許の筭、受け取り召され。

ト又五郎、筭抜き取る。

又五 慥かに受取つたが、その一通り金子の事も。

金助 詮議は今宵中。

その わたしが願ひも。

金助 吟味の上で。

又五 互ひの賄賂。

金助 取るか

又五 取らぬか

その 無事に納まる

金助 思案の奥の間。

その 暫しのうちは

又五 休息召され。

金助 女房ども

その こちの人。エ、ツツとモウ。

又五 委細は後刻。

兩人 御意得ませう。

ト唄になり、金助、おその、思ひ入れあつて入る。又五郎、残り

又五 貳萬兩の金の行き端、般若坂の事まで知つた奴。此

まゝにして置いては。

ト思ひ入れ。源内、奥より出かけ、閉いてゐる。

源内 又五郎どの。

又五 ヤ、コレ。

ト思ひ入れ。源内、小聲にて

源内 又五郎どの、委細はあれから立聞き致したが、世を

忍ぶ貴殿の身の上より、差し當る林左衛門どのの身の上

が。

又五 サア、足利の御用金、虚妄の様子、事露はれては伯

父貴の身の上。

源内 明早朝には野守之助どの、慥かに到着。彼奴が如何

ほど吟味役でも、野守之助どののは、足利眠近の儀なれば、

少々無理でも權威を以て、都へ歸すに手間隙いらす。ど

うぞ彼奴をたらし込みて、明朝まで。

又五 なかく手延びにならぬ。今宵のうちに伯父貴を道

まで。

源内 持ち出す思案。

又五 もし、それが行かぬ時は、コレ。

ト囁く。

源内 合鬪でござる。

又五 ぬかり召されな。

ト唄になり、又五郎、奥へ入る。源内、後見送り

源内 なんでも、急にこの荷物。

ト大八、ワツと出て

大八 その荷物、わしが預かりませう。

源内 馬方大八、アノ、われがこの荷物を。

大八 ハテ、驥みの所まで、キツと送り届けます。

源内 ムウ、して、わりや、送る先、知つて居るか。

大八 ハテ、九州の相良ぢやごんせんか。

源内 すりや、最前からの様子、我れくが身の上

大八 世を忍ぶお前方と知つて、一番行つて見る仕事。

源内 わりや、さう云へば、其方の身の上ぢやぞよ。

大八 そりや合鬪、危ない事せにや、一足飛びの出世にな

りません。

源内 すりや、命を投げ出して

大八 どうくの大八は、エ、男ですわいの。

源内 ホ、頼もしい。すりや、この荷物、其方にしつか

り預けたぞ。

大八 預かつたが最後、貧乏揃きもさすこつちやごんせ

ん。

ト此うち、表へ安達仙兵衛、八多喜平、草見五右衛門、

尾合段九郎、窺ひ出て

仙兵 ソレ。

トばたくにて入る。長持へかゝるを、大八、皆々を

投げ

大八 コリヤ、何をするのぢや。

仙兵 この長持に詮議がある。

四人 そこ退け。

ト又かゝる。大八、引き退け

大八 さうはさゝんわい。東國を股にかけて、馬士仲間

誰れ知らぬ者もない、どうく大八が預かつたこの荷物

へ、指さいたら命がないぞ。

仙兵 ヤア、慮外な下郎め。

四人 我れくを誰れと思ふ。

源内 して、いづれも様は、誰方でござります。

五右 舟岡山の城主、上杉の家臣ぢやわい。

源内 すりや、上杉の御家來とな。詮議とは、なんの詮議。

喜平 鎌倉に於て、渡邊頼負といふ者を討ち取り、足利家

へ差上ぐる正宗の刀を奪ひ、立退きたる澤井又五郎

段九 所々方々に詮議するところ、この旅宿に忍ぶ由  
仙兵 注進の者あつて、召捕りに向うた。

五右 又五郎は、慥かこの中。ソレ、いづれも。

喜平 合點でござる。

ト大八、引き退け、立廻りあり、長持の上へ上がり

大八 寄りあがるな。預かる者は半分の主。この長持はお

れがぢや。その澤井とやら、たわいとやら、知らぬぞ、オ

オ、斯う云ひ出すからは、知つても知らぬぞ。無理に詮

議と御詫ばると、ほてッ腹踏み貫くぞ。

四人 イヤ、慮外な奴の。

源内 待つた、いづれも。又五郎がこの旅宿に匿ひあると

いふ、證據でもござるかた。

喜平 ヤア、云はれざる證據呼ばはり。

四人 注進の者が慥かな證據。

源内 イ、ヤ、そりや證據にはなりますまい。

トおかな出で

かな その證據は、わたしでござんす。

源内 ヤア、わりや、按摩のおかな。髻というたは

かな この事を聞き出さう爲ぢやわいな。

源内 すりや、うぬは問者ぢやな。

かな 静馬さまの家來、招權武助が妹。お主の敵を開き出

し、静馬さまへお知らせ申さう爲、髻というて宿屋々々

に入り込んだ甲斐あつて、晝からの様子、何もかも聞い

たに依つて、お知らせ申したうても、静馬さまはどこに

ござるやら、所は知らず、どうやらと思ふうちにこの詮

議。又五郎はこの内に居りまするに違ひござりませんわ

いな。

仙兵 サア、斯う云ふ慥かな證據が出るからは、争うても

争はれぬ。又五郎を、爰へ出せ。

源内 サア、それは。

喜平 下郎め、そこ退け。

大八 イ、ヤ、退かぬ。

五右 退かねば、この家。

仙右 うぬらも同罪。

源内 全く以て。

喜平 改めさすか。

皆々 サア〜〜。

四人 どうぢや。

ト大八、源内が刀を抜き取り

大八 モウ、是非に及ばぬ。



トおかなを一刀に切る。

四人 うぬ、女を手にかけたな。

大八 オ、殺さいでは。又五郎さまの身の上、知りこく

つた女郎め。ぼらすが性根の据えどころ。サア、この上

は死暴れぢや。手次手に、いつそ、うぬ。

トかゝらうとする。長持の中より林左衛門出て

林左 ヤレ、聊爾すな。大八、暫らく。

大八 ヤア、こなた様は。

林左 いづれもお引きなされ。

四人 ハツ。

大八 こりやどうぢや。

林左 不審、尤も。

ト大八が手を取り、上座に直し

ハア、さてく、驚ろき入つた丈夫の魂ひ。泥中の蓮、

新鏡の中の昔へ鏡とは、御身が事。その心底を好く察し、

相良へ下る荷物黨端、この林左衛門は、微塵さらく疑

はねど、野守之助さまより附け置かる、竹内鷲宅を初め、

山岡星合などに中間小者、めて三十七人の事、いろ

いろと評議まぢく。どうくの大八こと、生れながら

の馬士、今にでも荷物を押へられ、詮議に遭は、如何

あらん。殊に、好物の喰ひ抜け、酒に迷はされ、上戸の癖。もしこの手より。濡れもやせんと、案じに胸も休ま

らず。所詮、一心の坐りし所を見て、いづれも安堵させ

ん爲、せまじき事とは思ひながら右の仕合せ、武骨の段、

眞平々々。誠や、花は櫻木、人は馬士、末世に残る名こそ惜しけれ。其方が丈夫の魂ひにあやからば、例へ静馬

政右衛門、岩石の中を尋ね、鐵銅の内を捜すとも、やはか逃げ負ふせいであるべきか。人ある中にも、人なし

とは申せども、馬士の中にも有れば有るもの。油断のな

らぬ人心。女按摩の響めが、問者であらうとは、日以て思はぬ事。所をたつた一討ち今の働き、これにて疑ひ、

さらりと晴れ、三十餘名の者どもが、眩みし眼を開かず

大八。イヤモウく、大八々々と、澤山さうに申すは勿

體ない。今日から大八を、地車とも、だんじりとも、御

所車とも思ふぞよ。いづれも、安堵をなされてよからう。

源内 我れくは皆、野守之助どのに頼まれ、又五郎を警

護の役人。

仙兵 安達仙兵衛

五右 草見五右衛門。

段九 星合段九郎。

喜平 八多喜平。

源内 一旦罷まうた又五郎、討たしては、足利の肥近の銘

銘、一分立たずとあつて、木にも萱にも、心を置くゆゑ

この仕儀。大八、無禮の段は

皆々 眞平、免しやれ。

大八 ヤレ〜、なんの事ぢやと思うたら、この大八

が性根玉を見る爲か。こりや、皆が疑はしやますも尤も

ぢや。疑ひ晴れて、おれも男が立つと云ふものでゑす。

林左 この上は心措きなく、何かの内談。

源内 荷物萬端の儀は

林左 しかと、其方に

林源 頼んだぞよ。

大八 氣遣ひさつしやりますな。一旦頼まれたからは、

例へ命でも、ハテ、親はなし、子はなし、一門一家はな

し、拳骨とりより大きな首。意氣づくなら、取つて行け

ぢやわい、ハ、ハ、ハ、ハ。

林源 イヤモウ、頼もしい〜。

ト又五郎、出て

又五 大八が心底、見えました上は、一時も早く、相良へ

下る、何かの手番ひ。

林左 されば〜、夜船で大坂へとは思へども、繁華の邊、

心元ないゆゑ、大八に云ひつけ、荷物ぐるめ、銘々空尻

にて兵庫まで。あの方より船をしつらひ、下る積り。

大八 そこで、外の馬土は雇はず、おれが手下の奴等ばか

り、なんにもかも、呑み込まして置きました。

又五 萬事の世話、過分々々。明朝、野守之助どの、到着

までにと思へども、猶豫ならぬ足利の役人。うぬら、素

直に歸ればよし、異儀に及ぶと、手短かに片付けて、後

から追ひつき、いづれも、出立の用意々々。

源内 門出を祝うて最前の蕎麥切りわな。

林左 ア、そりやモウ、冷え切つてあるわいの。

大八 所を蒸し直して、返り討と致すのぢや〜。

林左 ナニ、蒸し直して、返り討の蕎麥切り。ムウ、こり

や、賞罰せざるまい。

源内 然らば、いづれも様。

大八 マア、ござりませ。

ト唄になり、皆々入る。又五郎、思ひ入れあつて

又五 ソレ。

ト行かうとする。おその、出て

その 又五郎さま、血相替へて、こりや何處へ。

トおそのを引きつけ

又五 茲な、畜生めが。

その コレナア、お前ゆゑ、心を盡すわたしを、畜生とは。

又五 吐かすな。うぬは、この又五郎と親々の云ひ號け、

これまで度々口説いても、なるやうでならぬやうに、従は

ぬこそ道理、外に男を拵らへて、よくも身共を馬鹿にひ

ろいだな。二人連れで、これへうせたは、事顯はれる天

命、思ひ知つたな。茲な四つ足めが。

トおその、思ひ入れあつて

その その云ひ譯は、斯う。

ト自害する。

又五 こりや、云ひ譯なさに、くたばるのか。

その こりや申し、お前は天命を、知らしやんせぬかいな

う。渡ましい、コレ、人を殺す心になれば、濁う、その

身を果すが侍ひの常。敵と云うて附け聞はれ、卑怯未練

に隠れ忍び、九州は愚か、唐土へ渡つても、非道な事に

人を殺め、道がる、と云ふ事があらうと、思はしやんす

かいたく。なぜ濁より腹切つて、流石は澤井又左衛

門が子ほどあると、云はれては下さんせぬ。小さい時の

云ひ號け、悪人とは云ひながら、わたしや、お前がいと  
しいゆゑ、臨終の際に女房の意見、聞き入れて、コレ申  
し、善心になつて下さんせ、又五郎さま、コレ、拜みま  
すわいなう。

又五 ハ、、、、吐かしたな。云ひ號けで候ふのと、味

も見せず女房呼び。けち太い女郎めが。

その サイナ、お前の身は、親々の勘當、お許しのないう

ちに、枕はどうも交されませぬ。善心にさへなつて下さ

んすりや、自然と親々の勘當も赦り、わたしも、せめて

未來は。

又五 もう否ぢや。汁氣のあるうちはつれなくさらして、

もう、そろく傳頭、抹香くさい事の約束、否ぢやぞ。

追ツつけ、活計、歡樂な身になれば、どのやうな女房、

てかけ棄も持ち次第。ごくにも立たぬ世迷言、ほざく手

間で、早くくたばつてしまひ居らう。

その エ、酷い。胸忿な悪心。その心から未來永々、親子

の勘當。未來も女夫にはならぬこの身。一生殿御の胤知

らず、賽の河原で迷ふであらう。

又五 そりや、うぬが、心からぢやわい。

その イ、エ、お前の悪心から。とは云ふものゝ、知らぬ

事とて夫の敵、討たうと思つた事で、却つて夫の身の上を、わたししが訴人したも同じ事。冥途にごさる父御様や、母御様への、云ひ譚のこの自害。この上着は、假の詰め袖、心の底は、袖もえ、詰めぬは、流石は貞女を守つたと褒めてもらふがせめての樂しみ。娑婆に心の残らぬ體は未來へ早う、南無阿彌陀佛。

ト纏るうち、金助、出る。

エ、淺ましい。暇乞ひさへする人のないと云ふは、どうした因果な身の上ぢやぞいのくく。

ト大泣き。

金助 ハ、ア、天晴れ貞女かな。斯程の女が、無道人と縁を組みしも誠に業因。詮議の種に連れ歩きしは、計らざるこれも因縁。未來は佛の縁に導き給へ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

その南無阿彌陀佛。

ト扶り死ねる。又五郎、思ひ入れあり

又五 ハ、ハ、ハ、ハ、我が見る前に、ほてくろしい畜生を、胸へ歩いた犬侍ひ。其ま、に歸ればよし、悪く詮議すると、又五郎が刀の引導。女郎めと共に一蓮托生。思案の極めて、返答せい、どうぢや。

金助 ヤア、身の程知らぬ極重悪人。うぬらが身を運がれんと、咎めなき者の命を取り、九州に逃げて下らん支度。最前より、様子は聞いたわい。

又五 それ聞いたら、生けては置かぬ。

ト立廻りあつて、止まる。

金助 いま、討取るは易けれども、足利の御用金、虚妄の大罪人。

又五 なにを。

トまた切りかけるを、立廻りあり

金助 残らず召捕り、何かの詮議。

又五 さう吐かしや、猶。

ト烈しく立廻りにて、又五郎を當てる。

金助 同勢を以て召捕らん。代官所まで、家來、續け。

侍ひ ハア。

ト侍ひ附き入る。奥より、皆々出る

又五 南無三方、彼奴を遣つては。

皆々 我れくが身の大事、なんとせうな。

ト大八、鐵砲、持ち出て

大八 氣遣ひない。その思案して置きました。

源内 大八、思案して置いたとは。



大八 捕り手の來ぬうち、髪を抜けるがよい。

林左 イヤ、行く道々には、定めて討手。

大八 ハテ、兵庫へ向けて出ると思ふ、彼方のすかたん、

思ひがけなう道を變へ、伊賀越えに。

又五 ハア、伊勢浦から舟に乗り、西へ廻り

贅宅 土佐沖から九州に乗り込み、海上を

林左 西と思はせ、東へ廻るは、こりや妙計。

贅宅 して、その手筈は。

大八 手下の奴等に云ひつけ、荷物は裏から、豊後橋に待

たしてある。夜のうちに上野まで、九里の餘あれど、夜

申の時分。

林左 時は四ツ半。

源内 空尻で、ぼツ立てたら

大八 明日、五つには、上野へ出ますわい。

十兵衛 この十兵衛、幸ひの厄語り。次手に參宮とは、有り

難い。

林左 何を、悠長らしい。

大八 おりや、侍ひめに追ひついて、まんよくば、たつた

一討ち。

源内 それも、手廻し。

皆々 ぬかるまいぞ。

大八 合點ぢや。

ト走り入る。

又五 して、野守の助どのが見える時は。

源内 この源内は、そこらぬからぬ。彼の金子もろとも、

後から參らう。

林左 家來ども。用意。

ト内より

家來 ハア。

林左 豊後橋まで、此まゝに、一時も早う。

源内 伊勢宇治で、お目にかゝらう。

贅宅 いづれも、出立。

又五 ござれ。

ト皆々、向うへ入る。源内、残り

源内 これで落ちついた。身共も何かの用意。さうぢや。

ト奥へ入る。合ひ方になり、大八實は柏木善右衛門、

金助、實は荒尾主膳、窺ひ出て、顔見合せ

善右 上杉家の家臣、荒尾主膳どの。

主膳 畠山大膳どの、家中、柏木善右衛門どの。

善右 申し合した通り、まんまと首尾よう。

主膳 鎌倉にて、新參の又五郎、某は國元にあつて、面體知らぬを幸ひ、足利の侍ひと偽はり、面體を變へし又五郎、事に依つて、元の如くなしたれば、よも只損する事はござらぬまい。

主膳 して御用金、二萬兩の詮議はな。

善右 その詮議、落着せねば、彼れらは天下の料人。足利の御成敗。敵と云うて討つ事叫はず。そこを察してこの詮議、某が申し受け、首尾よく静馬が、親の仇を討たせよとある。主人春太郎どのの、御意に依つてこの計らひ。

善右 某は元、唐木政右衛門とは劍術の朋友。殊に某主人、唐木が劍術を御懇望にて、何卒首尾よく、敵討ちの力となれとある御意に任せ、どうくの大八と姿をやつすも主命。

主膳 静馬に忠義を盡す女、手にかけれしは、彼奴等が肌を許させん御計略よな。

善右 不便ながらも手にかけれしゆる、某に肌を許し、詞に従ひ、夜通しに伊賀越え。

主膳 貴殿の支配地、場所の好き所へ、そびき出ださん謀り事。天晴れくして、静馬、政右衛門は。

善右 おとき峠の難所に間道。

主膳 あの地の案内は、知つたる政右衛門。  
善右 先へ匪け投げ、小田原町の出口の茶屋に、相待つ手筈。

主膳 勝負は、時の運とは云へど

善右 何十人あるとても

主膳 手利きの静馬、政右衛門、本意を造ぐるは

善右 明け四ツ時は過ごすまい。拙者はこれより、直ぐに彼の地へ。

主膳 某は、暫くこれに、源内めが度りしは幸ひ、御用金の詮議し、足利の政道。

善右 御尤も。家來、馬牽け。

馬子 ハア。

ト貨駄馬を引き出すうち、源内、窺ひ出て  
源内 さては、うぬらが謀計であつたな。觀念せい。

トかゝる。主膳、立廻りあり。

主膳 御用金虚妄の同類め、遁がれぬ所ぢや、腕廻せ。

ト立廻りのうち、善右衛門、馬に乗り

善右 主膳どのの、後の儀は。

主膳 お構ひなく。

善右 おさらば。

主膳

ござれ。  
ト源内を抑へる。善右衛門は花道へ入る。早暮にて、直ぐに引き返す。鶯、鳴く。

造り物、奥は馬。口の方に煮賣り屋、店閉めてある。釣り鐘、鳴ると、煮賣り屋亭主、出て、店を明け、床几を並べ、萬屋と云ふ暖簾、懸ける間に、向うより政右衛門、静馬、孫八を連れて出る。

静馬 よもや先へは、駆け抜けは、仕りますまいか。

政右 益働もない、氣遣ひしやるな。この邊の事は、生れ故郷。田道間道まで、案内はよく存じて居る。最前越えたとぞ峠も、本道を行けば、あのやうに来るとは、半里の上は違ふわいの。駄荷の事なれば、本海道を通らねばならぬて。

孫八 左やうでござります。殊に、三十人から上の同勢、なか／＼早くて四ツ半でなくば、爰へは参りますまい。

政右 イヤ／＼、あの方も、心を急ぐ道中。五ツか、五ツ半には、遅るであらう。

静馬 もし、峠道へは、参りは、仕りますまいな。

政右 ハテ、くどくどと案じる事はない。右はたゞせ坂、

それを登れば、本町筋へ出る。左の方へ行けば、城の搦め手。いづれにしても、駄荷、乗掛は、この道へ出て来ねばならぬ程に、氣遣ひしやるな。案じる事はないわい。

孫八 イヤお旦那、あれに、店の明いた所がござります。

榎か煮賣り屋さうにござります。

政右 それは幸ひの所ぢや。

静馬 左やうなら、あれで用意いたしませうかな。

政右 さうしたがよい。

ト云ひ／＼本舞臺へ来て

孫八 なんぢや、萬屋。

政右 ナニ、萬屋とは、まんがよい。爰で用意せうわい。

孫八 御免なれや。近頃邪魔ながら、酒を少々貰ひたいが。

亭主 ハイ／＼、此方へお入りなされませ。

政右 イヤ／＼、まだこの家も、いま起きたと見える。寐込みへ入るも心ない。

孫八 左やうでござります。内へなど入つて居ては、氣が濟まぬ。幸ひ、爰に床几がござります。これで、一つお

上がりなされませ。

政右 誠に、爰も氣が晴れてよい。一つたべて用意しや。

ト床几へ腰かける。

孫八 亭主、なんぞ好い肴があらうか。

亭主 ハイ、いま起きたばかりぢやに依つて、なんにも生きた魚はござりませんが、鹽鱒があるが、焼いて上げませうか。

政右 それ、よからう。

孫八 早く頼みます。

亭主 ハイ〜。

ト内へ入る。この間、静馬は始終、向うを見詰め、待ち兼ねるこなし。

静馬 もう來さうなものでござりますが。

政右 ハテ性急な。其やうに思つて、まさかの時にうろつかれまいぞ。もう手に入つたも同然の奴等、急く事はない、追ツつけ討たす。

ト此うち亭主、盆に茶碗、皿に鱒を入れ、片手に湯婆、捉げ持ち出て

亭主 サア、酒上げませう。肴の鱒は、餘り可愛らしい。

小さい物ぢやに依つて、頭とると、ひしよがない。首は、お前様方、取つて上がつて下さりませ。

政右 なんぢや、かはいらしい鱒。

静馬 首を取れとは。

ト顔を見合はせ

政右 辻占がよい。静馬、ソレ、首取れ。

静馬 イヤモウ、この上の肴はござりません。

亭主 お氣に入りました、嬉しうござります。

ト云ひ〜内へ入る。

政右 サア、當八ぢや。祝うて、一つ飲みやれ。

静馬 ハツ、然らば。

ト飲み

お慮ながら。

政右 祝うて爰で、取つて押へよ。

孫八 押への合ひの助太刀は、下郎めに、仰せつけられませい。

せい。

政右 こりや出かした。一つ飲め。

孫八 ハイ〜。

ト孫八も飲む。これより又、静馬、飲み、政右衛門へ戻す。ト杯を納め

政右 彼れこれ云ふうち、もう五ツ前、用意しやれ。

静馬 畏まりました。



政右 静馬、其方は、餘人に構ふ事はない、目ざす敵は又五郎一人、一心を据ゑて、合點な。某は、櫻田を初め、助太刀の奴ばら、何十人あつても撫で切りにする。孫八。

八。

孫八 ハツ。

政右 其方は、静馬に引き添うて、又五郎と勝負の節、支ゆる奴ばら、随分防いで、一騎打ちの勝負をさせい。

孫八 畏まつてござります。

政右 中間小者に至るまで、随分心を配つて、合點な。

孫八 ハツ。

ト此うち身拵りへし、寢刃を合はせるを、亭主、出て見て

亭主 ア、そんならお前方は。

政右 氣遣ひな者ぢやない。親の敵を討つ者ぢや。

亭主 エ、そんなら、お代官所へ、訴へねばなりません。

ん。

政右 ムウ。すりや其方は、所の下用人か。先達て、敵討ち御覺とある管領の御判、頂戴は致し居るが、用人とあれば、其方が念の爲、訴へるがよいが、随分密かに頼むぞ。

亭主 合點でござります。

ト橋がユリへ入る。戸家の中より馬子唄うたふ。

孫八 ヤア、あの同勢は。

静馬 随かに又五郎、日頃の鬱憤、うぬ。

ト駈け出さうとする。政右衛門、止めて

政右 コリヤ、時節到來して手に入る敵。急ぐ事はないぞ。

ぞ。

ト静馬、向うを睨み詰めぬる。政右衛門が云ふ事、聞えぬこなしにて、涙ぐみぬる。政右衛門、静馬が顔を見て

討ちたいくと、思ひ詰めし親の敵、巡り逢うた今日只今、喜び餘つて轉倒した静馬。

ト矢張り睨み詰めぬる。

心を鎮めて。

ト切りかけるを、静馬、身を開き、立廻りあつて、止め

め

静馬 これは。

政右 天暗れ、神影の奥儀、遠山の詠め。その心得を忘れ

まいぞ。

静馬 ハツ。

政右 尋常の勝負、名乗りかけて、先づ暫く。

ト三人、木蔭へ入る。ト向うより林左衛門、贅宅、又五郎、榮藏、馬に乗り出る。五右衛門、仙兵衛、傳平、喜平、段九郎、旅装束にて附いて出る。十兵衛、その外、家來ども、源内、鎗持ちにて附き出づ。

林左 ヤレ、朝嵐が身にしゆんで、ぞくぞくと致した  
が、一献たべたれば、よく暖まつたわい。

贅宅 今の松坂屋と云ふ賣り屋めは、さて、心ざいた奴でござつた。

又五 切り豆腐の加減、どうも云へませなんだ。ナウ、いづれも。

皆々 左やうでござる。

ト云ひ、本舞臺へ来る。三人、木蔭より出て  
静馬 澤井又五郎、待て。

皆々 なんと。

静馬 汝が討つて立退いたる、渡邊頼負が忤、同苗静馬、  
この所に待ち請けた。尋常に勝負せい。

ト皆々、驚ろき、馬より下りる。

政右 眞劍の勝負を望みし櫻田林左衛門、今日只今、勝負せん爲、唐木政右衛門、これに控へ居るぞ。

皆々 ヤア、

林左 野守之助どの、頼みは爰ぢや。いづれも。

榮藏 家來ども、ぬかるな。

トかゝるを孫八、追ひ込む。この間に又五郎、鎗を取  
り

又五 優しや静馬、返り討 覺悟せい。

静馬 親の敵、觀念せい。

ト立ちながら入る。政右衛門、皆々、追ひ込む。トこ  
れより入り亂れのタテになる。政右衛門、林左衛門、  
傳平とタテあつて、追ひかける。ト引き道具になる。

政右衛門、二人、花道へ追ひかけると、花道の兩方、  
松原の引き道具になる。ト見得あつて、入る。ト孫八、

喜平、五右衛門、仙兵衛を相手に、大タテあつて追ひ  
込む。ト元の松原になる。ト政右衛門、大童にて、贅

宅とタテしいしい出る。

政右 静馬やい。

ト呼ぶうち、家來大勢、かゝるを切り散らす所へ、孫

八、大勢に取圍まれ、危ふき所を、政右衛門、贅宅が  
片脚を切る仕掛け、孫八が側へ寄つて

孫八か。



天保五年正月森田座所演番附

孫八 お旦那。

政右 手を負つたか。

孫八 ハア。

政右 氣を落すな。

トまた皆々、かゝる。皆々を切り倒し

大方、討ち果したが、して、靜馬は。

孫八 大勢に圍まれ、見失ひました。

政右 なんと〜。

孫八 慥かに、小田原通りを。

政右 すりや、小田原町通りを。

ト行かうとする。大勢、出て、取巻く所へ、春後より

善右衛門、上下衣裳にて、馬に乗り出て

善右 唐木政右衛門どの。

政右 栢木善右衛門どの。

善右 同門のよしみ、駈けつけました。

政右 御挨拶は追つての事、御免なされ。

善右 イヤ、天晴れのお働き。して、靜馬どのは。

政右 いづくに居るか、お頼み申す。

善右 心得ました。

ト駈けて入る。贅宅、刀を杖に突きがら下知をするを、

政右衛門、討ち放す。

孫八 若旦那のお身の上か。

政右 心元ない。

ト追ひ駈け入る。ト黒幕、引き落す。

造り物、小田原町の體になる。林左衛門、逃げかゝ

るを、政右衛門、追ひ駈け出て

林左衛門、いづくへ逃げる。

林左 もう、絶體絶命ぢや。

ト政右衛門に渡り合ひ、切り伏せられる。ト源内、鎧

を持ち出て

源内 主人の敵。

ト突きかゝる。立廻りあり。

政右 ハテ、下郎には勇々しき奴の。

源内 覺悟せい。

トかゝるをあしらふ。立廻りあり。

政右 主の敵と思ふは尤もながら、某に刃向ふとは、螳螂

が斧。

源内 なにを。

ト突きかゝるをあしらふ。タテあつて



政右 あたら命を失はんより、早く逃げい〜。

トいろ〜ある所へ、孫八、手を負ひ、大勢に取巻かれ出るを見て

エ、面倒な。

ト源内を切り倒す。

コリヤ孫八、氣を慥かに持て。

孫八 これしきのかすり疵、お構ひなくとも、若那旦那を。

政右 合掛ぢや。

ト家來を進ひ込む。所へ十兵衛、出る。

孫八 うぬも敵。

ト刀を振り上げる。十兵衛、慥へ〜

十兵 イエ、申し〜、私しは、呉服屋でござります。

ト逃げうとする。

孫八 なにを。

ト切り倒し、止めを刺す見得にて、道具、變へる。

逃り物、打ち抜き、向う、城の體。又五郎、鎗にて

突きかける。静馬、小太刀の大タテ、いろ〜ある

所へ、政右衛門、駈けつけ

政右 静馬か。

静馬 ハツ。

政右 櫻田を初め、助け太刀の奴ばら、残らず討ち取つたぞ。

又五

すりや、残らず討ち取つたとな。

静馬 残りは澤井又五郎、彼れ一人。

政右 踏ん込んで、討ち止めい。

静馬 合掛ぢや。

政右 康木政右衛門が控へた。又五郎、卑怯な。

又五 返り討ちや、覺悟せい。

ト劇しくタテになる。静馬、ひるむ。

政右 又五郎、卑怯な。

又五 何が卑怯ぢや。

ト振返る。隙を見合せて

政右 ソリヤ、そこぢや。

ト静馬、又五郎を切り伏せる。所へ主膳、善右衛門、

兩方より馬上にて駈けつける。

静馬 親の敵。

政右 男の敵。

兩人 思ひ知つたか。

ト兩人、止めを刺す。

善右 ホ、、、天晴れ、出來たく。

主膳 首尾よく本望遂げ、主人の大慶

善右 兼ねて主人の嘉望、兩人とも、馳走申しつけよと、

主人の詞

政右 だんくの御深切

主善 先づこの場は、お立ちく。

ト打出し太鼓。

幕

伊賀越乘掛合羽 (終り)

皇州に名を得しは大名の家音定め縁に千束の御木は日當もしつくり大菊小菊の茶碗の身替り割つて云はれぬ  
系圖の存所主と親との名案合はば血筋の企みにほびこりし  
佞人の執權職

靨者は荒男  
あらやうとこ

差酌は色男  
いろんどこ

敵討安榮録  
かたき うち あん えい ろく  
八讀冊本

松門のきつな情と情との義理立てば千筋の糸にしがらみし  
貞心の織屋娘  
ていしんのおりやなご



座本  
若川八郎

初演繪番附表紙



敵討安榮録

發端

小田原陣の場

役名 政所圍生の前。大石内記。堀部秀丸。近藤十郎。乍間十平次。三輪右京太夫。淺野典膳。三輪要之助。三輪秀太郎。安達友之進。花園主水。

造り物、正面一間半の屋體、桐の臺の敷付きし陣幕を敷り、この左有亂杭道茂木、すべて陣家の體。屋體の眞中に圍生の前、蒲霽、電鉢巻にて合引にかゝり居る。後に腰元、長刀を持ち付き添ふ。この左右に典膳、右京太夫、皆々陣羽織にて座り居る。右典膳の下座に十平次、澤十郎、半切れ小手腰當にて並び居る。平舞臺上手に秀太郎、友之進、陣立の形にて反り打つて居る。同じく下手に要之助、主水、陣立の形にて真中に切り首を置き、きしみ居る。橋が

かりの方に、秀丸、内記、半切れ小手腰當にて並び居る。この見得、ドンチヤン打込み、喊の聲にて幕の内より

秀太 此方の手柄ぢや。

要之 イ、ヤ、此方の手柄ぢや。

友之 そりや卑怯であらうぞ。

主水 何が卑怯ぢや。

トばた／＼にて幕明く。

秀太 如何やうに云ひ廻しても、この首取つたは秀太郎の手柄ぢや。

要之 イヤ、首討つたは拙者なれば、高名はこの要之助。

秀太 兄の手柄を邪魔すれば、弟とて免さぬぞ。

要之 例へ見者人でも、手柄を奪はれ居られうか。殊に依つては、免しませぬぞ。

秀太 その願祈を。

ト秀太郎、友之進、主水、双方より詰め寄る。

圍生 双方ともに待て。

秀太 イヤサ、兄に向つて刃向ふ弟めゆゑ。

右京 御意ぢや。双方ともに控えぬか。

秀要 ぢやと申して。

典膳 御前の御意を背かつしやるか。

秀要 ハツ。

ト双方へ控へる。

園生 双方ともに高名を懸はさんと、一つの首に兄弟の争ひ。今四海一統に久吉公に随ひ、敵たふ若はこの駿河の北條ばかり。それゆゑの城責め。我が君には藤枝の陣にあつて、君の代り、諸軍をねざらへと仰せを受けて、立越したるこの園生、軍の様子、遂一に聞いたる上、何れも後での評議。して、この兄弟は。

右京 ハツ。兩人ともに某が忤。兄は秀太郎、弟は要之助と申して、今日初陣でござります。

園生 して、付き添ふ兩人は。

主水 拙者めは、花園主水と申す者。

友之 拙者は安達友之進と申して、右京之夫が郎等でござりまする。

右京 彼れらは兄弟の子供に劍術を指兩いたす者ども。まさかの時に役に立つ者ゆる、兩人の忤に付け置きましてござりまする。

園生 すりや、長秀の身内に、茶這の妙を得たりと聞き及びし花園主水とは、その者よた。

右京 左やうでござりまする。

典膳 この度の合戦、四海を一統する大切の軍ゆる、先陣は斯く云ふ淺野典膳義雄。さしもの北條兼も、城を明け逃げ行きしは、全く身共が武威のなす業。なんと、さうではあるまいか。

十平 ナニサマ、荒ごなしは我れ／＼が致した。跡へ廻つて拾ひ廻つて高名話し、承はりませうか。

三人 して、この首は、何者の首でござる。

友之 この首こそは敵方の大将、北條五郎時氏が首でござりまする。

源十 すりや、時氏が首とな。

友之 秀太郎さまがこの首を取たるその高名の次第、何れもお聞き下されませう。

皆々 ドリヤ、承はらうか。

ト面白き合ひ方になる。

友之 今日秀太郎さまのお供申し、逃げ行く落武者、無盡に切り立て／＼追ひまくる。

要之 敵を愛を大事なりと、火花を散らして責め戦ふ。

秀太 その時某大音上、遠き者は音にも聞け、三輪右京太夫長秀が忤、秀太郎が初陣、我れと思はん者あらば、

イサ来い勝負と馳せ廻れど、恐れて進み寄る者もござらな。ナア友之進。

友之 御意の通り、某が指南いたし九程あつて、イヤモウ、鬼神のやうに見えましてや。

主水 斯くて北條氏、必死の軍を露情せしか、紺絲織しの大籠に、四尺に餘る太刀引ッ提げ、警備に突ッ立ち上り、ヤア殿めしき童が振舞ひ、討死の供にせんと、霧進に打つてかゝる。

秀太 心得たりと渡り合ひ、三十餘合戦ひしが、なんと天晴れでござらうがな。

要之 敵は強勢、力勝り、此方は非力、馬より引落され、膝の下に組み敷かれ、危ふく見えたるゆゑ、某匠けつけ時氏が、揚卷搦んで引退くる。

秀太 コリヤ、強い事ばかり。其方も時氏に組み敷かれ、既に首を斬かれるのであつたぞよ。

友之 某、斯くと見るよりも、秀太郎さまの上帯取つて引立て、お敷ひ申し、傍への木藪に息をつく。

主水 あはや要之助さまの御身の上と見たるゆゑ、短刀持つたる時氏を、後抱きにムンツと組み、草摺をたゝみ上げ、鏢の隙間を二差し三差し。

要之 北條が手の者ども、主人の敵と取巻くを、片端に切り立てる。

秀太 そこらはぬからぬ秀太郎、落ちたる首を刀につらね敵方の大将北條時氏を討ち取つたりと呼はりしゆゑ、殘黨のこらず逃げ失せしは、なんと天晴れの高名でござらうがの。

友之 イヤモウ、此方の手柄に違ひござらぬ。

主水 イヤ、討つたるは我れ々主従なれば、高名は此方サ。

秀太 でも、相手の首は身共が持ち歸つたれば、この首は身共がのサ。

要之 そりや兎者人の、御無體でござりまする。

秀太 何が無體ぢや。

主水 無體も無體、手柄を奪ふ邪ま非道。

友之 ヤア、秀太郎さまに向ひ、邪まとは案外千萬。その頸骨を切り折るぞ。

主水 見事御身が。

友之 なんでもない事。

四人 サア々々。

ト四人詰め寄る。

園生 双方ともに、軍の勝負相知れたぞ。

秀太 知れたとは、この秀太郎が高名でござらうがな。

要之 この要之助の手柄でござりませうがな。

園生 イ、ヤ、時氏を討つたるはそれなる花園主水。

皆々 なんと。

園生 尤も秀太郎、初めに刀は合せども、組み敷かれたれば危ふい命。要之助が居り合はさずば、どの命で敵の首

は持ち歸るぞ。

秀太 サア、その儀は。

園生 弟があつたればこそ、命助かり歸りしは、大きな

仕合せ。要之助も主水が時氏、刺し通せしゆる、組み敷か

れたるを、天晴れ首打つたるは、これ皆主水が働らき。

なりや兩人の命は、主水に助けられしかば、この高名は

主水一人。

友之 ア、イヤ、恐れたが、秀太郎さまを救ひしは某。

主水に助けられしとは。

園生 其方秀太郎、救へども、殘黨に取巻かれ、時氏討た

れずんば、さす敵やはか其方達を生けて置からうか。殊更

秀太郎が組み敷かれしを、要之助が助けしを見ながら、

秀太郎ばかり救ひ、要之助を押し直せしは、敵が怖さに

同じ主人を、見殺しにする心か。ハテ、天晴れの侍ひぢ

やなア。

友之 左やうではなければども。

園生 主水は又、敵を討つて殘黨を追ひ散らせしは、比類

なき働らき。彼れが手柄と云うたが、自らが誤まりか。

友之 ムウ。御尤もに存しまする。

園生 さりながら、家來が手柄は主人の高名、敵の大將を

討つたるは、右京大夫が忤要之助と、高名の一番筆に記

すであらう。

典膳 イ、ヤ、その一番筆、罷りならぬ。

右京 そりや又なせな。

典膳 さればサ、先陣を承はり、城を攻落したるは身共、

どうで討死せねばならぬ時氏。身が軍勢にて遠巻きし

て、逃げ行く事ならぬにこそ、討死と云ふもの。なりや

この首も身共が手柄。と申すもの高名帳の一番筆は、

この浅野典膳。

右京 そりや、貴殿に一理あるに似たれども、現在討ち取

つたるは此方。それに高名帳に記されんとは、何ゆる

でござるた。

典膳 ハテ知れた事。某は先陣。後陣は貴殿。先陣の軍敵



れなげ、後陣より出て戦ふ筈を、某が勝ち誇つて、最早後陣はいらぬ場合、それに何ぞや、あぐちもきれぬ童を出し身共が手柄を妨げするは、エ、こりや何か、羨やましさを返報か。近頃奥性千萬であらうぞ。

秀太 イヤ、典膳さま、餘りと申せば、そりやお詞が過ぎます。尤も軍令は左様なれど、また拔駆けのなどと云ふ事もござる。返答に依つて聞捨てには致さぬぞ。要之、成る程、兄者人の仰せの通り、誰れを指して童と御意なさる。それを承はらう。

典膳 何をこませた奴の。聞きたくば云うて聞ける。三輪長秀の俸の其方違、素丁稚どもが事ぢや。

秀要 もう判備が。  
トか、らうとするを、友之進、主水留める。

右京 兄弟ともに待て。ナニ淺野どの、すりや、いよくこの高名帳に。

典膳 オ、記さす事罷りならぬ。

右京 さう云やれば侍ひの意地、高名帳に記して見せう。

典膳 見春記すか。

右京 記して見せう。

典膳 何を小續な。

ト皆々詰め合ひとなると、エイ、と喊の聲にて、軍兵一人入り出て

軍兵 ハツ、申し上げます。殘黨死らす討ち取り、城には火を掛けましたれば、早々藤枝の御陣まで、お引きあられませいと、我が君の御意でござりまする。

團生 聞かれしか何れも。敵も死らす亡びし上からは、味方同士の手ひは無益。攻め落せし高名は典膳。また大將を討ち取りしは長秀が手柄と、我が君へ申し上げなば、さぞお喜び。互ひに遺恨残らぬやうに、兩人、申しつけた品これへ

腰元 ハツ。  
ト腰元二人、大菊小菊の茶碗に茶を立て持ち出て、典膳右京太夫の前に直す。

右典 これは。

團生 我が君茶道を好ませ給ひ、千の利久を軍中に召連れられ、いつにても勝ち軍のその時は、この大菊小菊の茶碗にて、茶を召さるゝが吉例。只今の争論も自らが挨拶。以後は遺恨残らぬやう。

右典 ハツ。

ト兩人 茶を呑む。

園生 オ、早速の得心、重疊々々。その褒美には、大菊の茶碗は右京大夫、小菊の茶碗は典膳に遣はす。さりながら、城を攻め落せしその印に、時氏がその首は典膳と要之助が合打ちと言上なさば、互ひに武士は立つ道理。その代りに今遣はした小菊の茶碗を、典膳が手より主水へ褒美に遣はせば、主水も家の規模となり、双方無事に納まる道理。

右典 御意、畏まり奉りましてござりまする。

ト主水、切り首を典膳が前にやる。十平次、受取り、典膳、茶碗を主水に遣る。

主水 冥加に餘る家の面目、世の聞こえ。

典膳 心魂に徹し、忝なう存じ奉りまする。

秀太 ハテ、手柄はしたいものぢやなア。親人と云ひ主水

まで、御褒美を戴き、弟は高名帳に記されて、働き損は身共と其方。なんと友之進、さうでないか。

友之 ハテ、是非がない。主水どのより拙者が劍術は未熟

ゆゑ。此方に不覺を取らせたと云ふもの。この恥辱はいつぞは晴らして見せう。お氣遣ひなされずと、落ちついでござれ。

園生 指す敵亡びし上からは、一刻も早く藤枝の陣所へ引

取らん。

右京 某は久吉公へお暇願ひ、本國へ立歸らん。

典膳 ものども。めでたく勝鬨々々。

皆々 エイ、オ、オ、

園生 皆の者。

皆々 イザ、お立ちあられませう。

ト双方引張り、天王立ちにて、

口 明

吉原揚屋の場  
衣紋坂の場

役名——三輪秀太郎。三輪要之助。栗原源内。黒川藤治。間瀬軍兵衛。安達友九郎。高梨武兵衛。丁字屋才兵衛。仲居、お徳。同、おみつ。揚屋娘、おみき。丁字屋才兵衛。我慢坊。傾城。雛鶴。同、梅の戸。同、花巻。同、園菊。十兵衛妹、お貞。主水娘、操。角力、名取川龍介。花園三十郎。小栗栖十兵衛。

幕

造り物、平舞臺、正面長障子、上手塗り骨障子中二障子、障子がり茶屋格子、いつもの處に門口。すべて吉原物屋の標。幕の内より物の戸、衣裳袖箱。秀太郎、淡手なる着付け羽織にて、袴の戸にもたれかゝり居る。軍兵衛、藤治、海内、打鐵衣裳にて、帯を尻にして前方より持つて居る。友九郎、着付け羽織を脱ぎかけ、扇を狐の面にして、裏の向うの軒を取らうとして狐の振りをしく居る。おきき茶屋、花巻、團菊、傾城の形。袖野、しげり、おとく、仲居にて、何れも狐釣りの障子にて手拍子を叩き居る。この體にて幕開く。

皆々

ヤア、釣るといふ。狐を釣るとよ。

ト手拍子を叩く。友九郎、いろ／＼狐の姿ありあつて、

竹を振り損なひ、喚ばさる。

ウアイ。友九郎さんの負けおや。

秀太 サア友九郎、一つ呑め。

友九 まは呑まばならぬか。サア、注げ。

ト酒を飲む。これより酒事になる。

軍兵 貴客が御り急ぐに依つてぢや。

友九 一體藤治どのは、上手でござるてや。

藤治 イヤ又、友九郎どの、狐の振りは、堪つたものではござらぬてや。

友九 その筈ぢや。來芝の後ろ面を傳授いたして居りますてや。ハ、ハ、ハ、ハ、。

梅戸 ほんに友九郎さんは、きつい難し難ぢやわいな。

友九 其やうにもないてや。

花巻 イエ、一體昔はすらりと高し、大體好い風情ではないわいな。

團菊 お前のやうな好い男に、なぜ女子が惚れぬぞいなア。

軍兵 そこで、假名を美男と云うてや。

秀太 コリヤ、さうしてこの藤治太夫は、なぜ遠いぞいやい。呼びに遣れ。

花巻 これは又、氣の多い。櫻戸さまと云ふ箱方の定まつてあるに、そんな事云はしやんしたら、櫻戸さんが腹を

立てるでござんせうぞえ。

梅戸 花巻さん、大事ござんせぬ。秀太郎さんの氣の多いは、初めから知れてある。なんにもこちや構やせぬぞえ。

友九 アレ、ちよつと、ひでりかける。

軍兵 若殿、斯う云ふ美しい者を抱へながら、また雛鶴を

呼ぶとは、餘程お好き様と見えますわいな。

秀太 何をわいらまでが、おだてるかいやい。斯うぢやわい。この梅の戸に首丈惚れたゆゑ、相方にしたれども、今に祭を渡らさぬわい。

友九 とところに雛鶴と云ふ者がお目にとまつたゆゑ、これもいろ／＼口説けども、御舎弟の相方ゆゑ塚が明かぬ。そこで身共が分別は、兩方とも請け出して、おてかけにせうと存ずるてや。

みき なんぼう、どのやうに云はしやんしても、雛鶴さんは得心はあるまいぞや。

秀太 サア、そこを離かす手段があるぢや。

ト懐中より疊紙を出し

これぢや〜

皆々 そりや、何ぢやえ。

秀太 これは女を惚れさす守宮の黒紙ぢや。これを知らさぬやうに、振りかけると、直ぐにずる／＼べつたり、松脂と来て居るわい。

皆々 ハテ、奇妙なものなア。

秀太 試みに誰れぞに振りかけて見せう。

ト薬を摘み、立つて行く。

花巻 こちらは嬢ぢやわいなア。

秀太 そんなら差し詰め、仲居のおみつになりと。トおとくに振りかけると、ひら／＼として秀太郎の側へ嬢らしうべつたり座り

とく コレイナア、秀さん、わたしや味な氣になつて、お前にな。オ、恥かし。

ト抱きつく。

友之 これは奇妙ぢや。

秀太 なんとえらからうな。

とく どうぞしておくれんかいなア。

友九 エ、ばつ／＼と砂臭いわい。

ト抛り退ける。

権戸 ほんに聞いて居ると、をかしいわいなア。

園菊 わしらにてんがうさんしたら聞かんぞえ。

秀太 わが身はどうで身請けする者ぢや。なんのそんな事せうぞいなう。

軍兵 時に若殿、その薬を拙者に拜領はなりますまいかな。

源内 我れ／＼も頂戴が致したいてや。

友九 お身達は薬を貰うてなんとする。

軍兵 何にするとは曲がないわい。小栗稻十兵衛が妹のお貞に、下駄履いて首つただでござるてや。



藤治 我れ〜も思惑がござるてや。

友九 ムウ、お身達が云へば、身共も云はねばならぬ。花

園三十郎が、株押にいきついて居れど、承引せぬ。處を

この薬を以て置けたいが、秀太郎さま、拙者に拜儀はな

りますまいかな。

秀太 遺るは遺るが、さう物にやつては後がない。斯うせ

い。なんであらうと、四種の物を伏せて置いて、一種は薬、

あと三種は外の物を入れて置けば、とこでお身達に品

玉の舞を舞はして、一人々々呼び出させ、當つた若に薬

をやらうかい。

女皆 こりや面白からうわいな。

ひき わたしは品玉の舞は知らぬわいなア。

秀太 ハテ、この間乙女屋文字が、舞うたを見て居やうが

な。ツイぐる〜と舞へ〜。サア、當つたが、蕙方果報

ぢや。合點か。

皆々 心得ました。

ト秀太郎、何なりとも器に四品入れ、隠して

秀太 サア、よいか〜。離せ〜。

トこれよりおみき、扇を持つて品玉の振りになる。

品玉や〜、いかきかぶせた内こそ床しけれ、北山時

雨と同じ事、あるかと思へば、變るが早い、おて、こて

ん、すて〜こてん、おて〜こすて〜こおて〜こてんと、

けうといものぢやいな。

トおみき、藤治、酒内を招く。兩人浮いて來て器物を

明けて、

酒内 エ、蕙ぢや〜。

藤治 潮ぢや〜。

兩人 エ、忘々しい。

ト打ちつけて後へ寄る。また申程より舞つて軍兵衛を

呼び出す。軍兵衛、器を明ける。

軍兵 ヤア、こりや金ぢや〜。こま金ぢや。

友九 めめた。これが差詰め薬であらう。有り難いぢや。

ト明ける。内より猫飛び出て友九郎に掻きつく。

友九 ワアイ。

ト飛び退き。

猫ぢや〜、野良猫ぢや。瞞い目に遭うたわい。

女皆 ワアイ。騙されて好い氣味な。

皆々 こりや、どうでござりますぞいの。

秀太 さればサ。雛鶴を手に入れた後で遣らうわい。

梅戸 お前にそんな物持たして置く事はならぬ。此方へお

ござんせ。

ト引ツたくる。

秀太 コリヤ、それを此方へくれやい。

梅戸 コレ／＼。皆寄つて取り勝ちにござんせ。

友軍 こりや面白い。

藤治 宙で取つてくれう。

ト梅の戸、薬を持つて逃げ廻る。狐釣りの鳴り物になる。秀太郎、友九郎、軍兵衛、皆々進ひかけ廻り、ト皆々奥へ入る。ト鳴り物入りのぬめり唄になり、向うより雛鶴太夫、衣裳袴袴、傾城の形。禿一人付き、要之助、着付け翁織、酒に酔うたる體。仲居おみつ、そのなりにて肩に掛け出る。次に操、お貞、振り袖屋敷姫の捲らへ。名取川龍介、角力の形にて付き添ひ出る。

雛鶴 申し、要さま、危ないわいなア。

要之 なんの危ない事がある。危ないとは其方の事ぢや。

手放したら兄貴に取られるに依つて、側を放さぬのぢや。

操 申し若殿様、どうぞお心を慥かにお持ちなされて下さりまして、わたしが申します事を。

龍介 ハテ、爰は門中。マア、揚屋までお出でなされませ。

てい さりでござんす。マア、とつくりと、あれにて申し上げませう。

要之 さうぢや／＼。皆来い／＼。

ト又ぬめり唄になる。皆々本舞臺へ来て、上手、要之助、次に操、お貞、龍介、その外重みよく並び、奥より梅の戸出て

梅戸 オ、雛鶴さん、ござんしたかいな。

雛鶴 梅の戸さん、定めてわたしが来ぬと云うて、秀さんが

がやかましう云はしやんしたであらうなア。

梅戸 やかましい、段かいな。わたしも嫌らしいのとやかましいのとで、困つて居るわいな。聞かしやんせ。秀太郎さまがお前に惚れて、惚れ薬を掛けると云うて居やしやんすに依つて、あんまり惚さに惚れ薬と、外の物と、知らぬやうに替へて置いたわいな。

雛鶴 ほんに、いろ／＼の事をするお方ぢやなア。

操 イヤ申し若殿様、只今申します通り。

要之 ア、やかましい。操、お貞、わいらがなんぼう戻れと云うても、滅多に去ぬる事ぢやないわい。コリヤコ

リヤ、酒持て〜。

ト手を叩く。仲居おせん、酒持つて来る。

操 お貞さま。

てい お貞さま。

兩人 困つたものではあるぞ。

ト桐が、リより三十郎、着付け上下にて出て、ズツと入る。

三十 オ、妹様、お貞どの、若殿様、これにござりまするか。

てい オ、三十郎さま、ようお出でなされましたなア。

ト嬉しきこなし。

操 果利かもしお歸りを、お勸め申して居りますれど、

一向清に請ふこ、お他愛もなないわいなア。

三十 ハッ、要之助さま、三十郎めのござります。この

度高家様相敷の儀に付き、圓元へ御上使御志ちなさる、

目も近日、それゆゑお迎ひに參上仕つてござりま

す。

要之 ヤア、また堅造めがうせたか。ア、持てぬ〜。

コリヤ名取川、われに云はおばならぬ事があるわい。こ

の梅の戸がわれに一向思慕ぢや。おれが世話する程に、

靡いてやれ〜。

龍介 これはしたり、私しはそんな事故しますると、力が

落ちます。嫌でござります。殊に三十郎さまも聞いて

ござりますすわい。

要之 この堅藏めにも世話やく者があるわい。お貞、わり

や三十郎に惚れて居やうがな。

てい ア、申し、滅相な、そんな事を。

要之 云ふな〜。おれが腕んで置いたわい。コリヤ、三

十郎、おれが云ひつける。お貞が戀を叶へてやれ。

三十 若殿、大概に馬鹿を盡さつしやれ。これに妹も聞いて

居るに、馬鹿々々しい。

ト腹を立てる。

雛鶴 コレイナア、要さま、つか〜と、そんな事云はぬ

ものぢやわいなア。

要之 大事なわいやい。ありや操への遠慮と云ふものぢ

や。龍介、われはこの梅の戸と一緒、操を連れて奥へ

ゆけ。

龍介 呉まりました。

操 左やうならば奥へ參りませう。兄さま、お前は爰に

居て、若殿様のお心に叶ふやうに、どうなりとして御歸

國あるやう、合點かえ。

要之 ハテ、あれに構はず、ちやつと行けやい。

龍介 サア、お出でなされませう。

ト合ひ方になり、探、奥へ入る。梅の戸、龍介の手を取らうとするを、龍介、嫁がつて奥へ入る。梅の戸、つんとして入る。

要之 サア、邪魔は拂うた。お貞、三十郎に抱きつけ〜。

てい 三十郎さま、あのやうに御意なされますが、抱き

ついても大事ござりませぬかいなア。

三十 父母免ささればこれを娶らず。唯弱の振舞ひ、控へ

召され。

てい あのやうに云うて、睨んでござりますわいなア。

要之 ヤイ、おれが云ひつけるのに、なぜ抱きつかぬ。

三十 御意ではござりませすれど、餘りと申せば。

要之 おれが云ひつける事、聞かぬと去なぬぞ。

三十 ハッ、然らば如何やうとも仕りませう間、何卒御願

國を願ひ奉ります。

要之 ちつとさうもあらう。ソリヤ、抱きつけ〜。

てい ハイ〜。

ト抱きつかうとする。三十郎睨む。

てい アレ又、睨んでござりまする。

要之 おのれ、なぜ睨む。

三十 イヤ、睨みは仕りませぬ。

要之 そんなら、兩手をグツと上げい。

てい 御意ぢや。手をお上げなされい。

三十 ホイ。是非に及ばぬ。如何やうとも。

ト手を上げる。

要之 もつとぢや〜。

三十 然らば、斯う仕りませうかな。

ト兩手を上げ、膝立てる。

てい オ、嬉し。

ト抱きつく。三十郎、難儀なこなし。

要之 オ、出かした〜。それでこそ、おれが家老ぢ

や。

雛鶴 お前も人を衝ながらすやうな事ばかり。悪洒落なお

方ではあるわいなア。

要之 ヤア、面白い〜。これから奥で酒にせう。皆來い

皆來い。

ト行かうとする。三十郎留めて



三十 イヤ、若殿様、是非とも歸國の儀を。

要之 ハテ、去ぬる時分には去ぬわいやい。

三十 して、そりやいつ頃。

要之 來るはいの人、歸の年。

三十 イヤ、それでは。

要之 やつさもつさは其方でせい。  
ト歸り三味線になる。要之助、歸りながら奥へ入る。

鑓物、飛、仲居付いて入る。後、合ひ方。三十郎お貞  
飛る。

でい 三十郎さま。

三十 お貞どの、あの體では、御歸國は心元ない。

でい ならぬまでも、お勸め申さればお家の大事。

三十 二なたは若殿に付き添ひ、何分お歸りあるやう、お

勸め申して下され。

でい アイ、畏まりました。

ト奥へ入る。

三十 若殿の御成時、もし秀太郎さまに御家督定まらば、  
友之進は出頭、お國の福ひ。ハテ、どうしたものであら

うなア。

ト奥になり、手を組み思案のこなししながら奥へ入

る。橋が、りより十兵衛、衣裳上下にて家來連れ出て

十兵 案内いたせ。

家來 ハツ。  
ト門口へ来て

頼もうぞよ。

ト奥よりおみき出て

みき ハイ、どなたでござんすえ。

家來 これに、三輪秀太郎さまは御座なさるゝか。

みき アイ、秀さまは今奥で、酒盛りの最中ぢやわいな  
ア。

家來 これにでござりまする。

ト十兵衛に云ふ。

十兵 コレ女中、國元より小栗柄十兵衛と申す者が、お迎

ひに参りましたと、秀太郎さまへ申してくりやれ。

みき そんなら爰に待つて居やしやんせ。さう云うてあげ

ませう。

十兵 然らばこれに相待ち居る間、早く申してくりやれ。

頼んだぞよ。

みき アイ、

ト奥へ入る。十兵衛、内へ入る。

十兵 ハテサテ、廊の者は子供でも、發明に見ゆるわい。

ト家來、十兵衛の前へ其直す。

十兵 コリヤ、身は暫らく隙取る程に、次へ行て休息いたせ。

家來 ネイ／＼。

ト下手の障子屋體へ入る。

十兵 誠に廊は賑はしきゆゑ、御兄弟が御歸國ないも道理道理。さらば一服いたさうか。

ト實のんで居ると、奥より花巻、團菊、梅の戸、おみき、お徳出て、十兵衛を取巻く。

梅戸 秀さまを邀ひにお出でたは、お前かな。

十兵 如何にも左やうでござる。

花巻 なんと梅の戸さん、團菊さん、皆見やしやんせ。秀

さんの家來にしては、餘ッほど好い男でないかいなア。

團菊 サイナア。見れば見る程、憎らしい好い男ぢやわいなア。

なア。

梅戸 申し、さうしてあなたのお國は、何處でござんす

え。

十兵 手前の國は奥州でござる。

みき その奥州と云ふは、宮城野信夫が淨瑠璃にある、奥

州かえ。

十兵 どのやうな事か存せぬ。

とく 奥州には赤蜻蛉といふ道者が、たとと出る所ぢやな

いかいなア。

十兵 左やうでござるてや。

梅戸 その奥州のお方に誤合はぬ、可愛らしい殿御振り。

お前のやうなお方を、田舎に置くは惜しいものぢやわいなア。

十兵 こりや、田舎武士と思ひ、お驚りでござるかな。

花巻 イ、エ、驚りはせぬぞい。お前のやうなお方なら、

わたしや付合うて見たいわいなア。

ト側へ寄るを團菊、花巻を突き返す。

團菊 オ、厚かましい。わたしが惚れうと思ふうちに、ち

やんと先へ惚れてかいなア。……申し、わたしにはまだ

間夫もござんせぬが、なんと深間になつて下さんせぬか

え。

みき わたしもあなたのやうなお方なら、水上げがしても

らひたいわいなア。

とく オ、ませやの。お前よりわたしが云ひたいが、所詮相手にはなつて下さんすまいし。

園菊 付合うて下さんす心はないかいなア。

十兵 これは如何な事。左やうにてんがう云はずと、早く

秀太郎さまに、お歸りなされと云つて下され。

花巻 イ、エ、てんがうぢやないわいな。せめてお前の口

の添うた、貰なりとのまして下さんせ。

ト十兵衛が持つて居る煙管を取る。

とく 厚かましい。わたしが先ぢやわいなア。

二人 わたしぢや〜。

トせり合うて煙管を取り合ふ。奥より操出て、煙草を

取る。

皆々 ヤア、お前は最前のお女中さん。

ト憐り。

操 お傾様方、若殿様が迎ひの者を去なせいとこそ仰

しやつたれ、憐れいとは云ひつけはなされまいがな。梅

の戸、皆を連れて秀太郎さまのお側へ、ちやつと行かし

やんせ。

梅戸 それ見やしやんせいな。お前方ゆる、わたしまでを

叱らしてから。サア、清奥へござんせ。

花園 エ、あつたら男を只去なす事ぢやなア。

操 ちやつ〜と奥へ行かしやんせいなア。

ト腹立て云ふ。

皆々 オ、怖。

ト合ひ方になり、女形皆々奥へ入る。操ムツとした顔

にて上手に座る。

十兵 オ、これは操どの、光緒よりお出でなされたさう

なの。

操 ハイ、疾から參つて居りまする。

トつんとして云ふ。

十兵 して、秀太郎さま、要之助さまにも、御機嫌よろし

くござるかな。

操 御機嫌やら不機嫌やら、こちや腹が立つてならぬわ

いなア。

ト泣く。

十兵 これはしたり、何が悲しうて泣かつしやる。

操 泣かいでぢやなア。十兵衛さま、お前は聞えませぬ

ぞえ。今更云ふには及ばねど、堅い屋敷の日顔を忍んで、

逢ひ初めたは三年以前、どうぞ女夫になりたいと思ふゆ

ゑ、表向きから父様へ、云ひ入れて下さんせと頼んで

も、今に捨て置かしやんすは、女房にする事は嫌でござ

んすか。家中からは嫁入りの事云うて來ても、嫌ぢや嫌

ぢやと無理云うて、年長けるまでこの振り袖。兄様の手前も面目ない。それにお前は悪性な。たつた今來ると其まゝ、多くの女中衆を捉へて、ぢやら〜と、わしが思ふやうにもない。胸慾でござんすわいなア〜。

ト取りついて泣く。

十兵 これ又、氣の廻つた。わが身を嫌でない證據は、今に女房を持たぬぢやないかいなう。其方の親御主水どのは、おれが爲には劍術の師匠ゆる、云ひ憎さに遅うなつたのぢや。近々には仲立ちを頼め、表向きから呼び迎へる程に、案じやんな〜。

ト此うち友九郎出掛け、この體を見て惻りして、ちやつと隠れて聞いて居る。

操 そんなら、近々に仲立ちを入れて、呼び迎へて下さ

んすかえ。

十兵 小栗柄十兵衛は武士ぢや。僞はりはないわいなう。

操 嬉しうござんす。併し、國では人目にせかれて、た

まの逢ふ瀬も忙はしい契り。

十兵 イカサマ、爰は廓。誰れ懼からず。ドレ。

ト操が袖から手を懐へ入れる。

操 オ、こそば。

十兵 ナニこそばい事がある。女房にすると子を産まして、おれが跡取りを拵らへねばならぬがや。

操 サア、さうなつたら、大抵嬉しい事ぢやないけれど。

十兵 けれどなら、こちら向きや。

ト扇を開き、ちよつと口を吸ひ抱きつく。友九郎これを見て、味な身振りして、ばつたりと轉ける。兩人惻りして飛び退き

操 オ、怖。誰れぢやぞいなア。

友九 誰れでもない。友九ぢや〜。

十兵 これは友九郎さま、先づはお達者で重疊々々。

友九 イヤモウ、達者過ぎて木のやうになつてござる。

十兵 それは大悦。拙者もお歸りが違さに、お選ひに參つ

てござる。

友九 お選ひどころか、少と早過ぎて先走りが行きまし

た。

十兵 そりや何の事でござる。

友九 なんにも云ふ事はない。十兵衛に用がある、呼べと

若殿の御意ぢや。早く奥へお出でなされい。

十兵 ホオ、秀太郎さまがお召しなさるゝか。それは行か



ずばなるまい。下れ、お目にかゝつて。

ト行かうとする。操、十兵衛が袖を叩へる。十兵衛、  
聲々と互ひに目で知らせ合ひ、友九郎、中へ割つて入  
り

友九 ハテ、ござれと云ふに。

十兵 さらば若殿のお目にかゝらうか。

ト奥へ入る。

操 わたしも若殿様のお側へ。

ト行かうとするを、友九郎とめて

友九 ドツコイ。そもじはならぬ。待ち縮へく。

操 イ、エ、わたしや秀太郎さまのお側へ。

友九 嘘ばつかり。若殿をかこつけて、また十兵衛と契ら  
うでた。

操 そりや、何仰しやりますぞいなア。

友九 何云ふとはしらへくしい。最前から見て居たれば、

袖から袖へ手を入れて、オ、こそば、なんのこそばい事が

ある、道ツつけ子を産まして、跡取りを推らへると扇で

震ひ、後は口中。あんまりぢやがた。

操 濡相だ。なんのマア、そんな事を。

友九 そんなりや、あれは。

操 サア、ありや。

友九 あれは。

操 オ、さうぢや。十兵衛さまは苦手ぢやに依つて、癪  
を押へてもらひましたのぢやわいなア。

友九 ハテ、味な苦手ぢやなア。それはさうと、誰れにも  
せうが操どの、酷いぞやく。常からおれが口説いて  
も、抱捨見舞ひの觸見るやうに、ピン／＼とさつしやる  
ゆゑ、文を遣らうにも、讀んだり書いたりこれ面倒。こ  
なたさへ得心すれば、主水どのへ云ひ入れて、直ぐに女  
房。なんに慥うはあるまいがな。

操 お志しは嬉しいけれど。

友九 けれどなら、おれもちよつと口々を。

ト口吸ひにかゝる。操、嫁がり逃げ廻る。此うち橋が

かりより武兵衛、着付け羽織、金貸しの形にて出て、

内へ入る。操、武兵衛が後へ隠れる。友九郎、武兵衛

に抱きつく。この間に操、奥へ逃げて入る。

武兵 エ、穢ない。こりやどうするぢや。

友九 ヤア、今のはわれか。

武兵 エ、ちつと口ゆすげ。

友九 イヤ、うすいりの匂ひがするわい。さうして其方は

何用あつて来たぞ。

武兵 イヤ、何しに来たとは友九郎どの、こなたは〜、  
 ようそんな凄まじい顔で、ものが云はれるな。後の月、  
 こなさん、おれに何と云うた。主人は奥州の大名ぢやけ  
 れど、廓の金には詰まるが憤ひ。どうぞ金貸してくれい  
 と、泣かぬばかりに頼まんすゆゑ、おれも高梨武兵衛と  
 云はれて、大盡金を借すのが商賣なれば、二言と云はず  
 に貳百兩貸して遣つたぞや。コレ、證文、覺えがある  
 か。

ト懐中より證文出して見せる。

百兩に付き拾兩の歩金。安いもの。その安い金を借りな  
 がら、歩もおこさぬば、元も返さず。こりや、どうする  
 のぢやいなう。

友九 ハテ、よいわサ。何ヶ月滞つても、兪相はない。相  
 手は大名ぢやわい。

武兵 その大名風、措いてもらはず。金はないか。よいワ。  
 金がなくば、取る所で取るのぢや。

ト行かうとする。友九郎、引戻し

友九 待て。何處へ行く。

武兵 知れた事。この證文を持つて、恐れたがらと、でん

どで取るのぢや。

友九 それ願うて堪るものか。

武兵 そんなら金返すか。

友九 サアそれは。

武兵 ないか。

友九 サア。

武兵 サア。

兩人 サア〜〜。

武兵 どうぢやいの。

トこの時奥より秀太郎。

秀太 その金、身共が返さう。

ト軍兵衛、藤治、源内、連れ出る。

友九 秀太郎さま。して金子の心當ては。

ト秀太郎、茶碗の箱を出し

秀太 武兵衛とやら。其方に借用の金子、調達のその間  
 この茶碗を預け置く。こりやコレ小菊の茶碗とて、千金

にも替へぬ物なれど、其方に預け置く間、持つて歸れ。

武兵 呑み込みました。併し、長うは待たれぬ。この月中

ぢやが合點か。

友九 今月中には金子を持つて、身共が取戻しに參るわ

サ。

武兵 よし。併し、云はぬ事は聞えぬ。この月中が過ぎたら、此方で賣つてしまふが、それも合點か。

友九 ハテ、そりやその時、事サ。

武兵 先づ、これもよいワ。ドレ、これから仲の町の帯屋へ行て、お敵めに逢うて来る。

ト論じ、リへ入る。

友九 秀太郎さま、あの小菊の茶碗は、どうしてあなたの手に入りましたか。

秀太 さうはサ。花園主水めは、弟要之助が劍術の師匠。いつぞや北條買めの折柄、主次めゆる友之進も身共も、

軍旗を取つた、その意趣晴らしに、軍兵衛に申し付け、盗ませて置いたてや。

友九 流石は兄友之進が御指南中程あつて、餘程藥能が上がりましたてや。

軍兵 さて、これからは彼の雛鶴を、手に入れる段でござる。最前の薬を、お用ひなされませぬかえ。

秀太 成る程、薬へ呼び出し、薬を取りかけて惚れさせようかい。

藤治 それはようござりませう。

友九 併し、知れぬやうに振りかける仕様が、ありさうな者ぢやが。

秀太 斯うせうく。めいくの扇に、この惚れ薬を疊み込み置いて、扇使ひする顔で、振りかけうではないか。

皆々 こりや出来ました。

秀太 サア皆、扇を出せく。

皆々 畏まりました。

トめいく、扇を翳る。秀太郎、黒焼を蒔きちらし、ソツとすぼめて腰に差す。

秀太 サア、いゝワ。女子どもを呼べく。

友九 畏まりました。どの、お貞どの。

軍兵 儀城ども、若殿が召します。皆これへ参れ。

秀太 太夫々々。ちやつとおぢやく。

藤治 女ども、皆来いよく。

ト操、お貞、雛鶴、梅の戸、花巻、園菊、出る。

雛梅 オ、忙しない。なんぢやぞいなア。

てい 私しどもを、お召しなされませぬは。

操 なんぞ御用でござりますかな。

秀太 用があるから、来いく。

ト上手の雛鶴、秀太郎、梅の戸、友九郎、お貞、操、

軍兵衛、花巻、藤治、園菊、源内と並ぶ。

秀太 イヤ、其方を呼び出したは、外の事でもない。今日中に頼の戸雛鶴、二人とも身請けするが、それでも心に随はぬか。

雛鶴 又かいたア。なんぼどのやうに口説かしやんしても、嫌ぢやわいなア。

梅戸 わたしも身請けしらるゝ事は、嫌ぢやわいなア。秀太 随はぬか。

ト扇にて雛鶴、梅の戸の扇を叩く。

梅戸 よ、好かん。  
ト秀太郎を突き退け、雛鶴の上手へ行く。

友九 操どの、こなたの事を若殿にお願ひ申したら、お仲間なされ下されうとの事。なんと、得心か〜。

ト扇にて扇を叩く。  
ト扇にてお貞が扇を叩く。

軍兵 身共も若殿のお仲間、お貞どの、返辭はどうぢや。てい なんぼ若殿様のお仲間でも、兄様があれば、わたしが儘にも。ナア操さま。

操 それ〜、父様が得心ないうちは、どうもお返辭は。

藤源 貴様達はどうかや

ト園菊、花巻の扇を扇にて叩く。

園菊 エ、知らぬわいなア。

秀太 ハテ、揃ひも揃うた素氣ない返辭ぢやなア。

友九 なんぼう素氣なうても、ナア、若殿様、今ので、へ、靡けて見せるわい。

秀太 もう、そろ〜來さうなものぢや。  
ト雛鶴が顔を眺める。

友九 急くまい〜。嫌でも應でも來ねばならぬやうにしてあるのぢや。サア、早う返辭をしやいなう。

ト云ふ拍子に扇にて、操お貞の方へ手拍子叩く。操、お貞、顔背ける。

ハア、くつさめ。  
秀太 太夫、おれがこれ程に云ふに、なぜ物を云やらぬぞいの。

ト扇にて舞臺を叩く拍子に

ハア、くつさめ。  
軍兵 サア、嫌か應か。返辭をせぬかいの。

ト同じく舞臺を叩く拍子に  
ハア、くつさめ



友九 一體そさまに

ト同じく下を叩き

ハア、くつさめ。

秀太 惚れたと云ふは。

ト手拍子打つ。

ハア、くつさめ

軍兵 今やちよつとの

ト手拍子打つ。

ハア、くつさめ。

藤治 事ではないわい。

ト手拍子打つ。

ハア、くつさめ。

秀太 ヤイ、おのれらは、おれがくつさめをすれば、同じ

やりに、ハア、くつさめと、なぜ眞似をするのぢや。

ト舞臺を叩き

ハア、くつさめ。

三人 なんの眞似は仕らねど、ハア、くつさめ。

友九 この扇を動かすと、ハア、くつさめ。くつさめの出

ると云ふは。

秀太 イカサマ。

秀太 ア、ラ不思議や。

ト仰山に見得する。脩羅の合ひ方になる。梅の戸、此

うち笑うて居る。

秀太 傳へ聞く、唐土の何とやら國の、何とやら云ふ和

郎、三千人の官女を惚れさせし、例しを引き、ハア、く

つさめ。

友九 彼の庄右衛門さんの思ひ付きに憤ひ、宮守の黒燒な

んどを用ひしところ、ハア、くつさめ。

軍兵 女はし、らしんとして、薬の利目は更になし。ハア

アくつさめ。

秀太 渡多無性にくつさめの出るは、ハア、くつさめ。

軍兵 いち譽められに、ハア、くつさめ。

源内 二識しられ。ハア、くつさめ。

友九 三に説かれる、ハア、くつさめ。

軍兵 四風でも引いたか。ハア、くつさめ。

秀太 ハテくつさめ。

友九 奇體のくつさめ。

軍兵 業をくつさめ。

皆々 見る事ぢやなア。くつさめく。

ト無性にくさめして

ハテ面妖な。

梅戸 そりや、その管ぢやわいなア。お前方が悪濁落さしやんすに依つて、鉛墨に胡椒を交ぜたのと、取替へて置いたのぢやわいなア。

秀太 そんなら……エ、忌々しい。

ト扇打ちつける。

軍兵 もうこの上は、引ッ提へて抱いて療ませう。

藤治 それがようござらう。

秀太 コリヤ雛鶴、われを。

ト雛鶴に抱きつく。雛鶴、振り切り逃げて入る。秀太郎、追ひ入る。

友軍 否でも應でも抱いて療る。来い。

ト操、お貞の手を取る。

操貞 嫌でござんすわいなア。

ト振り切る。これより女形皆々、逃げ廻るを、敵役皆々、女形を目當に追ひ廻し、ト、騒ぎながら、皆々奥へ入ると、要之助、雛鶴が胸倉取つて奥より出る。お徳、おみき、附いて出る。

要之 サア、うせい〜。

雛鶴 こりや、どうさしやんすぞいなア。

要之 どうするの斯うするのと、今奥で聞いたれば、兄者人とどなつて、揚句の果には懼れ薬を振りかけられたとの事。大方おれが眼を曇み、もう抱かれて寢たに違ひない。サア、有やうに白状せい。

雛鶴 これは又、疑ひ深い。なんのお前を退けて、謹れに抱かれて寢やうぞいなア。

とく それ〜。そりやわたしらが、雛鶴ぢやわいなア。

ト奥より秀太郎、友九郎、藤治、源内、出掛け聞いて居る。

要之 イヤ〜、わしは斯う云ふ趣味なり。兄者人は見かけから強さうに依つて、それに喰ひ付いたかも知れぬて。一體がお好き様に違ひはない。

雛鶴 なんぼり好きでも、あの揚枝屋の看板見るやうな、秀太郎さまに、どう抱かれて寢られるものかい。ア。

おみき ほんに、顔は眞赤いなり、要さまを違うて、とんと小猿ぢやわいなア。

とく コレ、其やうに許る事を聞かしやんしたら、秀さんが腹を立てさんせうぞえ。

要之 イヤ〜、あんまり違うた事はない。嫌がる女子を

無理に口説くと云ふは、もと毛が三筋足らぬからぢや。

秀太 その足らぬは誰れが毛ぢや。

要之 ハチ知れた事、見者人の

ト見えて驚り。

ヤア、お前。

秀太 わりや毛が三筋足らぬと云つたが、どここの毛が足ら

ぬ。それを云へ。

要之 サア、それは。

秀太 云はぬか。

要之 サア。

秀太 吐かぬか。うぬ。

ト要之助を引きつける。軍勢等らうとするを、友九郎

留めて居る。おみき、お徳、軍兵衛を留めて居る。

秀太 ヤイ、自願うぬがあるゆゑ、鎌倉が心が心に隨は

ぬ。その上、見を遠にひろいだがよいか。これがよいか

これがよいか。

ト要之助を散々に振り廻す。

うぬがやうな事は、いつぞ。

ト要之助に罵りかける。裏より三十郎、ツカ〜と出

て、秀太郎を突き逃げ、要之助を圍ひ。

三十 先づ〜お待ち下さりませう。

雛鶴 オ、三十郎さまか。能う来て下さりませう。

要之 コレ、最前から見者人が。

三十 サア〜、よくござりまする。拙者が参つたから

は、落ちついてござりませう。

ト要之助を雛鶴お徳おみき介抱して、上手に行く。こ

の前に三十郎、真中に秀太郎、友九郎、軍兵衛、藤治、

源内、並ぶ。

秀太 三十郎、其方は標子を知つて留めたか。知らいで留

めたか。

三十 イヤ、何かは存じませねど、御兄弟の御争ひ、他門

の聞えも悪しく、殊更兄に負けるは弟の憤ひなれば、要

之助さまに成り代はり、拙者めがお詫び申しまする。幾

重にも御高免の程、願ひ奉りまする。

友九 三十郎、お身はなんにも御存じないゆゑぢや。弟の

身が以つて、秀太郎さまを猿ぢやと云はつしやれたゆゑ

の御立腹。こりや御尤もではござらぬか。

三十 イカサマ、それは以ての外の儀でござりまする。若

殿、どうした事でござる。兄御に難言を吐くと云ふ事があ

るものでござるか。お詫びなされい〜。誤まらつしや

れたとな。アレ、誤まつたと申して居られます。何事も拙者めに免じられて、御料簡の付くやう、幾重にもお執成しの儀。何れも、願ひ奉ります。

友九 コレ、三十郎さま、拙者に免じられたと仰せらるゝが、貴殿が詫びさつしやれば、秀太郎さまへ如何やうの無禮があつても料簡する筈でござるか。この友九郎ばかりは左やうの筋道の解らぬ、お執成しはえ、仕らぬ。

三十 イヤ、左やうではござらねど。

秀太 イヤ、さうぢや。友九郎が云ふ通り、料簡せぬぞ。併し、要之助が、雛鶴が事は思ひ切つて、あなたへ上げませうと云つたら、料簡せまいものでもない。ナア皆の者。

皆々 左やうなものでござりまする。

ト雛鶴、ムツとして、秀太郎が側へとんと座ほり

雛鶴 コレ、秀太郎さま、お前も意地の悪い。三十郎さまが詫び言して居やしやんすのに、堪忍せぬとは、わたしが心に随はぬゆゑかえ。そりやお前がさもしいわいなア。科もない要さまを、よう酷い目に遭はさしやんしたなア。おんなじやうに好いかと思つて、側から聲を焚き

つける追従待ひ。こなさん方が、どのやうに怖い顔さんしても、こちやなんとも思やせぬぞえ。三十 これは如何な事。太夫どの、こりや何を云ふのぢや。

ト雛鶴を上手に引退ける。

雛鶴 イエ、構はずと云はして下さんせ。コレ、秀さん、お前と要さんと競べるとな、一向々々雪と炭。お前に惚れる女子が、廣い世界にあらうかいな。ちつと顔を見やしやんせ。あんまり猿と追いた仲ちやござんせぬと、わたしが云ひました。要さんの云はしやんしたのぢやござんせぬ。斯う云ふが腹が立つなら、わたしを切るなりと突くなりとさんせ。こちや殺されても、お前のやうな意地悪いに、随ふ事は、嫌ぢや。嫌ぢやわいなア。

トつんと身を背ける。三十郎、氣の毒なこなし。

秀太 アレ、あんな事を吐かし居るわい。

友九 ハテ、吐かさして置くが、よくござる。我れ、は意地が悪うござる。世界の女は惚れませぬ。その代りにまさか戰場にて敵に出合つた時は又、違ひます。御舎弟はそれがゆかぬて。生白けた面で、女に惚れさす事は



ゆかうが、戰場の分捕り高名は參りませぬ。何ゆゑぢやと云へば、教へ方が悪いからぢや。三十郎どの、お氣にさへられたぢやが、貴殿の親父主水どのが、要心流で候ふのとて、御指南なさるゝ程あつて、今の如く打擲に遣うても、え、手向ひもせず、吹え面かはかさしやれた態と云ふものは、一向見られた態ではござらんのだ。ナウ軍兵衛どの、さうでないか。

軍兵 如何にも左やうでござる。秀太師さまは神影流の達人、友之進どのが御指南なさるゝ程あつて、御舍弟を引付けつしやれた。その時は、餘ほど強う見えましたてや。

友九 要心流の奥の手は、女に惚れられるやうにするのが極意と見えまする。

軍兵 ハア、女に惚れられる兵法も、あるものでござるかた。

業治 随分ある事さうにござる。その代りには、誠の兵法は、やうせん流でござらうてや。

秀太 オ、さうぢや〜。

トこの座詞のうち秀太郎、繕しがつて居る。要之助、

腹立てるを三十郎、押へて居る。この時要之助、立つて行かうとするを、三十郎留めて

三十 友九郎どの、最前から承はれば、手前親どもの教へ方が悪いに依つて、要之助さまのお身持ちが悪いとの事。親主水が教へ方、どこが悪いとござるな。

友九 ホ、これはお氣に障つたさうな。併し、拙者違ふた事は申さぬ。御舍弟は天晴れの好色者。女をたぶらかすは要心流に上越すと申す事サ。

三十 黙らつしやれ。手前が親どもが流儀は、敵を取拉しぐより外別儀はござらぬ。女を睡らかすなどは、なんのたわ言。貴殿の舎兄友之進どの、御流儀、神影には左やうな事もござらうが、手前の流儀には毛頭ござらぬ。馬鹿な事を。

トきつと云うて秀太郎が顔を見て、氣を替へとサア、申せば角が立ちます。畢竟これは教へ方が悪いにも寄らず、お若い事なれば、要之助さまの損なひ。只幾重にも御容赦下さりませうならば、有り難う存じ奉ります。

秀太 よいワ。それ程に詫びる事なら、料簡いたしてくれらわい。

三十 すりや御料御下されるとな。有り難う存じまする。

秀太 併しながら、今聞けば、身共に指留いたす友之進が流儀を誹謗の詞。神影と要心流と、何れが勝れしぞ。我が眼の前で友九郎と、尋常に立合つて見せい。

三十 イヤ、お詞ではござれども、場所と申し、友九郎とのとの立合ひは、何としても。この儀は御容赦下さりませう。

友九 イヤ、そんなものでもござらぬ。世には怪我のはずみと申す儀もあれば、若殿のお誓み。随分あしらうて進める程に、後學の爲、立合つて見たがよくござらう。

秀太 さうぢや。立合はぬと弟が事料簡せぬぞ。

三十 ハッ。然らばお詞に従ひませう。

秀太 さうあらう。ソレ、皆の者ども。

藤治 心得ました。三十郎どの、御自慢の要心流。

源内 我れがちよつと試みようかい。

ト藤治源内、西方より三十郎にかゝる。

秀太 さうぢや。要心流と神影流と、何れが劣るぞ。

見物せうわい。

三十 お望みならば拙者が流儀、お目にかけう。

ト居ながら兩人を見事に投げる。

軍兵 見事。そのお手際の所ぞ。

ト軍兵衛もかゝる。立廻りのうち、藤治源内もかゝる。三十郎、三人を剣退け、しやんと投げ、股立ち取つてキツと見得になる。ト面白き合ひ方になる。三人相手に乗衛の兵法いろ、ある。秀太郎、齒痒きこなしにて、あせり居る。友九郎はチツと考へる心にて見詰めて居る。ト三十郎、三人をのめらし

三十 なんと、要心流の手並は、ざつとこんなもの。

友九 見事。併し、神影流は劍術が第一。鯨口三寸抜れの

手際。身共が流儀は。

ト刀抜きかける。

三十 ドツコイ。それではゆかぬ。

友九 やつて見せう。

ト刀を抜からうとする。抜かすまいと立廻り。この間始終立廻りの合ひ方。ト友九郎、刀を抜き切りかける。

三十郎もぎ取る。リツと打ち据ゑる。合ひ方止む。

三十 要心流の奥儀、骨骨にキツとこたへたか。

友九 こたへた。ゑらうこたへた。

秀太 エ、齒痒いわい。サア、これからはおれ

が相手ぢや。三十郎、立合へ。

三十 イヤ、それは憚り。

秀太 何が憚り。サア、立合へ。但し、おれが怖いか。怖くば斯うして。

ト刀を抜き、三十郎を背打ちにする。三十郎ヂツと堪へる。

サア、おれに勝てるか。勝たれまいがな。勝てるか。へ、へ、へ、。どんなものぢや。以後の見せしめ、おのれをカウノ。

トまた背打ちにする。要之助、鑑徳、寄らうとするを友九郎、氣味よい顔にて寄せつけぬこなし。奥より龍介、襲んで出て、秀太郎を見事に投げる。

要之 ヤア、名取川か。好い所へ、ようおぢやつたなう。

秀太 アイタ、へ、へ、。

ト起きながら龍介を見て

秀太 ヤイ、おのれ、なんでおれを投げ居つたのぢや。

龍介 オ、お、投げるのぢや。又これから何奴も此奴も、投

げて、投げるのぢや。

友九 うぬ、若殿に手向ひひろく慮外者ぬ。いつそ。

ト龍介に切つてかゝるを、腕首捕へ

龍介 何さらすのぢや。うぬらが刃物が立つものかいやい。

ト刀をもぎ取り、ボツキと折る。友九郎、それを行くをボンと當てる。

秀太 ヤア、友九郎の刀が折れたワ。

ト氣味悪さうに慄ふ。

龍介 サア、これからぢや。ヤイ、せんまめ、おのれはもう三十郎さまを背打ちにさらしたなア。三十郎さまの爲にも、おのれも主の端くれぢやと思つて、相手にならぬを好い事にかと思つて、どの頼楯でたんきりさらしたのぢや。おりや、うぬが家來でなければ、相手になるが。サア、立合はぬか。名取川龍介と云ふ角力取りが相手ぢや。サア、どうぢや。相手にならぬか。エ、まじくとしたこの面白い。

ト指にて秀太郎が顔を突き、唾を吐きかける。

秀太 エ、腹の立つ。もう料理が。

ト龍介に切りかけるを、腕捻ち上げる。

龍介 びこつきさらすな。うぬらがやうな奴は、一度が定。懲らしめの爲、カウノ。

ト刀もぎ取り、背打ちにする。奥より十兵衛走り出

て、刀を叩き落し、見事に投げる。龍介、下手へ宙返りする。

三人 ヤア、こなたは十兵衛どの。

秀太 十兵衛か。よう来てくれたなア。サア、十兵衛が来たぞ。角力取りでも投げてこますのぢや。どんなものぢや。

ト無性に喜ぶ。龍介、十兵衛に詰めかけて

龍介 こなた、おれを投げたぞや。

十兵 オ、投げた。秀太郎さまに刃向ふ奴は、力者であらうが、手でござらうが、御舎弟でも許しませぬぞ。

ト要之助、氣味悪いこな。龍介、腹を立て、

龍介 エ、思々しい。いつもこなたは善い者の肩を持つ

人ぢやが、今日に限り悪者の肩持つは、エ、さては流替りに敵役をやるゝな。面白い。相手にならう。おれが又貴殿を。

ト相撲の手にてかゝるを引き廻し、ボンと當てる。龍介ウンと轉ける。

女皆 ヤア、龍介さまを。

三人 當て殺したワ。

ト皆々倒りする。秀太郎喜んで居る。三十郎、手を組

み俯向いて居る。

十兵 三十郎どの、ちよつとお目にかゝりたい。

三十 アノ拙者に。

十兵 如何にも。

ト合ひ方になり、兩人、向うへ出る。皆々力み居る。

三十 十兵衛どの、なんの御用でござるな。

十兵 イヤ、別儀でもござらぬ。貴殿は主人を大切に思し召すか、但し、大切でないか。それが承はりたい。

三十 ハテ、異な事のお尋ね。御主人より知行頂戴仕りますれば、主人程大切な者はござるまいかい。

十兵 その大切な主人の秀太郎さまが、角力取り風情が手籠めにするを、のめくと、なぜ見てござつた。

三十 何がなんと。

十兵 こな不忠者めが。先程より一部始終残らず聞いて居つた。要之助さまが兄御に對し、無體があればこそ、秀

太郎さまが御立腹なされしを、おなだめ申さうとはせいで、主人に逆らふは何事ぢや。お身が親主水どののは、凡そ國中に肩を双ぶる者もない劍術の達人。それをお身が功に着て、兵法自慢は何事ぢや。身が爲にはお身が親父は劍術の師匠なれば、そのよしみを思うて意見いたして



遣はす。以後を嗜み召され。

秀太 オ、さうぢや〜。より云うた。おれが手籠めに遭りて居るを、小氣味よささうに見て居つた。大抵憎い奴ぢやないてや。

三十 十兵衛どの、御深切の御意見、千萬余なし。併し、不忠者と仰せらるゝが、主人を大切に思へばこそ、秀太郎さまに手向ひは仕らぬぞや。殊さら親父主水を功に着て、劍術自慢いたすとの事、聞捨てに致し憎い。拙者も殿のお目録を以つて、要之助さまに付き添ひ居れば、同じ主人と云ひながら、先づ要之助さまが大切。貴殿今、なんと仰せられた。秀太郎さまに刃向ふ者は、御舎弟でも免さぬと云つたぞや。秀太郎さまが大切なれば、此方の要之助さまも大切。忠臣はおのれより外にない者のやうに、新參の身を以て譜代の武士に向ひ、不忠者などとは、近頃以て慮外であらうぞ。

十兵 今まで部屋住の三十郎、やう〜この頃役させしを鼻にかけ、付け人呼はり。まだ早い。爲を思うて意見をするに、有り難いとは思はず、新參の古參のと、親の威光で知行を取る侍ひと、新參にもせよ、我が槍先で取つた知行とは違うてある。もう二三年功を積んで、身に楯

突くやうにしやれ。今からはまだ早い。

三十 ハ、ハ、ハ、ハ、その槍先と自慢するは、落武者の明智光秀を、小栗栖村で突き留めたを、云ひ立てに有りついたる小栗栖十兵衛、淺野武士、浪人共とは違うてある。先祖代々傳はる誠の侍ひとは素性が違ふ。要之助さまには御木妻腹。追ッつけ御家督も相續あらば、その祝言のその時は、竹槍突かして登城もなるまい。へ、へ、へ。笑止千萬。

十兵 妾腹にもせよ、御舎兄なれば、相續は秀太郎さま。この十兵衛が付き添ひ居る前に兩手をつき、先日の過言は御免ゆるし下されませいと、誤まらして見せうわい。

三十 誤まるか、誤まらぬか。試の武士の刀の切れ味。

ト切りかける。十兵衛留めて

十兵 生兵法大疵の基。叶はぬ事を、よしにしやれ。

ト突き放す

三十 やつて見せう。

ト兩人、抜き合せ切り結ぶ。要之助、鏑鶴、うろ〜して居る。秀太郎もうろついで居る。奥より操出てこ

の體を見て眞中へ割つて入る、兩方を留める。兩人、  
操を引連れて刀を合はす。操、兩方の刀を振り袖に巻  
いて、三人ともどつさり下に居る。

操 ア、申し、お二人ともに、待つたく。

十兵 ヤア、危ない。退いたく。

三十 妹ども、料簡ならぬ。放せく。

操 イ、エ、放さぬく。エレ、兄様、お前は何と心得  
て居やしやんす。御兄弟の争ひならば、御意見申す身を  
以て、處こそあれ二人ながら、廊の中で果し合ひ。大騒  
がお聞きなされて、オ、出かしたと、よもやお褒めはな  
されないぞえ。

三十 ぢやと云うて。

操 サア、尤もぢや。互ひに腹の立つ事もあらうけれど  
わしが云ふ事聞き分けて、堪忍して下さんせ。もしもの  
事があつたらば、一人は兄様、一人は現在の、サア、現  
在の父様のお弟子。何れが負けても、わたしは悲しさ。  
爰の處を聞き分けて、わたしに免じて、どうぞ料簡はな  
らぬ事かいなア。

十兵 如何にも聞き届けました。聊稱は致さぬ。お放しな  
されい。

操 料簡して下さんすか。エ、嬉しうござんす。兄様、  
お前はどうかぢやえ。

三十 其方が詞、反古にはせぬ。料簡いたさう。

操 そんなら刀を。

三十 サアくく。

ト兩人、見得よく刀を引く。操、落ちつくこなし。三  
十郎、龍介に活入れる。龍介、ウンと起き上がり、十  
兵衛を見て、落ちたる刀の折れを持ちて

龍介 おのれ十兵衛め。

ト行かうとするを、三十郎とめて

三十 コリヤ、急ぐ處でない。控へて居い。

龍介 エ、忌々しい。

ト刀の折れを持ちながら扣へる。

三十 エ、コレ、妹が詞、一理あるゆゑ、今は料簡する。

追ッつけ要之助さまに御家當定まる。その時こそは十兵  
衛、待つて居れ。

十兵 師匠が息女の挨拶ゆゑに、料簡いたしてくれる。秀  
太郎さまに跡目相續いたせし上、難言吐いたその顔、切  
り下げる。待つて居れ。

秀太 さうぢや。おれが跡目になつたら、おのいら見せつ

ける。待つてけつかれ。

要之 わしが相續したら、其まゝで置かうか。

操 ハテ、そりやその時のお二人が心次第。

鎌鶴 マア、氣晴らしに奥の間に。

秀太 身はこれにて、酒にせう。

要之 三十郎にへおぢや。

三十 どうで遅いか早いかで。

十兵 一度合した刃の納まり

操 どちらへ家着が定まるとも

三十 互ひの遺恨を。

十兵 晴らすはその時。

秀太 先づそれまでは。

三十 十兵衛。

十兵 三十郎。

ト要之助、三十郎、秀太郎、十兵衛、両方よりおこつ

くを操、陣中に入り

操 マア、お出でなされませいなア。

ト腹になり、三十郎、要之助、鎌鶴、おみき、お徳、

廣へ入る。

秀太 オ、十兵衛、出かしたく。好い所へよう来てく

れたので、おれが恥を雪いだと云ふものぢや。皆、十兵衛を褒めぬかい。

三人 イヤモウ、恐れ入つたるものでござります。

ト十兵衛、友九郎に活入れる。友九郎、ウンと氣の付

いたこなし。

友九 秀太郎さま。

秀太 氣が附いたか。

友九 して體介めは、どちらへうせえたな。

軍兵 三十郎とともに奥の間に。

友九 おのれ三十郎、何所までも。

ト車輪になり。奥へ走り入る。

軍兵 ハテ、烈しい者ぢやなア。

藤源 又ゑらい目に遭はうと思つて。

操 イヤ申し、若様、只今もお聞きの通りでござりま

すれば、一時も早く御歸國なされて、御家御精進なさ

るゝやうに、進ばされますが、ナア、十兵衛さま。

十兵 如何にも、操との申さるゝ通り、若様、品川まで

お迎ひの新も参りござれば、早くお園へお歸りなされま

せう。

秀太 イヤく、去なれぬく。おれが去ぬると鎌鶴が手

に入らぬ。要之助が去なぬうちには、おれも滅多に去なれぬ。

十兵 それでは大殿様のお機嫌が  
秀太 親仁の事も構やせぬわい。

十兵 すりや、どうあつても

秀太 雛鶴が手に入らぬうちは、滅多に爰は動かぬく。  
操 ハテ、是非もない。

十兵 よくござる。雛鶴を身請けして連れ歸れば、よいで  
はござらぬか。

秀太 イヤ、そればかりぢやない。まだある。梅の  
戸も一緒に身請けせにや、去なぬぞく。

十兵 ハテ、兩人ともに今日中に身請けして、園元へ連れ  
てお歸りなされい。

操 申し、それでは大殿様の手前が。

十兵 何を小辯な。女の知つた事でない。控へてござれ。

亭主 々々。

ト奥より才兵衛、亭主の形にて出て

才兵衛 ハイ、何の御用でござりまする。

十兵 雛鶴梅の戸、若殿の御意に入つたゆゑ、今日中に身  
請けする。して、金子は如何程ぢや。

才兵衛 ハイ、只今ではあの二人が、この内の親王でござり  
ますゆゑ、すつぱり貳百兩なら上げませう。

十兵 それは心易い事、後程金子を渡さう。心得て居れ。  
サア、若殿、今の通り私しが金子を渡しますれば、御酒  
でも参つてお待ちなされい。

秀太 ヤア、そんなら二人とも身請けしてくれるか。有り  
難いわ。おれが爲には、結ぶの神とも氏神とも、南無宇  
治や大明神さま。

ト十兵衛を拜む。

十兵 なんの、お禮に及ぶ事。何れも、奥へお供して、御  
機嫌を取つてくりやれ。

軍兵 べめたワ。身請けが出来たら右と左に月と花。  
さぞお嬉しうござりませう。

秀太 嬉しい段か。ぞくくするわい。そんなら奥で待つ  
て居るでや。

十兵 ハテ、ようござりまする。

秀太 ハ、ア、日本晴れがしたやうな。サア、皆来い皆来  
い。

ト騒ぎ唄になる。秀太郎、軍兵衛、藤治、源内、才兵  
衛、奥へ入る。あと合ひ方になり十兵衛、手を組み思



案内 穿する。操、十兵衛が側へ寄り

操 申し十兵衛さま、今のやうにお受合ひなされましたが、二百兩の金、出来まするかえ。

十兵 尤も當地に掛屋はあれど、御用向きの外は調へ憎い。

操 それに今又、受合はしやんしたは。

ト十兵衛、指を折り

十兵 今日二十日、御家督定めは二十五日。

操 國許までは餘程の道のり。

十兵 順風なれば、五日のうちに御着船

操 お船に召されて、仕様があるかえ。

十兵 コリヤ。

操 そんなら。

十兵 來い。

ト押を連れ、ツイと奥へ入る。返し

造り物、向う一面障子屋體。縁側飛び石。上手柴

垣、植込み、すべて、前栽の景色よろしく、長唄に

て道具とまる

ト長唄一くさりあつて、正面の障子より秀太郎、友九

郎出て

友九 今申す通り、兩人の傾城を今日中に身請けせうと、

十兵衛が受合うたは、合點がゆかぬ。べん／＼と十兵衛が返辭を待たうより、二人の女を盗んで歸るが近道ではござらぬか。

秀太 イカサマ、意見しさうな十兵衛が、心よう受合うたも合點がゆかぬ。

友九 何よりかより、邪魔になるは三十郎め。彼奴をしまひつける仕様はござりませうまいかな。

秀太 あるとも／＼。大殿を調伏の願書に、三十郎が名を記して、我慢坊に申しつけ、大殿を祈り殺させ、もし顯

はれしその時は、料を彼奴めに塗りつける思案。

友九 して、法印を呼び呼せ置かれしか。

我慢 疾よりこれに居りまする。

ト柴垣より我慢坊、毬栗、山伏の形にて出る。

友太 我慢坊、して申しつけし通りに致したか。

我慢 仰せつけられましたる通り、國境の山奥に、調伏の壇を出來置きましてござりまする。

友九 秀太郎さま、調伏の願書は認めござるか。

秀太 人知れず認め置いた。即ちこれに

ト願書出したす。

友九 コリヤ我慢坊、この調伏の願書を以て、大殿を七日のうちに祈り殺せ。

ト願書を我慢坊に渡す。龍介、障子明け、聞いて居る。

我慢 お氣遣ひなされますな。この我慢坊が行力を以て、七日のうちに祈り殺してお目にかけろ。

秀太 して雛鶴、梅の戸が事は。

友九 その儀は藤治源内ふじはるに申しつけ置きましたれば、お氣遣ひなされますな。

秀太 よし〜。コリヤ軍兵衛、其方は仲の町の蔦屋へ参り、武兵衛ぶべゑめを釣り出し、ぶち殺してなりとも、小菊の茶碗ちawanを取戻して参れ。

軍兵 心得ました。

秀太 兩人行け。

軍我 ハツ。

ト我慢坊、軍兵衛、橋がムリへ入る。

友九 これから要之助を。コレ。

ト聞く。人音するゆゑ兩人、小蔭に隠れる。ト臆病口より要之助、お貞、出る。

てい 何分お國へ、お歸りなされた上の事に遊ばされませ。

要之 さればいなう。なんぼう去ねと云やつても、わしが去ねと兄者人が、雛鶴を身請けすると云うて居るゆゑに、どうも去なれぬわいなう。

ト云ふうち、秀太郎、友九郎、出て

秀太 コリヤ、好い所へうせたなア。

ト秀太郎、要之助を引きつくる。お貞、寄るを友九郎留める。

友九 サア、太夫の事は思ひ切り、秀太郎さまへ上げますと、早く云はつしやれ。

秀太 否と吐かすと、ぶち放すぞ。てい コレ申し。聊爾なされたな。

友九 面倒な。ソレ、若殿。

秀太 合點ぢや。

トお貞寄るを、ちよつと當てる。秀太郎、要之助を膝に敷き、刀を抜いて切らうとする。三十郎、飛んで出て秀太郎を引退け、友九郎を投げる。

三十 コリヤ、若殿を何とする。

秀太 面倒な。其奴ぐるめに打ち放せ。

友九 心得ました。

ト友九郎、秀太郎、三十郎に切りかける。龍介飛んで出て支へる。友九郎は龍介、秀太郎は三十郎と入れ變る事あつて、四人立廻りのとまり、龍介は友九郎、三十郎を押へる處へ、十兵衛出て龍介三十郎を引退け、秀太郎を圍ひ。

十兵 最前の刀の納まり。

ト抜いて三十郎に切つてかゝる。

三十 合點ぢや。

ト十兵衛と切り合ふ。秀太郎、友九郎、要之助を引きつけにかゝるを、龍介支へ、お貞要之助を圍ひ居る。

この時、操、狀を拝つて走り出て

操 若殿様、大敵様より急のお飛脚。二十五日は跡目の定まり。歸國の者は相續させ、定日に外れし者は、お上手前、勘當とのこの御狀。

ト封の切れし狀を要之助に見せる。要之助讀んで

要之 南無三。斯うしては居られぬわいなう。

ト行かうとする。秀太郎留めて

秀太 われより先へ、おれが跡目を。

ト引退け、行かうとする。この間十兵衛、三十郎、立ち

廻り。友九郎は龍介と立ち廻り。

三十 お貞どの、若殿のお供して。

友九 片時も早う、品川の船へ。

藤源 合點ぢや。

ト秀太郎、花道へ走り入る。要之助お貞、同じく走り入る。友九郎、龍介をちよつと當て、これも花道へ走り入る。龍介、行かうとするを、操とめる。十兵衛三十郎、切り結び、キツと見得。合ひ方になる。四人顔見合せ

龍介 操さま

十兵 三十郎さま

操 十兵衛さま

三十 まんまと首尾よう。

ト合ひ方になる。

十兵 御兄弟ともに御歸國は致させた。

操 お前の云ひつけの通り、親戚様の狀と作はり

龍介 勘當と脅しかけさればこそ、あはて騒いで行かれま

した。

三十 貴殿と某、不和の體にもてなし、双方の張りを、

その勢ひに歸さうと、云ひ合はせとは云ひながら、なん

ほう 劍術に鍛練しても、切らぬやうの劍術には、殆ど困り入りましてござる。

十兵 拙者も貴殿を意見の爲、龍介を頼み、折檻させ、また龍介を投げつけたが、最前は、どこも痛みはせななか。

龍介 なんのお前、地取りで轉けたやうなものでござります。

操 これでマア、御家督定めの、間に合ひます。

三十 イヤ、拙者は出船萬端、心も急げばお先へ參る。

十兵 身は後に用事もあれば、操どのの諸ともお先へ。

操 そんなら、わたしは。

十兵 委細は國にて。

三人 おさらば。

ト三十郎、操を連れ、向うへ入る。

龍介 十兵衛さま、最前これにて立聞き致せば、友九郎と

秀太郎どの、大殿を調伏とやら。願書を認め、坊主めに渡したか見付けました。

十兵 それこそは一大事。して、その坊主めは。

龍介 とつくりと顔を見知り居ります。

十兵 然らばぼツかけ、捕へて來やれ。

龍介 心得ました。

十兵 行きやれ。

龍介 ハツ。

ト踊り三味線になる。龍介、凜々しく、向うへ走り入る。十兵衛、飛び石の上へ上がり、向うをキツと見て

十兵 ムウ。

ト思案する。チョン／＼返し。

造り物、吉原大門口の體になる。

ト橋が、りより友九郎、頬かむり尻からげにて走り出て、小蔭へ隠れる。ト大門口より駕籠二挺、昇き出る。これに藤治、源内、才兵衛も附いて出る。この間、江戸騒ぎの合ひ方なり。

才兵 藤治さま、源内さま、さうして若殿様は、どれへお

出でなされましたな。

藤治 若殿は先づ三密の方へお出でなされたゆゑ、太夫連も後より同道いたすのサ。

才兵 それは好い御趣向でござります。そんなら早う駕籠やつてもらはらうぞや。

ト駕籠行かうとする所を、友九郎、切り立てる。駕籠



鼻き逃げて入る。才兵衛も門の藪へ陰れる。

源内 友九郎どの。

友九 ソレ人の、來ぬ間に。

藤源 合點ぢや。

ト駕籠の垂れ上げる。梅の戸、鐺鶴、逃げて出るを、藤治源内、提げ緒にて折り、手拭を猿轡にはめる。

藤源 して、この兩人は。

友九 品川沖の秀太郎さまの船へ。

兩人 合點ぢや。

ト行かうとする。才兵衛取り付き

才兵 コリヤ、太夫を何處へ連れて行くのぢや。

友九 エ、面倒な。口走らば後の邪魔。うぬもうせう。

ト皆々引立て橋が、りへ入る。ト大門より我慢坊、龍介、掴み合ひ出る。

我慢 狼藉な。なんとするのぢや。

龍介 四も五もいらぬ。その書いた物渡せ。

我慢 猪口寸ざらすな。

ト兩人立廻り。始終この間捨ざりふにて、我慢坊逃げ入る。龍介、追ひ入る。大門口より軍兵衛、武兵衛を首筋掴み、引摺り出る。

武兵 コリヤ、どうなされますのぢや。

軍兵 どうの斯うはない。その茶碗、此方へ渡せ。

武兵 滅相な。金受取らぬうち、渡して堪るものか。

軍兵 渡さなや、これぢやぞ。

ト刀抜きかける。

武兵 ア、滅相な。アレイ。

ト茶碗の箱を抱へ逃げ廻る。軍兵衛、追ひ廻り、ト橋が、りへ追ひ入る。ト雨車になる。大門より十兵衛、野袴、羽織、高ト駄、傘にて、後より家來、ばつてう笠、合羽にて付き出る。花卷、園菊、おみき、お徳、傘二人宛相合傘にて送り出る。

花卷 ほんに不思議の御縁にて、御一座いたしました。お歸りなさるゝなら、要さまへもよろしう。

園菊 申し、お前も御同道にて、お近いうちに、お出でな

されい。

十兵 オ、サ、近々には又來る程に、皆見送り大儀々々。

サ、もう歸りやれ〜。

女皆 そんなら、おさらば。

ト女形皆々大門へ入る。

十兵 ハテサテ、廓の者どもは、かしましいものである。

オ、はたと失念いたした。コリヤ可内、其方は今の揚屋へ参り、身共が紙入れ忘れて参つた。早く取つて参れ。

可内 ネイ／＼。

ト大門の内へ入る。

十兵 早く歸れ。身はこれに待つて居るぞ。

ト云ふうち、橋が、りより武兵衛、茶碗の箱を抱へ走り出て、十兵衛に行き當り

武兵 ハイ、お免されませ／＼。私は狼籍者に出合ひまして、難儀いたします。お侍ひ様と見掛け、お頼み申します。どうぞお隠しなされて下さりませ。

十兵 ホ、狼籍者なりとあれば、匿まひくれるが、相手は何者ぢや。

武兵 相手は侍ひでござりまするが、お聞きなされませ。

世には無理な奴がござりまする。友九郎と云ふ侍ひに、金貳百兩貸しました處が、返しませぬゆゑ、願ふと云うたれば、秀太郎と云ふ人が、金の代りに小菊とやら云ふ茶碗を抵當にくれられましたを、軍兵衛と云ふ侍ひが、金を持たさずに茶碗をおこせ、否と云ふと切ると、太刀ひらいて追ひ廻しますすゆゑ、やう／＼爰まで逃げて来た

のでござります。

十兵 して、その茶碗は。

武兵 これに持つて居りまする。

ト出して見せる。十兵衛引手繰つて

十兵 こりやコレ、師匠主水どのが、高名の印に拜領ありし小菊の茶碗。さては秀太郎さまが盗ませたのぢやな。

武兵 そんなら、こりや盗み物でござりまするかえ。

十兵 如何にも。こりや大切な物。これを其方が持つて居れば、後日に祟りが行くまいものでもない。斯う致せ。身共がその秀太郎さまの家來、十兵衛と云ふ者なれば、この茶碗を身共に渡し置き、何時なりとも金子受取りに参れ。

武兵 ア、申し、なんぼう盗み物でも、此方は金取らぬうち、滅多に渡す事はなりません。

十兵 さればサ、只今金子其方へ渡しくれたものなれども、今日國元へ歸らぬばならぬゆゑ、事を分けて申す。三輪家に於いて小栗栖十兵衛と尋ねて参らば、その時金子を渡してくれるわサ。

武兵 イヤ／＼、金取らぬうちには、遣る事はならぬわい。

十兵 それは御身、聞分けないと云ふものぢや。

トせり合ふうち、花道より家來一人走り出て  
家來 十兵衛さま、これにござりまするか。風もよければ  
道ツツけ出船の由、それゆゑ、ちよつとお知らせ申しま  
する。お早うお歸りなされませう。

ト云ひ捨て引返し入る。  
十兵 南無三、乗り遅れては歸國の延引。  
ト茶碗を懐中へ入れ、向うへ行かうとする。武兵衛取  
りつき

武兵 コリヤ、茶碗を戻し居れ。

ト取りつくを投げ退け、行かうとする。武兵衛、また  
取りつくを、げ逃げ、花道へ行きかける。とチヨ  
ンノ、にて大門口引込め、衣紋堤になる。向う高見に  
一位小さき大門になる。この側に初めの傾城の形にて、  
子供大勢並ぶ居て

女皆 オ、イ、イ、

ト手を叩き。十兵衛を招く。十兵衛、振返り見ようと  
する。武兵衛かゝるゆゑ、ちよつと當てる。武兵衛、  
タナ／＼と本舞臺へ戻る。

皆々 待つて居るぞい  
ト武兵衛、見事にトンと返る。

十兵 近日々々、

ト輕う云うて花道の方へ行きかける。

よろしく

ト幕の外、十兵衛、傘さして向うへ入る。

ひやうし幕

二 段 目

三輪館の場  
城下松原の場

役名 三輪秀太郎。三輪要之助。花園主永。花  
園三十郎。安達友之進。安達友九郎。奥方、象  
潟。馬淵軍兵衛。黒川藤治。栗原源内。傾城、雛  
鶴。同、梅の戸。關取、名取川龍介。花園娘、  
操。十兵衛妹、お貞。小栗栖十兵衛。

造り物、三間の間、二重舞臺。向う金襴、左右落間、  
後へ寄せ障子屋體。すべて奥州館の體。幕の内より  
二重舞臺の真中に、奥方象潟、衣裳補綴、上使にて  
立つて居る。後に小姓付き添ふ。この左手に三輪秀  
太郎、同要之助、衣裳上下。右手に安達友之進、衣

裳上下にて控へる。平舞臺上の方に花園主水、衣裳  
 上下。次に三十郎、衣裳上下。次に操、振り袖衣裳、  
 この脇に友九郎、衣裳上下、續いて軍兵衛、衣裳上  
 下同じく下手に十兵衛、衣裳上下。次に十兵衛妹お  
 貞、振り袖衣裳。右人數、象湯を出迎への體。城内  
 明け六ツの太鼓にて暮明く。  
 ハツ。御上使お出迎ひとして三輪秀太郎、同苗要之  
 助。

二人 友之 その外一家中、相揃ひ出席

皆々 仕つてござりまする。

象湯 武將久吉公の嚴命に依つて、當館の家の定め。方々、  
 めでたい。

皆々 ハア。

ト平伏する。象湯、下へ坐り

象湯 自ら事は、當館の主、右京太夫さまの妹、隣國出羽  
 の領主、左竹左衛門さまへ嫁したれば、國館は隔れども  
 近しき家門友之進兄弟花園親子、誰れくも變らぬ出勤。  
 喜ばしう思ふぞよ。

主水 これは有り難いお詞。拙者弟半左衛門、御前興入れ  
 の節、添へ人となりて佐竹どのへ參り、磯瀧半人が養子

となつて、只今の名は磯瀧半左衛門。相變らず勤仕を  
 承り、喜び居りまするやうにござりまする。

象湯 それに居るは操でないか。見れば未だ振り袖を留め  
 ぬさうな。主水、なぜ殿御を持たしてやらぬぞいなう。  
 三十 妹が縁談、ちと存じ寄りもござれば、親人へ申し  
 出す折も有らんかと、差控へ居りまするやうにござりま  
 する。

操 御前様、先づは御機嫌よろしうお渡り遊ばし、此や  
 うなお嬉しい事はござりませぬ。

十兵衛 御上使様へ申し上げまする。拙者事は小栗栖十兵衛  
 と申して、當家の家來、即ちそれなる主水どのには武藝  
 の門弟。

てい 私し事は、十兵衛が妹、ていと申す者でござりま  
 す。

二人 兄弟とも、お見知り置かれ下さりませう。

象湯 聞き及ぶ小栗栖十兵衛。兄上のお目鏡を以て、これ  
 なる秀太郎が付き人。骨柄と云ひ、末頼もしう思ひわい  
 なる。先づこれは内證。今日は上使の役目、家督定め  
 の席に於て、家の系圖を改むるが先例。跡目は兄弟。先づ  
 何れとも指圖はせぬ。秀太郎、要之助、その旨、心得て



よからう。

秀太 上使の趣き

要之 畏まり

二人 至りましてござりまする。

友之 大殿には先頃より御不例、火急に願ひし御家督定め。ナニ主水どの。跡目の儀は、御兄弟のうち、何れかと思はつしやる。

主水 お世繼ぎに嫡男たる秀太郎さま。申さいでも相知れる儀でござる。

三十 イヤ、親人、左やうござつては拙者が。

主水 守り奉る御主人にもせよ、道は道と相守るが、邪

まなきお家の政道。

友九 御惣領の秀太郎さま、御跡目相續。何れも御批判はござりますまい。

友之 然。アイヤ、お世繼は要之助さま、相定めるが理の當

友九 コレノ、見者人、それでは兼ねての。

友之 われ達が差出る場所ではない。控へて居れ。

友九 イヤサ、さうではござらぬ。御家督の儀は。

友之 ハテ、控へやうて。

主水 要之助さまに師範いたす身共なれども、それはこれ、これはこれと、願當の辨まへなきは、武家の作法を御存

じなき安達氏。こりや少と熊相かと存ずる。

友之 拙者とて、御指南申す秀太郎さま、尤も御嫡男とは申しながら、お湯殿腹に出生ましく、まつた要之助さまは、御本妻の胎内に御出生ましく、さすれば大殿の血脈たる要之助さま、跡目に立つるがこれ願道。

秀太 イヤ、弟は酒色に溺る、放埒者。跡目には立てられまい。

要之 私しを放埒者とは。

秀太 その證據は、都在留の折柄、歸國の節、江戸吉原の

廓へ通ひ、傾城狂ひに身持ち放埒。

軍兵 その證據お目にかけり。何れも、女ばらを引立てさせつしやれ。

三人 心得ました。

ト藤治、源内、衣裳上下にて、鑓鶴、梅の戸、口明けの傾城にて引立て出る。

友之 この女は。

藤治 吉原の傾城鑓鶴。

源内 同じく梅の戸、御前へ

二人 出ませい。

ト突きやる。雛鶴、要之助を見て

雛鶴 ヤア、お前は。

要之 コレ、場所が悪い。何にも云ふまいぞ。

秀太 この場で何を云うても、取上げはせぬぞ。

ト梅の戸、皆々を見て

梅戸 雛鶴さん、見やしやんせ。みんな知つたお顔ぢやわ  
いたな。

雛鶴 變つた所で、御一座をする事ぢやわいな。

梅戸 さうぢやわいな。

秀太 なんと、御上使のお入りの場所へ、傾城を取込んだ  
は、弟が放埒ではあるまいか。

三十 アイヤ、要之助さまはお大名の御息、傾城どもを  
圓元へお連れされたと申して、さのみお咎めにも及び  
ますまい。

友九 イ、ヤ、兩人の傾城、身請けが済まれば園破りの科  
人。大名の權威で、罪落ちさせても大事ないか。

三十 付添ひ参りし親の親方、先刻より御門前に於て様子  
を問へば、右の次第。それゆゑ親方に金子を與へ、身請  
け相済み、兩人が年季譚文。即ちこれに。

ト二通の譚文を出す。

友九 ムウ。そりや兩人が身請けを。

三十 ハ、ハ、ハ、友九郎どの、こればかりは、ちと目算  
が違ひ申さう。

ト二通とも破る。友九郎、秀太郎と顔を見合せ

友九 ハテ、好い手つがひであつたよな。

象湯 改めて上意。

一同 ハア、ハア、ハア。

象湯 表には武道を磨き、内に守るは仁の道、その和らぎ  
は夫婦の交はり。家中に縁を搦まねば遺恨の元。家督定  
めの折を幸ひ、上意を受けし自らが媒。誰ぞ申し付けし  
一品これへ。

小姓 ハア、

ト三方に錦木数多載せしを、持ち出で真中へ直す。

象湯 當陸奥の古き例し。思ひを籠めし女の元へ、木を色  
どりに立て置き、千束とつもの戀の媒。これを錦木  
とも染木とも、持離し例しを引いて、その錦木に記せし  
姓名。この場の縁付き傾城も列に入り、立寄つて取上げ  
い。

友之 御前のお許し。傾城ども、錦木を取上げい。

二人 畏まりました。

ト兩人、腰中へ出て、雛鶴、錦木を取上げ

雛鶴 この錦木には、秀太郎さまのお名が書いてござんすわいなア。

秀太 すりや、誰かを私しへ。

象湯 上意なれど、違背はあるまい。

秀太 なんのマア、違背があつてよいものでござりまするか。

ト嬉しがる。

雛鶴 エ、わしや秀さんなら、否ぢやわいなア。

ト錦木を打ちつけ、要之點へこなしある。此うち梅の

戸、取り見て

梅戸 これには要之助さまのお名が書いてござんすわいなア。

雛鶴 オ、辛氣。

ト取上げ直す。

象湯 操、お貞、兩人も錦木を取上げい。

兩人 畏まりました。

ト一時に兩人、立寄つて取上げ見て

操 この染木には、小栗栖十兵衛。

てい これには花園三十郎。

操 そんなら十兵衛さまへ。

てい 三十郎さまへ。

象湯 千束のつもる錦木が深い懸付。主水親子、十兵衛も

違背はあるまい。

操 勿體ない。なんの違背がござりませう。申し、父上

様、早うお請け遊ばして下さりませいなア。

てい 兄上様も、ちやつとお請け申して下さるまいなア。

主水 拙者が門弟と云ひ、見所ある小栗栖十兵衛、舞に致

すはこの身の大變。上意の縁組み、承知仕つてござり

まする。

十兵 節道の息女を申し請くるは、拙者が譽れ。併し、身

不肖なる此方。妹、三十郎どの、上意でござれば、お添

ひ下されうかた。

三十 何がさて、此方とても、妹が身の上。お心には染み

ますまいけれど、必らずお見捨て下さるな。

十兵 刀にかけても見捨ては、仕らぬ。

操 アレ、見捨てぬと仰しやつてぢやわいなア。

ト錦木を持つて十兵衛が側へ座る。お貞、三十郎が側へ行く。

操 今日と云ふ今日、日頃の願ひ。

てい これと云ふも、象潟さまの御情。

二人 エ、有り難う存じまする。

ト喜ぶ、友九郎、軍兵衛、ムツとするこなし。

雉鶴 梅の戸さま、お前の鋤木と、變らうぢやあるまいか  
いなア。

梅戸 變つたら、お前はよからうが、わたしや、どちらの  
道、つまらぬ者ぢやわいなア。

友九 さうともく。イヤ、御前へ申し上げます。十兵  
衛、三十郎どの、未だ壯年にござれば、急に女房持たさ  
ねばならぬと申す事もあるまい。ナウ軍兵衛。

軍兵 左やうでござる。

友九 マア、第一毒ぢや。

軍兵 左やうく。

友九 既に以て男女の道を、春三夏二秋一無多とせし、聖  
人の詞に無理はござらぬ。この儀は誓らく。

象潟 延引せよとは、御上意を背くか。

友九 イヤ、左やうでは。

象潟 違背いたさば、曲事であらうぞ。

兩人 然らば如何やうとも。

トこの時、向うバタ／＼にて、龍介我慢坊、口明けの  
形にて願書を奪ひ合ひ、掴み合ひ出て、花道にてとま  
る。

十兵 龍介でないか。あはたゞしい。何事ぢや。

龍介 されば、吉原の廓に於て、大殿を調伏する願書を所  
持する山伏め。

我慢 なにを。

ト振り切り逃げうとするを、引き直し、本舞臺へ出て  
見得よくとまる。

主水 お家調伏とは氣遣はしい。して、どうぢや。

龍介 一旦取逃がしてござるゆゑ、もし本園へと立歸り、  
尋ねれば案に違はず、大手にて出ツくわしたる山伏め。

その願書渡せ。

我慢 首がちぎれても渡す事はならぬ。

龍介 渡せ。

我慢 ならぬ。

ト立廻りにて、願書を引取り、真中へ抛る。我慢坊行  
くを、龍介取つて投げる。三十郎、ツカ／＼と行つて  
願書を取り、開き見て

三十 誠に大殿を調伏の願書。



ト奥の名を見て

この姓名は

ト惘りする。

軍兵  
ドレ。

ト願書を引つたくり、名を見て

ヤア、こりやコレ、願書の願主は花園三十郎。

ト讀む。皆々惘りする。

秀太  
三十郎に讀んで。

藤源  
腕、廻さつしやれ。

三十  
待つた。身に取りつて毛頭覺えはござらぬぞ。

主水  
竹、置えなき汝が姓名、何ゆゑに願書に記しあつ

た。

三十  
サア、その儀は。

主水  
云ひ聞いたせ。どうぢや。

トきつと云ふ。三十郎願書を見たり、皆々を見たり、

ウロ／＼して

三十  
ハア。

ト藤源の體にて屋中にバツタリ座る。操、お貞、心遣

ひのこなし。十兵衛、ツツと立つて三十郎が側にある

願書を取つて、よく／＼見て

十兵 此の手跡は正しく。

ト秀太郎の方を見る。秀太郎、胸目する。十兵衛あた

りに憚るこなし、いろ／＼あつて

ムウ。

トきつと思案のこなし。

龍介 何にもせよ、この山伏を稽問にかけて。

ト我慢坊へかゝる。よき程に友之進、手裏剣を打ち、

我慢坊死ぬ。皆々惘り。

主水 大切な囚人。何ゆゑお手にかけられた。

ト急いで云ふ。

友之 願書の名宛は貴殿の御子息。山伏めが口走らば、同

類の科人が幾人この場へ出るも知れぬ。息の根を止めた

は、事を無難に納めん爲。門弟中、その死骸、片付けさ

つしやれ。

藤源 ハツ。

ト我慢坊の死骸を昇いで入る。

象潟 この場へ枝葉を咲かすまいと、思慮深き友之進が計

らひ。ハテ天晴れな

ト友之進こなし。

忠臣おやまたす。

操 申し、兄様、覚えがなくなれば、ないと云ふ、ちやつと

云ひ譯をして下さんせいなア。

てい 見すくくの無實のなれば、お疑ひでもござりますすま

い。お身に曇りのない申し譯を、早うなされて下さりま

せいなア。

ト三十郎、返答せず、思案の體。十兵衛も思案のこな

しあつて、象潟に向ひ

十兵 花園親子はお家の御譜代。かゝる悪事を企まうやう

はござらぬ。十兵衛めが、ちと存じ寄りもござれば、願

書の詮議、何卒拙者のに。

ト象潟、こなしあつて

象潟 罪の疑がはしきは軽く行ふとある政道の表。心得ぬ

この場の様子。疑ひかゝる三十郎は、十兵衛に預ける。

とくと詮議を糺してよからう。

十兵 畏まり奉つてござりまする。

象潟 三十郎はその身の虚名、家中の内へも心を付けて。

ナア、申し譯いたしてよからう。

三十 畏まり奉つてござります。

象潟 主水、して今日の家督定めは。

主水 今一應詮議の上、先づ莫殿へ御入りあられ、大殿右

京大夫さま、先頃武將久吉公より、拜領なされし大菊の

茶碗を以て、濃茶を搾げる當家の吉例。ナニ娘、申し付

けた大菊の茶碗を、聞ひへ持参いたし、臺子飾りの用意

も致せ。

操 畏まりましたござりまする。

象潟 聞き傳へし大菊小菊の茶碗、主水、其方へ下されし

は小菊。兄右京大夫さまへ賜はりしは大菊。先づ四海に

稀れたる名器。殊に主水は茶道の達人、急ぎ茶の湯を催

ふしてよからう。

主水 ハア。

友之 上使饗應のお能役者、弟、召寄せてよからう。

友九 相心得てござります。

象潟 然らば、いづれも。

主水 御上使には。イザ。

一同 お入りあられませう。

ト唄になり、象潟は友之の進へ心を残し、友之の進、主水

互ひにこなしあつて、十兵衛は秀太郎へこなし、三十

郎手を組み思案の體。操、お貞、これを案じる心。雖

鶴、要之助、梅の戸は龍介、友九郎は操、軍兵衛はお貞

に、思ひくこのこなしあつてこの一件各々奥へ入る。

龍介 橋が、よりへ入る。あと合ひ方。友九郎、軍兵衛、藤治、源内残り居る。橋がよりより我慢坊窺ひ出る。

友九 我慢坊。

我慢 すんでの事、手目の上がるを、友之進さまが機轉の手裏劍、受けても機轉の空外で、手番じよう参りまし

た。

軍兵 悪う云うたは上使の縁組み、惚れたお貞は三十郎が

大房。

友九 擇は十兵衛が妻になつて、思うた事は鴉の嘴。

藤治 三十郎は自滅させても、角邪魔になるは親の主

水。

源内 次手に此奴も片付ける御思案は

兩人 ござりませんか。

友九 其の儀も上商いたして置いた。響應の茶の湯を幸ひ、

秀太郎さまと申し合せ、コレ。

ト軍兵衛に響く。

軍兵 すりや、大菊の茶碗。

友九 コレ。

ト押へ、あたりを見る。

軍兵 天晴れ。

ト内にて序の舞になる。

友九 響應の能の始まり。我慢坊に云ひ付ける役目もあれ

ば、身共が部屋へ。

我慢 心得ました。

軍兵 萬事は奥で。

友九 何れも、来やれ。

ト唄になり、友九郎、奥へ入る。また序の舞になり、

奥より雛鶴、要之助を引張りに出る。

雛鶴 殿様、ちやつと思案して下さんせいなア。

要之 ハテサテ、兄者人に縁組みが極まれば、今日向兒嫁。

これから随分孝行にせう。

雛鶴 わしやそんな事は知らぬわいなア。

要之 コレ、寄るまい。兄者水に溺るゝとも、手を持ち

つて助けなと云へば、某は奥へ。

雛鶴 イエ。どつこへも、やりはせぬ。

要之 ハテサテ、放せ。

トせり合ふ所へ梅の戸出て

梅戸 申し、要さま、ちつと思案して下さんせいなア。

ト要之助に取りついて云ふ。

要之 恩案とは、何の思案ぢや。

雛梅 サア、その思案とは、あの名取川さんと女夫になられる、思案をして下さんせいなア。

要之 それは餘ッぽどむづかしい。

雛鶴 イ、エ、こちらに急に思案がござんす。

ト引ッ張つて来る。

要之 サア、よいてや。

梅戸 どうぞ思案して下さんせいなア。

ト引ッ張つて来る。

要之 サア、道理ぢや〜。

雛鶴 此方へござんせいなア。

梅戸 どうぞ頼むわいなア。

ト要之助を兩方へ引ッ張る。要之助、いろ〜あつて

摺り抜け、ツイと奥へ入る。兩人、取り違へて引ッ張

り合ふ。

雛鶴 どうぞわたしと夫婦に。

梅戸 わたしが頼む事を。

雛鶴 どうぞ聞入れて。

ト顔見合せ

兩人 エ、なんの事ぢやぞいなア。

ト引別れて、左右の襖へ走り入る。始終序の舞。と奥

より操、茶碗の箱を持ち、茶道付き出る。後より友九郎出て、操を見てこなし。

操 お圍ひの掃除はよろしうござりますか。

茶道 左様でござる。して、大菊の茶碗は、御持参でござりますか。

操

只今寶藏より取出しましてござります。大切な品

なれば、矢張りわたししが、持参いたします。

茶道 御尤もに存じます。然らばお先へ参ります。

ト上手の一間へ入る。操も續いて行かうとする。友九郎、後より抱締める。

操

ア、コレ、悪い事を、誰れぢや〜。

トいろ〜として、無理に、け、顔を見て

友九郎どのぢやござりませぬか。

友九 操どの、あなたは發明な好い男を持たつしやれて、

さぞお喜びでござらうの。

操 そりや仰しやるが、くだでござります。御上意と

云ひ父上のお許しで、今日からこの振り袖をとめうと思

へば、此やうな嬉しい事はござりませぬ。

友九 こなたは嬉しからうが、身共は一團嬉しうござら

ぬ。操どの、友九郎が面皮立ちまするやうの、お返事は



なりますまいかな。

操

ホ、ホ、ホ、友九郎どのとした事が、今までは御座興とも存じませうが、小栗柄十兵衛と云ふ夫を持ちましたれば、左様な猥らした事は、假にも仰せられて下さりませう。

ト云ひ捨て行かうとする。友九郎、振り袖の端を持つて

友九 イヤ、待たつしやれ。十兵衛と縁組みのあつたは、たつた今。これまで口説いた身共への義理を思はゞ、最前の縁組み、變替へさつしやれおぼならぬ所。斯うなつては友九郎、武士が立たぬ。返事さつしやれ。どうだ……とサア、斯う云へば物事に角が立つ。そこで拙者が思案と云ふは、一ヶ月を十兵衛と拙者兩人へ割りつけ、上十五日は十兵衛に身を任せ、下十五日は身共が女房。小の月は一日の損があれば、それ程に料簡いたす。これで双方顔立つ拙者が分別。なんと、この思案はどうでござらう。

ト操、振り袖を振り、キツとなつて

操

女と思ひ、お詞、過ぎますぞ。父主水は一家中へ武藝の指南。殊にお家の御政道を預かる身の上。達て御

無理を仰せられますると、父主水へこの様子を申しますぞ。

友九 イヤ、その儀は。

操 不義一統は家中の御法度。重ねて仰せられて下さりませうな。

トつんと云ひ、上の方へ行かうとする。正面の袂より、秀太郎ズツと出て

秀太 操、待て。

操 秀太郎さま。

ト序の舞止んで、合ひ方になる。

秀太 聞き傳へし大菊の茶碗、親人拜領の碓りより、寶藏に納まり、一度も見た事が無い。拜見せう。これへ持て。

操 イヤ、これは。

秀太 ハテ、持てと云ふに。

操 ハイ。

ト茶碗の箱を是非なく秀太郎が側へ置き、下座へ下がる。秀太郎、茶碗を取出し見て、友九郎と推見合せ、

こなあつて

秀太 武將久吉公、御秘藏の茶碗程あつて、なか／＼見事

さうに見ゆる。

ト茶碗の箱の上に置いて

ナニ操 某が申し付ける仔細があるが、何に依らず違背せまいな。

操 大切なお主様のお詞、例へあま逆さま事でも。

秀太 聞入れるか。外でもない、上意の縁組み變替へしてそれなる友九郎が妻になれ。

操 エ、。

友九 主人の媒介、こればつかりは背かれまい。

秀太 得心か。どうぢや。

ト操、物云はず立ち上がる。友九郎、留めて

友九 待つた。返事もなく座を立つは、無禮であらうぞ。

操 なんぼうお主様の仰せでも、見すくの御難題。こればつかりは、どうもお返事は。

秀太 主命なれば、例へあま逆さまの事でも、背かぬと云うたでないか。

操 サア、それはな。

友九 偽りを申し上げてでも大事ないか。

操 サア。

友九 返事召さるか。

操 サア。

兩人 サアくく。

友九 操どの、どうでござる。

秀太 友九郎、もう云ふな。所詮聞入れぬ様子。某が詞を背けば、親の主水が身の上。大菊の茶碗を斯りする。

ト茶碗を打ら割る。操、悔りして

操 ヤア、大切なるお茶碗を。

ト茶碗の片しを取上げ、ウロくして

これが割れては父上の御難儀。ハア、。

ト泣く。

秀太 某を跡目に立てんと、取持ち顔の主水めが心が合點がゆかぬ。底意の知れぬ老ぼれ。何につけても邪魔になれば、大事の茶の湯をしくぢらし、自滅させてしまふのぢや。

操 エ、云はりやうもない、大悪人ぢやなア。

ト秀太郎に詰めかけて云ふ。

秀太 花園親子、おのれとても生けては置かぬ。友九郎、

この女、ぶち殺してしまへ。

友九 でも、あつたらものを。

秀太 早くぶて。

トきつと云ふ。友九郎、こなしあつて  
是非がない。生け置いて他人の花と眺めさせさうよ  
り、いつそ。

ト吹き散し、操を切らんとする。この時、奥より、十  
兵衛走り出て、友九郎を突き廻し、真中に立つ。

操 ヤア、十兵衛さま。

ト秀太郎、こなしあり。

十兵 友九郎どの、これなる操どののは、今日より身共が妻  
女。誤まりござらば餘人は頼まぬ。身共が手打ちに致  
す。して、科の様子は。

友九 サア、その儀は。

操 さうぢや。

ト十兵衛が刀に手をかけ死なうとする。十兵衛、留め  
て

十兵 待つた。コリヤ、何ゆゑに相果てる。

操 父上が預かりの茶碗が、この通りに割れましたわい

なア。

ト見せる。十兵衛、恸りして

十兵 ナニ、大菊の茶碗、破却せしとは、こりや何者の仕  
業。

秀太 外でもない、身共ぢや。

十兵 なんと。

秀太 その女めが、身が詞を背いたゆゑ、大菊の茶碗は、  
身共が割つた。

操 それぢやに依つて。

トまた死なうとする。

十兵 相果つれば云ひ譯になるか。

操 サア、それはな。

十兵 死急ぎする場所であるまい。先づ〜。

トなだめる。

操 それはさうでも、大切なる茶碗の

十兵 申し譯は身共がする。何事も身共に任してナ、この  
場に用はない。奥へござれ。

操 どうぞ父上の御難儀にならぬやう。

十兵 サア、その儀も呑み込んで居る。早く奥へ。

操 ハイ。

ト氣の済まぬこなし。

十兵 ハテサテ、ござれと云ふに。

操 ハイ。

トこなしあつて、是非なく奥へ入る。右のうち、友九

郎、拔身を隠すこなし、いろ／＼あつて、この時ッツと刀を鞘に納めて

友九 ハ、ハ、ハ、ハ、イヤ十兵衛どの、お道具の割れましたは、斯うでござる。秀太郎さまの御酒の御機嫌、所へ様どのがお茶碗を持つて出さつしやれた。幸ひぢや、と薄茶一つと御意なされたれば、イヤ／＼大切なお茶碗、これでは薄茶は上げまされぬと申して、持つて行かうとさつしやる。是非にと望まつしやる。その張合ひに打割れたお茶碗。珍事ぢや、怪我と申すものぢや。イヤ斯うではござるまいか。御上使と云ふは御家門の事なり、貴殿と拙者がよしなに執成し致さば、ツイ濟みさうな事ぢや。斯う致さう。身共は奥へ參つて、上使の手前を取繕らうて置きませう。後で好いやうにナ。

ト秀太郎に目配せする事、いろ／＼あつて十兵衛どの、後刻御意得ませう。

トついと奥へ入る。秀太郎こなしあつて、續いて行かうとする。

十兵 芳殿、待たつしやれ。

秀太 用があるか。

ト十兵衛ズツと行て、最前の願書を出し、詰めかけ

て

十兵 大殿調伏のこの願書、花園三十郎と、姓名を顯はしたる根深い企み。秀太郎さま、こりや、こなたの手跡でござらうがの。

ト秀太郎、こなしあつて

秀太 十兵衛、わりや主に非難をつけ、某を失ふ所存か。

ト十兵衛、秀太郎をキツと見て、ホロリと泣き

十兵 こなたの心に引くらべ、主を失ふ十兵衛かとは、エエ、お情ない。お家へ對し、させる功はなけれども、大殿のお目鏡を以て、こなた様の付け人となし置かれ、莫大の御恩録を蒙むれば、譜代相傳の御主人同然。曲りかねた心を矯め直し、お世禱に備へんと、この十兵衛は種に心を碎くわいなう。最前御上使の席に於て、願書の詮議乞ひ請けしは、こなたの非道を包まん爲。父を呪する大惡無道。拙者が口から申さずとも、コレ、天の上覽、弓矢神の御罰は御存じないか。

ト願書を秀太郎の側へ打ちつけ

エ、こなたはなう。

トきつと云ふ。秀太郎こなしあつて、願書を取上げ

秀太 さうありさうなものぢや。十兵衛、いよ／＼身を勵



目に立てよ。

十兵 そりや御本心見届け次第。

秀太 家園を押寄せば、眞人間になるであらう。奥へ行って一献酌まう。其方も参れ。

ト行かうとして、思ひ入れあつて、御書を取上げ懐へ入れ

ドリヤ、行かうか。

ト唄になる。秀太郎、奥へ入る。後に十兵衛、思案して居る。下座の間よりお貞出て、奥を見送り、十兵衛が奥へ行く。

てい 現在の御を調伏する大悪人。ふるなの辯で御意見申しても、所詮聞入れぬ御氣性。兄様、お前はマア、どうせうと思はしやんす。

十兵 三度諷めて身退くは、腐土の世迷言。何時までも御意見申し、仁義一殿に仕立て、見せる。

トずつと立つて奥へ行かうとする。

てい 待つた、待たしやんせ。無應に用ゆべき大菊のお茶

御、渡却せし申し譯は。

十兵 そりや身共が胸にある。

てい イヤ、さうばかりでは済みませぬ。お前の主人が大

事なら、わたしも連れ添ふ三十郎どの、その親御の御難儀になる申し譯。事に依つたら、秀太郎さまの悪事の段段。

十兵 口外いたさば命がないぞ。

てい それぢやと云うて。

十兵 ハテ、茶の湯を無事に納めなば、主水どのに凶事はない。身共が所存は、コリヤ。

ト囁く。

てい エ、そんなら小菊の。

十兵 コリヤ、何にも云はずに來い。

てい アイ。

ト唄になる。十兵衛、ツイと奥へ入る。お貞、ちよつと思案して、續いて入る。ト暮れ六ツの鐘鳴る。ト雨車、夕立の體。奥より主水、手燭持ち出て、庭の景色を眺めるこなしあつて

主水 一しきり降る五月雨。ハテ、潔よき景色ぢやよなア。

ト前なる植込みの積木に、蟬聲はれ啼く。奥は静かに

鼓の調べになる。これに合はし詠らへの合ひ方になる。橋が、りの切り戸より、三十郎袴ばかりになり、

胸下駄、數寄屋笠をかざし出て、蟬に目を付ける。主水、こなしあつて

千峯の鳥路梅雨を含み、五月蟬の聲雪秋を透る、  
三十 夏山の峯の梢のしげければ、空にぞ蟬の聲は聞ゆる。

主水 奥は調べの今様獅子。音聲美妙に冴えたるは、當家の吉瑞。

三十 空定めなき五月雨に、鳴く音は冴ゆる壹越斷金。

主水 鼓は元より音ある司。五音に取つて夏は双調。その梢にて鳥も宿らず、蟬の聲に身を潜むは

主水 奥は吉瑞。

三十 鳴く音は殺伐。

主水 吉事と云はうか。

三十 悪事と云はうか。

主水 時に吉凶。

三十 この場の判断。

兩人 ハテ、訝かしい。

ト工風のこなし。この時、蟬かくれる。雨車止む。常の合ひ方になる。三十郎、主水を見て

三十 親人。

主水 悴近う。

三十 ハツ。

ト主水の側へ行て、聲をひそめ

胡蝶の夢に悟りを開くは、莊子が空言。それに引替へ今の有様。蟬の鳴く音に殺伐を顯はすは、もしやお家の。

トあたりを見廻し、こなしあつて親人の思召しは。

主水 問ふに及ばぬ。主水が一命、今日につまつたわやい。

ト三十郎驚ろき

三十 ナ、なんと御意なさる。

主水 吉例に用ゆべき、大菊の茶碗を割りしは、秀太郎さまの所爲なりと、娘の知らせ。

三十 すりや、大菊の茶碗を。

主水 その上、某が拜領せし、小菊の茶碗も先達て紛失。察するところ、お家を窺ふ曲者の仕業。秀太郎の所行と

云ひ、家中の内も心得ずと思ふがゆゑ、上使の席に於て秀太郎さまを幽目に立てんと遮つて申せしも、家中の心を引き見ん爲。二つの器物なくなりしは、詮ずるところ

我が誤り、蠅の鳴く音はこの身の無常。申し譯は鐵腹一つと、所存な極めて罷りある。

三十 思ひ依らざる器物の破却。ムウ。

トちよつと思案して、下舞臺へ下り

三十郎が切腹、お見届け下されう。

ト腹切らうとする。

主水 待て。そちや何ゆゑ相果てる。

三十 調伏の願書に依つて、疑ひかゝる拙者が悪名。とて

も、武道に盡きたれば、器物の申し譯、親人の御難儀をこの身に引請け、只今切腹。

ト死なうとする。

主水 相果つれば義への孝は立ちもせうが、主人へ忠義は、どこで立つる。

三十 イヤ、その儀は。

主水 忠孝全き思案を致せ。

三十 忠孝全き思案とはな。

主水 圖遠せい。

三十 なんど。

主水 無實の罪を雪がんと思はゞ、この場を立退き、小菊の茶碗は父への孝心。調伏の悪名を雪ぎ上げるは主人へ

忠義。忠孝全き思案の最上。

ト三十郎、こなしあつて

三十 誠に、佞人ばらが落し穴に陥り、斃死せんより、一先づ立退き、功だに立たば悪名は消ゆる道理。併し、差當る器物の云ひ譯。御上使への申し譯は、如何なさる。

主水 御家普定めを、今暫らく延引の願ひ。

三十 器物を手に入れ、盜賊を召捕つて歸國いたさば

主水 其方が悪名。

三十 親人の御難儀。

主水 洗ひ清むる汝が一心。これに増したる忠義はあるまい。

三十 御尤も。

トちよつと思案して

屋敷へ歸り、母にも暇乞ひと存すれども、心も急げば。

ト差添を抜き、主水の側へ持ち行き

めでたう歸國いたすまでは、親人の影身に付き添ふ拙者がその魂ひ。

主水 悴顔を上げい。

ト三十郎、顔を上げる。主水、こなしあつて

老少不定は世の慣ひなれども、随分ともに命全う。内意もあらば、磯瀧半左衛門まで。

三十 伯父者人まで通達いたさう。

ト主水、袱紗包みの金を抱る。三十郎、取つて

エ、。

ト戴く。

主水 無事の歸國を、待つて居るぞよ。

ト唄になる。ト主水、こなしあつて、奥へ入る。三十郎

ちよつと思案の思ひ入れあつて

三十 ムウ、ソレ、暫時の遅れは暫時の不孝。さうぢや。

ト手早く袴を脱ぎ行かうとする。臆病口より軍兵衛、

ズツと出て

軍兵 何れも。三十郎を逼がすな。

侍ひ ハア〜。

ト橋が、りより、侍ひバラ〜と出て

動な。

ト〜登く

三十 復讐な。こりや、なんとする。

軍兵 大敵を調伏の科人、召捕つて逆縁刑にかけるのぢ

や。

三十 イ、ヤ、主人へ對し、非道を企む某でない。併し、

差當る云ひ謔なれば、科ならぬ科を身に引受け、國遠

する花園三十郎。妨げせずと道開け。

軍兵 踏みつけて纏ぶて。

侍ひ 勤くな。

ト十手構へる。

三十 なにを。

トきつと身構へする。ト奥にて春日龍神の謔、大鼓打

ちかける。

謔、時に天地震動するは、下界の龍神參會か。

軍兵 奥に聞ゆる春日龍神。

三十 爰は修羅道、劍の一さし。

侍ひ 捕つた。

トかゝる。これより立廻りになる。

〽龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、白妙なれや、和田の原の拂

ふは白玉、立つは緑の空色も映る海原や、沖行くばかり

に月の御船の、棹の川面に浮み出づれば八大龍王。

トこの間に大タテいろ〜あつて、侍ひ皆々橋が、り

へ逃げる。

軍兵 うぬ。



ト切つて行く。三十郎、見得よくとめる。  
 八龍王八つの冠りを傾け、所は春日野の月の三笠の  
 雲に乗り、飛ぶ火の野守も出て見よや。  
 ト兩人立廻つて、三十郎、軍兵衛が技身を叩き落し、  
 行かうとする。軍兵衛組みつく。

三十 救せ。  
 軍兵 いや、待て。

三十 面倒な。

ト立廻り、ト軍兵衛を見事に投げる。

ト失せにけり。

ト三十郎、ツイと向うへ走り入る。軍兵衛、舞臺にの  
 めつて居る。チョー／＼にて、返し、道具廻る。

造り物、二重舞臺、奥敷の體。西手折り廻り籠子  
 屋體、橋が／＼、落間、植込み、柴垣、右二重舞臺  
 の真中に、主水、白小袖、滲黄上下、短刀を載せし  
 三人を前に置き、秀太郎、刀に手をかけ切らうとし  
 て居るを、留めて居る。友之進、主水に目を付け居  
 る。下舞臺に友九郎、擺勢して居る。この見得、バ  
 タバタにて、道具とまる。

秀太 覺悟せい。

主水 秀太郎さま、狼藉千萬、こりや何となさるる。

秀太 大菊の茶碗を割りし越度に依つて、申し譯の切腹。

それゆる介錯。

主水 イヤ、花園主水切腹の作法は、好く存じ罷りある。

生首は、え、渡しますまい。お控へなされい。

ト突き放す。

友之 主水どの、當家の重寶、大菊の茶碗破却なりしは、

時の災難。貴殿の心腹さぞあらんと、推察仕つてござ

る。

友九 御上使響應に用ゆる、大切の茶碗を失ひ、日頃自慢

の要心流も、斯うなつてはうるたへ眼、虚空を握み、七

轉八倒を見るやうな。ハ、ハ、ハ。

秀太 主水、早く切腹せぬか。今となつて命が惜しいか。

友九 但し、押へて擡ぎ首に致さうか。

秀太 尋常に切腹するか。

友九 サア／＼。

秀太 主水。

兩人 なんとぢや。

ト詰めかける。この時奥より

象湯 兩人待て。

兩人 なんと。

内方 お成り。

ト云ふ。

皆々 ハア、。

ト皆々平伏する。奥より象湯、小姓付き添ひ出る。後より近習五人付き添ひ出る。象湯、真中へ座る。皆々橋がかりへ並ぶ。

象湯 吉例に用ゆべき、大菊の茶碗被却なりしとの事。主水、さぞ驚きであらう。

主水 この期に及び、申し譯の種もなければ、この身に及ぶ武運の盡。御上使への申し譯は。

象湯 一命を果さうとは、そりや悪からう。

主水 なんと御意なさるゝか。

象湯 例へ天下の名器にもせよ、人の命は萬の寶の隨一。

これに替ゆる寶があらうか。主君の馬前に死する命、迂濶に果すとは、主水、老人ゆゑか、こりやちと性急にあらうぞや。

近習 主水どの、御前の御意でござる。

皆々 お控へなされい。

主水 ハツ。

トこなしあつて、下舞臺へ下り、好き所へ座る。

象湯 友之進、して、家督の儀は如何計らふ。

友之 その儀大殿へ伺ひしところ、本腹たがら要之助さまは身持ち放埒、跡目の儀は思ひも依らず、一家中評議の上、お世繼は秀太郎さまに、一決仕つてござりまする。

秀太 オ、さうぢや〜。最前弟へと云ひつゝのつた友之進も、今と云ふ今、合點がいたか。某に家督とは、出かした〜。主水、其方も云ひ分はあるまい。今日只今、三輪の跡目を、この秀太郎が相續すれば、御上使様、この旨武將へ御披露下されい。

友九 御家督の儀につき、さゝへこさへを申すべき主水ど

のはあの通り。その外批判打つもの一人もござらぬ。秀太郎さまには御家督相續、千萬萬、只々おめでたう存じまする。

象湯 評議一決の上は、武將の御前、好きに推挙いたすであらう。

秀太 よろしう頼み存ずる。

象湯 家督定めに祝せし一品、秀太郎へ遣はせい。

近習 ハツ。

ト小四方に短刀載せしを、秀太郎の側へ持ち行く。  
秀太 ハ、ア、これは御懸符の賜物、辭退は却つて。

ト云ひく、短刀を見て、惘りして  
ヤア、こりやコレ短刀。この秀太郎は、何ゆゑに切腹す  
るのぢや。

象湯 當家の系圖は紛失せうがな。

秀太 なんと。

主水 イヤ、その儀は。

象湯 天知る地知る、武將久吉公、斯程の事を御存じなく  
て、日の木の政道が氣されうか。

友之 すりや、系圖紛失とな。

トこなし。

主水 一家中へも深く包み、密かに詮議いたすところ、御  
上聞に達せし畏、恐れ入りましてござりまする。

象湯 家國を相續すれば、系圖の紛失はその身に及ぶの道  
理。秀太郎、武將への申し請、其方切腹せずばなるま  
い。

秀太 ぢやと云うて、某か何にも。

象湯 存せぬと云ふ證據があるか。

秀太 サ、それは。

象湯 跡目に立たうと云うたでないか。

秀太 サア、それは。

象湯 切腹するか。

秀太 サアくく。

象湯 秀太郎、なんとぢや。

ト秀太郎、ウロノとして、友之進を見る。友之進デ  
ツと思案して居る。秀太郎、いろくこなしあつて

秀太 もう家督に立つまい。跡目、相續さつぱりと止めぢ  
や。

象湯 すりや、跡目には立つまいとな。

ト小四方を突きやり、象湯に突ツかゝる心にて

秀太 系圖の紛失、身共は知らぬが潔白。餘り筋ない事を

申さるゝと、御上使とは申しませぬぞ。

象湯 跡目に立たずば部屋住みの秀太郎、武將より御不審  
の一條。

秀太 某に御不審とは。

象湯 當國岩手山は、鹽籠明神の領地に寄せられ、猥りに  
木植を入れる、事を許さず。然るに其方計らひを以て、岩

手山の竹木を伐り取り、金銀を賄へしは、野心ありとの  
お疑ひがこれ一つ。

友之 イヤ、そりや御上使の御事。近來武將久吉公、小田原の御陣、打續いて朝鮮征伐、軍用金を仰せつけられ、岩手山の竹木を伐つて、軍用金を調達せしは、秀太郎さま武將へ對し忠義の一つ。

象湯 御軍用は諸大名とも一統。亂陣の後、悉く返納ありしと傳へ聞く。主水、この儀はどうぢや。

主水 御意の通り、武將より返納あつて、寶藏へ納めるところ、當時有り金五萬兩不足せしと、お金方より密かの訴へ。

象湯 秀太郎、五萬兩の行く先は、其方が存じて居やうが。

秀太 イヤ、その儀は。

象湯 その上、領内の町人百姓を苦しめ、多くの金銀を賣り取りしとの事、御上聞に達してあるぞよ。

秀太 サア、それは。

象湯 その身の驕りに家國を打忘れ、この度吉原とやらの廓へ立寄り、放埒情弱の振舞ひと、家中の風聞、この云ひ譯は、あるまい。

友九 イヤ、歸國の折柄、廓通ひをなされしは、御舎弟要之助さまも同じ事。秀太郎さまばかり放埒とは申されま

すまい。

象湯 兄弟が融通ひは友九郎、其方が勧めであらうがな。

友九 これは又情ない。若殿のお迎ひの爲、廓へは參つてござるが、御放埒を勧めしなどは、この友九郎神以て。

象湯 存ぜぬとは云はさぬ。先達て其方、兄右京の太夫さまより、拜領せし信圓の刀は如何いたした。

友九 イヤ、その刀は。

象湯 供につながる廓のほたへ。剩さへ角力取りに打擲せられ、廓の座敷で打ち折られた刀の切尖は、コレ、これに。

ト刀の折れを出す。

友九 ヤア、それは。

ト立たうとする。主水、留めて

主水 拜領のお刀を、なぜ折られさつしやつた。

友九 サア、それは。

主水 差いた刀のこの切尖。

ト友九郎が刀を抜く。

友九 それは。

ト寄るを、主水、脾腹を柄にて當てる。友九郎、苦し



む。

魚湯 友之進見や。なんとマア、いかい阿房ではないか。  
友之 御尤もに存じまする。

秀太 花婿の相ざしと云ふは友九郎、これで身共が申し譯  
は立ちませうが。

魚湯 イヤ、まだ外に大それた料がある。

秀太 まだ外に料があるとは。

魚湯 現在の父、右京之太夫さまを調伏せし大罪。

秀太 コレ／＼、そりや何云はつしやる。親人調伏の願書  
に、花園三十郎と記した姓名。云ひ譯なさに、主水、其

方が替三十郎は間違せうがな。

主水 守り手の隙がないと間違せしは、替が不屈き。

ト正面の奥明け、お貞、これを聞くこなしあつて、襖  
閉す。

秀太 ぢやに依つて、種人は三十郎。身共が知らうか。馬  
鹿な事を。

魚湯 さうは云はさぬ。非常の段々、聞き届けた證據があ  
る。

秀太 面白い。その證據を見ませう。

魚湯 龍介、因人これへ。

龍介 ハア、。

ト龍介、我慢坊に總かけ出る。

友之 ヤア、われは。

ト暫り。此うち友九郎心付いて、秀太郎と顔見合せ、  
こなし。

魚湯 友之進があやめた山伏、難つたが詮議の縁口。

友之 ムウ。

トぎつくりしながら

ハテ、命冥加な。

トこなし。主水、急いで

主水 ヤイ、そな奴、身共親子に遺恨あつての事か。頼み  
手は何者ぢや。眞直に云へ。どうぢや。

秀太 コリヤ／＼、うろたへて何にも云ふな。口走つたら  
手は見せぬぞ。

ト腕む。我慢坊、ウロ／＼する。

龍介 サア吐かせ。吐かさずば斯うする。

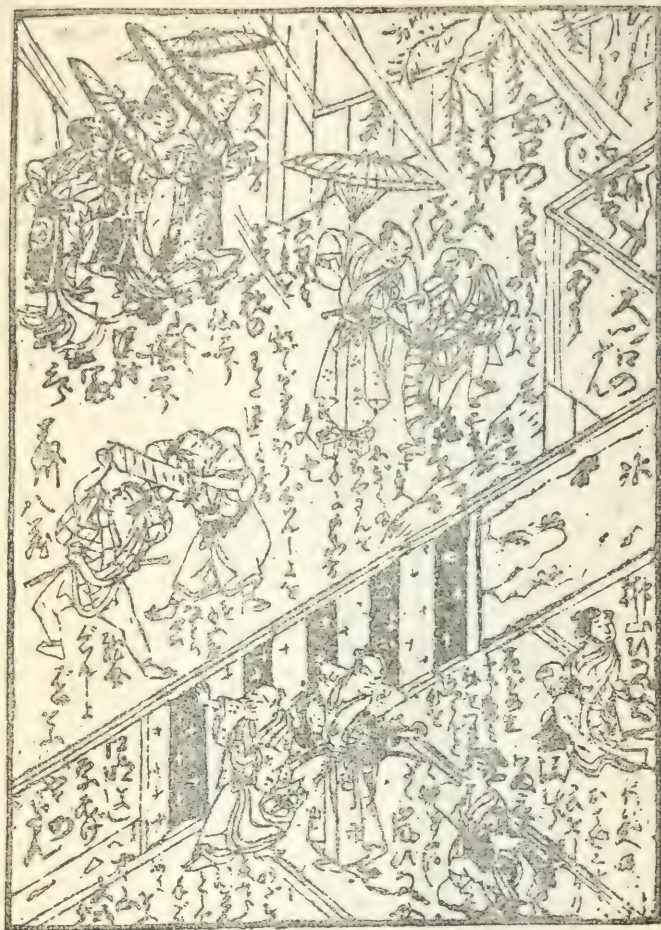
ト鞘にてこちる。

我慢 アイタ、ゝゝ。申しまする／＼、ちつと緩めて下さ  
りませ。

龍介 サア、吐かし居らう。



初演の



繪 番 附

ト緩める。秀太郎、小柄を抜かうとする。龍介、我慢坊に立ち塞がり

ドッコイ、手裏剣はもう古い。サア、眞直に吐かせ。どうぢや。

我慢 イヤモウ、斯うなつたら肴中に腹ぢや。大殿を調伏して、もし顯はれたら、三十郎さまに料を塗りつけうと云ふ企み。その頼み手は、其所にござる、秀太郎さまでござりまする

主水 すりや、秀太郎さま。

トこなし。

我慢 イヤ、次手に申しませう。最前友九郎どの、お指圖で、眞の水筋へ毒を仕込み、變應の茶の湯の時、御上使は元より、主水どのまで仕舞うて取る企みの段々。首尾ようやつたら、この國の祈願所に取立てうとあるゆゑ、同心いたしました。皆、秀太郎さまの思ひつき。斯う白狀いたすからは、命ばかりは、お助けなされて下さりませ。

ト秀太郎、友九郎へ目配せして

秀太 顯はれたら百年目ぢや。

ト象潟にかゝる。友九郎、主水へ切つて行く。我慢坊

は逃げんとするを、龍介、當て殺す。主水、友九郎が拔身を叩き落し、その拔身を取つて、友九郎へさしつける。象潟、秀太郎を平舞臺へ取つて投げる。友之進、刀を取つて、象潟目がけ、ズツと立つたを、象潟、留め

象潟 友之進、これは。

友之 イヤサ、これは。

象潟 上使に向ひ尾籠であらうぞ。

友之 ムウ。

ト息込み、こなしあつて

主人の非道に荷擔せし、憎くい弟。眞二ツに打ち放さうと存じて。

象潟 イ、ヤ、この場の懸斷、其方が指圖は受けぬ。立ち

騒がずと控へてよからう。

ト友之進、こなしあつて扣へる。

主水 身動きせずと、御裁許を待つてござれ。

ト投身を友九郎の方へ抛る。秀太郎、ウロ／＼して逃

げうとする。

近習 身動き召さると命がないぞ。

ト反り打つて聞ふ。秀太郎、身を締めへたる。



象湯 サア秀太郎、これまでなせし非道の積悪。剩さへそれなる主水を失はんと、大菊の茶碗を打ち割り、科に取つて薄さん企みの段々、茶道勇齋が見聞の上は、慥かに承知。講代忠義の武士を失ひ、父に敵討ひ、上使に立ちし自らまで、毒害せん、懺りしは、武將久吉公へ敵對ふ同然。但し、秀太郎が師範たる友之進、右の條々、其方が云ひ譯するか。

友之 サア、その儀は。  
象湯 云ひ譯なくば、其方は元より友九郎も同罪。

友之 イヤ、その儀は。  
象湯 この場に於て一々成敗。マア、秀太郎から切腹の手本を出せ。

秀太 サア、それは。  
近習 但し、押へて介錯せうか。

秀太 サア、それは。  
近習 切腹看ざるゝか。

秀太 サア。  
近習 道がれぬ所ぢや。切腹々々。

秀太 ト詰めかける。秀太郎、うろたゆるこなしあつて  
そんなら、どうあつても死なねばならぬか。友之進、

こりやマア、どうしたらよからう。  
象湯 この期に及び、未練であらう。長刀持て。  
小姓 ハア。

ト長刀を渡す。象湯、鞘を外し、長刀を構へキツとなる。友之進ちよつと留める。秀太郎、身を縮める。この時奥より、十兵衛、ツカ〜と出て

十兵衛 イヤ〜、御上使様書らく。恐れながら小栗檜十兵衛、この場の御評議、遂一に申し開き仕らう。先づ〜  
お待ち下さりませう。

象湯 小栗檜十兵衛。  
十兵衛 ハツ〜。

象湯 其方が云ひ譯いたすか。  
十兵衛 秀太郎さま、付添ひ人の拙者でござれば、善悪に依らず、申し開き仕るでござりませう。

ト象湯、こなしあつて、長刀を小姓に渡し、下に居て  
花園主水は忠義の武士、大菊の茶碗を割り、科を主

水に被せ、失なはんとせし非道の振舞ひ。  
十兵衛 イヤ、大菊の茶碗は、割れもせず損じもせず、麗

麗とこれにござる。  
主水 ナニ、大菊の茶碗が、これにあるとは。

十兵 妹、申しつけし品、早くこれへ。  
てい 畏まりました。

ト茶碗の箱を持ち出る。茶道付き出て、好き所へ扣へる。お貞、箱を秀太郎の側に置く。

兄十兵衛が寸志の一品、秀太郎さま、お改め下さりませう。

ト秀太郎、心得ぬこなしにて、箱を開き、茶碗を出し見て

秀太 ヤア、こりや小菊の。

ト云ふを、十兵衛、押へて

十兵 イヤ、大菊の茶碗、とくとお目利きたされい。

秀太 正しう江戸で人手に渡した小菊の。

友九 誠に、その茶碗が、どうして爰へ。

ト顔見合せ

秀友 面妖な。

主水 紛失の小菊の茶碗、思ひも依らずこの場へ。

ト十兵衛を見て

ハテナア。

トこなし。

十兵 御不審は御尤も。この度拙者、若殿のお迎ひの爲め、

吉原へ参りしところ、不思議にも手にいるその一品。よく見れば小菊の

こなしあつて

サア、黄金の値貴き一品、手に觸れしより慾心兆し、隠し置きしは拙者が誤まり。さるによつてその小菊の……イヤサ、大菊の茶碗、秀太郎さまに献上仕つてござりまする。

象湯 その茶碗これへ。

秀太 ハツ。

ト怖々、象湯の側へ持ち行く。象湯、改める事あつて

象湯 大菊小菊と名は變れども、共に武將の御秘藏なれば、

この小菊の……イヤ、大菊の茶碗にて、茶の湯は無事に納めるであらう。

ト茶碗を茶道に渡す。茶道、箱へ入れて、扣へる。

てい エ、有り難う存じます。これと云ふも、お主様や

主水さまを、大切々々と思し召す兄様のお志し。秀太郎さまのお命まで、恙ないこの場の納まり。斯様なお嬉し

い事はござりませぬ。

象湯 イヤ、そればかりでは云ひ譯は立つまい。武將久吉公御軍用と云ひ立て、岩手山の竹木を伐り取り、金銀を

貯へしが不審の第一。

十兵 應仁以來、諸國ともに穩かならず、軍用金も繁多なれば、御城内の普請も怠り、要害も疎となる。さるに依つて岩手山の樹木を取り、賣り拂ひまして、御普請成就。

象湯 民を虐げ、賄賂を賣り取りし私慾の段々、この云ひ譯は如何いたす。

十兵 町人百姓、金銀に飽き満つれば、榮華に誇つて野心を生ず。そこを存じて譯役を云ひつけ、去冬領内饑渴の稠り、彼の金子を以て、關東より米穀を買ひ取り、施行米と致されしは、これ以て主人の仁計。

龍介 大殿を調伏なされし、申し譯は如何でござるな。

十兵 サア、それは。

主水 上使の役目は武將の名代、毒害の申し譯は。

十兵 イヤ、その儀は。

象湯 蘇秦張儀が辯を飾つて、主人の悪事を云ひ拔けんと致しても、こればかりは過がれぬ大罪。但し、申し譯の筋があるか。

十兵 サア、その儀は。

龍介 秀太郎さまに纏ふたらうか。

十兵 サア。

主水 云ひ譯あるか。

象湯 サア〜〜。

象湯 なんとぢや。

ト詰めかける。十兵衛、當惑のこなしあつて、キツとなり

十兵 この上は何をか包まん。大殿を調伏、上使毒害の密計を企てしは、斯く申す小栗栖十兵衛。

てい ヤ、兄様、そりやマア、何を仰しやるぞいなア。お前に限つて、なんのマア、大殿様を。

ト云ふを、十兵衛、睨めつける。お貞、是非なく扣へ

る。十兵衛、象湯に向ひ

十兵 謀計は一旦の利順たりとも、遂には神明の御罰を蒙むる。お家の世繼、御兄弟の公達、何れも主人に相違な

けれど、秀太郎さまの付き人と仰せ出され、守り奉るゆゑなれば、大事々々と思ふがゆゑ、おのれやれこの若

殿を、御世に立てんと晝夜の肺肝。寢食も安んぜず、よくよく思へば、御次男ながら要之助さまは、殿の血脈、

これこそ國の御跡目と、大殿の思し召し。さある時は、

秀太郎さまは御家來の列になつて一生埋れ木。とつおい

つの思案より、企むとなしに悪念生じ、大殿だにましまさずば、辯舌を以て非を理に云ひ伏せ、秀太郎さまを御世に立てんと、恐れ多くも大殿を呪いの願書。後難を思ふゆゑ、願主は花園三十郎と、我が師たる、主水どの御子息に、科を負はせし拙者が非道。そのみならず毒害を以て、御上使又は主水どのを亡きものにせんと、我が身ながらも空恐ろしき悪事の段々。報いは早き轍の車、巡りくしこの場の裁斷。非儀も非道も、我が一心よりなしたる悪業。主君に敵對ふ大罪は、牛裂きとも八裂きとも、お家の政道、如何やうともお計らひ下さりませう。

ト覺悟のこなし。  
友之 十兵衛、御邊の心底、友之進、推察いたした。近頃過分。

ト云はうとして  
イヤサ、過分に應ぜぬ非道の仕業。ハテ、見下げ果てた人非人ぢやよなア。

主水 御上使へのお願ひ。家督定めは今となつて、斯く取亂したる館の有様。何卒家督の儀、今暫らく。

象潟 尤もの願ひ。系圖の在所知るゝまで、家督延引、百

日の日延べ。

主水 すりや、百日の御谷赦。エ、有り難い。

象潟 主人の科を身に引請けし十兵衛、其方が忠義に免じ、

秀太郎が助命、好きに推擧いたすであらう。

十兵 御主人の虚名暗るれば、拙者が本望。

ト居直り、腹切らうとする。

象潟 イヤ待て、切腹は叶はぬ。

十兵 罪科極まる拙者なれば。

象潟 この場より追放。

十兵 すりや、御追放とな。

象潟 懺悔には重罪を減すと云へば、死罪を宥め、この場より追放。サア、追放の身は、心措きたり三十郎に力を

添へて、系圖の詮議をば、ナ。大法なれば、主水、大小

を預かつてよからう。

ト十兵衛、大小を取つて、主水の側へ持ち行き、又下

座へ行て

十兵 お慈悲の政道、有り難くお請け仕つてござります

る。

てい 三十郎さまと云ひ兄様まで、是非もない身におなり

なされましたなア。



ト十兵衛に取りつく。友之進、下へ下がり、秀太郎が  
手を取つて、上座へ直し、こなしあつて

友之 弟、これへ。

友九 ハツ。

ト友九郎、何心なく側へ寄る所を、友之進、背打ちに  
打ち掃ふる。友九郎、キツとなつて

友九 兄者人、こりや身共を、なんで打たつしやる。

友之 何ゆゑとは、こた人外あが。若殿の御放埒、御意見  
は申さずとも、なぜ共々に踊り狂うた。なぜうつけの殿  
に仕立てた。かゝる非道に、某も荷籠せしかと、アレ御

上使の思し召し。友之進が武士道まで捨てさせんとせし  
案外な奴。今打ち放す奴なれど、場所悪しければ、命は  
助ける。當だ。立つてうせうぞ。

友九 コレノ、兄者人、その筈ではござるまいがの。

友之 まだノ、細言吐かすと、ぶち放すぞ。

トきつと云ふ。友九郎、眞面目になる。

藤介、彼奴を圍繞よりおツ拂へ。

藤介 心得ました。

ト友之進、元の座へ座る。

象湯 友九郎を昔當とは、これも尤も。茶園の在所知れる

までは、武將よりのお疑ひ。秀太郎は友之進、また要之  
助は主水、兩人に預けるぞよ。

友之 すりや、秀太郎さま。

主水 要之助さまを。

象湯 家に接木の花咲くやう、とつくりと工風せい。  
ト友之進、主水、顔見合せ、こなしあつて

友主 畏まり奉つてござりますする。

象湯 上使の役目相濟めば、最早歸國。近習の者、供觸れ  
を申しつけい。

近習 畏まつてござりますする。

ト象湯、立つて下へ下り、十兵衛が側へ来て、こなし

あつて

象湯 香餅の元にはけん魚現はれ、重恩の下には死人のも  
のありとの古語。新歳と云ひまだ壯年。ハテ、秀太郎は、  
好い家來を持つたなア。

秀太 十兵衛、何も云はぬ。コリヤ、これぢやノ。

ト十兵衛を拜む。

十兵衛 時刻移れば、拙者は此まゝ。

ト申し。

ト取りつくを突き退け

十兵 おさらばでござりますする。

友九 エ、思へば。

友之 ソレ、ぼッ拂へ。

龍介 畏まつてござりますする。

近習 奥方のお立ち。

大勢 ハア、。

主水 御上使、御苦勞。

象潟 方々、さらば。

ト所知入りになる。象潟、先に立ち、小姓、近習、皆皆付き添ひ、向うへ入る。友九郎を龍介追ひ立て、次に侍ひ、我慢坊を引立て、橋がよりへ入る。十兵衛にお貞取りつくと振り切り、こなしあつて、ツイと橋がかりへ入る。主水、十兵衛が大小を持つて、マア奥へと顔に於ける。お貞、是非なく主水に付き添ひ、この後より茶道、茶碗の箱を持ち、皆々奥へ入る。友之進、秀太郎、残り居る。所知入り止んで、常の合ひ方になる。秀太郎、あたり見廻し、こなしあつて

秀太 ヤレ〜、ひやいな事であつた。友九郎が拷問にかかつたら、どんな事を云はうも知れぬ所を、勘當とは天晴れ頓智。某が軍師と云ふは友之進。何もかも首尾よう

いたら、一廉の知行を遺るぞ。コリヤ、喜べ〜。

ト友之進こなしあつて

友之 忤々。

ト呼ぶ。秀太郎、あたりを見て

秀太 爰には誰れも居らぬぞよ。

友之 忤と云ふは、秀太郎、其方が事ぢや。

ト秀太郎、惱りして

秀太 友之進、この秀太郎を其方が忤とは。

友之 或る程、一應では御不審は暗れまい。

トこなしあつて、立ち上がり、三方と長柄の鏡子とを持ち、真中へ座り、杯に酒を注ぎ、小柄を抜いて腕を引き、血を絞り、三方を差出す。秀太郎、思ひ入れあつて、同じく小柄を抜いて腕を引き、杯へ血を絞り込め、とつくりと見て居る。合ひ方ちよつと止む。

秀太 こりや、血汐が一つに寄つたワ。

友之 骨肉同胞、親子の印

秀太 すりや、某が親と云ふは。

友之 コリヤ。

ト押へる。トまた合ひ方きつぱりとなる。兩人舞臺先へ出る。上の方の障子明けて、主水、立聞きする。橋

が、りの柴垣の處より、十兵衛、立聞きする。秀太郎、下座へ入れ替つて

秀太 今の今まで、親子と云ふ事、包み隠せし親人の御所存。承はりたうござりまする。

友之 謀り事は密なるを以てよしとする。某は元九州の探題、瀬川の家臣。某かの誤まりあつて、主人より不興を蒙り、浪人の身を苦しみて、妻は病死、残りしは娘一人、十一歳の足手纏ひと思へども、詮方なく娘を誘ひ、身の上隠さんと上方を志し、その禰り京極西陣の織屋、治左衛門と云ひし者に所縁あつて、この家に逗留。然るに治左衛門夫婦なきがゆゑ、何卒娘をくれよとの頼み。

女子の事ゆゑ、違背なく彼れへ與へ、我れは仕官の望みあれば、京都を立退き、この奥州へと志し、神影流の武術を云ひ立て、當家へ仕官に有りつきしは、十九年以前。まだその頃は若氣の感り、お湯殿と云ひ交し、度重なつて懐胎す。不義一統の掟なれば、如何はせんと思ふところ、大殿右京大夫、彼のお湯殿にお手をかけられ、一度の添風。これ屈意と思ふより、女にも申し合め、月滿ちて男子出生の其方こそ、當家の世禰と思ひしに、その後又もや木津腹に男子出生。南無三血脈なれば、當家の世

繼、とやあらん斯くやあらんと、十九年の春秋は、千變萬化と心魂を碎き、斯くまで謀る我が大望。大殿調伏の儀を其方へ云ひつけしも、家督定めを急がん爲、實の伴の其方を、一國の大守と仰がせ、身共は分地の隠居大名。隣を固むる親子の諍水。

ト杯を取つて、半分呑み差出す。秀太郎、取つて残りず呑み干す。主水、障子閉す。十兵衛、柴垣へ隠れる。

秀太 調伏とは廻り遠い。右京大夫、要之助諸とも殺らしてしまつて、一國押領心の儘。

友之 事成るまでは隠すが秘密。

秀太 マア、それまでは。

友之 矢張り御主人。

ト座を下がり。

秀太 友之進。

友之 萬事は後刻。

秀太 奥で熟談。

友之 先づ、お入りあられませう。

ト唄になる。兩人こなしあつて、奥へ入る。と柴垣の蔭より、十兵衛出て、奥を見送り

十兵衛 今日の今ままで主人と思ひし秀太郎さまは、友之進が實の

トこなしあつて  
ムウ。

ト手を組み思案する。と奥より主水、十兵衛が大小を  
持ち出て

主水 十兵衛。

十兵衛 主水どの、只今の様子。

主水 残らず承知。お湯殿に出生ながら、胤は正しく大殿  
と思ひの外、友之進が實の性。國主に守り立て、外戚の  
威を振はんと逆意の企て。

十兵衛 これまで盡せし忠義も水の泡。して、主水どの、思  
し召しは。

主水 双葉の内に切らずんば、斧を用ゆるの禍ひ。國家を  
亡ぼす叛逆と云ふ稀代の難病。これを癒す良薬は、十兵  
衛、其方が忠義の一心。

十兵衛 ムウ。難病の根ざしと云ふは友之進。枝葉は血筋の  
秀太郎。この兩人を

ト主水を見る。主水、切る眞似をする。  
すりや。

トこなし。

主水 サア、花陀の醫案の良薬は、我が一心に迫つたぞ  
よ。

ト十兵衛こなし、思案して

十兵衛 俗姓を聞いて見れば、忠義は却つて不忠となりしこ  
の身の誤まり。ムウ。この上は御意に従ひ、病の根を絶  
ち、本腹させてお日にかけませう。

主水 出かした。薬味に用ゆるこの二腰。

ト大小を差出す。十兵衛、取つて

十兵衛 すりや、拙者が。

主水 所存を見抜きし武士の魂ひ。

十兵衛 ハッ。

ト戴き、腰に差し

この場で計らば家中の騒動。

主水 彼れが下城は大手の松原。城下を離れた堤の端。

十兵衛 五月下旬の圍夜も屈竟。

主水 供先の提灯は角黒に白餅、目當違はず、たつた一打  
ち。

ち。

十兵衛 下城を待たず、先へ廻つて。

主水 首尾よう致せ。



ト奉釣り鐘打ち出す。主水、顔にて行けとする。  
十兵　ハツ。

ト駆け出さうとして、あたりを見て、さし足にて、向うへ走り入る。主水、見送るうち、我慢坊、一腰持ち、後より出て

我慢坊　主水あ、うぬ。

ト切りかける。主水、投身をもぎ取り、我慢坊をポンと切つて

主水　おのれが自滅。ハテ、馬鹿な奴の。

ト投身を抛る。咽になる。主水、裏へ入る。直ぐにバツノにて、要之助を源内、藤治、取巻き出る。

要之助　藤治、なんとする。

藤治　こなたがあつては、秀太郎さまの跡目の邪魔。

源内　おやに依つて、ぶち放すのおや。

ト源内よりかゝる。備前、梅の戸開て、左右へ隔て、二人、殿様に狼籍はさしぬ。

藤治　邪魔ひろぐな。

ト交かゝる所へ、龍介、走り出て、二人を見事に投げ

要之　ヤア、體介か。

龍介　コレ、爰構はずと、三人とも、お下屋敷へ、早う早う。

要之　合斬ぢや。二人ともおぢや。

ト橋がより三人とも走り入る。兩人追ひかけるを、

龍介、引き戻し

龍介　足手纏ひは拂ちてしまつた。これからは此方のもの

ぢや。うせい／＼。

兩人　瀧倒た。

ト兩人、切つてかゝる。投身を叩き落し、三人とも角力の手になる。いろ／＼あつて、龍介、落ちたる二刀

を取り、兩刀にて振り廻す。兩人、橋がよりへ逃げるを、龍介、追うて入る。返し。

見附け　屋敷、左右へ引分ける。上の方より、大橋

出る。正面に樺の大木、破風より一面の枝垂れ柳、橋のほとり一面に蘆原。すべて、城下はづれ、堤の

體。道具納まるまで、始終奉釣り鐘打つて居る。

ト橋がよりより、秀太郎、軍兵衛、頼冠りにて出る。橋の方より、友九郎、これも頼冠りにて走り出て

友九　秀太郎さま。

秀太 友九郎、コリヤ。

ト嘆く。

友九 心得ました。

トまた秀太郎、軍兵衛驕き

秀太 忍べ。

友軍 ハツ。

ト秀太郎、友九郎、蘆原へ隠れる。軍兵衛、土橋の下へ忍ぶ。釣り鐘止んで合ひ方、雨車になる、と向うより、主水、合羽、傘、木履にて、家來、三かもめの紋の提灯を持ち、後より家來一人付き添ひ出る。橋が、りより、友之進、同じく合羽、傘、木履にて、家來、角黒に白餅の紋の提灯を持ち出る。兩人花道角にて、行き合ひ

友之 主水どのでござるか。

主水 友之進どの。

友之 只今御下城でござるか。

主水 左様でござる。

ト本舞臺へ来て、十兵衛はまだ來ぬかと、あたりを見ろこなし。

イヤ、ちと拙者所用ござれば、友之進どの、失禮ながら

お先へ參る。

友之 イヤ、主水どの、幸ひの折柄でござる。ちと貴殿に申し入れたい儀がござる。暫らく。

主水 ハア、何用でござるか。

友之 密談でござれば、とても事に御家來をお除け下さい。

ト主水、家來に向ひ

主水 其方達は、堤の向うに控へて居れ。

家來 ハツ。

主水 行け。

ト箱提灯を其所に置き、家來二人とも土橋の向うへ入る。

家來は除けましてござる。友之進どの、拙者もちと貴殿にお尋ね申す儀がござる。密事なれば、其許の家來も。

ト友之進こなしあつて、家來に向ひ

友之 われ達は、松蔭に控へ居れ。

家來 ハツ。

ト同じく箱提灯を置いて、二人とも橋が、りへ入る。と雨車止む。主水、友之進、空を見て、傘を捨て。

これより合ひ方、蟲の音を入れて、夜の更けし體な

り。

主水 友之進どの、して、其許の御用は。

友之 別儀でもござらぬ。拙者元來神影の流儀を云ひ立て、お家へ御奉公。貴殿は御譜代、要心流の達人。拙者

なども一流を以て指南いたせども、廣く諸流に涉り、利

き方の好きを旨とするが武藝の肝要。何卒貴殿の流儀、

要心流の印可、密々に内見の儀のお頼み。なんと叶ひま

すまいかな。

主水 すりや、拙者が印可を。

友之 御承知下されうか。

主水 披見いたさせませう。

友之 先づは泰ない。

主水 印可の巻は御覽に入れうが、その代り、御身が手より、受取らにやならぬ一品、此方へ渡し召され。

友之 身共が手より、受取るべき一品とは、そりや何を。

主水 外でもない、三輪家代々の系圖の一巻。

友之 なんと。

主水 御身が盗んで、所持いたし召されうがの。

友之 黙れ主水。系圖を盗み所持するとは、跡方もなき事。

虚言吐いたら手は見せぬぞ。

主水 ハ、ハ、ハ、鷺を鳥とあらがふとも、遁がれぬ天命。

おのれが悴を大殿の胤と偽はり、跡目に守り立て、我意

を振はん企みの一々。

友之 すりや、その様子を。

主水 蛙は口から白身の白状。サア、系圖は何所へやつた。

召捕つて面縛ささうか。友之進、どうぢや。

ト詰めかける。友之進、こなしあつて。

友之 一大事を聞いたれば、うぬ、もう生けては。

ト抜打ちに切りかける。主水、その刀を叩き落して、

友之進が襟髪取つて、土へグツと捻ぢつけ、こなしあ

つて

主水 騙し討とは愚か。おのれ仕官に有りつきし砌り

より、辯舌巧みに家中を馴れつけ、主君に媚び、私慾を

構へ、お湯殿と不義密通。おのれが悴を主人と崇め、お

家お國を押領せんと不敵の大望。十九年の長の年月、主

人の祿を食みながら、邪しま非道の逆意の企て。植木の

蟲植木を枯らす。獅子身中の蟲とや云はん。言語に絶せ

し、こな人外めが。

ト突き放す。友之進、こなしあつて

友之 天晴れ、神影の達人たる某を、手の下に組み伏せた

る、流石の老人。我れく風情が及ばぬ手練。が又その及ばぬ所を斯うして。

トまた抜いて切りかける。主水、抜き合せ、受け留めて

主水 ハテ、跪いても叶はぬ事を、

友之 細言云はずと、くたばれ。

ト切り結ぶ。友之進、危ふくなる。蘆原より秀太郎、友九郎出て、切つてかゝる。主水、三人を相手にタテあつて、好き程に友九郎を一かせ切る。友之進かゝる

を蹴踏ふる。秀太郎、土橋へ逃げる。主水はひかけ行て、秀太郎を橋の上より川中へ切り込む。友之進、續いて行く。主水へ切りかける。主水、受け太刀になる

所を、土橋の下より、軍兵衛、主水が臍腹を突き通す。主水ひるむ所を、友之進、疊みかけて切り込み、乗りかゝつて、とつくりと止めを刺し、主水が腹中の印

可を出し、死骸を川中へ蹴込む。水音して水煙り揚がる。友之進、元の所へ来る。友九郎起きる。軍兵衛、

橋の下より出て、三人一緒にになり

軍兵衛 とまりましたか。

友之 如何にも。息の根止めて川中へさんぶり。

友九 出来た。

友之 われ達は、コリヤ。

ト左右へ騒ぐ。印可の巻を軍兵衛に渡し、また懐中より系圖を出し、友九郎に渡す。

友九 すりや、これが三輪の系圖。

軍兵衛 これが印可の巻。

友之 兩人ともにしかと預ける。一先づ立退き、此方の便

りを相待て。

兩人 合點ぢや。

友之 行け。

兩人 さらば。

ト友九郎は東の通ひ路、軍兵衛西の通ひ路へ別れ入る。ト向うバタ／＼にて、十兵衛、走り出る。友之進、提

灯を取上げ、川中を窺ふこなし。十兵衛、花道より提灯を見て、ツカ／＼と寄り

十兵衛 安達友之進、観念。

ト切りつける。友之進屈む、此はずみに提灯を切り落し、左右へ別れ、キツと窺ふ、と忍び三重になる。真

中の蘆原を引分け、秀太郎、手負ひにてヌツと出る。各々暗がりの見付。立廻りあつて、ト、秀太郎、友之



進を水と思ひ切りつける。友之進、危ふく道がれ  
る。十兵衛、勇太郎を切りつける。ウンと騒する。進、

みかけて驚りかゝり

十兵 天罰の程、思ひ知つたか。

ト振り、直めを斬す。友之進、これを聞いてぎつくり  
のこなしあつて、さし足にて、ツイと向うへ逃げて入  
る。とバカ／＼にて橋が／＼より、操、走り出る。十  
兵衛、こちらへ来て、行き當り、十兵衛、後身振り上げ  
る。操、驚び退き

操 ア、申し、昔聞な者ではござりませぬ。お助けなさ  
れて下さりませいなア。

ト驚へ／＼云ふ。十兵衛、この聲を聞いて

十兵 さり云ふは構どのか。

操 お前は十兵衛さま。申し、御清本と聞きましたゆ  
ゑ、あるにもあられず、後を慕りて参りましたわいな  
ア。

ト十兵衛、振り寄つて

十兵 コレ。

トちよつと驚く。

操 エ、すりや友之進を。

十兵 悪人の積を絶つがお國の納まり。この上は一先づ立  
退き、采圖の詮議。

操 そんなら、此まゝ。

十兵 構どの、ござれ。

ト操を連れ、花道へ行きかける。兩車、人替する。ち  
まつと拍へる。この時、足に躓さはる。十兵衛取つて  
一本を操にやり、その身も取つて、傘さし、向うへ行  
きかける。と花道より、三十郎、着流し、一腰、三尺  
帯にて、火繩を持ち出て、花道にて行き合ふ。十兵衛、  
傘を傾け指れ違ふ。また操、傘を傾け指れ違ふ。三十  
郎、火繩を振り、不思議さうに見る。十兵衛、操を連

れ、ツイと向うへ走り入る。三十郎見返り、心得ぬこ  
なしにて、本舞臺へ来る。ト橋が／＼より、半左衛門、  
上下大小にて、家乗箱提灯持ち、外に家來付き並ひ出  
る。

半左 御身は花園三十郎でないか。

三十 信父者人、半左衛門どのでござるか。

半左 采圖紛失に依つて、國邊との儀、承知いたしました。

三十 その儀につき、國境まで参りしところ、怪しからぬ  
胸騒ぎ、心ならず立歸つてござりまする。

半左 御身は花園三十郎でないか。

三十 信父者人、半左衛門どのでござるか。

半左 采圖紛失に依つて、國邊との儀、承知いたしました。

三十 その儀につき、國境まで参りしところ、怪しからぬ  
胸騒ぎ、心ならず立歸つてござりまする。

半左 ト半左衛門、提灯持ち、其所らを見て見やれ。殊の外に血糺がしたうてある。

三十 誠し。

ト火繩を振り、秀太郎が死骸を見て

ヤア、こりや秀太郎さま、何者の仕業。

トこなし。半左衛門、橋の方へ血のしたゝりを見て

半左 家來、水中を吟味せい。

家來 ハツ。

ト川中へ飛び込み、直ぐに主水が吹替への死骸を身いて上がる。三十郎、見て大きに驚ろき

三十 ヤア、こりや親人。數ヶ所の手疵。

ト半左衛門、提灯差出し

半左 誠に見者人。

ト兩人立寄り、いろく介抱して

三十 コレく親人、お心を慥かに、親人様。

半左 止めまで刺したれば、最早必死。ホイ。

ト此うち、三十郎、死骸の懷中を改め見て

三十 こりや、印可の巻も。

ト思ひ入れあつて

すりや、今の時摺れ違うた曲者。程は行くまい。うぬ。

ト花道へ駈け出す。敵の面體存じて居るか。

三十 イヤ、その儀は。

半左 何所と云ふ日當もなく、血氣に速り、急く場所では

あるまい。先づく待て。

三十 エ、口惜しい。

ト向うを見て無念のこなし。この時、下手の松へ源内、種ヶ鳥を持ち出て窺ふ。

半左 ホ、驚ろきは、さこそく。敵の面體、名宙字は知

らずとも、印可を所持する者が、取りも直さず父の敵

首尾よく本望。

ト帯せし脇差を差出し

磯瀧の重代、相州正宗の一振り。當座の餞別。

ト差出す。三十郎、ツカく行て、脇差を取つて

三十 ハツ。

ト裏身になつて戴く。鶏啼く。

半左 最早鶏明。

ト松の木へ目を付けて

増離る、夜明け鳥。正宗の切れ味。

ト松の木へ手裏劍打つ。源内落ちて、三十郎へ切つて

かゝる。立廻りにて、三十郎、抜打ちにボンと切る。出かした。出立。

ト三十郎、血を拭ひ、半左衛門、膝叩く。チョンと拍子木。

三十 ハア、。

ト平伏する。半左衛門、感心のこなし。

よろしく暮

### 三段目

水口立場の場

草津追分の場

粟津松原の場

役名——三輪要之助。磯瀧半左衛門。名取川龍介。

十兵衛妹、お貞。代官、野口藤馬。馬士、長六實ハ

馬淵軍兵衛。同、鼠喰ひの七。同、鼠腹の八。同、

もみ籠の市。同、傳助。馬しやく市兵衛。傾城、

瀧岡大夫。若黨、五藏。中間、八介。花園三十郎。

造り物、向う淺黄藤、上の方、札の辻、橋が、リ、

松原道中、水口立場の體、表の内より、龍介、元服

にて、着付け、黒股引、脚絆、一腰差し、葛籠を背負ひ、柄に手をかけ、真中に立つて居る。捕り手四人、龍介を取巻いて居る。代官野口藤馬、擬勢して居る。バタ／＼にて、暮明く。

龍介 狼藉な。こりや、なんとするのぢや。

藤馬 黙り居らう。奥州三輪家に抱への角力取り、名取川

龍介と云ふ事は隠れない面體。所持の荷物に詮議がある。此方へ渡せ。

龍介 角力取りが諸國を穢くは、天下一統のお定まり。所持の荷物を詮議とは、なんの詮議ぢや。

藤馬 其方が主人と頼む、三輪要之助、系圖紛失の科、その荷物に忍ばせたは、要之助であらうがな。

龍介 イ、ヤ、こりや身共が所持の雜物、若殿の行くへは知らぬ。

藤馬 達てあらがはば、うぬ共に召捕つて吟味する。者ども、ソリヤ。

捕手 腕廻せ。

龍介 聊爾いたすと手は見せぬぞ。

藤馬 踏みつけて、纏ぶて。

捕手 捕つた。

ト左よりかゝるを、トン／＼と投げて、一腰を抜く。皆々橋が、ムリへ逃げるを追ひ入る。と在郷唄になる。

向うより、三十郎、三度の奔らへ、絆纏、胸當、手甲、股引、脚絆、草鞋がけにて、大木を持ち、菅笠を掲げ出る。後より馬方、蟲腹の八、従いて出て

八 コレ／＼親方、石部まで乗らんせんかいの。

三十 イヤ／＼、馬も駕籠も望みにはない。

ト云ひ／＼、本舞臺へ来る。

八 さう云はずと乗つてやらんせ。コレ、戻りぢや、酒手で追ひやんすわいの。

三十 ハテサテ、往でも戻りでも望みにはない。嫌だと云ふのに。

八 嫌かいの。エ、負けるのに乗りはさんせいで。ト云ひ／＼、三十郎を胡散さうに見い／＼、橋が、りへ入る。三十郎、立場の札を見つて

三十 ホウ、こりや水口の立場ぢや、思ひの外早う變つた。トばた／＼にて、橋が、りより、龍介、走り出て、三十郎に行き當る。拔身を掲げて居るゆゑ、三十郎身構へる。

龍介 イヤ、御免下されい。狼藉者を防がんと存じて、思

はぬ粗忽、眞平

ト云ふうち 顔見合せ、働り。

三十郎さまではござりませぬか。

三十 其方は龍介、存じよらぬ對面と云ひ、仔細があらう。どうぢや。

龍介 されば、その様子と云ふは。ト内にて、アリヤ／＼と云ふ。龍介、橋が、りを見て

南無三。ト荷物を見中へ下ろし

大切の荷物、しつかりとお預け申した。ト云ふうち、捕り手皆々、引返し出て

捕手 ソリヤ、道がすな。

ト龍介へかゝる。龍介、拔身を振り廻す。皆々向うへ逃げるを、龍介追うて入る。合ひ方になり。三十郎、見送る。こなしあつて

三十 大勢の侍ひが、龍介を透がさぬやらぬとは。トちよつと思案して

何はしかれ、預かつた荷物、待ち合はして戻さどなるま

い。イヤ／＼、この間に一服いたさう。ト荷物に腰かけ、招火打ちにて貰のみ、こなしあつて



ア、イカサマナア、光陰は矢よりも早く、國元を立退きしを數ふれば、もう一年。親人を人手に討たれ、その敵の名も知れねば顔も知れず、鎌倉に諸方の入込み、もし手がかりもあらんかと、大谷小路屋敷町、爰に半月、待所に一月、これをと云ふ手筋もなければ、上方へ志し、雲を日當の一人旅。國に残りし母人又は妹も、今日や敵を討ち討つるか、明日はめでたい便りを聞かうかと、母人と云ひ妹が、待ち渡されてござるであらう。ハテ、思ひ違せば。

トはら／＼と泣く。こなしあつて、氣を若へ、あたりを見で

ハ、ハ、ハ、ほつとりと笑して居れば、思はず氣後れがして、さまざまの事を。ハ、ハ、ハ。

ト憂ひを笑ひに隠す。思ひ入れあつて

イヤ／＼、思ふまい／＼。それはさうと龍介めが、もう黙りさうなものぢや。

ト云ふうち、葛籠の内バタ／＼する。

其今の物言は。

トあたりを見る。又バタ／＼する。不思議なこなしにて、片腕へ掛き、あたりを見で

面妖な。

トばた／＼する。葛籠に目を付け、この内ぢやと云ふこなし。

ハア、これぢやな。大切の荷物と龍介が今の詞は、ハテ心得ぬ。

ト思ひ入れあつて、葛籠を明けける。ト内より要之助、着流し、一腰にて出る。三十郎、驚ろき

ヤア、御主人要之助さま。

要之 三十郎、無事にあつたか。

三十 不思議の御對面、先づ／＼。

ト要之助を上へやり、こなしあつて

何からお尋ね申さうやら、拙者出國の後、お家の安否承はりたり存じても、望み叶はぬ其うちは歸國も叶はず、先づは御壯健の體、如何ばかりか。

トあたりを見て

見ますれば、お供廻りもなく、殊には斯く荷物の内に、お忍びなされしは、如何でござるな。

要之 其方が國を立退きし節、采圖の紛失、百日の御容赦

ありしに、その日延べは切れたれども、采圖は知れず、親人は武將よりの疑ひか、火急のお召しにて在京な

され、また某は佐竹の屋敷へ預けの身の上。安閑とも暮らされず、糸圖の談議、親人の安否も聞かんと、龍介を召連れ、密かに國を出でしところ、追手かゝつて今の難儀。葛籠の内より其方の聲を聞きしゆゑ、斯く對面に及ぶのぢやわいなう。

三十 ムウ。すりや大殿には武將よりのお召し、京都の首尾がお家の善悪。ハテ、心元ない。

要之 それにつき、其方の伯父半左衛門、佐竹どの、名代に都在番、これへ便つて、親人の様子を聞かうと、それゆゑ上方へ心ざし行くのぢやわいの。

三十 すりや伯父者人には。

ト思案して  
左様ござらば、拙者めもお供いたし、お目にかゝつて何かの様子。

要之 心がかりは龍介が身の上。

ト向うを見る。ト戸家の内にて、驛路の音聞える。三十 十郎こなしあつて、要之助を葛籠へ入れる。向うより馬方傳助、駄賃馬を追うて出る。

傳助 ハテ、こなほつ腹めは、キリ／＼と歩みさらせやい。

ト云ひ／＼、本舞臺へ来て、三十郎を見て親方、戻り馬ぢやが、乗らんかいの。

三十 幸ひ／＼、ちと急ぎの道中、身共は乗らんでもよい。この荷物を付けて、草津まで負うてはくれまいか。

傳助 合點でござんす。ぢやが、荷付けても、こなんを乗せても、値は違はぬぞや。

三十 オ、サ／＼、値は如何程もくれう。サア、早く／＼。ト葛籠を馬へ付ける事、しか／＼あつて

傳助 草津までは六里。なんと清手ぐるめに八百貫はうか。

三十 サア、よいてや。早く負へ／＼。

傳助 ぬいかえ。替へ手があつたら替へさして下んせや。ト云ひ／＼後向きながら、小便するこなし。

三十 ハテサテ、早く負はぬかいやい。

傳助 忙はしない和郎ぢや。腹の内に、十月より居たの。

三十 ハ、ハ、ハ、イヤ、随分と急いでくりやれ。

傳助 サア、ごんせ／＼。

ト傳助、馬追ひ、三十郎付き添ひ、捨ぜりふ云うて、橋が／＼入る。と内にて順禮明になる。

故郷をはる／＼爰に紀三井寺。

ト唄ふ。直ぐにめりやすくなる。向うより、雛鶴、伊達なる着付けに笈摺をかけ、杖、笠、草鞋。お貞同じく笈摺、杖、笠、草鞋にて一腰差し、二人とも足の痛む見得にて、連れ立ち出て、花道に立ちとまり申し雛鶴さま、長の旅路で、さぞお御足が。

雛鶴 わたしよりはお貞さま、お前がお疲れてござんせう。てい 笈が水口とやら申す所。マア、あれへ行って、一休み致しませう。サア、お越しなされませ。

「花の都も近くなるらん。

トこれにて、兩人本舞臺へ来る。常の合ひ方になる。お貞、あたりの木の葉を集め敷いて

マア、この上へお座りなされませいなア。ほんに、味な糞とお前のお世話。殿様のお後を慕うて、此やうに尋ねれど、今に巡り逢はぬと云ふは、よく、因果な身の上おやわいなア。

てい そりやわたしとても同じ事、三十郎さまと夫婦になり、その目も替はず親御の御最期。國元を出給ひて一歳餘り、便り音信のないは、今に敵の在所が知れぬか。旅の幸書にお頼らひでも出てないかと、國に居ても幾瀬の家じ、あるにもあられず、後を慕ひ、此やうに尋ねて

も、何所をせうどに尋ねると、思ひ廻せば遺る瀬ないやら、悲しいやら、この上頼むは神佛のお力。わたしが一念でも、巡り逢はぬと云ふ事はござんすまい。見れば餘程日も隔けたさうな。マア、三里程行けば石部とやら、今書は其所で一宿いたしませう。サア、マア、お越しなされませいなア。

ト兩人行かうとする。右臺詞のうち、松原より、軍兵衛、馬方の形、鼠喰ひの七、蟲腹の八、もみ電の市、昔々馬方にて出て、この時軍兵衛、目配せする。

三人 女中、待たんせ。

ト前後に立ち塞がる。お貞、雛鶴を圍ひ、こなしあつて

七 賢合ひの二人連れ、二方荒神でぼッ立てようが、おいらが馬へ

三人 乗らんせぬかえ。

てい これは又目角の悪い。見やしんす通りの願禮の二人連れ。馬籠籠に乗るやうな、榮耀な旅ちやござんせぬ。こりやア目鏡が違ひましたわいなア。

ト軍兵衛、前へ出て

軍兵衛 イヤ女中、さう云はずと乗つてやらんせ。

てい ヤア、こなさんは。

軍兵 お貞、雛鶴、二人ながら久しいなア。

トお貞、柄に手をかけて、キツと構へて

てい 勇御前最期の日より、行くへの知れぬ馬淵軍兵衛。

・其方には詮議がある。好い所で逢うたなア。

トきつとこなし。

軍兵 以前は惚れて居たお貞、もう色氣は止んでしまつた。

皆の者見たか。そちらな御妻を垂井の青墓へやつたら、

一廉に買ふであらうぞよ。

皆々 旨い仕事ぢや。

軍兵 そればかりぢやない。ずつしりと路銀もあらう。ち

つと合力してもらはうかい。

トお貞が懐中へ手を出つて、よろしく突き退け

てい 狼籍すると、手は見せぬぞ。

軍兵 面倒な。疊んでしまへ。

皆々 合點ぢや。

ト取り廻す。お貞、キツとなる。雛鶴取りつき

雛鶴 コレ、必らず短氣を出して下さんすなえ。

ト輝ふ。お貞、前後へ氣を配り

てい 大事ござりませぬ、其方達も、こりや軍兵衛に荷着

入したのぢやな。

皆々 そんなものぢや。

軍兵 三十郎に所縁のある奴等は、何奴でも生けては置か

ぬ。われを殺らして雛鶴は大金にする。キリ／＼くたば

れ。

七 マア、その御妻を。

ト雛鶴を引立てにかゝるを、お貞取つて投げる。もみ

障の市、轟腹の八、段々にかゝるを、一々取つて投げ、

ヒラリと抜く。

皆々 ソリヤ、短刀を開き居つたぞ。

軍兵 うぬ。

ト薪籠櫃にて打ちかゝる。お貞、皆々を相手に烈しき

マテ、いろ／＼あつて、ト皆々、花道へ逃げる。お

貞追うて入る。雛鶴、残り

雛鶴 コレ、長追ひせずと、早う戻つて下さんせいなア。

トうろ／＼する。七、小蔵より出て

七 こりや、してやつた。うせう。

ト雛鶴を引ツかたげ、橋が／＼りへ走り入る。返し、右

の松原左右へ引分ける。



造り物、真中に煮賣り茶屋、床几を幾つも直しあり、橋が、りに立て石、矢橋乗り場まで三丁と記しあり

上の方に一里塚の置あるべし。  
ト道長とまると、在郷隊になる。橋が、りより、陣仕  
九郎兵衛、荷荷物をかたげ出る。茶屋より、おじやれ  
の小山、小萬、出る。

小萬 九郎兵衛どん、その荷物はどうぢやえ。  
九郎 イヤ、これは海の木から大津の間屋までやる荷物ぢ  
や。乗合ひの積み合せにして、やつてもらひませう。

ト荷を馬へ下ろす。

小萬 たつた今一艘出たが、次の船でも大事ないかえ。

九郎 大事ない／＼。おりや間屋まで行て来る。それまで  
に受取りの判を頼む。

ト手紙を渡す。

小山 合點ぢやわいなア。

九郎 荷物を頼んだぞや。

ト橋が、りへ入る。小萬、小山、茶店へ入る。向うよ  
り、軍兵衛、馬方三人走り出て

馬方 ても、丸らい術妻めぢや。

軍兵 たりとう、ふけらして退けた。

ト橋が、りより、仕合せの吉、やけどの十、馬方にて  
出て

吉 長六、爰に居るか。いま日川の傳助が、馬に荷を付  
けて通つたが、われが頼んだ花園三十郎。

十 そのざぶを水口まで付けて来て、荷の内には彼の二  
才めが隠んで居るまで、とつくりと頑張つて置いた。

七 長六、その二才や三十郎とやらを、殺らしたら金に  
でもなるかよ。

軍兵 なるとも／＼。まだ大金になるは、これぢや。

ト懐中より、印可の巻き物を出し

こりやコレ、要心流の印可と云うて、彼の和郎に預かつ  
た代物。遣ッつけ圓元の便りがあつたら、我れらは大名

わいらも知行をやるぞ。

皆々 そりや忝ない。

市 アレ／＼、向うから傳助めがうせるぞよ。

八 ほんに、傳助ぢや。

軍兵 わいらは云ひ合はした通りに、コリヤ。

ト鍋腹の八に聞く。

八 合點ぢや。皆の者、來い。

ト軍兵衛、應病口へ、その外橋が、りへ別れ入る。在

郷唄になる、向うより、傳助、馬追うて出る。後より

三十郎、付いて出る。

傳助 けたいの悪い。石部で替へさしてくれたがよい。ア  
夕ぼこしもない。

三十 此奴が、くどい奴ぢや。急ぎの荷物ぢやに依つて、  
替へる事はならぬと、道々も断わるではないか。駄賃も  
その積りで料簡を付け置いたぞ。くどくと慾の深い奴  
ではあるぞ。

傳助 替へさして下んしたら、一杯儲けるわいの。

三十 ハテ、慾な奴ぢや。われはきつい錢が好きぢやな。

傳助 錢は飯よりも好きぢやぞ。

三十 ハ、ハ、ハ、ハ。サア、早く追へ。

ト本舞臺へ来る。小萬、小由、出て

兩人 傳助どん、早かつたなア。

傳助 どうぢや。君達、ねつから逢はぬな。

兩人 お客なら、上げまして下さんせいなア。

傳助 親方、草津の立場でござんす。マア、休まんせ。

兩人 座敷が明けてござんすわいなア。

三十 イヤ、其やうな暇はない。これで一服いたさう。

ト眞中の床几にかける。傳助、荷を下ろす。荷ガタガ

夕するを、三十郎見て

ヤイ、そりやマアどう致した事ぢや。大切な荷物、  
なぜ静かに致さぬぞ。

傳助 エ、ちつとがた付いたとて、仰山和郎ぢや。ご

つ、云はんすないの。

三十 此奴が。

ト云はうとする。

小萬 申し、御料簡なされませ。あの人は、あゝした人で

ござりまする。

小由 傳助どん、こなさんも悪い。大事の荷物、静かにさ

つしやれいなう。

傳助 なんぼうおれが静にしても、この畜生めがバタつき

さらすに依つてぢや。イヤ又、何が入つてあるやら、ア

夕重たい葛籠ではあるぞ。

トぼやき、荷物を解き、店へ下ろす。

三十 ハ、ハ、ハ、ハ、聞きやれ。おのれが不調法は吐かさい

で、荷物の料のやりに吐かす。ハ、ハ、ハ、ハ。

小萬 傳助どん、マア、腰かけて眞でものまんせいなア。

傳助 オ、どうで酒吞ましさうな和郎とは見えぬ。水な  
と貰うて呑んで居やうわい。

ト下へへたり、其のむ。

三十 イヤモウ、口の悪い奴ではある。ナニ女中、大津までの船は、もうあるまいかの。

小萬 ハイ、今朝からもう十四五艘出ましたが、もそつとしましたら、又あるでござりませう。

三十 道ツつがあるか、然らば船の方を片間借り切つてく  
りやれ。

小萬 畏まりました。

小由 申し、風呂もござりまする。御膳を上げませうか  
え。

三十 イヤ、石帯で支度した。風呂も止しに致さう。

ト在郷になる。橋が、りより、飛脚早介、狀箱持つ  
て

早介 エイサツサ。

ト云ひく出る。

ヤレ、一息に六里餘り走つた。ドレ、一服

くゆらして行かうか。

ト上方の東に願かける。小由、茶酌んで行く。

女子衆、もう何時であらう。

小萬 されば、もう八ツ下りでもござりませう。

早介 ムウ、もし今朝あたり、佐竹の御家老が同勢を連れ  
て、この海道をお通りではなかつたか。

小萬 それは、扇の御紋の殿様でござりまするかえ。

早介 オ、さうだ。

小萬 その殿様は、昨日晝頃委をお通りであつたが、昨夜  
は土山泊り、今宵は桑名のお泊りと聞きましたわいな  
ア。

早介 すりや、昨日お通りであつたか。南無三、身共は、

その佐竹の御家老、磯瀬半左衛門さまへ、京都より火急  
に御用。二日路遅れたれば、餘程急がずばなるまい。茶  
の錢は爰に置くぞよ。これは又遅れた事ぢや。エイサア  
サ。

ト狀箱をかたげ、花道へ走り入る。三十郎、右早介が  
話しを聞き、こなしあつて、小萬を招き

三十 只今聞けば、佐竹の御家老が、昨日この所をお通り  
とあるが、いよく相違はないか。

小萬 ハイ、何やら奥州に揉める事があつて、二本松の殿  
様が、京都へお召しであつたとの噂でござります。

三十 オ、さうだ。

小萬 その殿様が、京の首尾がようて、佐竹の御家老と一

繼に連れ立つて、本國へお歸り遊ばすのぢやと、供の衆の話しでござりましたわいなア。

三十 すりや大殿には、京都の首尾好く、御本國へお歸りとな。エ、忝ない。

ト安堵のこなし。ちよつと思案して

ムウ、夜前身共は關泊りであつたが、土山のお泊りとあれば、道中でお目にかゝりさうなものぢやが、何所間違つたやら、ハテ残念な。何にもせよ、道を引返してお目にかゝらねばならぬ。ナニ馬方、今から夜通しに隨分と急いだら、桑名へは何時頃に着かうかな。

傳助 されば、桑名までは二十里に餘つた道、夜は長し精出してほッ立てたら、五ツ頃には追ひつかうかい。

三十 先々を馬でやりつけて行たらば、例へ桑名は間違つても、鳴海か池鯉鮒では追ひつけぬと云ふ事はあるまい。馬方、なんと引返してやつてはくれまいか。

傳助 馬は丈夫なり、やる事は合點ぢやが、何を云ふも盡しぢや。

三十 ハテ、駄賃の儀は、如何程なりと、望み次第にくれらわサ。

傳助 廉う負けて七貫五百ぢや。

三十 今云ふ通り、何程でも遣はすわサ。

傳助 そんならやりませうかい。

三十 得心なら、早く荷物を付けて、サア、早くやれ早くやれ。

傳助 まだ朝飯のこの腹で、一里でも歩いたら、目が舞ふわいの。四五杯も搔ッ込んでやりませう。

三十 それは歩き、餅でも買つて、した、めたがよいわサ。

傳助 ハテイノ、おりやおれぢやが、この畜生めが、空腹では足が立ちませぬわいの。

三十 然らば早く致せ。

傳助 合點でござんす。コレ、一膳盛つて下んせ。

小萬 アイ、

ト橋が、りの方より、馬しやく市兵衛、走り出て

市兵 傳助ぢやアないか。

傳助 オ、市兵衛どのか。

市兵 好い所で逢うた。サア、馬を引いて、ちやつと來い。

來い。

傳助 イヤ、おりや通しの談合で、桑名まで追はにやアならぬ。



ト此うち、小薄、勝を持つて来る。傳助、下へたつて  
飯を撰ツ込む。

市兵 エ、桑名どころかい。真田のお大名が京へのお上  
りで、馬も徒歩荷も、昨夜からさび渡したぞよ。それに  
おのれは仕事で桑名へ行かうとは、さうはならぬ。サア  
サア、早くい。

ト傳助を引ッ張るを、三十郎、留めて

三十 待ちやれ。お身は馬しやくと見えるな。

市兵 左様でござりまする。

三十 お身にちと無心がある。これへ來やれ。

ト市兵衛を少し上手へ連れて行て

今度名渡りのお方に違ひついて、お渡し申さればなら  
ぬ馬がある。大抵は行ぢや。あの馬をやる事がならず  
ば、外の馬なりとも世話をしてくりやれ。お身を男と見  
かけて頼み申す。

市兵 イエ、なりませぬでござりまする。今云ふ通り、

お大名のさし馬、石部草津の間に馬と云うては一疋もご  
ざりませぬ。徒歩荷でなりとやらつしやりませ。

三十 イヤサ、一星二星なれば徒歩荷でもやるが、コレ、  
手を合はして頼む程に、どうぞ聞入れてはくりやるまい

か。

市兵 ハテサテ、手を合はしても足を合はしても、大名の

さし馬、一疋でも不足すると、高貴が上がりますわいの。

三十 ハ、ハ、ハ、何を云ふやら、身も往來をしつけて、

道中の事は存じて居る。なんの馬の一疋二匹を、お身の

自由にならぬと云ふ事はあるまい。平に頼む程に、どう

ぞ。

市兵 エ、しち諷い。嫌ぢやわいの。貴様のやうな安符

ひに、用を調へてやつて、大事の御用が候けると、首道

具にならうも知れぬ。飯を阿房くさい。サア、傳助、キ

リ、來んかい。

傳助 忙しない。咽喉に詰まるわいの。

ト矢ッ張り飯を食つて居る。

市兵 ハテサテ此奴は。

ト傳助を引ッ張る。三十郎、市兵衛が胸倉を取つて、

キツとなる。

コ、こりや、なんとするのぢや。

傳助 親方を、どうしやるぞいの。

三十 借りか、つた馬、否でも應でも借らにやア措かぬ。

此方の頼みを聞かぬのみか、悪口吐かせは、武士の役ぢ

や。

ト反り打つて呪む。市兵衛、怖がる。三十郎、氣を替へ

ハ、ハ、ハ、斯う云へば、角目立つて悪い。機嫌よう、どうぞ貸してくりやるまいか。

ト市兵衛、怖がつて尻込みする。

傳助 嫌ぢや。親方が得心せにやア貸す事はならぬ。もうおれも嫌ぢや。

市兵 お大名の御用には替へられぬわいの。

三十 お大名も身共も武士に違ひはない。侍ひに一旦貸さうと吐かして、今更やるまいとは不届きな奴の。

傳助 サア、其所が大きな大名と、わり様のやうな安い侍ひと、一口に云はれるものかい。しつこい和郎ぢやわいの。

トつかうどに云ふ。三十郎ムツとする。此うち臆病口より、軍兵衛、馬を引き出る。橋が、り蟲腹の八、出る。軍兵衛、三十郎が荷物を取つて、八に渡す。八、引ツかたげ走り入る。

市兵 ハテ、口手間を入れる事はない。来いやい〜。  
ト傳助、馬を追うて市兵衛行かうとする。三十郎、二

人を引き戻し、立ち塞がり

三十 云はして置けば、重々の法外。是非ともやらぬか。

ト傳助、三十郎を引退けるを、三十郎、傳助が首筋を持つて取つて抛る。市兵衛寄るを、同じく取つて抛る。

市傳 こりや、投げ居つたぞよ。

三十 投げたばかりぢやない。殊に依つたら命がないぞ。

兩人 猪口才な。なにを。

トまた掴みかゝるを取つて投げる。傳助、市兵衛、三十郎に掴みかゝるを、軍兵衛ツツと出て引分け

軍兵 コリヤ、待て〜。相手はお侍ひぢや。マア〜、待て〜。

トいろ〜留める。

傳助 なんぼ侍ひぢやて〜、無理な事吐かすわい。

三十 何が無理ぢや。

軍兵 サア〜、ようござりまする。お前のお顔は、わたしが立てまする。

三十 其方が譯を立てるか。

ト三十郎、軍兵衛が顔を見て恟り。

三十 ヤア、わりや馬淵軍兵衛。

軍兵 三十郎さま、國遠を知られた後で、おれもちつとし

たしくじりて、屋敷をふけて、今ではこの海道の馬士。  
あげ又の長六と云ひやんす。

三十 ムウ。して、われがこの場を譲をせうとは。

軍兵 こなさんの云ふ業名までは、おれが馬をやりませう。

三十 すりや、其方が馬を。

市兵 コリヤ、長六、さし馬が切れてあれば、われが馬も、やる事はならぬぞよ。

軍兵 ハテサテ、さう氣強うは云はぬものぢやわいの。傳よ、この人の荷物を、おれが馬に付けて進ぜい。

傳助 エ、まごくと邪魔な事ぢやなア。

ト最前九郎兵衛が持つて来た荷物を、軍兵衛が馬へ付ける。軍兵衛も手傳ひ、しかくあつて

衛兵 サア、行かんせ。

三十 何かに隙取つた。サア、道うてくれ。

市兵 傳助はさし馬の方へ來い。

傳助 あつたら錢を取逃がしたわい。

軍兵 ほてッ腹め。行きさらせ。

ト軍兵衛、荷の付けし馬を引いて、花道へ行く。傳助、馬を引き、市兵衛と一緒に橋が、りへ行きかける。三

十郎、荷物を見て、こなしあつて  
三十 待て。長六傳助待て。

ト荷物へ手をかけ

身が荷物は何所へやつた。

軍兵 何がいの。

三十 イヤサ、この荷物は替つてある。

軍兵 なんぢや、荷物が替つた。

傳助 ほんに替つてある。

三十 ハテ、心得ぬ。

トあたりを尋れる。

軍兵 エ、面倒な。おいらもさし馬の方へ行かうわい。

市兵 さうせい。

ト軍兵衛、荷を下ろさうとする。三十郎、兩人が胸倉を取つて引寄せる。市兵衛、ウコくする。

三十 動いたら、ぶち放すぞ。ヤイ長六め、うぬ、荷物は何所へやつた。眞直に吐かし居らう。

ト突き放す。

傳助 コレく、きよろくと何云ふのぢや。馬の脊にある間は、馬方の預かり物。下ろした先々まで番をして居やうかいの。こな和郎は、さまぐの靈言をまつるわい。

ト三十郎、反り打つて呪む。

なんぢやい〜。

ト尻込みする。

軍兵 何もびこつく事はない。馬をやつてくれいと、とこ  
吠えるに依つて、不便さにおれが、馬を貸してやつたの  
ぢや。荷の替つた事を、おれが知らうかい。

傳助 長六よ。あの面を見い。落武者が夕立に遭うたやう  
な。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

軍兵 ほんに、替つた贓物ぢやわいの。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

ト三十郎、反り打つてきつば廻し、また荷物を尋ね、  
ウロ／＼する事あつて、それより市兵衛が側へ行て

三十 馬しやく、お身が存じて居やうが、あの荷物は大切  
な荷物ぢやに依つて。

市兵 エ、知りませぬわいの。

トつかうどに云ふ。三十郎、こなしあつて、また軍兵  
衛が側へ行き

三十 以前は圓元の朋友、そのよしみもあれば、どうぞ其  
方が料簡を以て、只今の荷物を。

軍兵 どしつこい。嫌ぢやわい。

トあちら向く。三十郎、また傳助が側へ行き

三十 ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、お身は最前から氣の好さうな男ぢや。

どうぞ只今の荷物を無事に出してくりやれ。お身を男と  
見かけて頼む程に、これサ〜。

ト傳助、唾吐きする。三十郎、ムツとして、キツとこ  
なしあつて

ムウ、こりや何か。うぬ一つになつて、身が大切な。

軍兵 オ、さうぢや、荷物の中は、われが主の要之助。

傳助 見付け次第に殺らしてしまへと、さる人に頼まれ、

この草津までそびいて來たのぢや。

市兵 大金になる荷物と聞いて、おいらも符腰ぢや。

三十 ムウ、すりや、要之助さまと知つた上で。

三人 おいらが仲間へ擔にしたのぢや。

ト三十郎、いろ〜こなしあつて

三十 もう絶體絶命ぢや。

ト傳助を抜打ちに切り下げ、續いて軍兵衛へかゝる、  
市兵衛へ。この間に軍兵衛逃げて入る。と裏面よ  
り馬方大勢、棒を持ち出て

大勢 ソリヤ切り居つた。喧嘩ぢや〜。

ト喧ましう云ふ。早太鼓になる。傳助、蘇袍だらげに  
なつて、店先にある出刃を取つて、三十郎にかゝる。



兩人夫々テあつて、三十郎、傳助を切り倒す。馬方皆皆、三十郎を棒づくめにする。三十郎、切り拂ふ事、いろ／＼あつて、ト々皆々逃げざるを、橋がよりへ追うて入る。向うより、龍介、拔刀にて走り出る。臆病口より、お貞、同じく拔刀にて走り出て、兩人行き合ひ

龍介 お貞さまでござるか。

龍介 龍介どのか。

龍介 見れば、白刃を携へてござるが。

龍介 殿様や夫々三十郎どの、後を慕ひ、雛鶴さま諸とも國

元を出しとて、水口に於て多くの馬方が、狼籍を防ぐ

間に、雛鶴さまを見失ひ、此やうに尋ねるぢやわいな

り。

龍介 拙者とても、お供いたせし若殿様、折よく三十郎さ

まにお目にかゝり、若殿をお預け申し、追手の奴ばら防

ぐうち、三十郎さまの道に遅れて、尋ね／＼て思はずこ

れへ。

龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介

龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介

龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介

龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介

龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介 龍介

龍介 主人の身の用心元ない。ござりませ。トお貞を引立て、橋がよりへ走り入る。返し、右道具

引分ける。

造り物、奥深に浪幕、この前一面に並木の松、粟津

の原、松原の景色。橋がよりの松蔭に、乗り物一挺

直しあり、真中の松を小楢に取つて、三十郎、拔身

を構へ居る。馬方大勢、皆々、棒にて取巻いて居る。

始終早太鼓にて、大々テのうちに、三十郎、荷物

を尋ねる心、いろ／＼あつて、ト々皆々を切り捲り、

橋がよりへ追うて入る。と臆病口より、軍兵衛、走

り出る。橋がよりより、嗣七、雛鶴を引ツかたげ出

る。

嗣七 長六か。コリヤ、街妻を渡すぞ。

軍兵 大儀ぢやあつた。次手に葛籠を。

嗣七 合點ぢや。

ト引返し入る。

雛鶴 コレ、どうするのぢやぞいなう。

軍兵 喧ましろ吐かすな。われを賣つて大金にするのぢや。

うせらう。

ト引立て行かうとする。この時乗り物の後より、半左衛門、着付け野袴、旅羽織、大小、江戸頭巾にて、ズツと出て、軍兵衛を廻き廻す。雛鶴、半左衛門を見て

雛鶴 ヤア、あなたは。

軍兵衛 その女郎め。

ト寄る所を、半左衛門、脇腹ちよつと當てる。軍兵衛ウンとこける。合ひ方になる。半左衛門、雛鶴に囁く。

雛鶴 エ、。

ト物云はうとするを押へ、右の乗り物へ連れて行て、雛鶴を入れ、思ひ入れあつて、のめつて居る軍兵衛が懐中を改める。一卷を取出し、心得ぬ體にて、聞き見えて、恠りするこなしあつて、巻き納め懐中する。ト橋が、りに人音するゆゑ、こなしあつて、捕り纏出し、のめつて居る軍兵衛を縛り上げ、手拭を取つて猿轡に嵌め、片脇の松の木へ括り、少し片脇へ寄ると、バタバタにて、蟲腹の八、右の葛籠をかたげて、鼠喰ひの七も付いて出て、荷を下るして

七八 長六はどうした。  
慥かこの道へ来た筈ぢやが。

ト尋れる。此うち軍兵衛、氣の付きし體にて、いろいろ眺く。兩人、見付けて

八

ヤア、長六が括られてけつかる。  
ト繩を解きに行かうとする。半左衛門、ズツと出て、二人をボンと切る。長六、恠りして懼ふ。半左衛門、拔身を納め、葛籠を明ける。内より要之助出て

要之

ヤア、其方は。  
ト云ふを押へ、ちよつと囁き、乗り物の側へ連れて行て、戸を明ける、と内より

雛鶴

ヤア、殿様か。

要之

其方は雛鶴。

雛鶴

逢ひたかつたわいなア。

ト要之助を乗り物の内へ引入れる。半左衛門、戸を開して、こなしある所へ、バタ／＼にて、橋が、りより、三十郎、抜刀にて走り出る。

半左

其方は三十郎でないか。

三十

ヤア、伯父者人か。

ト云ふうち、葛籠を見付け、さてはと云ふこなしにて、内を改め、要之助居ゆゑ、恠りして

南無三。

ト駆け出さうとする。

半左 コリヤ待て。要之助さまは御安泰にて、この所に在

ますがや。

ト乗り物を明ける

要之 コレ、身に凶事はない。落ちついてたもいなう。

三十 なんと。

ト乗り物の内を見て

すりや、御別條はなかりしか。チエ、忝ない。

隼鶴 申し、危い所を、あなたのお情 お禮申して下さん

せいなア。

三十 すりや、隼鶴どのにもこの所へ……御別條なくて安

堵いたした。

ト落ちつくこなしにて、刀を納め

併し、心得ぬは伯父者人。京都をお立ちあつて、夜前は

土山、今晩は桑名泊りと承はり、お日にかゝつて、要之

助さまをお預け申し、本國の安否も承はらんと存せしと

ころ、馬方どもが非常の口論。是非に及ばず右の仕合せ。

して、この所へお越しありしは、仔細はしあつての儀で

ござりまするか。

半左 この度、武將家の仰せに依つて、京都へ召されし三

輪右京の太夫さま、系圖紛失の越度はあれど、代々軍功

の家筋なれば、没收させんも本意ならずと、系圖の詮議

は追つて。百日の日延べ仰せつけられ、即ち某在番の暇

叶ひ、歸國の折柄、右京さま同道。然るに要之助さまを

亡き者にせんと、悪者どもが荷籠の櫛子、目付けの者よ

り知らせしゆゑ、某が同禁は、右京の太夫さまに相添へ、

桑名へ遣はし、某一人道を替へて、この所へ來りしも、

要さまを救はん爲。其方も安堵いたしたであらう。

ト云ふうち、半左衛門の家來出て、乗り物に引添ひ居

る。三十郎、こなしあつて

三十 大殿も安穩、系圖の詮議も今百日の御容赦とござれ

ば、先づは安堵。彼の系圖を所持する奴が、疑ひもなき

敵の手がかりと存じて、雲を目當。東海道を經巡れど

も、今に於て在所知れれば、これより上方を尋ね、中國

西國筋へも立越えるでござらうが、もし國元に手がかり

の儀もござらば、伯父者人、萬事お頼み申しまする。

半左 身も心を付け窺ふところ、心得難きは安達友之進。

サア、これとても證據を取り得ねば、荒立てるは變の基

この場は此ま。

ト思ひ入れあつて、最前の一巻を出し

これをくれう。

ト抛る。三十郎、取つて、手早く開き、ちよつと小口  
を見て

三十 ころや、要心流、親人が所持の印可。

半左 所持する曲者は、即ちこれに。

ト軍兵衛を教へる。

三十 さてこそ。

トきつとなる。軍兵衛、ウロ／＼する。三十郎、半左  
衛門へ向ひ

段々の御厚志。

半左 禮には及ばぬ。さらば。

ト唄になる。半左衛門、顔にて家來に行けとする。ハ  
ツと云うて、乗り物昇き上げる。これに半左衛門引添

ひ、家來付いて向うへ入る。此うち軍兵衛、もう叶は  
ぬと云ふ見得にて、舌を喰ひ切り死ぬる見得。ぐんに

やりとなつて居る。三十郎、向うを見送り居て、軍兵  
衛を見て

三十 印可を所持すると云ひ、うぬには詮議がある。サア、  
うせう。

ト引立て来て、猿轡を取る。死んで居るゆゑ、いろいろ

る改めて

ヤア、ころやコレ舌を喰ひ切り相果てし體。ハテ、是非  
に及ばぬ。

トいろ／＼こなしあり。バタ／＼にて、橋が、よりより、

龍介、お貞を連れ、走り出て、三十郎を見て

龍介 三十郎さまか。

てい お懐かしうござりますわいなア。

三十 お貞、其方は何ゆゑこれへ。

トお貞、思ひ入れあつて死なうとする。三十郎、留め

て

コリヤ待て。何ゆゑ相果つる。

てい 殿様の行くへを諒ね、お供した雛鶴さまを、敵の手  
へ渡したれば、長らへられぬこの身の云ひ譚。

トまた死なうとする。

三十 コリヤ、マア待て。

ト留める。

龍介 最前預けた若殿は、馬方どもが擒にせうがや。

三十 なんと。

龍介 この龍介が侍ひ格に取立てられしは、大殿の大意。  
その御公達を預かりながら、のめ／＼敵の手に渡し、な



んと六ひ譯がござらう。大殿への申し譯。さうぢや。

ト死なうとする。三十郎、兩方を留めて、

三十 待て。兩人とも死ぬには及ばぬ。お二方は御堅固にござるわい、やい。

兩人 エ、。

三十 一旦擔にならせ給へど、恙なく取返して、伯父者人の乗り物で、只今御本國へ。

兩人 すりや、御兩所とも。

三十 無事にお渡り。兩人ともに安堵いたせ。

兩人 エ、、忝ない。

ト二人とも落ちつくこなし。

龍介 この上は、其書様のお供を致し、龍討ちの助太刀を致さう。

てい わたしとても舅御の仇、あなたに引添ひ、やわか本意を遂げいで置かうか。

三十 ヤア、愚かく。敵に出會ひ、助太刀頼む三十郎で

ない。殊に以て名所さへ知れざる敵、女童は足手纏ひ、龍介、其方はお貞を誘ひ、國元へ立歸れ。女房も、身共

に引添ひ心勞せんよりは、國元に在します母人の御介抱、孝心を盡しくれるが、助太刀よりも我群の貞女。サ、

サ、早く歸れ。

てい イエ、なんぼどのやうに仰しやつても、只さへ物憂き旅の御難儀。助太刀は叶はずとも、せめて起臥しの御介抱を、お許しなされて下さりませいなア。

三十 まだ、夫婦の道に心迷ひ、義理ある母の御介抱を、打捨て、も大事ないか。

てい サア、それは。

三十 不届きな奴。

トきつと云ふ。

龍介 御尤ものお詞。サア、お貞さま、お立ちなされませい。

トお貞、ワツと大泣き。三十郎、思ひ入れあつて、お貞を引立て、空葛籠の中へ入れて、蓋をする。

これは。

三十 所詮開入れぬ未練の女。龍介、其方は一刻も早く。

龍助 御意に任せ、一先づ本國へ。

ト葛籠を吞負ふ。

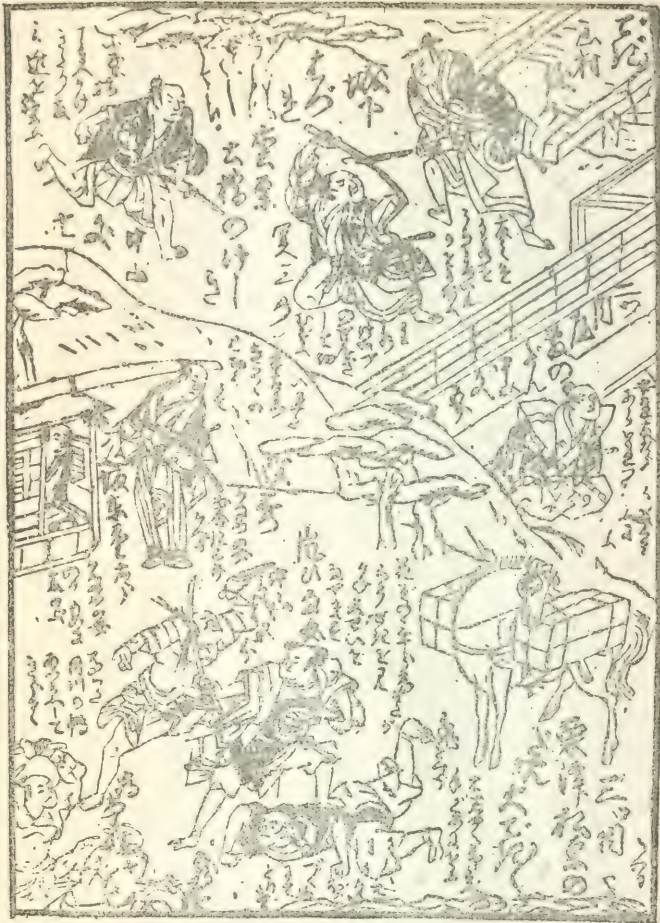
三十 くれ、頼むは母の介抱。

龍介 お氣遣ひなされるな。然らば此ま、

三十 早う行け。



の 演 初



繪 番 附

龍介 おさらば。

ト龍介、向うへ走り入る。三十郎見送る。と所知入り  
 探めて聞える。三十郎振り返り、臆病口の方を見込み、  
 こなしあつて、松の蔭へ隠れる。と所知入りキツパリ  
 となる。臆病口より、先手、次に旅乗り物、鎗持ち、  
 挟み箱持、法被の侍ひ、随分大勢引添ひ、花道の方へ  
 行く。後より茶辨當、香籠持ち付いて、各々戸屋の内  
 へ入る。はるか後より五藏、法被の侍ひにて、酒に酔  
 うたる體にて、八介、奴にて、五藏を引ツ張り出る。

八介 サア、來をろろ。

五藏 今の振り袖のは、とんだ美しいものぢや。

トめれんのこなし。

八介 此奴が、熟柿ほど酔うてけつかる。

五藏 ナニ、おいらは酔ひはせない。今の茶屋へ、もう一  
 遍來ない。

ト八介を臆病口の方へ引ツ張る。

八介 嫌だ。お供に連れてはならない。お主は勝手にしろ。

ト五藏を突き飛ばして、向うへ走り入る。五藏、其ま  
 まこけて居る。小蔭より、三十郎、出て花道を見送り、  
 こなしあつて

三十 今のは慥かに、安達友之進が下郎の八介、彼奴が付  
 添ふからは、疑ひもなき友之進が同勢。上方へ上る體は  
 正しく一物、ムウ。

ト手を組み、キツと思案のこなし。ト五藏、越きて  
 五藏 どうだ八介、さう云はずと來なさい。

ト三十郎を八介と取違へ引ツ張る。三十郎、五藏を見  
 て、キツと思ひ入れあつて、五藏が法被を引取り着て、  
 また笠を取り、着ようとす。五藏、めれんにて

五藏 ハ、ハ、ハ、こりやどうも云へないわい。

トまた取りつく。胸腹を當てる。五藏、タチと後  
 へ寄る、三十郎、笠を着る。テヨンと拍子木。五藏、  
 ぐんにやりとへたる。三十郎、笠の紐を締めながら、  
 向うを見込む。キサミ拍子木、

幕

#### 四 段 目 西陣織屋の場

役名 花園三十郎。安達友之進。下郎、八介。

青木久馬。番頭、嘉六。織屋おきぬ。織子、お  
 みさ。實八十兵衛女房。織屋儀助。實ハ小栗栖十



兵衛。

造り物、三間の間、二重舞臺。上の方、障子屋體、向う赤壁、納戸口、次に世話襖、押入れ、橋が、りの門口、丸太格子、この後に藏、次に中戸口、柿の暖簾に織屋と自上げの家名、すべて西陣織屋の體。幕の内より手代嘉六、大帳を前に置きかけ、硯にて帳つけて居る。二重舞臺に吳服屋三人、花色の風呂敷かたげ、腰かけて煙草のんで居る。下男、一人藏よりせんぐりに帶地、又は反物縮緬羽二重など持ち出して居る見付。座に仲仕一人、荷造りして居る。琴座にく幕間。

下男 ハイ、帶地と反物と藏から出しました。

嘉六 オ、よし／＼。ホウ、これは皆、ようお出でなさ

れました。

三人 この間の註文は織り上がりしましたかの。

嘉六 ハイ／＼、これが皆さうでござります。

吳一 ドレ／＼、わしが註文は羽二重三反。

吳二 わしは黒天鷲絨の帶地三本。

吳三 わしは縮緬二反。

三人 これでよし／＼。

下面々風呂敷に包む。

嘉六 ハイ／＼、そんなら伊勢甚さまが羽二重三反、福庄

さまが黒天鷲絨三本、奈良藤さまが縮緬二反でござりま

すかな。

ト云ひ／＼帳へつける。

仲仕 ハイ、この荷物は、どこへ参じまするな。

嘉六 そりや大坂の三井と大丸、伊豆倉岩城、この四軒の

註文。荷造りがよくば、直ぐに挽き後へ出してもらは

ら。

仲仕 ハイ／＼、畏まりました。

三人 もうお暇申しませう。

嘉六 ようお出でなされました。

ト唄になる。吳服屋三人、風呂敷かたげ、橋が、りへ

入る。仲仕も荷を一つに擔ひ、橋が、りへ入る。下男

は中戸口へ入る。この唄終つて、向うより久馬、摺緬

がし頭にて、裏附きの繼上下、御所侍ひの拵らへにて

下男一人連れ出て、門口をツツと入り

久馬 おきぬ女郎は在宅かな。

嘉六 ホウ、これは青木久馬さま。

久馬 嘉六、この程は逢ひ申さぬ。

嘉六 ようお出で下されました。マア、お通りなされませい。

久馬 然らば、許しやれ。

ト上へ通り座る。嘉六、箕盆持つて行く。

コリヤ、其方は屋敷へ歸り、身はどうで隙が入る。暮れに及び迎ひに參れ。

家來 ナイ、畏まつてござりまする。

ト家來入る。

久馬 時に嘉六、右の誂らへ物につき、おきぬ女郎にちよつと御意得たいが。

嘉六 ハイ、お家は今日、志しの日に當りましたゆゑ、寺參り致されました。

久馬 ムウ。すりや他行とな。

ト不興な顔にて云ふ。

嘉六 左様でござりまする。

久馬 して、右の品は、出来いたしたか。どうぢやく。

嘉六 されば、その儀でござりまする。お誂への品は赤地の錦一表、外に紫羽二重二十反、地紋の織入れ。御案内の通り、錦は高機で織りまするゆゑ、隙もいりまする。

また紫羽二重は、糸の染め上げが至極大事でござりまする。この間の日和加減の上がり、隙取りまするも無理ではござりませぬゆゑ。

久馬 コレサ、その口上は後月から聞き飽いて罷りある。元來此方の姫君、東國三輪家と御縁組み、後の月お與八れの筈なれども、三月は花の宴とあつて、お延しなされ、當月は卯月、即ち卯の葉重ねとあつて、是非ともこの月御婚禮に相極まる。それに今に於て織り上がらぬのなんのと、なんぞ様子あつてか。錦一表は姫君のお小袖、また紫羽二重二十反はお側女中達の衣服。一つ缺けても御婚禮の妨げ。なにか、こりや御所侍ひと傷つて、等閑に致すか。お上へ對してこの青木久馬、申し譯がない。サア、今渡せ。受取らう。

嘉六 御尤もでござりまする。段々延引いたしました事ゆゑ、お腹立ちはお道理でござりまするが、此方も更々知

才はござりませぬ。どうぞお間に合せませうと、夜を日

について大勢の者どもが、精を出して居りますれど、何を申しましたも、糸の染め上がりが遅うござりましたに

依つて。

久馬 まだ、同じ事ばかり、云うて居て事が済まうか。

して、今日中に出発上がるか。

嘉六 サア、それが出来ませれば、お断わりにも及びませ  
ねど、どうも今日と申しましては。

久馬 然らば明日か。

嘉六 どうぞ明後日まで。

久馬 ヤア、ならぬ、御屋か何ぞのやうに、明後日と  
は何事ぢや。もう一寸も待たれぬ、今渡さずばこの通り、  
天奏へ訴へ、武家の仕置に申しつける。さう心得て居れ。

トずつと立つを留めて

嘉六 これは又、御短氣な。マア、お待ち下さりませ。

久馬 イ、ヤ、候成せ。

嘉六 これは又情ない。コレ、書來てお留め申してくれん  
かいの。

女皆 アイ、合點でござんす。

ト中戸口よりおいと、おまき、おくら、おより、おり  
く、おかせ、おみさ、右七人、織女の拵らへにて走り  
出て、久馬が手に籠り

女皆 マア、御堪忍なされませいなア。

ト久馬、皆々を見て

久馬 この女どもは。

嘉六 これが皆、織女でござりまする。

久馬 ムウ、すりや、これが西陣の織子と云ふのか。

嘉六 左様でござりまする。

久馬 ドレ。

ト皆々の顔を見て、おみさの顔を見て、につたり笑ひ  
ムウ、織子の中でも、いつちこの女が好い器量ぢや。

トおみさが手を取る。嘉六、中へ分け入り

嘉六 お氣に入つたら、どれなりと差上げまする。

トおかせを突きつける。

久馬 エ、此奴がいけるものかい。

ト突き飛ばす。

かせ オ、なんぢやぞいなア。荒々しい。

ト腹立てる。

久馬 コリヤ、其方が留めるなら、とまらぬ氣ではないわ  
いやい。

トおみさの方へ行かうとする。嘉六、久馬を突き退け  
嘉六 こりや、何さつしやりまする。

久馬 ハテ、何せうにや。この女どもを身が目通りへ出し  
て、誂らへ物の、断わり云はすのではないか。

嘉六 さうでござりまする。

久馬 ぢやに依つて、この女が斷わりなら、ぞつこん聞く  
心ぢやわいなう。

ト父おみさが側へ行かうとする。嘉六また突き退け  
嘉六 これは又、情ない。モし、久馬さま、お前様も、ち  
と憐なまつしやりませ。侍ひだてら、女子さへ見ると、  
びろ／＼と、好い加減に馬鹿を盡さつしやりませい。

久馬 此奴が／＼、御所侍ひを捉へて馬鹿を盡すなどは、  
嘉六、ちと團外であらうぞ。

嘉六 でも、おみさに、てんがうさつしやるに依つて、云  
ひますわいの。

久馬 てんがうしたら何ぢや。ありやこの家の織女でない  
か。身が留めればあれが仕合せ。連れ歸り手かけに致す。  
おみさとやら、爰へ来い／＼。

トまた行かうとするを留めて

嘉六 イ、ヤ、外の者は勝手次第にさつしやれ。おみさば  
かりはならぬぞ。

いと ヨウ嘉六さま、おみさどののばつかりを  
女皆 庇うて様／＼。

久馬 ハ、ア讀めた。さては嘉六、おみさをたべて居る  
な。

嘉六 イ、ヤ、さうではなけれど。

女皆 イエ／＼、さうぢや／＼。

みさ コレ／＼、お前方、てんがう云うて下さんすないな

ア。

嘉六 阿房口叩くと殿り歪めるぞよ。

皆々 でも嘘ぢやなし。

みさ アレ、まだいなう。

久馬 おのれ、ちやんと巧い事をし居つた。その返報に、

ちよびとおみさを。

トおみさに抱きつく。

嘉六 エ、ならぬわいなう。

ト取つて突き退ける。

久馬 そのならぬ所を。

トまた来る所を

嘉六 此奴にさつしやれ。

トおかせを突きつける。

久馬 此奴がいけるものかい。

ト突き飛ばす。

かせ イヤ、こな様は／＼。

ト久馬を追ひかける。



久馬 コリヤ、おみさ。

トおみさを捉へに行く。

みさ 否でござんすわいなア。

ト逃げるを久馬、追ひかける。

嘉六 ならぬぞ〜。

ト驚愕する。

皆々 嘉六どのおみさどのおかし、しつ〜しの山

慮えて。

ト皆々手を叩き、おだてる。

嘉六 イ、ヤ、おのい等は。

ト胸になる。久馬女形、皆々を追ひかけ騒ぐ。皆々手

を叩き、おだてながら逃げ廻る。久馬おみさを捉へに

行く。おみさ、舌がり逃げ廻る。この模様にて、こつ

ちやになる所へ、向うよりおきぬ、寺参りの體。おつ

る、小女郎にて襷紗包を持ち附いて出る。おきぬ、

向へズツと入る。久馬、おみさと取違へ、おきぬに抱

きつく。おかせ、久馬と思ひ嘉六に抱きつく。おみさ

女形、皆々おきぬを見て

皆々 ヤア、お家様。

ト云ふ辭に嘉六、おかせを見て突き飛ばす。おきぬ、

久馬を突き退けて

きぬ オ、これは青木久馬さま。

久馬 おきぬ女郎。

嘉六 今お歸りなされましたか。

きぬ サイナウ、今日は町の參會で、旦那どのは留守ぢや

に依つて、わしが内を出る筈なけれども、小さい時に

死なしやんした、母様の祥月命日ゆる、こなたに留守を

頼んで、ちよつと寺へ參つて來たが、嘉六、皆の者も、

續場を下りて、何を騒がしうして居やるのぢやぞいな

う。

嘉六 イヤサ、これは。

きぬ これは。

嘉六 サアアノ。

トうぢ〜云ふ。

女皆 ハイ、これはアノ嘉六どんと

みさ ア、コレ、又かいなア。

きぬ 嘉六とおみさが、なんとした。

女皆 ハイ、嘉六どんとな、おみさどんとなア。おかし。

嘉六 しつし。

ト目顔で押へる。

女皆 しの山越えて。

ト手を叩く。

嘉六 エ、何咄かすぞい。

ト握り拳振り上げる。女形皆々逃げ退く。嘉六、握り拳振り上げながら、おきぬと顔見合せ

ハ、。イヤ、お家様、斯うでござりまする。彼の詠らへ物が遅いと云うて、久馬さまが又せがみにお出でなされましたゆゑ、段々お断わり申しまして、明後日キツとお間に合せませうと申しまする。あなたは、イ、ヤ待たぬと御立腹なされて、お歸りなされませうを、女子衆が仕事場から飛んで来て、マア〜お待ちなされませいと留めまする。イ、ヤ去ぬると仰しやる。去なされぬと云ふ。イヤ去ぬると、それで立ち騒ぎましたのでござりまする。

きぬ ほんに、久馬さま、さぞお待遠にござりませうが、もう今宵と明日の晩と、夜なべに致しましたら、定めて機が上がるであらう。ナウ女子衆。

女皆 アイ、上がりますわいなア、

きぬ あの通りでござりますれば、どうで明後日まで、お待ちなされて下さりませうならば、有り難う存じまする。

久馬 イヤモウ、こなたが内に居て断わり云へば、なんの身共が違背いたさうぞいなう。

きぬ それはマア、お嬉しう存じまする。

久馬 ムウ、嬉しうござるか。

きぬ ハイ。

久馬 イヤモウ、こなたさへ嬉しいと思つてなれば、身共は。

ト碎けて、また皆々を見て大悦に存ずるてや。

ト懇懇に云ふ。

嘉六 左様なら久馬さま、もうお歸りなされませ。明後日出來上がり次第。此方から持参いたしましたせう。

久馬 イヤ、段々延引いたした事ゆゑ、此ま、立歸つては御主人への申し譯がない。今宵暫らくこれに居て、女子どもが手ぬかりなきやうに、夜なべを見聞いたさう。

きぬ それは御苦勞様でござりまする。

久馬 なんの、苦勞な事はない。夜なべを見聞するも、有やうはこなたの返事を。

トおきぬにしなだれかゝる。おきぬ、氣の毒なこなしにて、紛らす心にて

きぬ コレおつる、その土産、皆に遣つてたもいなう。

つる アイ。コレ、皆様、この袱紗包みの中は、お家様のお土産でござんす。

皆々 これはマア、お忝ならござりまする。

嘉六 ソレ、土産を貰うたら、仕事場へ行って、一精出した精出した。

皆々 アイ、合點でござんす。

つる そんなら仕事場へ行って、土産を分けて上げう。サア、ござんせ。

きぬ 夜なべまでは、まだ間もござりまする。久馬さまに

は、マア奥へ。

久馬 参らう。サア、おきぬ女郎も一緒に奥へ。

トおきぬの手を取るを振り放し

きぬ マアお先へ。

久馬 ハテ、一緒にござれいの。

トまた手を取る。

嘉六 ハ、たつた今までおみさを追ひ廻して、又お家

様までを。

女皆 おかししつし。

久馬 なにを。

ト腹立てるを押へて

きぬ ちやつと仕事をしやいなう。

女皆 アイ。

きぬ サア、お出でなされませ。

ト唄になる。久馬、おきぬに氣味合ひしながら奥へ入る。おきぬ、こなしあつて後より入る。女形皆々、中戸口へ入る。おみさも入らうとするを、嘉六手を取り

嘉六 おみさ、マア………待ちや、下に居やう。

ト兩人下に居る。合ひ方になる。

おみさ、われは胸懸な者ぢやぞよ。よもや忘れはせまい。

去年の霜月差入れに、横町の口入れの長兵衛が所へわれ

が来て、どこへなりと下女奉公にやつてくれいと云ふ。

幸ひおれがそこに居合して、見る所が襦はづれと云ひ器

量と云ひ、菩薩廻しにするは惜しいものぢやと思つたゆ

ゑ、内へはおれが合ひ槌打つて、マア、此方の内へ飯炊

きに抱へさせ、先づ下機から覚えさせ、上機は云ふに及

ばず、おれが高機へ上がつて、上からどうせい斯うせい

と、ほんにモウ手を持つて教へぬばかり。精一杯に世話

焼いたらこそ、今では下地から居る女子どもより、やつ

とわれが手利きになつて、僅か半季立つか立たぬうち、

黄紫きんむらさきから金襴きんらんまで織おるやうになつたは、誰たれが庇かかちや。こりや皆みな、嘉六かろくさまのお庇かかちやぞよ。そのおれが云いふ事こと、なんで聞いてくれぬ。元來もとよりわれを此方こちの内うちへ引人ひきいれたも、おれが云いふ事こと聞いてもらはう爲ためぢや。それになんぢややら、びんくくと、そりやあんまりぢや。氣強きづよいと云ふものぢや。おみさ、どうぞ叶かなへてくれやい。

トしなだれる。おみさ、こなしあつて

みさ ほんにモウお前の深切しんせつ。仇疎あつかかに存かんじませぬわいなア。

嘉六 サア、存ぞんじませずば、應おと云いうてたもいなう。

みさ どうぞ御恩ごおん送おくりに、お前まへの仰おつしやる事ことを。

喜六 オ、く。

みさ 得心とくしんいたしませうと存ぞんじまして。

嘉六 オ、く。

みさ いろくと思案しあんいたしますれど。

嘉六 どうでも否いなか。

みさ 御堪忍ごかんにんなされて下くだされませ。

嘉六 措おきあがれ。これ程事ほどことを分わけて、頼たのむのに得心とくしんせぬは、コリヤ、わりや、どうでも男おとこがあるな。

みさ イ、エ、なんのマア。

嘉六 男おとこがなくば、なぜ得心とくしんせぬ。

みさ サア、それはアノ。

嘉六 得心とくしんせぬは、男おとこがあるのぢやな。所詮しよせん兎うや斯かう云いうたとして、男おとこのある者ものに口叩くちくは、糠ぬかに釘くわぢや。われを世話世話するも、おれが云いふ事こと聞いてもらはう爲ためばかりぢや。その云いふ事ことを聞きかぬからは、此方こちの内うちに置おく筈はずがない。口入くちいれの長兵衛ちやうべゑが所ところへ連れて行いて、手渡てわたりする。サア、立たて。

みさ そんなら、わたしにお暇ひまが出来ますかえ。

嘉六 さればいやい。おれが口先くちさきで、よしなに云いうたればこそ、われがこの内うちに足あしがとまつた。その取次とりつぎしたおれが云いふ事こと聞きかぬからは、抛なり出ださうと叩たたき出ださうとおれ次第しだい。どなたも點ちを打うつ事はならぬ。サア、來きい。

トおみさを立た引ひてにかゝる。

みさ それでも、今爰いまこゝを出でましては。

嘉六 サア、去いにともなくば、應おと云いふか。

みさ サア、それは。

嘉六 否いななら抛なり出ださうか。

みさ サア。サア。得心とくしんするか。



みさ サア。

嘉六 サア／＼。

嘉六 エ、埒の明かぬ。うせあがれ／＼。

トおみさが手を引ッ張り、引摺り出さうとする。おみさ、こなしあつて、嘉六が手に獅噛みつく。

みさ 堪忍して下さんせいなア。

トこなしあつて云ふ。嘉六、氣味合ひあつて

嘉六 堪忍せいとは、どう堪忍するのぢや。

みさ わたしや爰の内が去にともない。どうぞ堪忍して、

置いて下さんせいなア。

トこなしあつて云ふ。

嘉六 そんなら聞くか。

みさ アイ。

嘉六 イヤモウ、聞いてさへたもれば、何しに去なさうぞ

いの。そんなら、いよ／＼さうぢやぞよ。

みさ アイ。

ト俯向く。

嘉六 そんならさうと、初手から云へばよい事を、荒々し

い詞を遣はして、わが身もさぞ氣に障つたであらう。堪忍してたも。わが身さへ得心してたもれば善は急げと云

ふに依つて

ト云ひ／＼おみさに抱きつき、折しこかさうとする。

みさ ア、コレ、なんとさしやんすぞいなア。

嘉六 なんとせうにや。わが身、得心ぢやないかいなう。

みさ サイナア、得心は得心でござんすけれど。

嘉六 得心なら得心のやりにして居やいなう。

ト身を揉む。

みさ さうぢやと云うて、まだ日も暮れぬに減相な。マア

マア、退いて下さんせいなア。

ト無理に突き退ける。

嘉六 ハテ、大事ないわいやい。お侍とおきぬさまは、

奥に話してござる。女子どもは襦にかゝつて居る。旦那

は留守なり、丁度上首尾ぢや。晩まで待たれぬ。ツイ爰

で爰で。

ト悪身にて抱きつきにかゝる。

みさ イ、エ、見附けられたら悪いわいなア。

嘉六 でも、斯うしこつて來たら、見附けられても、構はぬ構はぬ。

トおみさにかゝるを、突き退けて逃げる。嘉六、悪身

にて追ひかけ廻り捉へる。おみさ、表を見て

みさ アレ、旦那様が。

嘉六 ヤア。

ト表を見る。おみさは嘉六を突き飛ばし、奥の障子の内へ逃げ込む。

嘉六 おのれ、やり居つたな。

ト續いて障子の内へ行かうとする。納戸よりおきぬ、ズツと出る。嘉六、悔りして飛び退く。

きぬ 嘉六、その形は、なんぢやぞいなう。

嘉六 ハイ、こりやアノ。

トぐづくと云ふ。

きぬ 猥らなぞや。

嘉六 エイ。

きぬ 其方を實體な者と思ひ、織物の支配を云ひつけて置くのに、おみさを捉へじやらくと。

嘉六 ハイ。

トしよげる。

きぬ 日のうちから追ひかけ廻り。

嘉六 ハイ。

きぬ それで大勢の女子の指圖がなるか。

嘉六 ハイ。

きぬ マア、爰へおぢや。

嘉六 ハイ。

きぬ ハテ、おぢやと云ふのに。

嘉六 ハイ、。

トおづくと下に居る。

きぬ 今改めて云ふには及ばねど、父さんのござんす時、

丁稚奉公におぢやつた其方、長々勤めて居やるうち、父

様もお過ぎなされ、今では後見やらかんぼうやら、店方

で云へば番頭役の其方。不埒な身持ちでは、大勢の女子

どもが、其方の詞を用いぬぞや。さすれば此方の内が立

たぬ道理。マア、其方は、どう思うて居やるぞいなう。

嘉六 ハイ、。

きぬ 重ねてキツと嗜なみや。と云ふ所なれど、嘉六、よ

うおみさに惚れてたもつたなう。

嘉六 エイ。

きぬ 眞實おみさに惚れやつたが定なら、わしが取持つて

やるわいなう。

嘉六 とんと何が何やら、どぎくとして分らぬ物の仰し

やりやう。今までしかつべらしう叱つて置きなう。

きぬ サア、今のやうに云うたは、わざと其方を消氣らさ

うと思うて。

嘉六 そんなら、おみさに惚れましたは。

きぬ わしへの忠義。オ、出かしやつたく。

嘉六 とは又、どうでござりまするな。

きぬ おみさは旦那どのと、念頭して居やるわいなう。

嘉六 エ、イ。

きぬ サア、わしがちつと気が、りいな事があるに依つて、

心を付けて見れば、兎角あのおみさが事と云ふと、旦那

どのか何かにつけて最辰さしやんすに依つて、わしがフ

ツと気が附いたは、大勢の女子のうちで、いつちおみさ

の器量がよいに依つて、旦那どのが目を付けて、最辰さ

しやんすと思ふから、其方も見やる道り、外の女子ども

へは、わしが指圖して、髪に油もひつたりと、毎日櫛の

齒も入れさせ、紅白粉で作り立てさせ、おみさ一人は油

もつけさせず、髪身仕舞ひさせねども、矢ッ張り美しい

やら、旦那どのが、コレおみさくと、何でもあれに云

ひつけさしやんすゆゑ、おみさも又、旦那が呼ばしやん

すと、横入りさいて、アイノと、兎角氣に入るやうに

するわいなう。ありや、どうでも念頭して居やしやんす

ト嘉六、横手を打ち

嘉六 したり、黒星、とんとそれに違ひはござりませぬ。

きぬ 其方も何ぞ、心當りの事が、あるかや。

嘉六 ござりませぬ。たつた今もおれが云ふ事聞かにな、

爰の内には置かぬ、出て行けと手を取つて引摺り出さう

と致しましたれば、どうぞ爰の内に置いてくれいと、涙

を流して頼みまする。あのやうに爰の内に居たがるは、

正しく旦那どのと、譯があるに違ひはござりませぬ。

きぬ そんなら、いよ／＼さうかいなう。

嘉六 さりとも／＼。モシ、まだ途方もない事を見付けて

置きました。

きぬ 何をいなう。

嘉六 モシ、おみさは折れ込んでござりまする。

ト取んで居ると云ふ仕方する。

きぬ ヤア、どうしてそれを知りやつたぞいなう。

嘉六 サア、彼奴には私しが、初手から惚れて居りまする

ゆゑ、どうぞして歪めてくれうと、毎晩々々念がけます

れど、ちやんと大勢の女子の眞中へ入つて寝まするゆゑ、

小半季餘り、まだ一度も本望とげませぬが、一昨日の晩

に、おみさが腹が痛いと言うて、宵から二階で寝て居り

ました。外の女子どもは、皆夜なべをして居りまするぢや。天の興へ、今宵こそ。へ、へ、仁體ながら二階へ夜這ひと出かけまして、おみさが寢て居る側へ、ソツと参りましたら、よう寢て居りまする。サアしてやつたと……イヤ、この後は申しますまい。

きぬ なげにや。

嘉六 お前様の前で、あんまりな話しでござりますわい。

きぬ 大事なわいなう。云うて聞かしや。

嘉六 そんなら、お評しなされませ。

きぬ ちやつと云やいなう。

嘉六 そこで寢所へズツと入りましたら、目を覺しましたして、私しを突き退けて、起さ直つて、アタ減相な、何さつしやると申しましたゆゑ、ハテ、わが身は腹が痛いと云うて寢て居るに依つて、ちよつと擦つてやらうと思つてと申しましたら、イエ／＼、もう精は納まりました、人が見れば悪い、ちやつと彼方へ行けと申しますけれど、折角よい所へ仕掛けた事ぢやに依つて、私しはかみずりになつて居りまする。彼方へ行かにもや大きな聲すると申しますゆゑ、是非なく悄々と戻りましたが、モシ、その時手に觸つたは、慥かに腹帯。ありやもう五月と云

ふ事はござりませぬ。七月位に見えましたて。

きぬ 何を云やるぞいなう。おみさが取なり。ねつからお腹の大きな様子には見えぬぞや。

嘉六 そこが彼の、背孕みと云ふもので、産月までもとんと知れるものぢやござりませぬ。腹帯のやうな糺ぢやござりませぬ。しかも左の方に固まりがあつたからは、男の子に違ひたい。正しう旦那の胤に極まつてござりますぞえ。

きぬ それでも、どうも合點のゆかぬ事があるわいなう。

嘉六 なんてござりますえ。

きぬ 旦那どのが此方へござんしたは五月前の事。また今、其方の云やるには、おみさかお腹は、もう七月程ぢやと云やるが、それではどうやら、月が違ふぢやないかいなら。

嘉六 ア、まだな事仰しやりますわいの。ありや旦那どのが此方の内へ、聲に來ぬ先から、念頃して居るのでござりますわいなア。

きぬ ヤア。

嘉六 コレ、モシ、初手から二人が念頃ぢや。おみさをわざと奉公人にして、一月も前から入込ませて、後へヌツ



と入り舞して、よもやと云はせて置いて、内證はチンチン。なんと巧い算段でござりませうがな。

きぬ そりやアノ、ほんかいのく。

嘉六 ほんかいのどころぢやござりませぬ。男の心はおててこてん。あるかと思へばトツチンく、變るが早いわいなア。

きぬ エ、さうとは知らず、驚されたが口惜しい。コレ

嘉六、どうぞ仕舞は、ないかいなうく。

嘉六 ござりますす、時に、必らず旦那を扱へて、これ

程も情氣がまじい詞仰しやりますなえ。ハテ、高がおみさと手が切れさへすりや、よいぢやござりませぬか。

きぬ さうぢやわいなう。

嘉六 なんでも旦那が戻らしやつたら、おみさがする事を、一つく小みづを云うて、目に入つた埃のやうに、くしやくしやくと仰しやりませ。ところで旦那が何のかのと、おみさが其處をするワ。そこを扱へて情氣の序踏さ。そこでおみさの腹解を聞いて、旦那の事を思ひ切らせ、我らの女房、お節と旦那は謹ましい御夫婦仲、兩方とも千歌草茂、なんとめでたい、好い思案でござりませうがな。

きぬ ほんに、こりや好い思案ぢやわいなう。

嘉六 今でも旦那が歸られたら、随分大事にかけて、美しう物を仰しやりませ。必らず情氣がましい詞つきなされますなえ。

きぬ そりや合點ぢやわいなう。

嘉六 とつくりと證據を扱まへぬらちは、なまなかな事云ひ出して、向うからけじめ取られたら悪うござりまする程に、よう氣を靜めて物仰しやりませ。必らずお急きなされませうなえ。

きぬ サア、なんぼう靜めて居やうと思つても、腹が立つゆゑ、心がまだくするわいなう。

嘉六 サア、そこを堪えるが、男の心を矯め直す辛抱でござりまする。

きぬ 主は主とも思はうが、マア、おみさが憎いわいなう。

嘉六 サア、それもおみさと旦那と、手が切れさへすりや、お前様の病扱けでござりまする。

きぬ サイナウ、そこを男の意地立て、おみさと念頃して居るが、何としたとて思ひ切る事ならぬと云はしやんした時には、何と云うたらよからうぞいなう。

嘉六 お待ちなされ。こいつは思案ものぢやわいなう。

きぬ 好い智恵出してたもいなう。

嘉六 ドレ。一つ智恵袋を振はうか。

きぬ 早う思案してたもいなう。

嘉六 ニ、忙しない。思案の出る間がござりますわい。

ト手を組み思案する。此せりふのうち、向うより儀介、着附け羽織袴、一本差し。庄吉、丁碓にて風呂敷包み持ち附き出る。右兩人せりふの間に本舞臺へ来る。  
好い思案が出ました。

きぬ ちやつと聞かしてたもいなう。

嘉六 コレ、旦那がさう強う出たら、斯う仰しやりませ。

トおきぬに囁く。儀介、門口へ来て

儀介 戻つたぞよ。

トずつと内へ入る。兩人、悔りして飛び退く。儀介、恸りする。

兩人 そりやこそな。

儀介 エ、なんぢやい。

兩人 サア、こればな。

儀介 そりやこそとは、何がそりやこそぢや。

兩人 サア、そりやこそと云うたは。

儀介 云うたは。

きぬ アノ、それ。

嘉六 イヤ、斯うでござりまする。あなたが今日、町の參會にお出でなされました後で、お家の案じ。なんと嘉六、

もうお歸りであらうかいたう、されば、何時でも參會の

戻りは、夜に入つて川東で大立て。併し、此方の旦那は、

よもやそんな、うてんすな事もなされまい。大方日の暮

れには、お歸りでござりませう。但し夜に入らうか、ど

うか斯うかとお噂申して居りました所へ、思ひがけもな

うお早うお歸りなされましたに依つて、そりやこそお歸

りぢやと申したのでござりまする。

儀介 ムウ。それで今の、そりやこそか。

嘉六 ハイ。

儀介 ハテ、御山な、そりやこそであつたなア。

嘉六 へ、へ、へ。

ト道従笑ひして

コリヤ庄吉よ。今日は旦那のお供で、定めて御馳走に合

うたであらうたう。

ト脇道へ紛らすこなし。

庄吉 アイ、きつい御馳走で、私しもお相伴いたしまし

た。

嘉六 エ、けたりい事をしたなア。

儀介 イヤモウ、きつい馳走であつたが、何もかも鹽辛うて、きつう咽喉が乾いた。コシヤ庄吉よ、茶一つ酌んで来い。

庄吉 ハイ、く、畏まりました。

ト納戸へ入る。此うら儀介、羽織脱ぐ。おきぬ、羽織脱む。儀介、袴脱ぐ。此うらおみさ、茶臺に茶碗載せ持ち出て

みさ ハイ、お茶上げませう。

ト儀介へ差出す。おきぬ、羽織脱みさして、おみさが持つたる茶臺引き取り、儀介へ差出し

きぬ ハイ、お茶上げませう。

ト儀介、茶碗を取つて茶を飲む。おみさ、手持ちなく氣の毒のこなにて、儀介が腕を滑りし袴を取つて疊みかけるを、おきぬ又、袴を引き取り  
且那の袴、誰れが指圖で疊むのぢや。面妖、且那どの、事と云ふと差出て。ドレ、其方へ退いて居や。今から且那どの、事、差出やつたら聞く事ぢやないぞ。ズツと其方へ退いて居や。なんぢやなう。アタ阿房らしい。  
ト腹立てながら袴を疊む。おみさ、おづくと片脇へ

寄つて居る。此うち儀介、こなしあつて

儀介 おきぬ、あのおみさは、なんで仕事場へ行かぬぞ。なんで野良乾かして置くのぢや。

きぬ エ、。

儀介 この間から、日限りの切れてある受取り物、毎晩夜なべをかけて織つて居るぢやないか。それに仕事はせいで、誰れが持つて来いとも云はぬ茶を酌んで来て、何の用もないのに、うぢくくと、それ程仕事をしとむながる者、抱へて置かにやならぬか。あれ暇やつてしまや。

きぬ エ、。

儀介 自惚わが身が甘いからぢやわいの。嘉六、われもあれぢや。織り物の支配を受取つて居るぢやないか。それにわれも高機へ上がらうともせず、こりや何ぢやな、奉公人とぐるになつて、野良かはいて、大事の受取り物を間に合はさず、親方に難儀さす積りぢやな。

嘉六 ア、モシ、減相な。なんのマアそんな事。

儀介 さうでなくば、なぜ仕事さ、ぬ。おきぬと云ひ嘉六、わいら二人は、兎角おみさが眞直するな。

兩人 エ、。

ト兩人くひ違ひしこなし。

儀介 おれが爰の内へ來ぬ一月前から、來て居る奉公人ぢ

やと思つて、叱りたい事があつても、遠慮して居るが、

おきぬ、わが身は又、なんでおみさに遠慮しやるぞ。

きぬ 何をわたしが遠慮しましたえ。

儀介 ハテ、遠慮するはサ。

きぬ 何をいなア。

儀介 今が今とて、おれが袴を疊まうとすりや、ちやんと

わが身が引ツたくつて、疊んでやりやるし、其やうに

奉公人を遠慮して使やるに依つて、主を友達のやうに思

うて、何一つ云ひつける事を聞かぬわいなア。マ、ち

と道ひ廻して使や〜。

ト又おきぬ、嘉六と顔見合せ、こなしあつて

きぬ 旦那どの、お前の云はしやんす事は、とんとわしや

合點がゆきませぬわいなア。

儀介 何がいなア。

きぬ わたしや常に、お前がおみさの鼻風をしなさるゝと

思つて居ますわいなア。

儀介 どこにいの。

きぬ イエ〜、鼻風なさんせぬとは云はれますまい。

儀介 なんとして。

きぬ ソレ、後月の幾日やらでござんした。きつう寒い日

がござんしたが、何が仕事の忙しい日ではあるし、おみ

さが單物着て仕事をして居たれば、お前が織場へ行かし

やんして、コリヤ、今日はきつう寒いのに、單物着て風

引いたら悪い、ちやつと布子と着替へいと云はしやんし

たに依つて、ハテ變つた事ぢや、外の女子どもには構は

ず、おみさばかり深切に云はしやんすは、おかしい事ぢ

やと思へば、嘉六を始め外の者も、みんなさう思つて居

ります。そればかりぢやござんせぬ。この間おみさが

お腹が痛いと言つて、宵から寢やつた時、お前が鼻紙入

れから、こて〜と薬を出して、手づから持つて行てや

らしやんすと云ひ、又これまでも度々おみさが事と云ふ

と、氣を付けてやらつしやんすを見るにつけ、旦那どの、

腹は立てしやさんすな、お前とおみさとは、どうやら譯

のあるやうに、思ふは女子の因果。怪氣嫉妬は善なみ事

と、チツと辛抱して見ても、こればかりは女子に生れ

た役目ぢやと、堪忍して旦那どの、ある事なら打明け

て、云うて下さんせいなア。

ト泣く。儀介おみさ、顔見合して、兩人こなしあつて

儀介 ハ、女子と云ふものは、淺蕪なもので、今おれ



が云うた通り、あのおみさは一月も前から、奉公に来て居るに依つて、諸事何かにつけて遠慮もして居る。また氣もつけてやる。外の女子どもは、やう／＼とこの三月から抱へた者ゆゑ、遠慮もなげにや氣も附けぬ。よし又、おみさとおれが念願して居れば、なんのわが身の見の前で、鼻息したり深切に云はうぞいの。内證でこつそりとして、人に知らしてよいものかいなう。イヤモウ、その疑ひなら、さつぱり晴らしや。とんとない事ぢや。

ト又おきぬ、嘉六と顔見合せ、こなしあつて

きぬ 其やうに云はしやんすりや、どうやら譯のないやうにもあり。

儀介 まだ疑ひが晴れぬか。よい／＼。なま中、おれが先から居る者よ、義理立てして遠慮するに依つて、わが身の氣が癒る、コリヤおみさ、そこへ出い。

みさ ハイ。

ト向うへ出る。

儀介 コリヤ、今聞く通り、われはおれより一月も前から居る者ぢやに依つて、何かに遠慮して物を云へば、どうやら譯もあるやうななど、おきぬが氣を廻す。今日からは何事も遠慮なしに、どうでけん／＼云ふぢやあらう

程に、さう心得て、随分おきぬが氣に入つて、奉公を大事に勤めい。合點か。キツと云ひつけたぞ。

みさ ハイ／＼、心得ました。とんと、これで様子が知れました。

嘉六 おみさ、様子が知れたとは、どう知れた。

みさ サイナア、とんと先度から、お家様の御機嫌が悪いに依つて、どうした事ぢやと、わたしやモウ、大抵心遣ひをして居たわいなア。且那樣と譯あるやうに思し召したら、御機嫌の悪いも御尤もでござります。モシ、且那樣、今から御遠慮なう、お叱りなされて下さりませ。モシ、お家様、もうお疑ひをお晴らしなされて下さりまして、何時までもお使ひなされて下さりませうなら、お嬉しう存じます。

きぬ イヤモウ、且那樣と譯のない事に、なんのママ、わしが憎まうぞ。そんなら今から、おみさが事について、何事でも、世話やいて下さんすなえ。

儀介 オ、合點ぢや／＼。

きぬ 必らず深切に物云うて下さんすなえ。

儀介 随分けん／＼と云うてこまさう。

きぬ おみさも又、且那どの、事、これ程でも構やつたら、

聞く事ぢやないぞ。

みさ アイ、とんとお構ひ申しませぬ。

きぬ わしが云ふ事聞きやらぬと、きつう當るぞや。

儀介 オ、當りや。それが即ち、おみさが身の上の爲ぢやわいなう。

きぬ きつう不勤めにしやつたら、暇出しますぞや。

儀介 それがよい。

きぬ それでも大事ござんせぬかえ。

儀介 ハテ、奉公人は皆、わが身の心次第にしやいなう。

きぬ そんなら、おみさを、どのやうにしても構やさしやんせぬかえ。

儀介 構はぬ。

トおきぬ、こなしあつて

きぬ 其やうに云はしやんすりや……ナウ嘉六。

嘉六 お家様。

ト兩人顔見合せ

きぬ ア、嬉しや、とんと今と云ふ今、疑ひが晴れた。

みさ わたしもそれで、落ちつきましたわいなア。

ト胸撫で下ろす。

嘉六 わたしも、旦那も譯がないと聞いて落ちついた。

儀介 嘉六、落ちついたら、織場へ行って、見廻つておぢや。

嘉六 ハイ、畏まりました。

儀介 おみさも、ちやつと行って仕事せい。

きぬ 又おみさが世話やかしやんすりやわいなア。

儀介 オツトセウ、構はぬ。

嘉六 ドリヤ、これから一精出さうか。

儀介 ドリヤ、おれも一寝入りせうか。

きぬ サア、おみさ、行きや。

みさ アイ。

ト唄になる、儀介、奥へ入る。嘉六、おみさ連れ、中戸口へ入る。あと合ひ方になり、おきぬこなしあつて

きぬ ア、嬉しやなう。フトした縁で、あの儀介どの、此

方の内へ来て下さりして、夫婦となつて、どうぞ睦まじ

り暮らしまするやうにと、朝夕拜まぬ神佛様もないのに、

どうやらおみさと變つた素振りと思ふなは、わしが氣の

廻り。今のやうに潔白に云うて下さんすりや、今まで案

じたこの胸も、さつぱりと夜が明けたやうになつた。こ

れと云ふも神佛様のお庇。エ、有り難うござりまする。

トそこらあたりを拜み喜ぶ。此うち構が、りより八介、

奴にて出てズツと門口へ入り

八介 おきぬさま、お變りもござりませぬか。

きぬ 其方は八介ぢやないか。

八介 おきぬさま、先づは御備勝で、おめでたう存じまする。

きぬ 其方も息災で、喜びますわいなう。

八介 時に、私しがこの度歸りましたは、おきぬさま、あなたにお逢はせ申し、喜ばしまするお方を、お供いたしました。幸ひ誰れも差合ひの人も見えず、只今お供仕りませう。暫らくお待ち下されませう。

ト表へ出て、櫓がユリへ向ひ、小手抜きすると、旅乗り物、籠持ち、挟み籠、その外体廻り大勢附けて門口へ乗り物下ろす。八介、手をつき

ハツ、何者も相見えず、おきぬさまお一人。イザ、お通り高られませう。

ト乗り物の戸を開けると、友之進、着付け、袴羽織、大小にて、静々出て内へ入る。八介聞いて入る。供廻り、表に扣へ居る。友之進、おきぬを見て

友之 許しやれ。  
ト一へ廻り、下に居る。おきぬ、友之進を見て、不思議なるこなしにて、八介が袖を引き

きぬ コレ八介、あなたはどうやら  
八介 モシ、お前様の御親父、安達友之進さまでござります。

きぬ ほんに父様、お懐かしうござります。

友之 さては其方が、幼少にて別れしおきぬであつたか。先づは堅固で重疊々々。久々の對面ぢや。サ、サ、これへ來やれ。

きぬ アイ。

ト御へ行き

いつぞや、あの八介に、お文を持たせ下りました、その時の嬉しさ懐かしさ。どうぞちよつとなりとお目にかかりたいと、くれぐれ祈り居りましたに、ようマアお出でなされて下さりましたア。

友之 オ、喜びは尤も。先達て某、西園方にて仕官の廻り、聊かの障りあつて、浪人となるその折柄、女房は病死、やうく十一歳の其方を引連れ、この京地へ立越え、當所西陣の織屋治右衛門に知る邊あつて、逗留のうち、女の子の其方、且は武者修業の妨げと、幸ひ治右衛門夫婦が所望に任せ、其方をこの家へ養子に遣はし、某は東園へ越え、早十九年の尾箱を箱、今にては三輪

家に於て、誰れ憚らぬ立身出世。我が身の榮華を思ふにつけ、其方が身の上を案じ、これなる八介を以つて文通せしところ、治右衛門夫婦も相果て、孤兒となつたる様子。何卒一度対面いたさんと思ふところ、この度大切な御用につき、遙々と上京。これ幸ひと尋ね参つた。し其方は、今に獨り身で罷りあるか。

きぬ さればいなア。その實の母様の死なしやんした時は、まだやう／＼十一なれど、どうぞ一生願御を持たずに、早同様に身を持つて、母様の菩提が弔ひたいと、フツと子心に思うたゆゑ、爰の内へ養子になりましたも、殿御を持たず、後家同然に暮らすうち、後の親達も二人とも過ぎさしやんして、近所の衆の勧めと云ひ、どうもこの織屋の跡目、女子の身で相續がならぬと、お何の衆が達てのお世話。やう／＼と去年の冬から。

友之 夫を持つたか。

きぬ アイ、儀介さまと云ふ、それは／＼立派な。

友之 好い聲取つたか。

きぬ アイ。

ト恥かきしきこなし。

友之 出かした／＼。いつがいつまで獨り身でも居られん。

オ、幸ひ今宵は、某も一宿して、その儀介とやらにも對面して、其方が身の上頼み置かう。

きぬ アイ／＼。そんならどうぞ、久し振りと言ひ、儀介さまともお近付きのお杯、御馳走を申しませうわいなア。

友之 コリヤ八介、供の者ども、旅宿へ歸して、其方はこれに残れ。

八介 畏まつてござりまする。

ト門口へ出て

今聞く通り、おてまへ達は三本木の旅宿へ歸りて、休息しやれ。

家來 畏まりましたござりまする。

きぬ そんなら奥の間へ。

友之 案内しやれ。

きぬ アイ／＼。

ト唄になる、暮れ六ツの鐘鳴る。おきぬ、嬉しうに先に立ち、友之進と兩人奥へ入る。八介は申戸口へ入る。表の供廻り皆々乗り物諸とも橋が／＼りへ入る。後三十郎一人、矢張り供廻りの體にて笠傾け、顔を見せぬやうに俯向き、居眠り居る。此うち合ひ方、よき所



にて三十郎振り仰向き、笠を取つて門口へ立ち、こなしあつて

三十 心得ぬ友之進が上京。もしや敵の手が、りもあらんかと、道中筋も後につき、彼奴が供廻りに紛れ込み、標子を聞けば、この家は友之進が眞實の娘の由。今宵はこの家に一宿するとの事。幸ひ忍び入つて事を計らば、敵の手が、り、知れまいものでもない。ムウ、さうぢや。ト横織り唄になる。三十郎、こなしあつて中戸へ忍び入る。返し  
道具残らず東へ引いて取る。

洗り物、向う中戸口暖簾かけ、兩方縁側つき、前側ばかりの障子屏風。平舞臺、上の方、中二階。橋がかり田戸、柴垣、右平舞臺の真中に高機あり、兩側に下機三つ、並べ、真中の高機におみさ、錦を織つ、居る見得。この高機の上に嘉六、上より管引いて居る。兩方の下機、東の方にはおまき、おりく、おくら、西の方にはおいと、おより、おかせ、右六人打二重を織つて居る見得。夜なべの體にて一面に氣り火を見事に灯す。この見得、好みの機織り唄に

て道具納まる。

嘉六 おみさく、いよく、旦那どのと譯はないか。

ト管を引きく云ふ。

みさ オ、又かいな。そんな事云うて下さんすな。

ト云ひく織つて居る。

嘉六 旦那どのと譯がなくなれば、おれが女房になつてくれぬ

かいやい。

ト云うても、おみさは物云はず、機を織つて居る。

コリヤく、おみさく。エ、人にばかり物を云は

せ、返事せぬかい。おみさ、コリヤヤイ。

トにより管を引きく、喚く。

かせ オ、やかましい、嘉六どん、暗なましやんせ。仕

事の邪魔になるわいなア。

嘉六 ちつと邪魔にならうと、朋輩のよしみぢや。黙つて

居や居や。

くら イエく、黙つて居まいわいな。上からやかましく

云はしやんすゆゑ、氣が散つて仕事に手に附かぬわいな

ア。

いと おみさどんもおみさどんぢやわいの。あのやうに戀

ひ慕うて居やんす嘉六どん、應なら應、否なら否と、早

う返事してやつたがよいわいな。

みさ サイナア、返事は疾からしてあるけれど、それをしつこうあのやうに云はしやんして、どうもならぬわいなア。

りく 其やうに嫌がつて居るものを、無理に口説くとは、

なんとしつこい人ぢやないかいなう。

まき 面妖、男の癖で、嫌がる程、猶思ひが増すといなう。

かせ なんぢややら、こちらにはけん／＼云うて、おみさ

どんには鹽の目して、ほんにアタ見とむない。

いと イヤ又、あんな男には此方も否ぢや。マア、第一に

根性が悪うて。

くら その癖、女子にはしたゝるうて。

より 日がな一日、せり／＼とやかましう云うて。

りく 慾は深し。

まき どこに一つ取り得のないのに、色氣のあると云ふ

は。

六人 オ、おかし。

ト皆々このせりふ、機織りながら云ふ。始終此うち詠

らへの機織りの三味線。

嘉六 上に置いて、下から寄つてかゝつて、喰ふワ／＼。

おみさ／＼、なんぼうわれが嫌がつても、おれが斯う云

うたら、てもさても、面の皮の厚板な者ぢやと思ふで有

栖川、わが身さへ得心してくれたら、爰を連れ立つて飛

び金、蝦夷長崎へも渡り糞子と、自體此方が鈍すから、

よもや外へ縮緬な心はあるまい。ほんにやれ、わが身ゆ

ゑなら、倒へつゝれの錦を着てもいとはぬ。おれが心が

竹屋町なら、割つて見せたい。水臭い心は體になけれど、

否と吐かすが、ちよろけんたいが悪いわい。

ト矢張り管を引き／＼云ふ。

皆々 ハ、ハ、ハ、織り物づくし、面白いわいなア。

嘉六 わいらは面白からうか、おりや忌々しいわい。

ト減多無性に管を引く。

みさ オ、コレ／＼、嘉六どん、其やうに引かしやんす

と、地紋が無茶になるわいなア。

嘉六 オ、無茶にするのぢや。得心せにや、この錦も織

り損なはしてこますのぢや。

ト管を無茶に引く。

みさ 精出して其やうに意地悪うさしやんせ。こちや織ら

ぬわいなア。

嘉六 オ、われが織つても、おれは引かぬわいやい。

みさ よい、わしや爰にヂツとして、お家様や旦那様が、なんで仕事をせぬぞと仰しやつたら、この様子を告げる程に、さう思うて居やしやんせ。

皆々 オ、おみさどん、告げさんせ。

嘉六 オ、わいら皆寄つて、告げい。おりや爰で一

服のむわい。

ト腰提げより火打ちを出し、燗草のむと、また機織り唄になる。皆々機にかゝる。おみさ腹立て、つんとして居る。嘉六、燗草のんで居る。この唄のうち、中戸口よりおきぬ案内して、久馬出て来る。

きぬ 久馬さま、これが織場でございます。

久馬 成る程、夜なべの體、數多の灯し火。さて見事

ぢや。

ト云ひ、出て来て、皆の機を見て

久馬 ムウ。この機は二十反舞への梨利二重よな。

きぬ 左様でございます。

久馬 オ、コリヤ、女子ども、大儀ぢやな。

皆々 ハイ。

ト云ひ、機つて居る。久馬、高機を見て

久馬 これがお姫様のお召しなさる、錦ぢやな。

きぬ 左様でございます。

久馬 また錦は見事ぢや。

ト云ひ、おみさを見て

コリヤ、女、其方ばかり、なぜ手を止めて居る。それでは明後日の間に合はぬと、身共、云ひ譯がないわいやい。

きぬ おみさ、なぜ仕事をしやらぬぞいなう。

みさ ハイ、わたしは仕事いたさうと存じましても、嘉六

どんが、ねつから邪魔ばかりしてござんすゆゑ。

久馬 ヤイ、嘉六、わりやなんと心得て居る。この錦を

今明日中に織り上げぬと、事に依つてはこの久馬は、痛い腹を切らねばならぬわい。うぬ、それなんで妨げ致す。キリ、機を織らぬか。達て邪魔いたさば、おのれ、打ち放してくれぬぞ。

トきつば廻す。おきぬ、留めて居る。

嘉六 ア、モシ、急かつしやりますな。これには様子がござりまするぞ。

久馬 サア、その様子を吐かせ、

きぬ ちやつと云やいなう。

嘉六 申しまする……ハイ、久馬さま、高うはござります

れど、これより申し上げます。その様子と云ふは。

久馬 云ふは。

嘉六 アノソレ。

いと おみさどのが、云ふ事聞かぬ腹立ちに、管を引き違へて、織り損なはしてござんした。

久馬 おのれ、重々憎い奴の。

ト嘉六の方へ行かうとするを、おきぬ留めて

きぬ マア、お待ちなされて下さりませ。わたしがと

つくりと申しませう。お腹立ちは御尤もでござります。

何事もわたしがお詫び申します。御堪忍なされて下さ

りませいなア。

ト取りついて留める。久馬、おきぬに抱き留められ、

嬉しきこなしにて

久馬 イヤモウ、おきぬ女郎、あなたが留めるに、とまら

ぬと云ふ理屈はないわいの。

きぬ マア、早速御機嫌が直りまして、お嬉しう存じます

る。

久馬 其方より身共が嬉しいわいの。

ト嫌らしきこなし。おみさ、機より下り、おきぬが側

へ行き

みさ お家様、モシ、嘉六どのへキツと仰しやつておくれなされませ。

きぬ ハテ、大事なわいなう。其やうにまで思うて居る

嘉六が志し、聞いてやりやいなう。

みさ エ、なんと仰しやります。

きぬ サア、先刻にまで其方と旦那どのと、譯があると思

うて居たれど、譯のない事が知れて、わしが胸もさつば

りとしたわいなう。また其方も、旦那どのと譯のないの

が定なら、嘉六が志し、聞いてやりやいなう。

みさ ぢやと申しまして。

きぬ そんなら旦那どのと譯があるかや。

みさ なんのお前。

きぬ さうでなくば、わしが取持ち、早う叶へてやりやい

なう。

トおみさは當惑のこなし。

嘉六 モシお家様。

ト手を合して

これからお禮申します。

ト機の上から辭儀する。

久馬 したり、主が家來の不義の取持ちとは、さつても粹



なお捌き。その粹なおきぬどの、拙者が志しは、どうして下さるえ。

きぬ モシ、久馬さま、わたしには儀介と申します

久馬 サア、その男の目顔を忍んで。

きぬ イ、エ、そんな猥らな事は嫌ひでござりまする。

久馬 然らば家來の猥らは、なぜ取持つ。

きぬ エ、。

久馬 イヤサ、不義を嫌ふ其方が、なんで家來の不義を取持つぞ。

みさ 成る程、この不義は、わたしが方から、お斷わり申しまする。

きぬ イ、エ、其方の不義を取持ちするは、且那どのと譯のない事が見たいばかり。

みさ それぢやと云うて。

きぬ 主の詞を背くか。

みさ サア、それは。

久馬 武士の詞をなげ立てぬ。

きぬ サアそれは。

三人 サア〜〜。

みさ イ、エ、こればかりは否でござりまする。

トきつと云ふ。嘉六、機の上より飛び下り

嘉六 否ならおれがこの。

トおみさが懐へ手を突ツ込むを振り放し

みさ こりや何さんす。

嘉六 腹帯の詮議する。

みさ エ、。

嘉六 わりや、孕んで居やうがな。

みさ 減相な。

嘉六 そんなら、なんで腹帯して居る。

みさ イ、エ、こりや疝でござんす。

嘉六 ドレ、その癪を。

ト又かゝるをおまき、おりく、おくら、分け入り

女三 無體な事さしやんすな。

久馬 一つそ手短かに返事聞かう。

女三 無體な事さしやんすな。

久嘉 なにを。退き居らう。

ト嘉六、久馬、女形三人づゝを引き退け、おみさ、お

きぬを捉へる所へ、儀介、中戸より走り出て、嘉六、

久馬を取つて抛る。

皆々 ヤア旦那様。

ト久馬、儀介を見て悔りして、ソツと片脇へ寄る。嘉六、儀介が側へ行て、どつかり坐り

嘉六 旦那どの、こりや嘉六を何とさつしやる。

儀介 わりや、なんでおみさを手籠めにする。

嘉六 ハテ、女房に持つからは、手籠めにして大事ごんせぬ。

儀介 二人ながら奉公人の身で、女房に持つとは、そりや誰れが許して女房に持つぞ。

きぬ イヤ、そりやわたしが許しました。

儀介 ヤア。

きぬ 旦那どの、先刻のやうに潔白に云はしやんしても、わしやどうも氣が濟みませぬ。わたしが心休めでござんす。おみさと嘉六と、女夫にしてやつて下さんせ。

嘉六 ならぬと仰しやりますりや、矢ッ張りおみさと譯があると思はれまする。

きぬ 得心して女夫にしてやらしやんすと、嘉六が喜び、わたしたしも又、案じる胸が休めたうござんすわいなア。

ト儀介こなしあつて

儀介 おきぬが格氣の壺へ持ち込んで、おみさを手に入れ

やうと、コリヤ嘉六、われが細工ぢやな。

ト嘉六こなしあつて、儀介が側へにじり寄り

嘉六 旦那どの、イヤ入り舞の儀介どの、妙な事云はつし

やるわいの。なんぼこの嘉六が惚れて居ても、ない事を

拵らへても云ひませぬぞや。又おきぬさまが格氣さつし

やるも、無理ではごんせぬ。こなた様とおみさとの譯の

ある事は、此方の内ばかりぢやごんせぬ。世間で噂して

居ますぞや。また云ふ筈でもある。おみさの腹には、こ

なさんの塵。

儀介 ヤ。

嘉六 ぼてれんと覗んだ眼は、違やせまいが、それとも念

頭して居さつしやれずば、親方の威光で、おれが女房に

下さりませ。

みさ イエ、なんぼ親方の威光でも、こればかり

は否でござりまする。モシ、旦那様、必らず遣らうと云

うて下りますなえ。

嘉六 そんなら旦那どのと、譯があるのぢやの。

みさ エ、又しても、そんな事は知らぬわいなア。

嘉六 知らぬ者が、その腹帯は。

トおみさにかゝるを、儀介、嘉六を突き退けて

儀介 如何にも譯がある。

き嘉 エ。

みさ ア、モシ、そんな事を。

儀介 ハテ、大事な。もう斯うなつたら隠すには及ばぬ。

ハテ、サテ、マア、おれ次第にして黙つて居よサ。

きぬ そんならいよく念頃して居ながら、よう今まで、

わたしを騙さしやんしたなア。

ト儀介が胸倉取るを突き退け

儀介 てかけ妾は男の高下。黙つて居い。

きぬ そりやモウ、茶屋場入りの色狂ひなら、事に依つて

黙つて居やうが、こればかりは、ならぬ。金輪際、

ならぬわいなア。

儀介 われがならずば、おれも思ひ切る事ならぬわいな

い。

きぬ そりや又お前、あんまりでござんせうぞえ。

ト儀介の胸倉を取りに行く。

儀介 エ、見苦しい、何するのぢや。

ト突き退ける。

きぬ エ、こなた様はく。

トまた行かうとするを、久馬抱き留め

久馬 コレサ、おきぬ女郎、いつそ縁切つて、身共が願ひ  
を叶へてたもれ。

きぬ エ、知らぬわいなア。

ト突き飛ばす。

嘉六 親方が自棄なら、おれも自棄ぢや。おみさ來い。

トおみさの手を持って引ッ張る。

きぬ 元の起りはおみさ、其方ゆるぢや。

トおみさの方へ行かうとする。

儀介 格氣も好い加減にせいだな。

ト突き退ける。

きぬ 其やうに庇はしやんすが、腹が立つわいなア。

ト箕盆打ちつける。

儀介 こりや男に投げ打ちするか。おのれに負けて居やう

かい。

トあたりにある機道具打ちつける。

嘉六 一體おのれが忌々しいわい。

トおみさに機の道具打ちつける。

みさ それでも否ぢやわいなア。

ト抛り返す。

久馬 貞女を立つるも好い加減がよいわい。

トおきぬへ抛りつける。  
 きぬ 構うて下さんすな。

ト抛り返す。  
 儀介 怪體なわい。

ト何なりと打ちつける。  
 きぬ あんまりぢやわいな。

嘉六 胸愼なわい。  
 みさ 知らぬわいなア。

久馬 曲がないわい。  
 きぬ 嫌ひでござんす。

ト右五人何なりとも手にあたり次第打ちつけるを、機織りの女形六人にて、せんぐりに道具を片つける。

儀介 われは。  
 きぬ こな様は。

嘉六 おのれは。  
 みさ 其方は。

女皆 もうよいわいな〜。

ト女形六人取りさへる。おきぬ、儀介と思ひ、嘉六に獅嘯みつくな、嘉六振り放し、おみさと取違へておかせを捉へる。久馬、おきぬと取違へ、おみさに取りつ

くを、儀介、久馬を取つて抛る。嘉六またおみさにかかるを、儀介嘉六を高機の側へ取つて抛り、ツイと奥へ入る。おみさも後より走り入る。おきぬ、儀介おみ

さの後を追ひ入る。六人の女形、後よりワヤ〜云うて走り入る。嘉六、投げられた形に轉けて居る。右こ

れまでは機織りの唄の合ひ方。爰にて常の合ひ方になると、久馬、起き上がり

久馬 てもさても、手強い目に遣はせ居つた。おのれ、この家の亭主め。

ト立ち上がらうとして腰を抱へ

アイタ、、、、こりや一向腰骨を打ち折り居つた。所詮これでは叶はぬ。屋敷へ歸り、瓢箪酒で養生の上、この返報、どうするぞ、待つて居れ。

ト刀を杖に、ちが〜として橋が〜りへ入る。奥バタバタにて、おみさ、走り出てこなしあつて

みさ エ、、又しても〜、お家様の悋氣には困り果て

る。その元はあの嘉六どんの、附けつ廻しつ。ほんにうるさい事ばかり。旦那様にこの様子云うて、相談せ

らにも人目は多し。さりとて辛氣な事であるぞ。ト云ふうち嘉六、おみさが後へソツと起きて



嘉六 サア、手口はあがつたぞ。

トおみさ、惻りして

みさ オ、嘉六どん、そこにかいなア。

嘉六 オ、ちつと惻りであらう。おみさ、問ふには落ち

いで語るに落ちると、旦那と乳雑つて居る事、たうとう

口明けたな。

みさ ア、コレ、滅相な事云はしやんすな。

嘉六 吐かすないやい／＼。おれが後で聞くとも知らず、

旦那様にこの事相談せうにも人目が多いと、たつた今吐

かしたぢやないか。下女の分際で、何を旦那に相談さら

すのぢや。

みさ サア、それはなア。

嘉六 おのれが筆んでけつかるも、旦那の胤。よう今まで、

ぬつくりと。うぬが骨骨を。

ト棕櫚箒振り上げる。

みさ ア、コレ、待つて下さんせ。

嘉六 そんなら今爰でへがすか。

みさ エ、否ぢやわいなア。

嘉六 吾ならどやす。

みさ サア。

嘉六 へがすか。

みさ サア。

嘉六 どやそか。

みさ サア。

兩人 サア／＼／＼。

トビリ／＼附け廻し、おみさ逃げうとするを、嘉六、

おみさを叩きにかゝる。この時、奥より三十郎、ツカ

ツカと出て、箒を引ツたくり、嘉六を喰はす。おみさ、

三十郎を見て

みさ ヤア、お前は。

三十 妹。

嘉六 うぬ。

ト三十郎が胸倉取る。その手をグツと捻り上げ

三十 素町人の分際で、武士に向つて慮外な奴。以後の見

せしめ、うぬがやうな奴は、カウ／＼／＼。

ト取つて投げ、箒にて続け打ちに打ち搦ふる。

斯うしてくれるわい。

トまた箒振り上げる所へ、儀介、ツカ／＼と出て、三

十郎が箒の手を留め

儀介 お侍ひ様、マア／＼お待ち下さりませ。

ト三十郎、儀介を見て惻り

三十 ヤア、こなたは。

ト儀介、嘉六を見て、こなしあつて

儀介 イヤ、存じませぬ。

三十 ヤ。

儀介 私はこの家の亭主、職屋儀介と申す者。ついぞお目にかゝらぬお侍様。ハテサテ、知らぬ、存じませぬ。必らず魚相云はつしやりますな。

ト嘉六を目で教へこなしあり。三十郎もこなしあつて  
三十 すりや、おてまへはこの家の亭主とな。

トこなしあつて、おみさを向うへ連れて出て  
何か差指き、其方が身の上。國を立退き、當地に罷りあるその仔細。殊に下様の奉公と云ひ、夫十兵衛どのの身の上。

ト儀介へこなしあつて

何にもせよ、仔細なくては叶はぬ。先づ國を立退いたるその様子は。

みさ さればいなア。わたしら夫婦が國を立退いたは。

ト儀介と顔見合せ、こなしあつて

これには、ちつと様子のある事。マア、わたしが身の上

よりは、お前は何ゆゑ上方へはごんしたぞ。お國も氣遣ひな事はないか。父様主水さまにも御息災でござんすか。様子が開きたうござんすわいなア。

三十 ムウ。親人の堅固を尋ねるからは、まだ何の様子も存せぬよな。

みさ へんにも知らぬかとは、心元ない。父様は何とぞなされたかいなア。

三十 親人主水さまには、お果てなされたわいやい。

みさ エ、。

ト惻り。儀介も惻りして、嘉六と顔見合せ、ちやつと外らさぬこなし。

コレ、何としてお果てなされた。母様と云ひ、お前が居やしやんすからは、看病に愚かはあるまい。どう云ふ事でお果てなされたぞいなア。

ト此うち二階の障子明け、友之進聞いて居る。上の方の路地口の戸をソツと明け、おきぬ、立聞きする。三十郎、こなしあつて

三十 様子を語るも無念の次第。親人主水さまには、御病死ならず、去年五月二十五日、城下の町はづれ、柳の下に於て、何者とも知れず、闇討ちに討つて立退いたわや

い。

ト儀介も共に驚ろき、おみさと顔見合せ、こなし。

三十 聞くと共に、駈けつけ見れば、早締切れて果敢なき御最期、敵討ちの願ひ立つれど、武士たる者が闘討ちに遭ひしは、不覺の最期とあつて、花園の家名も没收。某

とても浪人となり、母は知る邊の方へ預け置き、京地へ

立越えしも敵の誹謗。

みさ そんなら、その時ののは、父様であつたといなア。

ト儀介が顔を見る。儀介、ぎつくり。おみさ、ハア、と泣く。儀介も涙を背けるはずみに、友之進おきぬ共

一時に顔見合せ、友之進、障子しやんとさす。おきぬ、

路地の川をハアと閉める。儀介キツとなる。

儀介 ムウ。

ト手を組み、思案の儘。嘉六、氣の毒さうに揉み手して

嘉六 やれ／＼、聞けば聞く程、御笑止千萬な事だらけ。

シマガ、コレおみさ、何にも察じる事はない。期う云ふ所を見捨てぬが、この嘉六が氣性ぢや。おれが世話しよ。

へ、、、、イヤ、御浪人、近頃お恥かしながら、あのお

みさには、我ら首だけでゑすぢや。敵さへ合點なら、もう宿婚入りするやうに、お家様へ取入つてあるぢや。さすればこなたは小舅。なんと見捨て置かれませう。おれが匿まりてやりませう。

三十 志し、過分にござれども、只今お聞きの通り、親の敵を詮議仕る身分で、縁組みの沙汰も無益の儀でござる。

嘉六 ハテ、さう云はずと、おれが女房に

三十 黙り居らう。浪人しても花園三十郎は武士だぞ。素町人の下司下郎と縁を組まうか。身の程知らぬ大馬鹿め

が。

嘉六 そんなら、どのやうに云うても否か。

三十 過言吐かすと打ち放すぞ。

トきつと反り打つ。嘉六、飛び退き

嘉六 なんぢやい／＼。どすむね喰つたと云うて、怖うないぞよ。高でおのりや、親を殺され、その敵さへ知りぬ胸腰抜けぢやないか。

ト三十郎、行かうとするを、おみさ抱き留める。

なんぢや／＼。なんぼうわれがしや張つても、うろたへ者ぢや。國を拂はれ天竺浪人。既に以て宗旨證文にも、

切支丹轉きりしやんび又は武士ぶしの浪人らうじんにても御座ござなく候こうふと書くぢやないか。それ程人ほどに嫌いやがられる浪人らうじんの分際ぶんざいで、素町人すぢやうじんと縁えん組ぐみまねなどは、洒落しやれくさい、其そのやうなお構かまひの者もの、片時かたときも置おく事はならぬ。キリ／＼と出でて行いけ。うせぬかい。行きいさらさぬかい。いつそおれが、引摺ひきずりり出だしてこませ。

トおみさを引退ひきひきげ、三十郎さんじやうにかゝるを、取とつて投なげる。起おき上あがらうとする所ところを、刀かたなを抜ぬき、りう／＼と打ち据すふ。

三十 浪人らうじんの手並てなま、腰骨こしほねに覺おぼえたであらう。

ト刀振かたはり上あげる。

嘉六 ア、覺おぼえた／＼。

ト腰こしを抱かかへ、逃にげて入いる。三十郎さんじやう、刀かたなを納なめ

三十 よしない奴やつに暫時しばしばの隙取ひまどりり。この上うへは敵かたきの詮議せんぎ。

儀介 イヤ、詮議せんぎするに及およばぬ。主水しゅすいさまを討うつた敵かたきが相あ知あれたぞ。

三十 ナニ、親人おやじんを討うつた敵かたきが相あ知あれたとは、して、その敵かたきは何者なにもの。

儀介 外ほかでもない、斯かく云いふ小栗栖せむら十兵衛じやうべゑサ。

三十 何がなんと。

儀介 去年こぞ五月ごご二十五日にじふごの夜よ、城下じやうがの町まちはづれ、柳やなぎの下したに待まち伏ふせして、たゞ一刀いちたうに討うつて捨すてた。

みさ イ、エ、ありや安達友之進やすたゆうのしんを待まちち受け、人違ひとちがひで父ちち様さまを。

儀介 コリヤ、何を女おんなの小こざかしい。扣ひかへて居ゐらぬか。

みさ イ、エ、それでも。

儀介 ハテ。

トおみさを引ひきつけ

どこにどう云いふ由縁ゆかりかゝりがあらうも知しれぬ。

ト障子屋體しょうじやうたい、路地口ろぢぐちへ目を附つけて

ナ、扣ひかへて居ゐらぬか。

三十 サア、十兵衛じやうべゑ、親おやの敵かたき、立たち上あがつて勝負しょうぶせい。

ト反そり打うつ。

儀介 待まちつた。

三十 待まちてとは卑怯ひけなな。後おれたか。

ト切きつてかゝる。おみさ、支さへるを引退ひきひきげ、切りかけ

儀介 待まちつた。卑怯ひけなでない。後おれはせぬ。

三十 卑怯ひけなでなくば。



ト振りほどき、また刀を構へ  
なせ立合はぬ。

トきつと見得。

儀介 如何にも、主水どの、敵と、此方より名乗つて出る  
十兵衛が心底、今尋常に討たれたきものなれども、三輪  
の系圖紛失。この詮議を仕出し、再び系圖取返した上、  
深く其方に討たる、所存。

三十 イ、ヤ、いつ手に入らうやら知れぬ系圖。共に天の  
戮かぬ親の敵。暫時も猶豫は、ならぬ。

儀介 イ、ヤ、系圖の詮議は今宵のうち。

三十 ナニ、今宵のうちに系圖が手に入るとな。

儀介 如何にも、元この家は友之進が、獅子と聞いたるゆ  
ゑ、入り聲となつて来りしも、系圖の手が、り詮議の爲、  
是非今宵のうちに系圖を手に入れ、其方へ相渡し、直ぐ  
にその場で主水どの、敵、この十兵衛を討つて本望遂げ  
召されい。この儀偽はりならば、弓矢神の御罰を蒙り、  
敵に首を下げられ。何卒系圖を取返すまで、今宵中の  
容赦を許み存する。

みさ モシ兄様、わたしも共に下女となつて入込みました  
も、系圖の詮議に夫婦の云ひ合せてござんす。今の詞に

偽りはござんせぬ。どうぞ今宵のところ、敵討ちの勝  
負を、待つて上げて下さんせいなア。

ト三十郎、思案の體。

儀介 女房去つた。

みさ エ、。

儀介 親の敵に添うては居られまいぞよ。

みさ さうぢやと云うて

儀介 敵の十兵衛と一つになつて、親への孝も兄弟の義理  
も、辨まへぬか。

みさ サアそれは。

儀介 うるたへ者めが、

ト叱りつける。おみさ、こなしあつて

みさ なんぼう敵ぢやと云はしやんしても、お前の胤を宿

せし、これがマア、何として別れて居られませうぞ。思

へばく、因果な身の上になりましたわいなア。

ト泣く。儀介、守り袋を懐中より出し

儀介 これこそ開運自在摩利支天の尊像、所持すれば劍難  
災難を免かれる奇體の守。安産の守護ともならう。殊に  
左孕みは男子の印。腹の伴へ十兵衛が篋の一品。大事に  
かけて所持いたせ。

ト渡す。おみさ、取つて戴く。

サア三十郎、胎内の子は十兵衛が肉身、女房諸とも其方に預ける。まさかの時に卓法未練に、逃げ隠れせぬ某が潔白の人質、受取り召されい。

三十 オ、天晴れ武士退ましき計らひ。人質慥かに受取つた。いとく今宵中に糸圖の詮議。

儀介 その糸圖の在所も、正しく彼奴が。

トちよつと障子屋體へ目を附ける。三十郎もちよつと目を附け

三十 拙者も、もしや敵の手が、りもあらんかと、道中筋も彼奴に附き添ひ参つたが、思ひも依らぬ敵は貴殿。併し、

糸圖の詮議、ぬからぬやう。

儀介 十兵衛が爲にも主家の大事、先達て貴殿の親父、主水さまの内意を受け、某も密かに糸圖の詮議、今宵のうちに糸圖手に入り次第、敵討ちの勝負仕らう。して、旅宿は。

三十 大佛の境内、馬町には母方の知る邊もあり、表に吉

の字の印を目當に。

儀介 尋ね参るが。

三十 互ひの絶命。

みさ それが誠の夫婦の別れ。

儀介 先づそれまでは。

三十 十兵衛どの。

儀介 三十郎どの。

みさ そんなら、どうでも。

ト儀介へ取りつく。

儀介 未練な奴の。

ト突き放す。

みさ ぢやと云うて。

トまた行かうとする。三十郎、おみさを引き廻し、中

へ分け入り

三十 其方も武士の娘でないか。

トきつと云ふ。おみさ、ぎつくりとなり

みさ ハア、。

ト俯向く。儀介、三十郎こなしあつて

儀三 お別れ申す。

ト唄になる。三十郎、おみさを先に立て、サ、行け行

けと捨ざりふにて、おみさ泣くく、兩人向うへ入る。

儀介、後見送り、こなしあつて

儀介 提灯の紋を目當に、友之進と思ひ、討ち止めしは兎

主水どのであつたよな。これも正しく友之進が仕業。糸  
圖の在所と云ひ、この家へ来たは彼奴か自滅……ソレ。

ト中二階へ目がけ行かうとする。この時おきぬ、路地  
口よりズツと出て、儀介の向うへ立ち

きぬ オ、旦那どの。

儀介 おきぬ。

トおきぬ、儀介に取りつき

きぬ 堪忍して下さいませ。誤りましたくわいなア。

ト泣く。

儀介 何の事ぢや。譯も云はずに誤まつたとは。

きぬ 嘉六が詞を誠と思ひ、今の今まで下女のおみさと、

譯があると思つて、氣が通つたに依つて、何かにつけ慥

氣歎始。今聞けばおみさは、因元よりお前の奥様。さう

とは知らず端下なり、慥氣したが、わしや恥かしうござ

んす。今の時出て、元の御夫婦に致しませうと思つたれ

ど、知らぬお方もござると云ひ、今まで慥氣したわたし

が、思ひがけなうお二人の取結び致しませうと云うたと

て、所詮誠とは思つて下さいますまいし、ほんにどうした

らよからうと、とおいつの思案のうちに、ひよんな事に

なりました。モシ、わたしが願ひでござんす程に、どう

ぞおみささんと呼び戻し、元の御夫婦になつて、ハテ、  
わたしは表向きの女房、内證は下女となりと、何となり

と、云はれても大事ござんせぬ。どうぞわたししが頼みで  
ござんす程に、聞き届けて下さんせいなア。

儀介 ムウ。志し過分な。併し、おみさも所詮離別せねば

叶はぬ仕儀。おきぬ、其方がおれに誠を盡す心成なら、

外に頼みたい事がある。なんと、聞いてたもらぬか。

きぬ オ、それをなんの間ふ事がござんす。何なりと云

ひつけて下さんせ。

儀介 ムウ。その心なら。

トこなしあつて、あたりにある機の道具の箆と樋とを

持つて来て、おきぬの側へ置き

おきぬ、其方に頼みたいとは、これぢや。

きぬ ムウ。この箆と樋を出して、わたしに頼みたいとは

え。

儀介 手馴れた商賣道具で、耳近い譬へを云うて聞かさう。

其方とおれが縁は、丁度この機に引ツ張つた縦の糸筋。

例へその身は何と云はれてなりとも、夫婦の糸筋を交へ、

首尾より機を織り上げらうと思つて、コレこの箆ぢや。こ

いつが眞實なる箆ならよけれど、歪みくねつてある最後、

絲筋は切れぬ。尤も文字は變れども、箴と云へば先づ人間に取つては親。

きぬ エ、

儀介 その親の心に、歪みくねつて狂ひがあれば、其方と  
おれが縁の絲筋は、自然と切らねばならぬぞや。その時  
はコレ、この箴に倣らへたこの横の絲。其方の仕事に織  
りこすれもせず、縦横の絲が揃はねば、機は成就せぬぞ  
や。サ、其方の手際で、この機を短め直し、三輪の系圖  
と云ふ、むづかしい地紋が織り出されうが、おきぬ、頼  
みたいと云ふは、この事ぢやて。

きぬ ハテ、むづかしい誂らへ物でござんすなア。シタガ、  
その三輪の系圖とやらん云ふ地紋を、いよくこの箴が  
持つて居ると云ふ事を。

儀介 サア、そこがどうも織り出して見ねば知れぬ。おれ  
が手を出して、その地紋を織り出すは易けれど、サ、も  
し荒立ては、折角心を盡した新機も無駄事。肝心の織  
り地が荒れては破れかぶれ。そこを絲強う織り出すは、  
西陣に住む其方の手際。

きぬ 成る程、お前のお好み、心得ました。

儀介 忝ないが、いよく系圖の地紋を。

きぬ 首尾よう織り出しましたら。

儀介 願ひの通り、其方と云ひおみさ諸とも、縦横揃ふ織  
屋の納まり。

きぬ 手際は流々。

儀介 仕上げが肝心。

きぬ 命の絲の續くだけ。

儀介 今宵のうちに。

きぬ 織り上げて見ませう。

儀介 出かしたおきぬ。

きぬ 旦那どの。

儀介 返事を待つて居るぞや。

ト唄になる。儀介こなしあつて奥へ入る。後合ひ方に  
なる。おきぬ、右の箴と槌を取り、こなしあつて

きぬ 頼みの誂は解けたれど、解けぬは千々に榎らむ親子  
の絲筋。ハテ、なんととして、纏れを解いたものであらう  
なア。

ト思案のこなし。この時、二階より友之進、静々下り  
て来て、物云はず表の方へ行かうとする。おきぬ、こ  
の體を見て、ツカくと向うへ廻つて

きぬ モシ、お前はどこへお出でなされまする。



友之 餘り氣鬱いたしたに依つて、最早歸らうと思つて。

きぬ アノ、まだ夜も明けぬうちに。

友之 オ、サ。

きぬ イ、エ、そりやなんぼうでも歸しませぬ。

友之 そりや、なぜ。

きぬ 僕等には快癖へお歸しなされ、八介一人お供させま

しては、なんぼう町續きとは申しながら、察じまする。

是非今夜はお酒り下されまして、せめておたしがお話し申しまする事を。

友之 聞き居けてくれいと云ふのか。

きぬ エ、。

友之 其方が願ひは、コレこの機。

ト高機を袖にて教へる。

きぬ なんと仰しやる。

友之 三輪の糸圖と云ふ地紋の機、織り出せと、そちや夫

に頼むを云ひかけられたでないか。

きぬ そんなら、先刻にからの様子を。

友之 残りず聞いた。

きぬ 様子聞いたとあるからは、申しまするに及びませぬ。

モシ、どうぞお前の手にある三輪の糸圖とやらを、わた

しに下さんせ。久々で親子の名乗り、逢うたたまさか、

わたしが願ひ、どうぞ聞き届けて下さりませいなア。

友之 ムウ、イヤサマ、幼少にて別れた其方が願ひ、無下

に返答もなるまい。

きぬ アイ、。

友之 おきぬ、其方への返事は。

ト刀を抜き、高機を切

この通りサ。

トおきぬ、憫りして

きぬ その錦を切らしやんしたお心は。

ト友之進、おきぬを、りうくと打ち据ゑ

友之 こな不孝者めが。

きぬ なんと。

友之 元來おのれ、幼少の砌りより、母の菩提を云ひ立て、

尼法師ともなりたき願ひ。一人の娘を尼にするは不便と

思ひ、この家の治右衛門に子のなさを幸ひと、不遁に養

子に遣はし、某は東國へ仕官のありつき。親に縁なき其

方、又もや治右衛門夫婦も相果て、孤兒となつたる様子、

ほのかに聞いたるゆゑ、家來八介をわざと差上し、音

信を結びしところ、いよく尼法師の願ひとある。天晴

れ友之進が胤ほどあり、女ながらも、よくも愛心いたせしと、心の中では譽めて居つたわい。然るにこの度上つて見れば、鞆を取り、噂に違ふ其方が身持ち。鞆と云ふは小栗栖十兵衛。此奴、武士のあるまじき、師匠と云ひ現在の、舅を討つて國達したる人非人。彼奴が辯舌にたらし込まれ、三輪の系圖、我が手にあるなどは、なんのたわ事。その十兵衛に心を通はす其方。所詮心が心に叶はぬ。さるに依つて、この機を斷ち切りしは、親子の血筋もまッこの如く、元へ戻らぬ絲の亂れ。

きぬ そりや爾慾でござんす。例へ海山隔てゝも、親子の親みは隔てぬが、眞實ぢやござんせぬか。十九年振りで逢うた親子、如何に氣強お生れつきぢやと云うて、焼野の雉子夜の鶴、娘不便と思し召し、どうぞ絲筋斷ち切らず、元の親子とたつた一言、結び返して下さりませいなア。

友之 さほど親子の縁が切りとむなくば、一つの功を立てい。

きぬ ムウ。功を立ていとほえ。

ト友之進、刀を納め、側にある右の箧と櫃を取り上げ、今十兵衛が謎の如く、この親に倣へし、この箧は、

血筋の絲を全うさんと、子を思ふ親心。横合ひよりコレこの櫃を以て、其方が心を迷はず、非義非道の小栗栖十兵衛。この櫃に従ひ、親子の絲筋、サ、狂はすか、但し又、直なるこの箧に従うて、絲筋を全うするや。善悪二つの箧と櫃の、返答をせよ。

きぬ そんなら、この箧に従ひ、縦の絲筋に従は。

友之 元の如く親子の絲筋。

きぬ もし又この櫃に連れて、横の絲に従うたら。

友之 その時こそは、この機之如く、血筋の絲は粉微塵。

きぬ 箧に従ひ、孝を立つるか。

友之 櫃に従うて不孝となるか。

きぬ 機は二品、織り手は一人。

友之 山嵐の織り出す絲の立田川。

きぬ 唐紅に秋風ぞ知る。

友之 唐紅に我が身の秋を知ると云ふ。

きぬ そんなら古歌の心と共に。

友之 マア、とつくりと思案をせい。

ト唄になる。友之進、こなしあつて、また中二階へ入

る。おきぬ、こなしあつて

きぬ 夫の望みを叶へようとすれば親に敵對。親に従へば

眞節を背く……唐紅に秋風ぞ知る。秋風は身にしみみく、と……ムウ。そんならこの身を、まさかの時は、唐紅になつても。

ト唄になる。さうぢやと云ふこなしあつて、中二階へツイと入る。後合ひ方にて、嘉六八介、奥より出て

八介 嘉六、いまノ、この家の亭主は、小栗栖十兵衛に相違ない。彼奴を生け置いては、お旦那友之進さまの仇となる。其方を頼む。人知れずしまうて取る工風をしやれ。

嘉六 よござります。彼奴さへしまうて取りや、惚れて居るおみさは、自然と手に入る道理。云はゞわたしが戀の敵。お頼みなうても、どうでしまうて取る積りでござりますする。

ト云ふ所へ、橋が、りより久馬出て

久馬 嘉六八介。

兩人 久馬さま。

久馬 友之進どの、頼みに依つて、小栗栖十兵衛を取逃がすまいと、同勢を以て、この家を取巻かせ置いた。

嘉六 マア、わたしどもが當つて見て。

八介 もし手強くば久馬さま。

久馬 オ、合圍と共に十兵衛めを。

嘉六 マア、それまでは。

八介 暫らく小蔭で。

久馬 われ達も、ぬからぬやうに。

兩人 合點でござりまする。

ト久馬、橋が、りへ入る。奥より足音するゆゑ、兩人、目くげせして、八介は橋が、りの柴垣へ、嘉六は上の方の路地口へ忍び入ると、奥より儀介出ると、本釣りに鐘にて、八ツを打つ。儀介、指折り數へ

儀介 もう八ツ。草木も寝入る丑満時。

ト中二階へ耳を寄せるこなしあかて

おきぬが安否。ハテ、心元ない。

ト云ふうち、中二階のうち、バタノとして

きぬ モシ父様、堪忍して下さんせ。娘の身として親に刃

向ふも、夫に添ひたさ。堪へて下さんせ。

トまたバタノにて、障子へバツと血煙り立つ。儀介

驚ろき、二階へ駆け上がり、障子残らず明けると、お

きぬ、手を負ひ、抜き身を持つて苦しみ居る。二階の

後の壁切り、破りある。儀介、この體を見て

儀介 コリヤおきぬ、さては事を仕損じ、手を負うたな。

きぬ エ、面か目めない。お前まへに受う合ありた甲か斐ひもなう、むご  
たらしい父とと様さま。わたしに手てを負おはせ、ソレ其そのやうに壁かべを  
切り抜ぬき、裏うら道みちから落おちさつしやつたわいなア。  
儀介ぎけい すりや、友とも之の進しんは。おのれ、程ほどは行いくまい。

ト二階かゐより走はしり下くだり、行いかうとする。

きぬ ア、コレ、系圖けいずの手てが、りが手てに入いりました。

ト一通ひとつを抛なる。儀介ぎけい、取とつて披ひき

儀介ぎけい 先達せんたつに受う取とり申まし候まうふ彼の系圖けいず、所持しよじつ仕まつり、今いまにて

は木曾きその谷やに罷まりあり候まうふ間ま、其許そのよの手番てばんひ次第しだい、早々はや

お知らせ下くだされ候まうは、早速さつそく彼の系圖けいず持もつ参まいたし申ますべ

く候まうふ、安達あんだ友之進ともしんさま、同苗どうぼう友九郎ともくわう……ムウ、すりや

系圖けいずは友九郎ともくわうが所持しよじつするとな。エ、忝かたじけない。系圖けいずの在あ

所ところと云いひ、友九郎ともくわうが隠かくれ家がまで、一時ひとときに知しれたも、おき

ぬ、其方そのかたが働はたらき。オ、出い出したなア。

きぬ その一通ひとつを奪うばひ取りましたゆゑ、この手痕てあと。所詮しよせんこ

の深手ふかてでは助たすかりもしますまい。殊ことに友之進ともしんの娘むすめのわた

し、とてもこの世よで添よはれぬからは、死しんで未み來らいの縁ゆかりを、

頼たのみますすわいなア。

儀介ぎけい 氣遣きづひするな。この一通ひとつの功こうに依よつて、未み來らいの縁ゆかりを  
結むすんでやらう。

トこの時とき、八介やっけい嘉六かろく出でて  
兩人りふにん その一通ひとつを。

ト兩方りふほうより取とりにかゝるを拂はらひ退ひけ、一通ひとつを懐くわい中ちゆうして

儀介ぎけい わいら、こりや何なにする。

八介やっけい うぬは小栗せうり柄がら十兵衛じへいゑ。

嘉六かろく 友之進ともしんさまのお頼たのみで、しまうて取とるのぢや。

八介やっけい 青木あおき久馬くまも此方このほうの味方みかた。大勢おほせいの家來けらいがこの家やを取とる

いて居ゐるわい。

嘉六かろく 最早いちばん遁にがれぬ小栗せうり柄がら十兵衛じへいゑ。

兩人りふにん 覺悟かくごせい。

ト儀介ぎけいにかゝる。爰こゝにて三人さんにん立廻たちまわりになる。トハ八介やっけい、

抜ぬいて切りかゝるを、儀介ぎけい、八介やっけいが抜ぬき身み引ひき取とつて

兩人りふにんとも切り結むすぶ。兩人りふにん、逃にげて入いる。儀介ぎけい、抜ぬき身み

振あり上げ追おうて入いる。おきぬ、あせつて

きぬ ア、コレ、怪け我げさしやんすな。長追ながおひ無用むようにして下くだ

さんせいなア。

ト抜ぬき身みを杖つゑに立たち上あがらうとして、いろ／＼苦くるしみ、

ウンと二階かゐにて轉まげ死しぬる。儀介ぎけい、抜ぬき身み引ひ提ひげ戻もつ

て來くると、この時とき捕とり物もの太鼓たいこになる。

儀介ぎけい ヤア、最早いちばんおきぬは相果あひはてたか……ホイ。



兩人 うぬ。

ト此うち嘉六八介、竄ひ出て

トかゝるを儀介、兩人を當てる。嘉六八介、ウンと轉けると、橋が、りの内にてバタ／＼と大勢の人音するゆゑ、儀介こなしあつて、高橋の上へ上がると、橋がかりより久馬、捕り手大勢連れ出て、おきぬの死骸を見

久馬 おきぬは相果てたか。小栗柄十兵衛はいづくへ失せ

ト云ひ、嘉六を見附け

こりや、氣絶いたし居る。

ト當て退す。嘉六、ウンと氣が附く。

コリヤ、十兵衛に逃げ失せたか。

捕手 どつちへ行たく。

嘉六 コレ、久馬さま、十兵衛は正しくこの道へ逃げ居つ

た。久馬 すりや、この道へ。者ども續け。

捕手 ハア。

ト久馬、捕り手皆々、嘉六に附いて向うへ走り入ると、儀介、高橋より旗を下り、行かうとするを、八介、起

き上がり、後よりかゝるを、儀介、立廻りにて八介をボンと切つて向うへ走り入る。

ひやうし幕

### 五幕目

木曾棧橋の場

役名——安達友九郎。代官、舌切忠太。雲助、戸根七。同、熊八。同、胴六。道具方、小助。十兵衛女房、擗。小栗柄十兵衛。

造り物、向う黒幕。東西小補山、よき所に稻村。平舞臺の真中に石地蔵立てあり、右は木曾路。上松の山寄せ。三昧の體。在郷唄にて幕開く。

ト旅人四人出て

旅一 モシ、爰は何と云ふ所でござりまするな。

旅二 爰は上松の山寄せ、三昧でござんすわいの。

旅三 エ、焼場でござりまするか。

旅四 なんと、焼場で一服せうかい。

旅一 さうせうく。

旅二 ドレ／＼、待たんせ。火を打つぞ。

ト旅人二、摺火打ちにて火を打ち、煙草のむ。皆々も吸ひつけ、下に居ると、向うより小助、旅芝居の道具元の拵らへにて、葛籠を春負ひ、竹杖を突き、足の痛むこなし、ちが／＼と出て来て

小助 モシ／＼、宮の越へは、もう近うござりまするがた。

旅四 イエ／＼、まだ四里ごんすわいの。

小助 エ、まだ四里ござりまするかな。そりや、ちつと休まにやいけぬ。ドレ／＼、わたしも一服せうわい。

ト葛籠を下ろし、煙草吸ひつける。

旅二 見りや、こなたは葛籠を負うたが、おかしい形でごんすなう。

旅一 何商賣さつしやるぞ。

小助 ハイ、わたしは旅芝居の道具元でござりまする。

旅四 ムウ。そんなら葛籠の中は、芝居で使ふ道具でござんすか。

小助 ハイ、この中には、何やかや、小道具が入つてござりまする。

旅三 さうして、どこへ芝居に行かしやるぞ。

小助 ハイ、今まで野尻で打つて居りましたが、次の芝居

が宮の越へ賣れまして、役者は皆先へ行かれましたが、わたしは足が痛みますゆるゑ、後からそろ／＼参りまするのでござりまする。どうぞ今日中に、宮の越へ行きたうござりまする。

旅一 そんなら、もう休まずに行かつしやれ。宮の越まで四里あるぞや。

旅四 その上、福島までのうちに、木曾の棧橋がごんすわいの。

旅二 山から山へ丸木橋をかけて、その下は何丈ともない谷底。落ちたら微塵になる事ぢや。オ、恐ろしや／＼。

旅三 何としてその足で、日が暮れたら一向行かれるものぢやない。

旅四 ちやつと行かしやれ／＼。

ト此せりふを聞いて、小助、頷をしがめ

小助 ハイ、参りませうが、その木曾の棧橋は、氣味の悪いものでござりまするなア。

旅二 氣味の悪い次手に、爰は三昧ぢや。日が暮れたら狼が出る。もう七ツ下がりぢや。ちやつと行かうぢやあるまいか。

皆々 サア、ござれ／＼。

ト昔々、コヤノ、云うて向うへ入る。

小助 ア、情ない。先へ行けば末曾の棧橋、爰に居れば狼  
わらなり。イヤ、狼わらに居やうより、棧橋の方がまし  
ぢや。一足なりと早う行て。

ト葛籠を背負ひ行かうとして、足の痛むこなし。

ア、心ばかり急いでも、肝心の足が痛む。ア、何  
とせう。今夜は爰で野宿もせにやならぬ。シタガ、狼が  
出をつてはつたらぬ。どうやら風が身に沁んで、じわじ  
わと小氣味が悪い。どうぞ出居つても逃げて行く仕様が  
ありさうなものぢやが。

ト云ひ、葛籠を明けて、中より鐵砲を出し

鐵砲はあつても、芝居の道具、役には立たず。

トまた葛籠の中へ掘り込み、また鬼の面としやぐまを  
出し

よし、この鬼の面を冠つて、このしやぐまを着て居  
たら、如何な狼でも、咬みつき居るまい。さうぢやさ  
うぢや。

ト面としやぐまを着て、石地藏の側へ行き

コレ、地藏どの、今夜は爰を借ります。地藏と鬼と、  
まんざら退いた仲でもごんせぬ。宿貸して下され。

ト加賀屋にて云ふと、唄になる。小助、葛籠かたげ、  
稻村の後へ入ると、橋が、りより忠太代官にて、後よ  
り熊八、雲助にて、竹の息杖を腰に差し、ついて  
出る。

熊八 ハイ、モシ、お侍ひ様へ申し上げます。何か  
は存じませぬが、私どもをお呼びなされます御用と  
は。

剛六 マア、その御用は何事でござりまするな。

ト云ひ、本舞臺へ附いて来る。

忠太 わいらをこの所へ呼び寄せしは、密かに申しつける  
仔細がある。去年五月二十五日、奥州三輪の家中に、小  
栗十兵衛と云ふ者、師匠花園主水を討つて國を立退き、  
京都西陣にて織屋儀介と名を替へ、即ち女房擗と云ひ  
しも、下女となつて忍び居る事お聞きに達し、捕り手の  
人數差越されしところ、その場を切り投げ、行き方知れ  
ず。さるに依つて配符を以て、所々方々と十兵衛夫婦の  
者を御詮議。それゆゑ當地を預かるこの舌切忠太、内意  
を以て、何卒密かに掬め捕らんとの議。われ達は東海道  
木曾路を徘徊いたす者ゆゑ、申しつける。往來の者に心  
をつけ、十兵衛夫婦の者を引つ縛つて來らば、一廉の裏

美うつくをくれる。なんと心得こころえたか。

朋六 呑み込みました。私わたくししどもが頭張かぶ張りつたら、引ッ捕ひっつかへてお手渡てわたし申しませう。

熊八 して、舌切したぎり忠太どの、お屋敷やしきは。

忠太 あこの山越やまこえて、この山のあちらで、舌切したぎり忠太どののは爰こゝらにはござらぬかと尋ねやれ。

兩人 合點あてでござりまする。

忠太 然しからば兩人ふたり。

兩人 さらば。

ト唄うたになる。三人、橋はしが、りへ入ると、しめやかな合あひ方かたになる。向むかうより、操みさ、着流きりやうしにて髪かみも少しバラ

パタと、旅簾たびせれの體てい、藁わら苞づとに一腰ひとこしを隠かくし入れ、春中はるなかに割わり掛け、懷ふところに子こを拘かき出でる。後あとより戸根七とねしち、雲助くもすけにて、竹たけの息杖いきづえを腰こしに差し、咬くはへ煙管えんくわんにて附ついて出でる。

戸根 コレノ、女中にようぢゆう。マア、待まちたんせい。

操 先刻さきときから云いふ通り、駕籠かごは嫌きらひおやわいの。

戸根 ハナサテ、女子にようしの大膽だいだんな一人旅ひとりたび。殊ことに見みりや水子みづこを抱かかへて産後うぶごと云いひ、これから先さきはきつい難所なんじよぢや。怪我けががあつては悪い。平ひらに乗のりつて行いかんせいなる。

ト云いひ、本舞臺ほんぶたいへ來きる。

操 ハテ、駕籠かごは嫌きらひぢやと云いふのに。

ト臆病口おび病ぐちへ行いかうとするを、引ひき廻まわして立ち塞さがり戸根 駕籠かごが嫌きらひなら馬うまにさんせ。

操 ヤ。

戸根 斯かう云いひかゝつては、否いなでも應おでも乗のつてもらにはにやならんわいの。

ト云いふうち、橋はしが、りの袖山そでやまの後うしろより、熊八くも朋六とも六出むつで

兩人 オ、乗のつてもらへく。

戸根 朋六とも、熊八くもか。

熊八 コリヤ、戸根七とねしち、わりや先刻さきときに忠太ちゆうたどのが、云いひつけた事こと聞きいたか。

戸根 オ、次原つぎはらの立場たちばなで聞きいたに依よつて、丁度ちやうどよう似にた恰好ちやうこうぢやと思おもうて、それで乗のせうと云いふのぢや。

朋六 コレ女中にようぢゆう、これから先さきはきつい用心よこころが悪い。

熊八 路銀ろぎんがなくば、只ただ乗のせてやるわい。

三人 乘のらんせく。

操 イヤモウ、其そのやうに云いうて下くださんすな。乘のりたうはござんすけれど、何なにを云いうても。

朋六 駕籠かごが否いななら馬うまにさんせ。

操 ハテ滅相めつさうな。姫御前ひめごぜんのあられもない。



戸根 馬が濡なら人に乗らんせ。

操 ヤ。

戸根 こなさんのやうな美しい女中は、おりや乗りたい。

サア、おれが上へ乗つておくれ。

ト操に抱きつくを突き避け

操 てんごうさしやんすないなう。

兩人 おいらも乗せてもらはう。

ト兩方より操が兩手を取るを、よろしく振り拂ふ。こ

のほずみに水子泣く。ちやつといぶりながら

操 こりや、女子一人を、なんとするのぢや。

三人 詮議するのぢや。

操 ヤ。

三人 小聖橋十丘衛が女房。

操 なんと。

戸根 代官所へ連れて行く。

三人 うせ居らう。

ト兩方よりかゝるを、身を沈め、熊八關六を投げる。

水子泣く。戸根七かゝる、立廻りのうち、水子泣くと、

後の稻村より小助、鬼の面しやぐまを着ながら、竹杖

驚き

三人 ヤア、鬼が出をつた。免せ。

ト三人、橋が、りへ逃げて入る。操も驚ろき、顛うて

居る。小助、三人を息杖にて追ひ散らし

小助 サア、もう氣遣ひはござりませぬ。

ト操が側へ行かうとする。操、怖がり飛び退く。小助、

心得て

エ、聞えた。

トしやぐまと面を取り

モシ、私しでござりますわいな。

ト操を見て

操 ヤア、其方は。

小助 父御主水さまに使はれました、中間の小助でござり

ます。

操 ほんに小助。

小助 操さま。

兩人 これはしたり。

ト兩人、下に居て

小助 ヤレ、お懐かしや。私も親旦那主水さまに、御奉公いたし居りますればよいものを、何が一杯酒にこ

の身を忘れ、明輩と口論仕り、喧嘩兩成敗と、お暇が  
出まして、それから方々と流浪いたし、只今では旅移ぎ  
を致して居ります。いよ／＼噂に違はず、親旦那主水  
さまは。

操 お果てなされたわいなう。

小助 すりや、小栗栖十兵衛さまが。

操 サア、その十兵衛と云ふはわしが夫。

小助 エ。

操 安達友之進が悪心にて、お家の系圖紛失。何卒友之  
進を討つて、家國を全うせんと、城下の町はづれに待ち  
受け、友之進が提灯の紋を目當に、父上様とは夢にも知  
らず、友之進と思ひ、只一討ちに切り殺し、わしも語と  
も圖を立退き、都西陣に身を忍ぶうち、兄様に巡り逢ひ、  
様子を開けば父様の御最期。敵と云ふは夫十兵衛どの。  
討つに討たれぬこの身の因果。是非なう飽かぬ別れをし  
て、兄三十郎どのと一緒に、知る邊の方に居るうち、心  
ならずまた西陣へ行て見れば、十兵衛どのも立退いて、  
行き方知れず。お腹にこの子を持ちながら、あそこや爰  
とさまよふうち、つい經つ日數、當る十月に首尾より産  
み落し、どうぞこの子の顔が、十兵衛どのに見せた。

女子の身の大膽に、どこをせうど、定めぬ旅路。小助、  
わしが心の悲しき、推量してたもいなう。

ト泣く。

小助 オ、お道理でござりまする。時に、もう追ッつけ  
日も暮れまする。爰に置きましては、また今の奴等がう  
せると悪い。サア、一足も早うお出でなされませ。私し  
がお供いたしまする。

ト云ふうち操 癪の差込みたる體にて、苦しむ。

モシ／＼、なんとなされました／＼。

操 サイナウ。心遣ひで、癪が胸先へ差込んで。

ト苦／＼きなし。雨車になる。

小助 それは御禮儀であらう。そんなら猶以て爰には置か  
れませぬ。私しがこの向うの在所を頼んで、今夜一夜さ  
どうぞ留めてもらふやうに頼んで参りませう。ドレド  
レ、お手を引いて上げませう。サア／＼、爰へ暫らく入  
つてござりませ。

ト操を介抱して、稻村の後へ入れ、こなしあつて

ア、聞けば聞く程お痛はしい。ドレ、一時も早う在所  
を頼んで来うか。

ト唄になる。小助、向うへ入ると、静かな合ひ方にな

る。向うより安達友九郎、尾羽打枯らした浪人の形。百日誓。大だち、一本差し、懐手にて、のさ／＼出て来る。後より戸根七熊八、附き出て、花道に立ちとまり

三人 お頭、今ごんしたか。

友九 オ、三人の者。身共もフツとこの國へ来て一年餘り。わいらが頭々と世話してくれる志し、おれも追ツつけ元の身になつたら、この返禮にわいらを取立てやらう程に、もそつとぢや。辛抱して働け。

戸根 頭の云はんす事わいの。こちらが世話するなど、は、近頃迷惑でござんす。

朋六 劍術柔術、抜け切つて居やんすこなさん。

熊八 こちらも晝は雲助、夜は山だち。これまでどんな奴に出合つても、ひけを取らぬはお頭のお庇。

戸根 その恩報じ、三人とも随分

三人 世話せにやなりませぬ。

友九 さう思うてくりや、おれも落ちつく、コリヤ、落ちつく。下手に見せる物がある。

ト懐中より系圖取出し

これは彼の三輪家の系圖。見友之進どのが奪ひ取り、お

れに渡して、この木曾の山奥に隠れ住居。今でも兄貴から、大敵を殺らした早打ちが来るを合圖に、この系圖を持つて奥州へ歸り、三輪家はこちら兄弟が物。その時はわいらも、家老に取立てくれる。喜べ。

三人 それは忝なうござんす。

戸根 時にお頭、日頃こなさんが噂さんした、小栗栖十兵衛が女房が來をつたぞや。

友九 そりや、どこで見附けた。

熊八 先刻に爰で見失ひましたが、まだ遠くは行き居るまい。

友九 コリヤ、わいらはこれから福島へ行く道の辻堂、又は谷々の森の内。なんでも茂み／＼を頭張つて、ぶさつて居るなら引ッ捕へて來い。

三人 合點でござんす。

友九 行け。

ト此うち合ひ方にて、右三人、向うへ入る。友九郎、本舞臺へ來て

もう暮れに間もない。彼奴等が戻るまで、向うの谷の寄合ひで待ち合さう。

ト橋が、りへ行きかけると、稻村の後より

操 モシ〜。

ト呼びかける。友九郎、キツと立ちとまり

友九 今の聲は慥かに女……呼びかけたは、おれが事か。  
どこから呼ぶのぢや。

トうそ〜と後へ戻る。此うち操、稻村の後より、瘡に苦しむ體にて俯向きながら、そろ〜出て

操 イヤ、私は途中で糺が差込みまして、難儀を致します。お薬の御用意がござりまするなら。

ト云ひ〜、互ひに顔見合せ、兩人憔悴  
ヤア、こなたは。

友九 其方は。

操 安達友九郎どの。

友九 主水が娘様。

ト操、逃げうとするを、友九郎捕へ

待て。最前この畔へ来た様子を聞いたに依つて、手下の者どもに今尋ねにやつた。揮よ、友九郎が云ひ聞かす事がある。マア〜、待ちやいなう。

操 イエ〜、わたしや何にもこなさんに聞く事はない。  
爰放して下され。

ト振り切るを、また引きとめ

友九 操、そちや親を討たれ、さぞ口惜しからうな。

操 なんと。

友九 敵と云ふは小栗栖十兵衛。

操 それをどうして。

友九 知つて居る。天知る地知る人知る。我れ知る。この友九郎、よう知り抜いて居る。なぜ討たぬ。イヤサ、親の敵、なぜ本望遂げぬ。討たれぬか。討たれまい。現在の夫を敵と云うては討たれまい。なんと、罰と云ふものは恐ろしいものであらうがな。首だけ働れて居るこの友九郎に、鼻明かして、十兵衛とくさり逢うた罰が申つて、親を討つた敵は夫。オ、よい態ぢや。コリヤ、よう合

點せいよ。われがいつまでも十兵衛につき纏うて居ると、親主水へ不孝となるぞよ。ぢやに依つて、十兵衛が事を思ひ切つて、友九郎が女房になれ。さすれば死んだ主水は、友九郎が舅の敵。見附け次第に切り刻んでくれる程に、操、おれが願ひを叶へてくれい。

ト抱きつくを突き退け

操 否ちやわいなう。一旦夫と定めた十兵衛どの、例へ

敵にあらうか、どうせうが、こな様の世話にはなりません。十兵衛どのとわたしは、ついでに仲ぢやござんせぬ、

操 否ちやわいなう。一旦夫と定めた十兵衛どの、例へ

敵にあらうか、どうせうが、こな様の世話にはなりません。十兵衛どのとわたしは、ついでに仲ぢやござんせぬ、

操 否ちやわいなう。一旦夫と定めた十兵衛どの、例へ



よく／＼深い縁なればこそ、情の胤を産み落しましたわいなア。子まである仲を別れ、こなさんの女房には、マア、え、なりませういな。

ト赤子筒。

友九 ムウッすりや、もう子性までへり出したか。大事な。例へ何走へり出しても、青山八反に替へると云へば、大事ないわい。

操 香ちや／＼。そんな穢らはしい事、聞きたらないわいなう。

ト行かうとするを、引戻し、キツとなつて

友九 うぬ。さう吐かしや、可愛さが餘つて憎さが百倍。生け置いて十兵衛と添はすがむやくしい。殺らしてくれろが、それでも否か。

操 例へ一命を捨て、も否ちや。女子と思ひ、手向ひしやつたら許さぬぞ。

ト一腕に手をかけ、身構へする。

友九 よいワ。所詮生けて置かれぬおのれ。元來十兵衛に主水を討たせたは、我れ／＼兄弟が大願成就の印。

操 ヤ、なんと。

友九 兄弟と進どのに主水を釣り出させ、城下の町はづれ、

柳が下に打ち殺す手筈。そこへ駆つけた十兵衛のうろたへ者。兄貴の提灯の紋。口常に、切りつけるをかい潜り、提灯打ち消し逃げ延びた友之進の運の強さ。微運は主水と十兵衛め、うぬが男とも知らず切り殺し、その場で腹でも切つてくたばる事か。國邊をひろいだ大腰抜け。我れ／＼兄弟が思ふ壺へ持ち込んだは、十兵衛めが大馬鹿ゆる。へ、ハ、ハ、ハ、ハレ、よい態ちやなア。

ト操、口惜しがり、友九郎に詰めかける。

口惜しいか。無念なか。オ、口惜しからう。追ッつけ十兵衛めも首はころり。その時わりや首のない男に添うて居るか。あの詰な大たわけめが。

ト蹴る。操、キツとなつて

操 さては其方葉兄弟の企みであつたか。父様の恨みの刃、思ひ知れ。

ト切りかけるを留めて

友九 所詮従はぬおのれ。殺らしてくれろ。覺悟せい。ト兩人立廻り、此うち水子泣く。右立廻りのうち友九郎、懐中より系圖の一巻落ちる。操、取つて

操 こりや正しうお家の系圖。

友九 それを。

ト取りにかゝる。立廻りにて友九郎、水子を引き取る。  
子泣く。

操 ア、それを。

友九 この餓鬼が欲しくば、その系圖おこせ。

操 イ、ヤ、系圖渡す事ならぬ。

友九 系圖渡さにや、この餓鬼ひねり殺すぞ。

操 早まるまいぞ。

友九 系圖を戻すか。

操 サア。

友九 ひねり殺さうか。

兩人 サア。

友九 サア

兩人 サアくく。

友九 トぢりくくと附け廻し

友九 どうぢや。

ト操、覺悟締めしこなしにて

操 大切な系圖には替へられぬ……さうぢや。

トこれより友九郎を滅多切りに切り立てる。友九郎、

水子を抱かへ、あちこちと逃げ廻り、ト橋がよりへ逃げて入る。操、後より

卑怯者、返せ戻せ。

ト追ひかけ入る。チョンく

返し

造り物、三間の間、崖、岩角聳え、橋が、り一間半、

これも崖、岩角鋭く、真中一間半程谷間にて、これ

に荒木の丸木橋をかけ、この橋の側に枝振り面白き

赤松、谷へ乗り出しあり、後は奥深くして一面の山

にて、真中打抜き御嶽川の流れ。岩に水垢かれて瀧

の如く、末はこの丸木橋の下へ流れ落ちる見得。右

兩方の崖、山の高さ、いつもの二重舞臺ほどあつ

て、下の見切りの所は一面の霞にて、後の山々谷々

の間は残らず霞にて、よろしく、右松の元に藁谷一

つ捨てあり、右は木曾山棧橋の體。暮れ六ツの鐘、

數多の諸鳥啼に寄る見得。小鳥大分飛び廻る仕掛け。

内より小鳥笛にて、數多の囀り、この體にて道具と

まる。

ト友九郎、臆病口の山手より右水子を抱かへながら三

間の間の崖山へ走り出る。水子泣く。友九郎、息の切

れたるこなしあつて、丸木橋の側にて、どつかとへた

り、息吐くこなし。始終水子泣く。  
友九 エ、やかましい穢鬼めぢや。おれも息吐く間があるわい。

ト云うても矢張り泣いて居る。空にて小鳥囀る。

此奴は聞分けがない筈ぢやが、この又小鳥めらも、やかましう囀り居る。

ト橋の向うの藁倉を見つけ

オ、好い物がある。

ト丸木橋をツカノと渡つて、右の倉を取つて

ムウ、木樵めらが忘れて失せ居つたのぢやなア。よしよし。丁度好い物があるワ。

ト右の倉へ水子を入れ、松の木の枝へ掛ける。水子泣き止む。

ハテサテ、奇妙なものぢや。たつた今まで、アタやかましう吠えあがつたが、この倉へ入れて蒸の枝へ掛けたら、あやと泣き止み居つた。イカサマ、在所の奴等が倉に子を入れて置き居るは、この格ぢや。ハ、、、。何が氣に入つたやら、無性に笑ひ居る。待て〜。息休めに一服のんで、後で捻り殺してやらうぞよ。へ、、、ハ、、、。ト火打ちにて煙草のみにかゝると、バタ〜。臆病口

操 より操、抜き身を持つて  
オ、イ〜。

ト呼ばり〜出て、谷の向うの友九郎を見附け、直ぐに丸木橋を渡らうとする所を、友九郎、兩手にて丸木橋を跳ね上げる。これにて操、かつぱと轉け、岩角にて胸を打ちし見得にて、ウンと氣を失ふ。友九郎につたり笑ひ

友九 ムウ。岩根で胸を打ちさらして氣絶し居つたな。巧いワ〜。

ト丸木橋をこなたへ渡る所へ、臆病口より小助出て、操を見て

小助 ヤア、操さま、コレ、氣を慥かに持つて下され。

ト友九郎を見て

こりや、うぬが仕業ぢやな。

ト友九郎にかゝる。友九郎、手頃の石を取つて小助が面體を殴り砕く。小助、顔血だらけになつてよろめく所を、後の谷へ墜り落し

友九 先づ此奴も入滅ぢや。

ト操を見て

よいワ。どうで正氣があつては、滅多に采圍は渡し居る

まい。斯うして置いて取返すぢや。

ト操が懐へ手を突ッ込まうとする。操むつくと起き  
て、側にある抜き身を取り、友九郎が眉間をてうと切  
る。友九郎、ワツと轉ける。操、抜き身を持つて、す  
つくと立つてキツと見得。この時小鳥の囀り止んで、  
詛らへの合ひ方になる。操、友九郎を切りに行く。友  
九郎、寝ながら刀抜き、操を横なぐりに切る。操たち  
たちと後ずさりする。友九郎、起き上がつてまた切り  
つける。操、受けとめる。また水子泣き出す。操これ  
見て畚の方へ行かうとする。友九郎、後より操を切る。  
操、橋の側にて轉ける、直ぐに寝ながら抜き身振り立  
て、ころ／＼と轉けながら、友九郎を追ひ廻す。友九  
郎、操を飛び越え丸木橋へ逃げる。操、起き上がり、  
同じく丸木橋へ行く。兩人橋の上にて立廻り。この立  
廻りの模様にて友九郎、松に掛けたる畚の紐を切る。  
薬谷水子ともに遠かの谷へ落ちる。操驚ろき、丸木橋  
より下の谷へ飛ばうとするを、友九郎また切る。操ウ  
ンと反り返つたなりに、橋をタヂ／＼と戻り轉ける。  
友九郎、續いて後へ戻り、また切りつける。操、見得  
よく留る。すべてこの立廻り、兩方手を負ひ、互ひ

によるめき、兩人よろしく見得にて、ドツコイととま  
ると、チヨン／＼、一聲になる。

この山の道具一面にセリ上げる。此うち操友九郎、  
立廻りしながら道具段々にセリ上がる。ト、残らず  
セリ上がると、谷底の景色、苦滑かに青蔭照り蔭一  
面にしだれ、この谷底に十兵衛、旅修行の虚無僧の  
形にて、件の薬谷、谷へ落ちたる體にて水子泣いて  
居る。十兵衛、この子の泣き聲に氣を附ける。こな  
し。兩手を組み、キツと立つて居る。この見得にて  
薬谷ともにセリ上げる。此うち始終詛らへの合ひ方  
に、一聲打ち込み、道具残らずセリ上がると、また  
靜かなる合ひ方に變り、コイヤイになる。十兵衛こ  
なしあつて

十兵衛 ハテ、訝かしやなア。暮れに及び、物の黑白も見え  
分ぬに、谷間に響いて幼な子の泣き聲。爰は所も木曾の  
谷蔭。夜に入つてかゝる不思議は、正しく變化の所爲な  
るか。何にもせよ、不思議の有様ぢやよなア。

トこなしあり、始終赤子泣く。  
何にもせよ。



ト火打ちを腰提げより出し、ほくちに火を打ちかけ、そこらあたり撫て廻し、木の葉掻き集め、火を吹きつける。仕掛けにてパツと燃える。この明りにて畚に入つてある子を見て

こりや正しく人間。この畚の紐の切れしは、さてはこの山の絶頂より、取落したるよな。併し、かゝる高山より、數千丈の谷底へ落ちたる幼な子。身體ともに疲れたき有様は、何にもせよ不思議の幼な子。

ト畚より取出し抱くと、子泣き止む。十兵衛、水子の首に掛けたる守を取つて見て

この守は正しく。

ト水子を懐へ入れ、守の内を改め見て

こりや某が、兼ねて信ずる開運自在、摩利支天のお守。こりやコレ先達で西陣に於て、女房に遣はし置いたるその守。今この幼な子が所持せしは。

ト水子の顔をつく／＼見て

頼みのかゝり、眉際、目元鼻筋口元まで、女房に生寫し。さては首尾よく性を産み落し、某が行くへを尋ねんと、この山上を通りしところ、誤まつて取落せしものか。何にもせよ、遙かの絶頂より谷底へ落ちたる性。身體恙な

かりしも、この摩利支天の守の奇瑞。エ、有り難やなア。

ト守を出し廻くと、山の上バタ／＼にて、友九郎、谷へ送り落ちし體にて、どつさり落ちて十兵衛と頼見合せ、兩方抱り

友九 小栗栖十兵衛。

十兵 安達友九郎。

友九 うぬを。

トかゝる。立廻りよろしくあつて、十兵衛ボンと當てる。友九郎ワンと轉げる。十兵衛、友九郎が懐中を捜して

十兵 こりや紛失の糸圖、彼奴が懐中に所持せしと思ひしに……ムウ。

ト思案のこなし。バタ／＼にて、また山の上より操。これも谷へ送り落ちたる體にて、ばつたりと落ちて絶入るを、十兵衛見て、操を抱き起して

コリヤ女房、氣を儘かに持て。十兵衛ぢやわやい。

ト耳の際にて大きな聲して云ふ。操キツとなつて十兵衛を見て

操 ヤア、十兵衛どのか。悲しい事をしましたわいな

ア。

ト泣く。

十兵 コリヤ、氣遣ひするな。其方が歎くは、この忤の事か。

ト水子を見せる。操 恟り

操 ヤア、其方は無事で居てたもつたかいなう。

ト抱き取り

ア、嬉しや〜。

ト喜び抱き締める。

十兵 オ、喜びは道理々々。某も三十郎に詞を番ひ、その夜に友之進を引ッ捉へ、系圖を取返し、三十郎に手渡しして、潔く彼れに討たれんと思ふところ、梨さへ娘おきぬにまで手を負はせて、立退いた人非人。おきぬが働らきにて、系圖の在所は安達友九郎、この木曾の谷蔭に隠れ住むと、彼れが自筆の手紙を、我れに渡して取へない最期。それより京地をば立退き、この如く姿を替へ、友九郎が在所詮議せんと、信濃路へ越き足を留め、木曾の山々谷々を、忍び〜に徘徊せしが、今日暮れに及んで、この谷蔭を通りしところ、遙かの上より何か谷底へ落ちたる音。合點ゆかずと窺ひ聞けば、幼な子の泣き聲。

いよ〜以て訝かしく、木の葉を以て焚火となして、よく〜見れば先達て、其方を離別の時、潔し置いたる摩

利支天の御守。さてこそ我が子と知つたるが、そちや又何ゆゑ、この木曾山へは參つた。

操

何としてとは聞えませぬ。十兵衛どの、義理と孝と

に迫つて、飽かぬ別れをしましたれど、どうぞ今一度逢ひたさに、兄様の手前を抜けて出て、西陣へ行て見れば、早お前は立退かしやんして行くへは知れず。それから後を慕うて都を立退き、彼處や爰とさまよふうちに、この子を産み落し、もし本國へ下らしやんした事もあらうかと、奥州を志し、行く道のこの山で、友九郎に出逢ひ、無禮の不義を開入れぬを憤り、コレ此やうにわたしには手を負はせ、この子も谷へ落した、その時のわたしが悲しさ。おのれ我が子の敵と、心は矢竹に逸れども、相手は手者、わたしは弱く、この通りに手紙を負ひ、所詮長らへ居られませぬ。コレ、十兵衛どの、兎角頼むはこの子の事。口惜しいは友九郎を、討ち滅らしたる残り多せ。口惜しうござんすわいなア。

ト操こなしあつて泣く。

十兵 女房喜べ。今友九郎に出合ひ、眞の當を以て呼吸

を止め置いたれば、死人も同然。この上は其方が敵、友九郎めを一分だめし。ずた／＼にして、其方が無念を晴らさうぞよ。

操 エ、そんなら友九郎めを。エ、嬉しうござんす。

トこなしあつて苦しむ。

十兵 コリヤ女房、手癖は浅い。氣を臂かに持つて。コリヤコリヤ女房ども。

トあせるうち、操は様々こなしあつて死ぬる。十兵衛もこなしあつて

こりやもう、鮮切れたか。ホイ。

ト操が腰の子を抜き取る。また水子泣く。この時、友九郎心附いて

友九 十兵衛め、うぬ。

ト切つてかゝる。十兵衛、腰の筒袋に仕込みし刀を抜き、いろ／＼立廻りあり、此うち子泣く。ト十兵衛、友九郎を一かせ切る。友九郎、十兵衛に掴みかゝる。

十兵衛、友九郎が胸腹へ抜き身をグツと突ツ込む。友九郎、すつくと立ち身になつて跳き苦しむ。十兵衛、見得よく友九郎を扶る。水子泣く。十兵衛、手にて叩

くと、寝鳥、どろ／＼にて、操、すつくと立つて

操 十兵衛どの。

十兵 女房ども。

ト十兵衛こなしあつて

十兵 人は最期の一念に依つて生を引く。さては女房、そちや幹に迷うたな。

ト友九郎を扶る。友九郎、苦しむ。操、十兵衛が顔を見て、こなしあつて、目を塞ぎ、がつくりとなる。十兵衛、グツと抜き身を引き抜く。このはずみに友九郎、ワンと中廻りする。操はつたり轉げる。十兵衛、操が方を見る。水子泣くゆゑ、血刀揚げながら、口の内に、いんのこ／＼と云うて、左の手にて子をゆぶる。この見得、御玉風よろしく。

幕

## 六幕目

居酒屋の場  
十兵衛隠家の場

役名 花園三十郎。酒屋嘉右衛門。同女房、お

つね。番頭、嘉六。下郎、琴助。名取川龍介。傾城・梅の戸。三十郎女房、お貞。おみさ。實ハ操の亡靈。代官、鹿間嘉間太。小栗栖十兵衛。

造り物、平舞臺、三間の間、向う赤壁、納戸口、上の方、折り廻り、世話障子屋體、右平舞臺、好き所に酒壺と醬油壺載せてあり、いつもの所に門口、橋が、斜めに、左の方、かつまの柴垣、右の方は敷疊、門口に繩暖簾を掛ける。屋根は、本舞臺も門口も葦屋葺き、門口の軒に、杉板の看板、柱に、醬油の板看板かけてあり、幕の内より、嘉右衛門、白髮親仁、木綿やつし、胸前垂れにて、酒徳利を洗うて居る。女房おつれ、木綿やつし、前垂れにて、賣場に上がり、酒醬油を計つて居る。この體、在郷唄にて、幕明く。

ト百姓三人、たんぼ樽、徳利など持ち出て酒小半合下され。

つれ アイ〜。

百二 酒五合下され。

つれ アイ〜。

百三 醬油三合下んせ。

つれ アイ〜。

ト計つて居る。

嘉右 オ、勘三どの、ござつたか。コレ婆、負けて進せてたもや。

つれ アイ〜。

百一 これは女夫ながら、きつう精が出ますの。

嘉右 イヤモウ、年寄つてから子はなし、と云うて何時死ぬる事やら知れもせぬゆる、是非なら精を出さねばなりませぬわいなう。

つれ 性根さへ眞直なら、今時分は内にて樂々と、兩親を養ひます、子はありながら不所存ゆる、十六年前勘當して、近所の手前、面目なさに、下地居た岩沼を、この七北田へ所替へ、思ひ付いたこの商賣、年寄られた親仁どのが、苦勞さつしやるも、悪道者ゆる。憎い奴とは思ひながら、何所にどうして居る事ぞと、案じるは親の因果でござりますわいなう。

ト泣く。

嘉右 これはしたり、また婆が、盗人めが事云うて泣きやるかいの。なんの様子も知らしやれぬ、近所の衆を捉へ



て、ア、暗なみや〜。

百二 イヤ〜、嘉右衛門どの、叱らしやんた。兎角悪い子程不便に思ふが、親の慣ひでござるわいの。

百三 それ〜、取分け料理は糺の事。

百一 性根が直つたら、また禮ねて戻らるゝでござんしよ。

百二 さうとも〜。コレ婆さま、きなく思はずと、随分女夫怪我せぬやりにさつしやれ。なんと、もう去なうかい。

百一 さうしませう。

百三 サア、ござれ〜。

ト在郷唄になり、三人、銘々徳利、たんぼなど提げ、花道へ行きかける。嘉右衛門、おつれ、片付けて居る。

ト向うより嘉六、穢なき形、破れ手拭を頬寄りして、飯椀を箸にて叩いて出て、三人の向うにて、飯椀を百姫一の鼻の先へ突きつける。

百一 エ、この乞食めが、悔りさせ居つた。

百二 ごろの癖に、悪漢落な奴ではあるぞ。

百三 さうして、人相の悪いごろぢや。

ト云ひ〜、嘉六と入れ違うて、百一、錢指しの残り錢三文、嘉六に見せて

百一 コリヤごろよ、この三文の錢が欲しくば、物を云へ。物を云うたら、これ遣るワ。

嘉六 馬鹿め、三文で誰れが物云ふもので。

百一 ワアイ、そりや物吐かした。

百二 おのれ、似せごろぢやな。

嘉六 オ、……サア、物云うた。おこせ。

ト百姫一を捉まへる。

百一 おのれがごろぢやと云うたが、嘘ぢやに依つて、三文遣らうと云うたも嘘ぢやわやい。

ト嘉六を突き退け、三人、花道へ逃げて入る。嘉六、後を見て

後を見て

嘉六 ヤイ、大盗人め、ようやりやアがつたな。エ、、忌しい。

トまた椀を叩き、本舞臺へ来て、門口に立つ。

嘉右 コレ婆、ごろぢや。手の内遣らしやれ。

つれ アイ〜……ドレ〜。

ト巾着より錢を出し、門口へ行て

ソリヤ。

ト手を差出す。嘉六、その手を取つて、おつれを門へ引出さうとする。おつれ驚ろき、門口の柱を捉まへて

コリヤ何しをる。故さぬかいやい。

ト云うても矢ッ張リ、嘉六、引振り出さうとする。

コレ親仁どの、ちやつと来て下され。ごろめが、わしが

手を放さぬわいの。

ト嘉右衛門、つか／＼と表へ行き

嘉右 おつれ、コリヤ、何さらすのぢや。

ト引逃げる。嘉六、高へ逃げ込む。

つれ 乞食めが内へ逃げ込んだわいなう。

嘉右 おのれ、出さらぬか。

ト嘉右衛門、おつれ兩人して、嘉六心遣ひ廻し、好き

所にて、嘉六、頼み取りを取り、三人見合せ

嘉右 ヤア、われは。

つれ 其方は。

嘉六 親仁さま、母者人。

兩人 嘉六か。

嘉六 ア、お懐かしうござりました。

トおつれに取りつき置く。

つれ 今も今とて其方の頼、云ひ出して居たわいなう。誠

當して内を出したも、もう丁度十六年、三十二にもなつ

たら、ちつと分別も出来たであらう。憎恨さへ直つた

ら、親仁どのへはわしが詫びをする。オ、マア、母者

で居やつて嬉しうござるわいなう。

嘉六 イヤモウ、十六年前に御當受けて、どうも仕度な

し、上方へ上り、京の西陣と云ふ所まで丁度来た。何か親

方の氣に入つて、元服すると直ぐに番頭責を承はり、

大勢の職人の世話から、呉服屋の受け答へ、何もかもわ

しが一人で引構へて、ほつとりとしたに依つて、親方に

暇を取り、久し振りで親達の顔を見ようと思つて、ほふ

ほふと岩淵へ行て尋ねたりや、北田へ引越さつしやつ

たと聞いて、わざ／＼来ました。母者人、マア、お二人

がなら、息災で喜びます。

つれ オ、年がいたら、挨拶萬事、大分おとなしうなり

やつた。モウ／＼何所へも行く事はない。直ぐに酒屋を

其方に譲つて、こちらは隠居。ナウ、さうでないか、親

仁どの。

嘉右 婆、黙りや。親方の氣に入つて、親方の番頭と云ふ

それが形か。道中筋の雲助にも劣つたる態をして、西陣

の番頭が凄まじい。御當職事事はさて置き、片時も爰に

置く事はならぬ。サア、キリ／＼出て行け。

嘉六 親仁どの、流石目高ぢや。如何にも西陣は先達てし

くじり、霧から海中をうろついて居ました。切身に鹽が  
 しみこんで濡み込みました。とんと性根を入れ替へます  
 る。親仁さま、勘當して、内に置いて下され。コレ、  
 手を合はして、拜むわいなう。

つれ、ア、霧のやうに云ふからは、嘘もござるまいぞい  
 なら。

嘉右 子に甘いも、好い加減がよいわいの。おのれ、つい  
 した事で直る性根ぢやない素体、おれがよろ見當かして  
 勘當したのぢや。何所の國にか、七ツ八ツから小盗みさ  
 らして、近所國から付け届け、所詮盗み根性は直らぬ生  
 れつきと思ふから、十六の年に勘當した。どうでおのれ  
 は刀の錆になる奴ぢや、サア、キリ／＼と出てうせん  
 か。うせずはおれが又。

ト嘉六が手を振り、引出さうとするを、突き飛ばし  
 嘉六 何さらすのぢや。老害め。七ツ八ツから盗みする盗  
 みすると、若輩がましう止かしさらすな。自衛の力が  
 近所國から、田畑國難たんと持つてけつかつても、鏡一  
 交くれさるさぬゆゑ、買ひの鏡はなし、近所國の物な  
 りと盗みいでどうなるもので。出て行けなら出て行かう  
 が、田畑國難買り帯うて、この七北田へ運來したからは、

ぐつすりと金しこ溜めて居るであらう。その金爰へ出し  
 さらせ。

嘉右 ソレ、さう云ふ御道者ぢや。田畑國難買り代なして  
 金持つて居ればこそ、年寄つても二人が、目遣きをして  
 察らして居る。何の鏡に、勘當したおのれに造らうぞい  
 やい。

嘉六 よいワ。おこしあがらぬと、おれが又家探して持  
 つて去ぬるのぢや。

ト奥へ行かうとするを、おつれ、嘉六を引寄ふ  
 つれ ヤイ、慈な不孝者め。さう云ふ心とは知らず、十六  
 年も逢はぬ事ぢやに依つて、親にどのへお見しやうたが  
 御道者い。おのれがやりた御道者め、よりも世界にあつ  
 た事ぢや。エ、おのれはなア。

嘉六 エ、アタ喧ましわい。

トおつれを振り、嘉右を御門、嘉六が首領を殺つて  
 歸りつ。

嘉右 慈な罰當りめ。母親を土足にかける恩知らずめ。サ  
 ア、この嘉右御門に指でもさいて見居らう。なんぼ年こ  
 そ寄つたれ、以前は屋敷に奉公したおれぢや。おのれに  
 渡りに賣けうか。悪う手向ひだてし居つたら、村の衆を呼

び寄せ、棒縛りにして代官所へ連れて行き、牢へぶち込んでこますぞ。おのれ、どうしてくれうぞ。

ト突き放し、側にあるおうこ取つて喰はしにかゝるな  
嘉六、摺り抜け、しつかりと捉まへる。

おのれ、コリヤ、手向ひしをるか。

つれ 村の衆を呼び寄するぞよ。

嘉六 エ、アタ喧ましい。去ぬるわい。

トおうこを突き放す。嘉右衛門、ひよろ／＼として

嘉右 イヤ、おのれを。

トおうこ振り上げ、追ひかける。嘉六、門口へ出る。

嘉右衛門、表へ行かうとするを、おつれ留める。この間に嘉六、表の藪押し分け逃げ込む。

つれ ハテ、もうよいわいなら。

嘉右 エ、退きやいの。

つれ ハテ、もう逃げて行きましたわいの。

嘉右 エ、胴腰を打ち折らいで残り多いわい。

つれ もう料簡してやつて下されいなら。

嘉右 自體わが身が甘いから、野良になり居つた。重ねて

來居らうとも、物一つ云やんな。もう日暮れぢや。其所ら片付けて、門口も締めて置さや。

つれ アイ／＼、合點でござんす。

嘉右 おりや、佛壇へ御燈明上げて、お看經申さうしヤレヤレ、世話やの／＼。子は三界の首領とは、よう云うた事ぢや。

ト唄になる。嘉右衛門、納戸へ入る。おつれ、こなしあつて

つれ 親仁どの、あのやうに、腹立さつしやるも尤も。もう根性も直つたであらうと思ひの外、矢ッ張りに今に悪黨者。けにもはれにもたつた一人の子を、勘當した親も因果。子も因果。兎角頼むは未來の導き。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト合ひ方になる。暮れ六ツの本釣り鐘鳴る。おつれ、あたり片付け、火を打ち、行燈へ灯し居る。此うち向うより、三十郎、旅の形、大小にて、出て、好き所に立ちとまり

三十 ホウ、最早入相。

ト本 毫を見て

幸ひの人家、あれへ便つて、提灯の火を無心申さうか。

ト本舞臺へ来て、門口に立ち  
ハッ、卒爾ながら往來の者。暮れに及び迷惑仕る。提



灯ひかりの火を御無心申まうしたうござる。

つれ それはマアノ、御無儀ごんぎでござりませう。マア、お入りなされまして、お茶でも上がつてお出でなされませ。

三十 それは千代姫ちよひめに存する。然らば御免下されい。

つれ サアノ、お入りなされませ。

ト三十郎、内へ入る。おつれ、行燈持あんどんもち、側わきへ行き、見合せみあはせ候まうり。

つれ ヤア、お前は。

三十 そち乳母ちち。

つれ 三十郎ちじろさま、マアノこれへ。

ト上座かみざへ直し

ヤレノ、お懐かしや。コレノ親仁おぢどの。

嘉右 オ、なんぢやノ。

ト納戸なだより出る。

つれ コレ、和子わこ三十郎ちじろさまが、お出でなされたわいの。

嘉右 ドレ……誠に三十郎ちじろさま。

三十 オ、嘉右衛門けゑもん、其方も堅固かたまりで。

嘉右 あなたも御無儀ごんぎで、おめでたう存じます。とは申しながら、親且那主おぢなぬし水さまには、敢へない御最期ごさいご。あな

たにも御出陣ごしゆじんの様子承うけはり、義よしみと二人が、昔むかしのやうにお屋敷やしきに勤めて居りましたればと、老の牙を嚼かむばかり。して、親且那おぢなぬしを討つた、敵が知れましてござりまするか。

三十 オ、親人の敵と云ふは、妹婿いもむこの小栗こ栗十兵衛じゆうべゑ。

京極きんぎょく海軍かいぐんにて思はず用合もちあはひ、安達友之進やすだともゆきと思ひ、人違ひとちがひにて親人を討つたる様子。自身の白狀しやくじやう。その場に於て、敵討ちの勝負いたすべき筈なれども、大切なるお家の系圖けいず紛失まがゆゑ、先づこの詮議せんぎを遂げ、その上にて勝負をせんと、卑怯ひしやく末練まへの小栗こ栗十兵衛じゆうべゑ。某たれ僞いつはりはり、その夜に京極きんぎょくを出陣しゆじん。おのれ十兵衛じゆうべゑ、側わきへ何國なんごくに逃げ隠るゝとも、尋ね出して本陣ほんじん逃げんと、東海道とうかいだうは云ふに及ばず、申仙道しんせんだう、木曾山きざやまの奥までも詮議せんぎすれども、十兵衛じゆうべゑに巡り逢はず。この頃フト里人の噂うわさを聞けば、東國とうごく奥州おくしゆへ立歸りしとの風聞ふうぶん。それゆゑ東國とうごく指して罷り下る所であつた。嘉右衛門けゑもん、なんぞ心當こころあたりの儀はあるまいか。

嘉右 イヤ、何も左様な噂うわさは承うけはりませぬ。マア、斯かうなされませ。奥州おくしゆとばかりでは、御存ごんぞんじの通り、廣い國でござりますゆゑ、ツイちよつとでは知れませぬ。ハテ、二月と三月と、私わたくしが所に御逗留ごたうりゆうなされませ。どう

で十兵衛も敵持ちなれば、名を替へて居りませう。私しが寄り／＼に聞き合せまして、ちつとでも手が、りが出来ましたら、お知らせ申しませう。何も御遠慮なされませ事は無い。ゆるりと御逗留なされませ。ナウ婆、さうぢやないか。

つれ さうとも、お前様に乳を上げた、この婆が御縁に依つて、嘉右衛門どのも御家來分に、お切米を下されました御恩の御主人。何にも御遠慮はござりませぬ。マアお久し振りでのお目見得。せめてお杯なりと。

三十 イヤ／＼、稱やるなく。

嘉右 ハテ、酒は手の物、婆、なんぞお着持つておぢや。

つれ アイ／＼。

トおつれ、納戸へ入る。嘉右衛門、丸盆に盃載せ、たんに酒入れて、三十郎が側へ持つて行き、おつれ、納戸より鹽物を鉢に入れ、持ち出る。此うち始舞合ひ方にて、向うより、琴助、ぼつとせ、在所者の拵らへ、酒を持ち出て、門口より

琴助 酒一升下され。

トづつと内へ入る。三十郎と當見合せ

ヤア、あなたは。

ト懐り。

三十 そちや以前小栗栖十兵衛が草履取り、琴助。

琴助 花蘭三十郎さま。

三十 そちや、此あたりに居るか。

琴助 エ、

三十 其方がこの邊に居れば、十兵衛が在所も正しくこの邊。

ト血相する。

琴助 こりや、堪らぬ。

ト樽持ちながら、一散に向うへ、逃げて入る。三十郎

ズツと立つ。

兩人 そんなら、今の者が、

三十 何所は何所ぢや。

嘉右 所、何所ぢや存じませぬが。

つれ 折々酒買ひに参ります。

三十 すりや、折々酒を求めに。

兩人 ハイ。

三十 何にもせよ、琴助めが詮議の手が、り。兩人後

に。トきつとなり、琴助が後を慕うて、向うへ入る。嘉右

御門、おつれ見送る。チョン、返し、道具廻る。

造り物、三間の間、二車、向う、縛り、口、押入れ。一方、残らず、子、屋體の内、佛、橋、つもの所に、口、右、子、内、道心者、坊主にて、佛、白ひ、紅、印、萬十郎、着付け、奥子、着付け、十徳、門の形。おらち、味、茶巾、着付け、道心者を真中に据ゑ、ぐるりと座り、百萬遍の體、この見得にて、道具納まる。

ト向うより、琴助、一散に走り出て、花道の真中にて、酒樽打ちながら、へたり、ほつと吐息をつき

琴助 ヤレ、しんどやの。あの三十郎は此方の且、頼、頼の敵と付け狙うて居らるゝゆる、おれが居る所を見られてはと、酒も買はずに一散に走つて、息か切れた。なんでも三十郎が、この邊に居るは、且、那樣の在所を、ねに來たと見えるわいの。こりや黙つては居られぬ。おみささんにこの様子を云うて。

ト立ち上がり、本舞臺へ行かうとして

イヤ、渡多におみささんにも云はれぬわいの。旦那様は留守なれど、大方今夜あたりは戻つてござらうが、日頃から侍ひ氣負の旦那様、三十郎どのと聞かしやつたら、此方から名乗つて出て、敵討たれうと云はつしやる。おみささんの歎きと云ひ、後に變つた坊様の身上。イヤ、こりや、おみささんにも、云はぬがよい云はぬがよい。時が酒がなければ、講中がぼやき居らう。ア、よいワ。儘の皮よ。まつこと喰ましろ吐かしたら、この樽へ水を入れて、振り廻して、吞ましてござらう。

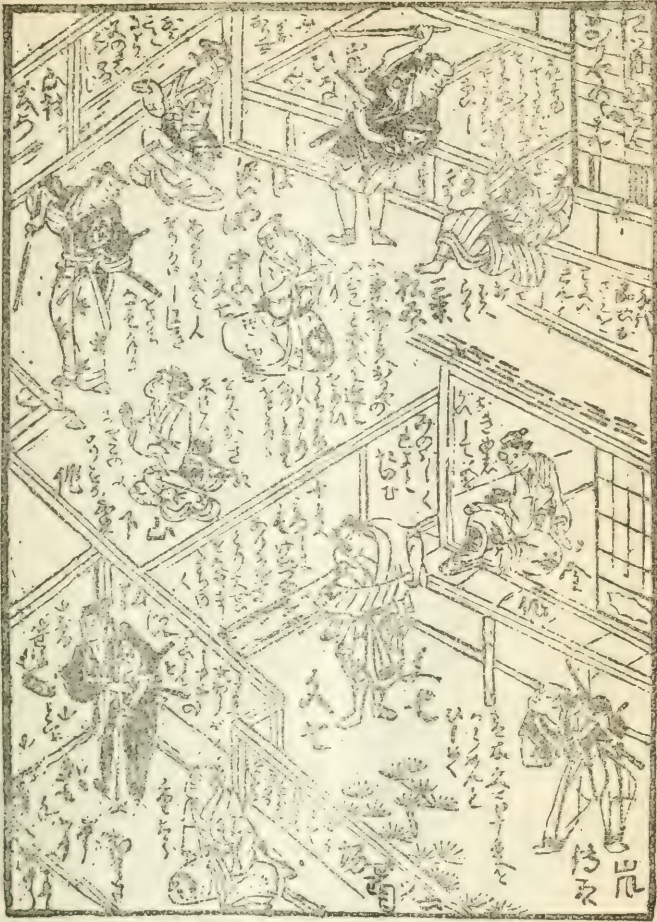
ト不承々に本舞臺へ來る。此うち百萬遍、責め念佛になる。琴助、門口へ入り  
ハイ、今戻りましてござりまする。

ト納戸より、おみさ、着付け白無垢、帯も前垂れも、淺黄が鼠か、なんでも幽霊の拵らへにて、懐へ子を入れ、丸釜に茶碗を載せ、茶瓶を提げ、持ち出る。

琴助、戻りやつたか。

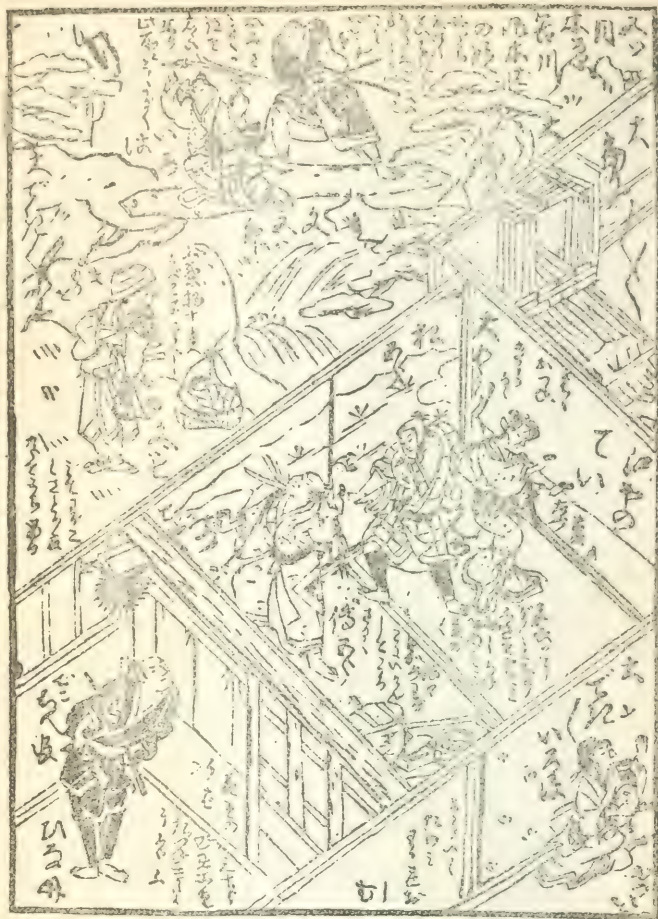
おみさ、ハイ。

ト云ふうち百萬遍終る。



初演の





繪 番 附

みさ どなたも御苦痛でござりまする。

道心 アイ。

講中 今晚はようお勤めなされました。

ト云ひ、皆々、子證より二重舞臺へ出て並ぶ。

おみさ、茶碗を皆々へ差出す。琴、茶籠持つて耐んで廻る。

道心 さて御内室、今晚は御奇特に、より勤めさつしやつた。時に御亭主はお留守か。

みさ アイ、適合ひは尺八折南いたされませるゆる、折々には在所へ修行に出られまする。折悪しう今晚も、まだ歸られませぬやうにござりまする。

道心 左様なら御内室へ披露いたさう。こなたには今晚初講なれば、講中の家とも、お近付きではあるまい。ちよつと御引合せ申ませう。其所に居さつしやつる若いお人は、新傳の名代、名は慶屋十郎と云うて、それはく昔う育つた小息子でござるてや。

みさ これはマア、お若いに似合はぬ、ようお参りなされて下さりました。

琴助 ハ、ア、史郎、十郎ぢやに依つて、昔う育つたとはこいつは秀句ぢやな。道理で顔が白顔ぢや。

みさ コレ、てんがう云やんないなう。

道心 又爰にござる花屋は、高砂屋義閑どの、この禪門は伏見屋の茶巾どの、そちらの端にござる女中は、大正のお内儀さんでござりまする。

みさ これはマア、どなたも、ようお出でなされて下さりました。

琴助 大正のお内儀か。顔の色が青いな。

みさ まだいなう。ほんにツカ、と物云うて、必らずお氣にさへられて下さりまするなえ。

らう なんのマア氣にかけませう。わたしが色の青いは、後の月夜を舞しまして、ちつきは直ぐに死にまする。それで此やうに念佛三昧。お前も差をなさんしたさうなが、お二人とも色艶ようお違者な様子。ほんにお羨やましうござりまするわいなア。

みさ それはマア、お笑止な事でござりまする。シタガ、お若い事なれば、つい後が出来なざるでござりませう。其やうにきなく思し存さずとも、随分舞出してなされたら……ホ、わ、わたしとした事が、あなた方のござるのに、いろ／＼の事を云うてからに。

道心 イヤ、苦しうない、傳も元は凡夫。皆それより

廻る事ぢや。そこで愚僧も法名を閉恩と云ひまするて。  
兎角閉の恩を忘れぬが爲。

兼閑 さうでござる。こちらもこの間、息子めに鎌を呼んでやりましたが、閉の恩を忘れぬやうに、毎晩々々早く寝居りまする。

茶巾 中屋の萬十郎さんは、まだ小息を。お前も早う鎌を呼んでもらはつしやりませ。

萬十 ハイ、わたしも早う閉の恩を知りたう存じまする。

茶巾 此方の弟息子にも鎌を取つて、閉の恩を知らさにやなりませぬが、お前のやうな氣のわさ／＼とした、縁が欲しうござりまする。

みさ あの前マア仰しやる事わいなア。何所にもわしがおわさわざと教しまするぞいなア。

茶巾 イエ／＼、ちよつと逢うても、大極氣立の知れるものぢや。お前は氣の輕さうな生れぢや。ナウ、兼閑どの。道心 成る程茶巾どの、云はしやる通り、其成しと云ひ氣立と云ひ、それは／＼志し優しけりや、着て居やつしやるものまで、なんとなく好い縁ぢやござらんか。

兼閑 大方それも、お前が續らしやんしたものであらう。

萬十 器用な上に姿まで。

茶巾 お前のやうなお内儀さんを持つと云ふは

道心 爰な御亭主はお仕合せ。

皆々 ほんに、きついあやかり者。

道心 時に皆の家、なんと、去なりぢやあるまいか。

皆々 ほんに長話し致しました。

みさ もそつとお話しなされませ。コレ琴助、ちやつと御酒を出してたもいなう。

琴助 イヤ／＼、もう酒は止しにさんせ。飲まいでさへ長話し。この上酒飲ましたら、夜通しにするであらう。酒

は無い／＼。

みさ 先刻に買つておぢやつたぢやないかいなう。

琴助 エ、とんとモウ、お前は何にも知らんせぬ……酒

は無い／＼。

道心 イヤ／＼御内室、御酒は又重ねて。

皆々 もう、お暇申ませう。

みさ これはマア、お茶さへ縁に上げませぬ。

琴助 ようお出でなされました。

皆々 南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト唄になる。皆々橋が、りへ入る。

琴助 てもさても追従らしい。おみささんを褒めそやし、  
着て居さつしやる締まで、好い締ぢやと云うて……ほん  
に、こりや好い締ぢや。申し、この締が古うなつたら、  
わたしに下さりませえ。

みさ そりや、どうなりとするわいなう。

琴助 そりや有り難いわ。ドリヤ、この勢ひに藁所へ行て、  
夜食の拵らへと出かけませう。

ト合ひ方になる。琴助、緋戸へ入る。抱子泣く。

みさ オ、眠たうなつたか。ドレ／＼、寐さしてやり  
ませう。ねん／＼ねんねこせい。ねんねが守は何所へ行  
た。山を越えて里へ往た。

ト子ないなう。

ドレ／＼、添乳してやりませう。

ト二重舞臺好き所へ布圍敷き、枕屏風立て、添乳する。  
此うち始終合ひ方にて、向うより、龍介、着附け尻搦  
げ、腹絆、草鞋がけ、一本差し、飛脚提灯を灯し出る。  
後より、梅の戸、お貞、着附け抱へ帯、一本差しにて  
出て、皆々花道好き所に立ちとまり

龍介 お貞さま、夜道でさぞ歩き憎うござりませう。もう  
これが七北田の入口でござりまする。

梅戸 コレイナア。龍介どの、なんぢややら、滅多無性に  
来い／＼と、お貞さまもわたしも、こりやマア、何所へ  
連れて行かしやんすぞいなア。

龍介 ハテサテ、何所と云うたら、向うの七北田へ行くの  
サ。

梅戸 そりや、何の用があるえ。

龍介 うろたへ者め。向うの七北田に、敵が忍び居るとの  
噂。

トこれを聞いて、お貞、キツとなり、本舞臺へツカッ  
カと行く。龍介、梅の戸、後より續いて来て、お貞の  
両方より

お貞さま、氣色を替へて

梅戸 こりや、何所へお出で

兩人 なされませう。

龍介、いま其方の云やるには、この七北田に敵が忍  
び居るとの事。それぢやに依つて。

龍介 すりや、敵の名を御存じでござりまするか。

てい 敵と云ふは小栗栖十兵衛。

龍介 すりや、その事を。  
てい 悪事千里と、道中筋は専ら取沙汰。



龍介 現在あなたの兄御様を。  
例へ兄様にもせよ、一太刀討たねば、三十郎さまに

添はれぬわいなア。

龍介 サ、お出かしたされた。お氣遣ひなされますな。

この龍介が付いて居ります。併し、急いでは事の破れとやら。實吉を執した上、マア、私しに付いてお出でなされませ。

てい そんなら、龍介。

梅戸 サア、お出でなされませ。

ト三人、橋がより門口へ来て

龍介 先づこの家で……ちよつと物が尋ねたうござりまする。

ト門口明ける。

みさ アイ。

ト屏風より出て

なんでござんすえ。

龍介 イヤ、餘の儀でもござりませぬが、もしこの邊に。

ト互ひに顔見合せ

ヤア、お前様は。

みさ そなたは龍介。

てい 御無事でござりましたかいなア。

みさ さう仰しやるはお貞さま。

梅戸 ほんに、あなたは操さま。

みさ さう云ふこなたは。

梅戸 梅の戸でござんすわいなア

みさ ても、思ひがけない。

てい 變つた所。

四人 お目にかゝりまするなア。

みさ マア、お入りなされませ。

てい そんなら、お免しなされませ。

ト三人、内へ入る。屏風の内にて子泣く。

みさ オ、また目を覚ましたやつたかいなう。

ト屏風の内より、子を抱いて出る。お貞、見て

てい 申し、操さま、そのお子は。

みさ アイ、十兵衛どのと二人が仲に。

てい お子が出来たかいなア。

みさ しかも男の子でござんす。

てい それはマア、おめでたうござりまする。

龍介 イヤ、お貞さま、何か差播き右の儀を、ナ、御合點

か。

てい 感る程、イヤ、操さま、わたしが今宵、尋ねて参り  
ましたは。

みさ 夫十兵衛を、父様の敵と知つて

てい アイ、討ちに参りました。舅御の敵と云ふは、現在  
の兄様、一太刀討たねば、どうも三十郎さまに添はれま  
せぬわいなア。

龍介 操さま、この龍介も、主水さまには御恩を請けし身  
の上。それゆゑお貞さまのお供仕り、敵討ちの助太刀  
いたしたく存じまする。

てい 龍介を力に参りました。申し操さま、お前の筋にも  
父御の敵、どうぞ手引きして、見様を討たせて下さりま  
せいなア。

みさ 尤もでござんす。さりながら、そりやわたしととも  
、同じ事、敵は夫、討つは兄様、中に立つ身の切なさ。併  
し、なんぼ敵が討ちたいと云はしやんしても、肝心の十  
兵衛どのは留主でござんす。

てい エ、  
みさ 今は世渡りは虚無僧。二三日以前近在へ修行に行か  
しやんして、歸りは何時であらうやら。

てい そりや操さま、未練にござりまする。なぜ兄様を爰

へ出して、敵討ちの勝負さして下さりませぬ。兄様に刃  
向ひますは、舅御への申し譯。わたしや兄様に返り討に、  
討たるゝ心でござりますわいなア。

龍介 そのお心を承はりましたゆゑ、お供仕りまして  
ござりまする。

梅戸 どうぞ十兵衛さまに

てい お逢はせなされて

三人 下さりませ。

みさ なんの善文、何の爲に僞り申しませう。十兵衛どの  
は修行に違ひござりませぬ。お前方の疑ひ晴らし、マア、  
爰に返留して下さりませいなア。

てい 其やりに云はしやんすりや。

龍介 よもや僞りとも

梅戸 思はれませぬ。

てい そんなら、爰に返留して。

みさ マア、何やかやお誦し申したい事もあり。

龍介 左様なら、十兵衛どの、歸宅を待つて。

てい 返り討に討たるゝ覺悟。

みさ お助け申して、兄三十郎どのに添はせまするが

梅戸 戀と無常の

てい 生死の懸

龍介 オア、それまでは

みさ 奥の間に、

三人 隠れませ。

みさ サア、ござんせ。

ト奥になり。おみさの操、三人を連れ、納戸へ入る。

と後帯の方にて、向うより十兵衛、旗奉行の度無僧の

形にて出て、ズッと門へ入る。納戸より、琴助出て

琴助 オ、旦那様、お歸りなされましたか。

十兵 琴助、この四五日は歸らなしたが、あつたさうで、

もなかつたか。

琴助 アイ、坊主様、隠れは違書にござりますが、申し、

妹御のお返さまでお出なされました。

十兵 ムウ、して一人か。

琴助 イ、エ、右取川龍介の御ふ、御取りがお供して、

たつたお出でなされ、奥の間に隠さんと、お話し

御申でござりまする。マア、お歸りの御子をお知らせ申

ませう。

十兵 コリヤ、身が離つた琴、妹御は治汰いたすな。

琴助 合點でござりまする。

ト琴助、納戸へ入る。十兵衛、上り口に腰かけ、草鞋  
履ながら

十兵 妹御龍介を同道して参つたは、これも三十郎が行

くへを尋ねると見えた。

ト云ふうち納戸より探、子を抱き出て

みさ オム、十兵衛どの、戻らしやんしたか。

十兵 おみさ、四五日も戻らぬうち、坊主めも變る事はな

いと、琴助に聞いて安堵したてや。

みさ アイ、坊主様、機嫌はよろござんす。喜んで下さ

んせ。

十兵 如何に主家の大事と云ひながら、この世にない其方

に替を預け、他國を廻らこの十兵衛、いかい苦勞をさす

事ぢやな。

みさ またおやうな事、云々下さんす。わたしが苦勞は

塵ほこり、お前の心遣ひが、悲しうござんすわいなア。

十兵 イヤモウ、如何程苦勞をしても、お家の系圖さへ手

に入らば、十兵衛が大願成就、なれども、何を云うても

彼の系圖。

みさ まだ知れませんか。

十兵 とんと知れぬ。先達で西陣にて、手に入つた友九郎

が密書、系圖の在所は、木曾の谷に友九郎が所持するとある文體。その友九郎に巡り逢ひ、彼奴が懷中を詮議すれども、系圖はなく、早まつて其方が友九郎を討つたるゆゑ、詮議の種を失ひ、それより木曾の谷々を穿ち詮議すれども、在所知れず、もし彼奴が手下の強盜ども、隠し置きたるも計られずと、山賊野武士一々に討つて捨て、探せども相知れず、詮方盡きてこの國へ立歸り、もし又、友之進が計略にて、彼れが支配する所の、郷土代官庄屋などの手に渡りあらんも知れずと、旅修行に事寄せ、近在近郷を二日路三日路、又は五七日も距け廻り、さまざまと詮議すれども、何分系圖の在所が知れぬゆゑ、つくづく思案するに、大切な系圖を、よもや土中に隠し置かう筈がない。正しく友九郎が所持するところの密書の表。それに友九郎が懷中に無いと云ふは。

ト操が顔を見る。操こなしあつて

其方と云ひ、友九郎が切りつ切られつ、はるかかの棧橋より轉び落ちた必死の場所。その時もし系圖の在所、友九郎が所持なしては居なんだか。其方は知らぬか。

トまた操が顔を見る。操こなしあつて

みさ イ、エ。

十兵 すりや、友九郎が懷中に。

みさ 持つて居たやら、持つて居なんだやら。

十兵 知らぬか。

みさ アイ。

十兵 ハテナア。

トこなしあつて

其方も知つて居る通り、三十郎が手より系圖を差上げねば、花園の家は何時までも埋れ木。さすれば、親主水どの、敵討ちも叶はぬぞや。それゆゑ、先達て西陣にて、其方にも離別いたし、お家の系圖はこの十兵衛が詮議仕出し、三十郎に手渡しして、潔よく討たれんと、番ひし詞も容言となつて、定めてこの十兵衛を、偽り者卑怯未練と蔑み致し居るであらうが、何を云うても、系圖の在所が知れず、如何程三十郎に討たれろと思つても、系圖の出ぬうちには、敵を討つても家立たず、花園の家が立たねば、草薙の蔭にごさる主水どのへ、其方達兄弟は不孝者となるぞよ。

トまた操が顔を見て、こなし。操もこなしあつて

併し、我が命まで捨て、その苦しみを受けても、夫子を慕ふ其方、よもや系圖の在所を知つて居ながら、知らぬ



とも云ふまい。ハテ、なんとせう。斯程まで心を盡しても、采圖の在所は知れず、何時が何時まで安閑と日を送る所でない。この上は腹かつさばき、未來にござる主水どのへの申し譯。

みさ エ、

ト俯りする。操が體を十兵衛見て、こなしあつて

十兵衛 ますれば花岡の家は近所。采圖の在所が知れねばお家の大事……ハテ、是非に及ばぬ。

ト本約り置にて夜半の鐘鳴る。

ホウ、あの鐘は遠寺の後鐘。今日は十月二十四日、月こそ替れ、明日は正月との御念日。

みさ 父様のお夜と云ひ、わたしが爲には四十九日。

十兵衛 ヤ。

みさ 夫婦は二世の奇縁にて、妻が産はし付き添ふも、この子が可愛さ。ア、思へばこの世に父様がござんしたの、御座の御座見て、さぞお喜なされうもの。

十兵衛 それも知らぬ事。せめて心ばかりの手向けには、赤ひつこり尺八、元より盧無僧は有髮の僧。未來の佛果を備へ、調へは郎の羅尼。

みさ わたしも、せめて濃乳のうちに念佛。

十兵衛 弔らふ人も弔らふ者も、共に冥途の草の露。

ト操と雛見合せ、こなしあつて

ハテ、有爲轉變の世の中ぢやなア。

トしめやかなる唄になり、十兵衛、こなしあつて、障子屋體へ入る。後におみさ、こなしあつて、子を見て

ザツと抱き締め、身を顛ほし、しめなきに泣く。と子別れのやうな合ひ方に、尺八を入れて吹き出す。操、こなしよろしくあつて

みさ 十兵衛どのが、尋ねさしやんす采圖は、先達て木曾山にて、友九郎が手にあるを奪ひ取り、夫に隠し持つて

居るも、この采圖が十兵衛どのの手に入ると、兄三十郎どのに渡し、直ぐに十兵衛どのに兄さんに討たる、心底。さすれば其方を養育する者はなし、見すく其方を

見殺すが悲しさに、采圖をヂツと隠し、この世に姿を顯はし、夫婦は二世の奇縁と云ひ、其方に心引かされて、

今日までは付き添ひしかども、情なや、四十九日今宵

に當り、この曉は死出の山路へ消ゆるこの身。采圖を

兄さんの手に渡し、花岡の家を引起し、父様の迷ひも晴

らさせませうと思へば、現在夫の命と云ひ、この子の身の上、それが悲しいばかりに、ヂツと包み隠す心の苦

しさ。四十九日が其うちには、家の棟云らぬ魂前も、この明け方は生の滅する地獄。コレ、其方に付き添ふも今宵ばかり。今暫し、名残も、あの笛の音も、子に送ふ鶴の筆置り。夫婦が酒席も昨夜の床を限りとなる戀流し。思へば果敢ない親子夫婦、わしや何時までもこの世に居たい。其方の側が離れともないわいなう。名残り惜しいわいなう。

ト大泣き。抱子泣き出す。

オ、可哀さうに〜。

ト撫でさする。子、泣き止む。

親子の別れを、誰が知らして泣きやるのか。曉まではまだ二時。マア、それまでは親身に添へ、奥で名残りを惜しみませうぞや。

ト矢張り尺八の合ひ方にて、梅戸へ入らうとして、梅戸より、お貞、龍介、出て来る體を見て、梅戸の赤壁へ仕掛けにて消える。ト梅戸より、お貞、龍介、梅の戸出て

龍介 お貞さま、最前からの笛の音は、十兵衛どのが歸宅と見えます。

てい サイナウ、梅さまのお話しでは、お家の承聞は、ま

だ在所が知れぬ様子。

龍介 さすれば、敵討ちより先づお家が大事。

てい 何分三十郎どの、お目にかかり、兄十兵衛どのの諸とも天國の詮議。

龍介

ちやと申して、三十郎どの、お行くへ。

梅戸 ほんに、何國にどうしてござるやら。

琴助 そりや、わたしが知つて居ります。

ト琴助、梅戸よりズツと出る。

てい 琴助、そんな其方が。

琴助 最前村でお見掛け申しました。お前方がお出でな

されては、事仰山な敵討ちより、大切な茶園の詮議とあ

るからは、旦那様の命に凶事ない事。わたしが行って、三

十郎さまを連れまして歸りませう。

てい 片時も早う。

琴助 心得ました。

龍介 行け。

ト琴助、向うへ走り入る、三人こなしよろしく、チョン〜にて、返し、道具廻る。

元の酒屋になる。嘉六、冠冠りして、門口に立ちて、

内の様子を探りて居る體にて、道具とまる。  
ト合ひ方になる、嘉六、こなしあつて  
嘉六 胸書せぬは、もう老練めらは、伏り居つたと見える

……ムウ、よし〜。

トまた敵を押し分けて入り、内へ忍び込み、暗がり  
にて、そこから振り廻り、賣り場に行き當り、撫で廻し  
見て

ヤブ、巧いワ。酒の賣り場ぢや。ドレ、一杯飲んで、氣  
を丈夫にしてやつてくりよ。

トそこら深り廻し、杓を取つて、壺の酒を一杯すくひ、  
杓を頂き、グツと呑んで、ワアイと云うて咽せ返り、  
胸の悪いこなし。

エ、忌々しい。酒かと思つたら醤油であつた。

ト胸悪いこなしにて、胸撫でながら、また壺酒を探り  
廻る所へ、向うより琴助、一散に走り出て、戸口を透  
かして

琴助 軒に陣陣 優ぢや〜。

ト門の戸けわしく叩く。嘉六、この音に驚ろき、あち  
こちとうろたへる。此うち琴助、けわしう戸を叩く。

つれ アイ〜。

トおつれ、行燈提げ出る。嘉六又これに驚ろき、奥の  
一間へ忍び入る。おつれ、内より戸を叩ける。

オ、イ〜、今明けまする。お待ちなされませ。

ト三十郎と思ひ、戸を叩ける。琴助、振り拳にて氣性  
に戸を叩き、おつれ、戸を叩けるはづみに、琴助、内  
へ轉け込む。おつれ、溜りして

オ、誰れぢやぞいなう。

ト琴助、起き上がり

琴助 イヤ、わしでござんす。

つれ ムウ、こなたは先刻に酒買ひにござつた

琴助 アイ、その時爰にござつた、お侍ひ様に用があつて

來た程に、ちやつと逢はして下さりませ。

つれ イヤ、お侍ひ様は内にはござらぬわいの。

琴助 ヤア、そんなら爰には居さつしやれぬか。

つれ オイナウ。

琴助 そんなら。

ト表へ駈け出さうとするを、おつれ、留めて

つれ コレ、先刻にこなたの後から。

琴助 サア、その事で尋ねて來たわいなう。

トおつれを突き飛ばし、又向うへ走り入る。おつれ、

琴助が後を見送り、呆れしこなしあつて

つれ なんの事ぢや。譯も云はずに、とんと狂人の沙汰ぢや。

トまた表の戸を押し、かけ金かける。とバタ／＼にて、納戸より嘉六、金財布を持ち出る。その手に嘉右衛門取りつき、一本差して出る。

嘉六 エ、老ぼれめ。其所放し居らんか。

嘉右 おのれ、子の身として、親の内へ盗人に入る大悪人。

コリヤ、年こそ寄つたれ、武家の奉公した嘉右衛門ぢや。この一腰が日に見えぬか。非常な事すると、子とて容赦はせぬぞよ。

嘉六 オ、怖い事ぢや。おのれ、これ程金をくすねて居つて、我が子に不自由な目をさす。どう盗人め。キリキリとおこしさらせやい。

ト財布を引つたくる。嘉右衛門やるまいとかゝるを蹴飛ばす。おつれ、ツカ／＼と行て獅噛みつき

つれ エ、おのれは／＼。コリヤ、この金は田地田畑を人手に渡した價。來年の春は、二人とも頭を丸め、廻國に出て方々へ、未來の爲に納める心で、拵らへた五十兩、その金をむざ／＼、おのれに渡さうかいやい。戻し居

れ。

トまた取りにかゝるを、同じく蹴飛ばす。

嘉右 おのれ、もう料簡がならぬわい。

ト脇差の柄に手をかけて反り打つ。

嘉六 ムウ。犬おどし捻くるは切るか。親の身で子を切る

と云ふやうな無得心。そのおのれが子ぢやに依つて、親に勝つたおれが無得心を見されやい。

ト嘉右衛門が一腰を抜いて、ボンと切る。おつれ見て、悔りして

つれ ヤア、親仁どのを。

ト嘉六にかゝるを、これも一刀に切る。おつれ、ウン

とこける。この時行燈こかし、暗がりになる。ト忍び三重になり、これより嘉六、おつれ、嘉右衛門を切る。

向うより、三十郎、足早に出て、花道に立ちとまり

三十 最前琴助めが、皆暮れに行くへを見失ひ、人家を家毎々々に詮議するも夜分の事。今宵は先づ嘉右衛門方に

一宿して……さうぢや。

ト本舞臺へ来て、門の戸明けうとする。此うち嘉六、二人を殺す。兩人苦しむ。この音に三十郎驚ろき、門の戸をメリ／＼と踏み碎き、内へ入る。嘉六、滅多切



りに切つてかゝるを、三十郎抜き合せ、兩人暗がりの  
 タテあつて、ト、三十郎、嘉六へ一かせ切りつける。  
 嘉六、切られながら端が、リへ逃げて入る。この時百  
 姓六人、鉢巻をして、松と松明を持ち出て来て  
 皆々、なんでも嘉右衛門どの、所が、騒動の様子ぢや。ご  
 ざれ、

ト皆々内へ入る。此、嘉右衛門、おつれ死ぬる。三  
 十郎、松明の灯にて、兩人の死骸を見付け  
 三十 ヤア、最早兩人とも切れたか……ホイ。  
 皆々 ソリヤ、此奴め、盗人ぢや。  
 ト皆々、棒振り上げる。

三十 待て、土民とも、相いたすな。身は今宵これに一  
 宿いたす積りにて、只今歸つた所。家内の騒動、それゆ  
 ゑに表の戸を蹴破り、内へ入つて様子を見れば、この有  
 様。

百一 ヤア、その手は喰はぬ、爰に嘉右衛門は、田地  
 田畑を賣りやつた、その金があるに依つて。  
 百二 それを盗みに入つて、二人を切り殺したのぢや。  
 三十 イヤ、全くさうでは。  
 百三 さうでないと言つても、二人が死んで居る側に、わ

れが居るからは、盗人ぢや。〜。  
 三十 イヤ、身共は嘉右衛門に由緒あつて參つた者。武士  
 が左様な非常を致さうか。  
 百四 武士々と云やるが、こなたは何所の家中で、名は  
 何と云ひまする。

三十 イヤ、ちと仔細あつて、世を忍ぶ浪人者。  
 百五 そりやこそ、浪人は切取り強盗。  
 百一 いや、盗人に極まつた。  
 皆々 どやせ〜。  
 ト棒振り上げる。三十郎、刀を構へ

三十 聞分けなき土ほぜりめ。悪く手向ひ致すと、一々に  
 撫で切りぢやぞ。  
 トきつとなる。  
 百一 ソリヤ、撫切りにするといやい。  
 百二 側へ寄らずに遠巻きに。  
 皆々 エイヤ〜。

ト棒にて圍むと、向うバタ〜にて、嘉間太、着付け  
 野袴、大小、代官の體。捕り手役人六人、殿引、袴、  
 鉢巻、鉞々弓張り提灯を持ち、嘉間太が後に付き、バ  
 タ〜にて、本舞臺へ來て

嘉間 百姓どもが注意に依つて、召捕りに向うた。

捕手 押へい〜。

皆々 ハイ〜。

ト片寄る。

嘉間 ソリヤ。

ト捕り手六人、バタ〜と入り、三十郎を取巻き、

捕手 腕寄せ。

ト十手振り上げる。三十郎、投身を構へる。嘉間太、

三十郎が體を見て

嘉間 盗賊の仕事にて、嘉右衛門夫婦を切り殺し、狼藉い

たすとの訴へゆる、召捕りに向うて見れば帮刀人。何ゆ

ゑ人を殺め、盗賊の仕業召された。仔細眞直に白狀召さ

れ。

三十 如何にも仔細申し聞けませう。捕り手を引かし召さ

れ。

嘉間 者ども引け。

ト捕り手左右へ押へる。

三十 拙者は當國三輪家の家中、仔細ござつて只今は浪

人、この家の亭主に所縁あつて諱ね参り、今宵一夜止宿を致さんと存せしところ、盗賊の仕業と相見え、兩人を

切り殺し、立退く所へ参り合せ、拙者を目がけ切りつけ

まするゆる、心得たりと投き合せ、正しく一かせ切りつ

けし手應へ。幽者めは逃げ失せ、後に残りし拙者を盗賊

なりと、聞分けたき士民ども、それゆる。

嘉間 ムウ、すりや、それが貴殿の云ひ譯か。

三十 如何にも。

嘉間 纏ぶて。

捕手 捕つた。

トかゝる。爰にて三十郎、本手のタテ、よろしくあつ

て、投身を持ち、嘉間太にさしつける。捕り手皆々取

巻き

捕手 やらぬぞ。

トいづれもキツと見付。

三十 これより外に云ひ譯ない。遂て搦め捕らうとさつし

やると、どなたこなたの容赦はない。一々に切れ味お目

にかけるぞ。

嘉間 イ、ヤ、云ひ譯が暗いに依つて、纏ぶつのサ。

三十 何が暗い。

嘉間 嘉右衛門に所縁あるとお云やつても、そりや無識據、兩人は相果て、正眞の死人に文言。

三十 なんと。

嘉間 その上お身が刀に、生々しい血汐のしたたり。

三十 イヤ、こりや彼の盜賊めを切りつけし刀の血。

嘉間 その盜賊は何所にある。

三十 ヤア。

嘉間 この場、居らぬ盜賊呼はり。

百一 なんぼ右衛門の所縁と云うても

百二 こちらはついぞ

皆々 見知らぬ顔。

百一 疑ひかつた浪人。

捕二 尋常に廻すか。

捕三 但しぶち伏せ、纏ふたうか。

嘉間 サア返答は

皆々 なんとく。

トきつと詰めかける。

三十 へ、ハ、ハ、ハ、ハ、。如何やうに云つても、毛頭覺

えない身分。願望あればこそ、事を分けて申し聞かす

に、違つて纏かけんと致しても、滅多に搦め捕らるゝ武士

ではない。馬鹿な事を。

嘉間 イヤ、さう我まゝに云やつても、役目を承はつた

乎共の武士が立たぬ。

三十 ようござる。然らば此まゝ、代官所へ參つて、申し聞

き仕らう。

嘉間 然らば血の付いたその刀、證據の一品。

捕手 此方へ渡せ。

三十 武士たる者が、魂ひを人手に渡さうか。罷りなら

ぬ。

嘉間 すりや、證據の血漉を拭ひ取らん企みよな。

捕手 卑怯な奴め。

三十 お身達が心に引比べ、左様な未練な性根はない。

嘉間 オ、流石は武士、驚ろき入つた。ナニ百姓ども、

檢視立つまで、死骸に番申付けるぞ。

百姓 畏まりました。

嘉間 者ども、浪人の前後を圍へ。

捕手 ハツ…歩め。

ト兩方より三人づゝ、十手を構へ、キツと見得。三十

郎こなしあつて

三十 ハテ、仰々しい。案内しやれ。

ト腹になる。捕り手前後を圍ひ、三十郎、デリ／＼花

道へ行く。後より嘉間太付き添ひ、この人數皆々向う

へ入る。百姓、死骸を香する體。チョン〜。廻り道具。元の十兵衛の内になる。

トばた〜にて、向うより琴助、走り出て

琴助

申し、一大事ぢや〜。

ト納戸より、お貞、龍介、術の戸出て

三人

一大事とは何事ぢや。

琴助

申し、三十郎さまのお目にかゝらうと、隣村の酒屋

へ參りましたれば、三十郎さまはござらず、それから一遍方々を尋ねましても在所は知れず。それゆゑ又、元の酒屋へ戻つて見たら、酒屋夫婦を切り殺し、三十郎さまが盜賊の疑ひかゝり、代官所へ捕はれとおなりなされましたわいなう。

三人

ヤア〜。

ト三人悔り。

琴助 死骸を香して居る百姓衆の噂。早速お知らせ申しまする。

てい 龍介、こりや斯うしては居られぬ。

龍介 一時も早う代官所へ。

てい 二人も來てたも。

梅戸 合點でござりまする。

琴助 わたしも御案内いたしませう。

てい そんなら琴助。

琴助 ござりませ。

トばた〜にて、四人、向うへ走り入る。納戸より十兵衛、飛んで出てキツとなり

十兵衛 三十郎を盜賊の科に落し、仕置させては、首尾よろ糸圖を手に入れ、敵を討たれうと思ふ、十兵衛が心も水の泡。術にもせよ、三十郎が身の上。

ト行かうとして立ちとまり

と云うて、肝心の糸圖が抜けねば。

トまた後へ戻り

三十郎に、敵討たるゝ事もならず、難儀は二つ、身は一つ。

トきつと思案して

この十兵衛が、三十郎の代りに、盜賊の科に落ちて、入牢して三十郎を助け、糸圖の詮議を彼れに頼み、例へこの身は成敗に遭ふとても、お家の爲、三十郎が身替りに。さうぢや。

トこなしあつて、駆け出さうとする。操、奥より走り



出て、子を抱きながら十兵衛に取りつき

みさ コレ、十兵衛どの。

十兵 女房、今聞く通り、三十郎が命の大事。匿けつけて  
介抱する。其所放せ。

みさ 兄さんを助け、お前が科人となつて、仕置に遣はし  
やんすか。コレ、わたしが姿、四十九日の今宵の曉。二  
世の夫婦の縁も切れ、今別れて又いつの世に生れ着つて  
逢ひ見る事がなりませうぞいなア。

ト引留める。十兵衛が顔を見て泣く。

十兵 妻子珍寶さおうにうむは、魂魂宙宇に入る時は、從

ふものはないわい。

ト振り切り行かうとする。操、子を十兵衛が目先へ突

きつけ

みさ 親子は一世。

ト十兵衛こなしあつて

十兵 家を出る時、妻子を忘るゝ武士の慣ひ。

トまた振り切り行かうとする。操、又取りつく。この  
時ゴオンと明け六ツの釣り鐘を突き出す。操、十兵衛  
を奮めながらキツとなつて

みさ アレ〜、早明け六ツの鐘。我が魂ひの絶ゆる

時刻。

トこれより、修羅の合ひ方。どろ〜、寢鳥、風の音  
にて、操、いろ〜こなしあつて、釣り鐘の數六ツ目  
に當る時。

ハア〜。

ト泣き沈む拍子に、トンとセリ下げにて消える。合ひ  
方、雨風、どろ〜、寢鳥、一時に〜やんととまる。  
操が消えし後に、子と系圖残る。十兵衛取つて

十兵 こりや系圖……すりや女房が。

ト子を抱へ

エ、忝ない。

ト系圖を頂く。チョンと拍子木。十兵衛、向うへ走り  
入る。

幕

### 七 幕 目

七北田代官所の場

役名——花園三十郎。七北田郷助。岩手伴藏。鹿  
間嘉間太。青木久馬。實一番頭嘉六。磯瀉半左衛  
門。小栗栖十兵衛。

造り物、三間の間、二重舞臺、向う唐紙の襖、欄間に白地に佐竹の紋付きの幕絞り上げ、この屋體の兩方、庭の體。後は屋敷の高塙、忍び返しあり、馳病口、牢屋入り口の體。右兩方庭に番所、行燈、焚棹、刺叉、臺付きにて飾りあり、舞臺先の上の方に、高札建てあり、これに堪忍の二字を書きあり、右は佐竹支配七北田代官所。體。幕の内より、二重の上中に、半左衛門、着附け麻上下にて居る。同じく二重の眞着附け麻上下にて二重舞臺の下座に座り居る。侍ひ二人、上下の殿立ち取り、平舞臺の兩方に座り居る。この體、五ツの時の太鼓にて、幕明く。

郷助 これは半左衛門どのは、今日は御苦勞に存じまする。

半左 これは、郷助どの、御挨拶、貴殿事は近頃よりの御立身、殿の御機嫌に叶ひ、當所七北田の代官を預かり召され、即ち苗字を改め、七北田郷助どのと當所の御支罷、御苦勞に存じまする。

伴藏 拙者は安達友之進が家來、岩手伴藏と申す者、かね

て郷助どのには、御入魂に仕りまする。半左衛門どのは今日が始めて。以後はお見知り下さりませう。

半左 これは、友之進どの、御家來、岩手伴藏どの、これまでは御意得ませぬ。拙者磯海半左衛門、以後は入魂に頼みまする。

伴藏 これはお詞、有り難う存じまする。今日友之進參上仕る筈なれども、御存じの如く、大貳御氣につぎ、一の宮に御代參。それゆゑ拙者友之進が名代に、伺候仕つてござる。

半左 それは御苦勞。今日友之進どのを、これへ招きまするその仔細は、この度手前主人佐竹左衛門さま、京都の武將へ參上遊ばされしところ、天奏より召され密かの御旨意。松濱中將どの、息女と、三輪要之助どのと、御縁組みありしところ、お興入れの日限、等閑に打捨てあるは、三輪右京之太夫氣氣ゆるか、又は要之助車圓遠いたせしと風聞。佐竹左衛門は三輪と親しき一家ゆゑ申し付ける。歸國の節はこの實否相糺せよと、天奏よりの御内勅。畏まり奉るとお請け申して、この度の御歸國。さるに依つて、この使ひ、拙者にこの由傳せつけられ、三輪家の家老友之進どのに御意得、この儀とくと相糺し、天

奏へ御意申上げんと存じての儀でござる。

伴藏 それは千萬貫御寄附に存じまする。何分友之連儀は、

今日一の宮へ代参なれば。

御助 イヤ伴藏どの、その儀ならば苦しいござらぬ。一の

宮へ代参の友之連、御意申なれば是非に及ばぬ。ハテ、

今日の評定を、明日へ候しさへすりやよくござるわす。

なんと半左衛門どの、さうして遣はされい。

半左 御助どの、お詞ではござれども、大切な天奏より御

申出されたる儀、一日も打捨て置いては、主人左衛門さ

まへ、もしお祟りでもござつては。

御助 とも、二、三回二合はぬ友之連。

半左 御助の御意は申し候。一の宮へ早打ちを立て。

御助 ハテサテ、其所を料簡いたすが、アレあの高札の

式

半左 なんと。

御助 主人左衛門さま、細分左衛門の者どもへ執事の爲

に、建て置かれしこの高札。表に堪忍の二字を描ゑら

れ、裏面は一生の相續なれば、成道に私しなく、邪しま

非道の取調さや成しむるは、堪忍の二字より外なしと、

所々の領地に建て置かれしこの高札。ハテ、今日友之連

どのの撰参はこれも主命。伴藏どのを名代として、撰参

の儀あり、それを聞き聞け遣はすも堪忍の二字。遣て友

之連どのを呼び寄せるは、主人の御意を背くも同然。半

左衛門どの、高札の通り、堪忍さつしやれ。

半左 成る程、こりや御尤も。善悪ともに主人の御意に従

ふ半左衛門。堪忍の二字、とくと承知仕つてござる。

ト門番が、りより、門番、御聞け法儀にて、走り出て

門番 申し上げまする。

御助 何事や。

門番 ハツ、京都松浪中將さまの御家來とあつて、何か御

兩所に御儀談の由。お通し申しませうか。如何仕りませ

う。

御助 ナニ、松浪中將さまの使者とな。

半左 何にもせよ、此方へお渡し申せ。

門番 ハア。

半左 コリヤ、無禮の無きやう、心得たか。

門番 ハツ。

ト門番、走り入る。半左衛門、御助、伴藏、二重より

出迎ふ。ト門番が、りより、青木馬、御所侍ひの衆ら

へ、着付け上下にて出て

久馬 何れも御免下されい。罷り通りまする。

三人 先づく。

ト久馬、二重舞臺真中に座る。右に半左衛門、左に郷助、平舞臺に伴藏座る。

半左 京極松浪中將さまよりの御使者。遙々の所、御苦勞

千萬に存じまする。拙者は佐竹左衛門が家來、磯海半左衛門。

郷助 拙者は北田郷助。

半左 して、御使者の御家名はな。

久馬 拙者儀は松浪中將が雜書、青木久馬と申す者。使者

の趣き申し聞けませう。先達て此方の息女と三輪要之助

どのと縁組み、興入れの日限、餘り延引に依つて、天奏

へ達し、キツと曲事にも申し付けらるゝところ、佐竹左

衛門儀、三輪家と縁家のよしみを思ひ、この儀品よく取

調へんと、達て天奏へ願ふに任せ、仰せつけられしところ、家老の磯海半左衛門に、何かと媒介申しつけしとの儀。いよく左様か。

半左 成る程、拙者承はりましてござりまする。

久馬 然らば、なぜ早く取計らひ致さぬ。何ゆる延引に及ぶ。

半左 イヤ、主人左衛門歸國いたして、直さま承はつた

はやうやく昨日。それゆる今日、三輪家の家老友之進

をこれへ呼び寄せ、立會ひの上にて詮議仕らんと、即ち友之進が名代も、これに扣へ罷り居りまする。仰り火急の御催促。

久馬 イヤサ、天奏より申し渡されしは、勅諭同然。出でて再び返らぬが大内の作法。

半左 ぢやと申して、それは餘りの御無體。

郷助 コレ／＼、半左衛門どの、其所が彼の高札の表、堪忍の二字でござる。

半左 でも。

郷助 主人の教訓、用ひ召されぬか。

トきつと云ふ。半左衛門、こなしあつて

半左 委細承知仕つてござりまする。

ト久馬へ云ふ。

久馬 して、返答は。

半左 何分友之進、この場に有り合さぬ儀でござれば、明日まで。

久馬 イ、ヤ、今日中に返答しやれ。

郷助 コレサ、半左衛門どの、其所が堪忍の二字だ／＼。



ト半左衛門、こなしあつて

半左 如何にも今日中に御返答仕りませう。

久馬 して、身共は。

半左 これにもござるも御返答。奥へござつて御休息。

久馬 左様仕らう。半左衛門どの、返答に依つて、此方

より大勢へ申し渡し、事に及んでは、三輪佐竹兩家へ、

如何なる崇りが参らうも知れぬ。その時は氣の毒ながら

半左衛門どの、おてまへは、れござおや。

ト腹切る眞似して

其所をよしなに載成すは、この久馬が役目。ナ、合點

か。策は所も奥州、黄金花咲く陸奥と、呼んだる古歌の

心も好く存じて、返答さつしやれ。

半左 すりや、貴を花咲く陸奥と申す古歌を以て。

久馬 如何にも。

半左 御長まつてござります……コリヤ、其方、御案内

申せ。

侍ひ ハツ。

久馬 然らば半左衛門どの、御案内の。

兩人 貴づ、お入り下されませう。

ト明になる。久馬、侍ひに案内さして奥へ入る。

郷助 半左衛門どの、今日中との難題、如何召さるゝた。

半左 苦しうござらぬ……コリヤ、近う参れ。

侍ひ ハツ。

ト半左衛門の側へ来る。

半左 其方は屋敷へ歸り、お侍者へ……のお茶菓子、白木

の拵に入れ、御菓子はお吹く銀五十枚、又茶もどれこ

れなしに、宇治の山吹三十斤ばかり。兩方とも取揃へ、

早く持参いたせ。コリヤ、その上

ト囁やき

ナ、合點か。

侍ひ 畏まつてござりまする。

半左 早く〜。

侍ひ ハツ。

ト橋が〜りへ入る。

郷助 すりや、今の花咲く心を判じ

半左 山吹仕立ての御馳走でござるサ。

郷助 シタリ。

伴藏 天晴れ道の半左衛門どの、山吹仕立ての御馳走とは

驚ろき入りましてござる。

ト橋が〜りより、所問番問太、口裏の代官にて走り出

て

嘉間 ハツ、酒屋夫婦を切り殺したる盗賊、捕り手の者どもに前後を圍ませ、只今これへ引立て参ります。

郷助 それ待ち兼ねた。早く〜。

嘉間 ハツ。

ト縁が、りの内にて

捕手 歩め。

ト合ひ方になる。三十郎、抜刀構へ、捕り手四人、十

手構へ、前後に二人づゝ隈み出て、好き所にて

下に居やれ。

ト三十郎、好き所へ坐る。

半左 其方は花三十郎。

三十 藏源半左衛門どの。

半左 其方事は、親主水を蘭討ちに討たれ、敵を詮議仕出

し、本望遂げたくば、筋矢の三輪家の系圖を詮議仕出

し差上げなば、その功に依つて敵討ち御免の筈。それ

に系圖も差上げず、親の敵討ちたいと云ふ所存もなく、

傳かの金子に眼着れ、盗賊の汚名を取り、無念にはない

か。其方ばかりの恥と思ふか。草葉の蔭の主水どのま

で、恥辱を取らすか。こた不所存者めが。

郷助 これサ〜半左衛門どの、尤も貴殿は花園主水が弟

なれども、藏源の家へ養子となり、他家の名跡を繼いで

ござるからは、花園一家の縁はござるまい。さすれば三

十郎でござらうが、何奴であらふが、何れも貴殿のお構ひ

なさるゝ事はないわサ。

半左 イヤサ、盗賊とまつたるその種子を統し

郷助 ハテサテ、當所を預かる七北田郷助。貴殿は今日の

加役。何もお構ひなくと、拙者が詮議を、先づ極分いた

されい。

半左 御尤も。然らばこれにて見聞の仕りませう。

郷助 コリヤヤイ、盗賊め。うぬ、酒屋夫婦の者を殺め、

盗め蓄への金子を盗み取るとは、不敵な奴の。サア、眞

直に白状しろば。

三十 イヤ、身共、盗賊でない。

郷助 でも、うぬ、人を殺め、金子を取つたでないか。

三十 浪人しても花園三十郎、人を殺め、金子を奪ひ取つ

た覚えはござらぬ。

郷助 覚えない者が、なんでその刀に血が付さある。

三十 それは最前申す通り、外に盗賊あつて、若右衛門

夫婦を殺め、拙者へ切つてかゝりしに、抜き合せ、懺



捕手 捕つた。

トまた西人、三十郎にかゝるを切り立てる。捕り手逃げて入る。伴藏、三十郎にかゝる。立廻りあつて、キツととまり

三十 如何程云つても覚えはない。無實の罪に會を捨つる事罷りならぬ。

郷助 うぬ、手向ひせば。

ト刀取り、行かうとするを、半左衛門、留めて

半左 郷助どの、先づ／＼待たつしやれ。

郷助 半左衛門どの、何ゆゑ留めさつしやる。サア、そこ退かしやれ。

半左 ハテサテ、貴殿は、あの高札がお目にかゝらぬか。

郷助 なんと。

半左 罪の重きを軽く取り行ふが政道の第一。

郷助 ぢやと申して、手向ひを仕るに依つて。

半左 さればサ。彼れが狼藉は、正眞の曳かれ者の小唄同然。其所を堪忍召さるゝが、即ち主人より建て置かれたるあの高札。

郷助 ヤア。

半左 何事も堪忍の二字。

郷助 でも。

半左 但し、主人の教訓、用ひ召されぬか。

郷助 サ、それは。

半左 マア／＼叩へ召され。

ト郷助、口の肉にて呷き、元の座へ座る。

ヤイ、そな盗賊。

三十 伯父者人、こなたまでがお情ない。

半左 證人なければ、盗賊の疑ひは晴れぬわい。

トきつと云ふ。

三十 すりや、如何やうに云うても。

トいろ／＼口惜しきこなしあつて

ホイ。

ト投身を捨て、どつかと座る、

郷助 血潮の付いた證據の刀、これへ持て。

嘉間 ハツ。

ト取りにかゝるを、三十郎、嘉間太を突き退け、伴藏、取りにかゝるを、三十郎、刀取つて、伴藏に突きつけ

三十 武士の魂ひに手を掛けるが最期、眞ッ二つぢやぞ。

半左 イヤ、身が預からう。

三十 なんと。



半左 善悪を取捌く代官所は、即ち武將の御前も同然。白刃を以て尾籠の振舞ひ。

三十 すりや、こなた極が。

半左 しかと預かる。

三十 ハツ。

ト半左衛門へ持ち行く。半左衛門、取つて、紙にて血泊を拭ひ取る。

郷助 説書の血潮、何ゆゑに。

半左 ナニこれしきの證據呼はり。誠の蓋原出るまでは、

三十 郎は掛り合ひ。

三十 すりや、どうあつても。

郷助 入牢だぞ。彼奴を籠屋へ引立てい。

嘉間 ハツ……立たり。

トかゝるを押し退け

三十 逃げも走りも仕らぬ。入牢すべき罰れない。陽り

立つまで、この白濁は罰きは仕らぬ。

郷助 うぬ、我ま、なる科人め。身共が直に引立て、。

ト行かうとするを半左衛門、また留めて

半左 イヤ、彼れも武士でござる。よもや卑怯未練に逃げ

も走りも罰すまい。搦り家へ遣はし、入牢の儀は容赦い

たして遣はされたい。

郷助 でも、餘り法外なる致し方でござるゆゑ。

半左 ハテ、其所が彼の堪忍の二字。

郷助 ヤア。

半左 御主人の教訓は、爰等の事でござらうわサ。

郷助 エ、……勝手にさつしやれ。

ト咳きかへる。バタノにて、橋がよりより、門番、

えり出て

門番 申し上げます。浪人者と申しき奴、理不盡に門内

へ通らんと仕りまするゆゑ、支へますれど狼藉を働ら

き、最早これへ参りまする。

郷助 狼藉者ならば、打ち拵ゑて纏ふて。

門番 ハツ。

ト走り入る。直ぐにバタノにて、橋がよりより、十

兵衛、懐中に抱子を入れ、搦り手四人を相手に立廻り

ながら、ツカ／＼と出て来て、好き所にて、ドッコイ

と見付。

半左 者ども侍て。

四人 ハツ。

ト扣へる。

郷助 半左衛門どの、狼藉者をなぜ宥免召される。

半左 懐中に幼兒を抱き狼藉を仕るは、門内へ入らん爲の  
手向ひと見える。コリヤ、そな者、左様であらうが。

十兵 如何にも御推量の通り。

ト半左衛門と顔見合せ

半左 其方は小栗栢十兵衛。

ト三十郎、十兵衛を見て

三十 小栗栢十兵衛、其方に逢ひたかつたわい。

ト氣色して行かうとする。

郷助 ソリヤ。

ト作藏、喜間太、三十郎を圍ふ。

科人の分際で身動き叶はぬ。

兩人 扣へて居らう。

ト反り打つ。三十郎こなしあつて

三十 小栗栢十兵衛、其方、親人主水どのを手につけ、京

都へ立退く卑怯の振舞ひ。その上、西陣にて武士と武士

とが番ひし詞を偽はり、今日の日まで逃げ惑るゝ人でな

し。其方が在所を所々方々尋ねさまよひ、思はず盗賊の

悪名まで請けるやうになつたも、これ皆其方ゆる。親の

敵と云ひ、三十郎が爲には重々の遺恨。切り刻んでも懐

らぬ、エ、其方はなア。

ト口惜しきこなし。

十兵 オ、委細を存せねば、その恨みは尤もく。何か

と委しき様子は追つての事。先づ契約の三輪の系圖、我

が手に入つた。

三十 すりや、系圖は手に入つたか。

十兵 この系圖の爲に、女房まで敵の手に取へなき最期。

三十 ナニ、妹も相果てたか。

十兵 如何にも……ナニ御兩所、率直に致さぬ。お引き下

されい。

ト作藏、喜間太扣へる。十兵衛、三十郎の御へ行き系

圖を渡す。

先達て象潟さまの御内意もあれば、この系圖、其方より

半左衛門どのに渡し、花園の家名相續の上、首尾よく主

水どの、敵と名乗つて討たるゝ覺悟。

三十 その心底とも知らず、只今の返言、面目ない。

十兵 なんのく、先づ、その系圖を、早うく。

三十 如何にも……伯父者人、三輪の系圖、お受取り下さ

りませう。

ト半左衛門に渡す。

半左 兩人とも出かした。系圖を議議仕出したる功に、花園の家相續の執成し、半左衛門が致しくれう。

三十 エ、有り難い。この上に敵討ちの儀を。

郷助 そりやならぬ。

雨人 なぜた。

郷助 三十郎は盜賊り疑ひか、つた。この明りが立たねば、系圖差上げて、敵討ちの願ひは叶はぬ。

十兵 すりや、敵の盜賊を引捕、ねば。

郷助 何時までもこの代官所に止め置く。系圖を詮議仕出したは三輪家への功。爰は佐竹の領地、明りが立たねば代官所を預かる、七北田郷助、役目が立たぬ。

十兵 御すも。然らば何卒三十郎が代りに、この十兵衛を。

郷助 科人に身替り取る法はない。

十兵 すりや、如何やうにお願ひ申しても。

郷助 くだい。

十兵 ト十兵衛、いろくこなしあつて

十兵 ホイ。

ト富恵す。

三十 十兵衛どの、貴殿の志し、過分に存ずる。こりや

コレ、三十郎が不運災難と申すもの。三輪佐竹御一家とは申しながら、當所を預かる郷助どの、役目が立たぬとの御一言、この理に返す詞はござらぬ。なんと致さう、是非に及びませぬ。盜賊の明りの立つまで、揚り屋へ参りませう。

十兵 天晴れの覺悟。併し、氣遣ひ召さるな。この十兵衛が近國近在を駈け廻り、その盜賊を詮議仕出し、引ッ捕へ、一時も早くおてまへの明りを立てる。暫時の間辛抱召され。

三十 重ねくの志し、忝なう存じまする。

半左 三十郎、出かした。義を鐵石に固め、勇みあるを誠の武士と云ふ。未練がなくて潔よ。

郷助 半左衛門どの、三十郎は揚り屋へ押込め、十兵衛はぼッ拂ひ召されば、拙者は京都のお使者へ御挨拶仕らう。伴藏どのも奥へござれ。

伴藏 畏まつてござりまする。

郷助 三十郎を引立てい。

嘉間 ハツ、……立たう。

ト三十郎、こなしあつて立ち上がる。

十兵 随分短氣を出さぬやう。

三十 貴殿も堅固で。

十兵 敵討ちの勝負するまでは、其方より預かつたる十兵衛が命。少しも差路には致さぬ。

三十 三十郎が命は、只天運次第。

十兵 追ッ付け吉左右。

三十 先づそれまでは。

ト兩人こなしあつて

兩人 さらば。

郷助 キリ／＼立て。

ト明になる。郷助、伴藏、奥へ入る。三十郎、臆病口へ靜々、嘉間太付いて入る。この時捕り手皆々入る。

後言ひ方になる。

十兵 何にもせよ盜賊の詮議。

ト橋が、リへ行かうとする。

半左 十兵衛待ちやれ。

十兵 イヤ、一時なりとも心急ぎにござれば。

トまた行かうとする。

半左 小早稻十兵衛、尋ねる仔細がある。マア待ちやれ。

トきつと云ふ。十兵衛こなしあつて、半左衛門の側へ行く。

十兵 半左衛門どの、して、お尋ねの仔細はな。

半左 其方、如何なる遺恨あつて、主水どのを討つて立退いた。その上。又、主水が敵は我れなりと、三十郎に討たる、心底、如何しても心得ぬ。殊に以て、兄主水相果てし場所に、着殿秀太郎どのも殺してあつたぞよ。

十兵 ムウ、……主水どのを討つたは、こりや人違ひ。すりや、その場に秀太郎どのも殺しあつたとな。

半左 さすれば主水が敵ばかりでない、秀太郎どのも其方が仕業。すりや、主殺しになるぞよ。

十兵 イヤ、主殺しでござらぬ。拙者が仕留めましたは、正しく一人。例へ又、秀太郎どのを拙者が打ち留めしにもせよ、主殺しではござらぬ。元よりお家の爲でござり

まする。

半左 そりや又なせに。

十兵 元來秀太郎は、安達友之進が肉身の悴。

半左 ヤ、なんと。

十兵 友之進、お湯殿と密通して、懐胎の男子を殿のお胤と偽はり置きし事、秀太郎と友之進、密々の物語り、聞きたる者は主水どのとこの十兵衛。友之進が悪心ゆゑ、

秀太郎友之進を討つて捨てるより外なしと、主水どのと



躍し合せ、城下の町外れ、柳の下にて友之進と取違へ、主水どのも敢へない最期。

半左 さてこそ、秀太郎が横死の詮議につき、家老の友之進、厳しく吟味すべき筈、さはなくして徒らに日を送るは、ハテ心得ずと思ふところに、今其方が物語り、秀太郎が敵は其方と存じながら、彼奴が詮議せぬも、もし我が子と云ふ事顯はれては身の大事と、ヂツと押隠し居るは、三輪家を横領せんと、彼奴が企みであつたよな。

十兵 なんと、主殺しにはなりますまい、がな。

半左 併し、秀太郎を友之進が肉身の忤と云ふ事存じたる者は、兄主水と其方ばかり。その主水は相果て、一人が証を証としては、これも無證據。

十兵 その儀は、友之進を引ッ捕へて拷問なさば。

半左 イヤ、只今右京の太夫は御病中。一家中皆、友之進が下知に隨ふこの時節。友之進を荒立てば、三輪家の騒動。

十兵 すりや、外に證據がござらねば。

半左 其方は主殺し。

ト十兵衛、こなしあつて

十兵 主殺しの糾に極まらば、主水どのは闇討ちに討たれ

たるになり、相手なければ花園家は没落……こりや何時までも、主水どの、敵はこの十兵衛。秀太郎は友之進が肉身の忤と云ふ事、嘘言でないと申す證據は、今この場にて拙者が忤せ。

ト抱子を出し、刀を抜き、突き殺さうとする。抱子泣く。半左衛門、留めて

半左 先づ待て。嘘言でない證據見届けた。

十兵 すりや、お疑ひは。

半左 我が子の命を誓ひの神文。慥かに受取つた。

ト抱子を取る。

十兵 すりや、忤せ。

半左 聞けば母も相果て孤兒同然。半左衛門が拾ひ取り、育て上げて、其方敵討たれ相果てし後にて、二代の小栗栖十兵衛と呼び、家名を残し得さすぞよ。

十兵 エ、……忤ない。この上は盗賊の詮議。

半左 それも、ちと心當りもあれば、暫く次へ。

十兵 控へませうか。

半左 詮議の落着は其方に申しつける。

十兵 心得ました。

半左 行きやれ。

十兵 ハツ。

ト十兵衛、橋が、りへ入る。直ぐに侍ひ、白木の折を持ち出る。

侍ひ ハツ、仰せつけられました品、持參仕つてござります。

ト半左衛門が前に置く。

半左 オ、大儀々々。コリヤ、その幼兒を身が歸るまで、大切に致し置けと奥に渡せ。

侍ひ 畏まつてござりまする。

ト子を抱き取る。

半左 早く。

侍ひ ハツ。

ト侍ひ、幼兒を抱き、橋が、りへ入る。と七ツの鐘鳴る。奥より久馬出て

久馬 最早申の刻、半左衛門どの、コリヤ、何時まで使者

を待たすのぢや。

半左 御尤も。御退屈と存じ、取寄せましたる山吹煎餅。

粗末ながら御賞下さります。

ト右の折を久馬の前に置く。久馬につこり笑ひ

久馬 只今奥にて伴藏どのに承はつた山吹煎餅。さてさ

てお心の付いたおもてなし。お志しのお菓子、受納仕らうか。

ト折の蓋取ると、仕掛けにて箱、四方へ開く。内に古き飯椀と箸片し入れてある。久馬見て忸り。

これは。

半左 夜前嘉右衛門夫婦を切り殺し、金子を奪ひ取つたる盜賊の詮議。最前家來を遣はし吟味させしところ、この

二品、嘉右衛門夫婦が最期の場所でありと云ひ、その日の暮れ方にこの飯椀を叩き、ごろの乞食、嘉右衛門が門に立ちしと百姓どもの注進。

久馬 その見苦しき品を、使者の身共に突きつけたは。

半左 この飯椀で水をくれる。

久馬 そりや誰れに。

半左 似せ者のわれに。

久馬 ナニ、似せ者とは。

半左 疾よりそれと睨み置きたれども、止め置いたは仔細がある。サア、この古椀を叩きしごろの非人は、うぬであらうがな。違てあらがふと、百姓どもを呼び寄せ、面

縛さうか。

久馬 サアそれは。

半左 サア。

久馬 サア／＼／＼。

半左 なんと。

久馬 もう是非に及ばぬ。

ト半左衛門に切つてかゝる。立廻りにて半左衛門、久馬が拔身を打ち落し、二重舞臺より下へ取つて投げる。

こりや堪らぬ。

ト逃げ出す。橋が、りより、十兵衛、ツカ／＼と出て、向うに立ち塞がり

十兵衛 嘉六、待て。

ト嘉六、十兵衛を見て憐れ。

嘉六 わりや十兵衛、もう百年目ぢや。

ト差添状いて切つてかゝるを、十兵衛、立廻りにて、右の腕を取つて振ちつけ、キツと見て

十兵衛 西陣にて切り付けし利腕の疵、最早遣がれぬ嘉六。

夜前の盗賊も、うぬに極まつた。白状せい。

嘉六 イ、ヤ、覚えはない。

ト振り廻き、懸樋口へ逃げ込まうとする。三十郎、ツカ／＼と出て、嘉六が向うに立ち塞がり

三十 盗賊め、待ち居らう。

嘉六 なにを。

ト切つて行く拔身を、三十郎打ち落し、立廻りにて左の腕を振ち上げ、疵を見て

三十 さてこそ、夜前切りつけし弓手の生疵、

嘉六 南無三。

ト振り切り逃げるを、三十郎、嘉六を舞臺の真中へ投げつけ、十兵衛、三十郎、両方より嘉六を引ッ挟み

兩人 白状せい。

ト反り打つ。

嘉六 ア、云ふ／＼。マア、待つてくれ。如何にも、お

りや嘉右衛門が實の伴ぢや。久し振りで逢つたに依つて、金の無心云うたれば、聞き居らぬに依つて、二人とも殺らしてしまふたが、親殺しぢやない、勘當の身分ぢや。なんと、斯うすつぱりと云うたら、わいらの疑ひは

晴れる。その代り、おれが命乞ひしてくれい。

半左 憎くい奴。勘當受けても親殺しの大罪。その上似せ侍ひの騙り事。この半左衛門が骨を拉いで。

ト嘉六が方へ行かうとする。奥より郷助、ツカ／＼と出て、半左衛門を突き退け、嘉六を直ぐに縛り上げる。

伴藏、嘉間太出る。

半左 郷助どの。

郷助 當所を預かるこの郷助、この詮議は拙者が仕り、

白狀の上、仕置は磔刑。

嘉六 ア、しまうた。

トぐんにやりする。

十兵 これで三十郎が疑ひは晴れましたかな。

郷助 如何にも。

三十 この上は、何卒敵討ちの儀を。

半左 オ、三輪の采圖出る上は、先達てお赦しありし敵

討ち、場所は即ちこの七北田の廣野に於て、明日早天に、

兩人勝負を致せ。

兩人 畏まつてござりまする。

半左 今こそ返す三十郎が刀。

ト最前預かりし刀を、三十郎に渡す。三十郎、受取つ

て

三十 然らば十兵衛どの。

兵十 三十郎どの、明日敵討ちの場所にて。

兩人 御意得ませう。

ト兩人こなしあり

伴藏 うぬ。

ト嘉間太は三十郎、伴藏は十兵衛にかゝるを、兩方少し立廻りあつて、一時にボンと當てる。兩人ウンと、たぢくと後へ寄つてへたる。

郷助 うぬ。

ト半左衛門を引退けうとするを、半左衛門、右高札を取つて、郷助を引き廻し、高札を郷助が顔へ突きつける。

これは。

半左 狼藉を押へる堪忍の二字。

郷助 ヤ。

半左 兩人ともに詮議は済んだ。

兩人 ハツ。

郷助 でも。

半左 但し、高札の表を背き召さるゝか。

郷助 ムウ。

ト力む。

半左 早く立て。

ト高札にて郷助を留める。十兵衛、三十郎、とん／＼と後へ寄つて



兩人 ハツ。

ト一時に俯儀する。途端、よろしく

しやうし幕

大 詰

一の宮の場  
敵討の場

役者 花園三十郎、七北田郷助、實ハ立浪伊平  
次、三輪要之助、傾城、雛鶴、齋藤傳五右衛門。  
名取川龍介、三十郎女房、お貞、岩手伴藏、磯瀧  
平左衛門、安達友之進、小栗柄十兵衛。

遺り物、向う淺黄敷、石の方に石の大鳥居、一面の  
王垣、所々に石燈籠、臺守きの提灯、一の宮造營と  
書きつけあり。いづれも火を灯しあるべし。幕の内  
より三輪要之助、傾城、雛鶴、着流しにて、一腰に手  
をかき寄る。左右に奴四人、巻いて居る見得。庭神  
樂、ハツ、ハツにて、早幕明けける。

奴者  
要之助

要之助、勤くな。  
船先の三輪の赤圍、友之進が所持せんも計られず、

今宵この一の宮へ代參と聞く。近寄つて詮議せん爲。  
雛鶴 殿様に連れ添ふからは、武士の女房、妨げさしやん  
すと免さぬぞえ。

要之 雛鶴、ぬかるな。

雛鶴 合點でござんす。

奴者 腕廻せ。

ト二人づゝ立廻りになる。この時、郷助着付け上下大  
小にて、橋が、リより出る。要之助、雛鶴、一時に刀  
を抜く。奴、雛鶴が刀を取る。要之助、雛鶴を助けん  
と寄る所を、郷助、ズツと出て、要之助が刀を叩き落  
し、取つて伏せ、早繩かける。この間に奴、雛鶴に繩  
かける。

要之 友之進や討ら渡らして、口惜しいわやい。

郷助 此奴め、引拵ゑて置く。

奴者 立たう。

ト引立て、橋が、リへ引据ゑる。ト祝詞になる。鳥居  
の方より、友之進、着附け麻上下、後より近習四人付  
き出る。

友之 郷助どの、天晴れなお手筈でござんる。

郷助 何をがたと存せしところ、繩にかゝつたこの生物、此

ま、進上申す。お料理は御勝手になされい。

友之 何よりの一品、賞額 仕るでござらう。

郷助 今日御代参とあつて、下し賜はる武將の黒付き。拜

聴 仕りたり存じまする。

友之 お聞かせ申さう。

ト相引に腰かけ、懐中より御書を出し讀む。

當一の宮造營に依つて、奉行たるべき宮立て成就の上、

三輪の家國十萬石領地せしむべきものなり、眞業久吉在

判。

ト讀み、こなしあつて

御代参終りし上、大殿右京太夫を押籠め、この御教書を

以て、國家横領、何もかも心の儘。

郷助 天晴れ、その大望に合體せしこの郷助。

四人 我れ／＼も一味同心。

友之 誓書を以て、違變なき各々の心底、満足々々。

郷助 貴殿に刃向ふ花園三十郎、人違ひの狼藉を、無理に

彼奴が科に云ひ伏せ、しまひつけんと存せしところに、

伯父半左衛門が同役に有り合せ、免や角と妨げ、その上

小栗栖十兵衛が参り合せ、貴殿の下知で入込んだ嘉六み

は、誠の人殺しと見顯はせしゆゑ、此方の手段は相違。

殊に系圖の一卷は、十兵衛が手に入りしとあつて、三十郎に手渡してござるぞや。

ト要之助さてばと、鶴鶴と顔見合せ、向うを見てこなしある。

友之 ナニ、三輪の系圖は十兵衛が手へ……ムウ、弟友九郎は木曾山に於て討たれしとの風聞。さては十兵衛めが

所爲であつたよな。弟と云ひ、伴秀太郎が敵。うぬ、十兵衛め。

ト向うを見て、無念のこなし。

郷助 イヤ、友之進どの、御舎弟は格別、伴秀太郎の敵

とは、その意を得ぬ御一言。仔細は如何でござる。

友之 成る程、貴殿には御存じない筈。三輪の惣領、御主人と尊みし秀太郎どのと云ひしは、肉身分けし某が實

の伴。國の守りに守り立て、一國を押領せんと企みしところ、去年五月二十五日、小栗栖十兵衛が手にかゝり、

伴秀太郎は相果てゝござる。

郷助 ムウ。すりや、主水の殺害の砌り、秀太郎どのも。

友之 イヤ、花園主水を討ち留めしは、斯く申す友之進で

ござる。

郷助 なんと。

友之 二本松の城下外れ、柳が下にて出合ひし時、兼ねての大聖、一大事を覺りし主水、生けて置いては後日の邪黨と、性を始め弟が加勢を得て、難なく討ち留め、死體は其まゝ水中へ打込みし所へ、駆けつけし小栗柄十兵衛、身共を目がけて討つてかゝる、提灯を切り落し、闇夜に紛れ、その場を立退いてござる。その場にありし性が身の上、心元たく存するゆゑ、家來を以て窺ふところ、その場に於て積累せしとの風聞、さては關打ちの人違ひ、身共と思ひ性を討ち留め、止めを刺せしは小栗柄十兵衛。大聖の足代と、二十年來養育せし性を討たれ、無念骨髄に通つて忘れ難く、悪心は日頃に百倍。主水を討ちしは十兵衛と云ひ觸らせ、同士討ちさせて彼奴ほらを逆ひ失ひ、同じ勇を伸す我が大聖も、兩人がくたばれば、柔國も自然と手に入る道理。三輪の一族は、二方を始め所縁の奴ばら、一々にぶち放し、弟背が未來の追善。この御教書を以て、家國を押領。大聖成就の時來つたか。ハテ心地よい。

ト突處に入りこなし。

要之 聞けば聞く程、重々の大悪人。この様子を三十郎や十兵衛に知らせたい。

雛鶴 この繩は解けぬかいたア。  
 兩人 エ、口惜しい。  
 郷助 コリヤ、跪いてももう叶はぬ。一大事を聞いたうぬら、どちらの道生けては置かぬ。覺悟して、それへ直れ。

ト刀を抜かうとする。

友之 イヤ、この所で血をあやまば、神慮の恐れ。身共が屋敷へ引立てさつしやれ。

郷助 心得ました。家來ども、繩付きを友之進どのへ引け。

奴背 ハツ……立たう。

ト要之助、雛鶴を引立て入る。ト戸家の内にて響の音して、傳五右衛門、着付け上下、大股立ちを取り、鞭を腰に差し、馬より下りたる體にて、家來連れ、ツカツカと出る。

傳五 友之進どの、何れも、これにござるか。

友之 齋藤傳五右衛門どの。

近習 あわたましい、何事でござるか。

傳五 さればサ、當曉小栗柄十兵衛、花園三十郎、敵討ちの儀は、何れも御承知でござらう。即ち七北田の西廣野

に於て尋常の立會ひあるべき所、檢使として安達友之進  
 どの、斯く申す得五右衛門、兩人へ立會ひの役目、仰せ  
 出されてござる。

友之 すりや、檢使の役目を拙者に。

傳五 まつた、佐竹どのより磯瀧半左衛門どの、七北田郷

助どの、兩人立會ひ横目役との儀でござる。

郷助 某は横目役とな。

傳五 敵討ちは寅の一天、御代參終りなば、直ぐさま彼所

へ御同道と存じ、取るものも取りあへず、參上仕つて

ござる。

郷助 友之進どのに野心ある兩人、彼の場所へお越しある

は、如何にしても心元ない。

友之 ハ、ハ、ハ、ハ、二才めらが野心ありとて、何程の事

がござらう。殊に武將の墨付きを所持いたせば、手ざし

ひろがば朝敵同然。

傳五 成る程、御教書を所持ある、貴殿へ手ざしする者、

一人もござらぬ。

近習 我れくも警固仕る。

友之 イカサマ、百萬騎の加勢より、まだく丈夫なこの

御教書。これさへあれば大望成就。

トにつたり笑ひ、傳五右衛門を見て、氣を替へ  
 參りませうか。

郷傳 直ぐさま同道。

友之 何れも、來やれ。

ト庭神樂になる。安達友之進、傳五右衛門、近習、皆

皆付き添ひ、橋がりへ入る。と居の内より、お貞、

伴藏と切り結び出て

伴藏 主人の御代參を窺ふ不敵の女、くたばつてしまへ。

友之進に一味と聞いたら、此方より生けては置か

ぬ。覺悟しや。

伴藏 こま言云はずと、くたばれ。

ト切り結ぶ。神樂早める。タテいろくあつて、ト

お貞、伴藏を切り殺し、止めを刺す所へ、龍介、子を

抱き走り出て

龍介 お貞さま、これにござりまするか。半左衛門どのよ

り、この和子を拙者めにお預けなされ、敵討ちの場所へ

參れとの儀。十兵衛さま三十郎さま、どちらにもお怪我

のないやう。どうぞこの敵討ちは止めさせたいものぢや

が。

てい 敵は兄様、狙ふは夫。どう思うても……さうぢや。



ト行かうとする。龍介、留めて侍った。場所へござつて助太刀召さるるか。

龍介 なんと。

トついと橋がムリへ入る。龍介も續いて行かうとする。家來大勢出て

家來 動くな。

ト取巻く

龍介 がらくためら、寄りあがるな。

家來 ソリヤ。

ト龍介へかゝるを、刀抜き放し、追つて入る。返し、鳥居引分ける。淺黄藍切り着す。

造り物、向う奥深に山の景色、後ろ一面に矢來、東西入り口、扇子の紋、佐竹の高提灯、三輪の高提灯、左右に立て並べ、東の方に半左衛門、郷助並び、床几にかける。西の方に友之進、傳五右衛門並び、床几にかゝる。近習四人、左右に別れ、少し後の方に床几にかゝる。所々に篝火を焚き、東西に侍

ひ、大勢扣へ居る。七ツの大鼓打ち込む。御兩所とも、御役目御苦勞に存じまする。

半左 半左衛門どの、貴殿は横目役と承はつてござる。して兩人は、何れに居ります。

半左 左右の御家に先刻より扣へ居ります。七ツの大鼓を打ちましてござれば、矢來へ入るでござらう。

傳五 三十郎を呼び出してよからう。

侍ひ ハツ。

郷助 十兵衛を呼び出せ。

侍ひ ハツ。

ト東西の木戸口へ別れ

侍一 花園三十郎どの。

侍二 小栗栖十兵衛どの。

侍ひ 勝負の刻限でござるぞ。

ト西の口より十兵衛、東の口より三十郎、兩人白無垢、鎖鎖巻、大小にて、侍ひ付き添ひ出て、左右の入り口にて、十兵衛、三十郎顔見合せ、目禮して、内へ入る、また檢使の方へ平伏する。

半左 三十郎は敵を討たんと年月の心算。まつた十兵衛儀は、先非を悔んで名乗り出でし、神妙の働らき御實美の

上、敵討ち勝負御赦免、討たる、は時の運。急ぎ双方立會つてよからう。

三十 ハッ、敵討ちの勝負、御赦免なりしは

十兵 武士の冥加に叶ひし仕合せ。

三十 千萬。

兩人 有り難う存じまする。

ト侍ひ、土器を持ち、十兵衛、三十郎兩人が前に置く。侍ひ二人、手水桶を持ち出て、土器へ水を注ぐ。

十兵衛、三十郎春む。また水盃の土器を取替へる事あつて

十兵 有り難く頂戴。

三十 仕つてござりまする。

ト一時に土器を割る。

友之 時刻が移る。双方立會つてよからう。

兩人 ハッ。

ト用意しかくあつて

三十 小栗橋十兵衛、其方が討つて立退きし花園主水が一人、同苗三十郎、父の鬱憤、今こそ晴らす。覺悟せい。

十兵 覺氣なる志しにめで、討たれてくれたいものなれど、所存あれば、返り討に討ち放す。觀念せい。

三十 サア。

十兵 サア。

兩人 サア。

トたてのめりやすくなる。面白きタテ、いろ／＼あり、友之進、兩人のタテに目を付ける。好き程に、十兵衛、わざと刀を落されて下に居て、首差延べる。友之進、そこちやとぎしむ。三十郎、十兵衛が刀を取つて無理に持たせ、また立ち上がり、左右へ別れ、ヤアと立合ふ。友之進、齧痒がり、立ちかゝらうとして、半左衛門と顔見合せ、ちやつと床几にかゝる。三十郎、わざと刀取落し、下に居て首差延べる。十兵衛、刀を取つて、無理に持たせ、また別れてヤアと立合ふ。友之進、焦ること度々ある。ト、十兵衛、三十郎一時に刀を落し、互ひに打て打てとせり合ふこなし。友之進、見兼ねしこなしにて、ツカ／＼と眞中へ入り

友之 待て／＼。双方ともに待たうぞ。

半左 友之進どの、なぜ留めさつしやる。

友之 イヤ、留めは致さぬ。敵討ちの勝負、立會ひが紛らほしい。

半左 なんと

友之 三十郎は親の敵、十兵衛なれば、付け入りく無二無三に討つべき筈。十兵衛は返り討に致さんと高言吐いた詞と相違、左ひに刀を落し、討たれうくとする體。續後立つた我れ、を明處にするのか。さほどまでくたげりたくは、身ぶら成してくれう。十兵衛、先づうぬから。

ト拔打らに十兵衛へ切りかける。三十郎走へる。三人立廻つて

三十 敵討ちより先へ。

十兵 先づうぬを。

ト高め寄る。半左衛門押へ、真中へ高札を立て

半左 コリヤ、血氣を静める堪忍の二字。

兩人 エ、。

ト無念がる。

友之 なんぢや。何をびこつく。某は大駈の名代。この墨

付に因事があると、武野のお榮り、一國は暗闇だぞ。こ

なうづ束めら。身に向ふと朝敵だぞ。

兩人 サア、是れは。

友之 處外ひろくか。

兩人 サア。

友之 サア

三人 サアくくく。

友之 なんとした。

兩人 その御教書。

ト左右より取りにかゝる。半左衛門、十兵衛を隔てる。友之進、三十郎を引廻して

友之 郷助、ソレ。

ト御教書を渡す。

郷助 合點ちや。

ト受取る。

ト友之進、半左衛門へ切つて行く。半左衛門、高札に

て受ける。仕掛けにて割れる。中より赦し文出る。十

兵衛、友之進へ拔身をさしつける。

友之 これは。

ト三十郎、手早く閉き

三十 堪忍は國の寶、これを守つて邪正を糺し、敵討ちを

透ぐべきものなり、三輪右京の大夫これを赦す。

十兵 こりや、敵討ちの赦免狀。

傳五 これへ持ちやれ。

三十 ハツ。

ト傳五右衛門へ渡す。この時、橋が、りより、お貞、龍介、子を抱き、走り出て、矢來の内へ入る。半左衛門、郷助、近習、皆々友之進を圍ふ。

半左 今こそ誠の敵討ち。

三十 安達友之進。

皆々 覺悟せい。

友之 待てく。身共を敵とは何を證據。馬鹿盡したら、

手は見せぬぞ。

半左 ヤア、愚かく。其方が悪事見出さん爲、一味と見

せし七北田郷助、大事の役目、大儀々々。

郷助 ハツ、首尾よう參つて、おめでたう存じまする。

ト御教書を半左衛門へ渡し、下座へ下る。友之進、悔

りして

友之 すりや、廻し者であつたか。

郷助 身は半左衛門どの、若黨、立浪伊平次と云ふ者。御

主人の下知に依つて、佐竹の家中となり、味方に加は

り、開出した企みの段々。思うた壺へ渡した御教書。主

水どのを討取りし其方、秀太郎と云ふは血筋の悴と、一

大事を口走つたは、通がれぬ天命。

半左 家國を横領せんと、奪ひ取りし三輪の采圖。再び手に入り、即ちこれに。

ト一卷を出す。

傳五 身共を始め並み居る面々。皆武將よりの

皆々 隠し目附け。

三十 押へて討つは易けれど、御教書を所持すれば、名乗りかけて勝負もならず

十兵 味方討ちして汝を騙かり、取返したる武將の雲付。

郷助 儻となりし若殿様、織鶴さまも取返したば、お家は

長久。

龍介 お二人ともに、直ぐに館へお供申した。

半左 年來の積悪、悉く露顯の上は、陳じても最早叶は

ぬ。國家を窺ふ悪人なれば、逆磔刑にも行ふところ、敵

討ち赦免なりしは武士の本望。尋常に立會つてよから

う。

郷助 但し、繩ぶち斷罪せうか。

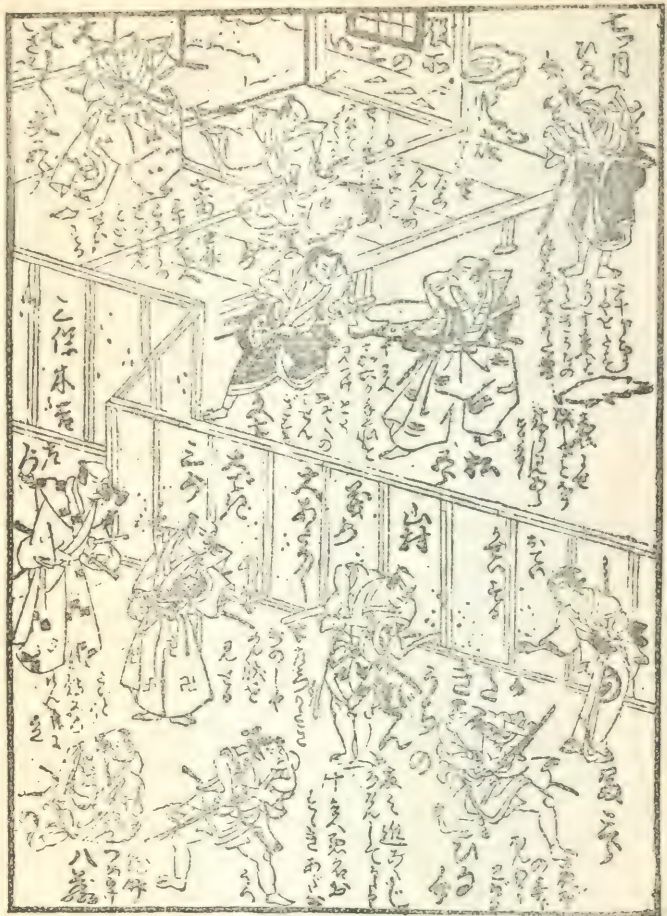
三十 尋常に勝負するか。

皆々 なんとぢや。

ト詰めかける。友之進、こなしあつて

友之 推量の通り、花園主水は身が打ち放した。うぬら一





初演の繪番附

一返り討だぞ。

ト肩衣鈍れかけ、股立取る。

三十 親人の敵。

十兵 師匠の鬱憤。

てい 舅御の仇。

龍介 この和子は、お果てなされし操さまの御名代。

ト友之進、真中にて刀を構へ

友之 ヤア。

ト目をくばる。

皆々 ヤア。

ト左右よりかゝる。又タテのめりやすくなる。いろ

いろタテあつて、ト、四人かゝつて友之進を切り、殺

す。

三十 年來の鬱憤。

十兵 思ひ知つたか。

ト兩人して扶る。

半左 敵討ち相濟む上は、この旨言上。めでたくこの場

は、お立ち〜。

ト打出し。

ひやうし幕

敵討安榮録(終り)

下紐關したひものせき

龜割坂かめわりざか

姉あね

妹いもと

達だての

大おほ

礎きど

大西芝居



浪華  
中  
演

紙表附番繪演再



## 姉妹達大礎

## 口明

達の大木戸の場  
達家奥殿の場  
櫻の馬場の場  
白石松原の場

役名――達六太郎。綾小路兼冬公。松江藏人實ハ  
五門六の七郎兵衛。白拍子、櫻木、同、鹿野。同、  
正木。同、淺野實ハ、粟島雛形姫。津輕官兵衛。安達  
丈助。野々宮宮内。藤田軍吉。福原新吾。高倉曾  
平。山形主計頭。豊岡大藤亮。吉見右京太夫。幫  
間、綾助。志賀豪七。志賀谷五郎。甚内娘。宮城  
野。佐五平女房。お力。杉木甚内。宇治兵部之助  
正之。

造り物、城の石垣、上は矢切にて、真中龜割坂の道筋、後ろ山着。奥州伊達の大木戸の礎。達六太郎、

着込み腹巻、大口小手、嚙當、陣羽織、かつら鉢巻、若大将の拵らへにて、采配を持ち、床几にかゝる。安達丈助、半切り團丸、かつら鉢巻の形。藤田軍吉、福原新吾、高倉曾平、各々軍立ての形、旗持ちの雑兵、竹に雀の旗を持ち、六太郎に引き添ふ。その外、雑兵數多、並びある。問の聲、ドンチヤンにて、幕閉くる。と遠攻め筋かに打つ。

六太

何れも、着到の軍勢は、相揃うたか。どうぢや。

丈助

若殿、六太郎さまの下知に依つて、一家中へ、觸れ

ながし、勢揃への人數を募り、追ひ／＼參着仕つてござります。

軍吉

奥州高館は、御先祖藤原の秀衡公より、代々鎮守府

のお家筋。

新吾

先年、義經公を、この國に迎へ取り、鎌倉大軍の討

手を引請け、數度の合戦。

曾平

一度も後れを取らず、遂に御和睦あつて、萬歳を唱

へ、お國代々、靜謐に相成りしに、計らざる今度の合戦。

丈助

火急の招きに、仔細を存せず、思し召しの段

皆々仰せ聞けられませう。

六太

尤もの不審。斯く軍勢を集むる事、三年以前、九州

にて亡びたる七草が殘黨、この國を切り取らんと、討ち渡らされの野武士を誦らひ、攻め來るとの風聞。取るに足らずとは云ひながら、二葉のうち摘み切らずんば、箭を用ふる國の煩らひ。それゆゑ伯父者人、太學どのの進めに觸ひ、斯く甲冑、劍戟を擡へ、この遠の大木戸に出張を構へ、敵押寄せなば一當あて、國境をほつ下し、悉く討ち取らんが爲、斯く合戰の催ふし。仔細と云ふはこの通り。その旨、相心得てよからう。

丈助 御意、畏まつてござりまする。當時足利武將義持公、四海に仁政を施し給へば、弓は袋に劍は鞘、武道に疎き今世の中。斯く申す安達丈助は、若殿の御師範たる杉本甚内どの、門弟。日頃の武藝は今この時。一擡の大將を討ち取つて粉骨釋身、手柄の程を御覽に入れませう。軍首 丈助どの、仰せの通り、並み居る者どもは皆、杉本氏の門弟、この度の軍に、諸人の目を驚ろかす程の高名を顯はし

新吾 哀れ好き敵と見るならば、眞一文字に切つて入り、武者振りよき首を取つて、兼ねて望みの極意の印可。曾平 杉本流の奥儀を窺んじ、先生甚内どの、御賞美にあづかる門弟どもが多年の願ひ。

丈助 成る程。軍中の手柄は仕勝ち。何れにも、ぬかり召さるな。

皆々 相心得てござる。

トこの時、向うバタ／＼にて、洋輕官兵衛、半切り鬨丸、小手脚當にて、鉢巻にて走り出て

官兵 申し上げます。都のお勅使、綾の小路中將兼冬公、當國歌枕の次手、この國へお入りのところ、思ひがけなき合戰の催ふし。お通りの間は路次を閉き、甲冑を禮服に改め、お出迎ひあるべきや。この儀、承引なくば、勅使に對して弓引くも同然。大將の御賢慮如何、御返答を承はれよとあつて、お乗り物を國境に立て置き、再三のお使者でござるが、この儀、如何計らひませうな。

六太 ヤア、ならぬ。勅使のお通りとあつて、軍勢をまとめ引取りなば、その機に乗つて敵入込み、高館へ攻めかけなば、ゆゑしき味方の一大事。圍みを引く事罷りならぬと、お斷わりを申し上げ、それとても承引なくば勅使とて苦しうない。國境よりほつ返してよからう。早う。

官兵 畏まつてござりまする。

ト引ツ返し、走り入る。

丈助 歌枕と名け、この國へお入りあるは、兼冬公の私し  
 にあらず。先達て三州の領主、粟島甲斐之助どの、妹姫  
 を、若殿六太郎さまへ御内儀、この度、大内より改めて婚  
 禮を取結び、達の家督とば相續あつて、勅使と共に上洛  
 を遊ばされ、お家の重責、鎮守府の印を、記録所にてお  
 改めあり、達家代々家督定め先例。そのお勅使へ對し、  
 無禮狼藉ござらば、若殿を始め一國の騒動。但し、思し  
 召しあつて儀か。六太郎さま、如何でござるな。

六太 尤もの不審ながら、某が所存は、追つて云ひ聞かさ  
 う。

丈助 御意ではござれど、お勅使へ無禮あつては、ハテ、  
 なんともしハヤ。

ト思案する。内にて、ドンチヤン、向う戸屋の内にて  
 関の聲を上げる。吉見右京大夫、甲冑の形。軍兵大勢、  
 度々先に押し立て出る。

右京 岩沼の領主、吉見右京大夫、只今參着。  
 六太 御文を以て催促せしに、早速の來來、御神妙に存ず  
 る。

右京 合戦の様子、承はると等しく、家の子郎等、手勢す  
 ぐつて二千五百騎。貝田の邊に控へさせ、先づ大將に見

參と存じ、罷り越しましてござる。  
 六太 第一番の着到、吉見右京大夫どの。帳面に記してよ  
 からう。

丈助 畏まつてござりまする。

ト帳面を取つて名を記す。又ドンチヤンになり、橋が  
 かりにて関の聲を上げ、山形主計頭、豊岡大膳、甲冑  
 の形。軍兵數多、旗を押し立て走り出て

主計 菊田の領主、山形主計頭。  
 大膳 幸ヶ瀬の領主、豊岡大膳亮。

主計 兩家の手勢三千五百騎、  
 大膳 一手に加はり、只今參上

兩人 仕つてござりまする。

六太 御兩所御苦勞。二番手、三番手の着到、相記してよ  
 からう。

丈助 ハツ。

ト同じく帳面に記す。

右京 見れば未だ矢合せの始まりし體とも相見えず。

主計 敵の軍勢、軍の備へ。

大膳 要害に依つて待ち請くるか。

右京 又は絶所へ討つて出るか。

大將の平朝りは

大將 如何でござるや。

六太 意は二太に、福島の間に請書いたし、遠坂の勢に破

れ苦しむ所の所へ、不意に探寄で討ち取りなば、度々失

なうて懸懸懸。

右京 此まま直ぐに探寄せませう。

大將 實に尤も。

軍新 者ども願け。

軍兵 ハア。

六太 ヤレ方々、血氣に湧るは西大の勇、柔よく剛を制す

ると云へば、影きと見て侮るは破れの基、百戦勝つて百

戦勝つるも、此こそあらん。先づ一編まつてよからう。

皆々 ハフ。

ト各々、鎮まる。向うバタ／＼にて、官兵奮走りぬて

官兵 解れも、一大帯が出来ました。

皆々 ナニ、一大帯とは。

官兵 されば、若殿の御意に依つて、お執使へ右の總き、

段々を斷むといへども、一向御承引なく、その上、磁

平野々、雲宵々と云ふ者、理不盡に厭け通らんと致すゆゑ、

血氣に透る末方の若武者、鎧鎧を以てはつ立て、お執

使を始め、官人仕丁に至るまで、獲らて置境へはり返し

てござる。さすれば大内へは御敵となつて、足元には七

草一校、お家の大事々、この時、この御意に御承引なさん編

直さま立歸つてござります。

六太 執使を召り立てしは、破るる逆朝の大罪。

右京 すりやお執使を

皆々 ムワン。

ト叱咄つき、こなしあり

六太 探寄官兵備、いよ／＼執使は立歸つたか。

官兵 左やうでござる。

六太 オフと、よし／＼、この世をあらう編に、獲らへた

勢種へ。皆々、大儀であつた。依の／＼。

丈取 イヤ／＼、六太御さま、そりや御意なさる、。

官兵 我れ／＼は、一向に合點が参りませぬ。

會平 備はりの勢種へとは

主計 六太御さま。

皆々 如何でござるや。

ト六太郎、眞甲へ出て

六太 されば、合點が行くまい。高は斯うぢや。其方通も

知る通り、都から取寄せた大勢の白拍子、その中に黒木



と云ふ美人を手に入れ、手酒けの花と思ふところ、ひよんな事は、單鳥の姫と教組みの勅使、勅使が高館の屋敷へ来て、親人に教組みの事を、云ひ付けると直ぐに祝言して、家格願ひに都へ上らねばならぬ。姫と女夫になつては、櫻木は腹立てる。おれも氣が済まぬゆゑ、なんでもこれには分別があらうと、枕の千も割つては見たれど、とんと仕様がなから、差合ひくらぬ伯父御の大學さまに打割つて談合したと思へ。そいつ餘ッほどむづかしいと云うて、智慧を振はれた所がこの趣向ぢや。七草の殘黨が奥州へ改め下つたと云うて、勢揃へを拵らへ、一國があて返す所へ、勅使が来るワ。軍最中で、そこ所ではないと云うて、國境からぼツ歸すワ。理詰めで祝言は延びるワ。櫻木と思ふやうに樂しまれると、伯父御の智慧でやりかけた軍毒。思ふ圖へ參つたと云ふは、これ今日の新狂言。作者は伯父御大學さま。なんと皆、合點が行かうがな。

丈助 そんなら、七草の殘黨が攻め寄せて來たと云うたは六太 氣もない事。嘘ぢや〜。  
丈助 これは又、途方もない思ひつきぢや。  
官兵 そんならさうと、初手から仰せられたがよい。身共

等は又、誠の軍かと思つて、あつたら肝を冷ましてござるわい。

右京 すりや、廻文を以て

大主 我れ〜を招かれしは。

六太 サア、これ程仰山に仕込まんと、お勅使が騙されんぢや。そこで隣國の各々へ廻した廻文。なんにも知らいで、御苦勞々々々。

皆々 なんの事ぢや。

軍吾 これ程に仕掛けて、若殿が寢所の軍であらうとは、

とんと思ひがけなかつた。

新吾 母衣武者の夕立に出逢うたは、こんなものであらうか。

か。

會平 六月の俄に出損なうた心持ちぢや。

三人 ハ、、、。

丈助 なんでも軍は、若殿の大勝ち。この場はめでたう、勝鬨々々。

軍兵 エイ〜オウ〜。

ト闕の聲。内にて、どんちやん打ち上げる。

六太 各々を引きつけた代り、山館へ伴うて、色酒を振舞ひませう。

三人 イヤ、我れは。

六太 ハテサテ、斟酌せずと、御入來々々々。

丈助 なんでも面白うなつたはワ。若殿と櫻木さまとの御侍。祝うて一さし舞はう。

ト扇をひろげる。唄三味線、爰にて官兵衛、野田の富士を舞ふ事あつて、よろしく納まる。皆々、ようくと褒める。

六太 出來たく。これから白拍子を相手に、今様の藝盡し。堅藏の大名どもを、皆寄つて、引き立ていく。

軍曹 サア、ござりませ。

右京 これは迷惑。

六皆 ひんよい、ヨウイ。

右三 どうでも參れか。

皆々 ひんよいヨウイ。おたぢや。

ト山車のしやぎりになり、三人を中に引き包んで、六太郎、丈助、官兵衛、その外一件、皆々、捨ぜりふやかましう云うて、大木戸の内へ入る。この跡、踊りの太鼓三味線になり、向うより志賀臺七、着附け、上下、家中の拵らへにて、草履取り連れ出る。橋が、りより志賀谷五郎、着附け上下、若侍ひの出立ちにて、これ

も草履取り連れ出る。

谷五 これは兄者人、志賀臺七どの。

臺七 弟谷五郎、未明より相詰め居つたな。

谷五 お勅使お成りにつき、樂應の爲、櫻ヶ谷にて、龍馬、懸的の催ふし。師匠杉本甚内どの、お拵きに依り、未明より相詰め居ります。兄者人にも、それゆゑの御入來でござりませう。

臺七 成る程、身も樂應の取持ちを致さん爲、只今參りかかりしところ、途中にての噂。若殿六太郎さま、何かお勅使へ狼藉ありしとやら。其方も承つたであらう。

谷五 されば、山館に相詰めしところ、耳を貫く貝鉦大鼓。何事かと様子を問へば右の體裁。それゆゑ若殿へお目見得いたし、とくと御諺言を申さんず爲。

臺七 イヤ、諺言、惡からう。

谷五 なぜ惡うござるな。

臺七 元來、身が親、志賀殿右衛門どのに養子の身共、家督に立つたその後、木妻腹に出生の共方。胤腹分けぬ義理の兄弟。養父殿右衛門、死去召されてより、次第に立身、當時祿三千石を賜はり、家老格と出頭するは、伯父御大學さまの御推挙とは云ひながら、身共が擧量拔群

に秀でしゆゑ。こりや云はいでも知れた事。其方は部屋住。出頭の見を差替さ、薄皮立ては悪からうと云ふのサ。

谷五 すりや、見者人が御言言をなさるゝかな。

臺七 そりや身共が、胸にある。

谷五 ハテナア。

トこなしある。

臺七 あの騒ぎは、岩波の遊園。先づあれへ參つて、お目

見得いたさう。

谷五 然らば見者人。

臺七 間違いたさう。差、差れ。

谷五 イザ、お感しなされませう。

ト始終、降り三味線にて、兩人とも、大木戸の内へ入

る。返し。

其の大木戸、左右へ引き分け、波の山。切つて落す。

通り物、平舞臺、正商、三間の間より左右折り返り

にして、白拍子鹿野、好みの持ちらへにて、金の車に

鮮紅の旗を付け、右車の上に、細栗りの酒瓶、菊の

造り看を見事に飾り立て、綱を持つて引いて出る。車

を好き所に置いて、少しばかり所作あつてとまり、

好き所に控へる。ト津島樂になり、橋がムリより、六太郎、衣裳、刺繍に改め、丹前、六法の出端にて、よろしく振りあつてとまり

六太 これは陸奥の金花の童に生居いたす、民にて候ふ。

さても羨れ、色酒を染しむに依り、或る夜不思議の夢を

見る。粟島、松島の市に出て色酒を賣るならば、まだ以

上の阿房者になるべしと、教へのまゝになす業の

時去り時来りけるにや、次第々々にすつばの身となり

て候ふ。

又爰に不思議なる事の候ふ。市毎に来る色酒を飲む女ど

もが、一人ならず、二人三人四人までござる。盃の数は

重なれども、一向よはらぬ飲み手にて候ふゆゑ、名を尋ね

て候へば、海中に住む狸々の娘どもと申して候ふ。今日

は松島の濱邊に出て、彼の狸々を待たばやと存じ候ふ。

松島の江のほとりにて、菊をたゞへて夜もすがら、

月の夜にも友待つや、また傾むくる杯の、影をたゞへて

待ち居たり。

トこの話のうち、鹿野、右の車を引いて出る。六太郎、

杯を高く。鹿野つぐ。この模様ありて、三味線人

りの話にて

「老せぬや、薬の名をも菊の水、杯も浮み出て、友に逢ふぞ嬉しき、この友に逢ふぞ嬉しき。」

トこれにて向うより浅野、振り袖、白拍子の形。櫻木、打ぬき廣袖、さげ付き白拍子の形。宮城野、屋敷風、振り袖、抱へ帯、腰元風、同じく抱へ帯、各々置き締帽子、銘々手に大杯を持ち、長柄の杓をかたげ出て、花道に並ぶ。

宮城 なんと皆様。朝夕見ても見飽かぬは、この松島の浦の景色。

櫻木 霞ヶ浦も打晴れて、小島の漁女の漁り舟。浅野 夜は一しほの月見晴、都島にも及びなき。

りき この朝風の朝日島、名におふ千賀の浦風に宮城 浮れて出づる杯の

櫻木 酒に誘はれ

浅野 色に引かれ

りき はる／＼これへ  
二人 参りて候ふ。  
「造酒と聞く、名も理りや秋風の、吹くとも／＼さらに身には寒からじ、理りや白菊の／＼、着せ締を暖めて、酒をいざや汲まうよ。」

トこれにて各々、本舞臺へ直り、二人づゝ左右へ別れ、六太郎、真中になりて

女皆 稀れ人も御覽ずらん。

六太 月星は隈もなし。

皆々 所は松島の  
六太 江の内の酒盛り

皆々 狸々舞ひを舞はうよ。  
「蘆の葉の笛を吹き、浪の鼓どうと打ち、聲澄み渡る浦風の、秋の調べや残らん。」

トこれより、唄、囃子へ取る。右の人数、所作の模様、いろ／＼ありて、よろしく納まる。

浅野 御身色ある殿御ゆるに

櫻木 この國に色酒の面白きを傳へ

宮城 堅い心を和げて

りき 都の風俗に仕立て上げて  
四人 上げやんすにて候ふ。  
「よもつきじ、萬代までの色の名の酒、汲めども盡きず、飲めども變らぬ居續けの杯、鐘も告げ来る別れの後朝、足元はたよ／＼と弱り臥したる枕の夢の、覺むると思へば色達は、其ま、盡きせぬ遊びぞめでたけれ。」



ト右の論、ちらしの心にて、よろしく納まる。ト奥より榮葉、繁野、勝野、文彌、皆々、舞子にて、綾助、幫間、この人数、皆々出て

皆々 ヨウ／＼、出来ましたわいな。

六太 マア、息つきぢや。酒にせい／＼。

女皆 アイ／＼。

ト舞子杯を持ち出て、六太郎は、櫻木の側に座り、宮城野、お方は、下の方、その外、居並ぶ。

綾助 なんと、六さまが扇の手は、きつい隠し藪ぢやないかいな。

皆々 けうといものであつたわいな。

鹿野 六さん、當つたぞえ。

六太 イヤ／＼、おれより、そこにある宮城野、腰元のお力、二人ともに、きつう出かしたぢやないか。ナウ櫻木、櫻木 イエモウ、大抵器用なお方々ぢやないわいな。

浅野 わたしらは、一向あやまつたわいなア。

宮城 又おなぶりなさるかいなア。御前にも御存じ遊ばします通り、わたしが父は御家中へ、劍術の指南を致す者の、堅い生れつき。その娘の宮城野、都の女中さんに立ち交りて、恥かしい事のありたけも、御前のお詞が重い

から。皆様、必ずとも、笑うて下さりますなえ。

りき 宮城野さまの父御、杉木甚内さまに召遣はれまする腰元の私し。奥様磯崎さまの館せに依り、御家來の佐五平どのに縁を結び、只今にては佐五平が女房。夫の名代に、宮城野さまのお供いたし、親且那甚内さまをお迎ひに参りまして、思ひも依らぬ殿様の御遊興。御無禮な舞のお相手。此やうな迷惑はござりませぬ。

六太 ハテ、卑下をする奴ではある。この奥州は日本の本の邊鄙、堅いばかりが國の風俗。第一、氣に入らぬは仲臺詛りの詞遣ひ。都は王城の水に育ち、物云ひ何か和らかなゆゑ、家中の男女にこの風儀を習はさうと、この櫻木を始め、鹿野、浅野、その外、都の白拍子、幫間まで取寄せて、國語りをとんと投いて、都詞のごさんすに仕替へたは、なんと、天晴れの軍師であらうがな。

櫻木 お館へ召されて、京を立つた時は、陸奥の果へ来て、どうなる事ぢやと案じたが、殿様に思はれて、嬉しい事の數々。わたしやモウ、都へ去ぬる氣はござんせぬわいなア。

浅野 それと云ふも、都に稀れた六さんの風俗。

綾鹿 その癖、粹で氣立てもよし。

正木 それなればこそ

かは 身に替へてのいとしがりやう

小辰 櫻木さま、さぞ本望であらうなア。

櫻木 そりやモウ、云はしやんすまでもないわいなア。

宮城 御前の仰せられます通り、不束な園訛りも直つて、

都の風を覺えたも、皆櫻木さまのお庇、有り難うござり

まする。

櫻木 なんのお禮に及びます事かいなア。

りき 随分氣を付けるやうに存じましても、不器用なわた

し。どこぞの程では園訛りが出まして、オ、恥かし。

綾助 イヤ、あなたは仙臺訛りではない、江戸訛りと見え

まする。

りき さればでござりまする。元私しは、江州高島、大井

某と申しました者の娘。生れついた力量が、親旦那甚内

さまのお目にとまりまして、お屋敷へ抱べられ、鎌倉御在

番、その間に男勝りの道なれば、武藝の道も習うて置け

と、親旦那の直の御指南。近江で生れて江戸で育ち、今

このお國で佐五平どのと云ふ男を持つも、縁は異なもの。

人の行く末は、知れぬものでござりまするわいなア。

六太 なんほう堅くろしい佐五平でも、其方と痕所の劍術

毎晩々々、エイヤツトウをやるであらうな。

りき お聞き遊ばせ。夫は心願があるとして、禁酒不淫の行。

それゆゑ女夫と申しますは名ばかり、ついに一度も。

綾助 ないとは云はさぬ。白状々々。

宮城 イエ、そりや、わたしが證據でござりまする。

りき 奥様のお仲立ちで、表向きの女夫なれど、我がもの

になつて自由にならぬ

六太 稻荷山の松茸か。

りき ハイ。

ト恥かしさうに俯向く。

六太 ハテ、佐五平めは憎い奴なア。

綾助 因縁諍しで座が滅入つた。奥へ行て飲み直しませう

かい。

六太 よからう。サア、皆来い。

ト皆々立ち上がる。此うち奥より志賀谷五郎出て

谷五 イヤ御前、暫くお控へ下さりませう。

ト真中に座る。女形皆々、白けた體にて、後へ寄る。

お力、宮城野が袖を引きて、谷五郎を教へ、いろ／＼

ある。宮城野、谷五郎に惚れてゐるこなし。櫻木は、

六太郎が袖を引き、奥へ行かうとこなし。六太郎、も

ぢくして

六太 其方は志賀臺七が弟、谷五郎。いつの間にこれへ。

谷五 お勅使、お成りにつき、鷹鷹萬事を親殿より仰せつけられ、先刻より相詰め居ります。承りますれば、達の大木戸に勞働へを催ふされ、お勅使へ狼藉ありしとの事。先づ以て酒に前後を忘るる願のお身持ち。お勅使へお詫びあつて、何事。

六太 コリヤ、谷五郎、意見なら古いぞく。この面白色と酒が、捨てられるものかいやい。

谷五 すりや、どうぞごつても。ホイ。

六太 彼奴、某が氣に入りなれど、堅くるしいが玉に疵ぢや。所を和らげるは宮城野。ナ、其方が胸中は知つてゐる。櫻木始め昔を連れて奥へ行き、汝は跡に残つて、ナ。

ト谷五郎を執へ

呑み込んだか。

ト宮城野、こなし。

櫻木 そんならあなたに、宮城野さんが。

六太 コリヤ、なんにも云ふな。

綾助 これから奥で飲みかけ山の郭公。

淺野 サア、梅木さま。

皆々 六さまも御一緒に。

櫻木 サア、ござんせいなア。

六太 ドリヤ、箒を通さうか。

ト唄になり、六太郎、櫻木を連れ、女形皆々、綾助も付いて奥へ入る。谷五郎、宮城野、お力、居残りゐる。

谷五郎、奥を見やり

谷五 水の出端の御放埒。所詮如何やうに云うても、お聞入れはあるまい。なんとともハヤ。

ト手を組み、思案の體。此うちお力、いろくあつて、宮城野を、谷五郎の側へ突きやる。宮城野、側へ座り、接穗のないこなしにて、又元の所へ来る。お力、もどかしがり、突き込んで云へと云ふ仕方をする。宮城野、それでも恥かしいと云ふこなし。お力、宮城野が手を捧つて、無罪に引ッ張りに行て、突きやる。このはずみに、谷五郎の側へ座る。谷五郎、振り返り見る。ト宮城野、振り袖を顔に當てる。お力、こなしあつて

りき ドリヤ、奥へ行かうか。

ト合ひ方となる。お力、こなしあつて、奥へ入る。

谷五 杉本氏の息女宮城野どの、よくお越したされた。

宮城 ハイ、よう参じましてござりまする。

谷五 御親父甚内どのには、お勅使上覽の競馬、懸的、何かとお指圖とあつて、疾より御入寮。定めて御親父をお迎ひの爲、爰へのお越しでござらうな。

宮城 アイ、父さんのお迎ひやら、お前様のお迎ひやら、何やらかぢややら、心がもだ／＼して、どうも云ひやうがござんせぬものやうなものでござりまする。なんぼう不束なわたしなれど、父さんは武藝の家筋、わたしを娶つて、杉本の家が繼ぎたいと、望むお方もたんとあるさうなけれど、わたしや、あなたを除けて、外に殿御を持つ氣はござりませぬ。父さんは物堅いに依つて、打明けては申しませぬけれど、母さんにお願ひ申しまして、其方が好いた事なら幸ひ、谷五郎さまは部屋住と云ひ、父さんに願うて女夫にしてやらう程に、氣遣ひすなと母さんのお詞。どうで不束なわたしなれば、お氣には入らぬでござんせうけれど、どうぞ女夫になつて下さりましたら、大抵や大方、嬉しい事のやうに、母さんは思はしやんせうし、わたしも又、思ひますものゝやうなものでござんすわいなア。

ト云ひ憎さうに、くどく云ふ。

谷五 イヤ、コレ／＼宮城野どの、尤も某、部屋住ではござれど、甚内どの、若殿六太郎さまへ、武術御師範あ

つて由緒の家筋。谷五郎も、門人となつて御指南を請くれば、假にも師匠。その師匠の息女と、みだりに不義がござつては、甚内どの、思召し召し、家中の思惑も如何でござる。身不肖の某へ、志しは千萬過分に存じまする。重ねて左やうの儀は、仰しやつて下さるな。宮城野どの、後刻お目にかゝりませう。

宮城 なんの、これ程までに思ひ込んで居りますものを

谷五 素氣なら申すは、こなたのお爲に。

宮城 わたしが爲とわえ。

谷五 不義を一統に戒しむるは、今に始めぬ武家の格式。

宮城 エ、ツとモウ。

ト谷五郎、こなしあつて

谷五 御前へ参つて、今一應。

ト行くを、また袂に取りついて、ちよつと留める。素氣なう振り切つて

谷五郎は武士でござるぞ。

ト唄になり、谷五郎、ツイと奥へ入る。始終合ひ方。宮城野、本意ないこなしにて、跡を見送る。下座の一



間より安達丈助、出て

丈助 これは宮城野どの、これに居召さるか。

ト宮城野、矢張り奥を見送つてゐるゆゑ、

宮城野どの、コレサ〜、コレサ、宮城野どの。

ト宮城野、桐りして

宮城 ハイ〜、なんで御用でござりまするかえ。

丈助 これは又、きつい桐りのしやうぢや。大方先生のお

迎ひでござらう。御親父に逢はつしやれたか。

宮城 アイ、逢うたやら、逢はぬやら、一向益體でござり

まする。

ト奥を見送つて云ふ。

丈助 なんの事ぢや。イヤ、宮城野どの、ちと、こなたに

話したい儀が。

宮城 エ〜。

丈助 斯く云ふ身共は、御親父甚内どの、門弟なりや、外

ならぬ先生の御息女、例へ相懸た縁談もござらば、お世

話申したいと存する折から、幸ひと、こなたへ執心の仁

があつて、何卒拙者に取持ちくれないと再三の頼み。こな

たさへお得心ござらば、直ぐに先生へ申し入れて、表向

きの縁組み。なんと相談する氣はござらぬか。

宮城 丈助さま、折角のお世話なれど、ちつと心に願ひが

ござりまして、殿御持つ事はなりませぬわなア。

丈助 サ、そこでござる。こなたの御器量で辨擇みなさ

るは、至極の御尤も。シタガ、男に持つて不足のない

先の相手と申すは

宮城 イエ〜、名を仰しやつても、わたしや否でござり

まするわいなア。

丈助 これは又、悪い請けぢや。それ程否がらしやるもの

を、無理にと申されまい。身共を身共と思つて取持ち

を頼まつしやれた、志賀唐崎の一つ松が、さぞ身共を恨

む事であらう。ハテ、是非に及ばぬ。

ト宮城野、聞き替める。

宮城 丈助さま、志賀唐崎の一つ松とはえ。

丈助 ハテ、こなたに執心の仁と申すは、志賀唐崎の一つ

松。ナ、志賀と申したら大方、御合断でござらう。

宮城 そんなら志賀

ト奥を見てこなし。下の障子より臺七、出かけるる。

丈助 臺七へ口配せして

丈助 杉本の鉢に取つて、不足のない志賀氏。お氣に入ら

ねばせう事もなし。ドリヤ、出直して參らう。

ト立つて行かうとする。宮城野、谷五郎と取違へ、喜ぶこなしにて、丈助を留め

宮城 ア、申し、わたしや得心ぢやぞえ。

丈助 すりや、身共が申しした事を

宮城 聞かいでならうかいなア。わたしや疾から聞く氣ぢやわいなア。

丈助 眞實得心でござるか。

宮城 アイ、得心から上ぢやわいなア。

丈助 ソレ、得心ぢやとく。

ト臺七へ聞かす。臺七、喜ぶ。

宮城 ほんに殿御の心は深いもの。そのお心でありながら、

表向きは物堅う、つい今の時、打明けてくれたがよいわいな。

ト奥を見て云ふ。

丈助 サア、そこが、彼の戀と云ふものは、直に逢うては

申し憎いものぢや。シタガ、斯う打明けるからは、もう

遠慮には及ばぬ。臺七どの。サ、これへく。

臺七 丈助、お身が取持ち、忝なうござる。

丈助 なんのお禮に及ぶ事がござる。これからは又、直々にお話しなされたがようござる。

ト宮城野、丈助が袖を引いて

宮城 申し、臺七さまも、御得心でござりまするかえ。

臺七 此方は得心から、上でござるわいな。

宮城 それはマア、お嬉しう存じます。これからは又、

隨分と大事に致しませう程に、お前様も、可愛がつて下

さりませえ。

丈助 ソレ、可愛がつてくれいとく。

臺七 丈助、どうか身共は、上氣いたしたやうな。

丈助 さりとては、氣の弱い仁ぢや。先づ好い事には、寸

善尺鷹と云へば、手付けがてら、そこらで。

臺七 宮城野どの、いよく承知か。

宮城 オ、くど。

臺七 忝ない。この場では何かと差合ひ。宮城野どの、ち

よと、あれへござれ。

ト手を持つて云ふ。

宮城 ア、申し、何なされませうぞいなア。

臺七 サア、積る話しの山々が、どうもこの場では話し憎

い。桃ヶ谷の小蔭へ参り、差向ひでしつぽりと、お話し

を申すわサ。

ト連れんとするを振り切つて

宮城 左やうな儀らな事は、わたしや否でござりまする。  
 丈助 イヤ、宮城野どの、たつた今應と云うて、手の裏  
 を返すやうに、そりやどうでござる。

宮城 わたしやとんと、合點が行かぬわいな。

丈助 これ程合點が行てゐるのに、高でこの臺七どのが、  
 こなたへ苦心。

宮城 エ、そんなら、わたしへの執心と仰せられました

は

臺七 志賀臺七、身共でござる。

宮城 エ、わたしや又、弟御の谷五郎さまかと思ひて

臺七 なんと。

宮城 オ、笑止。きつい間違ひぢやわいな。臺七さま、重

ねて仰せられますな。否でござりますぞえ。

トつんと云ふ。臺七、ムツとしたる體にて

臺七 丈助、先月取替へた金子、入用ぢや。いま返さつし

やれ。

丈助 よくござる。

ト宮城野の圃へ行て

宮城野どの、安達丈助は武士でござるぞ。拙者が爲には  
 師匠甚内どの、息女たりや、外ならぬやうに存じて、臺

七どのへ仲立ち致すは、こりや、双方の爲と云ふもの。  
 何は格別、武士たる者が詞のかすがひ、今となつて否應

は云はさぬ。それとても得心なくば、こなたをぶツ放し  
 身も切腹いたす。死ぬる事が否ならば、思ひ直して返事

さつしやれ。否ならばぶち放す。刀にかゝつて死んだる  
 者は、未來では劍の山、三途八難五道の責め苦、大抵や

大方、苦しい事ではござらぬぞや。

ト此うち宮城野、ソツと抜けて奥へ入る。丈助、矢張  
 りしやべつてゐる。

臺七 丈助、黙まらつしやい。

丈助 イヤ、黙りますまい。一大事でござる。既に以て

臺七 黙らつしやい。

丈助 イヤ、お構ひなさるな。先づ地獄の苦しみと云ふも

のが

臺七 ハテサテ、宮城野は奥へ参つたわい。

ト突き飛ばす。丈助、そこらを見て

丈助 南無三、外し居つたか。エ、忌々しい。

臺七 宮城野が詞の端々、いよく、身が推量に違はず、

弟谷五郎に狂ひ居るに極まつたわえ。

丈助 すりや、御舎弟谷五郎どのに。

臺七 如何にも。何かにつけて邪魔な奴。これさへ片附け

てしまひなば、自然と戀は叶ふと云ふもの。

丈助 胤腹違ふ兄弟の、義理に替へても宮城野どのを手に  
入れんとは、ハテ、きつい思ひ込みやうぢやな。

臺七 イヤ、宮城野に心をかけしは、一朝一夕の事でない。

小身なれども由緒正しき杉本甚内、武術に於ては楠流の

奥義を極め、菊水の巻と名付けて極意の印可。女さへ隨

へば、自然と印可も手に入る道理。斯程までに心を碎け

ど、隨はねば是非に及ばぬ。今一思案せずばなるまい。

丈助 成る程、左やう承れば御尤もに存ずる。それは格

別、伯父御大學さまに、兼ねて一味の貴殿拙者、若殿六

太郎さまに自滅させて、一國を押領ある伯父御の失望。

ト云ふを押へて

臺七 コレ、音高し。穩密々々。

トあたりを見つて

身共が門弟、津輕官兵衛に謀し合せ、今日中に何かの手

番ひ。手段と云ふは、コレ

ト丈助を招き、囁やく。

丈助 天晴れ、妙計。

臺七 萬事は奥で、謀し合さう。

丈助 臺七どの。

臺七 丈助、來やれ。

ト唄になり、臺七、こなしあつて、丈助を連れ、下座  
の屋體へ入る。ト奥にて

櫻木 イエ、なんぼうでも、聞く事ぢやござんせぬ。

六太 云ふ事があるなら、云うたがよいわい。

女皆 マア、ようござんすわいなア。

ト六太郎、櫻木、せり合つてゐる見得にて、淺野、鹿

野、正木、かゝる、子供、綾助も、止めながら出る。

櫻木 あんまり殿様が、悪性なわいなア。

六太 なんでおれが悪性な。

櫻木 悪性な譯云ふぞえ。

六太 聞かうかい。

正木 コレイナア、其やうにせり合はずと、マア、譯を云  
うたがよいわいな。

かを一體マア、何から起つた口舌ぢやぞいなア。

櫻木 サア、その譯と云ふは、そこに屈やしやんす淺野さ  
んから起つた事ぢやわいなア。

鹿野 どう云ふ譯ぢやぞいなア。

櫻木 淺野さん、今の事を、ま一度云うて下さんせいなア。



淺野 皆さん、聞いて下さんせ。今奥で床の間の花を見て  
ゐたればナ、そこへ六さまがお出でなされて、花子の狂  
言が誓ひたい程に、密かな所で教へてくれいと、それか  
ら聞ひの聞へ連れて行て、ほんまの花子は、こんなもの  
ぢやと云うて、恥かしい事ばつかりを。

ト俯向く。

櫻木 聞かしやんしたか。あの通りぢやわいなア。

綾助 我折れ。

皆々 さうして、どうぢやえ。

淺野 サア、そんな事をしたらば、櫻木さんが叱つて、あ  
らうに依つて、わたしや香ぢやと云うたれば、櫻木が叱  
つても大層ない、向後其方に見替へると云うて無理やり  
に

女皆 あつたかえ。

淺野 イ、エ、どうやら斯うやら逃げて出て、わたしが身  
白を、櫻木さまへ告げたのぢやわいなア。

ト此うち六太郎、いろ／＼あつて

六太 ハア、悪事千里ぢやなア。

櫻木 それぢやに依つて、わたしが腰の立つが無理かいな  
ア。

六太 オ、無理ぢや。

櫻木 どうして無理ぢやえ。

六太 サア、それはアノ、なんぢや知らぬが、無理ぢや。

櫻木 その譯聞かうわいなア。

女皆 マア、待たしやんせいなア。

六太 止めなく。おれも聞かんのぢや。

綾助 サア／＼、ようござりますわいなア。

ト又せり合ふを、皆々止める所へ丈助出て、分け入り

丈助 殿、おまりなされ。櫻木どのも、待たつしやれ待

たつしやれ。様子は残らず承つた。兎角殿が賤しいか

ら、又しても摘み喰ひをなさるゝゆゑ、斯やうな騒動が

起りますわい。先づ今日は拙者が御挨拶申す。櫻木どの

御堪忍なされ。拙者が貰ひぢや。只今の口舌、行司暫ら

く、預かり／＼。

櫻木 イ、エ、重ねての悪性をせまいと云ふ、誓言を聞か

ねば、なんぼうでも聞く事ぢやござんせぬ。

丈助 それはいつち、易い事ぢや。ソレ殿、誓言々々。

六太 面白い、誓言せう。凡そ日本大小の神祇を誓ひに立

て、再び女にてんがうを云ひかけまい。

丈助 この事偽はるに於ては、一生女子に攻め潰され、未

來は其まゝ女子の地獄へ嵌るなり。

六太 先づ女子の地獄と云ふは、西施楊貴妃、小野小町、衣通姫。

衣通姫。

丈助 世話にとりては油屋お染、八百屋のお七、本町二丁目糸屋の娘。

目糸屋の娘。

六太 その外あらゆる女どもが抱きつき、吸ひつき、その苦しき面白さ。何に譬へん方もなし。

苦しき面白さ。何に譬へん方もなし。

丈助 よつて誓文件の如し。

六太 なんと、丈夫なものであらうがな。

ト櫻木、笑うて

櫻木 ほんに、あんまりな事で、おかしいわいなア。

六太 そりやこそ笑ひが出た。お仲直りを、祝うて一つ打ちませうか。

ちませうか。

皆々 しゃんく。も一ツく。しゃんく。祝うて三度。

おしやしやんのしゃん。

トこの時、バタ／＼にて、向うより侍ひ一人走り出て

侍ひ 申し上げます。上州栗島家より、御織組みのお使者とあつて、爰へお越しでございます。これへ通しま

せうか。如何計ひませうな。

六太 折角郵便を去なしたれば、また難儀な者が來た事ぢ

や。なんと云うて、去なせく。

侍ひ 畏まつてござります。

ト入る。

櫻木 栗島のお姫様と、祝言をするのかいなア。

六太 ハテ、祝言が否なればこそ、勅使も使者も追ひ返してしまふたのぢや。シタガ、押しかけて來はせまいか。

丈助 どうしたものであらう。

丈助 どうと申したら、使者に逢はぬがようござります。

これから掛け造りのお花出へ行て、どつと騒ぎかけませうかい。

六太 よからうく。汝も參れ。

丈助 行かいでならうか。

六太 こりや面白い。サア皆の者、騒げく。

ト踊りの太鼓、三味線になり。六太郎、櫻木の手を引

き、丈助その外、皆々捨ぜりふにて、花道へ行きかゝ

る。ト向うより松江藏人、衣裳、上下、大小にて、蒔

繪の箱を、白木の三方に載せ持ち、ツツと出で立ち塞

がり

藏人 栗島の使者、押して推參仕つてござります。

ト六太郎、皆々こなしあつて、後へ戻り、橋がよりへ

行かんとする。ト杉本甚内、中年、家中指前のこしらへ、衣裳、上下、大小にて、門弟四人各々上下にて、後に付き隨ひ、ズツと出て立ち寄がる。六太郎、見て南無三、毛蟲ぢや。こりや叶はぬ。

ト逃げうとする。

甚内 イヤ、三州どのよりお使者とござる。先づお鐘まりなされませう。

ト六太郎、皆々と顔見合せ、ヂツとなる。踊り三味線止む。

藏人 通りませう。

甚内 イザ、

ト六太郎、櫻木を連れたなりに、上へ座る。藏人、三方を、六太郎の前に置いて座につく。甚内、丈助、門弟各々、並よく並ぶ。その外女形は後に並ぶ。

丈助 先生には、門弟衆を同道にて、只今御入來でござるかた。

甚内 お勸使上覽の爲、梅ヶ谷に埒を結びかけ、懸的の用意、萬事滞りなく申しつけ、直さまこれへ伺候のところ存じ寄らざる栗島のお使者、御家名を承り、口上とても承知仕りたり存じまする。

藏人 拙者事は、三州の領主、栗島甲斐之介が家中、松江藏人と申す者。主人甲斐之介は、三年前、九州七草一揆の折柄、岩倉どの、深へ人として討手に伺ひ、比類なき功名あつて、足利どの、覚えめでたく、名草の稲の領主を引取り、當時三河の國吉田の館に御入りあつて、藤二十萬石の領主。栗島どの、御妹誠形姫を以て、當家の若殿六太郎さまに御内儀を結ぶところ、當今より改めて勅諭あり、兩家縁談調ひ次第、六太郎さま、家の實を御持参なされ、家督願ひに御上落あるべき段、お勸使これへ御下向と承り、此方よりも總組みの使者を以て、萬事取計らひ致さんが爲、即ち牽引出の音物、六太郎さまへお納め下されうならば、使者に立ちたる拙者が面目。甲斐之介口上の趣き、あらかじめ斯くの通りでござります。

六太 すりや、なんと云ふぞ。急に祝言を取結ばんと使者に來たのか。

ト櫻木、六太郎が、太鼓を抓る。

六太 アイタ、痛、痛い苦勞であつたなア。

藏人 イヤ、後目でござれば、苦勞にも存ぜぬ。

トこの時、奥より官兵衛、衣裳、上下に改め出て

官兵 イヤ、兩家の御縁は破れ申した。祝言はなりません。

ト云ひくゝ出る。

藏人 御縁が破れたとはな。

官兵 この場に於て事の甚斷、使者には暫らくお控へ下されい。

藏人 縁組みの儀に付き、裁斷の儀とござらば、差控へて承はらう。

ト片脇へ寄つて、煙草盆控へる。

甚内 臺七どのの門弟、津輕官兵衛どの、裁斷とは何の裁斷。

官兵 甚内どの、こなたには、若殿六太郎さまに軍學武術何かの師範、御教訓がよいかして、若殿には日夜に募る身持ち放埒。差當る失策と云ふは、達の大木戸に勢揃へを催はし、隣國の大名に跡方もない廻文を觸れ廻し、うるたへ騒いで来て見れば殿の遊興。鬨の聲、矢叫びに、お勅使下向の路次を遮り、國境よりぼツ返されしは、大内へ弓引く朝敵同然。こればかりでも科は遁がれぬ。斯やうの事を吟味いたせと、伯父御大學さまの内意を請け、付き添ひ居る官兵衛、伯父御さまの御詮議同然。サア若

殿、栗島家の使者の面前、勅諭の御縁を破つた云ひ譯がござるか。

六太 サア、それは。

官兵 違勅の大罪と云つたが無理か。

六太 サア、それは。

官兵 云ひ譯ござるか。

六太 サア。

兩人 サアくゝ。

六太 サア、その云ひ譯は。

官兵 よも云ひ譯はござるまい。都よりお咎めの來らぬうち、御切腹なさるゝが、まだしも申し譯。但し又、御師

範たる杉本甚内どの、潔白の云ひ譯召さるか。返答ぶち

やれ。甚内どの、どうだ。

甚内 虎の斑は目に見えて、心の斑は目に見えずと、表ばかりは武士の交はり。家來の分として、御主人に切腹勸

め、家の亡ぶを願ふ所存か。

官兵 イヤ、全く。

甚内 汝が一言で殿のお身持ち、腰の押し手も大方それと。

サア、この場に於て詮議は糺さぬ。以後をキツと、啗な

み召され。



官兵 イ、ヤ、只今申す通り、伯父御様より内意を請くる身共なれば、家來でない、伯父御の名代、この場に於て、薄白の政道、相糺して見せるのサ。

丈助 成る程、伯父御の御意は背かれますまい。切腹の仕様御存じなくば、いつそ身共が

ト立たうとする。

甚内 丈助控へい。

丈助 ども。

門弟 養生の御意でござるぞ。

ト丈助、こなしあつて、ハツと下に居る。

六太 この場の云ひ譯、さうぢや。

ト切腹せうとする。榎木、取りつき

榎木 コレ、早まつて下さりませないなア。

六太 生き存らへては、違勅のお咎め。

甚内 イ、ヤ、程度はない。切腹御無用。

官兵 達の大木戸に勢揃へなしたは、跡方もない軍の催ふ

し。こればかりでも科は遁がれぬ。

甚内 滑世に亂を忘れず、人馬を揃へ、矢尻を磨き、士卒

の駆け引き、時となく訓練するは、武士たるの心がけ。大

國にはまゝある事サ。

官兵 然らば勅使をほつ返したは、若殿の越度でないか。  
甚内 續の小路中將兼多麁には、疾よりこれへお出迎へ申した。

官兵 何がなんと。

ト甚内、橋が、りへ向ひ

甚内 お勅使には、イザ先づ入らせられませう。

ト管絃になり、橋が、りより兼冬、勅使にて、野々宮

宮内、繼上下、雜掌の形。その外仕丁大勢、付き出る。

丈助、官兵衛惻り。六太郎、驚ろきながら

六太 すりやお勅使。ハツ／＼。

ト各々出迎ふ。勅使、上へ通り、床几にかゝる。藏人、

こなしあつて、矢張り煙草のんでゐる。

官兵 ムウ。現在國境より追ひ立て歸したお勅使様。それ

がどうして。こりやどうぢや。

甚内 殿御遊興より事起り、お勅使に狼藉あると聞くと等

しく、早速立越え、中將家の雜掌、野々宮宮内どのに就

いて、さまざまお詫び申せしところ、早速お開濟みあり

しも、宮内どの、お執成しゆると、千萬忝なり存ずる。

宮内 お勅使出迎ひとあらば、道の警護、作法禮儀もある

べきところ、甲冑を帶し、劍戟を以て無禮狼藉、キツと

お咎めもあるべきところ、老臣たる杉本甚内、詞を盡して詫び致さるゝに依り、御免許ありしも、事を好まぬ公けの計らひ。有り難う思はれてよからう。

甚内 なんと官兵衛、お勅使、この場へお成りあつても、若殿の越度になるか。

官兵衛 イヤ、その儀は。

甚内 伯父御の名代、こりや、ちと算用が違ひ申さう。ハハ、ハ、ハ、。

兼冬 さては其方は、達六太郎よな。この度東國織枕の次手を以て、この奥州へ立寄りしは、假初めならぬ帝の内勅。今改めて申すに及ばぬ。栗島との縁を調へ、寶を持參し、急ぎ上洛いたしてよからう。

六太 勅命の趣き、委細承知仕りましてござりまする。

ト此うち藏人、始終煙草のみ、聞いて居て、この時御裁斷が済みましたら、使者の返答承りませうか。

六太 勅命をお請け申すが、取りも直さず使者への返答。

藏人 左やうござらば引出物の音物、改めてお納め下されい。

六太 誠に。

ト三方の箱を取つて開き見る。中より短刀出る。六太郎見て

こりやコレ、血に染まりし短刀。これは。

藏人 主人の息女雛形姫は、自害して相果てました。

六太 ナニ、雛形姫は自害せしとな。ホイ。

トこなしある。

藏人 六太郎さまには、櫻木と云ふ白拍子が色香に迷ひ、此方の縁邊を遠變あるべきと承りての御所存。縁組みを離はれて、姫が一分立ちませうか。さるに依つて、殿へ恨みの一書を残し、ソレその短刀を以て敢へなき御自害。主人甲斐之介立腹あつて、血潮の短刀、掣引出に進上いたし、有無の返答聞き切つて、立歸れと承つたこの藏人。六太郎さま、御返答は如何でござるな。

六太 サア、その云ひ譯は。

藏人 なんのござらう。云ひ譯なくばその短刀、腹へ突き込み臍を引き出し、から紅いの血潮に染めて、使者の身共へお渡しなされい。

甚内 イ、ヤ、存じも依らぬ。罷りならぬ。

藏人 ムウ、して、栗島への申し譯は。

甚内 使者の御家名、今一應。

藏人 異な事に念押し召さる。粟島の家老松江藏人。それがどうした。

甚内 都在番の折柄、松江氏には度々出會、身共とは無二の驚意。面體を存じてある。

藏人 ヤ。

ト仰り。

甚内 跡生むすばぬ、盗賊、とくと聞き合せて参りはせいで、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、馬鹿な野郎だな。

藏人 ムウン。イ、ヤ、粟島家は人身。家中數多のその中には、同じ苗字もいくらもある。松江藏人に相違はないぞ。

甚内 藏人ならば、なぜお姫様を同道いたさぬ。

藏人 雛形姫は御自害あつて、持参いたした血潮の短刀。

甚内 イ、ヤ、お姫様は御安泰。しかもこの場に麗々ところぞ。

藏人 何がなんと。

ト此うち、皇子淺野、實は雛形姫に向ひ

甚内 雛形姫さま、殿のお側へお越しあらませう。

雛形 甚内、もう名乗つても大事ないかや。

ト皆々惻り。藏人、慄へ出す。女形皆々、雛形姫に襦

桶を着せる。

六太 ヤア、そんなら白拍子の淺野と云ふたは

櫻木 云ひ號けのお姫様ぢやわいなア。甚内さまのお頼み

ゆる、合點してお側に置いたは、御本妻の義理を思うて

わたしが計ひ。

雛形 兄上へお願ひ申し、疾にお館へ参りまして、甚内や

櫻木どのの世話になり、白拍子と名乗りましたも、お側に

居たい白らが願ひ。姫と云うてお氣に染ますば、矢ッ張

り白拍子ぢやと思し召して、お側に置いて下さりませえ。

甚内 興入れ延引につき、明察れお物案じ。萬一、過ちの

儀もあらんと、家老藏人より内意を以て頼み越され、愚

案を以て右の計らひ。なんと、これでも雛形姫は御自害

あつたか。

藏人 ムウ。サア、それは。

甚内 どうぢや。

トきつと云ふ。藏人、ぐんにやりとなり、氣を吞へて、

大小を捨て、上下も脱ぎ、甚内の側に胡座かいて座り

藏人 古いやつぢや。騙り者でえすわい。その騙りの頼み

手と云ふは

ト官兵衛を見る。官兵衛、顔にて、云ふなと云ふこな

し。  
 云ふも憂し、云はぬも辛し武藏鑑。何を隠さう、おりや  
 五四六の七郎兵衛と云ふ、江戸の標ぼう。何かこの頃の  
 不仕合せ。そこで云ふ騙りを目論んだも、つまる所は大  
 金にせうと云ふ、かくすけでの目論みぢや。慾一通りに  
 迷うての出来心。お侍ひ、量見つけて四五兩、酒手を遣  
 つて下され。

官兵 ヤア、憎くい雑言。うぬ、眞二つに。

ト反り打つて行くを、甚内留め

甚内 ハテ、引かれ者の小唄とやら。科人が首の座に至つ  
 ては、得知れぬ事を申すものぢやわサ。

門皆 然らば纏ぶつて

甚内 イヤ、召捕るに及ばぬ。丈助、其奴が詮議は其方  
 申しつける。

丈助 アノ、拙者めに。

甚内 取違がさぬやうに申しつけたぞ。

丈助 しつかりと預かりました。

六太 誠や、山は石に依つて堅く、君は臣に依つて全しと、

今に始めぬ甚内が忠節。併し某が放埒も、深い所存あつ  
 ての事。打明け語る折もあらう。先づお勅使を饗應して

よからう。

甚内 ハツ、その儀につき、梅ヶ谷にて馬上の一曲、陸奥  
 立ちの駒を擇り、公卿方にはめづらかなる武家の作法。  
 先づお稽敷へお入り遊ばされ、御酒宴を催はされ、然る  
 べう存じます。

兼冬 大内にて騎射と名付け、仲春に弓を見る事、めでた  
 き例しと記録にもこれを載する。朝夕日馴れし管絃  
 には事變り、時にとつての一興ならん。

宮内 六太郎どのには、甚内の師範に依つて、馬上の業も  
 上達と承る。一馬場責めて御上覽に入れられなば、何  
 よりの馳走でござらう。

六太 お勅使の御所望とござらば、甚内、計らうてよから  
 う。

甚内 委細畏まつてござりまする。

櫻木 斯うなるからは、天下晴れての御祝言。

雛形 この上ともにお見捨てなり。

六太 夫婦妹脊の三々九度。

女皆 わたしらは待女郎。

藏人 思ひ廻せば、ぼる怪體な。

ト甚内を見る。



官兵 コリヤ。

ト顔にて教へる。

史助 町人め、立たう。

藏人 やかましう吐かすた。立つてゐるわい。

其内 お勅使には、設けの靴家へ。

兼冬 六太郎、方々案内。

皆々 先づ、お入りあられませう。

ト序の舞になる。兼冬に宮内付き添ひ、六太郎、雛形姫、櫻木の手を引き、女形皆々、官兵衛も入る。史助、藏人を突き廻し、橋が、りへ入る。ト仕丁、跡より入る。其内残る。門弟皆々も残り居る。始終序の舞。軍

吾、曾平、新吾、出て

五人 先生、これにござるか。

其内 いづれも、申しつけた用意、相調うてござるかな。

軍吾 威る程、先生のお指圖に任せ、梅ヶ谷の地面をなら

し、方八丁に矢來をゆひかけ、射撃の用意も調へてござ

る。

新吾 お勅使に響てござれば、分けてこの噴れ業。それゆ

ゑ、お出しの名馬をすぐり、鞍具の美麗を盡し、お厩に繋

がしてござる。

曾平 先生の馬藝は八乗流、志賀臺七どのは大坪流、兩家

の一流、勝り劣りは噴れの勝負。物の見事に乗り勝つて

先生の流儀を見せつけませう。ナウ、いづれも、

軍新 御尤もに存ずる。

其内 イヤ、他流を侮り、我慢偏執の心より、得ては

物に後れを取ります。彼の鬨巻を聞ひに、勝たんとすれ

ば負けとなり、只負けまじと打つが暮立ての心得。十能

六、何に依らず、この心得が肝要。いづれも、御承知で

ござるか。

軍吾 先生の教訓

皆々 承知仕つてござりまする。

ト委にて、序の舞止む。

其内 各々方は勅使の御前へ。

新吾 然らば先生

曾平 後刻

皆々 御意得ませう。

トこの人数、皆々入る。其内残る。ト在郷唄になり、

向うより入間與茂吉、木綿やつし、ぼつとせ、脚絆、

草鞋、風呂敷を春負ひ、菅笠を持ち出て

與茂 イヤ、ちつと物を頼みますまい。

ト橋が、リへ立ちとまつて云ふ。奥より宮城野、出て  
宮城 父様、これにござりまするか。

甚内 オ、娘宮城野、いつの間に参つた。

宮城 未明より参つて居ります。殿様が、甚内を呼べと

仰せられます。サア、お越し遊ばせ。

甚内 如何にも。其方も参れ。

宮城 アイ。

ト二人、行かうとする。

奥茂 コレ、ちよつと頼みますまい。どうぞ頼まれて

もらひますまい。

甚内 なんと云ふ。

奥茂 おりや白石の片倉所、逆井村の者ではござんせぬ。ち

つと爰に尋ねる人がないに依つて、わざと爰へ尋ねて

来たんだのぢや。

宮城 ホ、替つた物の云ひやう。とうでも亂心ぢやさ

うなぞえ。

甚内 イヤ、左やうではあるまいが、何か解らぬ詞使

ひ。

ト奥茂吉が持つてゐる菅笠の書付けを見て

武州入間の里、奥茂吉。

ト讀み、ちよつと思案して

この入間の里と云ふは、所の習ひとして、さうせいと云

ふ事を、さうせなと云ひ、右を左、左を右と、もぢかふ

ゆる、これを入間詞と云ひ、入間川とて狂言にも織り、

世の弄びとなる。さては其方は入間ぢやな。

奥茂 イヤ、さうぢやござんせぬ。

甚内 さうでないとは、さうと云ふのか。ハ、ハ、ハ、これ

は一興な儀ぢや。

宮城 エ、そんなら、なんでござんすかえ。物事を逆さ

まに云ふを、入間詞と申しますかえ。

甚内 入間の里に生ひ立つた者は、皆斯やうに申す事ぢや。

そこた者、して、汝が尋ねると云ふ、先の仁は何者ぢや。

ト云うても、奥茂吉、黙つてあるゆゑ、こなしあつて

イヤ、何者ぢやと尋ねはせぬぞ。

奥茂 問はんせにや、云はらわいの。高館の屋敷で、杉本

甚内さまと云ふお人が、今日この山館へ来てははないげ

な。その甚内さまに、どうぞ逢はして下さんすな。

甚内 ムウ。甚内と云ふは身共ぢやが、尋ねて参つた様子

はどうぢや、と尋ねはせぬぞ。

奥茂 そんなら甚内さまか。これは十四五年も以前ではな

い。江戸の深川で馴染をかけさんせなんだ、舞子の小夜衣さま、勤めを退かずにこの園の、逆井村へ引ッ込みはさんせぬ。おりや大間の里から奉公に來なんだ奥茂吉と云ふ下人ぢやない。なんと合點が行くまいがの。

宮城 父様、常々わたしに話しなされた、義理のある母さん。

甚内 思へば早一昔、鎌倉在番の折柄、馴染に誘はれ、フト深川へ遊び、引かれ義理で馴染をかけ、一夜二夜數つもりて、間もなく歸國の日限は相迫り、連れ歸る奥が手前、家中の沙汰も如何と思ひ、傳かなる金子を興へ、互ひに不通の約をなして國元へ立歸り、御用繁多に取柄れ、忘るゝとなく月日も立ち、十年の上を過ぎ去つて、不思儀にも女が噂して、無事でゐるか。その朝り安産もなしつらう。産み落せしは男子か女子か。成人もさぞあらん。早く聞きたい。サア、どうぢや〜。

宮城 義理ある母様、義理ある妹。朗暮れなつかしく思うてゐたが、健な健りが早う聞きたい。どうぢやせいふア。

ト噂ねるうち、奥茂吉、しく〜泣いてゐる。

甚内 サ、様子を委しく。

トこなしあつて

語つて聞かすな。

奥茂 オ、聞かすまい。お前方が逢ひたがらせぬお人さんのはの

トちよつと思案して、書き物を出し

おれが辯の入間諺では解らぬ入り譯。この書き物に、とつくりと書いてはない程に、ソレ、讀んで見やんすな。

ト渡す。宮城野取る。

甚内 すりや、その一書を。娘、早く。

宮城 アイ〜。

ト聞き讀む。

筆のあゆみもたど〜しながら、書き残し參らせ候ふ。この身事、深川の舞子にてありし折柄、假初めの縁にて、杉本甚内さまに馴染を重ね、情の胤を身に宿せし折柄、御歸國も忙しくなる上、お國元には御本妻もあり候へば、飽かぬ別れに一生不通の約束をなし參らせて、故郷なれば、奥州白石の片里、逆井村へ引込み、程なう産み落し候ふが女の子にて、名を信夫と名付け參らせ候ふ。

甚内 この年月の養育、さぞや苦勞にもありつらん。

奥茂 信夫さまの乳母と云ふは、おれが母者人ではない。生國は武州の間ではない。その縁でおれも奉公に來は

せぬ。その母者人も、かくと云ふ病を請けずに、ころりと死なれはせなんだ。こんな嬉しい事はござんせぬ。

ト泣く。宮城野また、状を見て

宮城 憂き事は續くものにて、朝夕の煙を立て兼ねし上、乳母も残り、この身も重き病に取合せ相果て候ふ事、命は露惜しからず候へども、信夫こと成人いたし候ふまでは、今少し長らへたく、大人參を求め候ふ金に手づかへ、世に貧しき程悲しきものは御座なく候ふ。

ト讀みさして泣く。

甚内 金子入用の儀があるならば、程遠からぬ身が屋敷、不通の約をなしたりとも、なぜ書狀でなりと申しては來なんだぞい。

與茂 きつい義理知らずではないかいの。

ト泣く。

宮城 娘信夫、この事を嘆き、人を頼んで江戸吉原と云ふ色里へ、苦界十年、二十兩の價に身を賣り參らせ候ふ。

ヤア、そんなら妹は、勤め奉公に參つたかいなう。

甚内 ナニ、娘信夫は身を賣つたとか。

與茂 喜ばんせ。こんなめでたい事はござんせぬ。

宮城 勤め奉公に遣はし候ふ事夢にも存せず、後にて聞いて

悲しさ口惜しさ、やる方なく、母は賤しき身なれども、父様は歴々、杉本甚内さまと云ふ武士の娘、勤め奉公いたさせ候ふ事、悲しさ類なく、いよ／＼重き病となり參らせ候ふ。お醫者の手も離れ候ふゆる、命の内にこの事を書き残し、甚内さまの奥様か、お二人の中に告げ知らせ、娘が身の上を頼みたく、只冥路の障りはこの事のみ、御座候ふ、殊に宮城野さまと云ふ御物領も御座候ふ由、便りなき信夫事、御不便がらせ下され候ふやう、分けてお頼み申し上げ候ふ。病の床の涙にくれ／＼先づは書き残し參らせ候ふ。かしこ。

ト讀み、状を抱きしめて、ハア、と泣く。甚内も泣く。

甚内 ア、定めない世の有様、貧しう暮らせば猶更に奥への氣兼ね、義理を思ひ便りもせねば、此方もわざと尋ねぬこの年月。さては世を果敢なくせしとな。娘が生立ち、數ふれば早十五、血筋の親は顔さへ知らず、宿世の縁とて與茂吉とやら、健氣にも奉公するなア。して、女が相果てしは。

與茂 去年霜月二十日の晩、泣き死にして、めでたい往生

さんせなんだ。

甚内 今日二月二十日、月日變れど變らぬ命日。南無阿



彌陀佛南無阿彌陀佛。

宮城 この上は我が身の上。

與茂 眞實の姉妹ぢやと思はずに、可愛がつてやらんすな。

甚内 姉を宮城野、妹を信夫、姉妹が名を陸奥の名に寄せ、計らず付けしも千々の因縁。

宮城 同じ胤を請けついても、姉は籠の中に育ち、信夫さまは肩を裾に結びもせず、在所に育たず、擧

句には勤めもさんせず

甚内 憂きが中にも眞女を立て、空しうなりしか。

宮城 思へば果敢ない

與茂 めでたい成行き

甚内 移れに變る。

ト二人の手を拵つて引き寄せ、ホロリと泣いて

三人 世の有様ぢやなア。

トこなし、この時小姓出て

小姓 甚内さま、これにござりまするか。先程より殿様の

お尋ねでござります。サア、お越しなされませ。

甚内 ナニサマ、それへ参りませう。ナニ、與茂吉とやら。

娘信夫に云ひ渡る事もあれば

宮城 父様の御用おしまひあるまで、お次で暫らく。

トこなしあつて

休息をさしやんすな。

與茂 そんなら居やんすまい。

宮城 サア、申し父様。

甚内 娘、奥へ。與茂吉も一緒に

トこなしあつて

奥へ参るな。

與茂 ムウ。行きますまい。

ト唄になり、甚内、宮城野を連れ、與茂吉も附いて奥へ

入る。小姓も後より附いて入る。ト橋が、りより七郎

兵衛、右の形に、大太刀一本差し出る。奥より官兵衛、

着附け馬乗り袴にて出る。始終合ひ方。

七郎 官兵衛さま。

官兵 五四六の七郎兵衛。

七郎 伯父御大學さまのお頼みで、なんでもすつぱりと、

やりつけうと思つたが、すつぱりとしくじつて退けた。

ぢやが雇ひ賃は約束ぢや。サア、骨折り代をせうかい。

官兵 黙り居らう。物の見事に騙りを仕損じ、裏美どころ

か。そりやならぬ事だ。

七郎 なりませぬか。ようごんす。ならにやよごんす。さう手強う出やんすりや、此方もやけぢや、ドレ、ちよつと逢うて來り。

ト奥へ行かうとする。

官兵 待て。どこへ參る。

七郎 どこへ行こぞい。奥へ行て甚内どのに逢うて、先刻に驕りに來たは、若殿に科を拵らへ、自滅させうと云ふ。伯父御大學さまの頼み。臺七さま、官兵衛さま、皆不忠ぢやと云ふ事を、何もかも時き出してしまひますわい。

トまた行くな

官兵 イヤ待て。褒美くれり。

七郎 ムウ。こりや、斯うありさうな事ぢや。されば御褒美を戴かうかい。

官兵 如何にも。望みの通り、褒美くれり。汝の褒美は

ト抜かうとする。七郎兵衛、恠りして飛び退き

七郎 ア、コレ、褒美やらうと落ちつかせ、油斷させてばつさり。ても古いやつなア。

官兵 イ、ヤ、頼みにならぬ町人の魂ひ、驕りを首尾よろ仕負ふせても、殺さうと存じたればの儀。どの道生けちや措かぬ。覺悟して、それへ出い。

七郎 そんならどうでも  
官兵 殺らしてしまふ。

ト七郎兵衛、こなしあつて

七郎 なんとせう、所詮敵たうてからが、其方は侍ひ、此方は町人、斯うなりや。一生懸命ぢや。

ト大肌脱ぎになり、どつさりと下にゐて

サア、すつぱりとやらんせ。

官兵 よい覺悟ぢや。

ト抜いて目先へ見せる。七郎兵衛こなし。官兵衛振り上げ、切らんとする。この時、奥より臺七、これも馬乗り袴に改め、ズツと出て、官兵衛を引き廻して、眞中へ入り、金包みを七郎兵衛が側へ擡る。七郎兵衛、取つて

七郎 これは。

官兵 先生、あの金子は

臺七 命は助ける。當座の褒美。

ト七郎兵衛、金を改め

七郎 丁度十兩。ア、いつ見ても恐ろしいやつぢや。

ト懐中する。野々宮宮内、出がけるて  
宮内 臺七、これに居召さるか。

臺七 宮内さま、先達てより拙者が願ひ。

宮内 如何にも。中將家の諸大夫と相成り、褌裏出入りを

致したき願ひ。いろ／＼と取繕ろひところ、喜び召さ

れ、大方は首尾を致した。

臺七 それは常態。が、とても事にお願ひの案文、一書

に認めてござる。

ト懐中より文箱を出して

御苦勞ながら、お取次ぎ下されい。

ト宮内に渡す。

宮内 この文箱は。

臺七 すめらきの、御代榮えんと東なる、陸奥山に黄金花

さく。

ト宮内、文箱がずつしり重いゆゑ、めたと云ふこな

しなして

身に替へて、お取次ぎ致さう。

臺七 萬事、よろしう。

宮内 後歸途申さう。

ト宮内、入る。

七郎 儲け筋なら、何時でも知らして下んせ。ドリヤ、お

れも去なりか。

ト行かうとする。

臺七 七郎兵衛待て。

七郎 まだ用がごんすか。

臺七 改めて云ひつける役目がある。

七郎 おれに云ひつける役目とは。

臺七 甚内が計らひで、呼び寄せ置きし粟島の姫、密かに

汝が盗み出して、衣川の深みへ、ナ、すつぱりと仕負ふ

せい。

七郎 よし。呑み込んだ。首尾ようやつたら又褒美を

臺七 皆まで云ふな。ソリヤ。

七郎 こりや二十兩の嵩。巧いワ。

ト懐中する。

官兵 片付け次手に、若殿もしまうて取る、臺七どの、思

し召しは。

臺七 それも思案を致して置いた。若殿始め一家中、お勅

使上覽に競馬の備ほし。殿の乗馬は黒の駒、密かに笠の

力革を切りかけ置く。さすれば馬姿の時に至り、笠を切

つて鞍を返し、落馬召さるゝは定のもの。さある時は、

師範未熟の甚内が越度となり、若殿に恥辱を取らせ、それ云ひ立てに大殿へ讒言なし、切腹さずするか、押籠むるか、甚内ぐるめにしまうて取る身共が計略。細工は流々、追ツつけ仕上げをお見せ申さう。

官兵 それこそ屈竟して、召し替への黒の駒は。

臺七 假屋に續く廊の中、一の鎖に繋がせ置けば、その期に及んで計らひ召され。

官兵 ムウ、よし。

七郎 おりや街妻を引ツかたげて。

臺七 梅ヶ谷にて競馬上覽、勅使は正面、東棧敷は女中の一群れ。

七郎 すりや、梅ヶ谷へ。

臺七 必らずぬかるな。

七郎 やりつけて見せませう。

ト内にて、知らせの太鼓鳴る。

呼び いづれも競馬の刻限でござるぞ。

ト聲する。臺七、兩人に目配せて

臺七 早く。

七官 合點ぢや。

ト官兵衛は奥へ、七郎兵衛は向うへ、走り入る。臺七、

こなしあつて

臺七 ムウ、よし。

ト唄になり、静々奥へ入る。小蔭より、與茂吉出て、  
與茂 ても、えらい奴等なア。彼奴等は悪い事はつかりを、  
吐かし居る。

ト向うを見て

慥かに今のは、信夫さんの伯父の七郎兵衛め。甚内さまの大事にさんせぬ、お姫様を殺すまいと、聞いたはおれが不合せ。七郎兵衛をぼツかけず、お姫様を取返さず甚内さまに渡すまい。うぬ、七郎兵衛、待ち居るな。

ト尻引ツからげ、向うへ追はへ入る。

返し

鼓、大小入り、競馬の鳴り物になる。見附けの屋體、観音開きにて、兩方へ開く。左右、櫻の林になる。正面、奥深にして棧敷の體。紫の幕を張り、真中の二疊臺に勅使兼冬、宮内。後に近習控へ、東の棧敷には鑢形筆、櫻木、宮城野、お力、その外女形皆々、見物の體。西の棧敷に吉見右京大夫、山形主計頭、豊岡大膳亮、その外諸士見物の體。棧敷の前、埒に



なり、舞臺端、花道の兩方、八寸ばかりの高さの垣  
になり、鼓風より枝重れ見事にして、バラリと下  
りる。櫻の馬場の真中に、其内、馬乗り袴に改め、  
鞭を差し、吹き戻らしの陣笠にて、葦毛の駒の鞍面  
を取り、馬より下りし體。馬柄杓にて、頭へ水をは  
ませてゐる見得。右の鳴り物にて道具納まる。

谷五 先生には老巧の達者、只今の駆けは驚ろき入りまし  
てござる。

甚内 谷五郎、收出しゆゑ、餘程口強に見ゆるが、一馬場  
實のて見やれ。

谷五 然らば御免下さりませう。  
ト笠を着て、馬上になり、其内、上の方の合ひ引にか  
かる。ト橋が、よりより官兵衛、丈助、右の仕立て、栗  
毛と黒毛の駒に乗つて出る。鞍柄口より臺七、黒の駒  
に乗つて出る。

官丈 臺七どの。  
臺七 いづれも馬上の馴れ業、油断して不覺を取り召さる  
な。

官兵 如何にも。身共は志賀氏の門弟。  
丈助 拙者は杉本氏の門弟。  
谷五 殿のお指圖により、其内どの、門葉となるこの谷五  
郎。

臺七 流儀の甲乙とて容赦はない。うろたへ居らば馬蹄に  
かくるぞ。

谷五 此方とて容赦は致さぬ。  
甚内 お勅使上覽でござれば、互ひに争論なきやう、各々  
勵まれてよからう。

皆々 御尤もに存ずる。  
ト始終鳴り物にて、これより各々地乗り輪乗り、花道  
の戸屋の隙まで行て駒を立て直し、後へ戻る。入り違  
へ入り違へいろ／＼あり、此うち臺七、鞍心の悪い心  
にて、鞭をあしらひ、手綱くり上げこなしあり、其内、  
臺七が馬上に氣を付けるこなしあり。此うち橋が、り  
より六太郎、着附け、馬乗り袴、陣笠、弓矢持ち出て  
六太 身不肖ながら六太郎、騎射の一曲、上覽に供へ奉ら  
ん。

甚内 トこれにて各々、左右へ駒を控へる。  
馬上の弓は馴れの一曲、骨法の狙ひ違へず、的の只

中、遊ばせ〜。

ト固唾を呑んで見る。六太郎、手綱を控へ、輪乗り二  
三過する。臺七、六太郎が馬上に氣をつけこなしあり、  
六太郎、西の端まで駈けて行て、振り返りさまに矢を  
番ひ、引きしぼつて射る。東の樂屋に安土のある矢切  
を射し體にて、大勢、よいよくと褒める聲する。甚  
内、喜ぶ。六太郎、よき所に胸を立てる。谷五郎、弓  
矢を取り、同じく射ると、これも矢切りを射て、大勢、  
よいよくと褒める。谷五郎、胸を立てる。と臺七、  
弓矢を取り、矢を番ひながら鏡を踏みぬる。トこれ  
にて腹帯ゆるみ、鞍を返し、大地に落馬する。内にて  
大勢、どつとどよめく聲する。皆々驚ろき、銘々馬よ  
り下りる。この時鳴り物止む。毘敷の幕一面に下りる。  
軍曹、曾平、新吾、その外門弟皆々出る。官兵衛、先  
生が落馬召された、先生々々と介抱する。皆々藥よ水  
よと云ふ。甚内、印籠を谷五郎に遣る、と取つて氣付  
けを臺七に服ます。官兵衛、柄杓に水を汲み、持ち出  
て、この模様、各々捨てりふにて立ち騒ぐ體。六太郎、  
甚内、よき所へ合引にかゝる。臺七、やう〜に心付

臺七 よくござる〜。ハレ、面目次第もない。

トこなし。

官兵 先生々々、こりやどうでござるぞいの。

臺七 爰でござる。貴殿もお若い、よく聞いて置かつし  
やれ。彼の世上の醫へに、よく泳ぐ者は必らず溺れ、よ  
く乗る者は必らず落つる。一藝に達し、拔群に秀づるか  
ら、得ては魔がさすものでござる。只今のは魔が魅入つ  
てござる。騒がしやるな。いくらもある事でござる。  
併し、合點の行かぬは、計らひ置いた黒の駒は  
ト六太郎が乗つてゐる馬を見て

ハテ心得ぬ。

官兵 先生も同じ黒の駒。ドレ。

ト臺七が乗りし馬を見て

さてこそ鏡の力皮を切りかけ、斯くなさんと計らひし體。  
すりや、黒の駒を取違へて

甚内 取違へてとは、何がどう致した。

官兵 イヤサ、その儀は。ハテ面妖な。

ト臺七も心得ぬこなし。谷五郎、スツと出て

谷五 イヤ、その儀は拙者が申し上げませう。先生甚内ど  
の、お指圖によつて、お廠の醫護萬端、氣を附けて見廻

るうち、一の窟に繫ぎし黒の駒、鞍の狂ひ、なんとやら心にかゝり、若殿が乗馬の儀なれば、萬一の儀もあらんと存じ、二の窟の黒の駒と取替へましたは拙者が計らひ。併し、鎧を切りかけしとまでは心付かず、兄者人へ答へざりしは拙者が過失。幾重にも御容赦下さりませう。

臺七 ムウ、なんと云ふ。黒の駒を繫ぎ替へたは、弟、汝だ。

谷五 左やうでござりまする。

ト臺七、ムツとした體にて、ズツと立ち、弓を持つて谷五郎を打ち揃ふる。谷五郎、こたへる。この時、後へ宮城野出かゝり、こなしあり。

臺七 誠な青二才めが。うぬ、身をなんだと思ふ。義理ある兄弟、親同然の見だぞよ。殊に身共は大殿、市の正さまのお日鏡に相叶ひ、藤三千石を真贋なし、家老格を以て出頭第一の大身だぞ。

ト臺内を尻目にかけて

その手石かそこの分際で、軍學劍術の師範で候ふなどと、武藝兼練の臺七に肩を並べ、家中の若侍ひを手に入れ、自慢顔が腹が悪い。

ト臺内へかけて、また谷五郎に向ひ

ヤイラぬ。よくも宮城野、イヤサ、この場に於いて、うぬが悪名云はぬぞよ。打明けぬは見が情、その情も辨まへず、又しても無禮法外。こりや何か、義理ある兄の禮儀を忘れ、兄を亡き者にして、志賀の家を看まんと云ふ。うぬが企みか。それぢや行かぬ。

トまた其内の方へ。

オ、それぢや行かぬ。今は免す。この以後を嗜なみ居らう。

官兵 先生は當時の豪傑。餘人の流儀と一口に申すは、勿體なうござるわい。

丈助 如何にもさやうでござる。拙者は甚内どの、門弟でござれど、追従は申さぬ。臺七どの、流儀が抜群に秀でござるわい。

軍番 イヤ、丈助どの、官兵衛どののは格別、こなたの爲には師匠の流儀、何ゆゑ蔑み召さるゝ。

會平 臺七どのが慕はしくば、先生を被門して、なぜ弟子になり召されぬ。

新吾 流儀の甲乙、この場にて試めして見やうか、丈助との。

三人 なんとござる。

甚内 門弟衆、角目立つて、そりや何事でござる。

三人 ぢやと申して

甚内 ハテサテ、騒がしい。取上げて益ない事ぢや。マア、

控へてござれ。

三人 ハツ。

ト控へる。この時宮城野、ズツと出て、臺七へ詰めか

け

宮城 臺七どの、如何に兄御さんの高下ぢやとて、馴慾な

今の打擲。生さぬ仲の義理を思うて、聞き憎い悪口過言

も、アレ、あの通り、一言半句の詞も返さず、ヂツと聞

入れてござるわいなア。わたしや彼處に聞いてゐて、悲

しいやら口惜しいやら、谷五郎さまの心を思ひ計つて、

おいとしうてなりませぬわいなア。とサア、かけも構は

ぬわたしでさへ、口惜しうてなりませぬ。臺七さま、エ

エ、お前はなア。

臺七 甚内どの、息女宮城野、こなた、どうして弟が肩持

つぞ。

宮城 エ、。

臺七 イヤサ、ぶち据ゑるは兄が折檻、支へこさへ云はつ

しやるは、エ、こりや何か、弟谷五郎と狂ひ居つて、

それゆゑに肩を持つのか。法度を破る不義の大罪。この場に於て吟味せうか。どうぢや。

ト此うち、宮城野、いろ／＼こなしあつて

宮城 法度を破る不義者は、谷五郎さまぢやない、外にご

ざんす。

臺七 なんと。

宮城 云ふまいとは思ふけれど、もう云はにや叶はぬわいな。わたしに戀を仕掛けた不義者と云ふは。

谷五 コレ／＼宮城野どの、なんにも仰しやつて下さるな。

枝に枝が咲きましたは、どこへどう廻つて、甚内どの、

難儀になるまいとも申されぬ。なんにも仰しやつて下さ

るな。

宮城 それぢやと云うて、あんまり

谷五 ハアテ、胤腹分けぬ兄者人、義理と云ふ字は、どう

も削られませぬ。

宮城 すりや、云ふにも云はれぬわいなア。エ、。

ト臺七見て、こなし。

臺七 ハ、ハ、ハ、さうありさうな事だ。この上は宮城野ど

のを預かつて、不義のあるない詮議いたす。甚内どの、

息女は、身共が預かりましたぞ。サア宮城野、立たつし



やれい。

ト宮城野を、引ッ立てうとする。

六太 臺七待て。

臺七 イヤ、連れ歸つて詮議いたす。

六太 ハアテ、待てと云はゞマア、待て。

臺七 ハッ。

トこなしあつて控へる。

六太 不義を以て武家第一の威めとする事、辨まへなき谷五郎宮城野でもあるまい。改めて仲人せう。甚内の弟子と云ひ、器量ある谷五郎、舞がねに取つて不足もあるまい。

ト宮城野、谷五郎、臺七、こなしあり

甚内 有り難き御上意。元來某が家は、楠正成の餘流、さるに依つて杉本の流儀を相立て、まつた菊水を名付け、楠家の秘事を傳へたる印可の一卷、讀るべき男子なければ、この儀を朝暮兼じ居つたが、谷五郎が器量は氣ねて知る。御前のお仲人と云ひ、有り難く承知仕つてござります。谷五郎、氣には入るまいが、連れ添うてくりやれ。娘、汝も承知であらう。但しは否か。

宮城 ア、申し、なんのマア、わたしが否でござんせう

ぞいなア。得心も得心、ほんにモウ、此やうな得心はござんせぬ。谷五郎さまも得心でござんせうなア。アレアレ、得心ちやといなア。

谷五 殿のお指圖と云ひ、身不肖の谷五郎め、杉本どのを家督相續いたすは、身に餘る大慶。有り難くお請け申し上ぐるでござりまする。

宮城 アレ、有り難いと仰しやるわいなア。

ト無性に喜び、臺七と顔見合せ、兩人ともこなしあり。甚内 印可の巻、肌身離さず、これに所持いたしてござるが、明日は摩利支天の縁日、身が屋敷、神酒洗米を以て、舞男の縁を結び、その節、印可も差議るでござらう。

谷五 萬事よろしう頼みまする。

ト此うち、臺七、むかつくこなしいろくあり、甚内 が側へ、膝と膝を並べ、キツとなつて

臺七 甚内どの、この臺七は武藝の達人、奥州五十回郡廣しとは云へども、誰れ肩を並ぶる者一人も覚えぬ。殊には大身、金銀が満ち／＼である。その大身たる身共、其方から懇望して、娘宮城野を差上げませうから、内證の賄ひ、何かお世話を下されいと、頼まねばならぬところ。マアそれは格別、楠流の印可の巻、金銀は望み程遣は

さうから、身に譲り召されと、幾度か〜頼んだ事、お身や忘れやせまい。但し老害して失念したか。なぜ身共に一言の届けもなうお請け申した。娘は格別、印可の巻を外へ譲らしては、身共武士が立たぬ。思案して返答ぶちやれ。甚内、どうだ。

甚内 高木は風に倒れ、先んずるは猶及ばざるに如かじと、仁義を守る杉本甚内、金銀を以て印可を取替へんとは、臺七どの、お身が小さい根性に引較べ、ちと馬鹿々々しう存ずる。

臺七 ムウ。然らば是非とも身共に、印可は譲らぬとな。

甚内 今少し櫛古を顧み、鍛錬して望み召され。

ト臺七、思ひ入れあつて

臺七 官兵衛、用意の竹刀、持たつしやれ。

官兵 心得ました。

ト竹刀を二本、持つて出て、真中へ直す。

臺七 甚内、若殿の御前で立合ひを試み、流儀の甲乙、ぶつて〜ぶち拵ゑ、胴腰ぶち扱いたその上で、印可の巻を手に入れて見せう。サア、立たつしやれ。

甚内 イヤ、甚内が手を下ろすまでもない。門弟衆、臺七どのと立合うて遣はされい。

皆々 心得ました。

臺七 門弟衆をぶち拵ゑ置いて、後で甚内、否とは云はさぬ。サ、誰れからなりと出さつしやい。

軍吾 先づ身共から。

トづつと向うへ出て、兩人、一時に竹刀を取る。これより白囃子になる。立廻りのうち、官兵衛皆々、掛け聲する。軍吾、付け入らんとする。臺七、小判を出してソツと軍吾へ遣る。ちやつと取り、呑み込む體にて竹刀落される。臺七、打ち拵ゑる。

會平 エ、臍甲斐ない。混かつしやい〜。

ト入れ替り、竹刀を取つて打ちかゝる。立廻つて臺七付け入る。會平、ズツと出て、外の竹刀を持つて横合ひより打ちかゝる。いろ〜あるうち、臺七、小判を出し、兩人が袂へ入れる。二人、袂を捻つて見て呑み込む。臺七、二人の竹刀を打ち落す。丈助、身拵らへして

丈助 ドレ身共が。

ト竹刀取つて打ちかゝる。立廻りのうち丈助、おれにも金をと、手を出す。これは味方ゆゑ、否々と云ふこなし、この立廻りありて、ト、是非なく金を下へ抛り

つける。丈助、竹刀、落され轉ける。臺七打つうち、  
丈助、ソツと金を取つて

エ、忌々しい。

トぼやきノ、引ッス。

臺七、なんと見たか、臺七が手並は、ざつとこんなものぢや。弟、われも出て相手になれ。

谷五、イヤ、私は

臺七、なせ出ぬ。甚内が難儀召さるゝ其方、武藝の業が至つたか至らぬか、試し見る。それへ出い。

谷五、でも、現在兄者人と。

六太、イヤ、谷五郎、仕官の身は、親子兄弟とて容赦すべきに非ず。武藝の職みなれば、隣近なく立合うてよからう。

甚内、御前の御意ぢや。早く。

谷五、然らば兄者人、主命でござれば容赦は致しませぬ。

ト身持ちへして

イヤ、立合ひませう。

ト竹刀を取りにかゝる所を、臺七、聲みかけて打ち据ゑる。

こりや、打に召さるゝか。

臺七、黙り居らう。汝等がやうな青蠅の相手になつて、竹刀の一つも當てらるゝやうな臺七でない。こな、慮外者めが。

トまた打つ。谷五郎、赤面する。宮城野、忍び泣きに泣く。この前よりお方、田かけ、見てゐる。おづ／＼

下座へ出て

りき、親旦那、甚内どのへお頼み申し上げます。今日、宮城野さまのお供いたしてこの所へ参りました、私しは夫佐五平が名代。佐五平申し上げますは、お主様達のお名の聖蹟、お身の引けになるやうの儀あらば、男勝りに御奉公を申し上げます。その爲の名代ぢやぞよと、くれぐれも申しつけてござります。只今臺七さまのお試合、谷五郎さまに物の見事にお勝ち遊ばしたところ、天晴れお手利きと申しませうか、御専任と申しませうか、兄御でなくばと谷五郎さまの、さぞ御本意なうも、口惜しうも、御無念にも申し召しませうと、お心根を察し入りましてのお願ひ。何卒臺七どのに、一手お試合と、サア、申しまするも鳴濤がましけれど、夫佐五平、この場にあつて、まッ斯うお願ひ申しまするとお汲み分け遊ばされまして、どうぞ臺七さまが、少しばかりでもお相手

におなり下さりまするやう、この儀備へに、お願ひ申し上げまする。

甚内 御前、如何計らひませう。

六太 元來力量の女とあつて、甚内の手廻りに遣ひ、武藝も相教へしと聞く。苦しかるまい。臺七、立合うて取らせい。

臺七 罷りならぬ。若殿の御意ではござれど、志賀臺七は一國一人、杉本流にこの日頃、骨を折られた門弟衆でござへ今の通り、悉くぶち据ゑてござる。彼奴は何者、下主下郎と云ひ、まして女郎、ぶち殺してからが益にやならぬ。ヤイ／＼女郎め、うぬ、悪い望みだ。身と立合ふが否や、誰れ彼れの容赦はない。ぶつて／＼ぶち殺す。命がないぞよ。命がなくても立合ひたいか。馬鹿な奴の。

りき サア、そこが身を捨て、こそ浮む瀬もあれとやら。命を的に試合ひましたら、なんぼう女のわたしでも、竹刀の端が、ちよつと當るまいものでもござりませぬ。

臺七 イ、ヤ、勝てまい。

りき どうぞお願ひ申し上げまする。

臺七 ハテ、叶はぬ事を。

官兵 イヤ先生、あれ程に頼む事、餘り不便な儀でござる。

斯う致さう。先生の名代に、拙者が立合うてくれませう。女郎め、サア、立て。

りき イヤ、あなたでは、お相手が不手に存じまする。

官兵 イヤ／＼、此奴、途方もない悪言を吐くがな。臺七どの、高弟、津輕官兵衛、師匠の手練は大魚の大魚、大船を呑む鯨同然、その鯨に付き添ふ身共は、鯨鈴の、手並は、まツかう。

ト騙し打に打ちかくる。お力、早く竹刀を取つてよろしく止め。

りき 鯨鈴さまは騙し討が流儀かな。

官兵 オ、サ、小股取つても勝が本ぢや。

ト付け込み、タテいろ／＼あつて、官兵衛を、さんざん打ち据ゑる。臺七、竹刀取つて打ちかゝる。お力とめて

りき こりや鯨さまにも、騙し討かな。

臺七 如何にも。願ひの如く立合うてくれうと思つて。

ト打ちかゝる。よろしく止めて

りき 臺七さま、斯う請けましたところは、まんざら相手に御不足もござりますまい。

臺七 所を斯うして。



ト振りほどき、金を出して、お力に持たせ、其ま、打たんとする。お力、金を抛つて、竹刀を胸先へ突きつけ

りき 斯う付き込めば。

臺七 斯うする。

ト立廻り。また金を大分出して、お力が袂へ入れる。お力、取捨てる。この心の立廻り、間々へ程よくありト、臺七が竹刀を落し、打ち据ゑる。官兵衛また寄るを、同じく打ち据ゑる。

りき お願ひ申した夫の名代、カウ〜〜。斯う打ち据ゑまするが、姫御前の嗜なみ。少々ばかりの心がけてござりまする。

宮城 〆、お力、出かしやつたく。よう叩いてたもつたなう。

ト無性に踊る。お力、會釋して下へ下がる。谷五郎、最前より立合ひの始終に氣を付けてゐるこなしあつて、この時倒れてゐる臺七を引き起し、胸倉を取つて

谷五 兄者人、エ、こなたはなう。若殿の御前とも憚らず、人も無げなる我慢偏執。その廣言にも似ぬ先程より

の立合ひ。金子を以てしつける試合。勇もない表裏の勝と云ふ事は、アレ甚内どのが、とつくりと見てござるわいなう。女童にもしつけらるゝ未熟不鍛錬の身を以て、我意に募る氣儘法外。未練とや云はん、卑怯の振舞ひ。エ、見下げ果てたお心ぢやなう。

ト泣いて云ふ。臺七、谷五郎が胸倉持つ手を振り切り、お力の方を睨めつけ、甚内が側へ行て

臺七 甚内、けうといものぢや。召遣ひの女郎でさへ今の手の内。驚ろき入つた。けうといものだ。手が手の内、誠未熟が未熟でないか。眞劍を以て、甚内、汝を。ト抜きかける。甚内、押へて

甚内 こりや何する。

臺七 眞劍を以て流儀の甲乙を試みるのだ。

トかばして、ひらりと抜き、切つてかゝる。甚内、苦もなく、扇にて叩き落す。直ぐに差添を抜いて切つてかゝる。甚内もぎ取り、立廻つて薙ぎ倒し、胸打ちにさん〜打ち据ゑ、こなしあつて

甚内 動きあがるな、人外めが。おのれ元來、志賀段右衛門が門前に、襦袢を纏うて捨てありし奴。段右衛門、子なきに依つて拾ひ上げ、養育のうち谷五郎出生をなした

れど、養ひし義理を思ひ、家督に立て、志賀の跡目。養父死去のその後は、候辯を以て伯父御大學さまに取り入り、させる功もなく手柄もなく、三千石の高祿を食り、お下の町人百姓を虐げ、伯父御を功に氣儘の政道。剩つさへ若殿六太郎さまを亡きものにせんと非道の企み。お召しの騎の企みは自然とその身に報い、落馬せしは天命天罰。その身に報い、思ひ知つたであらう。

ト臺七が胸倉を持つて引立て、投身を胸先へさしつけサ、斯く手の下の悪人となつて、遁がるゝと云ふ術があるか。咽喉筋を扶らうか。袈裟に切りうか。圓切りにせうか。但し斯うして、生首をぶち落さうか。

ト刀の背を首筋へ當て、挽き切るやうにする。臺七、無念泣きに泣く。甚内こなしあつて

それとても刀の穢れ。勅使お成りの折柄と云ひ、命ばかりは助けてくれる。この後、性根を入れ替へ居らう。

ト突き放し突き退け、抜刀も抛る。臺七、ぐんにやりとなり、弱りしこなし。

丈助 なんと何れも、どう思つても、矢張り先生の、流儀がよくござるの。

皆々 ちやうでござる。

丈助 臺七どのは、女さへ相手にようせん流でござる。

皆々 ハ、ハ、ハ。

六太 甚内が穩便の計らひ。事納まりし上は、宮城野谷五郎が祝言を取急ぎ、腰元力が今日の手柄、歸館の御り沙汰に及ばん。

皆々 有り難う存じます。

六太 甚内には密かに云ひ渡す儀あり、一家中とも、勅使の御前へ相詰めてよからう。

皆々 畏まつてござります。

官兵 サア先生、お立ちなされ。お手を取りませうかな。

ト臺七、差添を取つて鞘へ納め、また刀を納める。この時、散亂してある小判をソツと扶へ入れ、それより刀を杖にして、腰の痛むこなしにて、無理に立ち上がり

臺七 官兵衛どの、よく聞かつしやい。漢の沛公と申すは

元はいけんの士民、項羽と戦つて百度のうち九十九度相負けてござる。終りの軍に只一度打勝つて、漢家四百年の基業を開いたとござる。一旦の勝を勝と致さず、始終の勝を專要とする武藝の骨法。とくと御合點が参りまし

官兵 御尤もさうに存ずる。

臺七 いづれも、サ、お越しなされい。

ト唄になり、臺七、腰膝の痛みを隠すこなしにて、刀を杖に突き、官兵衛同じく腰抱へ、谷五郎、宮城野、大助、軍普、新普、曾平、お力も跡より、甚内へ會釋して、この人数皆々入る。甚内、六太郎、残る。合ひ方になり、六太郎、あたりを見て立ち寄り

六太 甚内、家の重寶鎮守府の印は、疾に紛失いたさうがな。

甚内 なんと御意なさる。

六太 寶藏の鏡、預かりは其方。紛失せしを深く包みし心遣ひ、それと推量いたしたわいやい。

甚内 成る程、御推察の上は包むに及ばぬ。二ヶ年以前、某鎌倉在番の留守中、寶藏の石垣を取つて忍び入り、鎮守府の印を奪ひ取つて立退く曲者。表向きに致さば事大仰にならんと存じ、この日頃、心を付けて相尋ね居りまするやうにごさる。

六太 サア、それゆゑにこそ、某も、わざと女の色香に迷ひ、洞宴亂舞に目を暮らすも、家中の内を探らん爲。然るに今日勅使のお入り、婚禮が直ぐに跡目、家を繼げば

寶を持參し、上洛せねばならず、こは如何せんと思ふ折から、伯父大學どの、お進め。達の大木戸に偽はりの軍を始め、勅使を都へ追ッ返し、心の儘に遊べよと、進む心の一物。わざと乗つて随ひしも、無禮狼藉の科を蒙り、家督の期を延しなば、其うちに寶の詮議、心にあらぬ放埒と察せしは汝一人。この年月の心盡しを、甚内、推量してくれい。

ト悲ひのこなし。甚内もこなしあつて

甚内 ア、有り難き殿の尊命。かゝる賢慮の明君に教導なし、簡範と申すも鳴濤がましき甚内め。愚案を以て思ひ計れば、三年前九州に於て、七草一掬の大將四郎大夫、軍師森唐意軒など、名ある者悉く討死し、事落着に及びしかど、七草餘黨が實と尊む面影を名付けし邪法の鏡、これを持つて飛行自在の術をなすと、詔り傳へし稀代の一品。亂軍の中に紛失なし、皆暮れに在所知れず。もし殘黨の輩あつて、領地へ入込み、鎮守府の印紛失も、目當は一つの手筋ならんか。儘かにそれと、サ、推量はしながらも、手がかりを取り得ぬうちは、荒立てられぬお家の騒動。

六太 して、お勅使を呼び迎へし、其方が所存は。

甚内 婚禮跡目も事なく調へ、鎮守府の印は紛失、詮議の日延仰せ付けられいとお願ひを申し上げ、承引なくば拙者めが。

ト腹切ると云ふ眞似する。

六太 すりや。

ト云ふを押へて

甚内 ハテ、何事も甚内めに、お任せあられます。

六太 よきに詮議を致してよからう。

甚内 ハツ、御前には先づ、入らせられませう。

ト唄になり、六太郎、こなしあつて奥へ入る。甚内も思ひ入れあつて、跡より入る。序の舞になる。ト臆病

口より七郎兵衛、鑓形姫を引立て出る。

七郎 うせう／＼。

鑓形 コレ、狼藉な、なんとしやるぞいなう。

七郎 なんとともせぬ。さる人に頼まれて、貴様を衣川の深

みへどんぶりこさすのぢや。お出で／＼。

ト引立つる。

鑓形 コレ、どうしやるぞいなう。

トいろ／＼ある。櫻木出て、七郎兵衛を押へ、鑓形姫

を圍ひ

櫻木 滅多な事しやつたら、免さぬぞや。

七郎 オ、怖い事ぢや。邪魔ひろくと、コリヤ。

ト大だらを抜いて

この平針が、情所へグツとお見舞ひ申すぞよ。

トびらつかす。

櫻木 コレ、滅多な事せまいぞ。

七郎 渡せやい。

櫻木 イ、ヤならぬ。

七郎 痛々をささうか。

三人 サア／＼／＼

七郎 エ、面倒な。

ト櫻木を切らんとするうちへ奥茂吉出て、七郎兵衛の

拔身にしがみつく。離さぬゆゑ、腕へ喰ひつく。七郎

兵衛、これにて拔身をはなし、顔を見て

ヤアおのれは。

奥茂 七郎兵衛どの、よう信夫さまを買つた金を、横取り

せなんだなア。

七郎 ヤイ、野呂間め。

奥茂 野呂間ぢやない。人間ぢや。

七郎 エ、邪魔な、退きさらせ。



ト奥茂吉を投げ、雛形姫へかゝる。櫻木、支へる。奥茂吉も父かゝる。いろ／＼世話の立廻りあつて、櫻木、七郎兵衛を引き廻し

櫻木 コレ入間さん、爰構はずと、お姫様を。

奥茂 甚内さまへ送つて行くなり。

七郎 うぬ。

ト行くを櫻木、支へて

櫻木 早う行かしやんせ。

奥茂 行けとは、どうぢや。

櫻木 イヤ、行かしやんすな。

奥茂 イヤ行かぬ。お姫様、ごんすな。

ト姫を連れて、向うへ走り入る。七郎兵衛行くを櫻木止め。立廻りあつて七郎兵衛、拔身を取り上げ、櫻木をポンと切る。ウンと倒れる。止め刺さうとする。

官兵衛、出かけゐて

官兵 コリヤ、止めに及ばぬ、切捨てにして

七郎 こちらな仕事を

官兵 早う行け。

七郎 合點ぢや。

ト向うへ走り入る。官兵衛、櫻木が止め刺す。ト東の

樂屋にて

呼び 還御。

ト云ふ。西の樂屋にて

若殿のお立ち。

ト云ふ。所知入りになり、官兵衛、死骸を樂垣へ蹴込

み

官兵 殺らし次手に甚内めを。さうだ。

ト鯉口をくつろげ、奥を口がけて行く。向うへ甚内出

て立ち塞がり

甚内 官兵衛、どれへ。

ト官兵衛、氣を著へ

官兵 イヤサ、身共は。

甚内 血相して、どれへ参る。

官兵 ア、斯うでござるわい。向後志賀氏を破門いたし

て、こなたの弟子になりたい望み。そこで先生の武藝を、

ちよつと試みに。

ト抜いて切りかける。腕首を取つて

甚内 ハテ、役にも立たぬ事を。

官兵 ところを。

トまた切つて行く。程よく拔身を落し、取つて押へ、

早總はやすべにて縛とる。

官兵 コレサ〜、こりや身共みどもを、なんと召よさるゝ。

甚内 伯父おぢ御大學ごだいがくさまを始め、臺七たいしちが惡事あくじの段々だんだん、何もかも白狀びやくじやういたせ。

官兵 イ、ヤ知らぬ。左やうの儀ぎは存ぞんじ申まさぬ。

甚内 吐つかさぬか。云いはずば斯かうして

ト輔たすけにてこぢる。

官兵 アイタ〜。コレ〜、云いひます〜。緩ゆるめて下くださりませ。何もかも云いふ〜。云いふわいなう〜。

甚内 サア、吐つかし居ゐらう。

官兵 斯かうごしにかゝるからは、皆みなばれてしまふワ。高たかが斯かうぢや。伯父おぢ御大學ごだいがくどのが、この一團いつだんを押領おしりやうせんと云いふ。大望たいぼう、敷逆しきさかの勸め人と云いふは臺七たいしちのでえすぢや。そこで家の寶たから、鎮守府ちんしゆふの印いんを盗ぬすんで、大學だいがくどのへ渡わたしたも臺七たいしちどの。こなたの門弟もんてい、丈助さかすけを始め、その外の門弟もんてい、この官兵衛くわんべいまで御味方ごみかたに附ついたは、慾よくに迷まようての出來心できまごころ。斯かう白狀びやくじやうするからは、命いのちはどうぞ、ハイ〜、お助けな

されて下くださりませ。

ト泣なく。バタ〜にてお力りき、走はり出でて

りき 親且おぢ那樣ごうじやう、只今ただいま、殿様とのさまお立ちの所ところ、お姫様おひめさまのお行いく

へが相知あひしれませぬやうにござりまする。

甚内 ハテ心得こころえぬ。して、臺七たいしちは如何いかいたした。

りき 火急かきまの御用ごようとあつて、高館たかたねへ只今ただいまお歸かへり。

甚内 さてこそ。猶なほ養やしやうならぬお國くにの存亡ぞんぱう、其方そのかたは姫ひめのお行いくへ、言こと議ぎいたせ。

りき 心得こころえました。

甚内 用意よういの一腰ひとし。

ト違ちがる。お力りき、取とつて

りき 親且おぢ那樣ごうじやう。

甚内 早はやう行いけ。

りき ハツ。

ト刀かたなを持つて、向むかうへ走はり入いる。官兵衛くわんべい、キヨロ〜、する。

甚内 馬うま引ひけやい。

侍さむらいハア。

ト橋はしが、りより、口取くちとり乗馬じやまを引ひき、鑓やり持もち、草履ぞうり取とり、附つき出でる。この間に甚内じんない、官兵衛くわんべいに狼藉ざうじやくを散ちめ

り、附つき出でる。この間に甚内じんない、官兵衛くわんべいに狼藉ざうじやくを散ちめ

甚内 用意よういの駕籠かごを持もつて。

侍さむらいハツ。

ト家來けらい二人、囚人うぢうご駕籠かごを持もつて出でる。甚内じんない、官兵衛くわんべいを

引ッ立て、駕籠へ打ち込み、家來、繩にて駕籠を縛る。  
 この間に甚内、馬を引寄せて打乗り  
 甚内 高館までは行程十五里、白石の松原より山手にか、  
 れば、難所なれども、僅かに八里。この駕籠、早くく。

家來 ハア、。

ト駕籠を見いて向うへ走り入る。甚内、馬を乗り廻し、  
 鞭を當て、向うへ逸散に駆けて入る。鐘持ち、草履取  
 り、閉いて入る。所知入り止む。合ひ方になる。ト臆  
 病口より臺七、鐘を持つて丈助、軍吾、新吾、曾平、  
 附き出る。橋がよりより黒装束四人、皆、鐘を持ち、  
 竄ひ出る。臺七、當中に皆々、ひきこひ寄り

皆々 臺七どの。

臺七 最前の意圖と云ひ、官兵衛が口走つたれば、もう甚

内めを生けちや置かれぬ。

丈助 老老ながら、武藝の達人

皆々 我れくが加勢で

臺七 城下の松原、道は二筋

丈助 弓手左手より引ッ包んで

臺七 早く。  
 皆々 合點ぢや。

ト丈助始め皆々、橋がよりへ走り入る。臺七、鐘の鞘  
 を外し、しごく事あつて、向うを見て  
 臺七 日頃の鬱憤、うぬ甚内。  
 ト鐘を横たへ、向うへ走り入る。返し。

一面の黒幕、松原になり、本釣リ鐘にて入相を打つ。  
 向うより駕籠をぼッ立て、甚内、馬上にて出る。早  
 く早くと捨ゼリふあつて本舞臺へかゝる時、上手の  
 松ヶ枝より、木雀十羽程、バツと立つ。甚内、馬を  
 乗り止め、キツとなつて

甚内 ハテ怪しや。今黄昏に至つて、諸鳥は噤に歸るべき  
 頃ほひ、野に伏兵ある時は、歸陣列を亂すと云ふ。さて  
 は。

トきつとこなし。松原の間より丈助、軍吾、新吾、曾  
 平、黒装束、皆々出て、俱先へ切つてかゝる。甚内が  
 家來、皆々逃げる。甚内、馬より飛び下りて、抜き合  
 せ切り結ぶ。丈助、駕籠の繩を切る。官兵衛出る。繩  
 を解き一腰を造る。官兵衛も加勢に加はる。甚内、左  
 右を切り拂ふ。臺七も出て鐘にてかゝる。甚内は臺七  
 ばかり日差して切つて行く。臺七、程よくあしらうて

橋が、リへ逃げて入る。甚内、追ひかけるを、皆々支へる。取つては投げ、橋が、リの方へ行く。始終、本釣り鐘、この間チョン／＼にて、松原、東へ引く。西より藪疊出る。但し、この藪疊、二並びにして、前は高さ三尺ばかり、後は摺きりにして、本竹の藪、段々に出て一面になる。右のタテの見得にて、皆々橋が、リへ入る。始終バタ／＼にて、右藪間の細道へ、臺七、追ひ込まれし見得にて逃げ出る。甚内、抜き刀にて追はへ出る。難なく追ひ詰め討たんとす。甚内の日先へ藪より鐘、メツと出る。甚内、飛び退く。この隙に臺七、藪を抜け、後へ入る。方々より投げ鐘出る、甚内、切り拂ふ。藪間にて自由に働らかれぬこなし、後の藪より鐘ぬんぬと出る。悉く切り拂ひ、いろ／＼あると、臺七、前の藪に引添ひ出て、鐘を突ツ込む。甚内が脾胃を突き立てる。其ま、鐘の穂先を切る。臺七抜けて、藪の中へ入る。立廻つて

甚内 うぬ、人外め。冥途の供に連れる。覺悟ひろげ。

臺七 こま事ほざかずと、くたばれ。  
ト切り結ぶ。皆々出て抜きつれて切り込み、切り込み、難なく甚内を仕留める。藪を引き分けて、皆々前へ出

る。この時、吹替への死骸にて前へ出るなり。皆々ホツと息をつく。合ひ方になり、あたりを見て一所へ集まり

臺七 どうやら斯うやら、しまひつけましてござる。

官兵 餘程骨が折れました。ナウ何れも。

吏助 左やうでござる。

臺七 始めより手剛いと存ずるから、逃げる振りで藪中に引き入れ、覚えの手鐘で腹坪をぐツしやり。

皆々 お手柄でござる。

臺七 時に各々方、暫らく影を隠さずばなるまい。

官兵 成る程、國元の手筈次第で、事落去の上、大學さま

よりお知らせある筈。一先づこの場合は

三軍 立退くでござらう。

吏助 臺七どの、貴殿は如何召さる。

臺七 されば拙者は、何喰はぬ顔で一先づ立ち歸り、路用を貯へ、折よくば宮城野を引ツかたげ退く思案、首尾より致して跡から参る。

官兵 して、こなたは、どれを目前に

臺七 都中將家の雜掌、野々宮宮内どのに兼てより、賄賂を以て取入り置けば、京都へ登り築垣の内へ入り居ら



ば、指ざしならぬ屈竟の隠れ家。

官兵 然らば後日に

三人 尋ね参らう。

臺七 あの地にてお出合ひ申さう。

ト袱紗包みの金を出して、

路銀にさつしやれ。

ト遣る。官兵衛、取つて、銘々に、一包みづ、分けて

遣り

皆々 忝ない。

臺七 お行きやれ。

皆々 ハツ。

トこの人叢皆々、橋が、トリへ走り入る。臺七、見返り、

こなしあつて、死骸の懐中にある、印可の巻を出して

廣げ、月明りに見る事あつて

臺七 年月望みし楠流印可の巻。エ、忝ない。

ト笑坪のこなしにて、巻き納める。トこの時、上の藪

垣開く。ト宇治兵部之輔、六部の拵らへにて、笈を負

ひ、鐮杖を突き、最前より聞いて居た心にて立つてゐ

る。臺七、尻からげ下ろし、こなしあつて、のさく

と花道へ行きかける。兵部之輔、ズツと向うへ出て

兵部 コレ／＼お侍ひ。

ト呼ぶ。臺七、ぎつくりして立ちとまる。

臺七 呼ばつしやれたは、身共でござるか。

兵部 如何にも。只今、見請けますれば、刃傷の體。行き

合ひの口論でござるか。但し意趣斬りでござるか。承

り届きたい。

臺七 意趣斬りでござる。兵法の遺恨ござつて、相手を仕

留め、立退くのでござる。

兵部 ムウ。武士の身には間々ある事。併し、相手を仕留め

ながら、止めを刺さぬは、お侍ひに似合はぬ、ちと不心

得に存ずる。

ト臺七、こなしあつて

臺七 尤も。

ト本舞臺へ戻つて来て

止め刺しませう。只今止めを

ト兵部之輔を目がけ、切らんとする。兵部之輔、油断

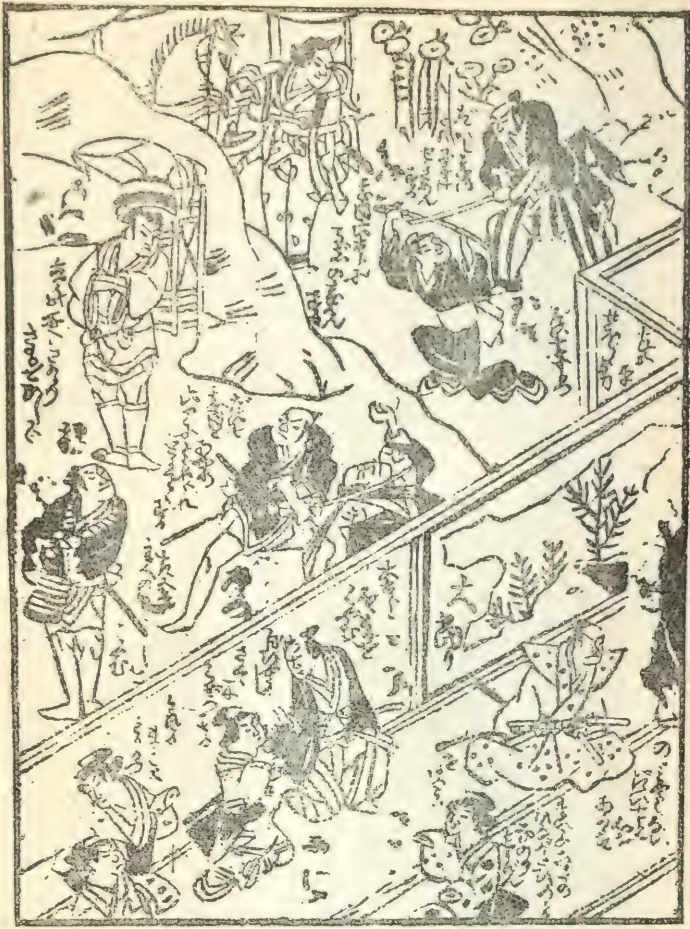
せぬ體にて、眼を配る。臺七、氣を變へ、ヤツと氣を

落しつけて

其許は武者修行でござるな。兵部 左やうでござる。武州よりこの奥洲へ經廻り、一國



の 演 再



繪 番 附

に一人の首塚を築き、これより北國筋へ參るのでござる。

臺七 ムウ、わざと名は聞き申さぬ。この場の始終、必らずとも、他言召さるな。

兵部 心以て口外は仕らぬが、所望がしたい。

臺七 所望とは何を。

兵部 桶流印可の巻を

臺七 なんと。

兵部 武者修行仕るも、身に大望あつての儀。印可を渡して味方さつしやれ。

臺七 なりませぬ。遺恨の元は印可の巻。犬骨折つて鷹の餌食に渡す事、罷りならぬ。

兵部 ハ、ハ、ハ、斯う面體を見知つたれば、何時にても手に入れ申す。お身にしかと預けたぞ。

臺七 讓る時節に譲らうわい。

ト兵部之輔、懷中より、巻絹を出し廣げ

兵部 天上天下唯我獨尊、身が尊むこの秘文、この場の誓紙。これに血判。

臺七 イ、ヤ、望みある身共、旗下に隨ふ事罷りならぬ、

血判否だ。何を馬鹿な。

ト云ひ捨て、花道へツカ〜と行く。兵部之輔、懷

刀を、手裏劍に打つ。と臺七の肩先へ立つ。

こりや、なんとする。

兵部 再會すべき後日の合ひ歟。

臺七 ハテ、念の入つた。

ト小柄を抜き、打ち返す。兵部之輔、片手に掴み

兵部 血判體かに受取つた。

ト小柄の血を、右の絹に塗る。

臺七 ムウ。

ト無念のこなし。

兵部 重ねて逢はう。

ト臺七、氣を替へ

臺七 さらば。

ト向うへ行きかける。戸屋の内に、人番するゆゑ、引

ツ返し、橋が、りへ走り入る。ト向うより佐五平、奴

の形、胸當、股引、脚絆、三尺帶、菅笠持ち、捨てり

ふ云ひ〜出て、死骸に爪づき、いろ〜見る事あつ

て

佐五 ヤア、こりやコレ御主人、甚内さま〜。

ト呼び生ける事いろ〜あり

何者の仕業。



ト行かうとして戻り

今一足遅かりしか。エ、残念な。

ト下に居て大泣き。此うち兵部之輔、笈を負ひ、その

ころ行きかける。佐五平、目を付け、ツカ／＼と寄つ

て

御主人の敵

ト切つてかゝる。兵部之輔、振返り

兵部 早まるまい、待つた。

佐五 なにを。

ト切つて行くを、入違へて

兵部 聊爾せまいぞ。

ト錫杖を構へ、目を配る。佐五平、こなし。この見得

よろしく、

三段目

杉本甚内屋敷の場

幕

役名 高館市之正。高館大學。志賀臺七。志賀

谷五郎 三金江平兵衛。甚内女房。磯崎。同娘。宮

城野。奴、頭陀八重。山形宇右衛門。奴、佐五平。

同女房、お力。宇治兵部之輔正之。

造り物、三間の間、二重舞臺、向う臆病口、折り廻り障子屋體、この内に床の間、これに摩利支天の掛地を掛け、前に供物を供へあり、橋が、り後屋敷塀、上の方に平舞臺、櫻の立ち木、花盛りの體。幕の内より甚内女房磯崎、着附け、襦袢にて、二重舞臺真中に、文を讀んである見得。お島、お汐、お濱、お汲、着附け、腰元の形にて、二重舞臺、下の方に座り居る。と右盛りの櫻花散りかゝる見得。磯崎、この體を見て、文を讀みさし、櫻の木を見て不思議のこなし。この見得にて、面白き合ひ方にて幕明く。

磯崎 あひ見んと、思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬもの

かは。庭に盛りのあの花の、雪と見紛ふ花吹雪。

トこの文を見て

道ならぬ、この文は正しく。

トこなしあつて、また櫻を見て

花物云はねど、風も吹かぬに散るは知らせか。この文と云ひ、ハテ、心ならぬ事ぢやな。

ト文と櫻を見て、よろしく、こなしある。

はま イヤ、奥様、櫻の散つたを、お心におかけなされるやうに見えます。こりやめでたい事のある知らせでござりまする。

くみ コレお濱どの。どうして花の散るのが、めでたいぞいなう。

はま ハテ、散ればこそ、いと櫻はめでたけれ。とやら云ふ歌があるぢやないかいの。

くみ イヤ、それとも櫻の散るは春の夕暮れ。入相の鐘に花や散るらん。と云ふ歌があるぢやないかいの。それに、まだ夕暮れどころか、今やうく時計が五ツを打つたわいなう。

くみ 朝の間から花の散るとは、ほんに變つた事ぢやなう。はま これはしたり、其やうな事は云はぬものぢや。奥様がお氣におかけなされる、ゆゑ、祝ひ直して置くものぢやわいの。ア、笑止なお衆ではあるぞ。

ト云ふ所へ、下部一人走り出る。

家來 ハツ、申し上げます。志賀谷五郎さま、何か御意得たき御用あつて、お出でござりまする。これへお通し申しませうかな。

磯崎 オ、谷五郎さまは、甚内どの、お弟子と云ひ、殊

に御察意のお方。御用とは何事ぞ。直にこれへお通し申しや。

家來 ハツ。

ト下部、橋が、りへ入る。

磯崎 コレ、其方衆は、お菓子、茶の用意しや。

腰皆 畏まりましたござりまする。

ト四人、奥へ入る。磯崎、右の文を卷き納め、懐へ入れる。ト橋が、りより谷五郎、着附け社村にて、ツカツカと出て來て

谷五 ホウ、磯崎どの。

磯崎 谷五郎さま、マア、お通り下さりませ。

谷五 然らば御免下されませう。

ト谷五郎、上へ通り、磯崎が面體へ心を付けるこなし。

磯崎、何氣なう下にゐて

磯崎 谷五郎さま、して、御用とは、何事でござりまするな。

谷五 イヤ、師匠甚内どの、儀に就き

磯崎 サア、御覽じて下さりませ。夜前、どの道歸られまする筈のところ、なんの便りもござりませぬゆゑ、あま

り心元なう存じまして、今朝早々、家來頭陀八を、道まで迎ひに遣はしました。

谷五 ムウ、すりや、何も様子は御存じないか。

磯崎 様子知らぬとは、なんぞ氣遣ひな事はござりませぬか。

谷五 サア、その儀は。

ト云はうとして、こなしあつて、ムンと思案のこなし。

磯崎、合點の行かぬこなしにて

磯崎 どうやら様子ありげな谷五郎さま。なんとやら、氣遣はしう存じます。申し、早う様子を、お聞かせなされて下さりませ。

トこの時、床に掛けたる、摩利支天の繪像、ハタと落ちて、この音に磯崎仰りして、ツカ／＼と行き、掛地を取つて

磯崎 武運の守、摩利支天の繪像を飾り置いたに、風も吹

かす物に觸はらず、この掛地の落ちたは

谷五 すりや、武運の守、摩利支天の尊像を飾り

磯崎 今も今とて、庭の櫻の散りしも氣が、り。

谷五 摩利支天の掛地と云ひ

磯崎 櫻の散つたも

谷五 正しく

磯崎 エ。

谷五 ハテ、争はれぬ。

磯崎 サア、様子を聞かせて下さりませいなア。

ト向うバタ／＼にて、奴頭陀八、逸散に走り出で

頭陀 ハツ、奥様。

磯崎 ヤア、頭陀八か。

頭陀 申し、お旦那を迎ひに參る途中にて様子を聞けば、

甚内さまには、夜前白石の藪蔭にて

磯崎 ヤア。

頭陀 敢へない御最期でござりましたといなり。

磯崎 ヤ、ヤ、そりやド、どう云ふ仔細で。サ、その

譯は。

頭陀 イヤ、委しい様子は存ぜねど、途中で宮城野さまに

お目にかかり、お旦那の様子を聞くと其まゝ、あなたへ

お知らせ申さんと、立歸りましてござりまする。最早こ

れへ宮城野さまも、お歸りでござりまする。

ト云ふうち、向うより家來大勢、エイサツサ／＼と

早打ちのやうに、乗り物を昇ぎ、走り出る。この後より

宮城野、お力、佐五平、乗り物に引き添ひ、走り出

る。乗り物、橋が、りへ昇き下ろす。宮城野、お力、佐五平、磯崎を見て

宮城 ヤア、母様。

佐力 奥様。

磯崎 甚内どの、様子は聞いたか。

三人 エ、口惜しうござりまする。

磯崎 サア、敵は何者ぢや。敵の名は、なんとく。

ト急いで云ふ。

三人 サア、その敵の名は

磯崎 名は。

三人 サア、その名は

磯崎 何者ぢやぞいなう。

トきつと云ふ。

宮城 その敵の名は

佐力 知れませぬわいな。

磯崎 ヤア、、、。

ト驚ろく。

なんと云やる。甚内どのを討つた敵の名は知れぬか。

宮城 アイ。

ト泣く。磯崎、こなしあつて

磯崎 ハア、、、。

ト泣いて、又キツとなりて佐五平、お力を、向うへ連れ出て

コリヤ佐五平、お力、其方達二人を供にやつたは、コレ斯う云ふ時。佐五平は元より、お力、其方も男勝りの力量ある者ゆゑ、まさかの時は氣遣ひないと思つた甲斐もなり、甚内どのをやみく／＼と討たせ、その敵知れぬと云うて事が濟まらうと思ふかいやい。サア、どう云ふ仕儀でお討たれなされた。その場の様子は依つて、また敵の手が、りも知れるもの。サア、その場の様子はどうかや。コレ宮城野、泣いてばかり居やつては濟まぬ。様子を云やいなう。ア、斯う云ふ事のあらう端か、先刻に花の散つたと云ひ、摩利支天の掛地と云ひ、お知らせであつたもの。夫の御最期とは氣も附かず、今の今まで知らなんだは、女子の淺はか。サア、佐五平やお力も、お討たれなされたその場の様子、早う云やいなう。

谷五 コリヤ佐五平、武士が鬨討に逢ひ、敵が知れねば杉本の家は立たぬぞよ。磯崎どの、最前甚内どの、横死の様子、聞くと等しく、隔けつけ參つたれども、何の様子も御存じもなき體。申し聞かせなば、さぞ仰天。如何は



せんとためらふうち、御身達が立歸り、敵は知れぬとばかりでは事が済まぬ。何卒手がよりになるべき儀でもなにか。佐五平、コリヤ、心を静めて仔細を云やれ。

佐五 ハッ、谷五郎さま、奥様、その場の様子と申しまするは、昨日總御坂の山館にて、お勅使をお見送り申し、直さま御主人には高館へお歸り。拙者は旦那の御用につき、二本松まで参りかゝる途中にて、數多の鳥が啼き騒ぐ。ハテ心得ずと思ふ程に、俄かの胸騒ぎ。心も空に白石の下道傳ひ、谷のほとりにて、血潮に染みし死影を見ればお旦那。南無三方と駆け寄り見れば、無念や御主人には早業切れて、敵へない御最期でござりましたわいなう。

磯崎 ハア、。

ト泣く。佐五平、手拭にて包みし鑑の穂先を取出し

佐五 御最期の場所にて、手に入った鑑の穂先。手がより一品。鑑は即ち、志津の三郎。

ト聞いて谷五郎、ツカノ、と側へ行き

谷五 ドレその鑑。

ト取つて見て

如何にも、こりやコレ志津の三郎。すりや。

佐五 その穂先、御存じでござりまするか。

トきつとこなし。

頭陀 正しく鑑の主が主人の敵。

皆々 何者の所爲でござりまするぞ。

宮城 見覚えがござりまするならば

りき 申し谷五郎さま、その持ち主は

佐五 何者で

五人 ござりまするな。

ト五人、詰めかけて云ふ。谷五郎、すりや敵は兄の臺七であつたかと云ふこなしあつて、また五人の顔を見て、さまざまこなしあつて

谷五 ハテ、何者の所持の鑑か。

佐五 すりや御存じは

皆々 ござりませぬか。

ト谷五郎、こなしあつて、五人、顔見合せ

谷五 如何にも。

五人 フン。

トこなし。向うにて

向う お成り。

ト云ふに皆々驚ろく。

谷五 ハテ心得ぬ。家中の屋敷へ殿のお成りとは稀れの儀、なんにもせよ、先づお出迎ひ。

皆々 ハア、。

ト皆々、威儀つくりのひ、谷五郎、鏡の穂先を紙にて巻き、懐中して、出迎ふ。

磯崎 殿様には、イザこれへお通り下されませう。

ト向うより高館市の正、大殿の拵らへ、着附け袴、羽織、小き刀にて、後より小姓、刀を持ち出る。高館大學、着附け社袴、大小にて、後より近習大勢、着附け社袴、大小にて出て来る。皆々、スツと通り、市之正、二重舞臺の上の方に坐る。次に大學、臺七座る。近習皆々、後へ並ぶ。谷五郎、平舞臺の上に座る。磯崎、宮城野、お力、佐五平、頭陀八、下の方に並ぶ。

市之 磯崎、宮城野、思ひ依らぬ甚内が横死。さぞ愁傷、察し入る。

大學 兩人の者、家中の屋敷へ殿のお成りとは、冥加ない事だ程に、有り難いと思つてお禮申し上げい。なんと臺七、甚内は仕合せ者でないか。不慮に討たれたればこそ、殿が直々の御悔み。斯く云ふ大學は殿の弟なれども、分

地七箇石を領し、家老役を相勤め、千石を頂戴する小身の甚内、身共に遙か勝つた憐愍。ハレ、甚内は果報者ではあるわい。フ、。

臺七 成る程、大學さまの御意の通り、日頃御懇望の甚内どの、思ひも依らぬ横死の様子。殿様にも甚だ惜ませられ、御寵臣なればこそ直のお成り。コレサ磯崎どの、宮城野どの、冥加ない殿の御心配、疎かに思はぬがよくござるぞや。

ト磯崎、宮城野、ハツと涙を隠し辭儀する。

市之 例へ小知にもせよ、杉木甚内は高館の御寵、討つて立退いたるは、當主に刃向ふも同然。例へ何方に逃げ隠るゝとも、尋ね出して其方達に、本望とげさせくれう。して、甚内を討つたる敵の家名實名は、なんと云ふ。早くその名を申せ。サ。

磯崎 ハツ、有り難い殿様の御意。夫甚内を討ちましたる敵の名は。

大學 なんと云ふ。サア、早く申せ。

磯崎 サア、その敵の名は

大學 その敵の名は。

磯崎 サア、その名は。

ト磯崎、宮城野、お力、佐五平、難見合せこなし。此  
うち谷五郎もデツと思案のこなし。

大學 ムウ、すりや敵の名は知れぬか。すりや甚内は闇討  
に出合ひ、敵は何者とも知れぬか。フ、、、ハ、、、。

武士たる者が闇討に遣ふとは、ハレ、云はうやうもない  
馬鹿侍ひ。杉本家は没収だぞよ。

臺七 コレサ兩人、大學さま御意の通り、武士が闇討に  
遣へば家名は立たぬ。家は没収、ハテ、なんと氣の毒千  
萬だ。

佐五 イヤ、敵の名はしかと相知れませねど、體かな手が  
かりを捉へ置きましてござりまする。

ト聞いて臺七、ギツクリ、谷五郎もこなし、磯崎喜ぶ  
こなしあつて

磯崎 なんと云やる佐五平、敵の手がかりを捉へ置きやつ  
たとたす。エ、其方も先刻にからさう云うてたもつた

がよい。ほんによろ捕へてたもつた。サア、その手が、  
りを早く爰へ出し、殿様のお目にかけてたもいなう。

佐五 畏まりました。只今お目にかけてたもいませ  
う。サア修行者、これへ出やれ。

ト乗り物の戸を明けける。ト内より兵部之輔、ズツと出

る。臺七、兵部之輔を見て、ギョツとしたるこなし。  
市之正、大學、谷五郎、磯崎、眞陀八、この人数は不  
思議なこなし。兵部之輔、臺七を見て、こなしあつて  
兵部 何れも、御免下され。  
ト平舞臺の眞中へ座る。

大學 ヤイ、下郎め、見れば六十六部を引連れ、敵の手  
がかりとは、どう云ふ仔細ぢや。

佐五 さればの儀でござりまする。主人甚内最期の場所に、  
居合はせしこの六十六部。さては彼奴が所爲と存じ、主  
人の敵通がさぬと申せば、且以て覺えなき申し譯は致せ  
ども、最期の場所に在り合せ、殊に敵の面體は、よく覺  
えるとの儀。さるに依つて固寛の手がかりと存じ、屋  
敷へ同道いたしましたしてござりまする。

ト此せりふのうち、臺七、いろ／＼こなしある。

大學 ムウ、すりや、その六十六部が、敵の面體をよく存  
じ居るとか。コリヤ、殿の御前ぢや。うろたへずと、し  
かと申せ。

兵部 ハイ、成る程、その敵は、よく存じて居りまする。  
ト臺七、こなしある。谷五郎もこなしあり。

大學 して、敵の名は。

兵部 イヤ、名は存じませぬ。

大學 ヤア、なんと云ふ。敵はよく存じて居ると云つて、また敵の名は存ぜぬとは、紛らはしき詞。コリヤ、うぬに詮議があるわいやい。

兵部 イヤ、六十六部へ大乗妙典を納める修業者。且以て偽りは申さぬ。敵は存じながら、名は存じませぬてや。

大學 敵を存じながら、名を知らぬとは、どう云ふ仔細だ。兵部 成る程、御不審は御尤も。夜前暮り過ぎ、白石の谷藪を通りしところ、何かは知らず、轉び落ちたる血潮の死骸。ハテ心得ずと窺ふところに、續いて上の山手より駈け來る侍ひ、先づ暫くと呼びとめ、意趣斬りか、口論かと様子の間へば、劍術の遺恨に依つて討ち果すと云ひ捨て、その場を立去る。その時、面體はよく見覚え置きました。

ト臺七こなし。

併し、佛道修行の身の上なれば、追ひ駈けて名を聞くにも及ばじと存じ、斯やうな場所へ參り合すも他生の縁と、死骸に回向いたす所へ、御息女や家來が駈けつけ、私しを敵ぢやと云はつしやる。此方に覺えない様子を段々と申したれば、然らば敵の面體を見覚えあるが手が、りと

あつて、これへ同道いたしましたのでござりまする。ひよんな所へ參り合せ、拙者が迷惑、御推量下さりませ。

市之ムウ。すりや、劍術の遺恨に依つて、刃傷に及ぶとあらば、この敵は正しく家中の中にあると覺ゆる。

ト臺七、こなし

コリヤ修行者、これなる大學を始め、斯く並み居る中に、その敵の面體に似たる者はなきか。あらば遠慮なしに申せ。達つて包み隠せば、其方が爲にもならぬぞよ。

ト云ふうち臺七、いろ／＼こなし。

臺七 アイヤ／＼、懼りながら、御前の御意ではござりませれど、劍術の師範たる甚内を討つて立退く程の者、うからか當所に罷りありませうか。そこをヂツと斯やうな席へ參り居るは、そりや大丈夫でなけりや致さぬ事。よもや左やうな者もござるまい。ナウ六部、さうでないか。この敵は御家中ではあるまい。元よりこの席に左やうな面體は、無ければないとナ、云つたがよい。よもやこの場に、その面體に似たる者は、ありそむないものぢやてなナ。

ト兵部之輔、呑み込みしこなし。思ひ入れあつて

兵部 成る程、斯う見ましたところが、その敵の面體はこ



ざりませぬ。

ト臺七、落ちつきたるこなし。

磯崎 すりや、この場に、その面體はないか。

ト佐五平お力と顔見合せ

三人 ホイ。

ト當惑の體。

大學 ソレ、六部に纏ふたつしやれ。

ト家來出て

四人 臆せ。

ト兵部之輔に詰めかゝる。

兵部 何科あつて掬め捕らつしやるな。

大學 イ、ヤ、野太い奴め。察するところ、甚内閣討の場

所に在り合せ、必ずこの事他言いたすなと、賄賂の金を

貰ひ、その恩に敵の面體は知つたれども、名は存せぬな

ぞと、紛らはしき云ひ譚。纏ふつて獄屋へ引く。へレ、

踏みつけて纏ふて。

四人 ハッ。捕つた。

トかゝるをボン／＼と投げて

兵部 六部となつて諸國を廻る武者修行仕り、一流を立

てんと志す宇治兵部之輔正之。傳かの金子に限くれ、

本意を忘るゝ武士ぢやござらぬ。

大學 ムウ。すりや其方が、宇治兵部之輔正之か。

兵部 如何にも。

大學 ハテナア。

トこなし。

市之 さては其方が聞き及ぶ、宇治兵部之輔正之とな。兼

ねて劍術鍛錬の高名、當國までも隠れない。予が事は高

館市之正長宗、對面は今が初め。家の師範たる杉本甚内

横死の上、暫時も師範なくては他國の嘲り。兼ねて兵部

之輔、汝が武藝藝はしく思ひし折柄、今日思はず對面せ

しは正しく奇縁。何卒其方が、我が國にとゞまつて、一子

六太郎が師範となりくれうならば、予が大慶、一家中の

喜び。この儀、承知してくれうか。

兵部 こは有り難き御前のお詞、武者修行と申し立て、諸

國を遍歴仕るも、好き主取りを願ふ所存。かゝる大國の

師範となるは武士の面目、御辭退申さず、暫らく當國に

足をとめ、若殿へ御指南仕るでござりませう。

市之 オ、早速の承知、満足々々。

大學 ハテ、思ひも依らぬ宇治兵部之輔、この國の師範と

は、ナニ臺七、如何思ふぞ。

臺七 ずんと好うござりまする。兼ねて名高き宇治兵部之  
輔、この國に足をとむるとは

ト兵部之輔と顔見合せ

先づ安堵仕つた。

磯崎 ハツ。大殿様へお願ひ申し上げます。甚内討たれ  
ました敵の知れませねば、杉本の家名は今日限り。何卒  
殿様の御仁心を持ちまして、夫の敵を尋ね出しまするま  
で、家没収の儀を御免下されませうならば、生々世々  
の御厚恩と申しませうか。コレ娘、其方もともく、お  
力佐五平頭陀八も、お願ひ申してたもいなう。

宮城 今、母様の申されます通り

りき どうぞ今暫らくの御宥免を

佐五 何卒お聞き届け下さりませうならば

額陀 有り難う存じ

四人 奉りまする。

大學 イヤ、そりや叶はぬ事ぢや。武士たる者が罰討に遭  
へば、家没収はお定まり。それに猶豫などとは野太い事。  
その願ひは叶はぬ。只今屋敷を立退けく。  
磯崎 そんなら、如何やうに申しましても。  
大學 くだい。

ト皆々、顔見合せ

四人 ハア。

ト差俯向く。此うち谷五郎、思案のこなし。

臺七 ハテサテ、笑止千萬。申さば殿様にも御秘藏の甚内  
が妻子、何卒今日一日の御宥免、偏へに願ひ上げ奉り  
ます。

市之 オ、臺七、神妙の執成し。予も秘藏の甚内が妻子、  
不便には思へども、武家の作法に依怙愚直はならぬ。辭  
し、今日一日は予も、この屋敷にあつて、彼れらに名殘  
りの杯を造はさう。

臺七 すりや、お殿のお杯を。エ、これサ、冥加至極も

ない。サ、お禮をく。

皆々 有り難う存じまする。

市之 サ、汝達へは名殘の杯。また兵部之輔とは主従の  
杯。

兵部 ハツ。

市之 臺七は、先刻申しつけ置いた勅使の旅館へ、見送り  
の挨拶萬事。  
臺七 畏まつてござりまする。  
大學 者ども、その扶持障されの下郎ども、女郎共ども彼

奴が部屋へ引ッ立て、その外残りの者どもへも、右の様子申し聞かせ、今日中に逃ひ出せ。

侍ひ 畏まつてござりまする。サア、三人とも早く立て。

ト三人、ハアと御儀する。

大早 海崎、宮城野、案内いたせ。

兩人 ハア。

市之 臺七は甚痛く、兵部之輔、奥へ來やれ。

兵部 御前には先づ

兵臺 入らせられませう。

ト奥になり、磯崎、宮城野に、

磯崎 サア、おぢや。

ト手を取る。宮城野、谷五郎へ心を残して、無理に連れて、案内する心にて、先に立つ。市之正、近習皆々

引連れ、大臺、後に付き奥へ入る。侍ひども、サア早く早くも、徳五平、お力、頼院八を遣ひ立て、是事な

く三人、崎が、りへ、しほ、と入る。後より侍ひ四人、奥に入る。兵部之輔、臺七、谷五郎、右三人、跡

に残る。谷五郎、始終、手を組み息室のこなし。

臺七 さて、美止千萬の儀はある。と云うて救し方も

ない。ドレ、先づ殿の御意、勅使の旅館へ参らうか。ナ

ニ兵部之輔どの、先づ以て身の納まり、おめでたう存ずる。猶この上は入魂にお頼み申す。弟、其方は宇治どのを奥へ同道。ドリヤ、拙者は参らうか。

ト立ち上がる。谷五郎こなし

谷五 兄者人、お待ちなされい。

臺七 谷五郎、用があるか。

谷五 すりや、いよくこなた様は、お勅使の旅館へござるぢやまで。

臺七 主命なれば、行かすばなるまい。

谷五 勅使の旅館へござらぬ先に、お目にかける物がござる。先づお待ちなされい。

臺七 ナニ、身共に見する物とは。

ト谷五郎、懐中より件の鐘の程先を出し

谷五 兄者人、これ覚えがござるか。

ト臺七、取つて見て愕り

臺七 ヤアこれは。

谷五 よく存じて罷りあるぞや。

トきつと云ふ。臺七ギツクリとなる。兵部之輔、手を組み、サツと見て居る。ト合ひ方になり、谷五郎、こ

なしあつて

谷五 その志津の三郎の鑑は、親段右衛門どの、所持なれども、未だ家中に誰れあつて、存じたる者もないがこなたの仕合せ。最前佐五平が持ち歸り、甚内どの、横死の場所に、落ちありし鑑の穂先、一目見るより、さては敵は兄臺七どのとは、谷五郎一人は、よく存じ罷りあるぞや。さは知らずして、甚内どのを害せし事を押包み、この屋敷へござつたは、磯崎どのを始め、宮城野諸ともに、騙し寄つて返り討に致す所存よな。但し、外に仔細あつてか。よもや我れこそ甚内が敵と、名乗つて出る心はあるまい。殿の上意を幸ひに、お勅使の旅館へ参ると偽はり、當所を逐電する所存でござらうがな。エ、見下げ果てた臺七どの。親段右衛門どのの小身なれども、代々高館の恩祿に、連綿たる志賀の名跡。一子なきを憂ひ、氏神への願望満する日に當り、拾ひ歸りしこなたは、即ち氏神の告子と養育あつて、志賀の家督相続の、跡にて拙者が出生。義理ある兄者人、殊に死去いたされし兩親の遺言を守つて、敬ふ拙者を拒み、ありとあらゆる非道の行跡。昨日お勅使お成りの場所にて、宮城野と拙者が縁組みを根に持ち、甚内どのに恥しめられ、その遺恨に依つて、荷擔人を大勢待ち伏せさせ、白石の藪蔭にて、

騙し討とは卑怯の振舞ひ。敵が知れねば杉本の家名は、今日只今退轉いたすぞや。なぜ武士らしく、先ッ斯く斯くと遺恨あつて、甚内は我が手にかけてと、尋常に名乗つて出で、首差延べて討たれさつしやれたら、アレ志賀臺七こそは誠の侍ひと、殿を始め一家中に、こなたの武名は輝やきまするぞや。それになんぞや、勅使の旅館へ参るなぞと、殿様へは偽はりを構へ、御師籠たる杉本の家は滅亡させ、それでも武士か、イヤ侍ひか。その憎しみでコレ、志賀の家名まで没收せらるゝと云ふ所へ、心が附かぬ兄者人。エ、淺ましい所存でござるよなア。トきつと詰めかけ、こなしある。臺七、一々聞いて居て

臺七 ムウ。

ト手を組み下にあて、思案のこなし。兵部之輔、こなしあつて

兵部 ハテ、天晴れ器量の若者。義理ある兄を重んじ、家名を大切に思ふ志し、感じ入つた。某も一旦の義を立て、敵はこの者でござると、白状せぬは武士の情。義理と情を辨まへなくては、誠の武士とは云はれまい。とくと思案をしやれ。



ト臺七、こなしあつて、膝をハタと打ち

臺七 ハアさりぢや、誤まつた／＼。恥辱を取つたその鬱憤、甚内を討つて、杉本の家を滅亡させんと、そこへばかり心付き、我が身の被滅になると云ふ所へ、心付かざるは我が誤まり。幼少より養育にあづかり、大恩ある志賀の家名を退轉さすは、不所存とや云はん恩知らず。谷五郎、よく云うてくれた。汝が意見聞き届けた。ア、弟は持つべきものだなア。今と云ふ今、臺七が本心を改めて時。これより屋敷へ立歸り、死出の噴着の用意を調へ、これへ參つて潔よく、磯崎親子に討たるれば、卑怯未練の名も残らず、武士の最期を申し立てに、志賀の家名は弟、其方相續いたしてくれいよ。頼み置くはこればかり。

谷五 ムウ。すりや、本心に立返り、敵と名乗つて出る所存とな。

臺七 如何にも。

谷五 イヤ、合點が行かぬ。今日これへござつたは、こなたの心に一物ありと脱み置いた。

臺七 ヤアなんと。

谷五 辯舌巧みに云ひ廻し、この場を立退く所存であらう

がな。

臺七 ヤア。

ト谷五郎、臺七が顔をキツと見て

谷五 こなたはなう。所詮定まらぬ本心と見抜いた。卑怯未練に逃げ隠れ、その身を全う致されよ。

臺七 すりや、臺七が詞を疑ひ

谷五 兄弟の縁もこれまで。

臺七 して、志賀の名跡は。

谷五 そりや谷五郎が胸にごさる。

臺七 もし本心を改めて

谷五 敵と名乗り潔よく

臺七 磯崎親子に討たれなば

谷五 その時こそは

臺七 元の兄弟。

谷五 家名を穢すか

臺七 武士を磨くか

谷五 善悪二つは

臺七 身共が胸に。

谷五 マアそれまでは。

臺七 弟。

谷五 兄者人。武士の立つべき御思案召されい。

ト唄になり、鑓の穂先を持つて、奥へ入る。跡に臺七、こなしあつて

臺七 オ、それよ。親の家名を穢すか穢さぬか。臺七が魂ひ。谷五郎、追ツつけ見せて安堵させうぞ。さうぢや。

トこなしあつて、ツカ〜と花道へ行く。

兵部 卑怯者めが。

ト臺七、キツと立ちどまつて

臺七 ナニ、卑怯者とは。

兵部 實義ある弟を騙かり、死出の用意など、誠しやかにこの場を立去らんとは、武士に似合はぬ卑怯とや云はん。こた盗賊めが。

ト云ふに又キツと立ちとまり

臺七 武士が落ちぶれ、切取りするもある慣らひ。まして、これは劍術の遺恨に依つて、討ち果し立退くは武藝の勵み。それを盗賊といはば、兵衛佐頼朝は、平家を討つて六十餘州を掌中に握る。すれば頼朝は盗賊と云はるか。

イヤ、たわけた事を。

兵部 右大將頼朝は、騙る平家を討ち亡ぼし、四海安靜に治めしは、後白川の法皇より院宣を賜はりしゆゑ。これ

皆藏家の氏の尊きゆゑ。それに引替へ、氏も素性も賤しき身を以て、人を害し、印可を奪ひ取つて立退くは、盗賊であるまいか。

臺七 イヤ、漢の高祖は沛縣の士民なれども、國を切り取つて王位に上る。なんと、これらも盗賊か。

兵部 沛公は筵を織りし野夫なれども、三尺の劍に大蛇を隨へ、阿房宮の家を鎮め、項羽と戦ひ、高祖と呼ばれ、漢家四百年の基を立つる。これ民を養ひ、四海安靜ならしめん爲。皆これ亂れたる天下を治む。彼れを見てこれを比ぶれば、萬里に羽を伸す大鷲と、雀の小躍りするも同然。汝の所爲は、主君の師範たる甚内を害し、妻子の嘆きもいとはず、武士たる者の仁にも缺け、義にも背き、只暴悪の武道に、おのが遺恨を晴らさん爲、杉本の家を絶す。盗賊とも國賊とも、云はん方なき人非人。天道これを免さずして、遂にその身は屍を巷に曝し、肉の薦鳥の餌食となるは今日前。サア、兵部之輔が金言に、返す詞があるなら、一言半句の返答、打つて見よ臺七。

臺七 サア、それは。

兵部 サア

臺七 サア

兩人 サア／＼／＼  
兵部 なんと盗賊であるまいか。

ト云ひ伏せられ。

臺七 エ、ハ、ハ。

ト口惜しきこなし。

兵部 最早一寸も動かぬ。臺七、思案極めて返答せよ。

ト臺七、こなしあつて

臺七 さうぢや。心に將の氣を持ちながら、盗賊と云ふ名に迷ひ、暫時の隙取り。ソレ。

ト行かうとする。

兵部 待て。

臺七 うぬと問答は、無益の沙汰だわい。

兵部 イ、ヤ、逃げるとも逃がさうか。十間逃ぐれば十間殺し、二十間三十間、例へば百間程を隔て、も、兵部之輔が腕に覺えの遠當の箭を以て、立ち所に其方が一命を。

ト兵部之輔、身を固め、臺七方へ當てにかゝる。臺七、

花道にこつたり座つて兩手を上げて

臺七 ア、これ／＼、早まるまい／＼。遠當の術、請

けたも同然だ。必らず聊爾せまいぞ／＼。

兵部 承知なれに手向ひはせぬ。サア、印可を渡しやれ。

臺七 否だ。ならぬ。骨折つて奪ひ取つた印可。うま／＼と渡さうか。野太い奴の。臺七がこの首と釣り替の印可だ。滅多に渡さうか。馬鹿つくせ。

トまた駆け出す。兵部之輔、拳を以て、逃くる臺七が弓手の脇腹へ、遠當のこなし。臺七、ウンと肝にこたへし體にて、ぎつくりと立ち竦みになり、タゲ／＼と後ずさりし、よき所まで戻り、又どつかと座る。

兵部 なんと、宇治兵部之輔の奇々たる遠當の術。筋骨にこたへたか。

トきつと云ふ。臺七、ぐんにやり弱りしこなしにて

臺七 こたへた／＼。ハテサテ、けうといものぢや。楠流の印可を望む宇治兵部之輔、云はねど聞かねど胸に一物。

臺七も大望あるゆゑ、些細な事に命は捨てぬ。まさかの時、臺七が片腕と頼む印。菊水の印可、御身にくれたぞ。ト一卷出し、兵部之輔の方へ抛る。兵部之輔、取つて

如何にも、儘かに落手いたした。

臺七 印可を渡すが互ひの因縁。

兵部 某も追ッつけ鎌倉へ立越え、楠流の指雨と聞かば

臺七 尋ね求めて

兵部 その時對面。

臺七 先づそれまでは  
兵部 堅固で居やれ。

臺七 さらば。

ト唄になり、臺七、向うへ走り入る。兵部之輔、後を見送り

兵部

彼奴を助け置くも一つの手段。

ト件の印可を戴く。ト太鼓、謠になり、兵部之輔、こなしあつて奥へ入る。跡合ひ方になり、奥より大學出る。橋が、りより頭陀八、窺ひ出て

大頭 頭陀八。

頭陀 兼ねて思し召しの御大望、妨げとなるは杉木甚内、思ひがけなく闇討ちに遭ひしは、大學さまの御利運と申すものでござりまする。

大學 如何にも。某兼ねて當國五十四郡を押領せんと、志賀臺七と謀し合せ、當家の寶、鎮守府の印は疾より奪ひ我が手にある。甚内横死の上、一家中は大半味方。併し、臺七が弟谷五郎、此奴若輩者なれど、萬事に小賢しき毛二才め。それに今の六部めが面魂ひ、只者ならず。彼奴等兩人を騙し寄つて討つて捨つる。汝も某に兼ねて合體せしは、斯やうな時。必らずぬかるな。合點か。

頭陀 委細長まつてござりまする。元來谷五郎は甚内が秘

藏の門弟、兼ねて宮城野が心をかけ、即ちお力めが戀の仲立ち。又この頭陀八は、小ツ恥かしい事ながら、あのお力めに首つたけ。ところに甚内夫婦が指圖を以て、お

力と佐五平めと夫婦に致した、その時の心外さ口惜しさ。おのれ、谷五郎と宮城野が取持ちするは、お力と佐五平。

これ幸ひ佐五平を罪に取つて落し、お力めを手に入れる企みで、捲らへ置いた艶書を、奥方磯崎が手へ渡し置き

ましたれど、甚内が最期で、不義の誣議どころでもなく、

思ふ事は皆ぐりはま。この上は手短かに、谷五郎も六部

めも、騙すに手なし。物の見事に仕負はせたらば、兼ね

て申上げた拙者が大願の片腕にも。

大學 オ、云ふにや及ぶ。汝が望み達しくれう。

頭陀 エ、忝ない。

大學 萬事ぬかるな。

頭陀 追ツつけ吉左右。

大學 早く。

頭陀 ハツ。

ト唄になり、頭陀八、橋が、りへ走り入る。跡にこなしあつて



大學 もしあの手で行かぬ時は。ハテどうがな。

ト手を組み、思案の體。此うち後へ磯崎、宮城野を連れ出る。橋が、よりより佐五平、お力、小腰をかぐめいで、大學、上の方へ、磯崎、宮城野、下の方へ、佐五平、お力、兩方より、おづ／＼と採み手して

磯宮 大學さま。

佐力 我れ／＼がお願ひ。

ト大學、四人をチロリと見て

大學 われ達は、まだ退かぬか。

磯崎 只今奥にて、殿様のお杯を頂戴いたしましたして、最早

今日中に、屋敷を立退かねばならぬと存じますれど、ほんにモウ、涙が溢れまして、殿様へ申し上げまする詞も、出ませぬやうにござります。それゆゑあなた様へのお願ひ。

大學 ムウ。すりや今日中に、屋敷を没収いたすを、今暫らく日延べの願ひか。

磯崎 イ、ヤ、左やうではござりませぬ。

大學 左やうでなくば、なんの願ひぢや。

磯崎 どうぞ敵討ち、御免の願ひを。

大學 敵の名も知らず、敵討ちの願ひがならうか。馬鹿な

事を。

佐五 御尤もの御意でござりまする。サア、そこがお上のお情。此まゝに立退きましては、明日にも敵の名を聞き出し、出合ひましても、理不盡に敵討ちのならぬ、武家の法はよく存じながら、叶はぬ願ひも女の事と、お免しあつて、何卒殿様へお執成し仰せ下されまするは、あなた様より外にござりませぬ。御分知をお取り遊ばされ、御家老格でござりますれども、元はお殿様と御連枝のあなた様。申さば殿様も同然。何卒あなた様のお詞を以て、敵討ち御免下されませうならば、この奴めが腰の續くだけ、六十餘州を駆け廻り、敵を詮議仕出し、御兩所に本望達げさせ、再び杉本の家名も立てたうござりまする。申し大學さま、御憐愍でござりまする。お情に何卒、この儀を偏へに願ひ上げまする。

りき 只今佐五平申上げまする通り、此ま、屋敷を立退きましては、もう杉本の家も一生埋れ木となり果てます。御存じ遊ばされます通り、御子息はなく、宮城野さまは女儀の事なり、奥様のお心を思ひやります程、さぞお傾りもござりますまい。その心に張りを持つて、おのれやれ、女子でこそあれと思し召すは、敵討ち御免とあ

る御意が、干人力となりますれば、どうぞあなた様の思し召し入れて。

磯崎 どうぞ首尾よう敵を討ち

宮城 杉本の家の立ちまするやうに

佐五 何卒お教度しを

りき 偏へに願ひ

四人 上げまする。

大學 エ、かましいい扶持離され。如何程云つても、武家の格式は背かれぬ。ごくにも立たぬ願ひをせうより、明日より袖乞ひ致す工風をしをらう。

四人 すりや、どうあつても。

大學 敵討ちの願ひは叶はぬ。杉本の家は退轉に極まつたわやい。

四人 ハア、、。

ト泣き落す。

兵部 イヤ、杉本の家名相續仕るぞ。

ト奥より兵部之輔、社村、衣裳、大小、髪も立派にして、ズツと出る。

四人 エ、なんと。

大學 兵部之輔、ド、どうして杉本の家が立つぞ。

兵部 劍術の遺恨に依つて、甚内を圍討ちに仕り、杉本の印可を奪ひ取つて立退く。さすればその菊水の印可を所持する者こそ、甚内が敵サ。

大學 して、印可を奪ひ、所持するは何者。

兵部 只今これにて御覽に入れませう。御前、これへお越し遊ばされませう。

ト正面の樓閣かせ、市之正、近習皆々附き出で、座に附く。兵部之輔、二重舞臺の眞中、大學、上の方に座

大學 して、その印可は何者が所持する。

兵部 即ち菊水の印可は、これにござる。

ト懷中より出して見せる。

大學 ムウ。その印可を所持するからは

磯崎 夫甚内どの、敵は

佐五 宇治兵部之輔

磯崎 其方であつたな。

兵部 イ、ヤ、身共でない。

磯崎 イ、ヤ、大切な印可ゆゑ、平常夫が所持の一巻

宮城 こなたの手にあるからは

佐力 覺えないとは卑怯であらう。

磯崎 夫の敵。

宮城 父上の仇。

りき お主の仇。

佐五 サア尋常に

四人 勝負々々。

谷五 待つた何れも。その敵は外にござるぞ。

ト奥よりツカ〜と出る。

磯崎 ムウ、谷五郎さま。

佐五 外に敵が

四人 あるとはな。

谷五 甚内どの、敵は、宇治兵部之輔どのではない。必ら

ず早まり召されな。

磯崎 して、試の敵は

四人 何者でござるな。

谷五 只今申し聞かせませう。先づ暫らく。ハツ、殿へお

願ひ、何卒谷五郎めにお暇を下し置かれませうならば、

有り難う存じます。

市之 ムウ、暇を願ふ谷五郎。仔細ありげなこの場の様す。

兵部 イヤ、懼りながら、お聞濟み遣はされませうが、よ

からうやうに存じます。

市之 ムウ谷五郎、望みに任せ暇を遣はす。急いで敵の名を申してよからう。

谷五 ハツ、早速のお聞き届け、有り難う存じます。ナ

ニ宮城野どの、契約の縁組みも髪替へ申すぞ。

宮城 エ、そりや又、なぜでござりますぞいなア。

谷五 その仔細は、コレこの鐘の穂先。

ト最前の穂先を出し

この鐘の穂先は即ち、甚内どの、無念の魂ひ。この鐘の

主こそ甚内どの、敵

佐五 そんなら、その鐘の持ち主は

磯崎 谷五郎さまには

佐五 御存じでござるか。

谷五 如何にも。

四人 して、その敵は。

谷五 外でもない。志賀臺七。

四人 エ、。

谷五 證據は即ちこの穂先。

ト腹へ突ツ込まうとする。宮城野、慌て繩りとめて

宮城 ア、コレ、待つて下さりませ。

谷五 イ、ヤ、放さつしやれ。

ト突き退けて、また突ッ込まうとする。

兵部 谷五郎、待ちやれ。

谷五 イヤ、現在兄の訴人。

トまた突ッ込まうとする。

兵部 不忠になるがや。

谷五 なんと。

兵部 武士の命は、お馬の先にて御用に立つのが忠義ならずや。非義非道の兄に孝を立て、尤もお暇申し請けたれど、これまでの君恩は、どの命を以て報じ召さるゝな。

谷五 サアそれは。

兵部 ア、思案が若い。とくと思案をしやれ。

谷五 ぢやと申して。

兵部 甚内存生に契約の縁組み。云はゞ舅の敵ではないか。女どもの力となつて、本望遂げさせる所存がなくて、切腹など、は、うつけた事を。

谷五 ムウ。左やうのこなたが、何ゆゑに兄臺七を見通が

し召された。

兵部 志賀杉本の兩家が立てたさ。

谷磯 なんと。

兵部 兄臺七と事替り、天晴れな誠ある武士、殊に小身な

れども高館に、數代連綿たる志賀の名跡、非道の臺七の爲に滅亡させるが、なんとも残念。まつた杉本の家はお家の師範、彼れと云ひこれと云ひ、何れもお家の柱石、絶え果てん事嘆はしく、コレこの菊水の印可を奪ひ返し、臺七を助けて立退かせしは、先達て亡び失せたる七草の殘黨、邪法の鏡を以て四海を覆へさんと、東國に徘徊する由。臺七が眼中人相、正しく彼の七草の殘黨に、合體せしと覺ゆる。引ッ捉へ詮議するは易けれども、わざと見通し置くは、七草の餘類を誘き出す詮議の間、二つには今臺七を入牢いたさせなば、磯崎親子の者、甚内が敵と名乗り、臺七を討つ事は、敵が知れねば杉本の家は没收。さるに依つて、一旦臺七を見通がし、跡にて敵は臺七なりと言上仕り、敵討ちの願ひを立てさせん某が寸志サ。

谷五 すりや、兄臺七は七草に荷擔。

磯崎 夫の敵。

宮城 親の敵。

佐力 お主の仇。

兵部 ハテ、苦しうない。宇治兵部之職が計略を以て、七草が餘類も、邪法の鏡も、追ッつけ取り得る。



皆々 ぢやと申して。

ト皆々、向うをキツと見てこなし。

兵部 ハテ、急く事はない。お身達が敵、兵部之輔が請合  
うて、討たすく。

皆々 エ、。

ト喜び辭儀する。

兵部 この、枯流の印可は、暫らく某が預かり置く。若殿  
へ御指南申せば、杉本甚内、存らへあるも同じ事。ハツ、

何卒彼れらに敵討ち御免なし下されませうならば、有り  
難う存じ奉ります。

市之 今日より、當家の舖置たる其方が願ひ。如何にも敵  
討ち、許してくれたぞ。

皆々 エ、有り難う存じます。

大學 イ、ヤ、そりやなりません。

皆々 なぜなりませぬな。

大學 當家の寶、鎧守府の印、籠め置かれし寶藏の鍵、預  
かりは杉本甚内。その鎧守府の印は、疾より紛失。

皆々 エ、。

ト皆俯り。

大學 さすれば甚内が越度。その科ある妻子、敵討ちなど

とは野太い奴の。

磯崎 すりや、その申し譯立ちませねば

大學 敵討ちは叶はぬわい。

ト皆々、顔見合せ。

皆々 ホイ。

ト當惑のこなし。磯崎、キツとなつて

磯崎 イ、ヤ、左やうならば、鎧守府の御判出まするまで、

私しは屋敷にとゞまりませう。何卒娘宮城野へ、敵討ち  
御免を。

市之 聞き届けた。

磯崎 エ、。

市之 磯崎一人屋敷に残るは、甚内が名代、神妙の願ひ。

聞き届けた。

磯崎 エ、有り難うござりまする。

大學 よいワ。寶の出ぬ時は、磯崎、汝は人質、覺悟はよ  
いか。

磯崎 女でこそあれ甚内が女房、寶の代り、命を差上げま  
する覺悟でござりまする。

宮城 エ、。

磯崎 コレ娘

母が残るは大切な寶紛失の申し譯。其方が

敵討ちに行きやるは親への孝行。首尾より敵を討つて、甚内どの、妄執を晴らしてたまや。

宮城 イ、エ母様、わたしや一人敵討ちに行く事は、否でござりまするわいなア。

磯崎 サイナウ。母と一緒に行きたいけれど、今聞きやる通り、大切な寶の紛失。この詮議をせねば、草葉の蔭の甚内どのが違ひの種。敵を討つても、寶の詮議も、貞心孝行、いづれの道も、家の爲ぢやわいなア。

宮城 サア、なんぼり家の爲でも孝行でも、わたしやアノ、祝言せぬ其うちは。

磯崎 ヤ。

宮城 こちや敵討ちに、行きとむなうござんすわいなア。りき コレ／＼申し、宮城野さま、そりや何を仰しやる。

折角願うた敵討ちを、そんな譯もない事仰しやらすと、ちやつと御用意なされませ。

佐五 オ、さうだ／＼、めでたう敵をお討ちなされた跡では、御祝言も、世間晴れてなる事でござりまするわいなア。

宮城 イヤ／＼、どのやりに云やつても、わしや祝言せにや、行く事は否でござる。それとも違つて行かねばなら

ぬ事なら、申し谷五郎さま、お前も一緒に來て下さんす事なら。

大學 イ、ヤ、そりやならぬ。谷五郎は敵臺七が弟、其方と縁組みは未だ家中へ披露せぬ内證事。谷五郎と同道は叶はぬわい。

兵部 イヤ大學さま、そりや御料簡が違ひました。

大學 何が違うた。

兵部 谷五郎は只今、殿のお暇を蒙り浪人の身の上。さすれば志賀の名跡は、暫し殿へお取上げ。浪人の身の氣散じ、女の道連れ、苦しうないてや。

宮城 エ、忝なうござりまする。

ト兵部之輔を拜む。佐五平、おづ／＼這ひ出て

佐五 憚りながら下郎めがお願ひ。何卒、敵討ちの御供御免下さりませうならば、有り難う存じまする。

磯崎 イ、ヤ佐五平、そちや供には叶はぬ。

佐五 エイ。

磯崎 大切な敵討ちの供に、不忠不義の其方は、ならぬわいなア。

佐力 エ、。

ト驚ろく。佐五平、磯崎が側へ行き、どつかと下になる

て

佐五 申し吳様、なんと御意なされます。不忠不義の佐五平は、お供に叶はぬとは、ド、どう致した儀でござります。下郎が不忠不義いたした覚え、徳座もござりませぬ。何ゆゑなうたお情ない事を仰せ下されませぬぞ。不忠不義の仔細、サ、承りませう。

磯崎 オ、その證據はこの艶書。

佐五 エイ。

磯崎 お力、讀んで見や。

ト件の文を、お力の方へ投げる。お力取り、抜き讀む。

この時頭陀八、橋が、りより出て見てゐる。

りき 餘り思ひに堪えかね、御座も御面倒に思し召し候はんなれども、心のたけを聞き筆に云はせ申し候ふ、誠に被高き御方様に、下郎の腹しき身を讀みず、斯やうに申上げ候ふては、定めし道知らずとお下げすみ遊ばし候はんと存じ候へども、今さら思ひ切るに切られぬ、心の中をお読み分け置ばされ、色よき御返事くれぐれ願ひ上げ候ふ。先づはあらく、めでたくかしこ、宮城野さま参る。御存じ。

ト讀み、悔りして

ヤア、この手は佐五平。

佐五 ヤア。

磯崎 サア、それぢやに依つて、どうも娘宮城野が供には、やれぬわいの。

りき 御尤もでござりまする。

トつかくくと、佐五平が側へ行き

然な不斯存者め。

ト首筋を取つて、引きつける。

佐五 此奴、おれをなんとする。

りき オ、いつそぶち切つてしまふわいの。

ト佐五平が脇差に手をかけ、抜かうとするを押しへて

佐五 コリヤ、待て。それには云ひ譯があるわいの。

りき サア、その云ひ譯、聞きませう。

佐五 オ、今爰で明りを立て、見せう。待つて居れ。

ト右の駄を捧り、橋が、りへ行かうとする。頭陀八、

佐五平を突き廻して、向うへ立ち寄がり

頭陀 佐五平、さう云うて抜けるのか。その手はさゝぬは

い。

佐五 オ、頭陀八、われに逢ひたかつた。コリヤ。

ト手を取つて、向うへ連れ行き

この間部屋で云ふには、さる所の娘に遣る文だ。知つてゐる通り、おりや無筆だゆゑ、どうぞわれを頼むと云うて、コレ、この状を認めてやつたぞよ。その時この先の名宛は、なんと書かうと尋ねたら、ツイさま参る、御存じとばかり書いてくれいと云うたに依つて、その通り認めてやつたが、今見れば、宮城野さま参ると書いてあるが、無筆の貴様が、よもや書きもせまい。誰れに書いてもらうた。マア第一、この状で佐五平が疑ひ受けた。サア、貴様が頼んだ様子を、そこへ出て云ひ譯せい。サア、早う〜。

ト急いで云ふ。

頭陀 コリヤ〜佐五平、そりや何を云ふのぢや。なんの事ぢやぞいやい。

佐五 ハテ知れた事、おのれが頼んだこの状の云ひ譯を。

頭陀 イ、ヤ知らぬ、頼んだ覚えはない。

佐五 ヤ。

頭陀 どこにわれを頼んだ。あの、まさ〜しい顔わいの。

ト空惚ける。佐五平、氣をいらち

佐五 ムウ、そんならこの状、頼んで置きたながら、わりや知らぬか。

頭陀 オ、知らぬ、微塵も覚えはない。エ、聞えた。こりや何か。貴様が云ひ譯なさに、何にも知らぬおれに熱灰かけるか。マア、さうはなるまい。こな、鼻垂れめが。

佐五 ムウ。現在うぬ、兩手を摺つて頼みながら、今さら、空惚けすると云うて、ささうかいやい。

頭陀 そんなら又、おれが頼んだと云ふ、なんぞ慥かな證據があるか。

佐五 ヤア。

頭陀 サア、證據があれば出せ。

佐五 その證據は。

頭陀 あるか。

佐五 サア

兩人 サア〜

頭陀 證據もないに云ひかけひろく、こな盗人め。

ト佐五平が首筋取つて、ひしぎつけるを、お力、ツカツカと行き、頭陀八をなんの苦もなく掴んで地る。

頭陀 アイタ、、、。ヤイ盗人め、コリヤ、何をさらすぢや。

りき こりやなんぢや。わしがこなさんの云ふ事聞かぬに依つて、それで佐五平どのを罪に落すのぢやなア。



頭陀 さりととは妙不思議稀有けれ、つな事を云ひ出した。何をうぬに云ひかけた。

りき ハテ、藤へ廻つては、コレお力どん、聞けば佐五平は三年が間願かけて、女房持つたと云ふばかりで、肝心の事はまだぢやげな。定めてこなさん不自出にあらうなんのと、内證でおれが云ふ事聞いて下さんせぬかと、アタ嫌らしい事の有様云うて、間がな隙がな口説いたぢやないかいなう。

頭陀 誰れがいの。

りき こなたが。

頭陀 てもマア、ぬけくと、そんな事がよう云はる、なア。

りき 又それも悔けるのか。

頭陀 おのれを口説いたと云ふ證據があるか。

りき 證據は、こなたの胸に覚えがござらう。

頭陀 イ、ヤ知らぬ。證據を出せ。

りき サア、その證據は、

頭陀 ないか。

りき サア。

頭陀 證據もないに、同じやうに云ひかけひろく女郎めが。

ト躑躅飛ばす。お力、佐五平、兩方より氣色する。

なんぢや〜。二人とも、無念なら證據を出せ。證據がなけりや、宮城野さまに不義しかけたは貴様ぢや〜。

サア、グツとでも吐かして見され。よもや返答はあるまいがな。申し奥様、此やうな不義者と云ひ、人に云ひかけひろく女郎めを、供に附けておやりなさると、宮城野さまが大抵、御難儀なされます事ぢやござりませぬ。忠義一途のこの頭陀八を、おやりなされて下さりませうならば、おのれ志賀臺七、例へ何方に隠れ居るとも、尋ね出して、本望遂げさせませう間、下郎めをお供に召し連れ下さりませうならば、如何ばかりか喜ばしう存じまする。

兵部 ハテ、下様には惜しき忠義の者。コリヤヤイ、頭陀八とやら、身が目通りへ、ズツと參れ〜。

頭陀 ネイ〜。

トよき所へ行き、下に居る。

兵部 ハテ、其方は忠義な者ぢやわい。其方がやうな者は、殿様へ吹擧申さば、天晴れ御用に立ちさうな者。某が執成しを以て、殿の御家人となしくれり。

頭陀 エ、。

ト悔り。

兵部 先づ武士に取立て

頭陀 エ、

兵部 衣服、大小を拜領させ

頭陀 エ、

兵部 知行は如何程がよからうぞ。オ、それ、先づ

殿のお墨附を頂戴させり。

頭陀 エ、

ト兵部之輔、側にある硯を引寄せ、筆紙を取つて

兵部 先づ知行は、この位がよからうかい。

ト云ひ、認める。頭陀八、喜ぶこなし。

殿のお墨附、筆者は即ち宇治兵部之輔。

ト云ひ、認めて

頭陀八、有り難く頂戴いたせ。

ト頭陀八、墨附を取つて

頭陀 サア、えらいぞ。思ひも寄らぬ立身出世。

これと云ふも、あなた様のお執成し、エ、有り難い。

ト戴き見て

こりやなんぢや。この頭陀八と申す下郎、主に不義放埒の科に依つて、縛り首にも致すべきものなり。アタ忌々

しい。この頭陀八、不義放埒の覺えがない。宇治兵部之輔、なんで身共を馬鹿にひろぐのだ。

ト書き物を打ちつけ、詰めかける。

兵部 わりや無筆でないか。

頭陀 ヤア。

兵部 無筆で好く物を讀むとは、おのれ、紛れ者に極まつ

た。

頭陀 サアそれは。

兵部 無筆となつて入込みしには、仔細なくては叶はぬ。

その艶書これへ。

トお力、ツカくと、兵部之輔の方へ持ち行く、艶書の

の名宛を見て

さてこそ艶書の文言は、佐五平に認めさせて、宮城野と

書いた名宛は、うぬが手跡であらうがな。

頭陀 イ、ヤ、覺えはない。

兵部 最早陳しても、陳じさせぬ七草が殘黨。

頭陀 何がなんと。

兵部 コレこの宮城野と書いた筆勢、日本の流儀によく

似せられたれども、この筆法は、唐土呂洞賓が筆立て。この流儀を學ぶ者は、七草方にて、山形宇右衛門ならで外に

ない。なんと動きは取れまいがな。

頭陀 エ、残念な。年來仕込みし我が大望、よくもうぬ、見届はしたよなア。

兵部 オ、十能六藝に達した宇治兵部之輔、かゝる事を存せぬと思ふか。うろたへ者め。七草の殘藪、山形宇右衛門であらうがな。

頭陀 サアそれは。

兵部 但し拷問にかけうか。

頭陀 サア

兩人 サアくくく。

兵部 なんと。

頭陀 エ、もう破れかぶれぢや。

ト抜いて、兵部へ切つてかゝる。兵部、持つたる鐵扇にて、頭陀八が技身を叩き落し、また來る所を扇にて、肩間を打つ。頭陀八、肩間を打ち割られ、兩手にて頭をか抱へる。この時、大學、刀を抜いて、兵部へ切つてかゝるを、身をかほし、大學が利腕の脇所をしつかと捕へ

兵部 こりや、なんとなさるゝ。

大學 イヤ、これは。オ、今日より當家の師範となる宇

治兵部之輔。手續の程を試みん爲。

兵部 すりや、拙者が手の内を、御覽なされんとあつて

大學 如何にも。

兵部 ハテナア。

ト大學が利腕を取りながら、人相を見るこなし。

大學 コリヤく兵部之輔。手の内見えた。爰放せ。放さぬか。

ぬか。

トきつと云ふ。兵部、大學が人相をキツと見て

兵部 面中、その如く、天帝角立ち、眼中鋭く、烏晴漆を黠じ、しかもきどくつ。蜀の魏延が相に同じ。

ト突き放す。

大學 ヤ、なんと。

兵部 十能六藝に鍛練したる某、殊さら相術を胸に納め、

一度面を見るが否や、胸中を指す事割符を合すが如く、

こなたの心底。

ト大學、ぎつくりとなる。

云はぬぞや。申さぬぞや。この以後、本心を改めさつしやれ。

大學 イ、ヤ覺えない。今日やうく目見得の其方。お家の伯父たる大學に向つて、過言の一言。腮骨切つて切り

さげてくれう。

ト切つてかゝるを、よろしく留めて

兵部 すりや、如何やうに申しても。

大學 詞が過ぎる。慮外な奴の。

ト振りほどいて、又かゝるを留めて

兵部 五十四郡を押領せんと、鎮守府の印を盗み取つた盜

賊。

大學 それ知つたら。

トまた切つて行くを、刀を叩き落し、二重舞臺より下

へ、取つて投げる。また来る所を當てる。大學ウンと

なつて、タヂ／＼と後ずさりして、下に居る。兵部、

二重舞臺に立派に座る。

兵部 ソレ谷五郎、彼奴が懐中、吟味いたせ。

谷五 ハツ。

トつか／＼と寄つて、大學が懐中へ、手を突ツ込み、

立ち廻りあつて、鎮守府の印を引き出す。

さてこそ鎮守府の御判。

トつか／＼と兵部方へ持つて行く。兵部取つて見て

兵部 ドレ。こりや似せ物。

谷五 ナニ、似せ物とな。

大學 すりや、某に盗み取つて渡せし臺七めが所爲。やみ

やみと騙かられたか。エ、無念やなア。

市之 さては臺七と云ひ汝まで。國に弓引く人外め。

ト刀押取り、大學方へ行かうとするを、兵部之輔、刀

の鐙を留めて

兵部 申さば御連枝の御仲。

市之 ぢやと云うて。

兵部 此ま、直ぐに押籠め、隠居仰せつけられ、然るべう

存じまする。

市之 この上は、七草が殘黨を拷問させ、邪法の鏡を。

兵部 イヤ、その鏡は、邪宗門の棟梁ならで所持いたすま

い。彼れらは枝葉。矢張り此ま。

谷五 差し當る御判の盜賊は兄臺七。

兵部 浪人いたしたるを幸ひ、この場を立退き、臺七に便

り、御判を取返し、その上にて宮城野に敵討ち。

谷五 すりや御判の詮議を拙者に。

兵部 臺七が濁りし性根に引替へ、義心は朽ちても朽ちぬ

金の文字を取つて、金江半兵衛と改名して、宇治兵部之

輔が腹心の家來となつて、御判の詮議。

谷五 エ、忝ない。名も改むれば宮城野どの、縁組みも



又改めて頼みの印。

ト刀を取つて、差出し

谷五郎が爲にも男の敵なれども、討つ事ならぬ義理ある兄弟。この刀を以て敵臺七を討たば、谷五郎も共に本望遂げしも同然。肌身を離さず大事に召され。

ト宮城野に刀を渡す。

宮城 そんなら、お前は

谷五 實の詮議は身が役目。

磯崎 娘が身の上、頼みの印を納むれば、また此方からも

罪どのへ。

ト宮城野が持つたる刀を抜いて、振り袖の兩袖を切り

取つて刀を納め

姫御前は、祝言の杯濟めば、振り袖を留めるが習ひ。其方の兩袖切つたは、罪どのへ末來までも、變らぬ夫婦の誓引出のこの兩袖。めでたり納めてやつて下さりませ。

ト谷五郎へ渡す。

谷五 お志しの誓引出、體かに受納仕つた。

佐五 ハア、千秋萬歳、かゝるめでたい敵討ちの門出。

いよ／＼下郎も御供に。

磯崎 イヤ、酒に心の亂るゝ共方、どうも供は。

りき アイヤ、佐五平どのには、私しが引添ひまして、も

しもの事がござりましたら、例へ夫でも。

磯崎 出かしたお力。

兵部 兩人ともに供を許した。

佐五 エ、忝ない。

磯崎 急いで出立。

皆々 おさらば。

大頭 エ、思へば。

ト大學、二重舞臺へ切つて登る。兵部之輔と立廻りにて、止める。頭陀八も、行かうとするを、谷五郎、引退ける。頭陀八、谷五郎にかゝるを、宮城野、あせつて、右の刀を抜き、頭陀八をボンと切つて胸りし、谷五郎にしがみつく。磯崎、佐五平、お力、この體を見て、三人こなし。

佐五 出來た。

兵部 天暗れ手の内。

ト大學を突き退け、扇を開く。

大學 ウン。

兵部 見事。

ト大學、また來るを止めて、扇にて、宮城野を煽ぐ。

なし。

よろしく幕

## 三つ目

岡崎大福屋の場  
矢矧の橋の場

役名——大福屋宗六。同妾、お倉。おじやれ、おなま。同、お露。同、お糸。同、お松。同、小よし。實ハ宮城野妹信夫。飛脚、早助。實ハ安達丈助。按摩、三九。實ハ津輕官兵衛。藤田軍吉。高倉曾平。福原新吉。入間の與茂吉。野々宮宮内。早瀬九平次。岩瀬伴藏。若黨、佐五平。同女房、お力。甚内娘、宮城野。志賀臺七。楠原普傳。

造り物、三間の間、通りの二重舞臺、端近く突き出し、向う見附、一面に中格子、旅宿屋店の間の體、欄間に富士詣での箱札、山上講、伊勢講の札、又は、ぶら／＼の手拭印、江戸芝居の番附など一面に貼りすべて、道中宿屋の通りにあるべし。この店先にて藤田軍吉、高倉曾平、福原新吉、三人とも越後獅子

## 丈助

にて、鞆鼓、錫杖を持ち、舞うてゐる。笛吹き、太鼓打ち、唄ひ居る。信夫、お糸、お露、お松、おりく、皆々おじやれにて、擧つて見てゐる。この後におなま、これもおじやれにて、白粉をこて程塗り、片肌を脱ぎかけ、身仕舞ひをした體にて、立ち身にて丸鏡を持ち、これに越後獅子を寫して見てゐる。権兵衛、次郎作、順禮の形。その外、旅人大勢、宿引きの男、料理人、丁稚、飯炊、思ひ／＼の形にて、重なつて見てゐる。在郷唄の中へ獅子の曲太鼓を入れて幕明け。三人、唄、鳴り物に合せ、中返り、杉立ち、手這ひ、祕術を誑して、いろ／＼あるべし。見物の人數は變めたり、いろ／＼捨ぜりふあり、段ありてとまる。ト皆々、ヨウ／＼と褒める。男、盆に米と十二瀬を載せ遣る。見物皆々、もう一曲所望ちやと、口々に云ふゆゑ、また鳴り物に合せ、獅子を舞ふ。此うち、よき程に向うより丈助飛脚の拵らへにて、脚絆、胸當、三度笠、刀の鞘に紙包み、狀箱を付けてかたげ、エイサツサクと掛け聲にて、走り出て、花道にて。

これが岡崎の大福屋だ。

ト云ひ／＼、本舞臺へ来て  
 旅籠はいくらだ。風呂は随分、熱いがよい。蒲團も餘計  
 貸してくりやれ。

ト云ひ／＼草鞋を脱ぎ上がる。獅子、これに構はず舞  
 うてゐる。丈助、腹立て、あへかへし  
 ヤア、誠後獅子、おけろ／＼。おれにばかり口を叩かせ  
 て、相手にならないか。泊り客をせないか。どうひろく  
 のだ。

トヤかましう喚く。これにて獅子止む。

まつ ほんに、誠後獅子にかゝつて、氣が付きませなんだ  
 わいなア。

りき お泊りさんかえ。

丈助 オ、サ、おら一人だに依つて、どつこでも大事な  
 ワ。ヤレ／＼、草臥れた／＼。

なま 申し、草臥れてなら、足撫りに行くぞえ。

丈助 ヤア、ちぬが顔でも客を勤めるか。

なま サ、あのお方わいな。日の内こそおじやれなれ、  
 夜に入ると、君領域ぢやないか。

丈助 領域が呆れてけつかるわい。

トこの時獅子舞ひの被り物を取り、この時、丈助と顔

見合せ

獅三 ヤア、貴殿は。

丈助 さう云ふお身達は。

三人 ハテ、思ひがけない。

丈助 イヤ／＼、コレ／＼、近付きでないぞ／＼。

ト差合ひがあると、教へる事ありて

身は、上下往來の飛脚。幸ひ誠後獅子を揚げにして、今  
 夜の座敷を取持たさう。身が座敷へ參れ／＼。

三人 それは忝ない。

願皆 こりや面白からう。

いと 申し、この所の習ひで、女中をお呼びなされんと、

夜具を上げませぬぞえ。

丈助 なんだ、女郎を買はないと、蒲團を寄越さないか。

女皆 さうぢやわいな。

丈助 それは迷惑な。

ト云ふうち、信夫を見て

よいワ／＼。身共は、この君に致すべし。

ト信夫に寄り添ふ。信夫振り切り

信夫 なんのめり申す。おらは否だア。

ト仙臺訛りにて云ふ。

丈助 さう掘ねる所が命だわい。

トまた寄るを、おなま、引き退け

なま 勝手からの注文ぢや。嫌はれては、一分が立たぬ。

アイ、立たぬ〜。立て、下さんせ、お飛脚さん。

丈助 ろぬがいけるものかい。

女皆 サア、奥へござんせいなア。

丈助 サア、皆一緒に行くべい。

皆々 サア、ござれ〜。

トこの人数、残らず、ワヤ〜、捨てりふにて、奥へ入る。ト面白き田舎唄になる。と向うより大福屋女房お倉、江戸仕立ての姿の持ちへ、帽子、抱へ帯、野駈けの戻りの體。下女二人、手籠に、摘草の入りしを持ち、後よりお力、參宮の體、着附けに浴衣を引ツ張り、薬巻の一腕を呑負ひ、菅笠を持つて、附き出る。花道にて

くら わつちが所は爰だわえ。お客さん、早く來なせえ。

ト吉原詞にて云ふ。

りき お宿は、大福屋と申しますかえ。

くら アイサ、お前は一人旅だとね。わつちは今日、主と

連れ立つて、野駈けに行きやんして歸りがけに、お前が

泊めてくれると仰しやるに依つてね、御案内を申しやんす。

りき お聞き下さりませ。自體、一兩人連れもござりまし

たれど、富士川の渡しより間違ひまして、その連れ衆に

はぐれたのでござりまする。シタガ、岡崎の大福屋で、

宿を取らうと申し合して参りましたれば、大方尋ねて参

らるゝでござりませう。

くら それは幸ひだ。マア〜來なんし。

ト始終、右の田舎唄にて、本舞臺へ來て、この時、お

じやれ皆々、出て

皆々 お倉さん、お歸りなされたかえ。

くら 摘草をしたので、とんと遅くなつたわいなう。

いと あなたはお泊りでござりますかえ。

くら お連れもあるさうな。綺麗な座敷へ通しましや。

まつ 表座敷がようござりませう。

トお力、草鞋を脱いで上がり

りき 連れ衆が尋ねて見えます程に、この笠を表に吊し

て置いて下さんせ。

つゆ アイノ、合點でござんす。

ト菅笠を持つて、表の方へ走り行く。



りき 斯う参りませうかな。  
くら サア、お出でなんし。

トお力を連れ、お倉、入る。所へ橋が、りよりおなま、案内して、野々宮宮内、早瀬九平太、岩瀬伴藏、旅羽、野添、大小、三度笠を持ち出る。

なま 申し、お先觸れのあつたお泊りでござりますぞえ。

いと 直ぐに奥へ通しましたがよいわいの。

宮内 其方が主人か。今朝相觸れし通り、主人は京都絨小路家、仔細あつて、お徳行の道中。それゆる相宿をおいとひなさる。別座敷をしつらひ置いたか。

いと ハイ、奥の離れ座敷を明けさせて置きました。直ぐにお通りなさせい。  
伴九 然らば、お乗り物。

ト呼ぶ。橋が、りより、旅羽織、黒股引きの侍ひ、乗り物を手前きにして、後より繪袴の付いた駄荷を二神、各々同體の侍ひにて、手奥にて出る。その間に、おじやれも出てゐる。

宮内 直さま離れ座敷へ、皆々御案内申ませう。

ト乗り物と荷物に、おじやれ附いて入る。橋が、りより同體の侍ひ二人。與茂吉、旅の形、これを二人して引ッ立て出る。おじやれ皆々直ぐに出る。

侍ひ 何れも、童めを引ッ立て、参つた。

いと 申し、お前方は、あの若いのを、どうなさるのぢやぞいな。

宮内 イヤ、彼奴は、御主人のお乗り物先を道切りした狼藉者。

九平 主人の御意に依つて、引ッ立て参つた。

伴藏 其奴、縛し上げて、引揃ゑ召され。

ト皆々、反り打つ。

與茂 ア、コレ、お前も聞分けのよい人ぢやわいの。先刻にから不調法はせぬ。あやまりはせぬ程に、料簡すなど、あやまつては居ぬぞえ。

侍三 まだ、櫓い奴め。

ト反り打つ。

いと コレ、あの子、ちやつと詫び言をしたがよいわいの。

與茂 イヤ、あやまらぬ。あやまりはせぬぞ。

侍皆 あやまらずば。

ト與茂吉を、五人の中へ取圍んで

いつそ。

ト一時に、柄に手をかける。向う戸屋の内より

宗六 待つた。大福屋宗六、そこへ行て挨拶をしやんせう  
わい。

侍ひ なんと。

ト江戸深川の騒ぎ唄になり、向うより、亭主宗六、吉原大通の梅らへ、野駈けの戻りの體にて、男一人、毛氈をかたげ、手提げを持ち、この後より、玉川三九、盲目按摩の坊主にて、木綿やつし、鈴の附いた杖を突き出る。

三九 旦那々々、後から呼びかけるのに、聞かぬ顔とは、  
どうでござりまする。

宗六 オ、三九、呼ぶやうに思うたが、貴様であつたか。

三九 今日ほ妾宅を伴なうて、お樂しみぢやな。

宗六 何を云ふやら。シタガ、貴様は商賣に精を出すな。

三九 お前、按摩をせにや、食へませぬわいの。

宗六 しゆんだ奴ぢや。此方へ來て一杯飲め。

三九 こいつは有り難いわい。

宗六 サア、來い。

ト本舞臺へ來て、宗六、上へ通る。

宮内 ムウ、亭主宗六、

九平 道切りした童め。

伴藏 糺明いたすを

侍皆 なぜ止めた。

宗六 委細はあれから承りましたが、道中筋で斯やうな事は、まゝある事でございます。只今、あの若い者が、あやまりはせぬ、料簡すなと云ひまするは、ありや入間  
詞でござりまする。コレ、貴様は、入間者であらうが  
の。

與茂 お前は、目推量の悪い人ぢや。成る程、おりや入間者ではござんせぬ。

宗六 お聞きなされませ。皆、詞の裏でござりまする。

宮内 例へ何者にもせよ、お乗り物先へ無禮いたしました

九件 童めなれば

宗六 預かりませう。

三人 なんと。

宗六 ハテ、亭主の私しが預かつて、道切り致した申し譯をさせます。但し、成敗をさせませうか。どちらへなりとも差引をつけませう。あなた方はマア、奥へござつ

て、風呂へづぶ入り、茶漬をがさく。酒をぐい呑みにして、お休みなされませ。

九平 然らば亭主。

伴藏 しつかりと預けたぞ。

宗六 入間も奥へ行て、休めく。

侍三 我れくも奥へ。

宗六 マア、ござりませ。

ト江戸騒ぎになり、侍ひ、皆々奥へ入る。宗六、口の

間へ入る。此うちおじやれ皆々、鏡臺を持つて出て並

べ、身仕舞ひにかゝる。暮れ六ツの鐘鳴る。

宗六 アレ、入相を打つぞよ。皆、身仕舞ひが出来たら、

お客の座敷へ出てもらはうぞ。

女背 アイノ、ドリヤ、拵らへようか。

ト清掻になり、皆々、前垂れ外し、田舎模様の襦袢を

着る。奥よりお倉、内儀の形になり、箕盆提げて出て

くら 主え。皆侍ひだに、聲山を立て、達引も置きなん

したがよい。

宗六 あゝ云はんと、跡でいざござのあつた時は、おれが

迷惑だよ。

三九 ア、イカサマナア。所の習ひとて、吉田でも岡崎

でも、晝は出女、夜は女郎。取分けてこの岡崎は、惣體の美目がよいげな。それなればこそ、唄にも諷ふぢやないか。

ト内にて、三味線。三九、これに合せ、手拍子打つて

三九 岡崎女郎衆々々々々、岡崎女郎衆は好い女郎ぢや、

ハ、ハ、ハ、ハ、

ト諷うて笑ふ。此うちに皆々、粧うて正面向き、立ち

姿になり、並ぶ。

宗六 倉よ、見い。あゝした所は、吉原の中三にも負けぬ

ぞよ。

くら アイノ、さうだわな。

ト苺のみながら、フト見る。

いと ほんに、おじやれの身には何がなる。晝は一日旅人

を泊め女。

まつ 夜に入ると枕の伽。

つゆ 一夜流れの儂ない勤め。

なま ハテ、苦は色替ゆる、濱の松風ぢやわいな。

三九 さう出た君達の御器量が、エ、見たいたく。

ト手をもぢり、して云ふ。

宗六 ハテ、いづくの浦でも、勤めと云ふ字は二つはない。

おじやれ變じて松の位。

いと 晝のお糸は夜の賤機。

まつ お松は雛鶴。

つゆ お露は道菜。

なつ お夏は瓜生野。

なま おなまは倉橋。

三九 ガツと揃うた傾城造。

いと 仇な枕に今霄も又

露松 辛氣な座敷を

皆々 勤めうわいな。

宗六 エ、迷懷を云はずと、みな座敷へ出て、客衆にオ

オ可愛と、抱きつかうぞや。倉よ、われも野騙けで草臥

れたであらう。その草臥れた所が付け目だ。

くら ナニ、つがもねえ。

宗六 エ、有り難い。ハ、ハ、ハ。サア皆、奥へずい行き行

き。  
ト江戸騒ぎになり、宗六、お倉を連れて、この人数、  
皆々入る。

店先きの道具、左右へ引き分ける。奥深に取放した

る大座敷の體。間毎に衝立にて仕切り、上の座敷に

丈助、髪結ひに、髭を剃らせる。獅子舞ひ三人、

膳に座り、飯を食つてゐる。丈助の側におなま、相

方の心にて座りゐる。錢屋、錢を賣つてゐる。次の

間に、宮内、九平太、伴藏、酒呑みゐる。お露、お

松、お夏、相方の心にて、酌してゐる。馬方、空尻

の相對してゐる。次の間に順禮二人、その外旅人、

側に小間物屋、せり箱を廣げ、土産物を賣つてゐる。

間毎々々に、宿屋の行燈をともし、すべて、旅籠宿

の忙しき、賑やかなる景色。襦やうの合ひ方にて道

具納まる。

宮内 吉田までの通しぢや。なんぼでやるぞ。

馬士 空尻なら五百お遣りなされませ。

右京 それは高い。

ト髪結ひ、丈助を結うて下へ行く。

旅人 ちよつと、撫でつけてもらはう。

髪結 ハイ〜。

ト三九、押り出て

三九 どなたも按摩ようござい。  
ト旅人、按摩買はうと云ふ。三九、ハイ〜と採む。



三九 二朱になんぼ賣る。  
錢屋 七百二十あげます。

飛脚 前の宿では、七百二十六文賣つたぞよ。

トばやき／＼、二朱とこま金を出す。錢屋、算盤を置き、秤にて、金をかける。三九、ちよつとばかり採んで金を取り

三九 按摩ようござい。

トこちらへ来て九平太、按摩買はうと云ふ。又採む。

旅人 この象牙と木櫛とで、なんぼぢや。

小間 八十四文でござりまする。

旅人 この貰入れは、なんぼぢや。

小間 一匁八分でござりまする。

旅人 百にせい／＼。

馬士 乗つて下さりまするか。

伴藏 酒手ぐるめに三百五十くれるワ。拵らへい／＼。

馬士 そんなら拵らへます。

ト橋が／＼入る。髪結び又、外の者を結ふ。錢屋、大助に錢を渡し

錢屋 錢はようござい。

ト財布をかたげ、こちらへ来る。次郎作と權兵衛は、

委細辨はず、順禮の詠歌となへてゐる。右の模様、銘銘の思ひつきにて、いろ／＼あるべし。程よく錢屋去ぬる。髪結び小間物屋も入る。

まつ 三九さん、一曲聞きたいわいな。

三九 なんでもぢやが、御視儀が出来ますかな。

九平 三味線を弾くか。よい／＼。祝儀をくれう。ドリヤ

ドリヤ。

ト錢を出して、三九に渡す。

三九 ヤア、二朱權現の花盛り。さらば一曲、お聞かせ

申さうか。

皆々 所望ぢや／＼。

ト三味線持つて向うへ出て

三九 さてお客様のお望みに依りまして、玉川三九、國太

夫節を差上げまする。

皆々 よからう／＼。

ト寄りこそつて聞く。三九、國太夫を語る。文句の切れに皆々、ヨウ／＼と褒める。三九、その後ば、出たために弾いてゐる。

宮内 草臥れが參つた。臥りませうかい。

なま 申し、抱きなざるゝと、この通りぢやわいな。

ト蒲團を丈助にやる。

獅三 えらう見せつけるなア。

順皆 サア、寐よろしく。

ト口々に云うて、銘々、相方のあるは善き蒲團を取る。その外は丸寝にする。所々へ屏風を立てる。三九、始終、弾いてゐる。

三九 モシ、添乳にお聞きなされませぬか。エ、。

ト云ひ、又何にても、得たる事を弾く。此うち皆々、軀をかいたり、寝言を云うたりする。三九、飄ひながら、旅人の寝息を窺ふこなし。三味線をいつともなく凄う弾きかける。トこれをキツカケ、内にて凄き合ひ方になり、好き程に三九、ばつちりと目を明き、あたりを見て、また盲目の體にて、三味線弾きながら、旅人の寝所を窺ひ、段々、金を盗んで廻る。それより探り持つて、上の方へ行く。丈助の懐へ手を入れる。丈助、その手を取つて、キツとめめる。双方、氣味合ひのこなしあつて、この見得にて、兩人向うへ出る。

丈助 津輕官兵衛どの。

ト三九、目を明き

三九 安達丈助どの。

ト新吾、軍吾、曾平も、そろそろ起きて来て

三人 我れも爰に

三九 ハテナア。

丈助 本國出發の後は、行く先は別れ、當時身共は、駿州栗島の御家老、楠原普傳さまに奉公。主人御代參の歸るさ、今香池鯉鮒の宿にお泊り。即ち志賀臺七どのへ。

トこなしあつて

イヤ、この儀はゆるくと申さう。

三九 身共は、先達ての路用を遣ひなくして詮方なく、假せ盲目となつて、宿屋々々を徘徊いたし、按摩から取入つて、旅人の油斷を窺ひ、枕探しを致し居る。御覽下さい。今夜もこれ一つにして凡そ百兩。

ト金を見せる。

軍吾 天晴れお手際でござる。身共は左やうな事は不器用

ながら、斯く越後獅子の身過ぎ。

曾平 馬に乗つた我れが、獅子になるも、過去の約束

でがなござらう。

新吾 なんと、官兵衛どのを師匠に致して、ちと小盗みな

りと習ひませうかい。

三人 ハ、、、。

三九 コレサ／＼、旅人の耳が近い。静かに／＼。

丈助 紛失の金を問にして、身共が思案は、コレ。

ト囁く。

三九 ムウ、すりや貴殿の金も紛失と云ひ立て。ムウ、よ

しく。

ト云ふうち宮内、フト目を覺し、枕元の金が無いゆ

ゑ。

宮内 南無三、路銀が紛失した。皆起きいよ／＼。

皆々 ヤア、。

ト皆々起きる。

順皆 おいらも路銀が見えぬぞ。

ト口々にやかましく云ふ。三九、皆々も共に驚るき慌

てる。

伴九 なんでも相客に盗人がある。

順謙 愚後彌子が胡散なぞ。

軍普 なんと吐かすのぢや。

康人 按摩めが合點が行かぬ。

三九 灣相な、知りませんぞ。知りませんぞ。

ト右の臺詞かけ合ひ、やかましく云ひ、無茶になつて  
掴み合ひ、いろ／＼あつて揉み合ひ、皆々、奥へ入る。

ト三九、其まゝ、引返し出て

三九 知らんぞ／＼。おれは知らんのぢやぞ。

トこなしあり、鼻唄にて

知らず知られぬ仲ならば、浮かれまいもの、さりとして

は。

ト諷ひ／＼、そこにある飯櫃の中へ、金を隠す。矢張

り鼻唄にて

其方の世話になりふりも、我が身の末のはなれ駒。

ト諷ひさし、こなしあつて

などとけつかるわい。ハ、、、。ドリヤ、奥へ行かう

か。

ト探り／＼、奥へ入る。ト踊り太鼓、三味線になり、

チヨン／＼にて、申仕切り一面の障子引立てる。ト鳴

り物止んで、合ひ方になり、奥より與茂吉、出て

與茂 アタ腹の立たぬ。今日のやうに無實を受けなんだ事

はない。そりやさうと、晝飯のまゝで腹がげつそりと減

らん。所で用意の握飯を出しかけまい。

ト懐中より、竹の皮の包みし握飯を出して喰ふ事あ

り。

旨うないワ〜。空腹うないに依つて、旨うもない。

ト旨さうにして喰ふ。所へ奥より信夫、座敷へ火鉢を持って行く體にて出て、與茂吉を見て

信夫 こな和郎は、何をしてゐめすさア。

ト云ひ〜、火鉢をそこに置く、この時、顔見合せ、憫りして。

與茂 ヤア、信夫さまか。

信夫 もしやア與茂吉でないか。

與茂 オ、信夫さまぢやない。ハア。

ト驚き、握飯を、咽喉に詰め、衛ながる。信夫、春さすり介抱して

信夫 コレサア、氣をお附きやり申せ〜。

ト與茂吉、胸を撫で下ろし、やう〜に氣を附け

與茂 ヤレ〜、あんまり思ひがけあつたに依つて、すん

での事、握飯と心中しよまいとした。信夫さま、お前が

爰に居やんせぬとは、うろたへた神様も御存じある事ぢ

や。マア〜、好い所で逢はなんだなう。

ト信夫ちよつと泣く。

信夫 うんどもが奉公に出よつた路で、がアまが死にまり

申し、だマアも切られ申したと、人の噂に聞き申したわサア。わらしは、あぜ来やり申した。不思議に逢つて、たまげ申すわサア。

ト泣く〜云ふ。與茂吉も泣いて

與茂 オ、道理ぢやない〜。去年の春でもない。國屋敷でもない所で、父御甚内さまに初めて逢はず、その日殺されて、死にさつしやれなんだ。この事をお前に知らすまいと思つて、行くへを尋ねずに、うか〜東海道の方を來なんだれば、殿様のお通りの道を切らなんだと云うて、ゑらい目に遭ひもせず、爰の旦那が預かりもせず、世話にもならず、それで爰に居ぬのぢやわいなう。

ト信夫、あたりを見て、少し寄り添ひ

信夫 行く末和郎と女夫にするとサア、母様の常々に、お

申しやり申したわサア。

ト膝へもたれかゝる。與茂吉、引き退け

與茂 おりや、そんな事は恥かしうござんせぬ。否ではござぬ。否ぢやない〜。

せぬ。否ぢやない〜。

信夫 ハテ、なじびを嫌ひ申すか。そのぐだまが心にめぐ

いわサア。



トまた抱きつく。

與茂 エ、とつと思や、恥かしくないわいの。

信夫 わらしは嫌やり申すか。

與茂 なんのいの。眞實にいとしうごんせぬ。

信夫 それならば、なじび申すか。

與茂 せう事がない。女夫になるまい。

信夫 赤腹は垂れ申さぬか。

與茂 ムウ、ほんまぢやないく。

信夫 興茂吉。

與茂 信夫さま。

信夫 めごいわいなう。

ト取りつく。

與茂 ねつからいとしうはごんせぬ。

ト同じく、取りつく。この時、大助、軍吉、三九も探り

出て

大助 コリヤ、動きあがんな。宵から金の見えんのは、奴

が働らいたのだな。

與茂 コレく、おりや胡散な者ぢや。オ、胡散な者ぢ

やぞ。

軍吉 胡散なと吐かす。踏みのめせく。

ト皆々、立ちかゝつて、打擲する。信夫、止めるを、

三九、探り寄つて引き退け、同じく與茂吉を踏みつけ

る。この時、宗六、膳を持ち出て、この體を見て、膳を

側へ置き、ズツと行て大助、軍吉を取つて投げる。三

九、寄るを、握り拳にて隠る。信夫、與茂吉を介抱す

る。大助、起きて

大助 アイタ、。ても酷い目に遭はせ居つた。

三九 けれど、目の玉がなければこそ。あつて見たがよい、

忽ち飛び梅の名號ぢや。

ト大助、宗六が側へ行て

大助 お主がこの家の亭主、大福屋宗六だ。

宗六 アイ、宗六はわしでござります。

ト煙草盆、持つて座る。

大助 ムウ、宗六見知つた、よい男だ。江戸吉原の大通と

云ふ事は、六十六ヶ國に隠れがない。その大通たる宗六

が、盗人の宿をするか。イヤサ、旅人の金を盗ませうて

とするのか。盗賊の同類か。

宗六 コレく、こな奴どののは、とつけない事を云ふお

人ぢや。して、誰れが金を盗みましたな。

三九 そこにござるお飛脚どのを始め、大勢の泊り人の金

を盗んだ、その盗人と云ふは。

宗六 やかましい。貴様には間はぬわい。

三九 ハイ〜。

ト後へ寄る。

丈助 大切な御用先の路銀が紛失したわい。

軍吾 おいらが身贖れに共吟味するのぢや。この丁稚めが

胡散なに依つて、それでの打擲

丈助 踏んで踏んで、踏みのめしだがどうした。

宗六 ハテナア。して、あの若い者が、金を盗んだと云ふ

には、證據でもござりませうか。

三九 證據と云ふは玉川三九、私しでござりまするぢや。

目こそ見えね、こんな事を嗅いで廻るが、わしが役目ぢ

やに依つて

宗六 また差出るかい。

三九 ハイ〜。

ト引ッ込む。

丈助 證據はなけれど、押推に詮議すれば、成る程覚えが

あると吐かす。彼奴が口から覚えがあると白狀ひろいだ

に依つて。

宗六 そこが間違ひ。あれは入間で産れて、入間詞を遣ふ

に依つて、云ふ事が裏腹。覚えがあると云ふは、覚えがないと云ふのサ。

丈助 ムウ。なんと云ふ。入間詞を遣ふに依つて、覚えが

あるとは、覚えがないと云ふのか。

與茂 コレ〜、さうぢやない。さうぢや。

丈助 さうでないとは、矢ッ張り盜賊。

宗六 これはしたり、あれが矢ッ張り入間ぢやわいの。

丈助 あれが入間か。なんだか、どき〜して、とんと解

らぬ。入間でもぬるまでも、盗人に違ひはないわい。

軍吾 オ、さうぢや。引摺つて行て詮議する。うせう。

ト與茂吉を引立てんとする。

宗六 イヤ、さうはなりません。

丈助 ならぬとは、どうしてならぬ。

宗六 堂上方の泊り客に、道切りした狼藉とあつて、明日

の朝まではおれが預かり。外へ手放しては、預かつたお

客へ云ひ譯がない。なんと、左やうなものぢやござりませぬか。

丈助 して、盗まれた金子は。

宗六 詮議して差上げます。ハテ、泊つたお客は十方旦那、

金銀にちちうがあつたら、何百兩でも辨まへて出すが宿

屋の大法。金さへ戻りや、よいぢやござりませぬか。

丈助 ハテ、廣い腹中ぢやなア。

三九 高でその日過ぎの按摩なれば、疑はれまいものでもないぢやに依つて、論議するのぢや。オ、金輪際論議するぞ。

ト宗六、裏の煙を吹きかける。三九、むせぶ事いろいろあり。

出る枕が打たれるぢや。モウ／＼なんにも。

ト淨瑠璃にて

云はぬが云ふにいや勝る、暇乞ひさへ泣き聲に。

ト駒大夫にて、語り／＼後へ下がる。

丈助 おきあがれ、淨瑠璃面白くないぞ。サア亭主、金子の達男はどう付ける。どうだ。

宗六 ハテ、夜明けまでには、譯立てを致しますわい。小よしよ、おりやまだ夜食を食はぬ。その膳を持つて来い。

ト信太、膳を取つて来て、宗六へ握ふる。

人馬との、その飯櫃を取つて来て下んせ。

ト興茂吉、飯櫃を取つて来て、宗六へ渡す。三九、憫りする。

ドリヤ、手盛り仕らうか。

ト飯櫃へかゝる。三九、驚ろき、探り寄つて、宗六に取りつき

三九 ア、コレ／＼、この飯食はす事は、ならぬ／＼。

オ、ならぬ事ぢやぞ。

宗六 妙な事を云ふわい。おれが内で、おれが口で、おれが飯をおれが食ふに、構うておくれな。

ト蓋を明けようとするを留めて

三九 ア、コレ／＼、これは又情ない事ぢや。

ト頭かき／＼、いろ／＼あつて

よい、この飯買はう。

宗六 なんと。

三九 サア、この飯が賣つて欲しいが、なんと賣つて下さりませぬか。

宗六 變つた物を買ひたがるなア。そりやハヤ、食ひかゝつた飯でも、値がよくば賣るまいものでもない、がママ、なんぼ位に買はうと思ふ。

三九 さればなア。旅籠を百二十四文と積つて、この飯一杯を、三百文に買ひませう。

宗六 三百でも五百でも一貫でも、否だよ。

トまた蓋を明けようとする。

三九 サア、そんなら飛んで五貫ぢや。

トまた明けるを止めて

どつこい。一飛びに二十貫ぢや。

トまた明けるを止めて

ムウ。五十貫、でも負けまい。大飛びに百貫ぢや。

宗六 百貫か。よいワ、負けてもやれ。

三九 負かつたか。ア、嬉しや。

ト落ちつく。この間丈助、軍吾、びく／＼して、丈助

三九の側へ行て

丈助 これサ、飯一杯を百貫とは、どうだぞい。

三九 どうの斯うのはない。先刻に働らいた、彼のな。

トあの櫃に盗んだ金が隠してあると呑み込ます。

ぢやに依つて、百貫に買ったのぢや。お前、取替へて下

さりませ。

丈助 成る程、それならば高値に買った筈ぢや。よい

よい、おれが取替へて遣はさう。

ト袋の金を出す。この間に宗六、飯櫃の金を出し、懐

中する。丈助、小判を出して

金子十六兩、大方これでよからう。

ト三九に持たす。

三九 よし。百貫を金に直して十六兩。ソレ、飯の代

ぢや。

宗六 相場に合しては不足なれど、馴染み甲斐にさうもな

るまい。ソレ、飯ぢや。

ト渡す。三九、取つて

三九 馴染み甲斐に、高い飯ぢや。

軍吾 百貫の抵當に縄笠は聞いたが、飯一櫃とは、ハテ高

いものなア。

ト宗六、愛取りし金子を見て、こなしあり。

丈助 なんと按摩、奥で一療治願まうかい。

三九 参りませうとも。

丈助 サア、越後獅子も来やれ。

宗六 三人とも待つた。

丈助 用があるか。

宗六 お飛脚は、何處の屋敷のお飛脚様だなア。

丈助 駿河府中屋敷の家來だ。それがどうした。

宗六 三九から受取つたこの金、この出所もお前様だの。

丈助 如何にもおれが金だ。

宗六 コレ、この金を見れば、一兩々々、高と云ふ字の極



印。こりやコレ奥州高館の御用金、五千兩餘の紛失とあつて、道中の宿々へ配符を以て密かの詮議。府中の屋敷のお飛脚が、高館の御用金は、どうして所持してござりますな。

丈助 サ、その儀は。

宗六 どうでござります。とサア、おれが殿様か庄屋どのならば、詮議する筈もあらうが、町人の身で、兎やかや云ふも野暮のうちかい。サア三九。

三九 左やうともく。金の極印がお氣に入らずば、その金を此方へ。

ト取らうとする。その手を叩きのけ、火鉢の火箸を取つて

宗六 ソレ、金。

ト三九が顔へ突きつける。ヂツと控へて、こなしあり。

三九、わりや目が見えるか。

三九 エ、。

宗六 蛙の面はる按摩でも、この金ばかりは滅多には握むまい。但し握むか。

三九 サア、それはな。

宗六 欲しがる金ぢや。なんで握まぬ。

三九 サア。

宗六 握めやい。

三九 サア。

兩人 サア／＼。

宗六 今夜の花ぢや。辭儀せずと受け取つて置けやい。

ト焼火箸にて、面をくらはす。三九、ぢりぢり舞うて三九 ヤレ人殺しぢや。熱いワ／＼。

ト顔を抱へて、そこら中を駆け歩く。丈助、いろ／＼あつて

丈助 いつそ、うぬ。

ト抜いて切つて行く。軍吾もかゝる。三九、逃げんとするを、與茂吉、立ち塞がつて止める。宗六、軍吾を取つて投げ、丈助を、ボンと當て、又その間に三九、逃げるを宗六、引き戻し取つて押へ

宗六 コリヤ、動きやがるな。小よし、その荒繩を取つて来い。

信夫 オ、／＼。

ト持つて来る。宗六、三九を縛る、所へ侍ひ旅人、皆出て

侍旅 おいらが盗まれた金は。

宗六 皆取返して置きました。盗人は此奴ぢや。引ッ張つて行て、苛なんだ〜。

侍皆 合點ぢや〜。

ト三九、ぼやくを、皆々、大盗人め、うせう〜と捨ぜりふ云うて引ッ立て入る。この間に軍吾、丈助に息を入れ、嘸き、二人とも、ソツと抜けて入る。

宗六 サア、これからは飛脚めぢや。

トそこらを見て

こりや飛脚めも、獅子めも、何處へやらうせた。ても、逃げ足の早い奴等ぢや。

トこの時、橋が、りよりお露、封じ文、持ち、走り出て

つゆ 申し〜、表座敷に泊つてござる女中客、あなたへ上げましてくれいと、このお文を遣はしてござりました。

宗六 なんぢや。表の女子客が状をおこした。ドレ。

ト狀を取る。此うち、お倉、出かけ、見てゐる。宗六、上書きを見て

宗六 さま参る。泊り客より。ハテナア。なんぢや知らぬ

が、後からお返事いたしませうと云へ。

つゆ アイ〜。

ト入る。お倉、こなし。

宗六 誰れぢやといなア。

ト云ひ〜 狀を開き

誠に馴れ〜しき御事ながら、文して御問はせ申上げ参らせ候ふ、我が身事は御存じ遊ばされ候ふ杉印方にて、さ印のつ印にて御座候ふ。

ト讀みさし、合點のゆかぬこなし。お倉、脇より文を

引ッたくり、黙つて讀む。宗六、見て倉、てまへ、いつの間に來た。

くら いま來やんした。

ト宗六を尻目にかけてながら、狀を讀む。

杉印方にて、さ印のつ印にて御座候ふ。詳しき事はお目もじに申上げたたく、人目を憚り候へば、密かに藏所までお忍び下され候ふやうに、くれ〜も待ち入り参らせ候ふ。

ト讀み、ちよつと思案して

様子が解らんした。杉印は遣り手の杉サ。さ印つ印は女の名だ。宥に泊つた一人の旅の女中、合點がゆきんした

んだが、ぬしやア、色をしなんすの。馬鹿らしい。

ト狀を打ちつけ、ピンとする。

宗六 エ、何云ふぞい。こりや、てつきりと間違ひであらう。マア、おれが逢うて見よう。

くら さう云つて、わつちを騙さうでか。さうは乗られぬわな。

宗六 ハテサテ、覺えがあるなら、あると云ふわサ。

くら 措きなんし、咄だ。お前には逢はさぬ。わつちが逢ひやんす。

宗六 ハテ、お客はおれに逢はうと云うてござるわサ。

くら べかこり。お前が逢ひなんすも、わつちが逢ふも同じ事だ。

宗六 待ていやい。われが怪氣も久しいものだ。好い加減に取措かいでな。

くら 取措いたら勝手はよからうが、さうはなりやせぬ。

トびんとて云ふ。宗六、腹立て

宗六 おきあがれ。云はして置けばよいかと思つて、男の面をびつしやりくらはしの、黄ばくくの、脂下がりて、田舎芝居の梅ヶ枝か、なんぞのやうに、煙くらべん淺間面が忌々しいわい。

ト躍る。

くら どうしなんす。

トお倉、立ちかゝる。信夫、お倉を止める。與茂吉、宗六を止める。

與茂 コレく、腹は立つまいけれど、モウくく、堪忍さんすなく。

信夫 まさまも、女郎さまも、もうくよつ腹立ちやり申すなく。

くら 小よし、黙りや。てまへも譯がある。主が常からの目遣ひ、よく知つてゐるのナ。

信夫 女郎さま、おぞい事は知らないわサア。

くら てまへが隠しやつても、お松やお露に、よく聞いてゐるのサ。

宗六 聞いた事があるなら、吐かしあがれ。

與茂 おれが聞き手になつてやらんワ。その様子を云はんすな云はんすな。

くら 入間や、てまへは知るまいが、一體主は吉原で、大福屋と云つちやア、女郎衆の百人もある揚屋だわの。

與茂 ムウ、揚屋の筋、承知せんワ。

くら わつちやア元、吉原の女郎だ。主に請けられて、こ

の岡崎の出店を妾宅にして、主の體を預かつてゐるのサ。

與茂 よし、合點がゆかぬワ。

くら あの小よしは、江戸へ取つた子飼ひだが、器量がよくても訛りだから、わつちが方へ引取つて、おじやれにして遣ふのサ。

ト宗六へ目を付けて

なんだか、人が知らないと思つて、昨夜も四疊半へ連れて行つて、コレ小よしや、てまへにとんだいきつきだ。兩國の火の見ぢやないが、登り詰めたのなんのかのと、なんだか氣の廻つた蔦のやうに捲み廻つて、エ、舌たるい。しみく好きません。

ト與茂吉、信夫を見て腹立つるこなし。

宗六 コリヤヤイ、あの小よしめは、外の明華と違つて、正直な者ぢやに依つて、常から可愛がるのぢや。仇口云うた事をほんまにさらすからは、よい、これからは又、小よしを妾にして、毎晩抱いて寐てこます。

くら 寐らるゝなら、寐て見なんし。

宗六 オ、寐て見せる。見てけつかれ。

與茂 サア、怪體が悪うない、腹立てぬぞ。金輪

際、腹が立たぬわい。

トびんとする。

信夫 モシヤア、いびり申すな。てんこちもない、おれはいやだわア。

宗六 否がる所を抱いて寐るのぢや。來い。

ト信夫を引ツ張る、お倉、分けて入る。

くら 揃きなんし。寐さす事は、ならぬわいな。

宗六 邪魔さらすな。退きさらせ。

トお倉を引退け、信夫へかゝる。與茂吉、止めて

與茂 どつこい。こればかりはおれが邪魔せぬ。オ、金

輪際邪魔をせぬぞ。

信夫 コレゴゝさま、おれはおぞい事はせないわサ。オ、

トお倉へ云ひ譯するをピンとして

くら てめえはその氣であらうが、主の悪性が好きいせん。

なんのこつた。馬鹿らしい。

ト持つてゐる煙管を打ちつける。

宗六 男に向うて投打ちをさらすかな。コリヤヤイ、う

ぬが煙管をぶちつけるなら、おれは兩國橋でもぶちつけ

るわい。

ト火鉢を取つて抛る。



奥茂 なんぢや知らぬが、無性に腹が立たぬ。ねつから腹が立たぬわい。

ト高座かいて座る。

信夫 コレサア、ごしみ申すな。御亭がただけ申しても、

うんどもは忍だわサ。

ト宗六の顔を、振り袖にて打ち、奥茂吉の側へ座る。

宗六 貴様が昏でも、おれが應だ。

トまた信夫へかゝる。お倉、宗六が顔を平手でくらはす。宗六、お倉をくらはす。

くら 叩きなんしたぞえ。

宗六 くらはしたら、どうするぞい。

くら あんまりだわな。

ト箕盆を打ちつける。

宗六 おきあがれ。はツつけめ。

ト菅笠を持って打ちつける。お倉も菅笠を打ちつける。これより兩人の荷物行李、風呂敷包み、土産物など、

出たために打ちつける。奥茂吉も調子に乗つて打ちつける。信夫ウロ／＼する。すべて、右の間、信夫の仙臺者と、奥茂吉の人間者と、お倉、吉原風、宗六大通、

谷々身分の癖、よろしく心得あるべし。この模様、ト

ト宗六、お倉を叩きにかゝる。信夫止める。宗六、信夫に取りつく。お倉、引退け。

くら 小よし、てまへは爰に居すと、奥へ行け。

宗六 エ、さうぢやないわい。奥へ行くな。

奥茂 オツトシヨ。

信夫 寐そべつて話すべし。御亭のおしやらくにはなり申

さない。來のめせ。

ト奥茂吉も連れて奥へ入る。

宗六 サア、差向ひになつてせりふする。云ふ事があるなら吐かせやい。

トお倉が胸倉を持って捻ぢつける。此うち橋がりの

襖よりお力、出て

りき お返事がありさうなものぢやが。

ト云ひ／＼出て、この體を見て

これはしたり、何事でござんす。マア／＼、鎮まりなさんせ。

トいろ／＼して引分ける。お倉、お力が胸倉を取つて

くら 一體お前から起つた事だ。主にはわつちと云ふ女房

があるわいな。なぜあんな濡れ文を送りなんした。濟まぬわな。

トお力を振り廻す。

りき これは迷惑な。

トこなし。宗六、お倉を引き退け

宗六 先刻に手紙を遣はされましたは、お前でござりますかな。

りき 左やうでござりまする。

宗六 ついに逢うた事もなし、先刻の状では筋合ひが解らぬ。様子はどうでござりますな。

くら なにサ、解つてござんすわいな。

宗六 黙つてゐい。して、様子は。

トお力、あたりを見て

りき お差合ひはござりませぬかな。

宗六 誰れも聞く者はござりませぬ。

身子 私し事は、奥州高館のお家中、杉本甚内さまの家來

佐五平が女房、力と申す者でござりまする。

宗六 ムウ。すりや、この宗六を佐五平が兄と知つて

りき わざ／＼お尋ね申しました。

くら イ、エ、そりや啞だ。

ト右の文を取上げ

コレこの文に、杉印方にて、さ印のつ印にて御座候ふと

遣り手の杉に世話さして、お前の名はおさつさん。

りき イヤ、杉印は杉本。さ印は佐五平、つ印は妻と申す事。杉本身内の佐五平が妻と申すのでござりまする。

くら エ、。

宗六 ソレ、見あがれ。

りき 人目を憚る隠し詞でござりまする。

くら すりや佐五平さまの

宗六 内儀であつたか。

宗倉 これはしたり。

ト一時に膝を叩く。合ひ方になり、宗六、お倉、眞中に、お力を挟んで

くら して、お尋ねなされました様子は。

兩人 どうでござりますな。

りき 親且那樣不慮の横死は、世の風説にも、お聞きなされたでござりませう。御由緒と申し、殿様のお覺え厚き

家柄なれば、敵を討つて家を立てよと、御息女宮城野さまに、敵討ちのお暇を賜はり、夫佐五平、この力も諸と

もに、本國を出立。敵は同家中、志賀臺七と知れながら

尋ねる日數も一年餘り、今に於て在所も知れず、國元の

噂を聞けば、伯父大學さまの計らひで、お屋敷も召上げ

られ、奥穂磯崎さまにも御出國の風聞。また宮城野さまに、腹變りのお妹御信夫さま、このお行くへも知れませず、お主の御在所、敵の在所も尋ねん爲、一先づ一方を志し、四國九州の果までも、草を分けて尋ねるところ、不思議に今宵このお宿へ泊り合せ、婢衆の云ふを聞けば、本家は江戸の吉原で、大福屋の宗六さま、さては夫の話に聞いた、兄御さんの内方へ、泊り合したも不思議の御縁。東海道は諸方の往來、もしや敵の手が、りにもならんかと、お尋ね申した今宵の仕儀。様子と申すは、この通りでござります。

ト宗六、こなしあつて

宗六 倉、貴様はまだ知るまいが、この宗六が親仁様は、島田三郎左衛門と云うて、杉本甚内さまの家來、その忤の島田三郎兵衛、若氣の放埒で親仁様の勘當請け、それに構はず吉原へ入込み、大の通ぢや、通り者ぢやと云はる、が嬉しうて、たう／＼大福屋へ入り筆。弟佐五平が、お主達の力となつて、敵を尋ねる憂き艱難。それに引替へてこの兄は、茶會ぢやの併詰の附合ひのと、揚句には、幾までも置き廻つて、我が身ながらも阿房の上盛り。どうぞ元の侍ひになりたいと、遅高ながら武藝の稽古。今

鎌倉で名の高い、宇治兵部之輔どの、弟子になつて、間がな隙がな入込むうち、或る時師匠がおれを呼んで、密かのお頼み。杉本の家來は通がれぬ事があつて、助力をせねばならぬ筋合ひ。幸ひ其方、岡崎に出店もあれば、旅人に心を付けて、もし由縁の人と見るならば、早速屋敷へ伴ひくれよとお頼み。畏まつたと請合うたその日より、この岡崎の出店へ来て、夜は泊り人に心を付け、明くれれば野駈けの遊山のと、方々を駈け歩くも、お主達に逢はんが爲。云ひこそせねこの宗六が心盡し。お内儀、推量して下さんせい。

ト泣いて云ふ。

くら わつちが口から、主の事云ふは異なるものなれども、商賣こそ賤しけれ、人に斯うと頼まれちやア、引かぬ氣性だわえ。して、その宮城野さまや、佐五平さまは何處にござんすね。

りき されば、途中のうちも、人目立つては如何と存じ、日のうちは別れ。先程表へ笠の印を頼みましたが、どう道が間違ひましたか、心が、りに存じます。

宗六 イヤ、例へ違つても、池鯉鮒までござるまい。明日早々、岡崎の宿屋々々を尋ねたら、ツイ知れる

事だ。して、宮城野さまの妹御の、信夫さまの行くへは、知れてござりますかな。

りき されば、様子あつて江戸吉原への御奉公。その節尋ねましたれど、何と申しても親方衆の名を存じませねば、今に於て、え、巡り逢ひませぬやうにござりまする。

宗六 ハテナ、吉原は手前の町だが、ハテ、どこにござるぞいの。

くら お前が尋ねてなら、知れさうなものだぞえ。

宗六 イカサマ、手先の女衞どもを尋ねたら、知れぬと云ふ事はあるまい。それはそれにして、何卒敵の手が、りを聞き出したいものだが。

トこの時お力、最前丈助が捨て置きし刀を取り、不思議さうに見て

りき こりやコレ、見覚えある安達丈助が刀、ハテ心得ぬ。

トこなし。此うち丈助、刀を取りに出てゐて、この時

丈助 南無三、その刀を。  
ト取らうとする。立廻りあつて

りき さてこそ丈助どの。好い所で逢つたなア。

丈助 お力めであつたか。悪い所で逢つたなア。

宗六 すりや、その飛脚めは

りき 敵の馴合ひ。臺七が行くへ。眞直に白狀なさんせ。

丈助 イ、ヤ、様子あつて國をふけつたれど、臺七が行くへは知らぬわい。

ト振り切つて逃げんとするを、取つて押へ、膝に引敷

りき 白狀なさんせずば、斯うして云はず。

ト腕を痛める。

丈助 アイタ、。コリヤ、云ふ程に、緩めてくれ。目が舞ふわい。

りき サア、云はしやんせ。

トゆるめる。

丈助 臺七どの、去年以來、上方に隠れてござつて、今度伯父御の方から内通があつて、本國へ引返す積り。今夜の泊りは御油か赤坂か、吉田二川濱松でもあらうか、そこまでは知らぬわい。

りき すりや臺七は

ト丈助 起きようとするをグツと押へ

さてこそなア。

宗六 呑み込めぬ白狀だが、マア、其奴を目見に通れて、近邊の宿々を詮索して見たがよい。

りき 宮城野さまや、佐五平どのが見えまじたら。

ト丈助が片手を持つて、引立てる。

くら 止めまして置きやんすわよ。

宗六 早う行かんせ。

りき 行て参りませう。

ト花へ、ツカ／＼と行て、丈助を鐵砲さしに差上げ  
る。兩人見て

宗六 江戸の女中は、どんだものだ。

ト江戸騒ぎになり、お力、右の見得にて向うへ入る。

宗六、お倉を連れ、奥へ入る。しやん／＼と暮れ六ツ  
の鐘鳴る。返し。

見附の障子一面に開く。但し、西にて二間ばかり  
引き残す。正面障れ座敷の體、真中に臺七、百日、  
浪人の袴らへ、着流し前帯にて、結構なる夜具に乗  
り、遠州行燈の側にて、狀を讀みふる。刀掛けに刀  
を掛け、後に屏風立てあり、その脇に宮内、九平太、  
伴藏、控へゐる。江戸騒ぎ止む。静かな合ひ方にな  
り、  
桶原より丈助を以ての密事は、如何體な儀でござる

な。

ト云ふうち、臺七、讀みしまひ

臺七 ソレ、拂見めされ。

ト狀を捲る。宮内、取つて讀む。九平太、伴藏も見ろ。

宮内 こりやコレ、まさかの時は彼の屋敷へ

ト云ふを臺七、押へて

臺七 イヤ、コレ。

トあたりを見て、向うへ出て

別座敷の儀なれば、他聞はあるまじと思へど、用心に如  
くはござらぬ。密かに／＼。

宮内 御尤も。

ト狀を戻す。臺七、火鉢引寄せ、狀を火中して、こな  
しあつて

臺七 杉本の縁者の手に立つ者は、只一兩人、さのみ苦勞  
には存せぬが、宇治兵部之輔助太刀を加へ、忍び忍びに  
身を窺ふと承る。大望ある拙者でござれば、命は大切。  
それゆゑ斯く堂上方のお名を借り、似せ繪符を以て往來  
いたす儀でござる。彼の魏の國の曹操と申すは、數多た  
び敗軍を仕り、或る時は鬚を焼かれ、また或る時は赤  
裸になつて逃げさまよりてござるが、遂にその艱難を凌



いで志しを遂げ申してござる。大功をなさんず者は、  
細瑾を顧みずと申す。身共とても先ツその通り。必らず  
卑怯者だとお蔑み下さるな。

宮内 何しに左やう存じませう。貴殿一味の野々宮宮内、  
彼の地まで付添ひの我れく、萬一の時はお力に相成り  
申す。

九平 イヤ、それにつき、旅宿のお氣遣はらし、御寐所の  
お伽を云ひつけてござる。

伴藏 數多ある遊女のうち、拙者が見立てました女、ちと  
詞に訛りはござれど、至極の器量でござる。

宮内 なんと、お夜伽は如何でござらうな。

臺七 ハ、ハ、それは一興。如何やうにも仕りませう。

トお露、お松出て

つゆ もうお休みなされませ。これへお床を取りませう。

ト二人して寢所を敷き、枕を並べ、しかくあつて

まつ 申し、お指圖のお子をおこしますぞえ。

三人 早く連れて來やれ。

露松 ハイ〜。

ト入る。

臺七 いづれにもは明朝。

三人 御意得ませう。

ト胡弓入り、妹春川の獨吟になり、三人入る。

ハ口舌は宵の夢なれや、二つ枕の妹春川、袖から袖へ手  
を入れて、ぢつとメめたる下紐の。

ト唄のうち、信夫、寢卷の形にて出て、蒲團の端に座  
り、しく〜泣いてゐる。臺七、眞のんでゐる。

臺七 ムウ、伽に參つたは貴様か。大儀だな。これへ來よ。  
そこは蒲團の端だワ。遠慮はない、これへ來よ。ハテ、  
來よサ。

ト手を持つて引寄せる。右唄のめりやす、信夫、始終

泣いてゐる。臺七、顔を覗いて

ハテ、田舎にも京だなア。年は幾つだ。名はなんと云ふ  
ぞ。

トまた顔を覗き

なんだ泣くか。ハ、ハ、。なんぞ怖い者の側へ來たやう

に、なんの泣く事があるぞい。ア、聞えたわい。年恰好

と云ひ、貴様はまた初だな。初だ〜。初ならば道理だ

わい。コリヤ、なんにも泣く事はない。恐ろしく思ふな

ら、どうもせぬワ。旅宿の徒然に話してもするワ。ヨヨ、

機嫌直せ。もう〜泣き止んで、機嫌よく致せ。

ト云ひ、信夫の振り袖をいらうたりして、少し氣の動くこなしあつて

サア寝よ。どうもせず。

ト始終こまづけるやうに云ふ。信夫、頭振つて泣く。

臺七、持て給し

此奴、一向初心者だ。われもどうで一度は濡らねばならぬ川だ。身が汗を教へてくれう。

ト引寄せる。信夫、ひつしよなく振り切つて大泣き。

臺七ホツと吐息をつき

これは又、雅儀な守をする事だな。

トちよつと思案して

ムウ、こりや何か。なんぞ仕落ちでも致して、親方の折檻にあつたと云ふやうな事か。

ト信夫、頭振つて泣く。

但しは御難どもと諍ひでも致して、それゆゑの事か。

ト信夫、頭振り、泣く。

ムウ、さうでもない。然らば又、なんで身の上に悲しい事があつて、更け行く夜半に有りし昔を思ひ續けて、それで泣くか。

信夫 ア、く。

ト返事して、しやくり上げて泣く  
臺七 ムウ、それならば道理だ。貴様は遠國者と見えるが、生園はどこだ。

信夫 うんどもは、つない東奥州だア、。

臺七 ナニサマ、仙臺訛りと見ゆる。して、奥州はどのあたりだ。

信夫 奥州は白石近在、逆井村と申す在所だわさア。

臺七 逆井村、オ、遙かの片田舎より、この岡崎へ身を賣つたは、親孝行の爲か。さうかく。

ト信夫、しやくり上げ、頻りに泣く。

ハ、なにそれを泣く事がある。親の爲に奉公いたすは孝行だワ。どの女でも皆その通りだ。泣く事はない。

ヨヨロサア、鼻かんでくれう。

ト抱き寄せて、涙を拭うてやり、いろ／＼深切なるこなし。信夫やうやうに顔上げて

信夫 それ様が、深切に云つてくりやり申す程、いと悲しくなり申すよ。かう寐そべつて寄り添ひ申すもサア、前生の縁だと思つて、哀れた身の上を、一遍り聞いておくりやり申せサア。

ト臺七、吐息をついて

臺七 こりや客ではなくて、お守り客だワ。ハ、ハ、ハ、ド  
リヤ、枕の側そばに承うけたまはらうか。

ト枕を取つて、夜着を着て横になる。内にて唄。

僧や男の當言を、聞いて入るさの障子より、洩れ出づ  
月は牙ゆれど胸の闇。

ト此うち宗六、居間の心にて、宗六、炬燵にあたり寝  
てゐる。この側にお倉、寢巻の形にて、急須を置き、  
煎茶をしてゐる。仕切りの襖、褌子張りの引抜きにな  
り、信夫、涙を拂ひ

信夫 語るにつけて、がいに悲しいうんどもが身だはサア。

まだ出張らない其うちに、父アに離れ、只一人の大事の  
母ま、づない大病をお受けやり申して、人參の價たにに吉原  
へ、おしやらくに出申してサア、はるか後に聞き申せば、  
人參の効驗きげんもなくつて、母まはお死にやり申したとサア。  
おやつかに魂消申したく。

ト泣く。臺七、寢苦しき體にて、枕を上げ、寢ながら  
眞盆を引寄せ、其のむ。お倉急須の火を煽ふぎながら、  
フト信夫が聲を聞き、心得ぬこなしにて、襖へ寄り耳  
を立てる。信夫また涙を拂うて

分けて悲しいは、父アも、人に切られてお死にやり申し

たとサア、生かひに對面をせないけりや悲しさも百倍。  
父アや母まに死に別れ申して、正眞の木から落ちた猿だ  
ワ。國を出申してから、驛方も榎方も知らないなりや、  
寐ては父アを思ひ出し、起きては母まを戀ひ慕ひ、夜つ  
ぱり泣き暮らし、泣き續けて居申すわサ。

ト泣く。お倉、貫ひ泣きのこなし。

又これの屋體は、吉原の御亭の出店だわサア。江戸へ賣  
られて岡崎三界經巡り申してサア、おじやれ奉公をする  
事よサア。むかざれもせない身だから、それさまと寐そ  
べつてあたけ申すと、踵の鞆引ツかゝつて、うつ切れ中  
すべい。がいにござい事だわサア。父アや母まの死日に  
さへえ、逢はない因果者サア。まだ夜つばかりの年の内、  
何樂しみに暮らし申すべい。この身の憂を思ふにつけ、  
父アや母まが、冥途から。

ハ鴛鴦の片羽のとぼくと、子に迷ひ行く小夜千鳥。  
逢ひたく思つて、迷うてがな居やり申そ。それが悲しく  
おじやり申すわサア。

ト大泣き。

泣いて口説くぞ哀れなり。

ト右の間、臺七、始終餘所の事のやうに聞くこなしあ

つて

臺七 イカサマナア。人の行く末と水の流れ。奥州とあれ  
ば身共とても。

ト身の上に引當て、こなしあつて

「思ひなき身にくらべてし、ざつと淺黄に染めりより、  
元の白道がましぢやもの。」

して、父を人手に討たれたと云ふは、その父の名はなん  
と云ふ。百姓か町人か。但しは商人か。

信夫 父アは、奥州で歴々の侍ひサア。

臺七 ナニ侍ひ。ムウ。して、その父の名はなんと云ふ。

信夫 母まは生きがひの時聞き申した。父アの名は、高館  
の家中でサア。武藏の達人、杉本甚内サア。

臺七 ナニ甚内。

ト驚ろく。お倉、これに驚ろき、寢てゐる宗六を起

す。宗六、現のやうに寢返り、蒲團をかぶつて炬燵へ

入る。臺七、居直り、信夫が形を見て

ハテ、侍ひの娘だよなア。

トこなしあり。

信夫 父アをぶつ切り申した敵が討ちたいから、朝な夕な  
にまつむ事よ。宮城野さアいつて、腹異りの姉さアもあ

り申すとサ。忠義の女郎もあり、そのお方に野郎きれま  
さりの、なとやもあり申すとサ。早く巡り逢つて一緋に  
敵討ちたいと思つて居るはサア。我れらが國での名は、  
信夫と申したはサ。

トお倉、こなし。

臺七 ムウ、姉の家来に奴夫婦。

ト思ひ入れあつて

して、その敵の名、苗字、所縁の者が存じあつてか。但  
しは知らぬか。どうだ〜。

信夫 ナニサ、顔は知り申さぬが、悪醜な侍ひだとサ。名  
は志賀臺七サ。

ト臺七、ぎつくり。枕刀を引寄せ、蒲團せぬこなし。  
「さるにても、憂しやつまの似せ紫の色悪う、やつれ顔  
見る悲しやと。」

ト唄のうち、臺七帯を後へ廻し、枕刀を取つて、行  
燈を押しやり、隅々へ氣を配る。お倉は始終、宗六を  
起す。宗六、現のやうに

宗六 人間者は變つた物云ひだ。ウム〜、  
ト寢言を云うて寢る。お倉、辛氣がる。臺七、横へ耳  
を寄せて窺ふ事、いろ〜ありて、また信夫の側へ寄

る

り

臺七 して、貴様が所縁の者に名乗り逢うたか。まだ逢はぬか。

信夫 敵は上方にゐるとサア、先刻に野郎のお方が、この屋體へ寝まり申して、姉さアも野郎も、この岡崎近邊に居申すとサア。

臺七 ムウ。ずりや、所縁の者が、このあたりに。

トこなし。

信夫 オ、サ、赤腹は垂れ申さぬわサア。

臺七 ムウン。

トきつとこなし。

信夫 尋ねて逢はしておくりやり申せ。それ様を頼み申す頼み申すわサア。

ト泣いて云ふ。

トしほる袂の露涙、野邊の幾重や通すらん。

ト此うち、お倉の囁くを宗六、フト聞き取り、よう聞いて、さてはと起き上がり、帯を締め直し、共に襖へ耳を寄せ聞く。臺七、とつおいつ思案するこなし、いろくあつて

臺七 ハテ、不便な身の上だな。どうぞ、その所縁の者に

逢はして。

ト指り寄り、刀を抜かうとする。信夫、見るゆゑ氣を變へて

どうぞ逢はしてくれたいものだが。

信夫 それ様を頼み申すよ。

臺七 オ、サ、逢はしてくれろ。

トこなしあつて

あれはなんだ。あれを見よ。

ト指す。信夫見る。臺七、切らんとする。信夫、驚ろき飛び退き

信夫 何ぶツ切り申す。おつかない。魂消申すよ。

臺七 黙らう此奴。

ト振り上げて追ひ廻す。この音に宗六、帯を締め、刀を取つて来いと背つこなし。お倉、一腰を取つて来て渡す。宗六、腰に挟さんで此方を窺ふ。臺七は、信夫を追ひ廻す。

信夫 アレエ〜。

ト逃げ廻る。

ト子は安方の安からぬ、親は空にて血の涙、誰が節付けて世をうたふ、さてこそ討たれ安方の。



ト文句のうち、臺七は、隅々へ氣を付け、人は來ぬかと、心遣ひのこなしにて、追ひ廻す。信夫逃げて隔ての襖に行き當る。この時宗六、襖を明けける。直ぐに信夫を我が居間の方へ引き廻す。お倉、信夫を圍ふ。臺七宗六を見て、ちやつと納める。宗六、立ち塞がる。右の唄の終りまで、模様よろしくある。常の合ひ方に變る。

宗六 お客様、騒がしい。何事でございますか。

ト臺七、こなしあつて

臺七 其方はこの家の亭主だな。

宗六 ハイ、宗六でござりまする。見受けますれば、何かお腹立ちの體だが、あの小よしめが、なんぞ不調法でも仕りましたかた。

臺七 如何にも、旅泊の徒然申しつけた寢所の御。添ひ臥するを香だと云ふから、嘯しをくれて手に入れん爲。ハハ、仁體千萬。

ト刀を納める。

宗六 成る程、至極御尤もでござりまするが、あの小よしめは、まだお客様の御には出しません。山出しの白奉公人、それをあなた様の寢所へお御に出しましたは、こり

や明輩どもが悪洒落でござりませう。お客様、御機嫌直しに、ナア倉よ、替り上げませいやい。誰れがよからうなア。賤機にせうか、瓜生野か。イヤ、道柴がよからう。

臺七 イヤ、外の女は望みにない。その誰り女めを添臥させい。

宗六 イヤ、血氣盛んのお客様へ、まだ初床の小よしを突きつけたら、てつきり跡が疵物でござりますわい。

臺七 身請けせう。

宗六 エ、

臺七 下女、婢女にもせよ、遊女並の身の代を以て身請け致さば、亭主、云ひ分はあるまいがな。

宗六 イヤ、あの小よしは、ちつと譯がござりまして、余所へ遣はす事はなり憎う存じまする。

臺七 身請けさ、ずば、いつそ。

ト宗六を引き廻し、入れ替つて信夫を目かけて行く。

宗六、止めて

宗六 イヤ、例へお侍ひ様にもせよ、宗六が居間、襖一重は城廊同然。踏み込まるとは、ちと理不盡かと存じまする。

臺七 ムウ。是非手討ちに致すと云はゞ。

宗六 この場の意氣づく。お侍ひでも相手に致す。

臺七 ハテナア。さほどまで、身に替へて、女を此ふ汝が俗稱、如何にしても呑み込めぬ。

宗六 イヤ、私しより、あなた様の俗姓。

臺七 なんと。

宗六 堂上方の諸大夫とあつて、道中筋は繪符を以て往來をなされ、泊りくゝの忍びの體。様子が分り憎う存じますが、何御用あつて、どれからどれへのお下りでござりますな。

臺七 黙らう、此奴。堂上方の所用、相談ねて何に致す。身が吟味より汝が身の上。

宗六 こなたの本心。

臺七 眞直に云へ。

宗六 白狀さつしやれ。

臺七 われが。

宗六 こなたが。

兩人 何を小癪な。

ト兩方より反り打つて詰め寄る。お倉、引分けて仲へ入り

くら ア、イヤ、お二人のお身の上、明日までわつちが預かりやんした。

兩人 なんと。

くら ハテ、お侍ひ様なりお客なり、主は町人、どうかそぐはぬ達引だと思ふから、無事にこの場は預かりやんす。

ト宗六、こなしあつて

宗六 イカサマナア、お泊りの客衆に、角目立つても味なものかい。

臺七 して、女が返事は如何いたす。

くら サア、それも、わつちがとつくりと云ひ合めて、後からお寢間へやりやんす。

臺七 ムウ。座敷を變へて一獻酌まん。更け行く空が戀の靈時、納得させて連れて參れ。

ト行かうとする。

宗六 ア、イヤ、お客様、ちつと此方に尋ねる注文、譯道の立つまでは、一寸も動かしや致さぬ。宗六が斯う申せば、籤の鎖に繫いだも同然、御酒でも上がつて、ゆつくりと御寝なりませ。

臺七 此方の用片付くまでは、動けと云つても動きはせぬ

が、いでも思はゞ鐵の綱、鐵の鎖も引き切つて立歸る。

トこなしあつて

もう、何時であらうな。

くら されば、八ッ頃でもありんすに。

宗六 嘯まではゆるり二時。

臺七 色よい故事を、ドリヤ。

ト信夫を目かけて行くを、宗六、引き廻して立ち塞がる。臺七、ヤツとなつて

待つて居らうか。

ト唄になり、臺七、こなしあつて、刀を掲げ、悠々と

奥へ入る。隣に兩人、信夫を真中へ連れ出て

宗六 宮殿内信夫が行くへ知れなば、鎌倉屋敷へ送りくれ

よと、宇治兵衛とのゝお頼み。お前が信夫さまであらう

とは、思ひがけがござらなんだ。

くら 主も以前は甚内さまの御家來、佐五平さまの兄御だ

わたし。

宗六 宮殿野さまにも佐五平夫婦にも、追ツつけ違はせ、

敵も討たせませう、お喜びなされませ。

ト兩方より云ふうち、信夫、嬉しがることなし

信夫 御存様、お方様、喜び申すワ〜。

ト宗六を拜み、お倉をも拜み、いそ〜と勇む。

宗倉 オ、道理ぢや〜。

ト兩人も喜ぶ所へ、バタ〜にて、向うよりお力、丈助を繩にて縛り、引ツ立て、走り出る。

りき サア〜、手がかりに取りつきましたわいな。

ト云ひ〜本舞臺へ来る。右の繩、五間ばかり長くして、丈助は花道の中程にて、逃げう〜と跳こな

し。

宗六 手がかりとは耳寄り。どうぢや〜。

りき 先刻の詞に轉願する丈助が白狀、それゆる直に引返

へしましてござりまする。

宗六 して飛脚めは、どつちへぞ逃げ居つたか。

りき 濃多に逃がしは致しませぬ。

ト繩を手解る。丈助、引指られて来る。

サア、今の通りを白狀さしやんせ。

丈助 サア〜、よいてや。今度は本違ひなしの白狀ぢや。

臺七どののは、ある公家方の似せ繪符を以て、東國へのお

下り。今夜はこの岡崎に泊つてござるわい。

りき さてこそなア。

トこなし。

くら そんなら今の  
宗六 泊り客に極まった。コレ、喜ばんせ。臺七は奥に居るぞ。

くら コレ、忙しい中ぢやが、この子が尋ねる信夫さまだ。

りき エ、。

ト驚ろく。

宗六 そりや跡で云はれる事ぢや。マア、蔽討ちの用意。

りき このマア宮城野さまや佐五平どのは、何處に居さんすぞいなア。

ト向うを見て、ソワ、ソワ、する。

宗六 なんでもマア、臺七めを引ッ立て、來うわい。

ト奥へ行かうとする。所へ奥茂吉、走り出て

奥茂 コレ、今夜の泊り人は、皆侍ひめと一つでないかして、俄かに出立すると云はずに、握り飯をえらうささずに、皆連れ立たずと裏口から、何方へやらうせなんだ。

皆々 ヤア、

奥茂 その上、盲目按摩が大きな目玉を明けずに、俄かに

飛脚にならずに、これもどつちへやら、行かなんだ行かなんだ。

宗六 ヤア、すりや、風を喰うたか。エ、残念な。

ト皆々、無念なるこなし。軍吾、曾平、新吾、窺ひ出て

軍吾 力強の術妻ぢや。殺らしてしまへ。

曾新 合點ぢや。

ト曾平、お力へかゝる。新吾、丈助が繩を解く。軍吾に信夫を引ッ立てに行く。宗六、軍吾を引ッ掴んでとまる。

りき 官兵衛が飛脚になつたは、慥かに密書。

宗六 おりや信夫さまを伴うて、遠州路を鎌倉へ騙け抜けて、直ぐに宇治のお屋敷へ。

ト軍吾を取つて投げる。

奥茂 おれも供して一緒に行くまい。

くら お力さまは引返して。

りき して、出合ふ所は

宗六 矢矧の橋の左手右手、手分けして、早う。

りき 心得ました。

## 宗六

信夫さま、ござりませ。  
 ト信夫連れ、お倉、奥茂吉も附いて、奥へ入る。皆々  
 お力へかゝるを、一々取つて投げる。ト踊りの太鼓三  
 味線になり、これにてタテいろくあり。ト皆々向  
 うへ進げるを、お力澤々しく見得にて追ひかけ入る。  
 江戸騒ぎになり、面白き鳴り物を入れて、

返し

この鳴り物に合せて舞臺二重舞臺、共に一面セリ上  
 がる。舞臺一面の矢矧の橋、見事なる儼賣珠の高  
 欄、橋が、りは鷹木。上の方行抜けにて橋牛の心。  
 後は流かに矢矧川の景色。よき所に橋の大木。破風  
 より一面に枝垂れ柳、右橋の牛に誂らへの番屋あ  
 り、橋敷、高欄、鷹木、陸地とも残らず雷降りの體、  
 右取りつけよろしく、道具納まるまで騒ぎ鳴り物、  
 賑はしくあつて、よろしくとまる時分、本釣鐘にて  
 明け六ツを撞く。これにて鳴り物止む。常の合ひ方  
 になる。ト向うより臺七、右の形、覆面頭巾にて顔  
 を隠し、宮内、九平太、その外葦明きの侍ひ、この  
 人数、皆々少し急ぐ見得にて、各々、橋へ差かゝ

り、半まで来る。始終本釣り鐘打つて居る。臺七こ  
 なしあつて

臺七 いづれも、さて、ひやいな目に出逢ひました。

宮内 彼奴等が落ち合うて、乗らうとは、存じがけがござ

らなんだ。

皆々 左やうでござる。

臺七 大學さまの御内意に依つて、本國へ参らうとは存じ

たが、これならば彼地とても氣ささいに存ずる。

宮内 して、上方へ引返すは

皆々 いづれを日常に。

臺七 最前の密書に、楠原氏は城州岩清水へ、領主の代参

下向の道筋、今宵池難辨泊りとある。これへ参つて一手

にならば、鐵石城に籠つたも同然。この様子を密書に認

め、津輕官兵衛を飛脚に仕立て、大學さまへ遣はしてご

ざる。

皆々 それで解りました。

ト臺七、思ひ入れあつて、番屋の屋根の霜に撞にて、

文字を書く。皆々見て

宮内 ナニ／＼、両矢矧くれどの宿の横道より間道を越

へ、鎌倉表へ立越え候ふ間、味方の人々、追ひ／＼この



道筋へ來らるべきものなり。志賀臺七これを殘す。

ト書くうちに讀む。

九平 ムウ、池鯉鮒へござる臺七どのが、鎌倉へ參ると書き殘されしは。

伴藏 鎌倉上方、上下の相違は如何でござるな。

臺七 されば、杉本由縁の奴原、是非察うて來るは定し。味方の者への内通を、わざと彼奴等が見るやうに致し置くワ。さては鎌倉へとぼツかけるは必定。そこを外して池鯉鮒へ參る當座の手段サ。

皆々 御尤も。

ト向う戸屋の内、バタ／＼する。臺七見て

臺七 あれは體かに。

トきつと云ふ。こなしあつて

いづれも來やれ。

ト臺七、皆々連れ、橋を渡り、上の方へ入る。この間、始終本釣り鐘、向うバタ／＼にて、官兵衛、坊主頭の飛脚にて、お力と、白木の狀箱を奪ひ合ひ出る。花道にて立ち止まつて

りき 詮議ある官兵衛、マア、この狀箱を渡しや。

官兵 ぬ、殺らす奴なれど、御用先が急ぐ。邪礙せずと

そこ退け。

りき 密書を渡しや。

官兵 渡す事はならぬ。

ト揉み合ひながら、橋の際まで来て、密書を引き出し奪ひ合ひ、ト、お力へ取る。官兵衛を捻ら握みながら片手に廣げて讀む。

りき 今夕、岡崎まで著仕り候ふところ、杉本身寄りの者共窺ひ候ふにつき、又々上方へ引返し候ふ。品に依り、彼の屋敷へ入込み、暫らく身を潜め候ふ。猶迫ひ追ひ御左右申すべく候ふ。大學さまへ。臺七より。

ト讀んで

すりや、臺七は上方へ。

トこなしあり、官兵衛、劍ね返し切つてかゝる。タテの見得にて、橋の半まで來る。お力、立廻りのうち、霜の書附けを見て、臺七が書きし廻りの文句を讀み、また密書を見て

この密書とは相違せる書付け。

トちよつと思案して、霜に書きしは偽はりと覺る心にて、官兵衛を取つて投げ、霜の文字を消し、また指にて番屋の屋根へ密書の滴りを書き、好き程に官兵衛か

かり、立ち廻つて官兵衛讀む。

官兵衛 敵軍七行ノ先は、上方にて御座候ふ、身寄りの人々、

上方筋へお越しあるべく候ふ。佐五平女房、力、これを書き残す。

ト讀んで、お力を引き退け、箱を消さんとする。お力、消さすまいとする。ト、抜き合ひ立廻つて

りき 敵の片割れ。

ト官兵衛を川中へ、見事に切り込む。刀をしやんと納め、橋を渡つて進ひかけ入る。トこれに掛れ進うて臺七、橋へ戻りかゝり

臺七 今のは慥かに。

ト上を見送り、番屋の書付けを見て、キツと思ひ入れあつて、霜の文字を残らず消し、書き直さんとする。

向うより人が来るゆゑ、こなしあつて、襦袢を傳ひ、橋詰めへ隠れる。この時釣り鐘止む。いつもの在郷唄

になり方々にて鶯啼く。夜明けし。これにて向うより宮城野、佐五平、春々、敵の拵らへにて出る。

宮城 佐五平、お力は何處で間違つたぞい。

佐五 さればござりまする、とかう申すうち、夜も明け放れました。アレ、あれが矢矧の橋と申しまして、

東國第一の大橋でござりまする。マア、ござります

せ。

ト連れ立ち、橋の方へ来る。橋が、りより軍曹、會平、

新吾、出て、二人が橋を渡りかゝる所を、右の人數、

雲助も一つになつて取巻き

新吾 宮城野主従、わいらがうせるを待つて居たわい。

ト佐五平、宮城野を圍ひ、皆々を見て

佐五 うれは臺七に頼まれて、待伏せをひろいだな。

會平 知れた事ぢや。奴ぐるめに、疊め。

軍曹 合點ぢや。

ト皆々佐五平へかゝるを、一々取つて殺げ、ヒラリと

抜いて切り散らす。これにて皆々、橋が、りへ逃げ

る。佐五平、宮城野を連れて、追うて入る。此うち臺

七、橋柱に隠れてゐるこなしあり、此うち、きつぱり

とした所知入りになる。ト橋の西の方より、本行列

先手振り、金紋の袂み襦、大總臺笠、立て笠、長刀、各

各地密荷の紋付き、大烏毛、その外、弓うつば、黒々

糾糞ひの鐵砲、高股立ちの侍ひ、見事に振つて、後

乗り物、七草を踏んで、敷鏡、牽き馬、後押へ、茶辨

當、杏籠、合羽籠、笠籠持ち、附き出る。先手の七つ



郎五谷の郎十圖川市世八



坂東しうのかお

道具、花道へさしかゝる時分に、橋が、りより、宮城野、逃げ出て

宮城 お許されませく。

ト云ひ、供先を割つて、橋の上へ来る。皆々、狼藉者、退り居らう、と、口々に云ふ。宮城野、右の通りにて、乗り物、橋半まで来る時分に、宮城野、乗り物近くなる。

近習 ヤア、お乗り物近く慮外な女め。

トきつと云ふ。この時、バタ／＼にて、西の方より力、走り出て、この中へ入る。

りき ヤア、宮城野さま。

宮城 お力かいなう。

近習 無禮の女め。いつそ。

ト二人を包んで、反り打つ。お力、宮城野を圍ひ、キツと身構へ。ト乗り物の内より

普傳 者ども待て。

近習 ハツ。

ト納まる。

普傳 乗り物立てい。

侍皆 ハツ。

ト矢張り乗り物を穿き上げながら、近習、戸を開く。ト内に榎原普傳、衣裳、社袴、家老職の袴らへにて、乗って居る。行列、並よく並ぶ。所持入りかすめる。

普傳 奥州高館の家中、杉本氏の娘宮城野。

宮城 エ、。

りき して、あなた様は。

普傳 内藏ある粟島の老田、榎原普傳、岩清水へ殿の代參、只今下向。

宮城 御存じの上は、包むに及ばず、この身の上。

りき 狙ふ敵は志賀臺七。正しく此あたりに。

トきつとこなし。

普傳 狩人の矢矧に今宵泊りなば、明や渡らん豊川の浪。

宮城 なんと。

普傳 潮瀬も知らぬ豊川を、迂濶には渡られまい。匿まひくれう。

宮力 エ、。

普傳 屋敷に匿まひ、助力して討たしてくれう。

宮力 エ、そりや御眞實で

普傳 刀にかけて。



雨人 エ、添ない。

ト拜む。

普傳 近習の者、彼れらを供廻りの中に包み、屋敷へ伴へ。

近習 ハツ。

ト雨車になる。

近習 雨具の用意。

ト簾、合羽籠持ち出て、宮城野、お力に、袖合羽、菅笠着せる。昔々も着る。但し花道の人数は其ま、なり、

よろしくあつて

普傳 何かは屋敷で。乗り物やれ。

近習 ハツ。

ト近習、口を開てる。直ぐに南無ひかする。

お生。

行列 ハア、。

トまた所知入り、きつぱりとなる。行列の人数、列を正し、宮城野、お力、この中へ交つて、各々並よく向うへ入る。よろしく入りせると、所知入りをかすめる。橋の下より七、向うを見送り、普傳が二人を匿まひしは心得ぬと云ふこなしをして、その身も屋敷へ

紛れ込む心にて、あたりを見廻し、落ち散りし合羽笠を取り、着て、花道へ行きかける。ト橋が、りより佐五平、宮城野を尋ねる心にて走り出る。臺七ちよつと立廻り、笠の紐を締めて、ツイと向うへ入る。佐五平、これを見て、心得ぬこなしにて、同じく落ち散りし笠、合羽を取り、手早く着て、笠を頂く。チョンと木を入れる。こなし、よろしく、向うへツイと入る。キザミ拍子木にて。

幕

### 四 段 目

富士裾野道行の場

役名 大福屋宗六。同妻、お倉。宮城野妹、信夫。入間の與茂吉。歌比丘尼、名月。

造り物、淺黄幕にて、幕明けける。ト口上出で、觸れしまふ。上手に出語り。

ト遠山も、笑ふが如き春畫、たつや日敷の積り來て、隙行く駒に戀と云ふ、重荷を乗せて行く空の、雁は越路に歸れども我れは故郷の傳手だにも、知らぬ信夫と與茂吉

は、後にもつがひ蝶々の、草にこぼすや白粉と、紅の艶さへ光りよき、江戸繪姿の旅はゞき。

トこれにてチョン。花道、中程セリ上げにて、宗六、着附け半合羽。お倉、旅行きの形。信夫、同じく、奥茂吉、着流し、四人、帯脚絆、何れも旅の形にて、見得よくセリ上がる。これと一緒に浅黄幕、切り落す。奥深に山續き、この奥へ富士山、雪覆りし儘にて、しかんくとセリ上がる。

見上ぐれば、鹿子まだらに雪消えて、麓に三保の結び松、浮島の原吉原の、宿から宿へ櫛の齒を、引きもちきらぬ旅人の、つれて上下の早飛脚。

トこの淨瑠璃にて、富士山の裾野、板松の間を旅人の仕出し、思ひく、飛脚、馬士など、子供にて、遠見の模様、段々通る。

エイサツサ、さても見事なお慕籠馬よ、よそに往來の先になり、又後にたり、駿河なる、富士の裾野の朝露や。

宗六 コリヤ、入間。なんとマア、見事な富士の景色ぢやないか。爰で一休みせう。その間に、あの信夫めと、思ひ入れ、濡れて見せい。

くらそれがよからう。

洒落におだてを眞實に、受けて信夫がいきいきと、嬉し涙の手を合せ、拜み申そ且那樣、海よりや深い山よりや高い、でつかちない御恩だよ、これサア、存アとお身様は、なぢよに驅され申さない、但しや嬉しくはあり申さないかいの、この御恩うんらは仇にやせんぜいの、詠りは耳に入間者、人の詞とは裏表、好かんと云ふのが好いたので、どうぞそさまを女房に、持ちとむないと明暮れに、思ひ暮らさぬおれが氣は、まアくどうどんなものぢやと思やるな、オ、サ嬉しくおんぢやるはと、詞はひね木もこの花、恥かしがながもどかしさ、お倉が寄りて結ぶ縁、ほんに二人の戀風を、わしが引いたかヅツとする、さア兩方から押したり、しつかりと、わしを挟んで押したり、オ、寒む、まだく押したり、そこで斯うぢやと身を後へ、はづすはづみにびつたりと、抱き合ひたる妹育中、顔赤めてしよげりける。

宗六 ハ、なかく出かし居つた。誠に古へ、曾我兄弟の人々、あの富士の裾野にて、親河津の敵、工藤経を討つたとある。この度の門出に、曾我物語をちくとんばかり、致せ。

奥茂 イ、ヤ、合點ぢやない。  
 合點ぢやないと立ち上がり、鎌が信夫無理なりに、相手に取つて減多振り、宗六煙管で拍子とる。さしにも廣き富士の裾野に、數萬の射手は入れ違ひ、分取り數多いたしける。曾我兄弟の人々は、敵に巡り逢はんとて、前後左右に鞭を隔つて居たりける。斯くとは知らず麻經は、三枝ある鹿を射留めんと、かり跨がつて駆け廻る、五郎日早き若者にて、すは麻經と見るよりも、鹿こそ通れと叫ば、十郎はつと嬉しくて、廻りを打つて追ひかける。弱き馬に強く手綱をかいければ、とある伏木に爪づいて、馬諸ともに眞逆さま、ぼつさりこどつさりこ、時宗慌て兒責を起すか馬を刷るか、はつつけめ畜生め、ほてツ腹めと、兄も弟もぼやいたく、ぼやくも道理だ、やれくなんたる煩さいこつたよ、君が心は丸太船かや、くれく、駿河の富士や三里の、急に打ちたい、併し敵が艦船着き切り、洗濯物でもござるまいぞや、石に竹針打たれぬく、いつそ大阪の手打ち連中を頼んで見やうか、なんのかのとて敵が入間の詞もむしやくしや、ひけをんだは、さりととはく、煩いこつたよ、ほ、ほ、ほ、はい、アイほつとした、出来たくと煽ぎ立て、笑ひ

は旅の憂世忘れぬ歌比丘尼。

トこれにて花道より、比丘尼名月、板扉を鳴らし、後に柵を差し、出る。

梅は匂ひよ櫻花 人は眉目より只心、ちとくわん、飄ずれば煩惱の、人も晴れやかに冥々たる、人界の眼りを覺ます松の風、極樂のく、菩薩の誓ひと聞くなれば、雪や氷や名を隔つらん、萬法皆一如なり、實相の門に入らうよ、悟りて過ぐる法の道、一人とぼく歩み來る、山へ行て合點ぢや、裾をしようんからげてざんぶりと、海にせい、おつと心得山又山に、東山のなアく、おふや出やる出やる、中でつかりしよく、けつたしよく、けつたしよのお月隠す奴は、礎な奴は隠さないでは、月を便りに野良戻り、これも入間の習ひかや。

宗倉 なかく出かしたく。

奥茂 なんと、これはどうあるまい。これから皆が手を揃へずに、一踊り踊らんとは、どうあるまい。  
 くら そりやよかる。サアく主、お前も一番踊りなんし。

宗六 おらは、そんな事は不得手。免せく。  
 くら ハテ、さう云はずと

皆々 踊ろく。

トこれより五人並び、摺り鉦入りの踊りになる。  
陸奥の名所は数々ござる、中に松島、宮城が萩よ、野  
田の玉川飛ぶ干鳥、文の取りやり瀬木などは、ほんに田  
舎の戀ぢやもの、唄ふ姿も一やうに、飄ふ聲々色鳥の、  
翼ならべて行く空の、霞が中の清見寺、後に見なして東  
路や、鎌倉さして急ぎ行く。

トよろしく。

幕

### 五ツ目

駿州粟島館の場

役名 粟島甲斐之介、松江藏人、辨の義成、實ハ  
奴綱平。息女、雛形姫。腰元、彌生。同、若草。  
同、緑遊。同、三笠。同、青柳。江尻藤太。沖津  
新吾。蒲原右内。奴、砂平。同、右内。同、土手  
藏。同、松助。船頭、平戸の島藏、實ハ熊本勇八。  
若内娘、宮城野。米屋宅右衛門。大瀧法印。志賀  
臺七。下郎、佐五平。同女房、お力。楠原普傳、實  
ハ森唐意軒。

造り物、平舞臺、向う世話襖、上の方折り廻り明り障子屋體、橋が、り屋敷塀、右は駿河の國粟島家城内、長屋の見得。幕よりお力、手拭鉢巻にして、裾絆、腕かけ、よき所に米搗き臼を置き、大きな杵を持ち、米を搗いてゐる。土手藏、右内、砂平、松助、右四人、中間にて、松助は俵を明け、搗いた米を箕にて入れてゐる。土手藏は、米の入りし俵を纏にて括つてゐる。右内、砂平は、米の俵をかたげ、橋がかりよき所へ俵を運んでゐる見得、この體にて遙か奥にて、祈りの體にて、鈴の音、鼓の音にて祝詞、橋が、りの後にて、太鼓入りの踊り三味線、この模樣にて、幕明ける。

土手 ソリヤよいぞ。

砂平 ト俵をこかす。

右内 オ、合點だ。

松助 ト俵を振りかたげ、砂平の方へ持つて行く。砂平、取つて

右内 めめたぞ。

松助 なんと、一服と出かけうかい。



上手 オ、よからう〜。

松助 お力女郎も休まつしやれ。

りき イエ〜、わたしや、ねつからしんどうござんせぬ。  
なんぢややら、奥御殿には御祈禱があるやら、鈴の音が  
するやら、長がボン〜と鳴るやら、こちらの方では  
太鼓三味線で踊がある様子。あの拍子に乗つて米を搦  
くに依つて、とんと気が勇んで、しんどい事はないわい  
なア。

砂平 イカサマ、おれ達もあの音を聞くと、尻がヒヨイヒ  
ワイ踊り上がるぞ。

りき ありやマア、なんでござんすえ。

右内 イカサマ、お主は、やう〜この頃この家へ来たに  
依つて、委細を知らぬは尤もだ。

松助 米の俵を括りながら、話して聞かさうかい。

りき そんならわたしも、米を搦き〜聞きませうわい  
な。

上手 オ、さうしろ〜。

ト数々、俵を括らへながら話しする。お力、米を搦き  
ながら話を聞く。

さて、斯うだわい。あの道か奥に鈴の音がするは、あり

やこのお屋敷の殿様、栗島甲斐之介さまが、三年先に、  
七草一揆と合戦を遊ばされ、難なく七草勢を討ち亡ぼし、  
御寶陣の後に、フト御病氣差發り、典藥家がいろ〜と  
しても御本腹がない。そこで、もし七草一揆が邪法の仕  
業を以つて、亡ぼされし無念の魂、殿様を憐れすも知  
れぬとあつて、御家臣松江藏人さまが、駿河一國の修験  
者を毎日呼び寄せ、あの通りの御祈禱だわい。

りき それで、あの鈴の音は聞えましたが、御病氣の中で、  
あの踊りわえ。

右内 オ、サ、あれも藏人さまのお指圖、邪宗門亡びた妄

念は、正しく陰氣の司どる時刻を考へ、障礙をなさん、

それゆゑ打ち雑子、踊などは陽氣集まるものゆゑ、家中  
の女中子供を集め、晝夜分たぬ踊の拍子だてや。

りき ムウ、それで踊の様子も知れましたが、わしや又、

榊原普傳さまが、御家老様とやら存じて居りましたが、  
その松江藏人さまと申しますも、御家老でござります  
かえ。

松助 オ、サ、このお屋敷には榊原普傳さま、松江藏人さ

ま、御兩所ともにお家の兩翼だわい。

りき 普傳さまも御發明なが、また藏人さまも、お賢いな



ア。

砂平 イヤ又、普傳さまが、彼の七草攻めの時、一番に敵の城へ切つて入り、花々しい戦ひ。敵は大勢、普傳さまは只一人。大方討死をなされたであらうと思ひの外、七草亡びて御凱陣のその時、御存命でお歸りなされたゆゑ、一家中の喜び。それから普傳さまの羽振りは益々の當家の重家老さまと云ふは、あなたの事ぢや。

りき 成る程、普傳さまの御威勢は、きびしいものでござります。殊にお情け深いお志し、なんの所縁もないわたしら二人を、お匿まひ下されまして、此やうな長屋に置いて下されます冥加の爲、米を搦いたり水汲んだり、女の手業に荒くれ仕事。姪んに、さんない女子ぢやと、皆様、笑うて下さりませえ。

右内 なんの笑うてよいものか。自體長屋の飯米は、いつもこちとらが搦かねばならぬ。

松助 ところを、お主を頼んで搦てもらふは、女子に稀れな大力ゆゑサ。

土手 おいらが手助けをするお力女郎。コレ、その代りに、今夜はおらが、お主が手足も腰も、撫り下ろして上げるによる。

トお力が手を搦まへる。お力、嫁がり

りき ア、コレ、悪い事さつしやるないなう。

土手 なんの悪い事。よい事だぞく。

トとりつかうとする。お力、ムツとして

りき エ、アタしつこい、措かぬのかいの。

ト片手にて、土手藏が腕を取つて、捻ち上げる。

土手 アイタ、、、。こりや、なんとするく。

りき なんとするとは、コレ、わしには佐五平と云ふ、歴

とした男があるぞや。その主ある者に、てんがうするに

依つて、重ねての爲、コレ、斯うして置くのぢやわいな。

な。

ト突き飛ばす、土手藏、むがう轉ける。

仲三 ハ、、、、女に負け居つたわい。

ト三人笑ふ。土手藏、腹立つて

土手 こりや又、あんまりだがな。

トお力が胸倉とる。

りき ナニ、猪口才な。

ト取つて投げ

いつそ。

ト杵を取つて振り上げる。皆々驚ろき

松助 コリヤ、得てく。

右向 おらね挨拶だく。

砂平 料簡しろく。

ト三人、お力が竹の手に取りつく。

りき イ、ヤ、遅いたく。

ト三人を取つて懸る。

三人 此奴、挨拶人をどうさらす。

ト三人、取りつく。

りき オ、響うするわい。

トまた三人を上げて、そこにある米俵を取つて、皆々

に打ちつける。四人、逃げ廻る。ト、白、橋が、りの方へ、

コロボと叫んでゆく。これにて皆々、橋が、りの方へ逃

げて入る。此うち船橋、踊り三味線、祝詞なり。お力、

皆々の逃げて入りし跡を見て

りき ハ、ハ、ハ、男の形をして、あのマア若い事わいの。

ホ、ハ、ハ、

ト、ハ、ハ、

ト、ハ、ハ、

ドレ、く、マア、おれが片付かませうか。

トまた踊り三味線、祝詞にて、向うより佐五平、旅姿

にて、息せき出る。

佐五 さてく、大きなお屋敷だ。この長屋に居るか。

ト云ひく、出て来て、お力を見付け

お力でないか。

りき オ、佐五平どの。今も今とてお前の事を云ひ出し

て居たわいなア。コレ、さうして敵臺七が

佐五 コリヤ。

ト押へる。お力も、こなしあり。

どこにどう云ふ所縁があるまいものでもない。大きな聲

をすないやい。

りき アイく、さうして様子はえ。

佐五 さればサ。この間、矢野の橋で臺七を見付け、なん

でも高ち着先を見届け、宮城野さまに本望遠げさせま

せうと、臺七が後を慕うて荒井今切、何が番所の前で、

どごくさ船に乗り遅れ、臺七めを見失ひ、普傳さまのお

世話なされて、このお屋敷へ三人ともに置まはれ、今朝

普傳さまの御意に随ひ、敵臺七、藤枝の宿に居るとの事

ゆる、今朝早々より駆け出して、宿の入口から一軒々々

吟味したれど、様子が知れぬ。定めし宮城野さま、其方

も察じて居らうと、直さま取つて返して、やうくくと今

戻つたてや。

りき イヤモウ、宮城野さまも、この力も、大抵案じた事  
 かないア。戻らしやんした様子を、宮城野さまへ。

宮城 イヤお力、聞きましたわいなう。

ト襖を明け出る。

佐五 ホウ、宮城野さま。

宮城 佐五平、いかい苦勞をしたもなるなう。矢矧の櫓で、  
 わしもお力も、この屋敷の御家老、権原普傳さまのお世  
 話になり、爰に逗留ももう三日餘り。

りき ほんにモウ、お情深い普傳さま、お前が戻らしやん  
 したら、早速に知らせ、敵臺七が在所知れたら、供々に  
 力になつてやらうと、仰しやつてござるわいなう。

佐五 オ、サ、行く先に鬼はないわい。元來この粟島家の  
 お妹君と、おらが國の若殿様とは御縁組み。その家中  
 の杉本甚内が身寄りの者と聞き、普傳さまがお世話なさ  
 れ下さりまするも、矢張りお主様のお庇。コリやお力、  
 おれが立歸つた様子、普傳さまへお知らせ申して來い。  
 後程お日にかゝつて、何かのお禮申し上げうわい。

りき そんならわたしは普傳さまへ、ちよつとお知らせ申  
 して來う。宮城野さま、ツイ行て參りませう。

宮城 そんなら大儀ながら。

りき ア、申し、たんの大儀な事がござりませう。ドリヤ、  
 行て來うか。

ト合ひ方になり、お力、橋が、リへ入る。佐五平、下  
 にみる。

佐五 宮城野さま、御免なされませ。

ト兩脚投げ出し、草鞋繩を解きながら  
 さて／＼歩いたく。あの又臺七め、腹の違者な奴。何  
 か圍籠からは付け出して、荒井の番所まで、後になり  
 先になり付けて來たが、今切の船で間違うたか、但し荒  
 井から本坂越えに行き居つたか。なんでもえらいめに遣  
 はせ居つたて。

ト掃ざりふ云ひ／＼、脇絆、草鞋を解いてゐる。宮城  
 野、此うち箕盆を引寄せ、火入れの灰をならし、懐  
 り香包みを出し、香を焚き、手を合せ

宮城 今日ば父上の御命日、御供養申しませうにも旅の空  
 心ばかりの手向け。南無阿彌陀佛々々々々々々。

佐五 ア、世が世の時であらうなら、千僧萬僧の御法事  
 をなされうもの。この憂き艱難も敵臺七が爲す業。

宮城 父上お果てなされずば、谷五郎さまと、めでたう夫

鈴にならうも、  
ふも、みんなあの薬七ゆゑ。エ、恨めしい。お懐かしいは谷五郎さま。昨夜あり／＼とお刺を見て、明日は逢はうとたつた一言、本意ない夢のさめ／＼と、涙やるではござんせぬ。谷五郎さま、お懐かしうござりまするわいな。

佐五 ト泣く。佐五平、こなしありて  
お道理だ／＼。

宮城 ト共に涙を流す。宮城野、療の差込むこなし。  
ア、／＼。

佐五 ト我が手に腹心押へ、苦しきこなし。佐五平、驚ろき  
なんとなされました／＼。

ア、こりや氣だ。ア、コレ、御家中に鎮立てがあらうけれど、どの誰れがどなたやら勝手知らず。オ、幸ひ／＼、おらがこの右の手は義指だ。これで撫でると氣の毒、ドレ、もつと撫つて上げませう。ドレドレ、先づ枕を上げませう。  
ト木枕取つて宮城野にあてがひ、寝ころばし  
長に汗もあまるワ。

ト溝取つて来て、宮城野に着せ  
ドレ、あつと撫りませう。

ト宮城野が胸先を撫で

ホウ、こりや餘程胸先から腹へ向けて、突ッ張り返つて居るワ。これでは術ないもお道理だ／＼。ドレ、わたしがこの義指で、療の頭を、コレ斯う押へると、それ／＼、齒のボグウ／＼と鳴きまする。谷五郎さまの事を、聞くれ難ひ裏うてござる、おどもりがこの盡めだ。イカサマ、積ると書いて療とよむ。尤もな事だなア。

トこの臺詞云ひ／＼、宮城野を撫つて居て、思はず下へ手をやる。宮城野胸り。佐五平も惘りする。

宮城 コレ佐五平、何しやるぞいなう減相な。

佐五 ヘイ、お免されて下さりませ。思はず知らず頬相干

萬な事を仕りました。

宮城 オ、わしや悔りしたわいなう。

佐五 あなたより、私しが上氣仕りました。ハテサテ

益障もない。

ト云ひ／＼又呻に撫る。

宮城 イヤ、コレ佐五平、其方の願ひはいつまでぢやや。

佐五 ハイ、三年が間と限りましたが、もう二年の上も經

ちましたれば、僅か半季餘りになりましたて。

宮城 早う其方の願が、満たさしてやりたいわいなう。

佐五 そりや、なぜでござりまする。

宮城 サイナウ。お力と女夫になりやつたと云ふ名ばかり

で、まだ一緒に兼やらぬぢやないかいなう。わしが谷五郎さまの事を思ふにつけ、お力の心根を推量して、どうぞ其方も願を早うしまりて、お力と寢せてやりたいなう。

佐五 ハテ減相な。私しが命替りの禁酒不淫、減多にや破る事はなりませぬてや。とは申すもの、お力が心根、思ひやれば、不便な事でござりまする。奥様のお指圖で、夫婦になりましたれど、只の名ばかり。それを又不便に思し召し、どうぞ早う願をしまりて、お力めに堪納させてやれと仰しやる、あなたのお志しの忝なさと申すものが、どうも斯うも詞に盡されませぬに依つて。

ト矢張り擦りく、この臺詞のとまりに又、下へ手をやる。宮城野また恠りする。佐五平も恠り、こなし。宮城野、物云はずに佐五平が顔を見ながら、そろく起きる。佐五平、面目なさうに、サリくとこちらへ来る。宮城野、立つて奥へ行かうとする。佐五平、

宮城野が裾を捉へ、デツと引きとめる。

宮城 佐五平、なんとしやるぞいなう。

トわな／＼慄うて云ふ。佐五平、宮城野が裾をサツと控へながら、下より顔を見る。

佐五 ても美しいものぢやなア。

宮城 ヤア、。

佐五 惚れました。

宮城 ヤア、。

佐五 どうぞ叶へて下さりませ。

ト宮城野、佐五平を振り放し、慄ひを止め、心を落しつけたこなしにて

宮城 不忠者めが。

トずつと奥へ行かうとする。佐五平、宮城野を引き廻し、向うへ廻り、下にゐて

佐五 不忠、合點。

宮城 ヤ。

佐五 非義非道と云はれうが、どうもなりませぬ。宮城野

宮城 そんならアノ、眞實に。

佐五 何偽はり申させう。如何にも、國を出まして今日



の只今まで、忠義一團の佐五平め、今あなたのお腹を撫で、居りますうちに、見れば見る程、ても美しい顔だなア、這ッつけ首尾より本望達げさつしやりましたら、谷五郎さまと、ア、羨やましい事だなアと、思うたが因果の始め、お主様も忠義も打忘れ、ぞつこん心から、底から惚れました。申し宮城野さま、不便な事と思つて、どうぞ御得心なされて下さりませ。申し、コレ、手を合せます。これだ／＼。これでござりまする。

ト泣く／＼手を合せ、宮城野を拜む。宮城野、ヤツと俯向き泣いてゐる。佐五平、又キツとなつて

また斯う云ひ出すからは、否でも應でも、聞いてもらはにやなりません、違て得心さつしやれば、佐五平が命は、投げ出して居りますぞや。

宮城 ヤア、。

佐五 得心して下さりますか。

宮城 サア。

佐五 否か。

宮城 サア。

佐五 應か。

宮城 サア。

兩人 サア／＼／＼。

トちつと付け廻し

佐五 どうも堪へられぬわいなう。

ト宮城野に取りつく。アレイ／＼と跳くはずみに轉ける。所へ橋がよりよりお力、何氣なう戻つて来て、この體を見て恟りして、ツカ／＼と行き、佐五平が首筋取つて

りき コリヤ、何するのぢや。

ト取つて抛る。宮城野、起きて

宮城 ヤアお力か、よう戻つてたもつたなう。

トお力に取りつき、泣く。

りき マ、なんの事ぢや。とんと譯が知れませぬ。マア、様子を仰しやませ。

ト云ふうち、佐五平、お力を引き退け、直ぐに宮城野

に取りつく。お力、興ざめ、佐五平を引き退け、胸倉

取つて下へトンと突き据ゑ

コレ佐五平どの、様子は聞かねど、この體たらく。コリ

ヤ、こなさん、病が發つたな。

ト云ふうちお力を又引き退け、宮城野の方へ行かうと

するを、お力、止める。佐五平、また振り放し行くゆ

ゑ、引きつけて

エ、こなたはなう。

トまた引き起し

コレ、お主様のお情で、こなたと夫婦になつたその夜に、こなたが云ふには、コリやお力、おれは生れついて酒を呑むと、心が狭らになつて、色深い病がある。先達て旦那のお供先にて酒を呑み、お上の女中に不義云ひかけ、既にお手討ちに遭ふべき命を、助かつたはお主人のお慈悲、それゆゑ三年が間精進禁酒不淫の大願、三年が間は女房持つ事はならぬけれど、お主の御意、違背はならぬに依つて、其方と夫婦にはなるものゝ、三年が間は辛抱してくれいと、事を分けて云はしやんすゆゑ、如何にも合點でござんすと、祝言の杯してから、今日までまだ庭は踏みませぬぞや。その義理も思はず、勿體ないお主様へ不義放埒。こりやこなさま、酒飲ましやんしたの。そりやモウ旅勞れの事ぢやに依つて、酒飲ましやんすなと云ふではござんせぬけれど、悪い病があると知つて、酒飲むとは情ない。コレ、親且那様が果てなされてより、お身に願ひのある宮城野さま、木にも萱にも心を置くわたら二人が、便りにするは、廣い世界に、こな

さんより外にはござんせぬわいなう。

ト泣き

大方何心なる草臥れ休めに、酒一つ飲ましやんしたのでござんせう。酔が醒めたら、矢ッ張り元の佐五平どの。先刻にからの無禮は、酒の科でござります、何事もお免しなされて下さりませと、ちやつと宮城野さまへお詫び申さしやんせ、エ、コレ、佐五平どの。

ト云うても佐五平、うつとりと宮城野が顔を見てゐる。宮城野、袖にて顔を覆ひ、嫌がるこなし。お力、いろ／＼云うても兎角、佐五平、宮城野を見てウツトリとなつて居るゆゑ、キツとなつて

そんなら、どのやうに云うても。

佐五 思ひ切られぬわいなう。

トまた宮城野の方へ行かうとするを、お力、佐五平を引ッ掴み、動かさぬこなしにて

りき ア、宮城野さまは、爰稽はずと奥へ／＼。

ト宮城野、奥へ逃げうとする。佐五平、お力を振り放し、宮城野が帯に手をかける。お力、佐五平を引き退けうと首筋取つて引く。宮城野は、逃げうとする。このはずみに宮城野が帯ほどけ、宮城野、帯の端を持つ

て懐ふ。佐五平、キツと帯を控へる。お力、佐五平が  
帯を取つて

エ、こなたはなう。

トきつとひしぎつける。ト踊りの唄、チョンチョンに  
て消具烈る。トまた踊り三味舞、祝詞になる。

造り物、三間の間、二重舞臺、向う一面に幕、黒塗  
り杉戸、東西後ろ高懸、前に兩方とも柴垣、右二重  
舞臺の縁先に堀原普傳、着附け羽織、袴にて座り、  
貫翁前に置き、舞草のんでゐる。と向うより土手  
藏、右内、砂平、松助、右四人の奴、出て手を突

き  
土手 普傳さまへ申し上げます。先頃袖師が浦へ乗り込  
みましたる船垣の船頭、平戸の島藏、何卒御吟味相濟み  
なば、一日も早う出船仕りたき願ひ、お取次ぎを頼み  
ます。

右内 ハッ、お蔵米の米方宅右衛門、先達てお願ひ申し置  
きましたる半切手の儀、何卒お聞届け下されましますやう  
に、又々相願ひ居りますやうにござりまする。  
砂平 御領分の百姓、藤堀山の大木を伐り取る儀、不承知

ゆる、土意を背くとあつて庄屋組頭の者、村方惣名代に  
揚り屋へ留め置かれましたる者ども、何卒御免の願ひ只  
管仕り居りますやうにござりまする。

松助 潤津の者ども、千貫樋破損につき、金子御拜借の願  
ひ、何卒お聞き届け下されまゐるやうにと、推して詮議  
仕りますやうにござりまする。

土手 右四ヶ條の願ひ

右内 取次ぎを相願ひ居りまする。

松助 それゆゑ普傳さまへ申し上げます。

砂平 これへ呼び出しますせうか。

四人 如何仕りませうな。

普傳 ムウ。その者どもは相役、松江藏人が申しつけたる  
儀。遣ツつけ藏人、登城仕り次第、普傳立會ひ、事落  
着いたしてくれう。今暫らく控へ居れと申し聞かせい。  
四人 畏まつてござりまする。

ト向うへ走り入る。とバタ／＼にて、橋がよりより宮  
城野、帯をしやらどけに、しどけなき體にて走り出て  
二重舞臺へ駈け上がる。

宮城 申し、どうぞお助けなされて下さりませいなア。

ト普傳に取りつく。普傳、驚ろく所へ、又バタ／＼に

て佐五平、髪を亂し、拔身を持って走り出る。後よりお力、續いて走り出る。

りき 待った。

ト佐五平を留める。佐五平、お力を振り解いて、宮城野方へ拔身を振り上げ、行かうとする。お力、佐五平が拔身の手を腕掴みにして、見事にしつかと止める。

普傳 宮城野お力、佐五平が血相、仔細はなんと。

りき ハツ、申上げますも面目もござりませぬ。夫佐五平が宮城野さまに無體の纏慕。御得心ないを憤り、勿體ないお主様にこの手向ひ。

普傳 ハテ、憎い下郎め。主に刃向ふ人外には構はずと、兩人ともに、早くこの場を立退け。

宮城 ムウ。この場を立退けとはな。

普傳 この屋敷の内に、敵臺七に所縁ある者がある。さすれば汝達が身の禍ひ。一先づこの場を立退き、鎌倉に身を忍び、本望遂げよ。ナ、合點か。

宮城 段々のお志し。

佐五 イ、ヤ、この場はやらぬ。

トまた宮城野方へ切つて行くを、普傳、煙管にて、拔身を打ち落し、直ぐに首筋取つて、縁側へ引きつけき

普傳 兩人ともに、早く〜。

宮城 ハイ、合點でござります。

ト宮城野先に立ち、お力、花道へ行かうとする。佐五平、あせつて、普傳を振り放し、宮城野方へ行かうとするを、お力、佐五平を捉まへ

りき 夫婦の縁もこれ限り。エ、見下げ果てた。

ト打ちつける。佐五平、また行かうとするを、普傳、二重舞臺より下りて、刀の鐙にて佐五平を當てる。宮城野、お力、こなし。

普傳 未練残さず、早く行け。

トきつと云ふ。佐五平、バツタリと轉ける。お力、佐五平方を見て、こなしありて、氣を替へ

りき さうぢや。ござりませ。

ト宮城野と入れ替り、手を引いて向うへ走り入る。普傳、髪を見送り、ヂツとこなし。翻かな合ひ方になり、上手の柴垣を押分け臺七、メツと頬を出し、向うを見て、こなしあつて、そろ〜柴垣を出て

臺七 普傳さま。

普傳 志賀臺七。

臺七 兼ねて軍學の師と頼まん爲、國元よりよしみを通ぜ



し普傳さま、この程のお心遣ひ、千萬彗なう存じまする。

普傳 お身を敵と付け狙ふ宮城野、矢矧の橋より匿まひ歸りしは、打ち放さうばかり。併し、お上より御免あつた敵討ち、屋敷で殺せば跡むづかし。この下郎めさへ遠ざけ置けば、例へ大力の女郎め付き添ふとて、何程の事があらう。跡よりぼツかけ、途中でぶち殺し、後日の弱むを障きやれ。

臺七 心得ました。次手にその下郎めも敵の餘類。

ト刀に手を掛け、行かうとする。普傳とめて

普傳 待ちやれ。それには及ばぬ。

臺七 ムウ。及ばぬとな。

ト普傳、印を結び、天に向うて合掌する。ドロ／＼にて佐五平、すつくと立ち上がり、それなりにセリ下がる。又大ドロ／＼にて佐五平が消えたる所に、錦の袋に入れたる邪法の鏡飛び出る。仕掛けにて、普傳が手にとまる。臺七、惘りして

臺七 これは。

普傳 邪法の神寶、弟と名付けし名鏡。

臺七 すりや、佐五平と思ひしは。

普傳 この邪法の鏡の徳を以て、佐五平が姿を顯はし、宮城野に無體の戀慕と見せたも、皆この鏡の奇瑞。

臺七 して、誠の佐五平は。

普傳 某が辯舌に乗り、汝が在所を詮議せよと、今朝近在へ遣はしたれば、まだ歸らぬ。さるに依つて、我が計略を以て、佐五平が姿を顯はし、宮城野に不義の體に見せしゆゑ、この後佐五平は、不忠者となつて、つゞまる所は佐五平は、腹かツさばいてくたばる。コリヤ、其方は女郎どもに、後より追ツつき返り討。

臺七 して、その道筋は。

普傳 相州鎌倉。

臺七 すりや、下り街道。

普傳 行きやれ。

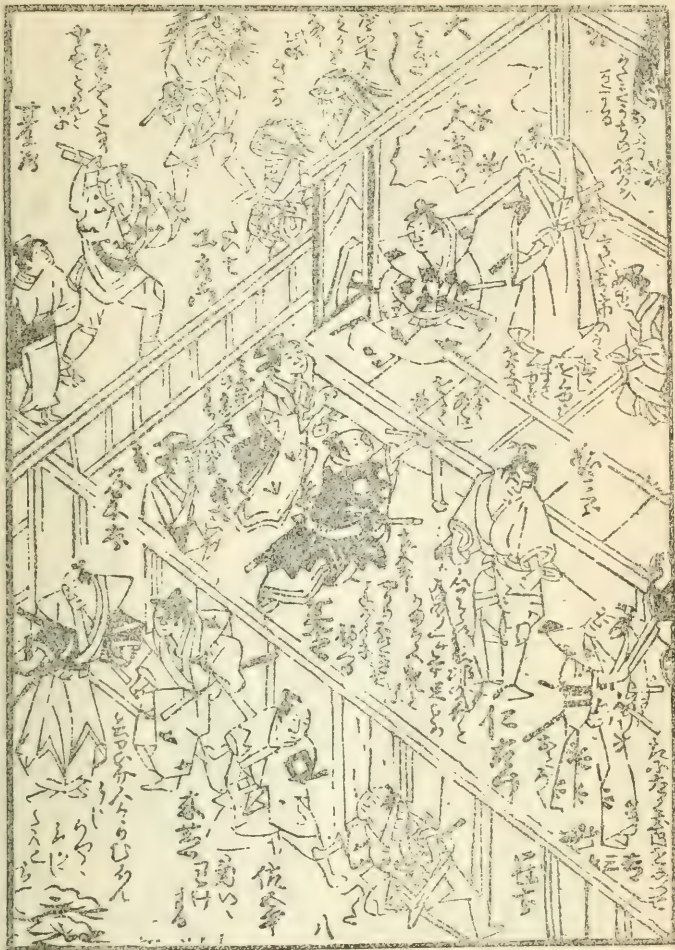
臺七 おさらば。

ト臺七、向うへ走り入る。此うち始終合ひ方にて、普傳、臺七が、跡を見て、右の鏡を懐中する。ト橋がムリバタ／＼にて、誠の佐五平、旅より戻りし體にて出て

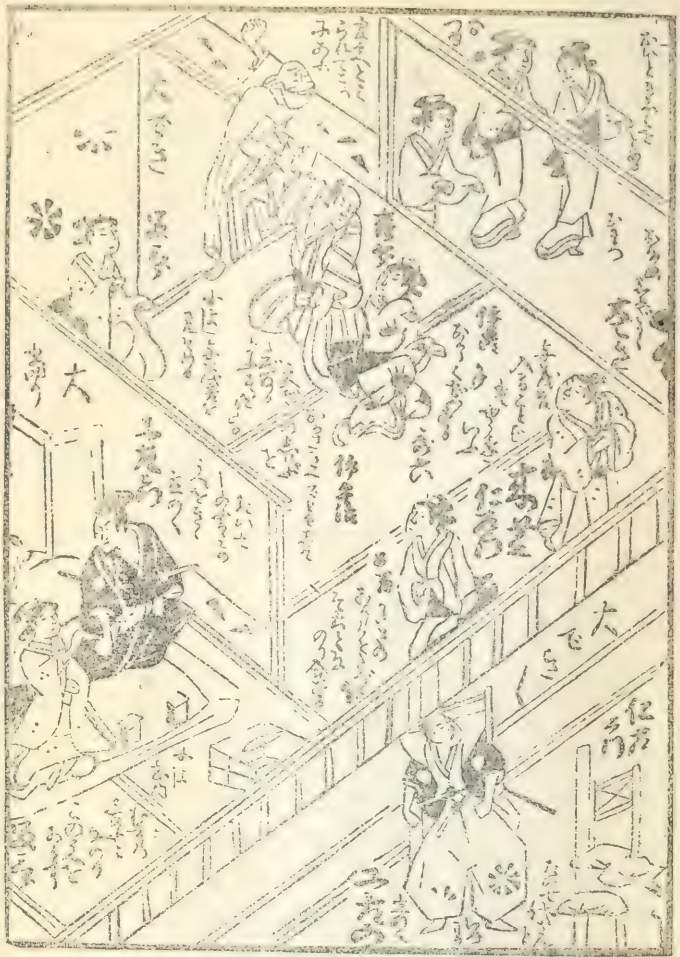
佐五 ヤア、これは普傳さま。

普傳 佐五平、今歸つたか。





の 演 再



附 巻 終

佐五 ハツ、お詞に随ひ、藤枝の近邊を縦横十文字に駆け廻り、吟味いたしましたれども、なんの手がかりも相知れませぬゆゑ、立歸つてお長屋を見ますれば、宮城野さまもお力も居りませぬが、二人ながら、どれへ参りましてござりまするな。

普傳 オ、宮城野お力は、敵臺七が跡を慕うて、追ひかけさせた。

佐五 すりや、臺七めは。

普傳 上方街道を轡子の方へ。

佐五 これより直にぼツかけて。

普傳 宮城野お力が加勢を致せ。

佐五 して、兩人が追ひかけたは

普傳 最早一時以前の事。

佐五 南無三、さすれば餘程の後れ。

普傳 猶豫いたすな。

佐五 一時三里。

普傳 暫時も早く。

佐五 此まゝお暇。

普傳 急げ〜。

佐五 ハツ。

ト勢ひ込んで向うへ走り入る。普傳、跡を見て、につたりと笑ひ

普傳 ハテ、蹴くワ〜。

トあざ笑ふこなし。チョン〜にて廻り道具。また踊り三味線、祝詞になる。

呼び

勅使のお入り。

ト管絃になる。二重舞臺、本舞臺の皆々、構はず踊つてゐる。矢張り踊り三味線、奥には祝詞、管絃一緒になる。向うより辨の兼成、黒の装束、冠、勅使にて、後より仕丁六人附添ひ、静々出て来る。と橋がかりよ

右内 蒲原右内、江尻藤太、沖津新吾、着附け社杯、家中にて勅使を出迎ふ體にて  
 ヤイ、お勅使のお入りなるぞ。  
 藤新 鐘まらぬか。

ト云ふに四人、驚り止めて橋がりに座る。雛形姫、昔々、花竹を驚ぎ、右内、着附けの上に橋補を着る。昔々右の跡の形にて出迎ふ。兼成、花道よき所にて立ちとまる。

雛形 お勅使様には遠路の所

右内 御苦勞の御入り

藤新 先づ〜あれへ

昔々 お通り下されませう。

ト矢張り管絃にて、兼成、静々と、二重舞臺へ上がり床几にかゝる。仕丁昔々、藤がりへ入る。雛形姫、右内、藤太、新吾、彌生、青柳、糸道、若草、子供昔々平無氣に並ぶ。この時踊り三味線止めて、祝詞ばかり打つてゐる。

兼成 勅使の趣き儀の儀にあらず、粟島甲斐之介儀は、三ヶ年以前七草一揆を討ち亡ぼし、凱陣の後、彼七草が實、儀と行付けし邪法の鏡、甲斐之介持参いたし、禁

庭へ参内すべきところ、病氣と云ひ立て延引の届けとあつて、家老権原普傳、先比上京いたせし、その勞をいたはりあつて、暫時の日延べを賜はりしところに、今に於て参内もせず、等閑に打捨てある事、且は禁庭を輕んじたる仕業。さるに依つて、辨の兼成、勅使として遙々下向せしは、甲斐之介が病氣、見届けよとある。勅使の趣き斯くの通り。

右内 勅使の趣き、恐れ入りましてござります。併し主人

甲斐之介、病氣の儀、毛頭相違はござりませぬ。三ヶ年

以前七草亡び、凱陣の途中より俄かの病氣、察するところ七草一揆は、邪法を行ふ曲者。その怨念、主人を憐ま

すと存じられます。

新吾 さるに依つて、奥には修禪者を擧ぎ、晝夜ともに勤

行いとまなく、祈り居りますやうにござります。

藤太 何分主人甲斐之介、病氣本伏仕りますまで、今暫

らく御容赦下さりませうならば

三人 有り難う存じまする。

兼成 イヤ、ならぬ。甲斐之介が病氣その意を得ず、

三ヶ年が間の大病とあるに、見れば女どもには、花笠を

着せて風流の踊り姿、禁庭は病氣と云ひ立て引籠り、こ



りや一家中打寄り、踊の遊びよな。

雛形 イヤ、全く左やうではござりませぬ。兄甲斐之介の

病氣は、正しく邪法の障化にて、陽氣衰へ陰氣に引入れ

まする魔道の業。それゆゑ太鼓三味線にて囃し立て、踊

の手拍子は、即ち神慮を仰ぐ拍子に象どり。

彌生 梅の花笠は、一陽來復の先がけ、勝つ色見する當家

の勢ひ。陽氣盛んの花を頭に頂きまするも、邪法の障

化を拂はん爲め。

青柳 皆一様に、緋の小袖を着ましたは、赤きは陽の司

さ。六の足取り六十餘社の、神様を驚ろかし

糸遊 音頭にかざす日の丸の、扇は即ち日の形。

彌生 千代の始めと云ふ文句は、春の心

青柳 松坂越えたと云ふ文句は

若草 伊勢の神風招く心。

雛形 皆兄様の病氣平癒。

彌生 祈りの爲の伊勢音頭。

青柳 さら／＼菜種菜華の

糸遊 驕り業では

皆々 ござりませぬ。  
ムウ。然らば驕奢の沙汰は、開捨てに致してくれう

が、何分甲斐之介が病氣、見届けよとある勅諭。家中の  
者、病間へ案内せよ。

三人 イヤ、その儀は。

兼成 虚病か。

三人 サア。

兼成 案内するか。

三人 サア。

兼成 兼成、直に見届けうか。

三人 サア。

皆々 サア／＼。

兼成 返答は、なんと。

普傳 その返答、楠原普傳、仕りませう。

ト太鼓、論になり、橋がよりより普傳、着附け長社社  
にて出て来る。後より平戸島藏、船頭の形、町人、百

姓、島藏が後に付き

町人 コレ船頭どの、こちらが願ひも共々に。

百姓 どうぞ願うて下され。

皆々 頼みますぞや／＼。

島藏 サア、よいわいの／＼、おれ次第にさつしやれ。ハ  
イ、御家老様へお願ひ申し上げまする。



ト普傳、橋が、りに立ちとまり

普傳 汝達が願ひ、聞き届けてくれたいが、只今お勅使のお入り。勅使申上げたその上にて、聞き届けてくれ。暫らくそれに控へて居れ。

鳥藏 ハイ、左やうならば、コレ普の案、控へてゐやしやれ。

トわや、云うて、橋がかりへ控へゐる。普傳ズツと通り、二重舞臺の真中に座る。

右内 普傳さま、只今出仕

普傳 なされましたか。

普傳 イヤ、先刻登城仕り、お次に於いて暫時休足。

兼成 ムウ、さては其方が、當家の家老、楠原普傳よな。

普傳 ハツ、お勅使には辨の兼成公。

兼成 對面は今が始め。して、勅答はなんどぢや。

普傳 主人甲斐之介、病氣に相違ござりませぬ。

兼成 イ、ヤ、正しく虚病と思ふゆる。

普傳 ハテ、當家の執權、楠原普傳が病氣と申すからは、相違ござらぬ。萬一お疑ひござらば、某が腹を以て申し

譯仕る。

兼成 ムウ。流石は當家の家老様あつて、大丈夫の返答。

汝が詞に免じ、病氣見届けは許してくれ。

普傳 有り難く存じ奉ります。

兼成 して、邪法の鏡の儀は。

普傳 その儀も追ツつけ、相糺し、勅答仕りませう。

右内 お勅使様には、暫らく奥にて御休息下されませう。

兼成 イカサマ、返答相待つ間、暫時休息。

藤太 雛形さまには、皆を引連れ、お勅使饗應の御用意。

雛形 成る程、何がな御馳走に、兄上様を停養の爲、踊り

も時のお慰み。

彌生 ほんに、それ、暫しも陽氣が怠たれば

青柳 陰氣募つて御病氣の障りとなる。

糸遊 そんなら、一時も早う

彌生 奥にて踊りを

普傳 始めませう。

兼成 お勅使様には、イザ先づ奥へ。

普傳 然らば普傳。

兼成 先づお入り

普傳 あられませう。

ト踊り三味線になり、兼成、先に立ち、後より雛形姫、皆々花笠を持つて入る。

右内 普傳さま、御主人の御病氣、こなた様を始め、我れ  
我れまでも、御病床へは、一人も出入りを止めし松江藏  
人が采配、なんとも合點が參りませぬ。

藤太 察するところ、主人に媚び諂らひ、おのれ一人が當  
家の柱石とならん藏人が我ま。

新吾 それにあなたの腹に替へ、勅使へ勅答なさんとは、  
もし相違ある時は、普傳さまのお身の上。

右内 なぜ主人の病氣、松江藏人に御吟味下されよと仰せ  
られませぬ。

藤太 何ゆる藏人を

三人 お叱ひなさるゝな。

普傳 ナニ藏人を叱ふべき。時刻を延し、某病床へ推參  
して、とくと實否を糺す所存サ。

右内 御尤もの御思案ではござれども、病床の隅々には海  
老鏡御ろし

藤太 間毎々々の襖には皆尻ざし。

新吾 迂濶に寄りつかれぬ殿の御寢所。

右内 打ち破つて通らば、狼藉者の名を取らん。

三人 この儀は如何なされます。

普傳 ナニ、忠義の狼藉、苦しうない。

三人 然らば我れくも  
普傳 來やれ。

三人 ハツ。

ト三人、立ち上がる。普傳、一間へ行かうとする。こ  
の時、正面の襖明け、松江藏人、着付け社衾、ツカッ  
カと出て、普傳を付け廻して一間を匿ふ。皆々、藏人  
を見て

三人 ヤア、松江藏人どの。

普傳 いつの間に登城しやつた。

藏人 只今出仕いたしました。

普傳 お勅使のお入り。

右内 御病氣のお疑ひ

新吾 鏡の詮議も

藏人 イヤ、何もかも承つた。

普傳 藏人どの、お勅使のお疑ひは、普傳が腹に替へて申  
し宥め置いた。この上は殿の御病體を、この普傳が立合  
うて。

藏人 イヤなりませぬ。

普傳 ヤア。

藏人 御病間へは藏人一人、その外は決して無用と、殿の

御上意。よもや違背はなさりますまいな。

普傳 お手まへ一人が呑み込んで、もし違ひのあつた時は。

藏人 松江藏人が腹一つ。餘人の腹は御無心中さぬ。

普傳 すりや、おてまへが腹に替へて。

藏人 如何にも。

普傳 ハテナア。

鳥藏 コレ、皆の條、藏人さまが、お出でなされたわいの。

皆々 ちやつと願うて下され〜。

鳥藏 サア〜、よいてや〜。イヤ、アノ藏人さま。

トずつと藏人が側へ行かうとする。

土手 ヤイ〜、御家老様お立合ひの場所へ、ナウ〜と

廣外な奴。

右砂 下がれ〜、下がり居らう。

鳥藏 イヤ、下がるまいわいの。外の衆は格別、この平戸

の鳥藏、港化日和を行くやうに、いつまで船がかりをさ

せて置くのぢや。高が料と云ふのが。

藏人 この度船籠ヶ浦へ、新たに某が築かせ置いたる船手

の新關。なせ案内もなく、大船を乗り込んだ。

鳥藏 サ、それは斯うでござります。速州灘より變つて來

た俄かの日和、追手海化にまくり立てられ、案内する間もあらばこそ、命から〜乗り込みましたが、誤まりとは申すものゝ、有やうは日和が料でござりまする。

藏人 黙り居らう。こな横道者め。おのれらが近年、風波

嵐など、申し立て、諸色を積みながら、難船破船と偽はり、

賣買の物を高値となし、その利を貪る憎くい奴。それゆ

ゑ、船をとめて置いた。達て歸りたくば、首を置いて立歸

れ。

鳥藏 おやと申して。

藏人 首を刎ねるか。

鳥藏 これは又迷惑な。

ト困つたこなし。

藏人 領分の百姓、薩埵山の大木を切り拂へと申しつけし

某が詞を用ひず、なせ其まゝに差置いた。

百一 ハイ、さればの儀でござりまする。薩埵山の大木を

切り拂ひまするには、大分の人數が要りまするやうにこ

ざりまする。

百二 何卒その入用金を、お貸し下さりませうなれば、ハ

イ〜

二人 有り難うござりまする。

藏人 よいワ。不承知でなくば、この度は許しくれう。即ち大木を伐る人敷料として、一萬兩お貸しなさるゝ。

ト懐中する書き物、二三通出し身が直筆のこの手形を以て、お金方にて金子を受取れ。

百姓 エ、有り難う存じまする。

ト證文頂く。

藏人 お藏米の間屋宅右衛門、それへ出い。

宅右 ハイ。

ト向うへ出る。

藏人 其方が願ひは、先達て詰め替への年貢米を、賣り渡せし切手を以て、米受取りたい願ひ。依つて切手の通り、

米相渡しくれうが、その切手持参いたしたか。

宅右 ハイ、即ちこれにござりまする。

ト持つて行く。藏人、取つて、さんぐに引裂く。

ア、申し、それは。

藏人 それはとは、憎い奴め。大切な殿の御判の据りし切手を渡し置きたるに、おのれが勝手に質物に差入れ、下直の米を買ひ込み、下を痛め、高利を食ふ不届き者。それゆゑ殿の御判の切手は取上げ、新たに某が印形据ゑた手形を以て、米をお渡しなさるゝ。併し、高利を取つた

その過怠に、遣はされし米は其まゝ半分。

宅右 イヤ、それでは。

藏人 但し、云ひ分があるか。

トきつと云ふ。

宅右 これは又、坪算用ぢや。

ト頭をかく。

藏人 沼津の者ども、それへ出い。

町人 ハイ。

藏人 先達て千貫破損につき、普請申し付け置きしに、

なせ延引に及ぶ。

町人 ハイ、どうも私しどもの手くさいで、普請はなりませぬゆゑ、御拜借をお願ひ申しまする。

藏人 黙らう。汝等が田地の助けとなる水筋の普請、殿より金子を遣はさるゝと云ふ法があらうか。併し某が情

を以て、金子五千兩用立てくれる。この一札を以て、お

金方にて金子を受取れ。普請成就の上は、一ヶ年に千貫

文宛、差上げ居らう。

ト一札を遣る。

鳥藏 エ、有り難い。これで千貫棧の謂れが知れた。イヤ、

とんと譯の知れぬは、おれが身の上ぢや。貴様達は皆そ

れぞれ、お金を申し受けたに、おりやお金の代り、お咎めを受けてのけた。ア、悪々しい。

皆々 ドレ、こちらはお金を頂かうか。

ト皆々、橋が、りへ行かうとする。普傳、此うちヂツ

と見てゐる。この時

普傳 者ども、彼奴等に纏ふて。

奴皆 ハツ。馳廻せ。

ト四人、腰より十手取り出し、振り上ぐる。

皆々 ハイ、、、。

ト身を縮める。

藏人 普傳どの、某が申しつけたる者ども、何ゆゑ纏打ち召さる。

普傳 盗賊だゆゑ、纏ふつかサ。

藏人 何がなんと。

普傳 ソレ、彼奴等に纏ふち、その一札奪ひ取れ。

奴皆 ハツ。捕つた。

ト皆々かゝる。皆々、右の一札を捨て、

皆々 ア、お許されませ〜〜。

ト皆々橋が、りへ逃げ入る。鳥藏も逃げうとするを、

右内、砂平、松助、十手を振り上げ

三人 動くな。

ト取巻く。

鳥藏 ハイ〜。

トうづくまる。土手藏、右一札、三通とも取つて

土手 ハツ。

ト普傳へ持つて行く。

藏人 それを。

ト取りにかゝるを普傳、藏人が手を叩き退げ、キツとなつて

普傳 いづれも、この一札、改めさつしやれ。

三人 ハツ。

ト三人、一札を取つて、銘々披き見て

右内 さてこそ、この一札は、領分の百姓どもに、薩埵山

の大木を切り拂ふ人夫料として、一萬兩非借とありしに、

その證文の表は十萬兩と認め

藤太 この一札は半金にお買上げと偽はり、直ぐに袖師ヶ

浦に泊め置いたる大船へ、残らず米を積み込めよと、米

屋宅右衛門へ頼みの一札。

新吾 コレ、この一札は、千貫樋の普請科五千兩と云ひし

も相違、五萬兩と認めあるは



右内 さては松江藏人

藤新 お身が私慾に

三人 極まつた。

普傳 イ、ヤ、お家を亡ぼす叛逆人。

藏人 何がなんと。

普傳 千貫船破損と云ひ立て、數多の人夫を以て、伊豆の

海を切り入れ、すはと云はゞ水の手を切つて落し、當國

を水浸し、麤殺しにせん企みであらうがな。

藏人 イ、ヤ、千貫船破損は、田畑を助くる 某が仁心。

普傳 イ、ヤ、田畑の助けをせば、井田の法とて、十反の

内に池一つ掘らすべきに、伊豆の海に颯を仕掛け、この

國へ取寄せるは、正しく企みあつての仕業。殊に普請料

と名付け、一萬兩拜借と偽はり、汝が自筆で十萬兩と認

め、百姓を隨へ、殿の用金を掠めとるは、軍用の手段で

あらうがな。

藏人 イ、ヤ、一萬兩の拜借を、わざと十萬兩と認めしは、

百姓どもが性根を探る某が工風サ。

普傳 然らば又、詰普への年貢米、殿の印形据わりし切手

を引裂き、汝が印形にて米を自由に、半金にて買ひ戻す

と偽はり、數多の米を貯へるは、兵糧の手段であらうが

な。

藏人 イ、ヤ、殿の印形据わりし切手を以て、彼れらが自

由に致させ置かば、この後米を買ひ込み、萬民の饑儀を

思ひ計つて、此方へ半金にて買ひ取りしは、下を憐れむ

某が情。

普傳 イヤ、さうは抜けさせぬ。この度船師ヶ浦へ大船乗

り込みしと偽り、吟味なぞと、船をわざと止め置き、兵

糧残らず大船に積むは、まさかの用意であらうな。

藏人 イ、ヤ、先達ての海化日和、風波の業とは云ひなが

ら、水主船頭が不調法。こりや、彼れらを戒めの爲。

普傳 ハテ、どう云へば斯う云ふと、よいワ。この上は、

その船頭め、打ち据ゑて白状させえ。

四人 ハッ。サア、白状しをらう。

ト四人、十手にて、鳥藏を打ちにかゝる、立廻りにて

鳥藏、四人を取つて投げる。

うぬ、手向ひひろくか。

鳥藏 オ、手向ひする。叶はぬ場所と見たゆゑ、水主船

頭が船割つて出るのぢや。コレ申し藏人さま、もう叶は

ぬ。こなんもぶち割つてしまはんせ。如何にもあの和郎

の頼みに依つて、難風に出會うたとは偽はり、三保の浦

へ船を乗り入れ、藏人どの、合圖を待つてゐるのでござんす。なんと、すつぱりとぶち割らうがの。その代り、どうぞ命をと云うてからが、助けもせまい。よいワ。一度死んで二度は死なぬ平戸の鳥籠ぢや。この首さらへ落し、早う命の出船、密網の切れた身の上。とつと、冥途へ走りたい。キリ／＼片付けてしまはつしやれ。

トどつかと座り、首差延べる。

藏人 うぬ。

ト刀に手をかけ、立ち上がる。普傳、藏人に詰めかけ

普傳 イ、ヤ、訴人の者に指もさ、せぬ。サア、叛逆の一人々、白状したせ。

藏人 イ、ヤ、勃逆の覺えはない。

普傳 まだこの上にあらがはゞ、遁がれぬ證據。ヤア修験者、大瀧法印參れ。

大瀧 ハア、。

ト奥扉口より大瀧法印、散髪、水衣、拵り袴、太刀穿き、ツガノ／＼と走り出る。

コレ藏人どの、こなたの顔みに依つて、甲斐之介どの、精氣全快の祈りと見せ、誤は一命を絶つ呪咀の祈り。普傳さまに見顯はされ、残らず白状しましたわいなう。

藏人 すりや、某を罪に落さんと、覺えなき呪咀の白狀。

大瀧 イ、ヤ、この期に及んで、覺えないとは卑怯々々。

普傳 サア、覺えないと云ふには、なんぞ慥かた證據があるか。

藏人 イヤ、證據と云うては

大瀧 叛逆の證據はこの法印。

右内 千貫種の金子

藤太 兵糧米の云ひ譯あるか。

新普 薩埵峠の大木伐りしも企みであらうが。

鳥藏 本國肥前へ運送、兵糧貯へは、この鳥藏が慥かな

訴人。

普傳 主人を呪咀する大罪人。

三人 なんと、これでもあらがふか。

ト右の一札廣げ、さしつける。

藏人 サア、それは。

皆々 サア。

藏人 サア。

皆々 サア／＼／＼。

普傳 こな人外め。

ト藏人を二重舞臺より蹴落し

ソレ、打ち据ゑい。

奴皆 ハツ。御上意だくく。

普傳 彼奴には、まだ白状さする儀がある。詮議場へ引立て、拷問にかけい。

奴皆 ハツ。うせう。

ト奥にて、序の舞打ちかける。と四人して、藏人が大小を振ぎ取り、手籠めにして引立て、橋が、りへツカツカと入る。普傳、あたりを見廻し。

普傳 コリヤ、お身達は、申しつけ置いた彼の詮議をナ。ト囁く。

家三 ハツ。

普傳 法印は奥へ參つて、件の密法。

大瀧 ハツ。

普傳 早くく。

皆々 ハツ。

ト矢張り序の舞にて右内、藤太、新吾は橋が、り、大瀧法印は奥へ入る。跡に普傳、島藏、あたりを窺ひ

島藏 普傳さま、あなたのお頼みゆる、難風で乗り込んだ

船を幸ひ、藏人が本國より兵糧運送など、無實を云ひかけ、まんまと藏人めの罪に取つて落しましてござりま

する。

普傳 察するところ、町人百姓を取込み、彼奴等が虚妄と見たゆる、その科を叛逆の企てなど、罪に罪を重く云ひ立て、大罪人にして刑罰に行ふ計略。

島藏 へ、へ、えらい目論見なア。

ト普傳、懐中する袱紗包みの金子を出し、島藏へ抛る。島藏取つて

これは。

普傳 當座の褒美。

島藏 エ、忝ない。

普傳 早く出船。

島藏 うまいワ。

普傳 行け。

ト島藏、金を頂き、向うへ走り入る。此うち矢張り序の舞にて、普傳、うまいくと心にうなづくこなし。

奥より勅使兼成、雛形姫、附き出で來り

兼成 補原普傳。

普傳 お勅使様。

雛形 コレ普傳、今聞けば藏人が悪心。ありやマア、誠かいなう。

兼成 普傳、藏人が逆心許しく聞いた。當家の柱石たる兩人、殊に甲斐之介の病氣。汝一人の辛勞、察し入る。

普傳 ハツ、先達て某上京の節、關白家へお願ひ申せし、當家の家督相續、病氣ゆる參内延引。それゆゑ楠原普傳、家老ながら當家の家督、暫らく預りたき願ひ。天機よろしくお執成しを希ひ奉りまする。

雛形 そんなら普傳、兄上の病氣ゆる、其方が家督を繼ぎやるかいなう。

普傳 ハテ、何も女儀の御存じない事。控へてござれ。

ト橋が、ハツ、バタ／＼にて、土手藏、走り出で

土手 ハツ、露藏場へ引墮ふ、矢柄責めに仕りますれども、一向に口を閉ぢ、何も白狀、仕りませぬやうにござりまする。

普傳 どうで水噴はさずば、白狀せまい。これへ引出せ。お勅使の目通りで、某が、一責め責めて、白狀させう。これへ引け。

土手 ハツ。

ト走り入る。

雛形 そんなら、まだ藏人を責めて、白狀さす事があるかいなう。

普傳 如何にも。彼奴、七草に合體して、當家に仇いたすと覺ゆる。それゆゑ拷問仕つて事を糺す。お勅使にも暫時、御宥免下さりませう。

兼成 オ、それこそ一大事の詮議。とくと致してよからう。

普傳 ハツ。ソレ、者ども。水責めの用意いたせ。

奴四 ハツ。

ト始終序の舞にて、橋が、よりより土手藏、筵を持ち出で、よき所へ敷く。右内、梯子と横槌を持ち出で、筵の上に置く。砂平、松助、手桶に本水入れ、持ち出で、筵の兩方に置いて、皆々、橋が、よりへ走り入る。雛形姫、水責めの道具を見て、心遣ひのこなし。橋が、りの内にて

キリ／＼歩め。

ト序の舞やんで、琴二面にて「浮寝」の唄になり、橋が、よりより藏人、襪袍に繩帶、高小手手に縛しめられ、しほ／＼出て来る。後より土手藏、繩取り、右内、砂平、松助付き添ひ、サア歩め／＼とせり立てるこなし。藏人、本舞臺よき所へ座る。これまでに「浮寝」一／＼さり唄うて、あと合ひ方になる。雛形姫、藏人を見て、



ツカ〜と側へ行く。

雛形 コレ藏人、其方はマア、なんとして其やうに恐ろしい心になつてたもつたぞいなう。日頃から其方の心はよく知つてゐる。よもや其方に限り、謀叛の心はあるまいと思へども、普傳が達て云やればせう事もなし、コレ、云ひ譯があるなら、ちやつと云ひ譯をして、早う細目を助かつてたも。力と思ふ其方が、もしも責め殺さりやつたら、兄上と云ひ、六太郎さまや、自からは、なんとせうぞいの〜。

ト取りつき泣く。

普傳 ヤア雛形さま、科人に何様り言。ヤイ藏人、もうこの上は、包むに及ばぬ汝が俗稱。七草に合體は紛れない。サア、速かに白狀せい。

奴四 サア、白狀せい。

ト藏人、こなしあつて、普傳が顔をキツと見て

藏人 ハテ、思ひ依らぬ普傳が詞、この藏人が、七草が殘

黨とは、何を以て。

普傳 ソレ、早く天秤にかけて、白狀させい。

奴四 ハツ。

トまた明になり、土手藏、右内、脇差の鞘を藏人が纏

目へ兩方より千鳥に差込み、こち上げる。松助、砂平、十手にて打つ。

サア、白狀せい。

ト土手藏、右内はこち上げる。砂平、松助は十手にて叩く。雛形姫、二重舞臺よりあせる。藏人、苦しきこなし。また「浮寝」一くさりありて、後合ひ方になる。藏人、苦しみながら

如何ほど拷問しても、無實の罪、白狀する覺えはな

い。

會傳 ハテ、死太い奴。この上は、水喰はして白狀させい。

四人 畏まつてござりまする。

ト藏人を引立てにかゝる。

雛形 ア、コレ、待つてたもいなう。

ト支へる。

松助 ハテ、お退きなされい。

ト引き退ける。雛形姫、また取りつくゆ云、松助、姫を引きつける。土手藏、右内、砂平三人して、サア立たうと藏人を引立てる。また明になる、三人して、藏人を梯子へ縛りつける。此うち、雛形姫あせるを、松助、動かさぬこなし。ト、藏人を梯子に縛り、横槌を



枕にさせ、水責めの見舞よろしくあり、此うち、唄一くさりあつて、また合ひ方になる。

普傳 サア、白状せぬか。云はぬか。吐かさぬか。ハテ、死太い奴。ソレ、水喰はせい。

四人 サア、云はぬか。吐かさぬか。

普傳 水喰はせい。

四人 ハッ。

ト皆々、立ちかゝる。また唄になる。砂平、藏人が兩足を押へる。土手藏、右内、互ひに柄杓にて本水を汲み、水責めにする。此うち始終、琴二面にて「浮寝」の唄よろしくあり。雛形驚あせる。松助とめてゐる。藏人、さまざま苦しむこなしあり、よろしく取合せあるべし。

普傳 サア、苦しくば、白状せい。

上手 云はぬか。

右内 吐かさぬか。

砂松 白状せぬか。

ト責めかけ、水を流しかける。藏人、返すく苦しみ、ト、ウンと悶絶する。この時、琴唄やめる。

四人 ヤア、こりき、くだはりました。

雛形 ヤア、そんなら藏人は。

トいろくあつて

ハア、

ト泣き落す。ト橋が、リバタノにて、蒲原右内、錦の袋に入れたる邪法の鏡を持ち、藤太、新吾諸ともに走り出て

蒲原 ハッ普傳さま、藏人が屋敷、詮議仕り、隠し置いたる邪法の鏡、詮議仕出し、持参仕つてござりまする。

普傳 さてこそ、邪法の鏡を隠し置く藏人。七草が一味に相違ない。この佛の鏡を、紫庭へ差上げ、粟島の家督は、某が申し受けう。イザお勅使、御同道仕りませう。

兼成 然らば直さま。

四人 して、この死骸は、

普傳 叛道人なれば、國境にて逆磔刑。

四人 畏まつてござりまする。

普傳 イザく。

兼成 普傳、來やれ。

四人 還御。

ト琴唄になり、勅使兼成、静々花道へ行く。後より普傳、鏡を持ち行く。皆々、下馬切つてゐる。よき所に

て藏人、右の梯子に縛りつけられながら  
楠原普傳、待て。

ト聲かける。これにて普傳、ちよつと立ちどまる。兼成、四人の奴もこなし。普傳、こなしあつて

普傳 イザ、お越しあらませう。

ト行きかゝる。

藏人 七草四郎、秦の義久が軍師、唐意軒、暫らく待て。

ト繩を引ツ切り、キツと見得。

普傳 何がなんと。

ト立ちとまる。遠攻めになる。

藏人 ソレ、遁がすな。

兼成 ハッ。

ト勅使實は綱平、装束、着付け、小はぜにて脱ぎ捨てる。下は縷子奴。十手、振り上げ

勤くな。

トきつと見得。

藏人 大小。

鳥藏 ハア、。

ト橋が、りより鳥藏、實は熊本勇八、藏人が大小、持つて走り出で、渡す。藏人、手早く取つて、渡す。鳥

藏人 普傳へ詰め寄る。藏人、静々と二重舞臺へ上がり  
邪法の鏡を以て、粟鳥の家督を押領せんと、仕済まし顔に禁庭へ参内とは、太々しき企み。七草が殘黨、森唐意軒、最早、遁がれぬ、白狀せい。

ト聞いて普傳、鏡を懐中して、ツカ／＼と藏人を目掛け駆け戻る。兼成の奴、後より附いて来る。鳥藏、向うへ廻り、十手にてかゝるを、普傳、鳥藏を蹴飛ばし、網平にかゝるを、引ツ掴んで、見事に投げつけ、直ぐに二重舞臺へ駆け上がつて

普傳 松江藏人、楠原普傳に向ひ、森唐意軒とは、なんのたわ事。

藏人 イ、ヤ、粟鳥の家臣楠原普傳と、面體恰好、よく似たる紛れ者。察するところ七草が殘黨、森唐意軒であらうがな。

普傳 フ、、、ハ、、、不便や、わりや、眼が盲むたか。森唐意軒は九十餘歳、この普傳とは雲泥の相違。何を捕へて森唐意軒などは、イヤ、馬鹿々々しいうつけ者。

トきつと云ふ。一間の内より

甲斐 イ、ヤ、その證據は、粟鳥甲斐之介、それへ行て對面せう。

面せう。

ト障子屋敷、引抜きにて、甲斐の介、衣裳、長上下、青月代、立派に立つてゐる。普傳、見て憫り

普傳 ムウ、ナリや、氣とは、偽はりであつたよな。

甲斐 オ、某、七草四郎を攻め亡ぼし、彼れが尊む天帝の御像、まつた怪しき魔指し物まで、悉く火燵となしたる中に、邪宗門の神寶、偽と名付けし邪法の鏡の在所知れず。察するところ七草が殘黨、生き残り、また、仇をたさんと圖みしゆゑ、わざと亂陣のその日より、氣と偽はり、引籠りしは、この實否を糺さん爲。

藏人 林原普傳は、七草が城中にて討死。然るに存命にて、亂陣せしは、正しく邪法の曲者。

普傳 イ、ヤ、この普傳、七草が城中にて、討死と見せしは、敵軍からる智謀軍術。如何程に疑ひ受けても、楠原普傳に相違ござらぬ。

藏人 ムウ、然らば敵の楠原普傳が、なぜ、主家を滅亡させんとは企んだぞ。

普傳 亂れ、藏人。この普傳、主家を滅亡させんとは、何を以て。

藏人 オ、其方、主人の名代として、禁庭へ參内の節、甲斐之介病氣、所詮全快なりがたく、何卒、臣下なれど

も普傳、暫らく當家を預かりたき願ひ致したるところ、その内意を以て、よく知つた。相役の某に沙汰もなく、狼りに家を預からんとは、汝が敷道。

普傳 イ、ヤ、數代軍功の家筋、殿は御病氣。御一子として無ければ、もしも殿が御逝去あつては、お家は斷絶。それゆゑ、某が暫らく、御家督を相続するは、こりや、お家を思ふ臣下の役サ。

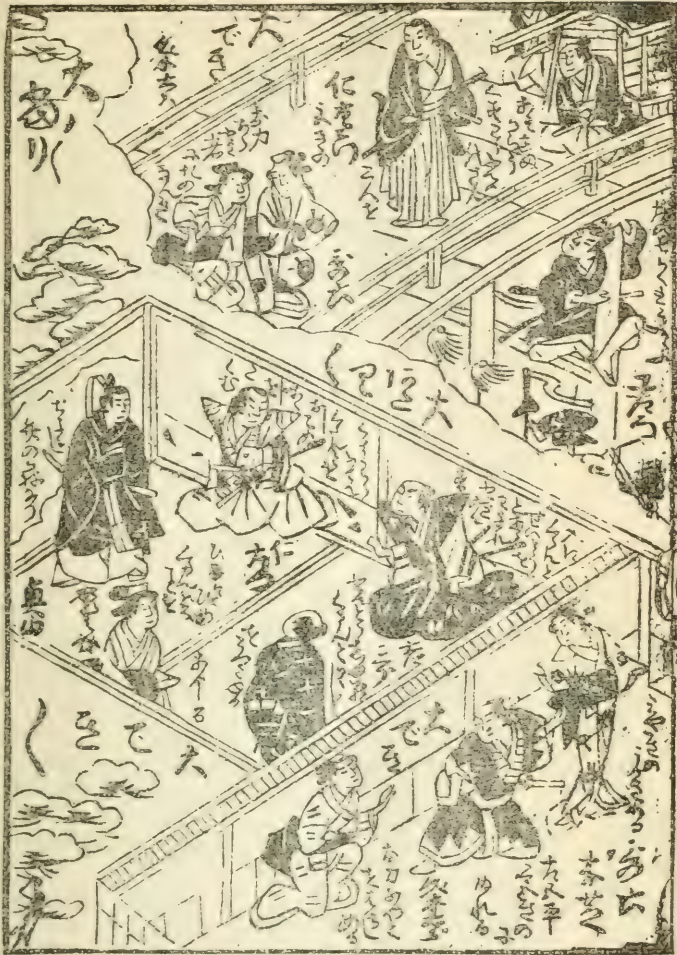
藏人 その家を思ふ汝が、我が家來を、九州より乗り込んだ、船頭と偽はりしを誠と心得、賄賂の金子を遣はし、藏人を罪に取つて落せよと、なぜ頼んだ。

烏藏 藏人さまの家來とも知らず、頼んだ普傳。此奴、正しく七草が殘黨と、わざと一味となつて、企みの底を潜つた。なんと、肝がでんぐり返らうがな。

普傳 イヤ、それこそ相役の藏人、町人百姓を取り込み、殿の軍用金を貢りしは、正しく逆心。その實否を糺さん爲、汝が家來と存じながら、裏美をくれたは、こりや、某が苦肉の計略。

藏人 イ、ヤ、運がれぬ證據は、大護法印、參れ。

ト遠攻め、打ち上げ、後、打ち流し。皆々ハア、。



の 演 初





附 番 繪



ト皆々、奥より出る。

大瀧 殿を咒咀する頼み人は、楠原普傳。

右内 その科を藏人さまに、負はさんと汝の企み。

大瀧 殿の用金を掠めしも、

新吾 町人百姓と馴れ合ひしも、

綱平 みな藏人さまの

皆々 計略ぢやわやい。

藏人 殿の御病氣、平癒の祈りに、呼び寄せし大瀧法印に、

殿を調伏させんと頼みし汝。主を咒咀する叛逆の大罪。

殊に、邪法の鏡を隠し置き、最前某、水責めの苦痛に、

氣絶せし鏡に見せしを賦と心得、汝が手にある邪法の鏡

を、隠し置きしなどと偽り、この藏人を七草が餘類なら

んと、自瀧させん汝が企み。

甲斐 女術を以て、楠原普傳と形を變へ、當城へ入り込み、

仇を報はん汝が計略。

藏人 サア、斯く見懸はず上は、最早、遁がれぬ森唐意

軒。

甲斐 速かに、鏡を渡すか。

藏人 踏みつけて纏ふたうか。

甲斐 神國正道なる、我れくに向ひ

藏人 邪法外道の及ぶべきか。

甲斐 但し、甲斐之介が一刀に、命を取らうか。

藏人 サア。

皆々 サアくくく。

藏人 邪法外道の人畜め。

ト藏人、普傳を二重舞臺より踏み落し、皆々、十手に

打ち据ふる。普傳、印を結ぶ。とドロくにて、皆

皆、後へタヂくと寄る。普傳、セリ下げにて消える。

皆々、偽り。

奴四 ヤア、森唐意軒が形。

勇八 我れくが眼をくらまし

綱平 其まゝに消え失せしは、

右内 いやく邪法を行ふ曲者。

藤太 この上は、如何して、搦め捕りませう。

新吾 殿様、藏人どの。

奴四 御思案が

皆々 ござりまするな。

甲斐 オ、氣遣ひ致すな。先達て、七草追討の砌り、祭

庭より賜つたる帝の御座輪を、松江藏人に相渡し、まつ

た某が寢所には、追討の節、下し置かれし四神の御籠

を守り奉れば、邪法の障向、寄りつく事、いつかな能はず。

藏人 即ち、御宸翰は肌身を離さず、守護仕る。

ト錦の袋に入れたる宸筆を出す。

甲斐 四神の御簾は、これにある。

ト屋體の御押より箱を取出す。

藏人 蒲原右内は、この場の仔細、早打ちにて禁庭へ奏聞

仕り、七草が殘黨、森唐意軒を打ち亡ぼし、粟島甲斐

之介、追ッつけ參内仕りますると、天奏へ申し上げ

よ。

右内 畏まつてござりまする。

トばたくにて、向うへ走り入る。

藏人 熊本勇八、汝は、家中のうち、森唐意軒に荷擔の者

どもを、見付け次第に、討つて捨てよ。

勇八 ハツ、畏まつてござりまする。

トばたくにて橋がよりへ入る。

藏人 綱平、其方は、大手持め手、門を打ち切つて、警護

を申しつけい。

綱平 畏まつてござりまする。

ト橋がよりへ走り入る。

土手 拙者は、これより築山の隅々。

砂平 お花島、泉水の水筋。

右内 または樹木の茂みく。

松助 残る方なく詮議

四人 仕りませう。

甲斐 オ、手分けを致し、狩り出せ。

四人 ハア。

藏人 藤太、新吾は、萬事の驅引き。

藤新 ハツ。

甲藏 急げく。

皆々 ハア。

トばたくにて、橋がよりへ走り入る。

藏人 幻術を行ふ唐意軒、如何なる不意を打たんも計られ

ず。殿には先づ、一間へお入り遊ばされ、物の具の御用

意あつて、然るべう存じまする。

甲斐 成る程、藏人が申す條、尤もく。然らば奥にて。

藏人 早く御用意。

甲斐 藏人、來やれ。

藏人 先づ。

トまた遠攻め烈しく、甲斐之介、藏人、奥へ入る。ト

ばた／＼にて、タテの人数四人、異形なる裨天、小手、  
 匣當にて、唐めいたる劔を持ち、走り出る。後より勇  
 八、凛々しき形にて鎗を持ち、追ひ驅け出て、タテ、  
 さま／＼ありて、ト、勇八、皆々を追ひ驅け入る。と  
 チョン／＼、淺黄幕、切り落す。

造り物、向う一面は綱代垣、奥深く取つて、眞中に  
 二間の數寄家建ての體。杉の丸柱。屋根、大和葺き、  
 三方、縁付き。右の綱代垣の前、一面の山吹、見事  
 に咲きあり。右數寄家に普傳、白髪、白き着  
 付け、白き長袴。白き居士羽織にて、卓に白骨を乗  
 せ、香爐を置き、名香なくゆらせ居る體。この見得  
 にて、遠攻め、靜かに合ひ方ハリの樂にて、この體、  
 よき所まで突き出す。普傳、よろしくこなしあつて

普傳 誠に今日は如月二十八日、七草四郎太夫、秦の義久  
 の忌日。追ツつけ、修羅の妄執を晴らせませう。シヤ  
 ウデン、ハライソウ／＼。

ト合掌する。と少しドロ／＼にて、空より白星一つ落  
 ちて、パツと煙硝燃える。これにて普傳、右、星の落  
 ちたる所をキツと見て、また空をキツと眺め

ハテ、怪しや、今まで空に赫々たる我が白星、光を失ひ  
 地に墮ちしは。

トこなしあつて

さては、我が命數、今月今夜に終ると云ふ、天帝の知ら  
 せなるか。ハ、ハ、ハ、。ホイ。

トよろしくこなしあつて、また印を結ぶ。とドロ／＼  
 にて、普傳が目前へ臺七、セリ上げにて、ヌツと出で、  
 不思議の體にて

臺七 ハテ、合點の行かぬ。今まで海道筋に居た臺七、見  
 れば正しく粟島の城中。爰へはどうして。

普傳 オ、それこそ、身が妖術の爲す業。

臺七 ヤ、なんと。

ト振り返り、普傳を見て

其方は何者。

普傳 オ、今まで四十有餘の楠原普傳と見せしは、我が

尊む邪法の奇端。誠は、行年積つて九十七歳、七草が老

臣、森唐意軒。今は何をか包まん、臺七、誠其方は、我

が忤だわやい。

臺七 ヤア、何がなんと。

普傳 オ、不審は尤も。もと某は足利尊氏が爲に滅亡、

主君は御最期、それより森唐意軒と名を改め、先年奥州に下り、世を忍ぶうち老年に至つて一子を儲け、大聖ある身の足手纏ひと、即ち武隈明神の神前に、白き綱に包み捨て置きしを、汝志賀段右衛門に拾はれ、志賀の名跡と聞くなり、先づは安堵、忤が身の上、氣遣ひなく、それより西國へ立越え、七章四郎を守り立て、邪宗門の一揆を起し、粟島甲斐之介に攻め破られ、これとても空しく無念の敗軍。我が忍術を以て、楠原普傳となり、粟島家に入込みしも、再び仇を報はん爲。臺七、其方は我が忤、二十五年の星霜積つて、思はず對面。ハテ、遅ましう、生ひ立つたよな。

臺七 ハテ、思ひも依らぬお物語り。如何にも武隈の神前にて、拾ひ子の様子は、承はり及べども、こなたを實の親人とは、今の今まで存せぬ不孝。眞平、御免下されい。

ト普傳、邪法の鏡を出し  
普傳 臺七、この邪法の鏡を持つて、この場を立退き、身を全うせよ。この佛の鏡を所持すれば、その身に凶事はない。大切に致せ。

ト臺七に渡す。  
臺七 エ、泰ない。拙者も先達で、奪ひ取つたる鎮守府

の印。

ト出し

東八ヶ國の軍勢、催催のこの印と云ひ、邪法の鏡、二種を所持すれば、臺七が身は大丈夫。併し、この場の様す、かゝる騒動を見捨て、は。

普傳 ヤア、おろか〜。例へ、幾萬人にて取圍むとも、物の數とも思はねども、今月今宵につゞまる我が命數と、天帝よりの知らせ。さるに依つて、死後聖天に赴く門出。花々しき最期を遂げん。爰禱はずと、早く立退け。

臺七 ぢやと申して。

普傳 未練な奴の。

ト叱りつける。臺七、キツとなつて

臺七 オ、さうぢや。危ふきに近寄らぬ、大事の身體。

普傳 一時も早く。

臺七 然らば、親人。

普傳 さらば。

臺七 ハイ。

ト臺七、行かうとするを、勇八、綱平、東西よりツカツカと出て、臺七にかゝる。普傳、印を結ぶ。臺七、向うへ走り入る。綱平、十手、勇八は鎗にて、普傳が



術に惱まされ、ト、網平、ウンとこける。勇八、たち  
 たちと後を構へる。とバタ／＼にて甲斐之介、軍立て  
 の形。藏人、袈裟、上下にて、兩人、鎧を引ツ提げ、  
 橋が、りより、ツカ／＼と走り出る。後より雛形姫、  
 彌生、青柳、糸遊、若草、三笠、その他、子供、残ら  
 ず、皆々、踊の着附けに一本差し、紅の鉢巻、襷、め  
 い／＼弓張りを持ち出る。後より續いて藤太、新吾、  
 土手藏、右内、砂平、松助、この人数、皆々、松明を  
 持ち出で、舞臺一面にグルリと、網平も起き上がつて、  
 取巻く。

甲斐 森唐意軒。

藏人 覺悟せい。

ト兩人、東西より鎧を突き出す。普傳、鎧の鹽首を兩  
 手に取つて

普傳 うぬら如きへろ／＼鎧、我が腹には立たぬ。さりな  
 がら、天の命數、極まつた某、我が手で死なれぬ邪法の  
 掟。わいらに手柄を、施しくれり。

ト持つたる鎧を、ガバと我が兩脇腹へ突き立てる。

勇八 止めは、身共が。

ト突きかゝる。普傳、また鹽首、取つて

普傳

アライキツウシゴシヤウデン。  
 ト鎧を持ち添へ、我が咽喉へ突き立てる。とドロ／＼  
 にて甲斐之介、藏人、勇八、三方より決る。普傳、す  
 つくと立ちながら、物凄き見得、三方より鎧を引き抜  
 く。普傳、こなしあつて、バツタリとこける。藏人、  
 こなしあつて

藏人 勝鬨。

ト内にて、「エイ／＼オウ」と遠責め、打ち上げる。い  
 づれも見得よく。

幕

六ツ目

沼津道の場

役名 志賀臺七。五四六の七郎兵衛。講中、頼  
 兵衛。同、權九郎。同、與三。庄屋、土作。高倉  
 曾平。福原新吾。藤田軍吾。甚内女房、磯崎。金  
 江半兵衛。

造り物、野原、水茶屋、軒に大山不動、萬人講と書  
 いたる提灯を吊り、すべて休み所の體。破風、月を

出し、夜の景色。巖の間より土作、庄屋の形、その外、百姓大勢、重箱の包みを持ち、大山参り、迎ひの體にて、めい／＼庄儿に腰かけ居る。茶屋の女、茶を運びる。在纏唄にて慕聞く。

土作 なんと皆の衆、今年は珍らしい事ではないか。いつも夏山でなければ、登られぬ大山の不動さまが、麓での出開帳。そこでこちらの一村が、矢ッ張り登山するやうに垢離を取り、別火を食うての大山参り。今日が丁度、下向の日取りゆゑ、日のうちから迎ひに来て居るが、さて、皆遅い事ぢやわいの。おれが案じは、折角持つて来た握り飯が、餅にならうかと、氣にかゝつてならぬてや。

百姓 イヤ申し、餅になつたら、豆の粉で、まぶして喰ひまする。

土作 こいつは、尤もぢやわい。

皆々 ハ、ハ、ハ、ハ。

土作 時に、女中さん、もう何時ぢやの。

茶女 アイ、割夜打つてから、餘ッほど間がござりまする。

土作 ハつきり、四ッ過ぎたと見えるわいの。これは又、

待たす事ぢやの。

皆々 遅い事でござりまする。

ト向う戸家の内にて

七郎 大山大聖不動明王、左、金剛、右、制多衛。

皆々 南無不動明王。

土作 サア／＼、戻つて来るぞ。

ト向うより大山不動、萬人講と書いたる高提灯を先に立て、同じく記せし木綿轆を立て、七郎兵衛、先達の拵らへ、輪袈裟を掛け、金剛杖を突き出る。新客頭兵衛、権九郎、與六、此うち二人は法螺を吹き、二人は鈴を鳴らし、この外、大勢、いづれも新客の拵らへ、白木綿、袷袈裟、同じく手甲、脚絆、鉢巻、めい／＼、金剛杖を突き、右の文を唱へ、口々に唱へ／＼出る。

土作 ヤレ／＼待ち兼ねた。先達の七郎兵衛どの、皆も下向さつしやれたか。

七郎 オ、庄屋どの始め在所の衆、よう迎ひに出やしやつたなり。

ト云ひ／＼皆々、本舞臺へ来る。

土作 七郎兵衛どの、新客に別條もござらなんだかの。

七郎 イヤモウ、お山へ登ると違うて、麓だけに、軽い事

なり。

土皆 それは、皆々喜びます。

土作 さて、辨當も持つて来ましたぞや。

七郎 マア、なんでも一休みせうかいの。

頼兵 よからう。

ト皆々、床几にかける。

七郎 時に、なんぢやわい、後の宿で、した、か餅をやつたれば、腹にはなんにも置き所がない。先へ持つて去んで下され。

土作 さうして、皆はどうするぞいの。

七郎 イヤ、まだ月の入るまでは、お禮の文句を唱へにやならぬて。

土作 そんなら、先へ去にませうかい。

七郎 皆の衆、御苦勞でごんしたなり。

土作 随分、早う戻らつしやれ。サア皆も、ござれ〜。

ト百姓皆々、連れ、土作、橋が、りへ入る。頼兵衛皆々、見送り、捨ぜりふ、しかるゝありて

七郎 さて頼兵衛、權九、與三、野助も、餘ッほど、息つ

いた顔つきぢやの。

頼兵 イヤ、なんぢや知らぬが、足はしつかい播粉木ぢ

や。

權九 全體、今日の十八里ばかり、過ぎた道ぢや。

野助 おりやモウ、在所の松が見えるに依つてか、一倍がつくりと草臥れたわい。

與三 なんでも去んだら、何奴など蹴倒して、精進を上げにやならぬ。

頼兵 イヤ、下戸ばかりぢやない。上戸の精進も上げにや

ならぬ。

權九 上戸でも、下戸でも、食ひ物は肉の事ぢや。佛と云ふ奴等は、悪い奴等ぢやないか。

頼兵 時に先達、先刻に原の宿で、侍ひが、何やら貴様に

喋いて居たが、ありや、なんであつたぞいの。

七郎 イヤ、バツと云はるゝ事ぢやない。話すには、折が

あらうぞい。何は格別、あの茶屋へ行て、ゆつくりと休まうかい。

皆々 そんなら先達。

七郎 筋答達、わせい。

ト皆々、捨ぜりふ云うて、葎簀の内へ連れ立ち入る。

ト眺らへの獨吟になり、向うより磯崎、方々破れたる形、刀を藁笥にして、割りがけ、旅疲れの體にて出て、

花道に立ちとまり

磯崎 ア、浮世ぢやなア。花の朝に國を立ち、いつしか  
爰は新河路の、行く先とても、定めぬ憂き身の果。思  
へば儂ない、身の上ぢやなア。

ト泣くこなしあつて

ほんに、わしとした事が、けれう、誰れも聞いて居ねば  
こそ。月は圓に晴けれど、爰は往還ハテ、退屈な道で  
はあるぞ。

トまた鶴吟になり、本舞臺へ来る。此うち頓兵衛、皆  
皆、出かけ、碓き合ふ事あり、杖を横に置いて窺ふ。

磯崎、頷く。皆々、上下へ別れ、立ち出で

頓皆 女中、待たんぞ。

磯崎 此方の事かた。

頓皆 オ、貴様のことぢや。

磯崎 此に見舞れぬ案、此方に用とは。

頓兵衛 大それた用がある。別火物忌み、垢離を取り、大山

へ登るこちら。

權九 その大事の金剛杖、なんで懸にかけたのぢや。

與三 貴様が杖を横したゆゑ、大山を跨む事がならぬわいの。

野助 晝より明いこの月夜、わざと踏んで通つたのか。女  
中、どうでござんす。

磯崎 これは、きつい齋相しました。幾重にも免して下さ  
れ。

頓兵衛 イヤ、免すまい。腹の癒える程叩きのめし、穢れた  
杖を、清めるのぢや。

皆々 この杖を、喰へやい。

トめい、振り上げる。磯崎、身構へして

磯崎 寄つたら、其方達の爲にならぬぞ。

皆々 その頬析を。

ト皆々、かゝらうとする時、七郎兵衛、ズツと出て、

二三人を見事に投げて、磯崎を墮うて、こなしあり。

頓兵衛 先達、なんでおいらを

皆々 投げたのぢや。

七郎 なんととは、うぬら、悪いぞよく。最前からの様

子を、残らず聞いて居たが、大切な金剛杖を、蹴つて通

つたは女中が悪いなれど、新簡せいとあやまつてござる

でないか。それにうぬら、聞き分けず、女中一人を大勢

して、こりや、どうせうと思ふのぢや。

頓兵衛 どの斯うのはない。ぶち殺して、腹癒るのぢや。



皆々 さうぢや〜。

七郎 イヤ、さうはなるまいな。

皆々 なぜなるまい。

七郎 サイヤイ、その悪根性を矯め直さう爲の大山登り。

悪いと知つて先達が、免して置かうかい。

頓兵 エ、面倒な。先達ぐるめに、ぶちのめせ。

皆々 合點ぢや。

ト皆々、七郎兵衛へかゝる。いろ／＼あつて、七郎兵衛、皆々を杖にてのめす。

七郎 悪と知つて企むは重罪五逆、未來を知らぬ奴等ぢやなア。無法な奴等に出合ひなされ、さぞ、お困りなされたでござりませうなア。

磯崎 危ふい所へ、そもじの挨拶、嬉しうござるぞや。

七郎 余り無禮を申しますするゆる、見兼ねて御挨拶。お禮には及びませぬ。

磯崎 イヤ〜、そもじの庇で、難儀を遁がれました。心も急げば、さらばでござる。

ト行かうとする。

七郎 イヤ〜暫らく。ちと、あなたに、お尋ね申したい事がござりまする。

磯崎 アノ、わしに。

七郎 ハイ。

ト合ひ方になり、七郎兵衛、あたりを見て、手をつかへ

卒爾ながら、あなたは奥州、高館の御家中、杉本甚内さまの、奥様ではござりませぬか。

ト磯崎、こなしあつて

磯崎 イ、ヤ、そんな者ではござらぬわいの。

七郎 イカサマ、御大望あるあなたなれば、お包みなさるるも御尤も。何を隠しませう、私しは、お連合ひ、甚内さまのお情を身に宿し、信夫と云ふ娘まで生みました、小夜衣が兄妹、信夫が爲には伯父、七郎兵衛と申す者でござりまする。甚内さまには不慮の御最期。お娘御、宮城野さまには、敵討ちのお願ひ叶ひ、御出陣なされたの事。どうぞ姉御様にめぐり合ひ、妹信夫もとも／＼に、お連れ下されいとお願ひ申したさ。何卒宮城野さまの御在所、お聞かせなされて下されうならば、有り難う存じます。

ト愁ひまじりにて云ふ。

磯崎 さては、信夫が伯父であつたか。縁あればこそ深切

に、よう云うて下さつたなう。不思議に巡り逢うたも、  
親は泣き寄り。七郎兵衛どの。

七郎 奥様。

磯崎 思へば悲しい

兩人 世の成行きぢやなア。

ト大泣き。

七郎 イヤ、泣いて居る所でない。一時も早う、宮野  
野さまのお目にかゝりたい。お在所を、お聞かせ下さり  
ませ。

磯崎 されば、娘が國を出やつたは、去年の春。この磯崎  
は夫が預りの御覽、紛失せしゆゑ、國に残され、その後  
伯父大學どの、計らひにて、家國は没收、文の便りに、  
様子を聞けば、慥か娘は。

ト云はうとする。この時、向うより高倉曾平、胸當、  
散引、旅の拵らへ、大小、笠を持ち、走り出で、七郎  
兵衛を見て

曾平 ヤア、お身は七郎兵衛でないか。

ト寄らうとする。七郎兵衛、磯崎を教へ、何も云ふな  
と仕方にてあせる。磯崎、これに氣が附くこなしあ  
る。曾平、眞面目になつて

イヤサ七郎兵衛、先刻、人を以て申し渡した通り、杉本  
身寄りの者と見るならば、討つて捨つるが肝心だ。合點  
な。さて、臺七さまは夜通しに、鎌倉、宇治兵部之輔と  
の方へ落ちつく筈。其方、お目にはかゝらなんだか。

ト七郎兵衛、衛なきこなし

七郎 サア、えい、わい。

ト小聲にてあせる。

曾平 然らば承知な。身共は、臺七どのへ追ツつき申す。  
必ずぬからぬやうにしやれ。さらば。

ト上の方へ走り入る。磯崎、始終こなしあり、七郎兵  
衛、とぼけし體にて

七郎 ハ、ハ、ハ、ハ、いかい阿房も、あればあるものぢやな  
ア。現在、敵と付け観ふ奥様や、この七郎兵衛とも知ら  
ず、うか／＼と、臺七が忍ひの道中吐かしたは、敵の天  
命。臺七が、この海道を行たこそ幸ひ、宮城野さまに知  
らせ申したい。サ、ハ、ハ、ハ、お在所は、どうでこはります  
な。

磯崎 イ、ヤ、娘が在所を尋ねうより、其方の心底、有や  
うに白状せい。

七郎 なんと。

磯崎 信夫が伯父と偽はつて、宮城野が在所を聞き出し、敵臺七へ内通するのであらうがな。

トきつと云ふ。七郎兵衛、思ひ入れ、ズツと立ち

七郎 好い推量。流石の磯崎、よう覺つた。去年、高館の屋敷へ騙りに行つた時、聞き込んだ信夫が身の上、これ幸ひに伯父ぢやと偽はり、うぬを蕩らして宮城野が、在所をほざかせ、臺七どのへ内通せん爲。また最前、吉原の宿にて、臺七どのより、ぶち殺してしまへとの事、殊に臺七どのの道中筋、大事を聞いたからは、もう生けぢや置かぬ。皆の者、何もかも、ぐれてしまつた。起きい起きい。

皆々 合點ぢや。

ト皆々、起きる。磯崎、臺包みの刀を出して

磯崎 寄つたら、一々切り捨てぢやぞ。

七郎 さう云ふらぬから。

ト金剛杖にて打つてかゝる。頓兵衛、皆々も叩きかゝる。磯崎、抜き合せ、いろ／＼あり、ト、皆々、逃げるを橋が、りへ追うて入る。

葭蕪の圃ひ、板松とも東へ引く。西の方より辻堂、

稲村、出る。月、隠れる。窓の黒蓋を下ろし、暗がりの體。道具、納まる。橋が、りより高倉曾平、走り出て

曾平 ヤレ／＼、走つた／＼、先づ、一息、入れてから参らう。

ト辻堂の前なる石に腰かけ、火打ちを出して、煙草を吸ひつけ

臺七どのにこの辻堂で出逢ふ管ぢやが、未だお越しなされぬ體。夜の明けぬうちに、お目にかゝりたいものぢやが、何を云うても月に入る。道は分らず、と云うて、斯うしても居られまい。行き次第に、尋ねて見よう。

ト煙管をしまひ、立ち上がる。とこの時、辻堂の内より金江半兵衛、旅塵無僧の拵らへにてズツと出る。凄き合ひ方になり、所々にて蛙、啼く。半兵衛、引き戻し、グツと引きつける。曾平、あせり

コリヤ、何者ぢや、放せ／＼。

半兵衛 志賀臺七と一味の様子、聞き届けた。臺七が在所、包まず云へ、どうぢや。

曾平 ムウ。臺七の在所を云へとは、さては、杉本に身寄りの者ぢやな。

半兵 如何にも。改名いたした金江半兵衛、谷五郎が聲を聞き忘れたか。然ならうたへ者めが。

會平 こりや堪らぬ。

ト振り切り、飛び出す。引ツかつぎ、見事に投げる。

起き上がつて切りつくるを、立廻つて、踏みつけ

半兵 サア、眞直に白狀いたせ。吐かきぬと、立ち所に命がないぞよ。

會平 ア、コレ、云ひまする。ちつと緩めて下さりませ。

半兵 イ、ヤ、御恩を忘れし人非人、豪七に荷擦の者、一人も生けては置かぬ。

會平 さう吐かしや、いつぞ。

ト切つてかゝる状身を落し、其まゝ締め殺し、死骸を蹴り

半兵 間道もなき、一筋往來。

ト思ひ入れあつて、竹袋より一腕をばツ込み、籠燈を取つて、向うを見て、灯影を隠し、大石に腰をかけて

キツと見得。とこの時、向うより軍音、新吾、旅装束にて、連れ立つて

軍音 新吾どの、もう七ツであらうか。豪七どのに逢ひさ

うなものでござるが。

新吾 さればでござる。但し、道が遠うて、行き過ぎはさ

つしやれぬか。

軍音 先づ、沼津まで参らう、サア、ござれ。

ト云ひ、兩人とも、本舞臺へ來る。半兵衛ツと出て、籠燈をさしつける。兩人、顔を外けて行くを、引き戻し、キツと見て

半兵 うぬ、兩人は。

軍音 谷五郎か。

ト兩方より切つてかゝる。半兵衛、片手に籠燈を持ちながら、抜き合せ、切り結ぶ。烈しきクテあつて、ト

新吾を、見事に切る。新吾、向うへ逃げるを、半兵衛、追ひかけ入る。と橋が、りより磯崎、七郎兵衛、

切り結び出て、立廻りあり。七郎兵衛に拔身をさしつけ、稲村の際まで行く。七郎兵衛、交して切り込む

を入れたつて見事に七郎兵衛を切り、キツと見得。この時、稲村より抜き身の手を出して、磯崎を切り付け

る。ウンと反り、其まゝ、起き返つて、刀を杖に、キツと見得。

磯崎 何者なれば、卑怯の仕業。なぜ名乗りかけて、勝負



せぬ、卑怯な奴の。

トこの時、稻村の後より臺七、浪人の形、拔身を提げて出て

臺七 望みに任せ、尋常の勝負いたしてくれう。

ト向うへ出る。凄き合ひ方、磯崎、この聲に氣を付け、

磯崎 さう云ふは、慥かに。

臺七 この日頃、尋ねさまよふ志賀臺七だ。磯崎、無事に居つたな。

磯崎 さてこそ臺七、騙し討ちとは卑怯な奴の。

ト立たうとして、苦しきこなし

臺七 好い推量だ。女郎ながら、杉本の一流を存じ居れば、迂濶にか、られぬ。ぢやに依つて、騙し討つた。

うぬは元より、宮城野の姉妹、奴夫婦、悉くぶツ放し、臺七が病の根を、切つてしまふのだ。吐かしたい事あらば、存分にほさけ。武士の情に、聞いてくれう。

磯崎 エ、その高言を。

トよろほひ切つて行くを潜り、また、一刀、拔身を膝へ突ツ立つ。磯崎、苦しむ。

臺七 コリヤ、腕くなく。とても身共に手向ひはかなは

ぬ。存分ばざいて潔よく、くたばり居らう。

磯崎 エ、夫と云ひ、我れくまで、其方が手にかゝるとは、弓矢神、摩利支天にも、見放されたか。エ、口惜しいわいやい。例へ、この身は返り討ちに遭ふとても、せめての頼みは宇治兵部の輔どの、子供が力となつて、敵を討たして下さるやう。頼んで死にたい。子供に一度、逢ひたいわいなう。

臺七 アハ、、、ハテ、愚かな奴だな。ヤイ、うぬがその頼みに思ふ兵部之輔は、身共が腹心。その譯は、先達つて譲り置いたる印可を以て、當時鎌倉にて楠流を相立て、名を弘める兵部之輔。これ皆、身共が此と云ふもの。なりや、大恩ある身共、何ゆゑに助け太刀いたさう。馬鹿な事を。これより鎌倉へ立越え、兵部之輔を味方に付けるこの臺七。杉本ゆかりの青鷲めら、例へ何者が、助太刀いたいても、叶はぬ事だ、及ばぬ事だ。うぬ、息の通ふうちに、一太刀なりと切りつけぬか。相手にならぬか。臺七が怖いか。恐ろしいか。フ、ハ、、、。なんとしてく、その腰抜け女郎の、ゆかぬ事だぞ。

トいろく悪口する。

磯崎 エ、云はうやらない極悪人。夫の敵、おのれ臺

七。

ト切りつけんと欲く。臺七、ころ／＼側へ行て  
 山嶽の奴等も後から遣はず。死出の峠で、待つて居  
 らう。

ト突き立てし刀を、磯崎、寄るを蹴据ゑて、止めを刺  
 さんとする。向うへ人が来るゆゑ、箱利へ隠れる。と  
 向うより半兵衛、走り出で、磯崎に行き當る。磯崎、  
 起き返つて、刀を杖に突き、キツとなる。

磯崎 卑怯者、そこ動くな。

ト半兵衛、心得ぬこなし、盞燈をさしつけ見て

半兵衛 さぶふこなたは、磯崎さまではござりませぬか。

磯崎 ヤ、なんと。

ト半兵衛、灯にて我が顔を見せ

半兵衛 谷五郎でござる。氣を懼かに、お持ちなされい。

磯崎 誠に、谷五郎さま。

トがつくりとなる。氣附けなど服ませ、いろ／＼介抱  
 する事あつて

半兵衛 有じ寄らざる對面と云ひ、數ヶ所の手痕。何者の仕  
 業でござる。苦しくとも、相手を仰しやれ。刃傷の相手  
 は何者でござるな。

磯崎 エ、口惜しい。敵臺七に巡り逢ひ、夫の敵と心ばか  
 り逸れども、初めの手痕に後れを取り、口惜しや、臺七  
 を取逃がしたわいなう。

半兵衛 すりや、臺七は爰へ。うぬ、何方に。

ト尋ねうとして、又、磯崎を介抱して  
 敵討ち致すまでは、大切の一命。心を慥かに、磯崎さ  
 ま。

磯崎 イヤ／＼、とてもこの深手では、助かる事はなりま  
 すまい。敵を討つて家を治め、娘が身の上、必らずとも  
 に頼みましたぞや。

半兵衛 お氣遣ひなざるな。例へ臺七、爰を逃がすとも、天  
 地の間は、草を穿がつて尋ね出し、鎮守府の印を奪ひ返  
 し、宮城野が力となつて、臺七が首を掲げ、甚内どの、  
 こなた様の、泉下の迷ひ、暗らさせませう。

磯崎 臺七が、落ちつく先は、鎌倉屋敷。

半兵衛 ムウ、もしや宇治兵部之輔へ。

磯崎 サア、その兵部之輔も、心知れねば。

半兵衛 彼の地へ立越え、忍び／＼に、とくと實否を。

磯崎 吉左右を、草葉の蔭から。

半兵衛 敵の行く先が、お聞届けなされしは、臨終の餞別。

迷ひを晴らして、成佛なされい。

ト此うち軍吾、窺ひ出て居て

軍吾 うぬ谷五郎。

ト切つてかゝる。七郎兵衛、起きて磯崎へかゝる。軍吾、半兵衛が龕燈を落し、立廻りのうち、磯崎、七郎兵衛をボンと切り、その身もガツクリとなつて死ぬる。

半兵

南無阿彌陀佛。

ト立廻つて、軍吾を切り倒し、こなしあり。臆病口より旅人、空尻に乗り、馬士、ハイ〜と鞭を取つて通りかゝる。半兵衛、ツカ〜と行て、馬士を引退け、馬の口を取り、提灯にて乗り手の顔を改め、しかくあつて、突き放す。馬を牽いて花道へ逃げ入る。と橋が、りより間屋駕籠一挺、原間屋と書きたる提灯を吊り出て来る。半兵衛、引き戻し、駕籠の垂れを上げ、乗り手を引き出して頬がむりを取り、顔改める。其まゝ突き放す。ト駕籠昇き、半分乗せたなりにて、駕籠を引摺り、臆病口へ逃げ入る。と向うより三度飛脚、提灯を持ち、出て来る。半兵衛、提灯を引ツたり、笠をかなぐり、胸倉を持つて、顔を見る。直ぐに

突き放すと、飛脚、うろたへ、臆病口へ逃げて入る。半兵衛、右の提灯にて、方々を窺ひ、稲村に目を付け立寄らんとする。その時、軍吾、起き上がり、提灯を叩き落す。舞臺中眞暗になる。半兵衛、刀を納める。と本釣り鐘にて、囁を撞き出す。稲村を引き分けて、臺七、メツと出て窺ひ、拔身を振り廻す。半兵衛、立ち寒がる。双方、控へて、キツと身構へると、向う戸家の内にて大勢、馬士唄を唄ふ。臆病口より雲助、大勢、遊包みの長持を三棹昇き、馬士唄を唄ひ出る。向うよりも雲助、長持を二棹、昇き出て、本舞臺へ来る。臺七、この中へ紛れ込み、上の方へ行く。半兵衛この人数を除けながら、曲者を尋ねる心にて、花道へ行く。荷物の後を付けて行く。長持、東西へ入る。臺七、西の通ひ道へ行く。半兵衛、花道、西方、一時に、半まで行く、始終、本釣り鐘、方々にて鶏笛を吹き、明け方の體。黒蓋、そろ〜と上げかける。と後、一面に下りて、夜の明けはなれし體。この時、東西にて顔を見合せ、キツとこなし。臺七は通ひ路をツツと走り入る。半兵衛、西の方へ目を付けて行く心にて、向うへ入る。

## 切幕

宇治兵部之輔屋敷の場  
由井ヶ濱仇討の場

よろしく幕

役名 金江平兵衛、正之女房、お節、松田彌太  
七、坪内多傳、吉見勝右衛門、加藤七右衛門、正木  
典膳、實ハ醫者卜庵。入間の與茂吉、鶉羽黒右衛門  
志賀豪七、甚内娘、宮城野、同妹、信夫。下  
部、佐五平、同女房、お力。宇治兵部之輔正之。

造り物、三間の間、二重舞臺、向う金襴、臆病口、  
折り廻り障子屋敷、橋が、り後ろ屋敷、内庭の見  
得、植込みよろしく、東西に柴垣、切り戸口、よき  
所にあり、幕の内より宮城野、松田彌太七が手を捻  
ぢ上げてゐる。信夫、坪内多傳を標じめにしてゐ  
る。加藤七右衛門、吉見勝右衛門、劍より挨拶して  
ゐる。この見舞にて琴眼にて、幕閉く。

七右

コレサ、二人とも、もう料簡して遣はされいサ。

勝右

コレく、兩人とも、もうこれに懲りて、てんがう

し召されぬがよいぞや。

彌太 如何にもく。これに懲りぬ者がござらうか。

多傳 二人ともに、御免なされく。

宮城 わたしも妹も、兵部之輔さまの別業へ参りまして、

お世話になつて居ります。今日は御大身のお客のお出

でゆる、このに屋敷へ参つてお取持ちせよと、奥様の仰

せ下されましたゆゑ、参りました私しどもへ、不行儀千

萬なお侍ひ様。初めて参りました者どもへ、じやらく

とてんがうばかり、如何にわたしぢやというて、其やう

に蔑すんで、てんがうなされますがよいか。これがよ

うござりまするかいなア。

ト腕を又、捻ぢ上げる。

彌太 ア、コレく腕が、しんこになるわいのく。

信夫 姉様の云はしやんす通り、なんぢややら、無法無體

に女子を捉へて、てんがうさしやんす惡洒落な方々。

重ねての爲に、とつくりと覺えさせて置きますのでござ

りますわいなア。

ト又グツとぶめ上げる。

多傳 ア、コレく、死にますく。もう一生てんがう

は云ひますまい程に、免して下されく。



彌太 これからなふれと云はしやつても、再び目と目を見合しも致しますまい程に、どうぞ助けて下され。

多傳 コレサ、御兩所、よいやうに

兩人 御挨拶々々々。

七右 アレ、兩人ともに、よく〜術ないと相見え、武士の見苦しき平詫び。

勝右 マア〜、放してやりやれサ。

宮城 姫御前の荒々しい、此やうな事いたしまするも、お

恥かしうござりますすけれど、あんまり悪洒落ゆる。

信夫 一度は見せつける所なれど、お前様方の御挨拶に免じまして。

宮城 免して上げます程に、重ねてキツと

宮信 暗なましやんせ。

ト兩人をむがう突き放す。

彌太 アイタ、。、。てもさても、顔に似合はぬ手酷い手の内。

多傳 雪のやうな細い手が、二つ佛へ喰ひ入るやうにあつた。あの手で、腰をメめつけてもらうたら。

彌太 それ〜、氣も魂も、皆この太股の内へ。

ト宮城野の股へ手をやる。叩きのける。

多傳 我れ等は又、後から。

ト信夫が腰へ取りつくを、取つて投げる。

勝右 ハテサテ、今のに懲りもせず。

彌多 ツイ、ちよつと。

トまた取りつくを、兩方立廻りあつて振り拂ふ。又かかる。この時、橋が、りより、お力、出て来て、この體を見て、ツカ〜と走り入り、兩人を取つて投げ

宮信 ヤア、お力、おちやつたか。

りき お二人ともに、こりや、何事でござりまする。

宮城 さればいなう。奥様のお召しに従ひ、この屋敷へ來

ると共ま、この二人の衆が、じやら〜とてんがらば

かり。

信夫 女子の肌へ手を入れたり、猥らの有り條。

宮城 あんまり不行儀な仕方と思つて。

信夫 二人ともに拂ひ退けても

宮城 しつかり悪洒落

兩人 さつしやるわいなう。

りき ようござりまする。わたしが參りましたれば、もうお前さん方には構はせませぬ。わたしが相手になつて、

このお二人に存なぶられませう。サア、お二人とも、わたしを顧らつしやれ。サア、とんがうさつしやれぬか。但し、わしの方から手を出して舞られませうか。

ト兩人が舞へ行かうとする。七右衛門、勝右衛門、留めて

勝右 ア、コレ、こなたの大力で舞られたら  
七右 二人の命はござらぬわいの。

兩人 マア、御料箇々々々。  
りき イエ、わたしは舞にぬめと思つて、狼狽なされ

た心の中、とつくりと聞き披かにや、わたしが心が濟みませぬ。お二人とも、御挨拶は無用でござりまする。

ト七右衛門、勝右衛門を取つて突き飛ばし  
サア、舞られませうかい。

ト多傳舞女七を舞みひしぎにかゝらうとする。兩人、身を留める。と奥より兵衛之輔女房お節、ズツと出で

せつ お力、必ず聊爾しやんな。  
ト宮垣野、信太、お力の三人

三人 ヤア、お節さま。

せつ 夫兵衛之輔どの、其方三人を別業に既まひ置くも、めい、深い草みのあるゆゑ。その草みに就いては武藝

が肝心。密り、夫兵衛之輔どの、別業の稽古場へお出でなされ、御指南なされますれども、心にたゆみあつてはと、この衆を頼み、理不盡の戯むれも、心掛けを探らう爲。みな大儀でござりました。

彌太 我れ、が無益も、手の内を見ようばかり  
多傳 お節さまのお指圖を、受けましての儀でござる。

勝右 最前よりのお働らき、  
七右 天晴れの手の内、

皆々 驚ろき入りましてござりまする。  
宮城 さては、さういふ事でござりましたか。

信夫 さうとも知らず、詞を荒く  
りき ぎこい、慮外の段

宮信 皆様、御料箇なされて  
三人 下さりませ。

せつ この上は、また折々、立合ひも頼まねばなりません。  
マア、門弟衆は奥へござつて、休息なされませ。

多傳 然らば左様、仕りませう。いづれも、これに。  
ト四人、奥へ入る。

せつ お力、今日は大事のお客様の御入り。それゆゑ三人とも呼び寄せたは、お茶の給仕を頼まう爲。ほんに大儀

でござるなり。

りき これはマア、御勿體ないお詞。何かから何まで御恩の冥加。夫佐五平は不所存ゆゑ、夫婦の縁を切つて、二人前の忠義を盡しませうと存じましても、高が女の事。兵部の輔さま御夫婦のお志し、必らずお忘れなされませぬ。

宮城 段々のお志し

宮信 エ、有り難う存じまする。

ト佐五平、向うより出て

佐五 御免下されませう。私しめは兵部への輔さまに、ちと

御意得まして。

ト宮城野、信夫を見て

ヤア、宮城野さま、信夫さま、あなた方のお行くへを。

トお力を見て

お力か。さてマア、栗島の兵屋を立退いた跡へ戻り、普傳さまに様子を聞けば、前藝七が跡を慕うて、上方へと聞くと其まゝ、追ひかけても逢はぬゆゑ、もしや京地へ入り込むも計られずと、直ぐに京地へ参り、方々と尋ねても皆くれ知れず。註方盡きて元の駿河へ立歸れば、思ひも依らぬ桶原普傳、七草の餘類とあつて、嚴しい御刑罰。

誰れに尋ねう人もなく、察すると、鎌倉へお越しな

されましたと、心付いたが神佛の引合はせ。途中にて様子を聞けば、宇治兵部之輔さまのお世話になつてござるとの事。それゆゑこれへ参りましてござりまする。ヤレヤレ、お二人とも御息災で、お力も無事で重疊々々。

ト云ふ。皆々、物云はぬゆゑ

なんの事だ。何を云うてもお二人とも、けんによもない體。こりやマア、お力、どういふ事だ。われが、よもや

知らぬといふ事はあるまい。

りき イヤ知らぬ。

佐五 ヤ。

りき こなさん、誰れぢや。

佐五 何吐かす。男を見忘れてべら坊め。

りき イ、ヤ、わしや男はないぞ。

佐五 なんと。

りき こなさんのやうな道知らず、人の皮膚た畜生に、近付きは持たぬわいの。

佐五 なんの事だ。一つも合點が参りませぬ。宮城野さま、

信夫さま、様子お聞かせなされて下さりませ。

宮城 申し臈様、先達て國を出ます時、佐五平と申します

る、丁度あのやうな家來が付いて参りましたが、その家來が、ほんにあらう事があるまい事か、宅を捕へて……きつい不所存者でござりますゆゑ、主従の縁を切る心で、斷當を減して置きましたゆゑ、御へ、今後佐五平が参りましては、御に爰しとせぬ。ナワお力。

りき ハイ、左様でござります。わたしは爲には現在の夫なれども、不所存者に滞りて居りましたは、不忠者になりますゆゑ、夫婦の縁は切りました。いま爰へ、佐五平は見たましても、ほんにモウ、顔を見れば見る程、腹が立ちます。

せつ ホウ、そんなら先達で、申しやつた佐五平……ハテ、御に似合はぬ不所存者ぢやなう。

佐五 ニ、成る程、先達で幾時をお立退きたまはるゝ時、お供に後れましたゆゑ、それゆゑ左様御しやるが、それは只今申す通り、普傳が詞にたぶらかされて、上方へ参りましたゆゑ。

せつ ア、コレ、そなお人、爰に居る者共は、皆こなたの召仕ひ。近付きでもない人に、長々と聞くに及ばぬ。早う歸らしやれいなう。

佐五 イヤサ、様子を聞かねば、いつかなこの場は立ちま

せぬ。

せつ ハテサテ、其方には、何も聞く筋はない。コレ、二人とも、奥へおぢや。

三人 畏まつてござりまする。

佐五 イヤ申し、あなたには。

ト宮城野、行かうとするを留める。佐五平をお力、引き退け

りき サア、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、昔々奥へ入る。佐五平残り

佐五 なんの事だ。みな寄つて、不所存者だ／＼と、この

佐五平、不所存の覺えはないぞ。いつそ奥へ踏み込んで

ト行かうとする。ドロ／＼になり、此うち兵部之輔、

處無情の影にて、よろしき所より上り上げて出て、

印を結び

兵部 不所存者、待て。

佐五 ナニ、不所存者とは。

兵部 佐五平、久しいなア。

トこの時、兵部之輔を見て

佐五 ヤア、兵部之輔さま、私しめを不所存者とはな。

兵部 先達で奥州を出立の砌り、宮城野が供を許し遣はし



たが、途中より宮城野に後れ、なぜ今まで遅参いたしました。

佐五 イヤ、その儀は、敵臺七が詮議に隙取り

兵部 こな偽はり者め。

佐五 ナニ、偽はり者とは。

兵部 おのれ事は、好色酒亂ゆる宮城野が供は叶はぬと、母商崎が詞をなだめ、某が心を以て敵討ちの供を許しくれたぞよ。それに、主に向つて不義放埒。

佐五 エ、。

兵部 知るまいと思ふか。うぬ、今日これへ参つたは、戀の叶はぬを意趣に思ひ、宮城野を討つ所存であらうがな。

佐五 これは又お情ない。あなたまでが下郎めを不所存者とは、下郎め、不義いたした覚えは毛頭ござりませぬ。

兵部 覚えなるとは證據があるか。

佐五 イヤサ、證據も糸瓜も、佐五平が身に取りました。

兵部 覚えなるとは云はさぬ。宮城野に不義仕掛け、現在の女房にまで、見限られたが慥かな證據。

佐五 ぢやと申しまして。

兵部 證據があるか。

佐五 證據というては

兵部 不義者か。

佐五 サア。

兵部 云ひ譯あるか。

佐五 サア。

兩人 サア〜。

兵部 こな不忠不義の人非人めが。

トきつと云ふ。佐五平、返す〜思ひ入れあつて

佐五 エ、見す〜知れた無實の難。こりや又あんまり

胸慾でござりますすわいなう。

ト口惜しいこなし。兵部、佐五平が首筋取つて、切り

戸の外へ突き出し

兵部 不義の云ひ譯立たぬうち、辱敷に叶はぬ。

佐五 すりや、云ひ譯立たねば……チエ、……ホイ。

トどつかりと坐る。兵部之輪、手水鉢の水を杓にて汲

み取つて、佐五平が方へ差出し

兵部 佐五平、水は方圓の器に隨ひ、人間また水の如く、清濁は心に依る。不義放埒の汚名を雪ぐ一心は、清き水の源。

ト杓の水を明ける。

佐五 これは。

兵部 太公望が水の譬へ。

佐五 すりや、云いひ譯わけ立たねば

兵部 元もとへ返かへらぬ水の譬たとへ。

佐五 清きよく雪ゆきくか

兵部 重おもく濁にごるか

佐五 この身の災難さいなん。

兵部 洗あらひ清きよめて

佐五 迫おそつつけ云いひ譯わけ。

兵部 先まづづそれまでは

佐五 兵部へいぶ之の輔すけさま

兵部 佐五さご平へい、とくと思案しあんの致いたせ。

ト唄うたになり、兵部へいぶ之の輔すけ、奥おくへ入いる。佐五さご平へい、後あとに残のこり、

思おもひ入いれあり

佐五 兵部へいぶ之の輔すけさまの今いまのお詞ことばといひ、この謎なぞ。宮城野みやぎのさ

ま、女房にようぼうといひ、ハテ、合點がてんの行いかぬ。

ト向むかうより

呼よび お客きやくの御入ごいり。

佐五 なんにもせよ、今いま一應いちおう。さうぢや。

ト橋はしが、リへ隠かくれる。と正木典膳ただき典膳。衣裳いしやう。鶉羽うすの黒くろ右衛門みぎゑもん

門かど、長なが社ぢや行いにて出でる。典膳典膳、惣髮そうさつの侍さむらいひにて、家來けらい大

勢せい、陣じん出でて來きる。奥おくよりお節せつ、後あとより七右衛門しちゑもん勝かつ右

衛門ゑもん多た傳でん彌や太た七しち、出で迎むかふ。黒右衛門くろゑもん、典膳典膳、二重舞臺にじゆうぶたいへ座まる。家來けらい皆みな々々橋はしが、リへ入いる。お節せつ、門弟かどぢ皆みな々々、平舞臺ひらぶたいへ座まる。

せつ 鶉羽うすの黒くろ右衛門みぎゑもんさま、只今ただいま御下城ごげ

皆みな々々遊あそばされましたか。

黒右くろゑ 如何いかにも、只今ただいま下城げ仕つかうり、直たださまこれへ參まゐつたは、

ちと兵部へいぶ之の輔すけどのに談だんずる仔細さいしあつて、典膳典膳どのを同道どうだう

仕つかうつた。

せつ これは、よろこそお立寄たちより下くだされました。今日けふ

は御下城ごげの節せつ、お入り下くだされます管はにて、御馳走ごちそう申まをせよ

と兵部へいぶ之の輔すけ、申まをしつけ置おきましてござりまする。典膳典膳さ

まも、よろこそお出いで下くだされました。御苦勞ごくろうに存ぞんじます

る。

典膳典膳 これは、御挨拶ごあいさつ。さて、兵部へいぶ之の輔すけどのには、これ

なる鶉羽うすの黒くろ右衛門みぎゑもんどのを、管は領職りやうしやくの御師範ごしはんに吹撃ふえき召まをさ

れ、甚まだ御機嫌ごきげん。今日こんにちも黒右衛門くろゑもんどのをお相手あつてに御酒宴ごしゆゑん

遊あそばされ、お杯さかづきの上うへにて軍學ぐんがくのお話はなしじ。黒右衛門くろゑもんどのに

は劍術けんじゆつ禮儀れいぎ、何暗なにぐらからぬ物語ものがたりり。管は領職りやうしやくにも日頃ひびお

好このみの兵衛へいゑ、御酒宴ごしゆゑんの餘あまり、明日あす御前ごぜんに於おつて、兵部へいぶ之の輔すけ

どのと黒右衛門くろゑもんどの、眞劍まけんの立會たちあひ、達たつて御所望ごしょぼうに依よつ

て、黒右衛門どには、速やかにお請け申され、即ち拙者、この趣きを承はり、兵部之輔どのに申し渡さん爲、参つてござるさ。

せつ ムウ。そんなら明日、黒右衛門さまと兵部之輔どの御前に於て眞劍の立合ひ、致せよとの御上意とな。

典膳 如何にも。

せつ ハテナア。

トこなし。

勝右 眞劍の立合ひは、互ひに命づく。

彌太 殊に御前といひ、いづれが勝つとも負くるとも

多傳 御入魂の御兩所。

七右 それに、兵部之輔さまに、お尋ね合ひもなく

多傳 黒右衛門どにはお請けあつて

四人 御下城なされたとな。

黒右 成る程、この良某、この鎌倉へ立越え、兵部之輔

どの、お世話になり、凡そ三十日ばかりも、この家に滞

留、それより吹擧を以て管領職へお目見得相叶ひ、サ

アこれからが拙者が利だか、何か管領職の腰を打ち抜

き、僅かの間に御師範仰せつけられ、今では田もやろ畦

もやろうと、管領職を立てると倒さうと某次第。尤も

初め吹擧いたしたは、兵部之輔なれども、その恩返しは致して置いた。オ、某が身にも命にも替へぬ恩返しなりや、世話になつた義理は立つ。劍術の立合とは又格別の儀だ。それゆゑ、違背なくお請け申した。早く兵部之輔どのに御意得たい。どれに居召さるな。

せつ イヤ、兵部之輔儀は、只今衣服を改め居ります。マア、御馳走に九獻の用意。ソレ、腰ども、早う〜。

宮信 ハア、。

ト合ひ方になり、宮城野、白木の三方に杯載せ、持ち出る。信夫、長柄の鍔子持ち出る。

宮城 お客人様。

信夫 一獻お召上がり

宮城 遊ばされませい。

ト黒右衛門が前へ三方を置く。宮城野、西の方、信夫、東の方、兩方に座る。黒右衛門、宮城野を見て

黒右 ヤア、わりや宮城野。

宮城 鶴羽黒右衛門といふは、

信夫 敵、志賀臺七。

黒右 フウ。うぬは仙臺詛りの妹信夫。

信夫 岡崎で、よう逃げやつたなア。

黒右 フウ。うぬが仙臺詛りも直つて、兄弟ともに、これに居るか。

せつ わたしが召使ひに痴へましてござりまする。

黒右 イヤ、その儀も様より承はつた。兩人ともに別業へ取込み、劍術を致へさつしやる事も、詛りの詞付きを直すも、御内室お節どの、こなたのお世話といふ事、よく存じて罷りあるぞや。

せつ ホ、ホ、黒右衛門さまの御意とも覺えませぬ。夫兵部之輔は、鎌倉中のお大名方へ立入りまするゆゑ、毎日々々御大家よりのお使者。それゆゑ召仕ひまする者どもへも、心がけの爲、少しばかりは劍術も稽古をさせ、また遠國の詞付きでは、何やら賤しいやうにも聞えますゆゑ、上方詞に直さしましたは、お歴々の御酒のお相手お茶の給仕に出しませうと、存じましての事でござりまする。

黒右 聞えました。如何にも拙者が酒の相手に致さう。

ト黒右取、  
サア女郎、イヤサ、腰元の信夫、一つ注げ。

せつ コレ、お客人様が、ソレ注げと仰しやる。ちやつとお注ぎ申しやいなう。

信夫 アイ、畏まりました。

ト信夫、長柄を持ち、こなしあつて酒を注ぐ。黒右衛門、杯持ちながら宮城野が顔を見て、

黒右 ハテ、美しいものだなア。宮城野、イヤサ、腰元の宮城野、お客人がこの杯、われにくれるぞよ。

ト宮城野が手を取り、引寄せる。このはずみに、持ちたる杯の酒こぼれる。宮城野、黒右衛門が手を振り放す。首筋取つてグツと引きつけ

此奴、不行儀千萬な女郎めが。うぬ、貴人の待遇も知らいで、のう／＼とこの場へ出さる野太い奴。なぜ、酒をぶちこぼした。うぬも又、身が杯を獻さうといふに、なぜ一言の返答なく、無禮の振舞ひ。こりや、この御羽黒右衛門、管領職の御節籠、身が杯を獻さうと云へば、鎌倉中の大小名、有り難いと三拜して、涙をこぼし喜ぶぞよ。それにうぬ、一言の返答せぬ割中りめ。うぬがやうな奴等は、重ねての見せしめに、カウ／＼と。

トさん／＼に打擲して  
斯うしてくれるわい。

ト二重舞臺より躍降す。この時、後より佐五平、お力ツカ／＼と出て



佐五 志賀臺七、うぬを。

ト兩方よりかゝる。立廻りにて黒右衛門、兩人を二重舞臺より蹴落し

黒右 佐五平、お力、さま／＼の奴が出あがつたな。

佐五 臺七、うぬに逢ひたかつたわやい。

りき 鑓羽黒右衛門と名を替へ、鑓倉に隠れ忍ぶと聞いて、お二人を伴ひ鑓倉へ立越え、其方の行くへを尋ねたわいなう。

宮城

サア、鑓羽黒右衛門

信夫 本名は志賀臺七

りき 名を變へし卑怯者。

佐五 最早遁がれぬ。尋常に

四人 勝負々々。

黒右 イ、ヤ、變名したは卑怯でない。こりや、コレ兵部之輔が指圖。鑓羽黒右衛門と改名して、管領職へ吹擧したも、みな兵部之輔が計らひサ。

りき ハテ心得ぬ。お二人を別業に匿まひ下さるは、敵を討たすお志しと思ひの外、臺七が立身出世の御吹擧なされる、兵部之輔さまのお心では。

宮信 どういふ事やら、申し奥様

三人 お開かせなされて下さりませ。

せつ さればいなう。様子は知らねど、これなる臺七どのと、夫兵部之輔どのとは無二の因縁。それゆる管領職へ師範の取次ぎ。

黒右 その又兵部之輔どのが、この者どもを引合さるゝは、

せつ 杉本甚内どのへ、夫が寸志。

皆々 ヤ、なんと。

せつ 先達て、兵部之輔どの、手に入つた、杉本の印可、

菊水の印可の巻を以て、鑓倉中の諸歴々を門弟と致しませるは、正しく権流の印可の徳。その杉本が身寄りの者、匿まひまするは、即ち甚内どのへ夫が返禮。

黒右 イカサマ、こりや尤も。

佐五 イ、ヤ、その返禮受けたくない。敵臺七を討つてこ

そ、お旦那の修羅の妄執も晴れう。御姉妹を世話して、敵討ちをさせまいとは、後暗い兵部之輔どの。もう世話は頼まぬ。この佐五平が後橋となつて、おのれ臺七、只一討ち

ト反り打つて黒右衛門へ行かうとする。この時、奥より兵部之輔、衣裳、杜杯にて、ツカ／＼と出で、佐五平を二重舞臺より突き退け、キツとなつて

兵部 イ、ヤ、不義者の其方に、宮城野姉妹は滅されぬ。

佐五 なんと。

兵部 最前かけたる水の計、覆水盆に返らぬ思案が出来たか。

佐五 イヤサ、その儀は。

兵部 云ひ譯立たねば、不義は免かれぬ。

佐五 エ、現在敵を目の前に置きながら、御兩所の後備

となつて、討つ事もならぬといふは、よつく天道に見放

されたか。エ、口惜しいなア。

りき 不義者の佐五平は頼まぬ。御兩所様の後備は、この

お力。サア、お二人とも。

宮信 そんならお力。

りき サア、踏ん込んで、勝負々々。

ト三人、勢ひ込んで立ち上がる。

兵部 イ、ヤ、志賀臺七と敵と云うて、討たす事、罷りな

らぬ。

三人 そりや又、なせな。

兵部 この其、管領職には、臺七の武藝を甚だ御望あ

つて、御師範を罷りたる。殊さら明日は御前にて、某と

眞意の立言ひ。これとても、臺七に勝を譲る我が所存。

せつ エ、そんなら、あなたが臺七どのに。

兵部 オ、サ、いま管領職の御意に入つた志賀臺七、敵

など、指でもさば、立ち所にわれ達は逆稜刑。杉本の

家は一生埋れ木となるぞよ。

宮城 そんなら、先達て後備となつて

信夫 敵討たさうと仰しやつたお詞は

りき 兵部之輔さま、僞はりで

三人 ござりましたか。

兵部 イ、ヤ、兵部之輔、虚言は構へねど、いま四海一統

に、管領の下知に従ふこの時節。兵部之輔一人、違背が

ならうか。

三人 そんなら。

ト三人顔見合せ

エ、口惜しいなア。

ト三人泣き落す。黒右衛門、ニタ／＼と笑うて

黒右 ハレ、よい態。イヤ、兵部之輔どの、有やうは貴殿

の所存、疑ひました。杉本の身寄りを取込み、世話ごつ

しやるは、大方この臺七を討たす所存であらうと存じた

が、今の詞を聞いて安堵いたしました。イカサマ、管領職

の御威勢はさびしいものだ。御師範たる拙者に、何奴で

もどなたでも、コレ、これ程でも指をさへると、直ぐに逆瀧刑だ。まだその上に、兵部之輔どの、こなたには、この臺七が、身にも命にも替へぬ大切なる一品を渡し置いたは、兄弟同様の因縁を結ばう爲ばかり。よもや違變はござるまいなア。

兵部 なんの違變ござらう。大切の一品を申し請けた兵部之輔。我が一命の續くだけは、こなたと合體。氣遣ひせずと、ゆる／＼御休息なされいサ。

黒右 千萬忝なう存ずる。コリヤ、ヤイ、女郎ども、それから粕野郎め。うぬら、如何やうに跪いても、身共に刃向ふ事はならぬ。その仔細は、コリヤ、これだ。

ト懐中より墨付きを出し

この度、聖島甲斐之介部下藤原普傳といひしは、誤は七草が老叢森居意軒。最期の破り、彼の儀といふ邪法の鏡を奪ひ取つて立退く曲者。この鎌倉に身を忍ぶ出。立儀仕るに於ては、東八ヶ國の支配申しつけるものなり。

鶴羽黒右衛門へ、鎌倉の管領在判。なんと、かゝるお墨付きを頂戴したしたる某。びくとも指さへて見居らう。直ぐにうぬらは逆瀧刑だが、なんと手向ひせぬか。親の敵と切りかけぬか。女郎め、下郎め、主の敵と手向ひせ

ぬか。フ、ハ、ハ、ハ、ハ、なんとして／＼、よもや手向ひがなるまいがな。

宮城 エ、親の敵志貫臺七、

佐五 お主の仇を目の前に置きながら

信夫 討つ事ならぬと云ふは

りき お墨付きと云ひ

佐五 管領職の御師範。

宮城 こりや、マア、なんとせうぞ。

佐り 御兩所様。

四人 エ、口惜しいなア。

ト身を慄はし、泣く。

黒右 跪くワ／＼。なんと兵部之輔どの、あの姉妹の者ども身が間の御を致させたいが、苦しうござるまいかな。

兵部 何がさて、お心易い儀でござる。管領職の御師範たる貴殿。兵部之輔が召仕ひ、お日にとまつたは、彼れらが幸運。

せつ イヤ、申し、そりや又あんまり。

兵部 何があんまり。臺七どの、御意に入らねば、彼れらが身の破滅。コリヤ、ヤイ、兩人、命替りのお宮仕へ。

承知いたせ。

宮信 おやと申しまして

ア、コレ、いま兵部之輔どの、仰しやる通り、命に替へる書はない。お目にとまつたこそ幸ひ、兩人ともに、あなたのお側へ。ナ、心を静めて、お伽を申しや。

ト目配せする。

宮城 成る程、あなた方のお心遣ひ

信夫 よう得心して居ります。

黒右 得心の上は、早うお側へ

宮信 心得ました。

ト合ひ方になり、宮城野、信夫、こなしありて黒右衛門が側へ行く。佐五平、お力、口惜しきこなし。宮城野、信夫、黒右衛門が兩方に座る。

宮城 お客様、不束な私しども

信夫 あなたのお伽を

兩人 仕りませう。

黒右 オ、早速の承知、出かすく。コリヤ宮城野、われは本妻、信夫は妾、兩人ともに月と花。

ト宮城野を引寄せ

不便のかけてくれう。ナニ、兵部之輔どの、御免下されい。コリヤ信夫、身が腰を擦れ。

ト信夫の方へ片足投げ出す。

信夫 なんと。

ト信夫、氣色するを

兵部 コリヤ、兩人、お望み通り腰膝を、とくと撫で擦り、御機嫌を伺へサ。

宮信 畏まりました。

ト宮城野、黒右衛門にもたれかゝる。信夫、黒右衛門が足を擦る。佐五平、お力、この體を見て

佐五 エ、。

トお力、三方を採み砕く。佐五平、身を懷はし

佐五 もう料簡が。

黒右 何を蛆蟲めが。

ト佐五平が眉間を打つ。疵つく。お力、行かうとするを、長柄にてぶち据ゑ、

うぬ、手向ひひろくと、逆襟刑だぞ。

トきつと云ふ。佐五平、お力、澤見合せ

佐五 お主の敵を討たん爲、これまでの憂き艱難。

りき その敵が討たれぬといふは

佐五 お力、よつく武運に盡き果てたか、

りき 道理でござんす、佐五平どの。



佐五 覺おぼえのない不義ふぎの悪名あくめいといひ、敵かたきは討うたれず、なに  
長ながらへて詮せない命いのち。腹はらかツさばいて、冥土めいどにござる御主ごしゅ  
人に申まをし譯わけ。

りき 出でかさしやんした、佐五平さごへいどの、こなさんの不義放ふぎはな  
埒らちは酒さけの科しな。現在げんざいわたしが夫おとこぢやもの。なんの憎にくみ思おもひ  
ませう。こなさん一人ひとりは殺ころさぬ。わしも一いっ緒しょに冥土めいどの  
供とも。

佐五 オ、よく云いつてくれた。今いまこの場ばで夫婦ふうふ語ごとも  
りき 刺さし違ちがへて。

トお力りき、佐五平さごへい、一ひと腰こし拔はき、互たがひに鈴すず元もとしつかと取り、  
抜身ぬきみを兩方りやうほうよりさしつける。

宮信 ア、コ。

ト宮城野みやぎの、信夫のぶ、行いかうとするを、黒右衛門くろゑもん、兩人りやうにんが  
首筋くびすぢ取とつて引ひきつけ

黒右 動うごきあがるな。サア、兩人りやうにんともに、早はやくくたばれ。  
佐り オ、云いふにや及およぶ。

ト兩人りやうにん 互たがひに刺さし違ちがへ扶さる。宮城野みやぎの、信夫のぶあせる。  
黒右衛門くろゑもん 動うごかさぬ見み得え。

佐五 おのれ臺たい七しち、生なき代しろり、死しに替かり  
りき お主おぬしの敵かたき

佐五 恨まらみを晴はらさいで  
兩人 置おかうか。

ト兩人りやうにん いろ／＼あつて、バツタリと死しぬる。宮城野みやぎの、  
信夫のぶ、ハアと泣なき落おす。

兵部 いづれも見み苦くるしい。その死し骸がい、片かた付け召めされい。  
多彌 畏おそまつてござりまする。

ト彌太七やまたしち多彌たみ、勝右衛門かつゑもん七右衛門しちゑもん、兩人りやうにんが死し骸がいを抱だき、  
橋はしが、りへ入いる。

黒右 この上うへは、宮城野みやぎの信夫のぶ、うぬら兩人りやうにんも冥土めいどの供とも。

ト兩人りやうにんを突つき放はなし、刀かたなに手てをかける。お節おせう、宮城野みやぎの信  
夫のぶを後あとに圍かこひ、黒右衛門くろゑもんを止とめて

せつ イヤ、この者ものどもは、私わたくしが召め仕つかひ。滅多めつたに殺ころさす  
事ことはなりませぬ。

黒右 でも、身みが心に従したがはぬ女め郎らうども。

せつ イヤ、お取とり持もち致いたしませう。

黒右 なんと。

せつ 夫兵部おとぶへ之の輔すけが、大おほ切きに致いたされますあなた様さま、私わたくし  
が、とつくりと得心とくしんさせまして、二人ふたりとも寢所しんじょのお伽が。  
手活てかたけの花はなと眺ながめさせませう。

兵部 出で出したお節おせう、奥おくへ連つれ行いき、とくと申まをし含めめ。

せつ 長まりました。

兵部 イザ、典膳どのにも、暫時奥にて

典膳 如何にも、休息仕らう。

せつ サア、二人とも、マア奥へ。

宮信 ぢやと申して。

ト兩人、おこつくを、お節さろしく止めて

せつ ハテマア、おぢやいなう。

ト唄になり、黒右衛門、ウ、ンと宮城野信方へ反り

打つを、お節、よろしく兩人を階ひ、典膳に目撃する。

典膳、先に立ち、お節、宮城野、信方を連れ、奥へ入

る。あと合ひ方になり、兵部之輔、黒右衛門こなしあ

つて

黒右 兵部之輔どの、すりや、いよ／＼只今の詞に相違な

く、明日、眞劍の立合ひ、某へ勝を譲る所存よな。

兵部 何がさて、一旦約したる兵部之輔が、詞は金鐵サ。

黒右 先づは祝言に存ずる。

ト儀が、リ、カタ／＼にて、黒右衛門が家來二人、金

江半兵衛が前後を圍ひ、ツカ／＼と出て

侍ひ 命江半兵衛、臆せ。

ト兩方より十手にて打ちかゝる。半兵衛、立廻りにて、

チツと留める。

黒右 ヤア、うぬは弟谷五郎、者ども、打ち拵ゑて纏ふて。

侍ひ ハツ。捕つた。

ト又かゝるを、半兵衛、兩人を投げつけて

半兵 磯崎どのを返り討にしたる人非人。最期の場所へ纏

けつけ、敵臺七が在所、鎌倉と聞きたるゆゑ、入込んだ

は其方に逢はうばかり。サア、覺悟せい。

黒右 さう吐かしや、いつそ。

ト黒右衛門半兵衛へ切つてかゝる。半兵衛、抜き合せ、

黒右衛門と立廻り。この中へ侍ひ二人、半兵衛へかゝ

るを、半兵衛、抜討ちに侍ひ一人を切る。黒右衛門、

切つて行くはずみ、半兵衛、身を交すと黒右衛門誤ま

つて家來をボンと切る。半兵衛、黒右衛門へ切つてか

かる。黒右衛門。受けとめる。

兵部 兩人ともに、同志討ち致すか。先づ待ちやれ。

ト聲かるる。兩人、切り結びながら

兩人 なんと。

トとまる。

兵部 兵部之輔が本心、語つて聞けん。双方ともに先づ、

引きやれ。

兩人 ウン。

トこなしあつて、兩人、左存へ別れ、刀を納め

半兵 兵部之輔どの、こなたの本心

黒右 語つて聞かさんとは。

兩人 如何でござん。

ト兵部之輔、眞中に押直り

兵部 もと某は、南朝第一の忠臣、楠正行が後胤。祖父

正成討死の嗣り、家來笹目の憲法といふもの、水子の我

れを抱きかへ、亂軍の中を切り抜け、宇治の里にて人

となり、猶も下處に染屋の作。成長の後、我れを招き、

まツかうくと憲法が物語り。さてはと知つたる父の家

名、それより兆す我が大宅。宇治兵部之輔正之と名を改

め、思ひ立つたる武者修業。さる春、奥州にありし折か

ら、一年あまり一國の人氣を窺ひ、それよりこの鎌倉に

立ち越え、表は武道の師と準らへ、天の時と地の利を考へ、

足利どのを攻め亡ぼし、再び南朝の御代となさん我が存

念。片腕ともなるべき金江半兵衛、一心を定め、某が味

方に附きやれ。

黒右 兼ねて、兵部之輔に合體のこの臺七、サア、弟、返答に依つて、その場は立たせぬ。味方に附くか、但し刀

向ふか。返答ふて。ド、どうぢや。

半兵 如何にも味方いたさう。

兩人 なんと。

半兵 一心の器量を以て、大義を思ひ立つは、男子たる身

の望むところ。高館に仕へし志貫谷五郎の名は消えて、

今は主なき金江半兵衛。まつた杉本甚内どの、元は楠

家の一族、某が馬には師匠なり、勇なり、南朝の旗上げ

とあるならば、未來にござる甚内どの、さぞ木暮。今

日只今、足利家に弓引くといふ我が所存。二心なき武士

の金打。

ト刀を抜かうとする。

兵部 イ、ヤ、金打には及ばぬ。一心だに極まらば、ソ

レ。

ト口明きの巻絹を出し、半兵衛方へ抛る。半兵衛、取

つて披き見て、

半兵 天上天下唯我獨尊。ムウン。

ト讀み、ちよつと思案して、刀にて指をつん裂き、絹

に注ぎ

軍神に誓つて逆變なき心底、斯くの通り。

ト兵部之輔に渡す。

兵部 血判、儘かに落手いたした。

黒右 弟、谷五郎、すりや、いよ／＼、某に刃向ふ所存はないぢやまで。

半兵 瓦礫を捨て、名玉を取り得る當然の理。辨まへなき身共ではござらぬ。

黒右 時れ、流石の弟、出かす／＼。ナニ、兵部之輔どの、室町へ切り入る手筈はな。

兵部 この頃、天文を測り見るに、當月下旬こそ、事を計るべき時節到来。御邊を京都の大將と定め、鎌倉表は金

江半兵衛、某かねて蓄ひ得たる南無流秘法の毒薬、由井が預達の川上より流しかけ、鎌倉武士を塵殺し。先づ第一の軍應となるは邪法の毒薬より臺七が手より、某が

申し請けたり。

黒右 そりや、身共が凱身を離さず所持いたした。

ト懐中より御判を出し  
谷五郎は、これを以て鎌倉城の上、直ぐに奥州へ切り入り、彼の地の手管を首尾よく致せ。

ト半兵衛へ渡す。  
半兵 頼守守の門、儘かに預かつてござる。  
黒右 この七は、一味の者へ觸れ流し、萬事の手番ひ。

兵部 イヤ、儘かに蟻の一穴より、大山も穿る、習ひ。期に至るまでは、矢張り隠密。

半兵 東國の味方を招くは、この一品。拙者は一刻も早く。

兵部 萬事油断なきやう。  
半兵 正之どの、兄者人。

兵部 早く／＼。  
半兵 ハツ。

ト半兵衛、印を持ち、向うへ走り入る。夜半の鐘鳴る。と奥より幽霊出る。

典膳 最早九ツ時。用意よくば同道いたさう。  
兵部 龍羽氏の圖ひに依つて、眞の立合ひは明日寅の一天。

門弟中、警固の用意。  
家來 ハア、

ト皆々、武器を持ち、よろしく並ぶ。  
黒右 兵部之輔どの、こりや、どうでござるな。

兵部 大切なる管領職の御簡籠。萬一、途中にて銀齧の儀もあらんかと、拙者が計らひ。

黒右 ハテ、そこ／＼へお氣を付けられ、忝ない。  
典膳 然らば、此ま、管領の儀へ。



兵部 拙者は後より。

黒右 兵部之輔どの、お先へ参る。

兵部 明朝、御前にて

兩人 御意得ませう。

ト唄になり、七右衛門、勝右衛門、彌太七多傳、鐵砲を持ち、黒右衛門が前後に引き添ひ、典膳、後より、皆、静々と向うへ入る。兵部之輔、こなしあつて

兵部 兩人の者、用意よくば、これへ参れ。

宮信 ハア、。

ト宮城野、信夫、白無垢、紅絹の鉢巻、襷、一腰差し、奥より出て

宮城 兵部之輔さまのお情にて

信夫 親の敵

兩人 志賀泰七を。

ト向うをキツと見る。

兵部 敵討ちの場所は、由井が濱邊に矢來をしつらひ、用意一々調ひし上、管領職より敵討ち御免の御書到來も追ツつけ、併し、相手は手利き。其方達兩人では心元ない。好い、助太刀を遣はさう。ヤア、兩人の助太刀、早く参れ。

佐り ハア、。

ト佐五平、お力、白無垢に鉢巻、襷、一腰差し、橋がかりよりツカ〜と出る。

宮城 ヤア、其方はお力、佐五平。

信夫 先刻に、二人ながら刺し違へて

兩人 死にやつたぢやないかいなう。

佐五 如何にも、拙者が相果てしと見せたも

りき 兵部之輔さまの

兩人 御計畧、

宮信 エ、。

ト兵部之輔、懐中より邪法の鏡を出し

兵部 コレ、この邪法の鏡を以て、お力、佐五平が相果て

し體に見せしも、某が計らひ。なんと宮城野、其方へ不

義仕掛けた佐五平は、この鏡を以て唐意軒がなす業。今

また某が、この鏡を以て、お力、佐五平、相果てし體

に見せしは、佐五平が不義の汚名を雪がん爲。

宮城 そんなら、みな唐意軒が所爲であつたか。

信夫 今こそ不義の疑ひ晴れた。

兩人 元の主従ぢやぞよ。

佐五 ヘエ、有り難い。これと申すも、兵部之輔さまの

お申。

りき 佐五平どの

佐五 お力

兩人 エ、八、蒸ならうござりまする。

トばた／＼にて、橋が、りより、奴綱平、早打ちの形にて走り出て

綱平 いづれも、これにござるか。栗島高館兩家の縁談、

鎮守府の印、手に入るまでは、暫らく延引とござるゆゑ、この儀、兵部さまへ通達申し、實の詮議を相頼めよと、御家老、藏人さまより早打ちのお使ひ。

ト敷より、半兵衛、白無垢、鉢巻、袴にて、印を持ち出で

半兵 兵部、頼どの、計らひにて、わざと叛逆の體に見せ、臺七を藏かり、取返したる鎮守府の御判。

ト兵部を輔へ兼す。

兵部 この鎮守府の印を以て、高館の家を相頼。まつたこ

の作法、御は、申妻の介どの、手より、禁庭へ差上げ、栗島の家、下控にさせん。

ト綱平に渡す。

綱平 エ、有り難い。

兵部 志賀臺七、某へ、この鏡を渡し置きたるは、まさか

の時、この兵部の輔を、七草が餘類にせんと、彼奴が企

みの裏をかき、二種ともに手に入れしは、兩家の縁組み、

首尾よく納まる。

半兵 この上は、敵討ち御免の御書を待つばかり。

ト向うよりバタ／＼にて、與茂吉、御免の御書を竹に挟み、走り出て

與茂 コレ／＼、敵討御免の御書、申し請けて立歸りました。

宮信 オ、出來た／＼。

半兵 與茂吉、すりや、其方が詞も。

與茂 兵部さまのお世話で、わしが人間詞も、満足に直つ

たゆゑ、この大事のお使ひを、首尾よう、仕負ふせて戻りました。

宮城 この功に依つて、信夫と其方、夫婦に致しくれるぞ

よ。

與信 エ、忝ない。

兵部 お節、申しつけた品、用意よくば、これへ。

せつ ハア、。

トお節、三方に三組み拵を載せ、長柄の鎌子を持ち

いで

首尾しゅびより敵かたきを討うち負おふせ、宮城野みやぎのどのと谷五郎やごらうさま、信しの夫とどのと與茂吉よもきちどの、佐五平さごへい、お力りきも改あらためて、夫婦ふうふの杯さかづき仲人なこうどはこのお節せつ。サア、早はやう、祝言いわげの杯さかづきを。

ト三方さんぱうを真中まんなかへ直ただす。皆みな々々喜よろこび宮城みやぎ何なにから何なにまで御兩所ごりやうじよ様さまのお志こころざしし。

半兵はんぺい 辭退じたいいたさず

與信よりの 夫婦ふうふの杯さかづき。

佐五さご 下郎げらうめまでも

りき あやかりました。

せつ 三人さんにんともに祝言しうげんとは

兵部へいぶ これもめでたい三々九度さんざくくど。

綱平つなへい 祝いわうて一つ拙者せつしやがお酌しやく。

ト宮城野みやぎの、信夫しのぶ、お力の三人さんにん

三人さんにん そんなら一いっ緒しょに

ト宮城野みやぎの、信夫しのぶ、お力りき、林はやしをめぐり、持もち、綱平つなへい、注ついで廻まる。三人さんにん臥ふんで、半兵衛はんべゑ、與茂吉よもきち、佐五平さごへいへ献けんす。三人さんにん、杯さかづき持もつ。綱平つなへい、注ついで廻まる。と八やツの鐘かね鳴なる。

せつ ありや、もう八やツの鐘かね。

皆々みな 敵討かたきうちちの刻限ときげんは

兵部へいぶ 寅とらの一天いつてん。

皆々みな 最早ちよんちよん一時いちとき

兵部へいぶ 矢來やらいに參まつて、心静こゝろしずかに。

皆々みな ハツ。

兵部へいぶ 行きやれ。

ト皆々みな、勢いきほひ込んで向むかうへ走はり入いる。兵部へいぶ之の輔すけ、お節せつ、よろしくこなし。チョン／＼にて返かへし道具たぐひ。と七しちツの本釣ほんつりり鐘かね鳴なる。右みぎの見待みえにて、道具たぐひ正面しょうめんへ引ひく。

浪幕なみきり、一面いっめんに下くだりる。よき所に陣太鼓じんたいこを吊つり、松まつの木き出でる。方々まうまうにて篝かざりを焚たき立たて、提灯ちてい數多かずおほともし、舞臺まいたい、前後ぜんご、一面いっめんに矢來やらい出でる。始はじめ終しまひ、本釣ほんつりり鐘かねにて、向むかうより黒右衛門くろゑもん誓固けいこの人數にんず、鐵砲てつぱうにて前後ぜんごを圍かこひ出でる。典膳てんぜん、後あとより突つき出でる。皆々みな本舞臺ほんまいたいへ來きて、七右衛門しちゑもん勝右衛門かちゑもん、彌太七やたしち多傳たつたの四人よにん、黒右衛門くろゑもんどの、これが即すまはち、立合たちあひの場所ばしよでござります。

ト臺たい七しち、あたりを見みて、合點がてんのゆかぬこなしにて、黒右くろゑ いづれも、立合たちあひの場所ばしよは、管領くわんりやうの御前ごぜんとござる

に、見れば廣々たる演邊の體。こりや、どういふ儀でござるな。

多傳 されば、今朝、御前に於てとござれども、足場よき由井ヶ濱にて、諸人に見物を許し、貴殿の英名を輝やかさんが爲の、計らひでござる。

黒右 左やう承はれば、御尤もに存ずる。見ますれば、矢來をしつらひでござるが、これも管領のお指圖でござるかた。

彌太 諸人の群集、混雜もあらんかと、斯く矢來をしつらはせてござる。

勝右 これも、黒右衛門どのを、大切に思し召す

七右 管領よりの

四人 計らひでござる。

黒右 これも聞えました。

ト此うち、典膳、實は外科醫卜傳、社袴、衣裳を脱ぐ。

下は醫者の形になる。黒右衛門、典膳を見て

典膳どの、貴殿のその形は、

卜傳 イヤ、拙者、存やうは外科でござる。

黒右 ナニ、外科とは

卜傳 遣ッつは田敷が知れませう。細工は流々、仕上げを

見て居さつしやれ。

ト云ふ所へ、半兵衛、宮城野、與茂吉、信夫、佐五平、お力、綱平、後に附き、皆々、黒右衛門を取巻く。この時、林突きの奴、大勢出る。半兵衛、宮城野、與茂吉、信夫、佐五平、お力、綱平の七人

七人 志賀臺七。

ト詰め寄る。黒右衛門、皆々を見て惻り

黒右 ヤア、われ達がその形は。殊に最前、へたばつた佐

五平、お力。うぬら、存命で居るか。ヤア／＼ヤア、こ

りやどうぢや。

佐五 オ、兩人とも相果てしと見せしは、おのれが手よ

り、兵部之輔さまへ渡したる邪法の鏡を以て、うぬに手

盛りを喰はせたのぢやわやい。

黒右 ヤア。

ト驚ろく。

半兵 その上、最前、某、叛逆一味と名乗りしは、鐘守府

の印を手に入れん爲、兵部之輔どのと申し合せ、七草が

血筋を引いた其方、兄弟の縁を斷ち切り、師匠甚内どの

の修羅の妄執。

宮城 よう、母様まで、返り討にしやつたなう。



信夫 父上の敵

佐五 お主の仇

興り サア、尋常に

皆々 勝負々々

黒右 身共に刃向は、いづれも火蓋を。

ト多傳彌太七、勝右衛門七右衛門の四人

四人 臺七、動くな。

ト臺七方へ筒先を向ける。

黒右 ヤア〜〜、こりやどうぢや。

ト大きに驚ろく。と臆縮口より、兵部之輔出て

兵部 ヤア〜 臺七、其方、某を頼み入りと偽はり、邪法の

鏡を渡し、まよごかの時は、某を七草が殘黨と呼ばはり、

罪に取つて落さん汝が企み。さるに依つて管領職へ日

見得させ、この所に足を留め、首尾よく敵を討たさん爲

まつた某、勢道と云ひしは、汝が俗性を聞き出し、鎌守

府の印を無事に取返さん我が計略。邪法の餘類、逆縁刑

にも行ふべき奴。敵討ちの勝負はまだしも。サア、潔よ

く立合へ。

黒右 すりや、武者修業せしは、大義の望みでないか。

兵部 大義を起すは武士の本懐。併し、逆を以て順を討た

ざる我が本懐。七草が餘類、血判取るも穢らはしい。

ト天上天下の絹を出し、引裂く。

黒右 よいワ。斯うなつたら、是非に及ばぬ。敵討ちの勝

負致してくれう。

兵部 某は檢使の役日。双方ともに用意しやれ。

皆々 ハア、。

ト皆々、用意にかゝる。黒右衛門、上着を脱ぎ捨て、

白無垢になる。彌太七、三寶に土器、水桶を持ち出る。

皆々故實の水桶あり

彌太 互ひに尋常の勝負を遂げ、疲れもあらば、太鼓の合

圖を以て休息いたさせてよからう。

綱平 畏まつてござりまする。

ト塵 掃者は、手癖の看察、これに控へ居りまする。

トこの間に水杯をしまひ、双方、土器を破り、左右へ

分つて

半兵 去る春、本國白石に於て、討つて立退きし杉本甚内

が高弟、改名して金江半兵衛。

宮城 甚内が娘、宮城野。

信夫 同く妹信夫。

與茂 入間の與茂吉。

家來佐五平。

女房、力。

皆々 サア、尋常に、勝負々々。

黒右 うぬら、一々返り討だ。観念ひろげ。

皆々 サア。

黒右 サア。

皆々 サア。

トこれより、タテのめりやすくなる。タテよろしくあつて、宮城野、一柵切らる。綱平、合圖の太鼓を打つ。棒突き、左右へ引分ける。

黒右 こりや、何ひろぐのだ、

棒皆 太鼓ちや〜。

多儀 卜座老、早く〜。

棒突 醫者ちや〜。

ト庵 合點ちや〜。

ト宮城野が脈を伺ひ、氣付けを服ます事あつて、氣遣ひない、踏ん込んだ、と又、タテになり、信夫、一柵手を負ふ。綱平、太鼓を叩く。

棒突 太鼓ちや〜。

ト引分ける。

黒右 又かいやい。

棒突 醫者ちや〜。

彌太 卜座老、早く〜。

ト庵 心得ました。

ト右の脈を見て、氣付けを服ませ

氣遣ひござらぬ。勝負々々。

ト又タテになる。宮城野、信夫、危ふくなる。半兵衛、

お力、與茂吉、佐五平、入れ替つて立廻り、半兵衛、

黒右衛門を一柵切る。

黒右 待て〜。太鼓は破れた。

綱平 太鼓は破れた。

黒右 エ、忌々しい。醫者ちや〜。

ト庵 合點ちや〜。

ト脈を見て

黒右 よいか〜。

ト庵 脈は上がった〜。

黒右 エ、指きさせ。トト庵を踏み飛ばす。これより皆々、タテよろしくあ

つて、ト、黒右衛門を切り倒し

宮城 父上の敵

信夫 母さまの仇。

半與 舅の敵。

佐り お主の仇。

皆々 思ひ知つたか。

ト皆々、止めを刺す。

兵部 敵討ちは相済んだ。今こそ返す杉本の印可。

ト半兵衛へ渡す。

半兵衛 忝ないし。

兵部 寶も揃うた。めでたい。本國へ出立々々。

ト打出し。

幕

姉妹達大礎 (終り)

# 解 説

渥美清太郎

## 伊賀越乗掛合羽

伊賀の上野に於る、荒末又右衛門が助太刀した渡邊數馬の仇討は、その苦心、その規模が大なのを以て、曾我兄弟赤穂義士と共に、日本の三大仇討と稱へられ、「殺報轉輪記」「水月記」「武將感狀記」なぞの寶篋寫本から、やがて戯曲に傳はり、脚本となり、最後に講談と化して天下に傳へられてゐる。事實は、因州池田の家中渡邊親負が、同家中河合又五郎の爲、寛永九年正月に殺害され、その子數馬が、姉櫻荒末又右衛門の助力を得て、又五郎の後を尋ね廻り、寛永十一年十一月、伊賀の上野、又五郎を討つて、本望を達したので、助力者が天下の朝堂に殊に評判になつたのである。この事實は既に享保頃、江戸で芝居になつてゐて、わたしもその番附を見た事はあるが、年代記には載つてゐない。安永五年八月、江戸外記座の操り人形に演じられた「忠實の仇討」といふのが義太夫では最初のもので、これ

は萬蕉翁の事などを混じて、思ひ切つた愚作である。その翌年、安永六年正月に、大阪中の芝居で歌舞伎に脚色されたものが、即ちこの「伊賀越乗掛合羽」で、作者は奈河龜助である。百四十三年後に當る譯であるが、これが大當りを得た結果、伊賀越仇討の事件も一斑に流布された譯である。操りの堀江座では、この評判を見て近松東南が直に淨瑠璃に脚色し、同年二月から手摺にかけて、これも又大當りを占めた。近松半二はこれから暗示を後て「伊賀越道中双六」を書き卸し、これも義太夫としては非常な喝采を受け、歌舞伎の「伊賀越乗掛合羽」と並んで、明治まで共に盛んな上演を見たのであるが、現在では本家の「乗掛合羽」が忘れられて、分家の「道中双六」が榮へてゐる。

初演の役割は左の通り。

澤井城五郎、馬方大八、實、増木善右衛門（初世中村歌右衛門）渡邊靜馬（澤村宗十郎）上杉右内之助、池添孫八（嵐三十郎）渡邊親負、柘榴武助（嵐文五郎）左々木野右衛門、譽山大内記、松野金助、雲、荒尾主膳（中山來助）荒卷伴作、川角源内（桐山敏治）櫻田林左衛門。（中村治郎三）澤井又五郎、同母鳴海、俗醫者左内（淺尾爲十郎）唐木政右衛門（中山文七）政右衛門女房お種（花桐豊慈）云ひ懸けおその。傾城小紫（尾上条助）傾城大橋（嵐松次郎）娘お袖（中村樵五郎）石



森鷗庵（嵐七三郎）

敵討安榮録かたきうちあんえいろく

寛政八年九月二十七日初日、大坂角の芝居に上演された仇討もの、作者は辰岡萬作だが、近松徳叟も助筆してゐるらしい。如何なる仇討事件を脚色したのであるか不明だが、恐らく名題から判じて、安永度にあつた出来事であらう。構想が普通の仇討物とは、ちよつと趣きが變つてゐる。一箇の義臣が自分もその人を殺したと思ひ、殺された者の子も、その義臣を仇と信じて、互ひに覘ひ覘はれるその間に悲劇も喜劇もあつて、結局下手人は外の敵役と解り、めでたく仇討になるといふ筋が類型を離れて、面白い。それと、十兵衛の女房が幽霊になつて子を育て、十兵衛も幽霊と知つて頼んで置くといふ筋が頗る奇抜で皮肉である。この頃は餘り見かけないが、明治以前までは度々興行されたもので、京坂ではよく知られてゐる狂言であるが、東都では一度も上場されなかつた。

花園三十郎（嵐雛助）安達友九郎、七北田郷介（中山文五郎）三輪秀太郎、番頭嘉六（三折松五郎）我慢坊。下人八助。岩手伴藏（柴崎多人）三輪右京太夫。嘉右衛門女房おつね。齋藤傳五右衛門（三保木吉左衛門）傾

城園菊。織子おもん（山下陸次郎）傾城雛鶴（瀬川菊三郎）傾城梅の戸（神山雛松）淺野典勝。馬淵軍兵衛。青木久馬。酒屋嘉右衛門（嵐傳五郎）三輪要之助。下人琴助（坂東重太郎）奥方園生の前。十兵衛妹お貞（澤村富三郎）主水娘操（芳澤いろは）花園主水。磯瀧半左衛門（關二右衛門）安達友之進（山村儀右衛門）奥方象瀧。織屋おきぬ（山下金作）小栗栢十兵衛（中山文七）角力取り名取川龍介（藤川八藏）

姉妹達大礎あねいまたのおほもと

名高い宮城野信夫の仇討を脚色したものである。この仇討の實説は、伊達家の領分である奥州白石在足立村に四郎左衛門といふ百姓があつて、これが享保二年の或る時、片倉小十郎には劍道の師に當る、田邊志摩といふ侍ひの供先を切つたので手討ちにされてしまつた。四郎左衛門におすみ、おたかといふ二人の娘があつた。姉は十一、妹は八歳幼少であつたが、健氣にも仇討を思ひ立ち、仙臺まで行つて、劍道師範本傳八郎の家へ下女に住みこみ、懸命に劍術を習ひ、その一心通じて遂に享保八年四月、伊達家に願ひ出て、仙臺城下宮の町、白鳥明神の社頭で志摩を討つて、首尾よく父の仇を報じたのだと傳へられてゐる。これだけ

は材料に小さいので、慶安太平記の筋を加へて一部の戯曲にしたのが、安永九年の春、江戸の薩摩座に上演された「若  
太平記白石齋」といふ淨瑠璃で、作者は紀上太郎、容楊齋、  
鳥亭馬馬である。おすみおたかを、宮城野信夫と變へたの  
は役名で直に奥州を聯想させる爲である事は勿論である。

これが評判になつて、京坂へも傳はつたので、辰岡萬作  
と近松徳聖が想を構へ、純歌舞伎に脚色したのが「姉妹達  
大礎」で、寛政七年一月十一日初日、大阪角の芝居にかけ  
て大當りをつたのである。この時の事が西澤一風の「傳  
奇作書」に書いてある。

「當世書林」これも寫本にあり、白銀屋與左衛門に山  
村、燈籠竹源藏に新七、鶴木屋本の助に小六、亭切に  
機園に義を結ぶ形に合せ、この三人をセリ上げにした  
れど、翌日に當世きふくせんと云ひけるゆゑ、狂言取  
替へ「姉妹達大礎」を出しけり。近松徳聖辰岡萬作兩  
人の作にて、辰岡は金襴物を得意、徳聖はお家狂言を  
得意とすれば、序、馬場より甚内殺しの和らか味は徳  
聖、二つ目出立は辰岡、三つ目岡崎徳聖、四つ目普傳  
の場は萬作、五の返り討道行は徳聖、敵討は萬作なり。  
時代世話と氣の善り目、双方ともに筆力を振ひしゆゑ  
か、古今の當り狂言となりけり。

全く萬作徳聖の合作で、二人の持ち場のハッキリとわか

つてゐるのが珍らしい。この當つた原因は、姉妹の仇討を  
中心にしないで、天草一揆後の鍋島騒動といふ點に力點  
を置き、狂言を手廣く、派手に華やかに書いたところが、二  
の替狂言としてピッタリ適合したからであらう。随分歡迎  
されたので、大正の初年まで小生など舞臺で見た覚えがあ  
る。江戸での初演は天保五年十一月の森田座で、「花三津雪  
瑞白石」と云つたがその後も數度上演された。  
京阪での宮城野信夫といへば、これにきまつてゐたもの  
である。

松江藏人。奴佐五平。大福屋宗六（尾上新七）入間の  
興茂吉（嵐籬助）五四六の七郎兵衛。高館大學。船頭  
平戸の島藏 實ハ熊本勇八（嵐三八）雛形姫（花桐當愁）  
辨の兼成 實ハ奴綱平。安達丈助（中村歌右衛門）按摩  
三九 實ハ津輕官兵衛。奴頭陀八 實ハ山形宇右衛門（山  
村友右衛門）白拍子櫻木。妹信夫（藤川友吉）達六太  
郎（嵐籬照）志賀谷五郎 後ニ金江平兵衛（嵐吉三郎）  
佐五平女房お力。比丘尼名月（吾妻藤藏）甚内女房磯  
崎。兵部之輔女房お節（花桐豊松）甚内娘宮城野。宗  
六妻お倉（山下八百藏）志賀臺七 後ニ鶴羽黒右衛門（山  
村儀右衛門）杉本甚内。宇治兵部之輔正之。楠原普傳  
實ハ森居意軒（嵐小六）

○

本全集歌舞伎篇も、諸賢の御後援であと數冊までとなつた。相當の量はあるが、併し三百年間の華を咲かせた歌舞伎劇の重要な脚本は、まだこれだけではほんの九牛の一毛である。面白い狂言、大切な戯曲は山のやうに残つてゐる。愛讀者の方からは盛んに追加を出せとの御投書がある。材料は揃つてゐる。いよ／＼相談が纏まつて、今年から追加十八巻を出版する事になつた。これで歌舞伎篇が五十冊に達し、先づ／＼歌舞伎史上逸すべからざる脚本は、網羅する事が出来る事になつた。従來の御厚情に甘へ、續いての御後援を懇願申し上げる次第である。細目その他は追つて發表するが、内容は大體左の通りである。

「探偵狂言集」——小間物屋彦兵衛、黄屋喜八、大久保武藏、遠山政談、等。

「石川五右衛門狂言集」——山門五三桐、石田の局稚兒淵、女五右衛門、等。

「太閤記狂言集」——繪木太功記、三國無双奴請狀、馬盟の光秀、日吉丸雅櫻、等。

「俠客狂言集」——黒船忠右衛門、雁金文七、雷電源八、幡隨院長兵衛、等。

「情話狂言集」——三勝半七、お駒才三、お花半七、小いな半兵衛、等。

「續義太夫時代狂言集」——鬼一法眼三略卷、源平

布引浦、祇園祭禮信仰記、等。

「續々義太夫時代狂言集」——葎屋道滿大内鑑、ひらがな盛衰記、妹背山婦女庭訓、等。

「維新狂言集」——櫻田事件、坂下事件、桂小五郎、等。

「不破名古屋狂言集」——けいせい廓源氏、けいせい花繪合、東山殿劇場段幕、等。

「双蝶々狂言集」——無同存梅菊、色情曲輪蝶花形、御播會我閏正月、等。

「お家騒動狂言集」——小笠原騒動、柳澤騒動、鍋島騒動、等。

「武勇傳狂言集」——宮本武藏、吾見重太郎、荒木又右衛門、等。

「續赤穂義士劇集」——日本花赤穂鹽籠、松切り勘平松浦の太鼓、山名の切捨御免、等。

「續文化文政江戸狂言集」——上州の團七、江戸の朝顔日記、江戸のお千代半兵衛、榎重藤菊月、等。

「京坂世話話狂言集」——お八十藤兵衛、三人新兵衛、おつま八郎兵衛、曾根崎五人斬、等。

「京坂二の替狂言集」——けいせい露島家、桑名屋徳藏入船斬、けいせい素袍家、等。

「江戸顔見世二番目狂言集」——十數種。

「續舞踊劇集」——數十種。

責任校訂

渥美清太郎





日本戲曲全集。第八卷  
寬政期京坂仇討狂言。第廿五回配本

編纂者繪印



昭和六年二月一日印刷  
昭和六年二月五日發行  
(非賣品)

編纂者 渥美清太郎

發行者 和田利彦

印刷者 木呂子斗鬼次

製本者 高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地

發行所 春陽堂

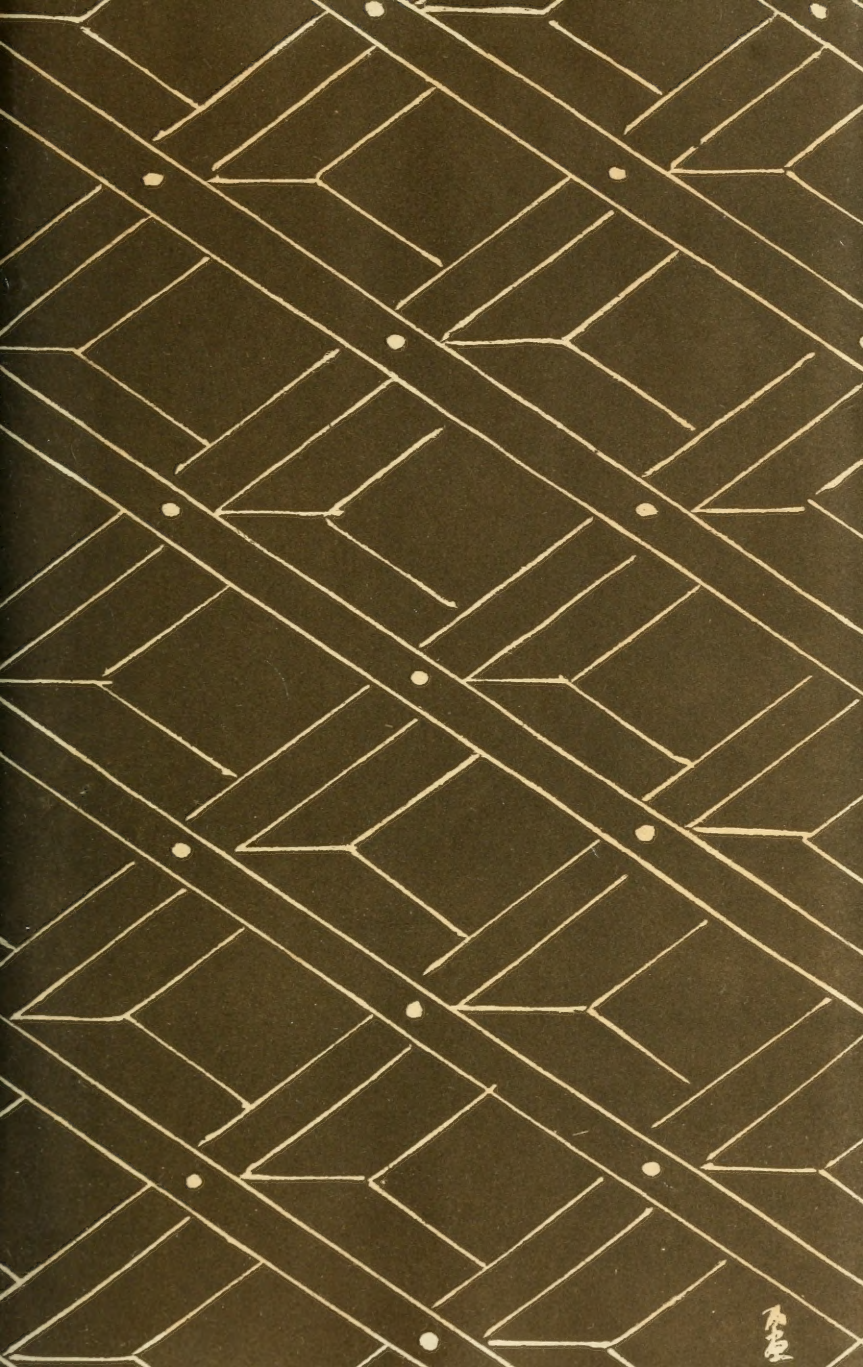
電話日本橋三一・六四一  
振替東京一六一七

整版所 新倉東文堂

(刷印・社會式株刷印治明) 地番七町下松區田神













EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02987 6000

